



鄧曉安  
卷六

BL                    Tripitaka. Japanese. 1929  
1411                 Showa shinshu kokuyaku  
T8J3                 Daizokyo  
1929  
v.33

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

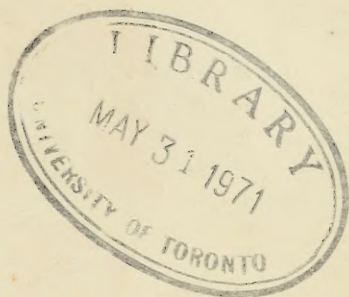






昭和  
新纂

國  
譯大藏經



BL  
1411  
T8J3  
1929  
v. 33



新昭和 纂 國譯大藏經 宗典部 第九卷

日本支那淨土門聖典 目次

淨	土	論	註	曇鸞和尙撰	一
安	樂	集	道綽禪師撰	七一	
觀	經	疏	善導大師撰	一四三	
觀	經	玄	義	分	一四三
觀	經	序	分	義	一六七
觀	經	正	宗	分	定
觀	經	正	宗	分	散
觀	經	正	宗	分	善
觀	經	正	宗	分	善
往	生	禮	讚	偈	善導大師撰
往	生	要	集	源信僧都撰	三五



日本支那淨土門聖典

第九卷	宗典部
-----	-----





【當書】二卷曇鸞の作、天親の淨土論を註解したる書。五言九十六句の偈を以て極樂淨土の二十九種の莊嚴を讚詠して往生を願ひ後に長行を以て其義意を論述し、五念門の因によりて五功德門の果を得るを明す。上卷の終に入番の問答をなし、下卷の終に自利利他の深義を釋し以て深く論の奥旨を顯せり。

【一】龍樹の論を引きて教相を明す

【阿毘跋致】不退轉と釋す。

【五濁】世に流るる五つのいまはしきこと。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁なり。

【五三】少少の意なり。

【外道】佛教以外の諸教學をいふ、六師、九十六種の外道等これなり。

【二】以下論の大

無量壽經優婆提舍願生偈婆敷槃頭

菩薩造并註 卷上

沙門曇鸞註解

【一】謹んで案ずるに龍樹菩薩の「十住毘婆沙」に云はく、菩薩阿毘跋致を求むるに二種の道有り。一には難行道、二には易行道なり。難行道とは謂く、五濁の世、無佛の時に於て阿毘跋致を求むるを難と爲す。此難に乃し多途有り。粗五三を言つて以て義意を示す。一には外道の相善は菩薩の法を亂す。二には聲聞の自利は大慈悲を障ふ。三には無願の惡人の勝徳を破す。四には顛倒の善果能く梵行を壞す。五には唯是れ自力にして他力の持無し。斯の如き等の事目に觸れて皆是なり。譬へば陸路の歩行は則ち苦しきが如し。易行道とは、謂く但信佛の因縁を以て淨土に生ぜんと願すれば、佛の願力に乗じて便ち彼清淨の土に往生するを得。佛力住持して即ち大乘正定の聚に入る。正定とは即ち是れ阿毘跋致なり。譬へば水路の乗船は則ち樂しきが如し。

【二】此無量壽經優婆提舍は、蓋し上衍の極致不退の風航なる者なり。無量壽は是れ安樂淨土の如來の別號なり。釋迦牟尼佛王舍城及び舍衛國に在して、大衆の中に於て無量壽

意を明す。  
【上卷の極致】大乗の教理は極佛内證の宗致なるをいふ。

【十二部經】佛、說法の體裁に十二様あるをいふ。長行、重頌、授記、孤起、無問自答、緣、譬喻、本事、本生、方廣、未曾有、論議說等これなり。

【三】以下正しく論文を釋す。

佛の莊嚴功德を説きたまふに、即ち佛の名號を以て經體と爲す。後に聖者婆藪鬚頭菩薩、如來大悲の教を服膺して經に傍へて願生の偈を作り、復長行を造りて重ねて釋せり。梵には優婆提舍と言ふ。此間には正名の相譯す無し。若し一隅を擧げば名けて論と爲すべし。正名の譯する無き所以は、此間には本佛無きを以ての故なり。此間の書の如きは、孔子に就ては經と稱し、餘人の製作をば皆名けて子と爲す。國史國紀の徒、各別の體例なり。然るに佛所説の十二部經の中に論議經有り。優婆提舍と名く。若し復佛の諸の弟子、佛の經教を解して、佛の義と相應する者をば佛亦許して優婆提舍と名けたまふ。佛の法相に入るを以ての故に。此間に論と云ふは直是れ論議のみ。豈正しく彼名を譯するを得んや。又女人の子に於ては母と稱し、兄に於ては妹と云ふが如し。是の如き等の事、皆義に隨ひて各別なり。若し但女の名を以て汎く母妹を談ぜば、乃ち女の大體を失せざれども、豈尊卑の義を含まんや。此に云ふ所の論も亦復是の如し。是を以て仍つて梵音を存して優婆提舍と曰ふ。

【三】此論の始終に凡そ二重有り。一には是れ總說分、二には是れ解義分なり。總說分とは前の五言の偈盡く是なり。解義分とは論に曰はく、已下の長行盡く是なり。二重と爲す所以は二義有り。偈は以て經を誦す。總攝の爲の故に。論は以て偈を釋す。解義の爲の故に。無量壽とは言、無量壽如來の壽命長遠にして思量すべからざるなり。經とは常なり。言は安樂國土の佛及び菩薩の清淨莊嚴の功德と、國土の清淨莊嚴の功德とは

能く衆生の與に大饒益を作して、常に世に行はる、故に名けて經と曰ふ。優婆提舍とは是れ佛の論議經の名なり。願とは是れ欲樂の義なり。生とは天親菩薩、彼安樂淨土の如來淨華の中に生ぜんと願じて生ず。故に願生と曰ふ。偈とは是れ句數の義なり。五言の句を以て略して佛經を誦す。故に名けて偈と爲す。婆藪を譯して天と云ひ、槃頭を譯して親と云ふ。此人を天親と字くる事は付法藏經に在り。菩薩とは若し具に梵音を存せば菩提薩埵と云ふべし。菩提とは是れ佛道の名なり。薩埵とは或は衆生と云ひ、或は勇健と云ふ。佛道を求むる衆生、勇猛の健志有るが故に菩提薩埵と名く。今但菩提と言ふは、譯者の略のみ。造も亦作なり。人に囚りて法を重んずるを庶ふが故に、某の造と云ふ。是故に無量壽經優婆提舍願生偈婆藪槃頭菩薩造と言ふ。論の名目を解し竟んぬ。偈の中、分つて五念門と爲す。下の長行に釋する所の如し。第一行の四句に相含んで三念門有り。上の三句は是れ禮拜讚歎門なり。下の一句は是れ作願門なり。第二行は、論主自ら我佛經に依つて論を造りて佛教と相應して服する所宗有るを述べ、何が故に此に云ふ。優婆提舍の名を成ぜんが爲の故なり。亦是れ上の三門を成じ、下の二門を起す。所以に之に次で説きたまへり。第三行より二十四行を盡すまでは是れ觀察門なり。最後の一行は是れ觀向門なり。偈の章門を分ち竟んぬ。

【四】正しく偈頌を明し。三念門を明す。

【四】世尊我一心に、盡十方の無礙光如來に、歸命したてまつり、安樂國に生ぜんと願す。世尊とは諸佛の通號なり。智を論ずれば、則ち義として達せずと云ふこと無く、斷を

【三の根本】世界の語言に三根本あり。一は邪、二には慢、三には名字なり。

【阿彌陀如來の禮】十住毘婆沙論易行品阿彌陀章。

語へば則ち習氣餘無し。智斷具足して能く世間を利し、世の爲に尊重せらる。故に世尊と曰ふ。此言の意は釋迦如來に歸したてまつる。何を以てか知ることを得る。下の句に我依修多羅と言へり。天親菩薩釋迦如來の像法の中に在して釋迦如來の經教に順ふ。所以に生ぜんと願す。生ぜんと願するは宗有り。故に知んぬ此言は釋迦に歸したてまつるなり。若し此意は遍く諸佛に告げたてまつると謂はんも、亦復嫌ふこと無し。夫れ菩薩の佛に歸するは孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸し、動靜己に非ず、出沒必ず由るが如し。恩を知りて徳を報ず、理宜しく先づ啓すべし。又所願輕からず。若し如來威神を加したまはずんば、將に何を以てか達せん、神力を加することを乞ふ。所以に仰いで告げたてまつる、我一心とは天親菩薩自督の詞なり。言は無礙光如來を念じたてまつりて安樂に生ぜんと願す。心相續して他想念違すること無し。問うて曰はく、佛法の中に我無し。此中に何を以てか我と稱するや。答へて曰はく、「我と言ふに三の根本有り。一には是れ邪見語、二には是れ自大語、三には是れ流布語なり。今我と言ふは天親菩薩自ら指す言なり。流布語を用ふ。邪見と自大とは非ざるなり。歸命盡十方無礙光如來とは歸命は即ち是れ禮拜門、盡十方無礙光如來は即ち是れ讚歎門なり。何を以てか知る、歸命は是れ禮拜なりと。龍樹菩薩造の、阿彌陀如來の讚の中に、或は稽首禮と言ひ或は我歸命と言ひ或は歸命禮と言へり。此論の長行の中に亦修五念門と言へり。五念門の中に禮拜は是れ一なり。天親菩薩既に往生を願す。豈禮せざる容けんや。故に知んぬ歸命は即ち是れ禮拜なることを。然れど



も禮拜は但是恭敬にして、必ずしも歸命ならず。歸命は必ず是れ禮拜なり。若し此を以て歸命を推せば重しと爲す。偈には己心を中ぶ、宜しく歸命と言ふべし。論には偈の義を解す。況く禮拜を談すべし。彼此相成じて、義に於て彌顯なり、何を以てか知る。盡十方無礙光如來は是れ讚歎門なりと、下の長行の中に「云何が讚歎門なる。謂く彼如來の名を稱し、彼如來の光明、智相の如く、彼名義の如く、如實に修行し相應せんと欲するが故に」と言へり。舍衛國所説の『無量壽經』に依るに、佛阿彌陀如來の名號を解したまはく、何が故に阿彌陀と號する。彼佛の光明、無量にして十方の國を照したまふに障礙する所無し。是故に阿彌陀と號く、又彼佛の壽命及び其人、無量無邊阿僧祇なり。故に阿彌陀と名く。問うて曰はく、『若し無礙光如來の光明、無量にして十方の國土を照すに、障礙する所無しと言はば、此間の衆生何を以てか光照を蒙らざらんや。光り照さざる所有らば豈礙り有るに非ずや』答へて曰はく、『礙は衆生に屬す。光の礙ふるには非ず。譬へば日光四天下に周けれども、而も盲者は見ざるが如し。日光の周からざるには非ざるなり。亦密雲の洪きに霑げども而も頑石は潤はざるが如し。雨の洽はざるには非ざるなり。若し一佛三千大千世界を主領すと言ふは是れ聲聞論の中の説なり。若し諸佛遍く十方無量無邊の世界を領すと云ふは是れ大乘論の中の説なり。天親菩薩今盡十方無礙光如來と言ふは、即ち是れ彼如來の名に依つて、彼如來の光明、智相の如く讚歎す。故に知んぬ此句は是れ讚歎門なり。願生安樂國とは、此一句は是れ作願門なり。天親菩薩の歸命の意なり。其れ安樂の義、具に

【龜毛】 龜に毛髮無きよりもの全くなきことに喩へていふ語なり。

【論の中に委曲せり】 これ即ち八不の中の不一異なる

下の觀察門の中に在り。問うて曰はく、「大乘經論の中處處に衆生畢竟して無生なること虚空の如しと説けり。云何が天親菩薩願生と言ふや。」答へて曰はく、「衆生無生なること虚空の如しと説くに一種有り。一には凡夫の謂ふ所の如きは實の衆生なり。凡夫の所見の如きは實の生死なり。此所見の事畢竟して所有無きこと龜毛の如く虚空の如し。二には謂く、諸法は因縁生の故に、即ち是れ不生なり。所有無きこと虚空の如し。天親菩薩の願生する所は是れ因縁の義なり。因縁の義なるが故に假名の生なり。凡夫の實の衆生實の生死有り」と謂ふが如きには非ざるなり。問うて曰はく、「何なる義に依りてか往生と説くや。」答へて曰はく、「此間の假名の人のの中に於て五念門を修するに前念は後念の與に因と作る。穢土の假名の人と淨土の假名の人と決定して一なるを得ず。決定して異なるを得ず。前心後心亦復是の如し。何を以ての故に。若し一ならば則ち因果無し。若し異ならば則ち相續に非ず。是義一異門を觀ず。論の中に委曲せり。第一行の三念門を釋し竟んぬ。次に優婆提舍の名を成じ、又上を成じ下の偈を起す。

『我修多羅の眞實功德の相に依りて、願偈の總持を説いて、佛教と相應せしむ。』此一行云何が優婆提舍の名を成じ、云何が上の三門を成じ、下の二門を起すや。偈に我依修多羅、與佛教相應と言へり。修多羅は是れ佛經の名なり。我佛經の義を論するに經と相應す。佛の法相に入るを以ての故に、優婆提舍と名くるを得。名を成じ竟んぬ。上の三門を成じ、下の二門を起すをいはば、何をか所依とし、何が故に依り、云何が依るや。何をか所依とは修

【四阿含】一增一阿含、二長阿含、三中阿含、四雜阿含なり。  
 【三藏】一、修多羅藏、四阿含等の經、二、阿毘曇藏、俱舍、婆沙等の論、三、毘尼藏、五部律なり。

【五】以下第十七まで器世間清淨功徳を明す。第一清淨功徳を明す。  
 【器世間】有情を受け容るる世間の意。山河、大地等

多羅に依る。何が故に依とは如來は即ち眞實功徳の相なるを以ての故に。云何が依とは五念門を修して相應するが故に。上を成じ、下を起し竟んぬ。修多羅とは十二部經の中の直説の者を修多羅と名く。謂く、四阿含の三藏等なり。三藏の外の大乗の諸經をも亦修多羅と名く。此中に依修多羅と言ふは是れ三藏の外の大乗の修多羅なり。阿含等の經には非ざるなり。眞實功徳相とは二種の功徳有り。一には有漏心より生じて法性に順ぜず。謂ゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、若は因、若は果、皆是れ顛倒なり。皆是れ虚偽なり。是故に不實の功徳と名く。二には菩薩の智慧清淨の業より起れる莊嚴佛事は、法性に依りて清淨の相に入る。是法顛倒ならず虚偽ならざるを名けて眞實の功徳と爲す。云何が顛倒ならざる。法性に依りて二諦に順ずるが故に。云何が虚偽ならざる。衆生を攝して畢竟淨に入らしむるが故に。説願偈總持、與佛教相應とは持は不散不失に名け、總は少きを以て多きを攝するに名く。偈とは五言の句數を言ふ。願とは往生を欲樂するに名く。説は謂く、諸の偈と論とを説くなり。總じて之を言はば願生する所の偈を説いて佛經を總持して佛教と相應せしむ。相應とは譬へば函と蓋と相稱へるが如きなり。』

【五】「彼世界の相を觀するに、三界の道に勝過せり。」此より已下は是れ第四の觀察門なり。此門の中、分つて二の別と爲す。一には器世間莊嚴成就を觀察す。二には衆生世間莊嚴成就を觀察す。此句より已下願生彼阿彌陀佛國に至るまでは、是れ器世間莊嚴成就を觀するなり。器世間を觀する中、復分つて十七の別と爲す。文に至りて當に口くべし。

の世間をいふ。依報のこと。

【衆生世間】有情世間のこと。

【輪轉】生死の停らざるが故に名く、無常經に云はく、三界の内に循環せること猶し汲井輪の如しと。

【清淨の相】彼淨土に言ふ所の相は即ちこれ無漏の相、實相の相なり。

【四例】涅槃の實相なる常を非常と樂を非樂と、我を非我と、淨を非淨と倒計すること。

此二句は即ち是れ第一の事なり。名けて觀察莊嚴清淨功德成就と爲す。此清淨は是れ總相なり。佛本此莊嚴清淨功德を起したまふ所以は、三界を見たまふに是れ虚偽の相、是れ輪轉の相、是れ無窮の相にして、蠅、屈伸蟲の修環するが如く蠶繭の衣の自縛するが如し。哀なる哉、衆生。此三界に結ばれて解れて、顛倒不淨なり。衆生をして不虛偽の處に、不輪轉の處に、不無窮の處に置きて、畢竟安樂の大清淨の處を得しめんと欲す。是故に此清淨莊嚴功德を起したまふなり。成就とは言、此清淨は破壊すべからず汚染すべからず。三界は是れ汚染の相是れ破壊の相なるが如きには非ざるなり。觀とは觀察なり。彼とは、彼安樂國なり。世界相とは、彼安樂世界の清淨の相なり。其相別して下に在り。勝過三界道道とは道は通なり。此の如きの因を以て此の如きの果を得、此の如きの果を以て此の如きの因に酬ゆ。因に通じて果に至り、果に通じて因に酬ゆ、故に名けて道と爲す。三界とは一には是れ欲界、謂ゆる六欲天、四天下、人、畜生、餓鬼、地獄等是なり。二には是れ色界、謂ゆる初禪二禪三禪四禪天等是なり。三には是れ無色界、謂ゆる空處識處無所有處非想非非想處天等、是なり。此三界は蓋し是れ生死の凡夫の流轉の闇宅なり。復苦樂小し、殊に修短暫く異なりと雖も、統て之を觀するに、有漏に非ずといふこと莫し。倚伏相乘じて、循環際無し。雜生觸受し四倒長く拘はる。且くは因、且くは果、虚偽相襲ふ。安樂は、是れ菩薩の慈悲正觀の山生、如來の神力木願の所建なり。胎卵濕生茲に緣つて高く掛め、業繫の長維此に従つて永く斷つ、續括の權、勸を待たずして巧を變



【勞謙し善讓し】君子の孝道を引いて菩薩の德行に類す。

【六】第二量功德を明す。

【宮觀】無量壽經の上に宮殿樓觀とあるによる。【舉急の事】種種の艱難のこと。

【七】第三性功德を明す。

く、勞謙し善讓し普賢に齊くして徳を同じうす、勝過三界とは抑是れ近言なり。

【六】『究竟じて虚空の如く廣大にして邊際無し。』此一句をば莊嚴量功德成就と名く。

佛本此莊嚴量功德を起したまふ所以は、三界を見たまふに、陝少にして墮城の卓徑山絶え

陪は重土なり。一に諸者の諸丘なりなり。或は宮觀迫近し、或は土田逼隘りす。或は志求す

るに路促り、或は山河隔障し或は國界分部す。此の如き等の種種の舉急の事有り。是

故に菩薩此莊嚴量功德の願を興したまふ。願くば我國土は虚空の如く廣大無際ならんと。

如虚空とは言、來生の者衆しと雖も猶し無きが若きなり。廣大無際とは、上の如虚空の

義を成す。何が故に虚空の如くなる。廣大無際なるを以ての故に。成就とは言、十方衆

生の往生する者、若は已に生じ若は今生じ若は當に生ずべし。無量無邊なりと雖も畢竟じ

て常に虚空の如く廣大無際にして、終に滿る時無からん。是故に究竟如虚空、廣大無邊際と

言へり。問うて曰はく、『維摩の方丈の如きは包容するに餘有り。何ぞ必ずしも國界無量な

るを乃し廣大と稱するや。』答へて曰はく、『言ふ所の廣大は必ずしも畦五十畝、畝三十畝を以

て喻とするには非ず。但空の如しと言ふ。亦何ぞ方丈を累ねんや。又方丈の包容する所は

狹に在りて而も廣なり。聚りて果報を論ずるに豈廣に在りて廣なるに若かんや。』

【七】『正道の大慈悲は、出世の善根より生ず。』此二句をば莊嚴性功德成就と名く。佛

本何が故に、此莊嚴を起したまふ。有國土を見たまふに、愛欲を以ての故に、則ち欲界有

り。攀厭禪定を以ての故に則ち色無色界有り。此三界は皆是れ有漏邪道の所生なり。長く

【長く人夢に云云】夢中に處する者は則ち自ら其夢中に在ることを知らず迷妄の中に在るも亦自迷を知らず故に悟出することを知らざるなり。

【法性に隨順して云云】法性は法に異に義は同じ名は異に義は同じ諸法の性なり。故に法性と名く、諸法の性なり。諸法の本なり。【聖種性】十地を以て聖種性と名く

【淨色、淨心】無量壽經の上に云はく彼佛の國土の諸の往生の者は是の如きの色身を具足す。又云はく、我所の心無く染著の心無し等。【平等の大道】諸法實相、無差別なり。

【根】根は生成増長の義なり。

大夢に寢ねて悟出を知る莫し。是故に大悲心を興したまふ。願くば我成佛せんに無上正見の道を以て、清淨の土を起して三界を出でんと。性は是れ本の義なり。言は此淨土は法性に隨順して法本に乖かざる事、華嚴經の寶王如來の性起の義に同じ。又言はく、積習成性なり。法藏菩薩、諸波羅蜜を集めて積習して成ずる所を指す。亦性と云ふは是れ聖種性なり。序め法藏菩薩世自在王佛の所に於て無生法忍を悟りたまへり。爾時の位を淨土と曰ふ。是れ彼因が所得なり。果の中に因を説く故に名けて性と爲す。又言はく、性は是れ必然の義、不改の義なり。海性の一味なる、衆流入れば必ず一味と爲りて海味彼に隨つて改まらざるが如し。又人身の性は不淨なるが故に種種の妙好の色香味、身に入れば皆不淨と爲るが如し。安樂淨土の諸の往生者の淨色ならざる無く、淨心ならざる無く、畢竟じて皆清淨、平等無爲法身を得。安樂國土清淨の性成就せるを以ての故に。正道大慈悲出世善根生とは、平等の大道なり。平等の道を名けて正道と爲す所以は、平等は是れ諸法の體相なり。諸法平等なるを以ての故に發心等し。發心等しきが故に道等し。道等しきが故に大悲等し。大悲は是れ佛道の正因なり。故に正道大悲と言ふ。慈悲に三緣あり。一には衆生緣是れ大悲、二に法緣是れ中悲、三には無緣是れ大悲なり。大悲は即ち是れ出世の善なり。安樂淨土は此大悲より生ずるが故に。故に此大悲を淨土の根と爲すと謂ふ。故に出世善根生と曰ふ。

【八】第四形相功徳を明す。

【形相】淨光の力に依つて端正の形を受く、故に形相と云ふ即ち形色のことなり。

【庭燎】今の蠟燭のことなり。

【十俵】六尺を俵と曰ふ。或は七尺八寸。

【九】第五種種事功徳を明す。

【種種事】器世界莊嚴一切の宮殿樓觀等をいふ。

【華觀】華は褒美の言、觀は殿の名なり。

【有餘】佛道の外のことをいふ。

【經に言はく】維摩經卷上に在り。

【六】第六妙色功徳を明す。

【三有】欲と色と無色との三處に於て因果亡ぜざるが故に名けて有と云ふ。

【八】「淨光明満足して、鏡と日月輪との如し。」此二句をば莊嚴形相功徳成就と名く。佛本此莊嚴功徳を起したまふ所以は、日の四域を行くに、光三方に周からず。庭燎宅に在りて明、十俵に満足するを見たまふ。是を以ての故に、淨光明を満足する願を起したまへり。日月光輪の自體を満足するが如く、彼安樂淨土も復廣大無邊なりと雖も、清淨の光明充塞せずといふこと無し。故に淨光明満足、如鏡日月輪と曰ふ。

【九】「諸の珍寶性を備へて、妙莊嚴を具足せり。」此二句をば莊嚴種種事功徳成就と名く。佛本何が故に此莊嚴を起したまへる。有國土を見たまふに泥土を以て宮篋と爲し、木石を以て華觀と爲す。或は金を彫り玉を鏤むれども意願充たす。或は百千を營備すれども具に辛苦を受く。此を以ての故に大悲心を興したまふ。願くば我成佛せんに必ず珍寶具足し嚴麗自然にして有餘を相忘して自ら佛道を得しめんと。此莊嚴の事は縱使毘首羯磨がたくみ、妙絶と稱し、思を積み想を竭すとも、豈能く取つて圖さんや。性とは本の義なり。能生既に淨し、所生焉んぞ不淨なるを得ん。故に經に言はく「其心の淨きに隨つて則ち佛土淨し」と。是故に備諸珍寶性、具足妙莊嚴と言へり。

【一〇】「無垢の光炎熾んに、明淨にして世間を曜かす。」此二句は莊嚴妙色功徳成就と名く。佛本何が故に此莊嚴を起したまへる。有國土を見たまふに、優劣不同なり。不同なるを以ての故に高下以に形はる。高下既に形なれば是非以に起る。是非既に起れば長く三有に淪り没なむ。是故に大悲心を興し平等の願を起したまふ。願くば我國土は光炎熾盛にして第



【増上縁】三縁の  
一、彌陀の名號を  
稱念すれば多劫の  
罪消滅し臨終に佛  
聖衆と共に來迎し  
たまふをいふ  
【二種世間】器世  
間、衆生世間なり  
【二】第七觸功德  
を明す。

【六情】眼、耳、  
鼻、舌、身、意の

一無比ならん。人天の金色の能く奪ふ者有るが如くならず。若爲んが相奪ふ。明鏡の如きを金邊に在れば則ち現ぜず。今日時中の金を佛在時の金に比すれば則ち現ぜず。佛在時の金を閻浮那金に比すれば則ち現ぜず。閻浮那金を大海の中の轉輪王道中の金沙に比すれば則ち現ぜず。轉輪王道中の金沙を金山に比すれば則ち現ぜず。金山を須彌山の金に比すれば則ち現ぜず。須彌山の金を三十三天の瓔珞の金に比すれば則ち現ぜず。三十三天の瓔珞の金を炎摩天の金に比すれば則ち現ぜず。炎摩天の金を兜率陀天の金に比すれば則ち現ぜず。兜率陀天の金を化自在天の金に比すれば則ち現ぜず。化自在天の金を他化自在天の金に比すれば則ち現ぜず。他化自在天の金を安樂國中の光明に比すれば則ち現ぜず。所<sub>レ</sub>以は何んとなれば、彼土の金光は垢業より生ずることを絶するが故に、清淨にして成就せざる無し。故に安樂淨土は是れ無生忍の菩薩の淨業の所起、阿彌陀如來法王の所領なり。阿彌陀如來を増上縁と爲すが故に。是故に無垢光炎熾、明淨曜世間と言へり。曜世間とは二種の世間を曜がすなり。

【二】『寶性功德草は柔軟にして左右に旋れり。觸る者は勝樂を生ずること迦旃隣陀に過ぎたり。』此四句を莊嚴觸功德成就と名く。佛本何が故に此莊嚴を起したまへる。有國土を見たまふに金玉を寶重すと雖も、衣服を爲すを得ず。明鏡を珍翫すれども敷具に議する無し。斯れ目を悦ばしめて、身に便ならざるに縁つてなり。身眼の二情、豈鉉楯に非ずや。是故に願じて言はく、「我國土の人天六情水乳に和して卒に楚越の勞を去らしめん」と。



【二四】第八種功德の中、虚空功德を明す。

【宮商】支那の音楽の音符。ここに樂器の意。

【二五】第九雨功德を明す。

見たまふに、唯貌 嶮たる峻り高なれ、枯木岑に横はり、崖から岩峯なりたる岨、深山の谷なり  
見深くして、青の惡草道草多くして谷に盈つ。茫茫たる滄海絶目の川爲り。蕙蕙たる廣澤無蹤  
嶺崖無し。青の貌茅行くべからず谷に盈つ。茫茫たる滄海絶目の川爲り。蕙蕙たる廣澤無蹤  
の所たり。菩薩此を見て大悲の願を興したまふ、願くば我國土、地平なること掌の如  
く、宮殿樓閣鏡の如く十方を納めん」と。的しくして屬する所無く亦屬せざるに非ず。寶樹寶  
欄互ひに映飾を爲す。是故に宮殿諸樓閣、觀十方無礙、雜樹異光色、寶欄遍圍繞と言ふ。

【二四】『無量の寶交絡して、羅網虚空に遍ぜり。種種の鈴響を發して、妙法音を宣吐す。』  
此四句をば莊嚴虚空功德成就と名く。佛本何が故に此莊嚴を起したまふや。有國土を見た  
まふに、煙雲塵霧、太虚を蔽却し響、聲、雨のくわく大雨り震烈して上よりして墮ち、不祥の裁なり梵  
居虹の青赤なるなり或つれ毎に空より來る。憂慮百端にして、之が爲に毛豎つ。菩薩此を見て大  
悲心を興したまふ、「願くば我國土、寶網交絡して羅虚空に遍じ、鈴、鐸なり宮商に鳴し  
て道法を宣べん」と。之を視て厭くこと無く、道を懷き徳を見はす。是故に無量寶交絡、羅  
網遍虚空、種種鈴發響、宣吐妙法音と言ふ。

【二五】『華衣を雨らして莊嚴し、無量の香もて普く薫す。』此二句をば莊嚴雨功德成就と名  
く。佛本何が故に此莊嚴を興したまへる。有國土を見たまふに、服飾を以て地に布きて所  
尊を延請せんと欲し、或は香華名寶を以て用ひて恭敬を表せんと欲す。而るに業貧しく感  
薄くして是事果さず。此故に大悲の願を興したまふ、「願くば我國土には常に此物を雨らし  
て衆生の意に満てん」と。何が故に雨を以て言を爲す。恐くは取者云はん、若し常に華衣を



【六】第十光明功德を明す。

【無記】三性の一善にも悪にもあらざる性質。

【七】第十一妙聲功德を明す。妙聲【妙聲】妙名なり其意は若し人有りて安樂土の名を聞き即ち往生を願ずれば願の如く即ち生ず。

【中國】天竺を指す。

雨らさば亦虚空に填塞すべし。何に縁つてか妨げざる。是故に雨を以て喻と爲す、雨時に適ひぬれば則ち洪滔なる水の漫火の患無し、安樂の報望累情の物有らんや。經に言はく、「日夜六時に寶衣を雨らし寶華を雨らす。寶質柔軟にして其上を履踐するに則ち下むこと四寸なり。足を舉る時に隨つて還復すること故の如し。用ひ訖れば寶地に入ること水の坎に入るが如し」と。是故に雨華衣莊嚴、無量香普薰と言ふ。

【六】「佛慧明淨の日は、世の癡闇の冥を除く。」此二句をば莊嚴光明功德成就と名く、佛本何が故に此莊嚴を興したまへる。有國土を見たまふに、復項背に日光ありと雖も而も愚癡の爲に闇る。是故に願じて言はく、「我國土の有ゆる光明をして能く癡闇を除き、佛の智慧に入りて、無記の事を爲さざらしめん」と。亦云はく、「安樂國土の光明は如來の智慧より報起せり」と。故に能く世の闇冥を除く。經に言はく、「或は佛土有り光明を以て佛事を爲す」と。即ち是れ此なり。是故に佛慧明淨日、除世癡闇冥と言ふ。

【七】「梵聲を悟らしむること深遠、微妙にして十方に聞ゆ。」此二句をば莊嚴妙聲功德成就と名く。佛本何が故に此願を興したまへる。有國土を見たまふに善法有りと雖も而も名聲遠からず。名聲有りて遠しと雖も復微妙ならず。名聲有りて妙遠なれども復物を悟らしむること能はず。是故に此莊嚴を起したまへり。天竺國には淨行を稱して梵行と爲し、妙辭を稱して梵言と爲す。彼國には梵天を貴重するを以て多く梵を以て讚を爲す。亦言はく、中國の法梵天と通するが故なり。聲とは名なり。名は謂く、安樂土の名なり。

經に言はく、「若し人但安樂淨土の名を聞いて往生を欲願するに、亦願の如くなるを得」と。  
 此れ名の物を悟らしむる證なり。釋論に言はく、「斯の如きの淨土は三界の所攝に非ず。何を以てか之を言ふとならば、欲無きが故に欲界に非ず。地居なるが故に色界に非ず。色有るが故に無色界に非ず」と。蓋し菩薩別業の致す所なるのみ。有を出でて而も有なるを微と曰ふ。出有とは謂く三有を出づるなり。而も有とは謂く淨土の有なり。名能く聞悟せしむるを妙と曰ふ、妙は好なり、名を以て能く物は故に梵聲悟深遠、微妙聞十方と言ふ。

【二八】第十二主功德を明す。  
 【正覺】正しく一切所有の法を覺知するが故に。

【法王】諸佛如來法に於て自在なり故に法王と曰ふ。

【九】第十三眷屬功德を明す。

【二八】「正覺の阿彌陀、法王善く住持せらる。」此二句をば莊嚴主功德成就と名く。佛本何が故に此願を興したまへる。有國土を見たまふに羅刹を君として則ち率土相噉す。寶輪殿に駢なりまれば則ち四域に虞無し。之を風の靡かすに譬ふ。豈本無からんや。是故に願を興したまふ、「願くば我國土は常に法王有りて、法王善力の住持する所ならん」と。住持とは黃鶻子安を持せしかば、千齡更に起り、魚母子を念持すれば累無きを累と曰ふを遷ても壞せざるが如し。安樂國は正覺の爲に善く其國を持せらる。豈正覺の事に非ざる有らんや。是故に正覺阿彌陀、法王善住持と言ふ。

【二九】「如來淨華の衆は、正覺の華より化生す。」此二句をば莊嚴眷屬功德成就と名く。佛本何が故に此願を興したまへる。有國土を見たまふに或は胞血を以て身器と爲し、或は糞尿を以て生の元と爲す。或は槐棘の高塚より猜狂の子を出し、或は豎子が婢腹より卓犖の才を出す。譏誚之に由りて火を懷き、耻辱以に緣つて氷を抱く、所以に願じて言はく、「我國

【二〇】第十四受用  
功德を明す。  
【愛樂】受用の義  
なり。

【三】第十五無諸  
難功德を明す。  
【袞寵】寵愛のこ  
と。  
【斧鉞】禁を犯し  
て死罪を得。  
【方丈】仙宮なり

土をして、悉く如來淨華の中に於て生じ、眷屬平等にして與奪路無からしむ。故に如來淨華衆、正覺華化生と言ふ。

【二〇】「佛法味を愛樂し、禪三昧を食と爲す。」此二句をば莊嚴受用功德成就と名く。佛本何が故に此願を興したまへる。有國土を見たまふに、或は巢を探り卵を破りて饑満つる貌、饑飽なり。の饑と爲す。或は沙を懸け、俗を指して相慰むるの方と爲す。嗚呼諸子實に痛心すべし。是故に大悲願を興したまふ。願くば我國土には佛法を以てし、禪定を以てし、三昧を以て食として、永く他食の勞ひを絶たん。愛樂佛法味とは、日月燈明佛「法華經」を説きたまふこと六十小劫なるに、時會の聽者亦一處に坐して六十小劫を食頃の如しと謂へり。一人として若は身、若は心に、而も懈倦を生ずること有ること無し。禪定を以て食と爲すとは、謂く、諸の大菩薩、常に三昧に在りて他食無し。三昧とは彼諸の人天、若し食を須ひんとするときは百味の嘉餼羅列して前に在り、眼に色を見、鼻に香を聞き、身に適悅を受けて自然に飽足す。訖りぬれば化して去りぬ。若し須ひんとすれば復現す。其事經に在り。是故に愛樂佛法味、禪三昧爲食と言ふ。

【三一】永く身心の惱を離れて、樂を受くること常に間なし。此二句をば莊嚴無諸難功德成就と名く。佛本何が故に此願を興したまへる。有國土を見たまふに、或は朝には袞寵に預り、夕には斧鉞に懼く。或は幼くして蓬藜に捨てられ、長じては方丈に列す。或は笊を鳴して道に出で歷經して催還す。是の如き等の種種の違奪有り。是故に願じて言はく、

内裏を以て方丈と名く。

【三毒】 貪、瞋、癡なり。

【三】 第十六大義門功德を明す。

【設し我……正覺を取らじ】第十四聲聞無數の願。

【摩訶衍論】 大智度論なり。

「我國土をして安樂相續し、畢竟じて聞無からしめん」と。身惱とは飢渴寒熱殺害等なり。心惱とは是非得失三毒等なり。是故に永離身心惱、受樂常無聞と言ふ。

【三】 『大乘善根の界は、等しくして譏嫌の名も無し、女人及び根缺と、一乗の種は生ぜず。』此四句をば莊嚴大義門功德成就と名く。門とは大義に通ずるの門なり。大義とは大乘の所以なり、人の城に造るに門を得て則ち入るが如し。若し人安樂に生ずるを得れば、是れ則ち大乘を成就するの門なり。佛本何が故に此願を興したまへる。有國土を見たまふに、佛如來賢聖等の衆行りと雖も、國濁るに由るが故に、一を分つて三を説く。或は眉を抬げて諸

りを致し、或は指語に緣りて譏を招く。是故に願じて言はく、「我國土をして皆是れ大乘一味等味ならしめ、根敗種子畢竟じて生ぜず、女人殘缺の名字も亦斷たん」と。是故に大乘善

根界、等無譏嫌名、女人及根缺、二乗種不生と言ふ。問うて曰はく、「王舍城所説の『無量壽經』を案ずるに、法藏菩薩四十八願の中に言はく、「設し我佛を得たらんに、國中の聲聞能く計量する有りて其數を知らば正覺を取らじ」と。是れ聲聞有る一の證なり。又『十住毘婆沙』

の中に龍樹菩薩阿彌陀の讚を造りて云はく、「三界の獄を超出して日は蓮華の葉の如く、聲聞衆無量なり、是故に稽首して禮す」と。是れ聲聞有る二の證なり。又『摩訶衍論』の中に言

はく、「佛土種種不同なり、或は佛土有り、純ら是れ聲聞僧なり。或は佛土有り、純ら是れ菩薩僧なり。或は佛土有り、菩薩聲聞を會して僧と爲す。阿彌陀の安樂國等の如し」と云ふ是なり。是れ聲聞ある三の證なり。諸經の中に安樂國を説く處有るには、多く聲聞有りと言うて



【法華經】方便品

【法華經】譬喻品

聲聞無しと言はず。聲聞は即ち是れ二乗の一なり。論に乃至二乗の名も無しと言へり。此れ  
 云何が會するや。』答へて曰はく、『理を以て之を推するに、安樂淨土には二乗有るべから  
 ず。何を以てか之を言ふ。夫れ病有るとき則ち藥有らば理數の常なり。』法華經に言はく、  
 「釋迦牟尼如來五濁の世に出でたまへるを以ての故に、一を分つて三と爲す」と。淨土は既  
 に五濁に非ず三乘無きこと明けし。『法華經』に善はく、「諸の聲聞、是人何に於てか解脫  
 を得る。但虚妄を離るるを名けて解脫と爲す。是人實には未だ一切解脫を得ず、未だ無上道  
 を得ざるを以ての故に」と。嚴かに此理を推するに、阿羅漢既に未だ一切の解脫を得ず、必ず  
 應に生ずること有るべし。此人は更に三界に生ぜず、三界の外淨土を除いて更に生處無し。  
 是を以て唯應に淨土に生ずべし。聲聞と言ふが如きは、是れ他方の聲聞の來生せるを本名に  
 仍るが故に稱へて聲聞と爲す。天帝釋の人中に生ずる時、憍尸迦を姓と爲す。後天主と爲る  
 と雖も佛人をして其由來を知らしめんと欲して帝釋と語りたまふ時、猶ほ憍尸迦と稱する  
 が如し。其れ此類なり。又此論には但二乘種不生と言ふは、謂く、安樂國には二乗の種子を生  
 ぜず、亦何ぞ二乗の來生することを妨げん。譬へば橋を裁えて江北に生ぜざれども、河洛の  
 菓肆に亦橋有ることを見、又鸚鵡西北に渡らざれども、趙魏の架桁に亦鸚鵡有りと言ふが如  
 し。此二物、但其種渡らざるを言ふ。彼に聲聞有ることも亦是の如し。是の如き解を作さ  
 ば、經論則ち會しぬ。問うて曰はく、名は以て事を召く、事有れば乃ち名有り、安樂國  
 には既に二乘女人根缺の事無し。亦何ぞ此三の名も無しと言ふを須ひん。答へて曰はく、



【實際】 灰身滅智を指す。  
 【佛道の根芽】 身心都滅を指す。  
 【鳩鳥】 毒鳥なり  
 【犀牛】 佛の本願を指す。

【三三】 第十七一切所求満足功德を明す。

【阿私陀仙人】 梵音(Asta)無比、端正と譯す。婆羅門の學者にして釋尊降誕の時、尊容を相し奉り出家せ

「軟心の菩薩甚だ勇猛ならざるを譏りて聲聞と云ふが如く、人の詭曲或は復寧弱なるを譏りて女人と言ふが如し。又眼明なりと雖も、而も事を譏らざるを譏りて盲人と言ふが如し。又耳は聴くと雖も而も義を聽きて解せざるを譏りて聾人と言ふが如し。又舌語ると雖も、而も訥口噤吃なるを譏りて瘖人と言ふが如し。是の如き等の根は、具足すと雖も而も譏嫌の名有る有り。是故に乃ち至ると言ふことを須ふ。名も無きに明けし。淨土には是の如き等の與奪の名無し。問うて曰はく、「法藏菩薩の本願及び龍樹菩薩の所讚を尋ぬるに、皆彼國の聲聞衆多なるを以て奇と爲すに似たり。此れ何の義かある。答へて曰はく、「聲聞は實際を以て證と爲す。計るに更に能く佛道の根芽を生ずべからず。而るに佛本願不可思議の神力を以て攝して彼に生ぜしむ。必ず當に復神力を以て其無上道心を生ぜしむべし。譬へば鳩鳥の水に入れば魚蜂咸く死す。犀牛之に觸るれば死者皆活へるが如し。此の如きは生ずべからずして生ず。所以に奇とすべし。然るに五不思議の中に佛法最も不可思議なり。佛能く聲聞をして、復無上道心を生ぜしめたまふ。眞に不可思議の至なり。」

【三三】 衆生の願樂する所、一切能く満足す。此一句をば莊嚴一切所求満足功德成就と名するに由無く、或は人凡く性鄙しくして怖ひ出るに路靡し。或は修短、業に繋れて制するに已に在らず。阿私陀仙人の類の如きなり。是の如き等の業風の爲に吹かれて自在を得ざること有り。是故に願じて言はく、「我國土をして、名所求に稱つて情願を満足せしめん」

俗に一切種智を成じ  
在らば轉輪聖  
王と成るべしと豫  
言す。

【三四】 以下第八ま  
て衆生世間清淨を  
明す。

【有論師】 毘曇論  
師をいふ。

【三五】 第一座功德  
を明す。  
【淨華臺】 彼寶王

と。是故に衆生所願樂、一切能満足と言へり。

『是故に彼阿彌陀佛國に生ぜんと願す。』此二句は上の十七種の莊嚴國土成就を觀察するこ  
とを結成す。所以に生ぜんと願すべし。

【四】 器世間清淨を釋することとを上に訖りぬ。次に衆生世間清淨を觀す。此門の  
中、分つて二の別と爲す。一には阿彌陀如來の莊嚴功德を觀察し、二には彼諸の菩薩の莊  
嚴功德を觀察す。如來の莊嚴功德を觀察する中に八種有り。文に至りて當に目くへし、問う  
て曰はく、『有論師況く衆生の名義を解すらく、『其れ三有に輪轉して衆多の生死を受くるを  
以ての故に衆生と名く』と。今佛菩薩を名けて衆生と爲す。是義云何。答へて曰はく、『經に  
言はく、『一法に無量の名有り、一名に無量の義有り』と。衆多の生死を受くるを以ての故に  
名けて衆生と爲すが如きは、此は是れ小乘家に釋する三界の中の衆生の名義にして、大乘家  
の衆生の名義には非ざるなり。大乘家に言ふ所の衆生は、『不增不减經』に言ふが如し。衆生  
と言ふは即ち是れ不生不滅の義なり。何を以ての故に。若し生有らば生じ已りて復生ぜん。  
無窮の過有るが故に。不生にして生の過有るが故に。是故に無生なり。若し生有らば滅有る  
べし。既に生無くんば何ぞ滅有ることを得ん。是故に無生無滅は是れ衆生の義なり。經中  
に言ふが如き、『互受陰空にして所有無しと通達する、是れ苦の義なり』と、斯れ其類なり。  
【五】 『無量の大寶王、微妙の淨華臺なり。』此二句をば莊嚴座功德成就と名く。佛本何が  
故に此座を莊嚴したまへる。有菩薩を見たまふに、末後の身に於て草を敷きて、而も坐し

の所坐なり。  
【末後の身】菩薩  
が已に解脱を得た  
るをいふ。

【三六】第二身業功  
徳を明す。  
【相好】色相端嚴  
なるを云ふ。  
【色等】衆生の心

て阿耨多羅三藐三菩提を成ず。人天見る者、増上の信、増上の恭敬、増上の愛樂、増上の修行を生ぜず。是故に願じて言はく、「我成佛せん時に、無量の大寶王、微妙の淨華臺をして以て佛座と爲さしめん」と。無量とは『觀無量壽經』に言ふが如し。七寶の地上に大寶の蓮華王の座有り、蓮華の一一の葉に百寶の色を作す。八萬四千の脈有り、猶し天畫の如し。脈に八萬四千の光有り、華葉の小さき者は縱廣二百五十由旬なり。是の如きの華に八萬四千の葉有り。一一の葉の間に百億の摩尼珠王有り。以て映飾と爲す。一一の摩尼より千の光明を放つ。其光蓋の如し。七寶合成就して、遍く地上に覆ひ、釋迦毘楞伽寶以て其臺と爲す。此蓮華臺、八萬の金剛瓊叔迦寶梵摩尼寶妙眞珠の網を以て嚴飾と爲す。其臺上に於て自然に而して四柱の寶幢有り。一一の寶幢、八萬四千億の須彌山の如く、幢上の寶幔、夜摩天宮の如し。五百億の微妙の寶珠有り、以て映飾と爲す。一一の寶珠に八萬四千の光有り。一一の光、八萬四千の異種の金色を作す。一一の金色安樂寶土に遍じ、處處に變化して各異相を作す。或は金剛臺と爲り或は眞珠網と作り、或は雜化雲と作つて、十方面に於て意に隨ひて變現して、佛事を化作す。是の如き等の事、數量に出過せり。是故に無量大寶王、微妙淨華臺と言ふ。

【三六】「相好の光一尋にして、色像群生に超えたり。」此二句をば莊嚴身業功德成就と名く。佛本何が故に此の如きの身業を莊嚴したまへる。有佛身を見たまふに、一丈の光明を受く、人身の光に於て甚だ超絶ならず。轉輪王の相好の如き、亦大いに同じ。提婆達多

に比す。

【眼識】 如來身に比す。【他の縁】 佛を想はざるに比す。

滅する所唯一なり。阿闍世王、茲を以て亂を懷き、刪闍耶等をして敢て蟻蟻の如くならしむることを致す、或は此の如きの類なり。是故に此の如きの身業を莊嚴したまへり。此間の話訓を案するに六尺を尋と曰ふ。觀無量壽經に言へるが如し。阿彌陀如來の身の高さ六十萬億那由他恆河沙由旬なり。佛の圓光は百億三千大千世界の如し。譯者尋を以て言ふ、何ぞ其れ晦きや。里舎の間の人縦横長短を簡ばす、或く横に兩手臂を舒ぶるを尋と爲すと謂へり。若し譯者或は此類を取りて用ひて阿彌陀如來の舒べたまへる臂に準じて言はんと爲るが故に、一尋と稱せば圓光亦僅り六十萬億那由他恆河沙由旬なるべし。是故に相好光一尋、色像超群生と言ふ。問うて曰はく、觀無量壽經に言はく、諸佛如來は是れ法界の身なり、一切衆生の心想の中に入りたまへり。是故に汝等心に佛を想ふ時、是心即ち是れ三十二相八十隨形好なり。是心佛を作す。是心是れ佛なり。諸佛の正遍知海は心想より生ず。是義云何。答へて曰はく、身は集成に名け、界は事別に名く。眼界縁の如きは根と色と空と明と作意との互の因縁より生ずるを名けて眼界と爲す。是眼は但自ら己が縁に行して他縁に行ぜず。事別なるを以ての故に。耳鼻等の界も亦是の如し。諸佛如來は法界身と言ふは、法界は是れ衆生の心法なり。心能く世間出世間の一切の諸法を生ずるを以ての故に、心を名けて法界と爲す。法界能く諸の如來の相好身を生ずること、亦色等の能く眼識を生ずるが如し。是故に佛身を法界身と名く。是身他の縁を行ぜず、是故に一切衆生の心想の中に入りたまへり、心想佛時、是心即ち三十二相八十隨形好とは、當に衆生の心



【一切衆生】能觀の一切衆生等。

【火は木より出づ】是心作佛に喩ふ。

【木は火の爲に燒かれて】是心是佛に喩ふ。

【七】第三口業功德を明す。

【瞿曇】徳を論ぜずして直ちに姓を以て言へり。

【八】第四心業功德を明す。

【此は黒此は白】不善を黒、善法を白と名く。

【下法】聲聞法。緣覺法。

に佛を想ふ時、佛身相好衆生の心中に顯現するなり。譬へば水清ければ色像現じて、水と像と一ならず異なるが如し。故に佛の相好身、即ち是れ心想事成なりと言ふなり。是心作佛と言は、心能く佛を作るなり。是心是佛とは、心の外に佛無し。譬へば火は木より出でて、火木を離るることを得ず。木を離れざるを以ての故に則ち能く木を燒く。木は火の爲に燒かれて木即ち火と爲るが如し。諸佛正遍知海は心想事成より生ずとは、正遍知とは眞正は法界の如くにして而も知るなり。法界無相なるが故に諸佛無知なり。無知を以ての故に知らずといふこと無きなり。無知にして而も知るは是れ正遍知なり。是知は深廣にして測量すべからず、故に海に譬ふるなり。

【三七】「如來微妙の聲、梵の響十方に聞ゆ。」此二句をば莊嚴口業功德成就と名く。佛本何が故に此莊嚴を興したまへる。有如來を見たまふに名尊からざるに似たり。外道、人を輔して、車を推く人、瞿曇姓と稱するが如し。成道の日聲唯梵天に徹するが如し。是故に願じて言はく、「我成佛せんに妙聲、退に布き、聞く者をして忍を悟らしめん」と。是故に如來微妙聲、梵響聞十方と言ふ。

【三八】「地水火風虚空に同じて分別無し。」此二句をば莊嚴心業功德成就と名く。佛本何が故に此莊嚴を興したまへる。有如來を見たまふに、法を説きて此は黒此は白、此は不黒不白、下法申法上法、上上法と云へり。是の如き等の無量、差別の品有りて分別有るに似たり。是故に願じて言はく、「我成佛せんに、地の荷負するに輕重の殊無きが如く、水の潤長



【上法】 菩薩法。  
【内法】 佛乘法。  
【外法】 内證正體智、利他後得智。

【三】 第五大衆功徳を明す。

【說法輪下】 如來法を説きて、物心を化轉するに法に於て自在なることに輪王の輪寶の運轉無礙なるが如きをいふ。

【三〇】 第六上首功徳を明す。

【強梁】 老子の徳經に強梁なる者は其死を得ずと。廢佛を請し……有るに依つて毘羅然國に往つて王娛樂の爲に外事を容れず食ひて一夏安居せ

するに菴せうなり草 菴くわつなり瑞草草の異い無なきが如ごとく、火ひの成じやう就じゆするに芳かう臭しゆうの別べつ無なきが如ごとく、風かぜの起おこ發はつするに眠めん悟ごの差さ無なきが如ごとく、空くうの苞ほう受じゆするに悶もん塞さいの念ねん無なきが如ごとく、之これを内うちに得えて物ものを外ほかに安やすんじ、虚きよにして往ゆき、實みちて歸へる、是こゝに於おいて息いきみぬ」と。是こゝに於おいて同どう地ち水すい火くわ風ふう、虚きよ空くう無な分ぶん別べつと言いふ。

【一】 『天人不動の衆は、清淨の智海より生ず。』此二句をば莊嚴大衆功德成就と名く。佛本何が故に此莊嚴を起したまへる。有如來を見たまふに、説法輪下の有ゆる大衆の諸根性欲種種不同なり。佛の智慧に於て、若は退し若は没す。等しからざるを以ての故に、衆て純淨ならず。所以に願を興したまふ。『願くば我成佛せんに、有ゆる天人皆如來の智慧清淨海より生ぜしめん』と。海と言は、佛の一切種智深廣にして崖無し。二乘雜善中下の死尸を宿さず、之を喻ふるに海の如し。是故に天人不動衆、清淨智海生と言へり。不動と言は、彼天人大乗の根を成就して傾動すべからざるなり。

【三〇】 『須彌山王の如く、勝妙にして過ぐる者無し。』此二句をば莊嚴上首功德成就と名く。佛本何が故に此願を起したまへる。有如來を見たまふに衆中に或は強梁の者有り、提婆達多が流比の如し。或は國王有り、佛と治を並べて甚だ佛に推することを知らず。或は佛を請じて他縁を以て廢忘すること有り。是の如き等の上首の力成就せざるに似たること有り。是故に願じて言はく、『我佛爲らん時、願くば一切の大衆能く心を生じて、敢て我と等しきこと無く、唯一の法王にして更に俗王無からん』と。是故に如須彌山王、勝妙無過者と言ふ。

り。

【三】第七主功德を明す。

【主功德】彼上の大衆恭敬倦く無きが故に主と名く。

【十四の難】世界及び我は常なりや無常なりやに就いて十四難あり。

【居迦離……三たび受けず】居迦離ある時惡さまに身子、目連のまに淨を行ぜしを佛に告ぐ佛謗することを知りて三たび呵せども徳かず居迦離遂に地獄に墜つ。【第八不虛作住持功德を明す。】

【上の如し】器世

【三】「天人丈夫の衆、恭敬して繞りて瞻仰す。」此一句をば莊嚴主功德成就と名く。佛本何が故に此莊嚴を起したまへる。有佛如來を見たまふに、大衆有りて雖も衆中に亦甚だ恭敬せざる有り。一の比丘釋迦牟尼佛に語るが如く、若し我與に十四の難を解せずんば、我當に更に餘道を學すべし。亦居迦離舍利弗を謗せしを佛三たび語りたまひしに而も三たび受けざるが如し。又諸の外道の華、假に佛衆に入りて而して常に佛の短を伺求するが如し。又第六天の魔、常に佛の所に於て諸の留難を作すが如し。是の如き等の種種の不恭敬の相有り。是故に願じて言はく、「我成佛せんに、天人大眾恭敬して倦くこと無からしめん」と。但し天人と言ふ所以は淨土には女人及び八部鬼神無きが故なり。是故に天人丈夫衆恭敬繞瞻仰と言ふ。

【三】佛の本願力を觀するに、遇うて空しく過る者無し。能く速に功德大寶海を満足せしむ。此四句をば莊嚴不虛作住持功德成就と名く。佛本何が故に此莊嚴を起したまへる。有如來を見たまふに、但聲聞を以て僧と爲す、佛道を求むる者無し。或は佛に値へども、而も三塗を免れざる有り。善星、提婆達多、居迦離等是なり。又人佛の名號を聞いて無上道心を發せども、惡因縁に遇うて退して聲聞辟支佛地に入る者あり。是の如き等の空しく過ぐる者退劣する者有り。是故に願じて言はく、「我成佛せん時我に値遇する者をして、皆速疾に無上の大寶を満足せしめん」と。是故に觀佛本願力、遇無空過者、能令速満足、功德大寶海と言ふ。住持の義は上の如し。佛の莊嚴八種の功德を觀すること之れ上に訖りぬ。

問主功德成就を指す。【三】以下第四まで菩薩の功德觀を明す。

【海の流を…：情無きが如し】法を聽いて厭足無きこと海の衆流を呑むが如し。

【二】第一遍至十

淨土論註卷上

【三】次に安樂國の諸の大菩薩の四種の莊嚴功德成就を觀ず。問うて曰はく、「如來の莊嚴功德を觀するに何の國少する所有つて、復菩薩の功德を觀することを須ふるや。」答へて曰はく、「明君有れば則ち賢臣有るが如し。堯舜の無爲と稱せる是れ其比なり。若し但如來の法王のみ有つて、大菩薩の法臣無からしめば、翼讚の道に於て豈滿つと云ふに足らんや。亦薪積少ければ、則ち火大ならざるが如し。經に言ふが如くんば、阿彌陀佛國に無量無邊の諸の大菩薩有り、觀世音大勢至等の如し。皆常に一生に他方に於て、次で佛處を補ふべし。若し人稱名憶念する者、歸依する者、觀察する者、「法華經」普門品に説くが如くんば、願として滿ぜずといふこと無し。然るに菩薩の功德を愛樂するは海の流を呑んで、止足の情無きが如し。亦釋迦牟尼如來の如き、一の口闍の比丘の「吁誰か功德を愛して我爲に鉢を維ぐ」と言ふを聞きたまふ。爾時、如來禪定より起ち來つて、其所に到つて語つて言はく、「我福德を愛す」と。遂に其が爲に鉢を維きたまへり。爾時、失明の比丘、暗に佛の語聲を聞いて驚喜交集して佛に白して言さく、「世尊、世尊の功德は猶未だ滿たざるや。」佛報へて言はく、「我功德圓滿せり。復須つべき所無し、但我此身は功德より生ぜり。功德の恩分を知るが故に、是故に愛すと云ふ」と。所聞の如く佛の功德を觀するに、實に願として充たすといふこと無し。復菩薩の功德を觀する所以は、上の如く種種の義有るが故のみ。」

【四】「安樂國は清淨にして、常に無垢輪を轉ず。化佛菩薩の日は、須彌の住持するが



方説法利生章を明す。

【無垢輪】佛地の功德にして習氣煩惱の垢無きをいふ

【一切の諸佛】上求菩提成佛國上。【及び衆生】下化衆生衆生成就。

【五】第二一念一時供佛利生章を明す。

【一念及び一時】一念とは時の極短にして他時を隔てざるをいひ、一時とは同時の義、他時に移らずして、周廻するが故に名

如し。佛本何が故に此莊嚴を起したまへる。有佛土を見たまふに但是れ小菩薩にして十方世界を於て廣く佛事を作す能はず。或は但聲聞人天にして利する所狭小なり。是故に願を興したまふ、「願くば我國中に無量の菩薩衆有りて、本處を動ぜずして遍く十方に至りて種種に應化し、如實に修行して常に佛事を作さん」と。譬へば日、天上に在りて而も影百川に現するが如し。日豈來らんや、來らざらんや。『大集經』に言ふが如し、「譬へば人有りて善く堤塘を治めて、其所宜を量りて水を放つ時に及んで心力を加へざるが如し。菩薩も亦是の如し。先づ一切の諸佛及び衆生の供養に應じ教化に應ずべき種種の堤塘を治すれば三昧に入るに及んで身心動ぜず、如實に修行して常に佛事を作す」と。如實修行とは常に修行すと雖も實に修行する所無きなり。是故に安樂國清淨、常轉無垢輪、化佛菩薩日、如須彌住持と言ふ。

【三五】無垢莊嚴の光、一念及び一時に、普く諸佛の會を照し、諸の群生を利益す。佛本何が故に此莊嚴を起したまへる。有如來の眷屬を見たまふに、他方の無量の諸佛を供養せんと欲し、或は無量の衆生を教化せんと欲するに、此に没し彼に出でて、南を先にし北を後にし、一念一時を以て光を放つて、普く照し遍く十方世界に至りて衆生を教化する能はず。出沒前後の相有るが故なり。是故に願を興したまふ、「願くば我佛土の諸大菩薩一念の時頃に於て遍く十方に至りて種種の佛事を作さん」と。是故に無垢莊嚴光、一念及び一時、普照諸佛會、利益諸群生と言へり。問うて曰はく、「上の章に身動搖せずして而も遍く十方に

【三】第三供讚彼佛無分別心章を明す

至ると云ふ。動ぜずして而も至る、豈是れ一時の義に非ずや。此と若爲が差別せん。答へて曰はく、「上には但不動にして而も至ると言ふ。或は前後有るべし。此には無前無後と言ふ。是を差別と爲す、亦是れ上の不動の義を成ず。若し一時ならずば則ち是れ往來なり。若し往來有らば則ち不動に非ず。是故に上の不動の義を成ぜんが爲の故に、須らく一時を觀すべし。」

【六】「天の樂華衣と妙香等を雨らして、諸佛の功德を供養し讚すれども、分別の心有ること無し。」佛本何が故に此莊嚴を起したまへる。有佛土の菩薩天人を見たまふに、志趣廣からず、遍く十方無窮の世界に至りて、諸佛如來の大衆を供養する能はず。或は己が土の穢濁なるを以て敢て淨郷に向詣せず。或は所居の清淨なるを以て穢土を鄙薄す。此の如き等の種種の局分有るを以て、諸佛如來の所に於て、周遍し供養して、廣大の善根を發起する能はず。是故に願じて言はく、「我成佛の時に、願くば我國土の一切の菩薩聲聞天人大衆遍く十方一切の諸佛の大會の處所に至りて、天樂天華天衣天香を雨らして巧妙の辯辭を以て諸佛の功德を供養し讚歎せん」と。穢土の如來の大慈謙忍を數すと雖も、佛土に雜穢の相有るを見ず。淨土の如來の無量の莊嚴を數すと雖も、佛土に清淨の相有るを見ず。何を以ての故に。諸法等しきを以ての故に。諸の如來に等し。是故に諸佛如來を名けて等覺と爲す。若し佛土に於て優劣の心を起さば、假使如來を供養すとも非法の供養なり。是故に雨天樂華衣、妙香等供養、讚諸佛功德、無有分別心と言ふ。



【三七】 第四無三寶  
處住持三寶章を明  
す。

【三七】 『何等の世界なりとも、佛法功德寶無くんば、我皆往生して、佛法を示すこと佛の如くならんと願せん。』佛本何が故に此願を起したまへる。有軟心の菩薩を見たまふに、但有佛の國土の修行を樂ひて慈悲堅牢の心無し。是故に願を興したまふ。願くば我成佛せん時、我土の菩薩は皆慈悲勇猛に堅固の志願有つて能く清淨の土を捨て、他方の佛法僧無き處に至りて、佛法僧寶を住持し莊嚴して示すこと佛有すが如く、佛種をして處處に斷えざらしめん』と。是故に何等世界無、佛法功德寶、我願皆往生、示佛法如佛と言へり。菩薩の四種の莊嚴功德成就を觀すること之を上に訖んぬ。次下の四句は是れ廻向門なり。

『我論を作り偈を説く。願くば彌陀佛を見たてまつり、普く諸の衆生と共に、安樂國に往生せん。』此四句は是論主の廻向門なり。廻向とは己が功德を廻して普く衆生に施して、共に阿彌陀如來を見たてまつり、安樂國に生ぜんとなり。

【三八】 『無量壽修多羅の章句、我偈頌を以て總説し竟んぬ。』問うて曰はく、『天親菩薩廻向章の中に、普く諸の衆生と共に安樂國に往生せんと言へるは、此れ何等の衆生と共なることを指すや。』答へて曰はく、『王舍城所説の『無量壽經』を案するに、佛阿難に告げたまはく、『十方恆河沙の諸佛如來、皆共に無量壽佛の威神功德の不可思議なるを稱歎したまふ。』諸の衆生有りて其名號を聞いて信心歡喜し、乃至一念、至心に廻向して、彼國に生ぜんと願せば、即ち往生を得て不退轉に住す。唯五逆と正法を誹謗するをを除く』と。此を案じて言はく、『一切の外凡夫の人皆往生するを得ん』と。又『觀無量壽經』の如きは九品の往生有

【二六】 以下八番の  
問答を決す。

り、下品下生は或は衆生有りて不善業の五逆十惡を作り、諸の不善を具せん、此の如きの愚人、惡業を以ての故に惡道に墮し多劫を経歴して苦を受くること窮まるべし。此の如きの愚人、命終の時に臨んで善知識の種種に安慰して、爲に妙法を説き教へて念佛せしむるに遇はん。此人苦に逼められて念佛に違あらず。善友告げて言はく、「汝若し念すること能はずんは應に無量壽佛と稱すべし」と。是の如く至心に聲をして絶えざらしめて、十念を具足して南無無量壽佛と稱せん。佛の名を稱するが故に、念念の中に於て八十億劫の生死の罪を除き、命終の後に金蓮華の猶し日輪の如くにして、其人の前に住するを見、一念の頃の如く即ち極樂世界に往生することを得ん。蓮華の中に於て十二大劫を滿して蓮華方に開けん。當に此を以て五逆、觀世音大勢至、大悲の音聲を以て、其が爲に廣く諸法實相の罪を除滅するの罪を償ふべし。聞き已りて歡喜して時に應じて則ち菩提の心を發す。是を下品下生の者と名く。此經を以て證するに明かに知んぬ、下品の凡夫は但正法を誹謗せざれば、信佛の因縁もて皆往生するを得しむと。問うて曰はく、「無量壽經」には、「往生を願する者は皆往生することを得、唯五逆と正法を誹謗することを除く」と。「觀無量壽經」には、「五逆十惡を作り諸の不善を具するも亦往生するを得」と言へり。此二經云何が會せんや。答へて曰はく、「一經には以て二種の重罪を具す。一には五逆、二には誹謗正法なり、此二種の罪を以ての故に、所以に往生するを得ず。一經には但十惡五逆等の罪を作ると言うて、正法を誹謗するとは言はず。正法を誹せざるを以ての故に、是故に生ずるを得。問うて曰はく、

假使一人五逆罪を具すとも、而も正法を誹謗せざるをば、經に生ずるを得と許す。復一人有りて但正法を誹謗して、而も五逆の諸罪無くして往生を願はん者は生ずるを得んや不や。答へて曰はく、「但正法を誹謗して更に餘の罪無しと雖も、必ず生ずるを得ず。何を以てか之を言ふ。經に言はく、「五逆の罪人阿鼻大地獄の中に墮して具に一劫の重罪を受く。正法を誹謗する人は阿鼻大地獄の中に墮して、此劫若し盡きぬれば復轉じて他方の阿鼻大地獄の中に至る。是の如く展轉して百千の阿鼻大地獄を經」と。佛出づるを得る時節を記したまはず。正法を誹謗するの罪極めて重を以ての故に。又正法とは即ち是れ佛法なり。此愚癡の人既に誹謗を生ず、安んぞ佛土に生ぜんと願するの理有らん。假使但彼土の安樂を貪して、而して生ぜんと願する者も、亦水に非ざるの水、烟無きの火を求むるが如し。豈理を得る有らんや。「問うて曰はく、「何等の相か是れ誹謗正法なる。」答へて曰はく、「若し佛無く、佛の法無く菩薩無く、菩薩の法も無しと言ふ。是の如き等の見、若は心に自ら解し、若は他に從うて受け、其心を決定するを皆誹謗正法と名く。」問うて曰はく、「是の如き等の計は但是れ己が事なり。衆生に於て何の苦惱有りてか五逆の重罪に踰ゆるや。」答へて曰はく、「若し諸佛菩薩、世間出世間の善道を説いて衆生を教化したまふこと無くんば、豈仁義禮智信有るを知らんや。是の如きの世間の一切の善法を皆斷じ、出世間の一切の賢聖を皆滅す。汝但五逆罪の重爲るを知りて而も五逆罪は正法無きより生ずるを知らず。是故に誹正法の人其罪最も重し。」問うて曰はく、「業道經」に言はく、「業道は秤の如し、重き者先づ牽

【一は實、一は虚なり】  
 起り、信樂は非理より生ず、非理に依つて生ずるが故に虚なり。  
 實なり。

く。觀無量壽經に言ふが如く、人有つて五逆十惡を造り、諸の不善を具して惡道に墮し多劫を経歴して無量の苦を受くべし。命終の時に臨んで善知識の教に遇うて、南無無量壽佛と稱へ、是の如く至心に聲をして絶えざらしめて、十念を具足すれば便ち安樂淨土に往生するを得と。即ち大乘正定の聚に入りて畢竟して退せず、三塗の諸の苦と永く隔つ。先づ牽くの義、理に於て如何、又曠劫より已來備に諸の行を造る。有漏の法は三界に繫屬せり。但十念阿彌陀佛を念するを以て便ち三界を出でば、繫業の義復云何が欲せんや。一答へて曰はく、一汝五逆十惡の繫業等を重と爲し、下品の人の十念を以て輕と爲して、罪の爲に牽れて先づ地獄に墮して三界に繫在すべしと謂ふは、今當に義を以て輕重の義を校量すべし。心に在り緣に在り決定に在りて、時節の久近多少には在らざるなり。云何が心に在る。彼造罪の人は自ら虚妄顛倒の見到依止して生じ、此十念の者は、善知識の方便安慰に依つて、實相の法を聞いて生ず。一は實、一は虚なり。豈相比するを得んや。譬へば千歳の闇室に光若し暫くも至れば即便明朗なるが如し。闇室に在ること千歳にして去らずと言ふを得んや。是を在心と名く。云何が在緣、彼造罪の人は自ら妄想の心に依止して煩惱虚妄の果報の衆生に依りて生じ、此十念の者は無上の信心に依止して阿彌陀如来の方便莊嚴、眞實清淨、無量の功德の名號に依りて生ず。譬へば人有つて毒の箭に中られ筋を截り骨を破らるるに滅除藥の鼓を聞けば即ち箭出で毒除くが如し。首楞嚴經に言は名けて滅除と曰ふ。若し闘戰の時用ひて以て鼓に塗れば鼓聲を聞く者は、箭出で毒除かるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。首楞嚴三昧に住し其名を聞く者、三毒の箭自然に拔出すと。豈彼



箭深く毒廣しければ、鼓の音聲を聞くとも箭を抜き毒を去ること能はずと言ふを得べけんや。是を在縁と名く。云何が決定に在る。彼造罪の人は有後心有聞心に依止して生ず。此十念の者は無後心無聞心に依止して生ず。是を決定と名く。三義を校量するに十念は重し、重き者先づ牽きて能く三有を出づ。兩經一義なるのみ。問うて曰はく、「幾くの時をか名けて一念と爲すや。」答へて曰はく、「百一の生滅を一刹那と名け、六十刹那を名けて一念と爲す。此中に念と云ふは此時節を取らざるなり。但阿彌陀佛を憶念すと云ふは、若し總相若し別相、所觀の縁に隨つて心に他相無く、十念相續するを名けて十念と爲す。但名號を稱することも亦復是の如し。問うて曰はく、「心若し他縁せば之を攝し、還さしめて念の多少を知るべし。但多少を知らば復無間に非ず。若し凝心注想せば復何に依りてか念の多少を記することを得べけんや。」答へて曰はく、「經に、十念と言ふは、業事成辨を明すのみ。必ずしも頭數を知るを須ひざれと。蟪蛄春秋を識らずと言ふが如し。是豈豈朱陽の節を知らんや。知る者、之を言ふのみ。十念業成とは是れ亦神に通ずる者、之を言ふのみ。但念を積み相續して他事を縁ぜざれば便ち罷みぬ。復何の假有つてか、念の頭數を知るを須ひんや。若し必ず知るを須ひば亦方便有り。必ず口授を須ひ、之れ筆點に題するを得ざれ。」

【蟪蛄春秋を識らず】 莊子に蟪蛄は夏蟬なり夏生じて秋死す故に春秋を知らず。  
 【朱陽】 春を青陽と云ひ、夏を朱陽と云ふ。

無量壽經優婆塞具足戒菩薩造并註 卷上 終

無量壽經優婆提舍願生偈婆藪槃頭

菩薩造并註 卷下

沙門曇鸞註解

【一】 解義を明す

【一】「論に曰はく、」下は此は是れ解義分なり。此分の中、義に十重有り。一には願偈の大意、二には起觀生信、三には觀行の體相、四には淨入願心、五には善巧攝化、六には離菩提障、七には願菩提門、八には名義攝對、九には願事成就、十には利行滿足なり。論とは議なり。言は偈の所以を議するなり。曰とは詞なり、下の諸句を指すなり、是は偈を議釋するの詞なり、故に論曰と言ふ。

【二】 第一願偈の大意を明す。

【一】願偈の大意とは、「此願偈には何の義をか明す。彼安樂世界を觀じて阿彌陀如來を見たてまつりて彼國に生ぜん」と願ずることを示現するが故なり。」

【三】 第二起觀生信を明す。

【二】起觀生信とは此分の中に又二重有り。一には五念力を示す。二には五念門を出す。五念力を示すとは「云何が觀じ、云何が信心を生ずる。若し善男子善女人五念門を修して行成就すれば、畢竟じて安樂國土に生じて、彼阿彌陀佛を見ることを得。」五念門を出でずとは「何等か五念門なる。一には禮拜門、二には讚歎門、三には作願門、四には觀察門

【起觀生信】 依正二十九種を觀じて淨信を生じて彼國に生ずと。  
【善男子善女人】

勇健の義を男、柔  
和の義を女、紹繼  
の義を子、仁信の  
義を人となす。但  
し男女に就て別號  
を立つ。皆是佛子  
の異名なり。

【身業】身口意相  
應の身業なり。

【十名】如來の別  
號、應供、等正覺、  
明行足、善逝、世  
間解、無上士、調  
御丈夫、天人師、  
佛、世尊。

【結使】煩惱の異  
名。

【晝三時、夜三時】  
晝朝、日中、日没、  
初夜、中夜、後夜。

【口業】身口意相  
應の口業なり。

五には廻向門なり。門とは入出の義なり。人の門を得て則ち入出無礙なるが如し。前より四念は是れ安樂淨土に入るの門なり。後の一念は是れ慈悲教化に出づるの門なり。云何が禮拜する。身業に阿彌陀如來の應、正遍知を禮拜したてまつる。諸佛如來には徳に無量有り、徳無量なるが故に徳號も亦無量なり。若し具に談ぜんと欲せば紙筆にも載ること能はざるなり。是を以て請經に或は十名を擧げ或は三號を騰ぐ。蓋し至宗を存するのみ。豈此に盡さんや。言ふ所の三號は即ち此如來、應、正遍知なり。如來とは法相の如く解し、法相の如く説き、諸佛の安穩道より來りたまへるが如くんば、此佛も亦是の如く來りて更に後有の中に去らざるが故に如來と名く。應とは應供なり。佛は結使除盡して一切智慧を得て、一切天地の衆生の供養を受くるに應ぜり、故に應と曰ふなり。正遍知とは一切の諸法は實に不壞の相に不増なり不減なりと知る。云何が不壞なる。心行處滅し言語道過せり。諸法は涅槃の相の不動なるが如し、故に正遍知と名く。無礙光の義は前の中の解するが如し。『彼國に生ぜんとの意を爲すが故に。』何が故に此を言ふとなれば、菩薩の法は常に晝三時、夜三時を以て十方一切の諸佛を禮す。必ずしも願生の意あらず。今は應に常に願生の意を作すが故に、阿彌陀如來を禮したてまつるべし。云何が讚歎する。口業に讚歎したてまつる。讚とは讚揚なり、歎とは歌歎なり、讚歎は口に非ざれば宣へず、故に口業と曰ふなり。彼如來の名を稱すれば、『彼如來の光明智相の如く、彼名義の如く、如實に修行して相應せんと欲するが故に。』稱彼如來名とは、謂く無礙光如來の名を稱せよとなり。如彼如來光

【佛の光明】は智慧の相なり。佛の光明は佛智より生ず。故に光明智相と云ふ。智とは後得の大悲智なり。

【爲物身】佛能く虚妄分別の衆生を度するが故に爲物といふ。報身なり。

明智相とは、佛の光明は是れ智慧の相なり。此光明十方世界を照すに障礙有ること無し。能く十方衆生の無明の黑闇を除くこと、日月珠光の但空穴の中の闇を破するが如きには非ざるなり。如彼名義如實修行相應とは、彼無礙光如來の名號は能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を滿たす。然るに稱名憶念すれども無明自在りて所願を滿たざる者有り。何となれば如實に修行せずして名義と相應せざるに由るが故なり。云何なるをか如實に修行せずして名義と相應せずとならば、謂く如來は是れ實相身、是れ爲物身なりと知らざればなり。又三種の不相應有り。一には信心淳からず、存するが若く、亡きが若きが故に。二には信心一ならず、決定無きが故に。三には信心相續せず、餘念間つるが故に。此三句展轉して相成ず。信心淳からざるを以ての故に決定無し。決定無きが故に念相續せず。亦可し、念相續せざるが故に決定の信を得ず。決定の信を得ざるが故に心に念相續せず。亦相違するを如實修行相應と名く。是故に論主、建に我一心と言へり。問うて淳からず。此と相違するを如實修行相應と名く。是故に論主、建に我一心と言へり。問うて曰はく、「名をば法の指と爲す、指もて月を指すが如し。若し佛の名號を稱するに便ち願を滿ずることを得るは、月を指さすの指、應に能く闇を破すべし。若し月を指さすの指、闇を破すること能はずんば、佛の名號を稱すとも亦何ぞ能く願を滿せんや。」答へて曰はく、「諸法萬差なり、一概すべからず。名の法に即する有り、名の法に異なる有り。名の法に即すとは諸身菩薩の名號、般若波羅蜜及び陀羅尼の章句、禁呪の音辭等はなり。呪を禁ふ爵に「日出東方乍赤乍黃等」と云ふ句の如し。假使西亥に禁を行じて日出に關らざれども



【五兵】五兵とは、  
戈、矛、戟、楯、箭、  
夷矛なり。歩卒の  
五兵は夷矛無くし  
て弓矢あり。

【心に常に……作願し】これ三業相應の意業なり。

腫差ゆることを得。又帥に行くに陳に對うて但一切の齒の中に「臨兵闘者皆陳列在前行」と誦するが如し。此九字を誦すれば五兵の中らざる所なり、抱朴子に之を要道と謂ふ者なり。又轉筋を苦しむ者は木瓜を以て火に對て之を熨せば則ち愈ゆ。復人有りて但木瓜の名を呼ぶに亦愈ゆ。吾身に其効を得たるなり。斯の如きの近事世間に共に知れり。況んや不可思議の境界なる者をや。滅除業を敷に塗るの喻復是一事なり。此喻は已に前に彰しぬ。故に重ねて引かず。名の法に異なる有りといふは指もて月を指すが如き等の名なり。云何が作願する。心に常に、一心に専ら念じて畢竟じて安樂國土に往生せんと作願し、如實に奢摩他を修行せんと欲するが故に。「奢摩他を譯して止と曰ふ。止とは心を一處に止めて惡を作さざるなり。此譯名は乃ち大意に乖かざれども、義に於て未だ満たず。何を以てか之を言ふとなれば、心を鼻端に止むるが如きをも亦名けて止とす。不淨觀の食を止め慈悲觀の瞋を止め因緣觀の癡を止む、是の如き等をも亦名けて止と爲す。人の將に行かんとして行かざるが如きをも亦名けて止と爲す。是に知んぬ、止の語浮漫して正しく奢摩他の名を得ざるなり。榕栢榆柳の如きを皆木と名くと雖も、若し但木とのみ云ふときは安んぞ榆柳を得んや。奢摩他を止と云ふは今三義有り。一には一心に専ら阿彌陀如來を念じて、彼土に生ぜんと願すれば、此如來の名號及び彼國土の名號、能く一切の惡を止む。二には彼安樂土は三界の道に過ぎたり。若し人亦彼國に生ずれば自然に身口意の惡を止む。三には阿彌陀如來正覺住持の力をして自然に聲聞辟支佛を求むる心を止む。此三種の止は如來如實の功

【九想】壞法の人は九想を修す。一、眼想、二、壞想、三、血輪想、四、濃想、五、青淤想、六、鹹想、七、散想、八、骨想、九、燒想。

【未證淨心の……】七地已還を未證淨心と名く、此位の菩薩八地以上の平等法身を證す。八地以上を菩薩を名けて淨心といふ。即ち自利の中の無功用な名けて上地の菩薩を名けて利他の中の無功用なり。寂滅の眞如なり。

德より生ず。是故に欲如實修行奢摩他故と言ふ。云何が觀察する、智慧もて觀察し、正念に彼を觀じて如實に毘婆舍那を修行せんと欲するが故に。『毘婆舍那を譯して觀と曰ふ。但し汎く觀と言はば義も亦未だ滿たず。何を以てか之を言ふとなれば、身の無常苦空無我九想等を觀するが如き皆名けて觀とす。亦上の木の名の椿栢を得ざるが如し。毘婆舍那を觀と云ふことは亦二義有り。一には此に在りて想を作して彼三種の莊嚴功德を觀す。此功德如實の故に修行する者も亦如實の功德を得。如實の功德とは決定して彼土に生ずるを得るをいふ。二には亦彼淨土に生ずるを得て即ち阿彌陀佛を見たてまつれば、未證淨心の菩薩畢竟して平等法身を證するを得。淨心の菩薩と上地の菩薩と畢竟して同じく寂滅平等を得。是故に欲如實修行毘婆舍那故と言ふ。故に一彼觀察に三種有り、何等か三種なる、一には彼佛の國土の莊嚴功德を觀察し、二には阿彌陀佛の莊嚴功德を觀察し、三には彼諸の菩薩の莊嚴功德を觀察す。心に其事を緣するを觀と曰ひ、觀心分明なるを察と曰ふ。云何が廻向する。一切苦惱の衆生を捨てずして心に常に作願し、廻向するを首と爲して大悲心を成就するを得るが故に。廻向に二種の相有り。一には往相、二には還相なり。往相とは己が功德を以て一切衆生に廻施して、共に彼阿彌陀如來の安樂淨土に往生せんと作願するなり。還相とは彼土に生じりて奢摩他毘婆舍那を得て方便力成就すれば、生死の稠林に廻入して一切衆生を教化して、共に佛道に向はしむるなり。若は往若は還、皆衆生を抜いて生死海を渡さんが爲なり。是故に廻向爲首得成就大悲心故と言ふ。

【四】第三觀察の體相を明す。

【摩尼如意】摩尼は寶珠の體相なり、如意珠は寶中の首なるもの、故に寶珠といふ。

【摩尼如意寶珠】摩尼如意寶珠は天上の勝寶、狀は芥菜の如くにして大功能有り、能く病患を除く、意に稱うて寶を出す、蓋し是色法尙ほ能く此心神の靈妙なるが如し、何ぞ法を具せざらんや。

【四】觀察の體相とは、此分の中に、二の體有り、一には器體、二には衆生體なり。初器界分の中に又三重有り。一には國土の體相、二には自利利他を示現す。三には第一義諦に入る。國土の體相とは、「云何が彼佛の國土の莊嚴功德を觀察する。彼佛の國土の莊嚴功德とは、不可思議力を成就したまへるが故に、彼摩尼如意寶珠の如きの相似相對の法なるが故に。」不可思議力とは總じて彼佛の國土の十七種の莊嚴功德力を得て思議すべからずといふことを指さすなり。諸經に統べて言はく、五種の不可思議有り、一には衆生多少不可思議、二には業力不可思議、三には龍力不可思議、四には禪定力不可思議、五には佛法力不可思議なり。此中の佛土の不可思議に一種の力有り。一には業力、謂く法藏菩薩の出世の善根、大願業力の所成なり。二には正覺の阿彌陀法王善住持力の所攝なり。此に不可思議とは下の十七種の如くんば一一の相皆不可思議なり。文に至りて當に釋すべし。彼摩尼如意寶珠相似相對の如きとは、彼摩尼如意寶珠を借りて安樂佛土の不可思議の性を示すなり。諸佛入涅槃の時方便力を以て碎身の舍利を留めて以て衆生に福す。衆生の福盡くれば、此舍利變じて摩尼如意寶珠と爲る。此珠多くは大海の中に在り、大龍王以て首の飾と爲す。若し轉輪聖王世に出づれば慈悲方便を以て能く此珠を得て、閻浮提に於て大饒益を作す。若し衣服飲食燈明樂具を須ふれば意の所欲に隨つて種種の物あり。時に王便ち潔齋して珠を長竿の頭に置いて願を發して言はく、若し我實に是れ轉輪王ならば、願くば寶珠此の如きの物を雨らして、若は一里に遍じ若は十里若は百里我心願に隨へ。爾時、即便虚空

の中なかに於おいて種種しんしゆんの物ものを雨あめらして、皆みな所ところ須すに稱なぞうて天下てんかの一切いっせつの人の願ねんを満足まんじやくす。此この寶ほう性の力ちからを以もつての故ゆゑなり、彼かの安樂あんらく佛ぶつ土ども亦また是こゝの如ごとし、安樂あんらくの性しやう種種しんしゆん成就じゆじゆせむを以もつての故ゆゑに。相似さうじ相對さうたいとは彼かの寶珠ほうしゆの力ちから衣食いじやくを求もとむる者ものには、能たく衣食いじやく等の物ものを雨あめらして、求もとむる者ものの意いに稱なぞふ、是こゝれ求もとめざるには非あらず。彼かの佛ぶつ土どは則すなはち然しからず。性しやう満足まんじやくし成就じゆじゆするが故ゆゑに乏せうする所ところ無なし。彼かの性を片へん取しゆして喩たとへ、故ゆゑに相似さうじ相對さうたいと言いふ。又また彼かの寶ほうは但ただ能たく衆生しゆじやうに衣食いじやく等の願ねんを與あたへて、衆生しゆじやうに無む上道じやうじやうの願ねんを與あたふる能たはず。又また彼かの寶ほうは但ただ能たく衆生しゆじやうに一身いつしんの願ねんを與あたへて衆生しゆじやうに無む量身りやうしんの願ねんを與あたふる能たはず。是こゝの如ごとき等の無む量りやうの差別さつべつ有り、故ゆゑに相似さうじと言いへり。一いち彼かの佛ぶつの國土こくどの莊嚴じやうげん功德こくどく成就じゆじゆを觀察くわんさつすとは十七じふしち種しゆ有り。知しるべし、何等いかんらか十七じふしちなる。一いちには莊嚴じやうげん清淨じやうじやう功德こくどく成就じゆじゆ、二にには莊嚴じやうげん量功りやうこく功德こくどく成就じゆじゆ、三にには莊嚴じやうげん性功しやうこく功德こくどく成就じゆじゆ、四にには莊嚴じやうげん形相けいさう功德こくどく成就じゆじゆ、五にには莊嚴じやうげん種種しんしゆん事功じこく功德こくどく成就じゆじゆ、六にには莊嚴じやうげん妙色めうしやく功德こくどく成就じゆじゆ、七にには莊嚴じやうげん觸功じゆくこく功德こくどく成就じゆじゆ、八にには莊嚴じやうげん三種さんしゆ功德こくどく成就じゆじゆ、九にには莊嚴じやうげん雨功うこく功德こくどく成就じゆじゆ、十にには莊嚴じやうげん光明くわうめい功德こくどく成就じゆじゆ、十一にには莊嚴じやうげん妙聲めうしやう功德こくどく成就じゆじゆ、十二にには莊嚴じやうげん主功しゆこく功德こくどく成就じゆじゆ、十三にには莊嚴じやうげん眷屬くわんじやく功德こくどく成就じゆじゆ、十四にには莊嚴じやうげん受用じゆじゆ功德こくどく成就じゆじゆ、十五にには莊嚴じやうげん無諸むしゆ難功なんこく功德こくどく成就じゆじゆ、十六にには莊嚴じやうげん大義たいぎ門功もんこく功德こくどく成就じゆじゆ、十七にには莊嚴じやうげん一切いっせつ所求しゆきう満足まんじやく功德こくどく成就じゆじゆなり。一いち先まづ章門じやうもんを擧あげ次に續ついて提釋ていしやくす。莊嚴じやうげん清淨じやうじやう淨功じやうこく功德こくどく成就じゆじゆとは、偈げに觀彼くわん世界せかい相勝さうじやう過三界くわんさんがい道だうと言いへるが故ゆゑに。此こゝれ云何いんがが不思議ふしぎなる。凡夫ぼんぷの人ひと、煩惱ぼんごう成就じゆじゆすること有あれども、亦また彼淨土かのじやうどに生なずるを得えれば、三界さんがいの繫業けいごう畢竟へいじやくして牽ひかず。即すなはち是こゝれ煩惱ぼんごうを斷たぜずして涅槃ねはんの分ぶんを得え。焉いづんぞ思議しぎすべけん。莊嚴じやうげん量功りやうこく功德こくどく成就じゆじゆとは、偈げに究竟くわんじやく如虛空にょくうくう、



佛の言はく、是諸の功徳は皆涅槃の分に趣く、若し諸法の無常を觀ぜば是を眞の涅槃道と爲すと。

【彼の國の人天云】無量壽經上卷に所居の舍宅宮殿樓閣其形色に稱うて高下大小あり、或は一寶二寶乃至無量衆寶意の所欲に隨つて念に應じて即ち至るの文あり。

【心行の事】心とは忍の心、行とは即ち忍の行なり、若し淨土に生ぜんに自心忍行の功を假らずんば淨光の形を得ん。

廣大無邊際と言へるが故に。『此れ云何が不思議なる。彼國の人天若し意に宮殿樓閣若は廣さ一由旬、若は百由旬、若は千由旬、千間萬間ならんと欲すれば、心に隨つて成ずる所なり、人各此の如し。又十方世界の衆生往生を願する者の、若は已に生じ、若は今生じ、若は當に生ずべし。一時一日の頃算數するも其多少を知る能はざる所なり。而るに彼世界は常に虚空の著くにして迫途の相無し。彼中の衆生も此の如きの量の中に住し、志願廣大なること亦虚空の如くにして限量有る無し。彼國土の量能く衆生の心行の量を成ず。何ぞ思議すべけん。』莊嚴性功德成就とは、偈に正道大慈悲、出世善根生と言へるが故に。『此云何が不思議なる。譬へば迦羅求羅蟲の其形微少なれども、若し大風を得れば身大山の如く風の大小に隨つて己が身相と爲るが如し。安樂に生ずる衆生も亦復是の如し。彼正道の世界に生ずれば、即ち出世の善根を成就して正定聚に入ること、亦彼風の身に非ずして身なるが如し。焉んぞ思議すべけん。』莊嚴形相功德成就とは、偈に淨光明滿足、如鏡日月輪と言ふが故に。『此れ云何が不思議なる。夫れ忍辱は端正を得。我心の影嚮なり。一たび彼に生ずるを得れば瞋忍の殊無く、人天の色像平等にして妙絶なり。蓋し淨光の力なり。彼光は心行に非ずして心行の事を爲す。焉んぞ思議すべけん。』莊嚴種種事功德成就とは、偈に備珍寶性、具足妙莊嚴と言ふが故に。『此云何が不思議なる。彼種種の事、或は一寶十寶百千種寶、心に隨ひ意に稱うて具足せざる無し。若し無からしめんと欲すれば儻焉化没す。心に自在を得て神通に踰えたる有り、安んぞ思議すべけん。』莊嚴妙色功德成就

【事愛作に同じ云云】寶積經第一百六卷に、菩薩あり名けて愛作と曰ふ、舍衛城に入つて漸次に乞食して漸次に至る。長者の家に至る。長者の女有り、名けて德増と曰ふ。高樓の上に住し、愛作菩薩の聲を聞き尋ねて食菩薩に向ふて愛作菩薩に向ふて其形容相好菩薩を取り欲心即ち起り、即時に命終して三十三天に生じ女身を轉じて男子と成るを得。乃至偈に曰はく、德増の父母及び諸の眷屬其數具定して五百人を

とは、偈に無垢光炎熾、明淨曜世間と言ふが故に。此云何が不思議なる。其光、事を曜すに則ち表裏を映徹す。其光心を曜すに則ち終に無明を盡す。光佛事を爲す。焉んぞ思議すべけん。莊嚴觸功德成就とは、偈に寶性功德草、柔軟左右旋、觸者生勝樂、過迦旃隣陀と言ふが故に。此云何が不思議なる。夫れ寶例は堅強なり。而るに此は柔軟なり。觸樂せば應に著すべし。此は道を増す事愛作に同じ、何ぞ思議すべけん。菩薩有り愛作と字く。形容端正にして人の染著を生ず。經に言はく、「之に染する者は或は天上に生じ、或は菩提心を發す」と。莊嚴三種功德成就とは、三種の事あり應に知るべし。何等か三種なる。一には水、二には地、三には虚空なり。此三種並べて言ふ所以は同類なるを以ての故なり。何を以てか之を言ふとなれば、一には六大の類なり。謂ゆる虚空と識と地と水と火と風となり。二には無分別の類なり。謂ゆる地と水と火と風と虚空なり。但し三類と言ふは識の一大は衆生世間に屬するが故に。火の一大は彼中に無きが故に。風有り而も雖も風は見るべからざるが故に。住處無きが故に。是を以て六大五類の中に有つて而も莊嚴すべきを取つて、三種並べて之を言ふと。莊嚴水功德成就とは、偈に寶華千萬種、彌覆池流泉、微風動華葉、交錯光亂轉と言ふが故に。此云何が不思議なる。彼淨土の人天は水穀の身に非ず。何ぞ水を須ひんや。清淨成就して洗濯を須ひず。復何ぞ水を用ひんや。彼中には四時無し。常に調適にして熱を煩はさず。復何ぞ水を須ひんや。須ひざるに而も有るは當に所以に有るべし。經に言はく、「彼諸の菩薩及び聲聞衆、若し寶池に入りて、意に水に足を沒さしめ

滿じ天人師の是の如きの言を聞いて善提心を發すと。【水穀の身に非ず】經に曰はく人一日に二度便利あり胃の中に糞留つて五穀二斗水一斗五升而るに水穀盡ぬれば七日にして死すと。

【探湯不及】論語に曰はく善を見ては及ばざるが如くして不善を見ては湯を探るが如くす

んと欲すれば水即ち足を洩す、膝に至らしめんと欲すれば水即ち膝に至り、腰に至らしめんと欲すれば水即ち腰に至り、頸に至らしめんと欲すれば水即ち頸に至り、身に灌がしめんと欲すれば自然に身に灌ぐ、還復せしめんと欲すれば水輒ち還復す。調和冷煖にして自然に意に隨つて神を聞き、體を悦しめて心垢を蕩除す。清明澄潔にして淨きこと形無きが若し。寶沙映徹して深きをも照さざる無し。微瀾廻流して轉相灌注す。安祥として徐くに遊んで遅からず疾からず、波揚る無量にして自然の妙聲あり。其所應に隨つて聞かざる者無し。或は佛聲を聞き、或は法聲を聞き、或は偈聲を聞き、或は寂靜の聲、空無我の聲、大慈悲の聲、波羅蜜の聲を聞き、或は十力無畏不共法の聲、諸の通慧の聲、無所作の聲、不起滅の聲、無生忍の聲、乃至甘露灌頂衆の妙法の聲を聞く。是の如き等の聲、其所聞に稱うて歡喜すること無量なり。清淨離欲寂滅眞實の義に隨順し、三寶力無所畏不共の法に隨順し、通慧菩薩聲聞所行の道に隨順して、三塗苦難の名有る無し。但自然快樂の音のみ有り。是故に其國を名けて安樂と曰ふ。此水佛事を爲す。安んぞ思議すべけん。莊嚴地功德成就とは、偈に宮殿諸樓閣、觀十方無礙、雜樹異光色、寶欄遍圍遶と言ふが故に。此れ云何が不思議なる。彼種種の事、或は一寶、十寶、百寶、無量の寶、心に隨ひ意に稱うて莊嚴具足せり。此莊嚴の事、明淨の鏡の如し、十方國土の淨穢の諸相、善惡の業縁、一切悉く現す。彼中の人天斯事を見るが故に、探湯不及の情自然に成就す。亦諸の大菩薩の如くんば、照法性等の寶を以て冠と爲す。此寶冠の中に皆諸佛を見たてまつ



る。又一切諸法の性を了達す。又佛「法華經」を説きたまふ時、眉間の光を放ちて東方萬八千の土を照すに、皆金色の如くにして阿鼻獄より上有頂に至るまで、諸の世界の中の六道の衆生生死の所趣、善惡の業縁、受報の好醜、此に於て悉く見るが如し。蓋し斯類なり。此影佛事を爲す。安んぞ思議すべけん。莊嚴虚空功德成就とは、偈に無量寶交絡、羅網遍虚空、種種鈴發響、宣吐妙法音と言ふが故に。「此れ云何が不思議なる。經に言はく、「無量の寶網佛土に彌覆せり、皆金縷眞珠百千の雜寶奇妙珍異を以て莊嚴校飾せり。四面に周匝して、垂るるに寶鈴を以てす。光色晃耀して嚴麗を盡極す。自然の徳風徐く起つて微動す。其風調和にして寒からず暑からず。溫涼柔軟にして還からず疾からず。諸の羅網及び衆の寶樹を吹いて無量の微妙の法音を演發し、萬種の溫雅の徳香を流布す。其れ聞ぐ者有るは摩勞垢習自然に起らず。風其身に觸るれば皆快樂を得」と。此聲佛事を爲す、焉んぞ思議すべけん。「莊嚴雨功德成就とは、偈に雨華衣莊嚴、無量香普熏と言ふが故に。「此云何が不思議なる。經に言はく、「風吹いて華を散し佛土に遍滿す。色の次第に隨うて雜亂せず。柔軟光澤にして、馨香芬烈たり。足其上を履むに、陷下する四寸なり。足を擧げ已るに隨うて還復する故の如し。花用ひ已訖れば、地輒ち聞然して次でを以て化沒し、清淨にして遺無し。其時節に隨うて風吹いて華を散すこと是の如く六反す。又衆寶の蓮華世界に周滿す。一一の寶華に百千億の葉あり、其華の光明無量種の色なり、青色には青光あり。白色には白光あり。玄黄朱紫には光色も亦然なり。曄曄煥爛にして日月よりも明曜



【光明慧に非ず、慧の用を爲す】慧は是れ心、法光は是れ色法なり。其は慧より起り、慧は光明に顯る。故に光と慧と義同じ【尅念して】尅に曰はく、惟狂も克く念せば、聖と作る孔氏が傳に惟れ狂人も能く善を念せば、則ち聖人と爲る

なり。一一の華の中より三十六百千億の光を出し、一一の光の中より三十六百千億の佛を出す。身色紫金にして相好殊特なり。一一の諸佛又百千の光明を放ちて普く十方の爲に微妙の法を説きたまふ。是の如きの諸佛各々に無量の衆生を佛の正道に安立す」と。華佛事を爲す、安んぞ思議すべけん。『莊嚴光明功德成就』とは、偈に「佛慧明淨日、除世癡闇冥と言ふが故に。」此云何が不思議なる。彼土の光明は如來の智慧の報より起れり。之に觸れば無明の黒闇終に必ず消除す。光明慧に非ずして、能く慧の用を爲す。『安んぞ思議すべけん。』莊嚴妙聲功德成就とは、偈に「梵聲悟深遠、微妙聞十方と言ふが故に。」此云何が不思議なる。經に言はく、「若し人但彼國土の清淨安樂なるを聞いて、尅念して生ぜん」と願すれば、亦往生することを得て、則ち正定聚に入ると。此は是れ國土の名字佛事を爲す、安んぞ思議すべけん。『莊嚴主功德成就』とは、偈に「正覺阿彌陀、法王善住持と言ふが故に。」此云何が不思議なる。正覺の阿彌陀不可思議なり。彼安樂淨土は正覺の阿彌陀の善力の爲に住持せらる。云何が思議するを得べきや。住は不異不滅に名け、持は不散不失に名く。不朽藥を以て種子に塗れば水に在りても潤れず。火に在りても焦れず因縁を得て即生するが如し。何を以ての故に。不朽藥の力なるが故に。若し人一たび安樂淨土に生ずれば、後の時に三界に生じて衆生を教化せんと願すれば、淨土の命を捨て、願に隨うて生ずるを得。三界雜生して水火の中に生ずると雖も、無上菩提の種子畢竟じて朽ちず。何を以ての故に。正覺阿彌陀の善住持を廻るを以ての故に。『莊嚴眷屬功德成就』とは、偈に「如來淨華衆、正覺華

【食せずして命を養く】采等の食無きが故に不食と云ふ、觸、思、識の三食無きにあらず

【本は則ち三三の品云云】三三の品ありと雖も今淨

化生と言ふが故に。』此れ云何が不思議なる。凡そ是れ雜生の世界には、若し胎若し卵若し濕若し化、眷屬若干にして苦樂萬品なり。雜業なるを以ての故に、彼安樂國土は是れ阿彌陀如来の正覺淨華の化生する所に非ざる莫し。同一に佛を念じて別の道無きが故に、遠く夫の四海の内に通じて皆兄弟と爲りて眷屬無量なり。焉んぞ思議すべけん。』莊嚴受用功德成就とは、偈に愛樂佛法味、禪三昧爲食と言ふが故に。』此れ云何が不思議なる。食せずして命を養く、蓋し所資以有るなり。豈是れ如来本願を滿するに非ずや。佛願に乗するを我命と爲す、焉んぞ思議すべけん。』莊嚴無諸難功德成就とは、偈に永離身心惱、受樂常無間と言ふが故に。』此れ云何が不思議なる。經に言はく、「身を苦器と爲し心を惱端と爲す」と。而るに彼には身あり、心ありて樂を受くること間無し。安んぞ思議すべけん。』莊嚴大義門功德成就とは、偈に大乘善根界、等無穢嫌名、女人及根缺、二乘種不生と言ふが故に。淨土の果報は二種の譏過を離れたり。應に知るべし、一には體、二には名なり。體に三種有り。一には二乘の人、二には女人、三には諸根不具の人なり。此三過無きが故に離體穢嫌と名く。名に亦三種あり。但三の體無きのみならず。乃至二乘と女人と諸根不具との三種の名をも聞かず。故に離名穢嫌と名く。等とは平等一相なるが故なり。』此れ云何が不思議なる。夫れ諸天の器を共にするに飯に隨福の色有り。足の指地に安するに乃ち金磔の旨を詳にす。而るに往生を願する者は本は則ち三三の品あれども、今は一一の殊無し。亦漚澗の一味なるが如し。焉んぞ思議すべけん。』莊嚴一切所求滿足功德成就とは、偈に衆生所願樂、一切

土に生ずれば大乗善根界の故に大小の二機、善惡の二人同じく善人と成り大機と成る。故に今無しと云ふは全く九品上下の階位無しと言ふには非ず。

【能神者】 阿彌陀佛に歸す。

【利他】 曰ふと雖も自利の義炳然たり。若し能感の邊に約せば是れ自利の功德なり。若し攝生の邊に約せば則ち利他の功德なり。

【人第一義諦】 世諦所攝の十七の莊嚴、眞諦に歸入するを名けて人第一義諦と爲す。

能満足と言ふが故に。此れ云何が不思議なる。彼國の人天若し他方世界の無量の佛刹に往きて諸佛菩薩を供養せんと欲願するに、及び所須の供養の具、願に稱はざる無し。又彼壽命を捨て餘國に向つて生ぜんと欲すれば、脩短自在にして願に隨つて皆得たり。未だ自在の位に階はずして自在の用に同じ、焉んぞ思議すべけん。

示現自利利他とは、略して彼阿彌陀佛の國土の十七種の莊嚴功德成就を説いて、如來自身の利益大功徳力成就と、利益他功德成就とを示現するが故なり。略と言ふは彼淨土の功德無量にして唯十七種のみ非ざるを彰す。夫れ須彌を芥子に入れ、毛孔に大海を納む、豈山海の神ならんや。毛芥の力ならんや。能神者之を神するのみ。是故に十七種を利他と曰ふと雖も自利の義炳然たり、知るべし。第一義諦に入るとは、彼無量壽佛の國土の莊嚴第一義諦妙境界の相なり。十六句と及び一と次第に説くを應に知るべし。第一義諦とは佛の因縁の法なり。此を諦といふ。是れ境の義なり。是故に莊嚴等の十六句を稱して妙境界の相と爲す。此義、一法句の文に至りて當に更に解釋すべし。及一次第とは、謂く器淨等を觀するなり。總と別との十七句の觀行の次第なり。云何が次を起す。建の章に歸命無礙光如來願生安樂國と言へり。此中に疑有り。疑つて言はく、生は有の本衆累の元爲り。生を棄て生を願せば、生何ぞ盡すべけんや」と。此疑を釋せんが爲なり、是故に彼淨土の莊嚴功德成就を觀す。彼淨土は是れ阿彌陀如來の清淨本願無生の生なり。三有虚妄の生の如きには非ざるを明す。何を以てか之を言ふ。夫れ法性清淨にして畢竟無生な



を解きて義理を解  
釋す。  
【無爲】涅槃なり  
【能爲】菩提なり  
【三空】空と無相  
【不空】小乗の三  
空は實の空に非ず  
故に不空と云ふ。  
【根敗】：三千に  
振ひ一切の聲聞  
此大乘に於て、是  
敗種の如く、是不  
思議解脱の法門を  
闡いて皆滌泣して  
震ふ。

り。生と言ふは是れ得生の者の情ならんのみ、生苟に無生なれば生何ぞ盡くる所あらん。夫生を盡さば上に無爲能爲の身を失ひ、下に三空不空の癩なり病に醉ふなり。根敗永く亡じて號び三千に振ひ、無反無復に斯に於て耻を招く、夫生理を體す、之を淨土と謂ふ。淨土の宅は謂ゆる十七句是なり。十七句の中總と別とを二と爲す。初の句は是れ總相なり。謂ゆる是れ清淨の佛土は三界の道に過ぎたり。彼三界に過ぐ、何なる相か有る。下の十六種の莊嚴功德成就の相是なり。一には量、究竟して虚空の如く廣大にして邊際無きが故に、既に量を知る。此量何を以てか本と爲す。是故に性を觀す。性は是れ本の義なり。彼淨土は正道の大慈悲、出世の善根より生ぜり。既に出世善根と言へり。此善根は何等の相をか生ぜる。是故に次に莊嚴形相を觀す。既に形相を知る。宜しく形相は何等の體となるかを知るべし。是故に次に種種の事を觀す。既に種種の事を知る。宜しく種種の事の妙色を知るべし。是故に次に妙色を觀す。既に妙色を知る。此色何れの觸か有る。是故に次に觸を觀す。既に身觸を知る。應に眼觸を知るべし。是故に次に水地虚空の莊嚴の三事を觀す。既に眼觸を知る。應に鼻觸を知るべし。是故に次に衣花の香薰を觀す。既に眼鼻等の觸を知る。須らく染を離るるを知るべし。是故に次に佛慧の明かに照すを觀す。既に慧光の淨力を知る。宜しく聲名の遠近を知るべし。是故に次に梵聲の遠く聞くを觀す。既に聲名を知る。宜しく誰か増上と爲すかを知るべし。是故に次に主を觀す。既に主有るを知る。誰をか主の眷屬と爲すと。是故に次に眷屬を觀す。既に眷屬を知る。宜し



く此眷屬は若爲が受用するかを知るべし。是故に次に受用を觀ず。既に受用を知る。宜しく此受用の有難無難を知るべし。是故に次に無諸難を觀ず。既に無諸難を知る。何なる義を以ての故に諸難無き。是故に次に大義門を觀ず。既に大義門を知る。宜しく大義門の満と不滿とを知るべし。是故に次に所求満足を觀ず。復次に此十七句は但疑を釋するのみに非ず。此十七種の莊嚴成就を觀ずれば、能く眞實の淨信を生じて必定して彼安樂佛土に生ずるを得。問うて曰はく、「上に生は無生なりと知ると言ふは、當に是れ上品生の者なるべし。若し下品の人十念に乗して往生するは、豈實の生を取るに非ずや。但實の生を取らば、即ち二執に墮しなん。一には恐くは往生を得ざらん。二には恐らくは更に生の惑を生ぜんや。」答ふ、「譬へば淨摩尼珠之を濁水に於けば水即ち清淨なるが如し。若し人無量生死の罪濁に有りと雖も、彼阿彌陀如來の至極無生清淨の寶珠の名號を聞いて、之を濁心に投ぐれば、念念の中に罪滅し心淨くして即ち往生するを得。又是れ摩尼珠を玄黄の幣を以て裹んで之を水に投ぐれば、水即ち玄黄にして一ら物の色の如し。彼清淨の佛土に阿彌陀如來の無上の寶珠有り。無量莊嚴功德成就の帛を以て裹んで之を往生する所の者の心水に投ぐるに、豈生の見を轉じて無生の智と爲す能はざらんや。又氷の上に火を燃くに、火猛ければ氷解く、氷解ければ火滅するが如し。彼下品の入法性の無生を知らずと雖も、但佛名を稱する力を以て往生の意を作して、彼土に生ぜんと願すれば、彼土は是れ無生の界なれば、見生の火自然に滅するなり。衆生體とは、此分の中に二重有り。一には

【三塗】地獄を火塗と名け、畜生を血塗と名け、餓鬼を刀塗と名く。  
 【八難】地獄、餓鬼、畜生、長壽天、北俱盧洲、佛前佛後、に生を受けたるもの、及び世智辨聰、諸根不具のもの、は佛を見ず又佛

觀佛、二には觀菩薩なり。『觀佛とは云何が佛の莊嚴功德成就を觀する。觀佛莊嚴功德成就とは八種の相有り應に知るべし。』此觀の義は已に前の偈に彰したり。『何等か八種なる。一には莊嚴座功德成就、二には莊嚴身業功德成就、三には莊嚴口業功德成就、四には莊嚴心業功德成就、五には莊嚴衆功徳成就、六には莊嚴上首功德成就、七には莊嚴主功德成就、八には莊嚴不虛住持功德成就なり。何者か莊嚴座功德成就なる、偈に無量天寶王、微妙淨華臺と言ふが故に。』若し座を觀ぜんと欲せば、當に『觀無量壽經』に依るべし。『何者か莊嚴身業功德成就なる、偈に相好光一尋、色像超群生と言ふが故に。』若し佛身を觀ぜんと欲せば、當に『觀無量壽經』に依るべし。『何者か莊嚴口業功德成就なる、偈に如來微妙聲、梵響聞十方と言ふが故に。』何者か莊嚴心業功德成就なる、偈に同地水火風、虚空無分別と言ふが故に。『無分別とは、分別の心無きが故に。凡夫衆生は身口意の三業以て罪を造り三界に輪轉して窮り已む有る無し。是故に諸佛菩薩身口意の三業を莊嚴して、用て衆生の虚誑の三業を治したまふ。云何が用て衆生を治すとならば、身見を以ての故に三塗身、卑賤身、醜陋身、八難身、流轉身を受く。是の如き等の衆生、阿彌陀如來の相好光明、身を見たりてまづれば、上の如きの種種の身業の繫縛皆解脱するを得て、如來の家に入りて畢竟じて平等の身業を得。衆生憍慢を以ての故に。』正法を誹謗し、賢聖を毀訾し、尊長を捐擯す。尊とは後、長者有徳なり。是の如きの人應に拔舌の苦、瘡癩の苦、言教不行の苦、無名聞の苦を受くべし。是の如き等の種種の諸苦の衆生、阿彌陀如來の至徳の名號説法の音聲を聞けば、上

の説法を聞く能はざるをばふ。  
【如來の家】 淨土を指す。

【石蛭】 石上に生じ頭尖り腰粗く色赤し。  
【甘刀】 蜜を刀に塗るに飪る者甜を貪り舌を傷る如しを知らざるが如し  
【一切種智】 三智の一、一切種の智を以て一切諸佛の道法に達し、一切衆生の因種を知り諸の法門を觀じて諸の無明を破する智慧をいひ、佛の智慧なり。

の如きの種種の口業の繫縛皆解脱するを得て、如來の家に入りて畢竟して平等の口業を得。衆生邪見を以ての故に、心に分別を生ず。若し有、若し無、若し非、若し是、若し好、若し醜、若し善、若し惡、若し彼、若し此、是の如き等の種種の分別有り。分別を以ての故に長く三有に淪んで、種種の分別の苦取捨の苦を受け、長く大夜に寢ねて出づる期有る無けん。是衆生若し阿彌陀如來の平等の光照に遇ひたてまつり、若し阿彌陀如來の平等の意業を聞けば、是等の衆生上の如きの種種の意業の繫縛皆解脱するを得て、如來の家に入りて畢竟して平等の意業を得るなり。問うて曰はく、「心は是れ覺知の相なり、云何が地水火風に同じく、分別無きを得べきや。」答へて曰はく、「心は知の相なりと雖も、實相に入れば則ち無知なり。譬へは蛇の性は曲れりと雖も、竹筒に入れば則ち直きが如し。又人身の若し鍼をもて刺し、若し蜂の螫すには、則ち覺知有り。若し石蛭の瞰み、若し甘刀の割くには、則ち覺知無きが如し。是の如き等の有知無知因縁に在り。若し因縁に在れば則ち知に非ず。無知に非ざるなり。問ふて曰はく、「心實相に入らば無知なからしむべし。云何が一切種智有るを得んや。」答へて曰はく、「凡心は有知なれば則ち知らざる所有り。聖心は無知なるが故に知らざる所無し。無知にして知る、即ち無知なり。問うて曰はく、「既に無知なるが故に知らざる所無しと言へり。若し知らざる所無くんば、豈是れ種種の法を知るに非ずや。既に種種の法を知らば、復云何が分別する所無しと言はんや。」答へて曰はく、「諸法種種の相は皆幻化の如し。然るに幻化の象馬に長頸鼻手足の異無きに非ず。智

【淨心の菩薩】無作心を得るを名けて淨心と爲し、其位に居るが故に即ち上地と名く、法に約し身に約するも義に於ては異ること無し。

者之を觀するに、豈定めて像馬有つて之を分別すと言はんや。何者か莊嚴大衆功德成就なる。偈に天人不動衆、清淨智海生と言ふが故に。何者か莊嚴上首功德成就なる。偈に如須彌山王、勝妙無過者と言ふが故に。何者か莊嚴主功德成就なる。偈に天人丈夫衆、恭敬繞瞻仰と言ふが故に。何者か莊嚴不虛作住持功德成就なる。偈に觀佛本願力、遇無空過者、能令速滿足、功德大寶海と言ふが故に。不虛作住持功德成就とは、蓋し是れ阿彌陀如來の本願力なり。今當に略して虛作の相の住持する能はざるを示して、用て彼不虛作住持の義を顯すべし、人喰を懷めて士を養ふこと有れども、或は疊舟の中に起り金を積んで庫に盈つれども而も餓死を免れず。斯の如きの事目に觸れて皆是を得て得を作すに非ず、在りて在るを守るに非ず、皆虛妄の業の作なるに由りて住持する能はざるなり。言ふ所の不虛作住持とは、本の法藏菩薩の四十八願と、今日の阿彌陀如來の自在神力とに依りてなり。願を以て力を成し力を以て願に就く。願徒然ならず、力虛設ならず。力と願と相符して畢竟して差はざるが故に成就と曰ふ。即ち彼佛を見たてまつれば未證淨心の菩薩、畢竟して平等法身を證するを得て、淨心の菩薩と上地の諸菩薩と畢竟して同じく寂滅平等を得るが故に。平等法身とは八地已上の法性生身の菩薩なり。寂滅平等とは、即ち此法身の菩薩の所證の寂滅平等の法なり。此寂滅平等の法を得るを以ての故に名けて平等法身と爲す。平等法身の菩薩の所得なるを以ての故に名けて寂滅平等の法と爲す。此菩薩散生三昧を得て、三昧の神力を以て能く一處にして、一念一時に十方世界に遍じて種種に一切の諸佛及び諸佛



【報生三昧】果報の定。八地以上の菩薩が分段身を捨てて變易身を受用ひず、生れながらして得る所の三昧に入れば任運無功用に供佛度生することを得るなり

【神力をして云々】諸佛七勸して利他に趣かしむ。一應

の大會衆海を供養し、能く無量世界の佛法僧無き處に於て種種に示現し、種種に教化し一切衆生を度脱して常に佛事を作せども、初より往來の想供養の想度脱の想無し。是故に此身を名けて平等法身と爲す。此法を名けて寂滅平等の法と爲す。未證淨心の菩薩とは初地已上七地已還の諸菩薩なり。此菩薩亦能く身を現じて若は百若は千若は萬若は億若は百千萬億の無佛の國土にして佛事を施作すれども、要す作心を須ひて三昧に入る。乃ち能く作心せざるに非ず、作心するを以ての故に、名けて未得淨心と爲す。此菩薩願じて安樂淨土に生すれば即ち阿彌陀佛を見たてまつる。阿彌陀佛を見たてまつる時、上地の諸菩薩畢竟して身等しく法等し。龍樹菩薩婆數槃頭菩薩の輩、彼に生ぜんと願すれば當に此が爲なるべきのみ。問うて曰はく、『十地經』を案するに、菩薩の進趣階級漸く無量の功勳あり。多くの劫數を遷て、然して後乃し此を得。云何が阿彌陀佛を見たてまつる時、畢竟して上地の諸菩薩と身等しく法等しきや。答へて曰はく、『畢竟』とは未だ即等と言ふにあらざるなり、畢竟して此等しきを失せざるが故に等しと言ふのみ。問うて曰はく、『若し即等ならんば、復何ぞ菩薩と言ふを得たん。但し初地に登れば、以て漸く増進して自然に當に佛と等しかるべし、何ぞ假に上地の菩薩と等しといはんや。』答へて曰はく、『菩薩七地の中に於て大寂滅を得れば上に諸佛の求むべきを見ず。下に衆生の度すべきを見ずして、佛道を捨てて實際を證せんと欲す。爾時若し十方諸佛の神力をして加勸を得ずんば、即便滅度して二乘と異なる無けん。菩薩若し安樂に往生して阿彌陀佛を見たてまつれば即ち此難無し。是故に

趣果徳、二愍念衆  
生勸、三令憶本誓  
勸、四訶同二乘勸  
五指事合成勸、六  
勿生止足勸、七悉  
應通達勸。

【本願】四十八願  
中第二十二の願な  
り。

【一の應化の道】  
教門の權説なり。

【百歳に乃ち具せ  
り】百歳の中に枝  
葉具足す。

須らく畢竟じて平等と言ふべし。復次に無量壽經の中、阿彌陀如來の本願に言はく、「設し我佛を得たらんに、他方佛土の諸菩薩衆、我國に來生せんに究竟じて必ず一生補處に至らん。其本願自在にして化す所、衆生の爲の故に弘誓の鏡を被て、徳本を積累し一切を度脱して、諸佛の國に遊び菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恆沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめんをば除く。常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん。若し爾らすんば正覺を取らじ」此經を案じて彼國の菩薩を推するに、或は一地より一地に至らざるべし。十地の階次と言ふは、是れ釋迦如來闍浮提に於て一の應化の道なるのみ。他方の淨土は何ぞ必ずしも此の如くならん。五種の不思議の中には佛法最も不可思議なり。若し菩薩必ず一地より一地に至りて超越の理無しと言はば、未だ敢て詳ならざるなり。譬へば樹有り、名けて好堅と曰ふが如し。是樹地に生じて百歳に乃ち具せり。一口に長ずること高き百丈なり、日日に此の如し。百歳の長を計るに、豈脩松に類せんや。松の生長すること日に寸を過ぎざるを見て、彼好堅を聞かば何ぞ能く疑はん。即ち曰ふに人有り。釋迦如來羅漢を一聽に證せしめ、無生を終朝に制せしを聞いて、是れ接誘の言にして稱實の説に非ずと謂へり。此論の事を聞いて亦當に信ぜざるべし。夫れ非常の言は常人の耳に入らず、之を然らずと謂はんも、亦其れ宜なり。

【略して八句を説いて如來の自利利他功德莊嚴次第成就を示現す、應に知るべし。】此れ云何が次第する。前の十七句は是れ莊嚴國土の功德成就なり。既に國土の相を知る、應に國土

【恐くは長幼に同じきを】佛を上首と爲すと雖も使ち等閑の心を起す。恐くは佛上の敬無し。只佛を以て見長と爲し衆を以て弟幼と爲す。故に主を觀じて上信を生ぜしむ。

の主を知るべし。是故に次に佛の莊嚴功德を觀ず。彼佛若爲が莊嚴し、何れの處に於てか坐したまふ。是故に先づ座を觀ず。既に座を知り已んぬ。宜しく座の主を知るべし。是故に次に佛の莊嚴身業を觀ず。既に身業を知る、應に知るべし。何なる聲名か有る。是故に次に佛の莊嚴口業を觀ず。既に名聞を知る、宜しく得名の所以を知るべし。是故に次に莊嚴心業を觀ず。既に三業具足して應に人天の大師と爲るべきを知る。化を受くるに堪へたる者は是れ誰ぞ。是故に次に大衆の功德を觀ず。既に大衆に無量の功德有るを知る、宜しく上首の者は誰なるかを知るべし。是故に次に上首を觀ず。上首は是れ佛なり。既に上首を知る、恐くは長幼に同じきを。是故に次に主を觀ず。既に是れ主を知る、主に何なる増上か有す。是故に次に莊嚴不虛作住持を觀ず。八句の次第成し已んぬ。菩薩を觀すとは、一云何が菩薩の莊嚴功德成就を觀察する。菩薩の莊嚴功德成就を觀察すとは、彼菩薩を觀するに、四種の正修行功德成就有り、應に知るべし。眞如は是れ諸法の正體なり。體如にして行すれば則ち是れ不行なり。不行にして行するを如實修行と名く。體は唯一如なれども義をもて分つて四と爲す。是故に四の行一の正きを以て之を統ぶ。何者か四と爲す、『一には一佛上に於て身動搖せずして十方に遍じ、種種に應化し如實に修行して常に佛事を作す。偈に安樂國清淨、常轉無垢輪、化佛菩薩日、如須彌住持と言ふが故に、諸の衆生の淤泥の華を開くが故に。』八地已上の菩薩常に三昧に在して、三昧力を以て身本處を動ぜずして、能く遍く十方に至り諸佛を供養し衆生を教化す。無垢輪とは佛地の功德なり。

【日と言ふは未だ  
以て不動を】化用  
普く及ぶを日に譬  
へ、本身の動かさ  
るを山に譬ふ。

【動じて事と會す】  
動とは應、事とは  
感、會とは交、蓋  
し感應道の義な  
り。衆生の感と、

佛地の功德は習氣煩惱の垢無し、佛諸の菩薩の爲に常に此法輪を轉じたまふ。諸の大菩薩亦能く此法輪を以て一切を開導す。暫時に休息する無し、故に常轉と言ふ。法身は日の如くにして應化身の光諸の世界に遍するなり。日と言ふは未だ以て不動を明すに足らざれば、復如須彌住持と言ふなり。淤泥華とは、經に言はく、「高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑濕の淤泥に乃ち蓮華を生ず」と。此は凡夫煩惱の泥中に在りて菩薩の爲に開導せられて、能く佛の正覺の華を生ずるに喩ふ。諒に夫れ三寶を紹隆して常に絶えざらしむ。二には彼應化身一切の時に前ならず後ならず、一心一念に大光明を放ちて、悉く能く遍く十方世界に至りて衆生を教化し、種種に方便し、修行して、作す所一切衆生の苦を滅除するが故に。偈に無垢莊嚴光、一念及一時、普照諸佛會、利益諸群生と言ふが故に。上には不動にして至ると言ひ、或は至るに前後有り。是故に復一念一時にして前後無しと言ふなり。三には彼一切の世界に於て餘無く、諸佛の會の大衆を照すに餘無く、廣大無量に供養恭敬して諸佛如來の功德を讚嘆す。偈に雨天樂華衣、妙香等供養、讚諸佛功德、無有分別心と言ふが故に。無餘とは遍く一切の世界、一切の諸佛の大會に至りて一世界一佛會として至らざる有る無きを明すなり。摩公の言はく、「法身は像無くして形を殊にして並に應じ、至韻は言無くして玄籍彌く布く、冥權謀ること無くして動じて事と會す」と。蓋し斯意なり。四には彼十方一切の世界の三寶無き處に於て、佛法僧寶の功德大海を住持し莊嚴して、遍く示して解せしめ如實に修行せしむ。偈に何等世界無、佛法功德寶、我願皆往生、示佛法如佛と言ふ



佛の應と、互に通じて融合す。

【上善】菩薩所得の諸善功德なり、上善とは菩薩身を指す。

【五】第四淨入願心を明す。

【淨入願心】淨とは三種莊嚴なり、即ち無漏の果淨し入願心とは四十八願なり即ち無漏の因淨し、果淨は必ず因淨に由り、三種莊嚴謂いて願心に入る、故に名けて入と爲す。

【三種莊嚴】阿彌陀佛の極樂淨土に於ける三種の莊嚴、佛莊嚴、菩薩莊嚴、國土莊嚴。

【無因他因】邪見と戒取なり。

【法句】眞如法性のこと。淨土の二十九種莊嚴の事に對して其實體の理性を一法句といふ。莊嚴の二十九句は差別にして廣なり、眞如法性

が故に。』上の三句は遍く至ると言ふと雖も、皆是れ有佛の國土なり。若し此句無くんば便ち是れ法身所として法ならざる有らん。上善所として善ならざる有らん。觀行の體相竟んぬ。

【五】已下は是れ解義の中の第四重なり。名けて淨入願心と爲す。淨入願心とは、又向に觀察莊嚴佛土功德成就と、莊嚴佛功德成就と、莊嚴菩薩功德成就とを説く。此三種の成就は願心もて莊嚴せり。應に知るべし。』應知とは此三種の莊嚴成就は、本四十八願等の清淨の願心の莊嚴したまふ所なるに由りて、因淨きが故に果淨し。無因他因の行には非ざるを知るべしとなり。』略して入一法句を説くが故に。』上の國土の莊嚴十七句と、

如來の莊嚴八句と、菩薩の莊嚴四句とを廣と爲し、入一法句を略と爲す。何が故に廣略相入を示現するとなれば、諸佛菩薩に二種の法身有り。一には法性法身、二には方便法身なり。法性法身に由りて方便法身を生じ、方便法身に由りて法性法身を出す。此二の法身は異にして分つべからず。一にして同すべからず。是故に廣略相入して統るに法の名を以てす。菩薩若し廣略相入を知らずんば、則ち自利利他すること能はざらん。』一法句とは謂く、清淨句なり。清淨句とは謂く、眞實智慧無爲法身なるが故に。』此三句は展轉して相入す。何なる義に依つてか之を名けて法と爲す。清淨なるを以ての故に。何なる義に依りてか名けて清淨と爲す。眞實の智慧無爲法身を以ての故なり。眞實智慧とは實相の智慧なり。實相は無相なるが故に眞智は無知なり。無爲法身とは法性身なり。法性寂

の一句は平等にし  
て略なり。一如よ  
り淨相を生じ淨相  
によりて一如を顯  
はす、是を廣略相  
入といふ。  
【作に非ず】非作に  
非ざることを作と  
は始覺の智、非作  
とは本覺の智、二  
を非するの非は始  
本無二の智なり。  
【色に非ず】非色に  
非ざることを色と  
は方便法身。非色  
とは法性法身。二  
を非するの非は本  
迹不二の體なり。

【別報】人間と生  
れたることは同一  
なれどもその上に  
貧富貴賤男女等の  
差別あるをいふ。  
【共報】山河大地  
の如き衆人の業に  
よりて共通に感得  
したるものをいふ。

滅なるが故に法身無相なり。無相の故に能く相ならざる無し。是故に相好莊嚴即ち法身  
なり。無知の故に能く知らざる無し。是故に一切種智、即ち眞實の智慧なり。眞實を以て  
智慧と目くるは、智慧は作に非ず、非作に非ざるを明すなり。無爲を以て法身を標すは、  
法身は色に非ず、非色に非ざるを明すなり。非に非ずんば豈非を非するの能く是ならんや。  
蓋し非無き之を是と曰ふなり、自ら是にして待つ無きも復是に非ざるなり。是に非ず非に  
非ず百非の喩へざる所なり。是故に清淨句と言ふ。清淨句とは、謂く眞實の智慧無爲  
法身なり。此清淨に二種有り、應に知るべし。上の轉入の句の中に、一法に通じて清淨  
に入り、清淨に通じて法身に入る。今將に清淨を別つて二種を出さんとするが故に。  
故に應知と言ふ。何等か二種なる。一には器世間清淨、二には衆生世間清淨なり。器  
世間清淨とは、向に説くが如し。十七種の莊嚴佛土の功德成就なり。是を器世間清淨  
と名く。衆生世間清淨とは、向に説くが如きの八種の莊嚴佛土の功德成就と、四種の莊嚴菩  
薩功德成就と、是を衆生世間清淨と名く。是の如きの一法句に二種の清淨の義を攝す。  
應に知るべし、夫れ衆生は別報の體と爲り、國土は共報の用と爲り、體用一ならず、所以  
に知るべし。然るに諸法は心をもて成す。餘の境界無し。衆生及び器も復異なるを得ず、一な  
るを得ず。一ならざれば則ち義もて分ち、異ならざれば同じく清淨なればなり。器とは用  
なり。謂く彼淨土は是れ彼清淨の衆生の受用する所なり。故に名けて器と爲す。淨土に  
不淨の器を用ふれば器不淨なるを以ての故に食も亦不淨なり。不淨の食淨器を用ふれば食

不淨なるが故に器も亦不淨なり。要す二つ俱に潔くして乃ち淨と稱するを得るが如し。是を以て一の清淨の名に必ず二種を攝す。問うて曰はく、『衆生清淨と曰ふは、則ち是れ佛と菩薩となり。彼諸の人天をも此清淨の數に入るを得るや不や。』答へて曰はく、『清淨と名くるを得れども實の清淨には非ず。譬へば出家の聖人は煩惱の賊を殺すを以ての故に、名けて比丘と爲す。凡夫の出家の者をも、持戒破戒皆比丘と名くるが如し。又灌頂王子の初生の時に、三十二相を具して即ち七寶の爲に屬せらる。未だ轉輪王の事を爲す能はずと雖も、亦轉輪王と名くるが如し。其れ必ず轉輪王爲るを以ての故なり。彼諸の人天も亦復是の如し。皆大乘正定の聚に入りて畢竟して當に清淨法身を得べし。當に得べきを以ての故に清淨と名くるを得たり。』

【五八】第五善功攝化を明す。  
 【善功攝化】衆の機に隨ひて善く化益を施すこと。  
 【奢摩他】(Samata)の譯。止寂の義。心妄りに外境に動かされず、一切の亂想を止めて寂靜なるをいふ。  
 【毘婆舍那】(Vipassana)の譯。此たる分別心を覺といひ、細なる分別

【六】善巧攝化とは、『是の如く菩薩奢摩他と毘婆舍那との廣略を修行して柔軟心を成就す。柔軟心とは、謂く廣略の止觀相應し修行して、不二の心を成ずるなり。譬へば水を以て影を取るに、清と静と相資けて成就するが如し。』如實に廣略の諸法を知る。』如實に知るとは實相の如く知るなり。廣の中の二十九句と、略の中の一旬と、實相に非ざる莫し、『是の如きの巧方便廻向を成就す。』是の如きは前後の廣略皆實相なるが如し。實相を知るを以ての故に、則ち三界の衆生の虚妄の相を知るなり。衆生の虚妄なるを知らば、則ち眞實の慈悲を生ず。眞實の法身を知らば、則ち眞實の歸依を起すなり。慈悲と歸依と巧方便とは下に在り。『何者か菩薩の巧方便廻向なるや。菩薩の巧方便廻向とは、謂く禮拜等の五

心を觀といふ。即ちこまかに明かに識別することなり。【不二の心】止觀不二、理事一如を不二心と名く、即ち柔軟心なり。

種の修行に集むる所の一切の功徳善根を説きて、自身の住持の樂を求めず。一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に、一切衆生を攝取して、共に同じく彼安樂佛國に生ぜんと作願す。是を菩薩の巧方便廻向成就と名く。王舍城所説の「無量壽經」を案ずるに、「三輩生の中に、行に優劣有り」と雖も、皆無上菩提の心を發さざる莫し。此無上菩提の心とは即ち是れ願作佛の心なり。願作佛の心とは即ち是れ度衆生の心なり。度衆生の心とは即ち衆生を攝取して有佛の國土に生ぜしむる心なり。是故に彼安樂淨土に生ぜんと願する者は、要す無上菩提の心を發すなり。若し人無上菩提の心を發さずして、但彼國土の受樂間無きを聞いて、樂の爲の故に生ぜんと願せば亦當に往生するを得ざるべし。是故に自身の住持の樂を求めず。一切衆生の苦を抜かんと欲するが故にと言へり。住持の樂とは、謂く彼安樂淨土は阿彌陀如来の本願力の爲に住持せられて受樂間無きなり。凡そ廻向の名義を釋せば、謂く己が所集の一切の功徳を以て、一切衆生に施與して共に佛道に向はしむるなり。巧方便とは、謂く菩薩願すらく、己が智慧の火を以て一切衆生の煩惱の草木を燒かんに、若し一切衆生として成佛せざる有らば我作佛せずと。而るに衆生未だ成佛を盡さざるに菩薩已に自ら成佛す。譬へば火燄もて一切の草木を摘みて、燒き盡さしめんと欲せんに、草木未だ盡さざるに火燄已に盡くるが如し。其身を後にして身を先とするを以ての故に、巧方便と名く。此中に方便と言ふは、謂く一切衆生を攝取して共に同じく彼安樂佛國に生ぜんと作願す。彼佛國は即ち是れ畢竟成佛の道路無上の方便なり。



【七】第六障菩提門を明す。

【八】第七順菩提門を明す。

【七】障菩提門とは、菩薩是の如く善く廻向成就を知りて、即ち能く三種の菩提門相違の法を遠離すべし。何等か三種なる。一には智慧門に依りて自樂を求めず。我心の自身に貪著するを遠離するが故に。進を知りて退を守るを智と曰ふ。空無我を知るを慧と曰ふ。智に依るが故に自樂を求めず。慧に依るが故に我心の自身に貪著するを遠離す。二には慈悲門に依りて、一切衆生の苦を抜いて衆生を安んずること無きの心を遠離するが故に。苦を抜くを慈と曰ふ、樂を興ふるを悲と曰ふ。慈に依るが故に一切衆生の苦を抜き、悲に依るが故に衆生を安んずる無きの心を遠離す。三には方便門に依りて、一切衆生を憐愍する心をもて、自身を供養し恭敬するの心を遠離するが故に。正直を方と曰ふ。己を外するを便と曰ふ。正直に依るが故に一切衆生を憐愍する心を生ず。己を外するに依るが故に自身を供養し恭敬するの心を遠離す。是を三種の菩提門相違の法を遠離すと名く。

【八】順菩提門とは、菩薩是の如き三種の菩提門相違の法を遠離すと名く。一には無染清淨心の法、満足するを得るが故に。何等か三種なる。一には無染清淨心。自身の爲に諸樂を求めざるを以ての故に。菩提は是れ無染清淨の處なり。若し身の爲に樂を求めば、即ち菩提に違す。是故に無染清淨心は是れ菩提に順ずるの門なり。二には安清淨の心。一切衆生の苦を抜くを以ての故に。菩提は是れ一切衆生を安穩ならしむる清淨の處なり。若し心を作して一切の衆生を抜いて生死の苦を離れしめずんば、即便菩提に違す。是故に一切衆生の苦を抜くは、是れ順菩提門なり。三には樂清淨の心。一切衆生をして大菩提

【九】第八名義攝對を明す。

を得しむるを以ての故に。衆生を攝取して彼國土に生ぜしむるを以ての故に、菩提は是れ畢、竟常樂の處なり。若し一切衆生をして畢、竟常樂を得しめずんば、則ち菩提に違す。此畢、竟常樂は何に依つてか得る。大乘門に依る。大乘門とは、謂く彼安樂佛國土是なり。是故に又衆生を攝取して、彼國土に生ぜしむるを以ての故にと言へり。是を三種の隨順菩提門の法、満足すと名く。應に知るべし。』

【九】名義攝對とは、『向に説く智慧と慈悲と方便との三種の門は般若を攝取し、般若は方便を攝す。應に知るべし。』般若とは如に達するの慧の名なり。方便とは權に通ずるの智の稱なり。如に達すれば則ち心行寂滅し、權に通ずれば則ち備に衆機を省く。機を省くの智は備に應じて無知なり。寂滅の慧は亦無知にして備に省く。然れば則ち智慧と方便とは相縁て動じ、相縁て靜なり。動靜を失せざるは智慧の功なり。靜動を廢せざることは方便の力なり。是故に智慧と慈悲と方便とは般若を攝取し、般若は方便を攝す。應知とは謂く應に智慧と方便とは是れ菩薩の父母なり。若し智慧と方便とに依らざれば、菩薩の法則ち成就せざるを知るべしとなり。何を以ての故に。若し智慧無くして衆生の爲にする時は則ち顛倒に墮し、若し方便無くして、法性を觀する時は則ち實際を證す。是故に應に知るべし。』向に説く我心を遠離して自身に貪著せず、衆生を安ずること無きの心を遠離し、自心を供養し恭敬する心を遠離す。』と。此三種の法は菩提を障ふるの心を遠離す。應に知るべし。諸法に各障礙の相有り、風は能く靜を障へ、土は能く水を障へ、濕は能く火を障ふ。五

黒十悪は人天を障へ、四顛倒是聲聞の果を障ふるが如し、此中の三種は菩提を障ふる心を遠離せざるなり。應知とは若し無障を得んと欲せば、當に此三種の障礙を遠離すべし。向に無染清淨の心と、安清淨の心と、樂清淨の心とを説く。此三種の心を略して一處にして妙樂勝眞心を成就するなり。應に知るべし。樂に三種有り、一には外樂、謂く五識所生の樂なり。二には内樂、謂く初禪二禪三禪の意識所生の樂なり。三には法樂樂、謂く智慧所生の樂なり。此智慧所生の樂は佛の功德を受するより起れり。是遠離我心と、遠離無安樂生心と、遠離自供養心と、是三種の心清淨にして増進するを略して妙樂勝眞心と爲す。妙の言は其れ好なり。此樂は佛を緣じて生ずるを以ての故に、勝の言は三界の中の樂に勝出し、眞の言は虚偽ならず、顛倒せざるなり。

【二】 第九願事成就を明す。

【一】 願事成就とは「是の如きの菩薩の智慧心と方便心と無障心と勝眞心とをもて、能く清淨の佛國土に生ず。應に知るべし。應知とは、謂く應に此四種の清淨の功德をもて、能く彼清淨の佛國土に生ずることを得。是れ他縁もて生ずるに非ざるを知るべし」となり。是を菩薩摩訶薩の五種の法門に隨順し、作す所の意に隨うて自在に成就すと名く。向に説く所の如し。身業、口業、意業、智業、方便智業は、隨順の法門なるが故に。隨意自在とは、言は此五種の功德力もて、能く清淨佛土に生じて出沒自在なり。身業とは禮拜なり。口業とは讚歎なり。意業は作願なり。智業とは觀察なり。方便智業とは廻向なり。言は、此五種の業和合すれば、則ち是れ往生淨土の法門に隨順して、自在の業成就

【二】第十利行満足を明す。利行満足とは自利利他の行満足とは二利成就して速に佛果を證す。

【蓮華藏世界】盧舍那佛、蓮華藏世界に坐す。今蓮華藏世界とは無量壽

す。

【二】利行満足とは、復五種の門有り。漸次に五種の功德を成就す。應に知るべし。何者か五門なる。一には近門、二には大會衆門、三には宅門、四には屋門、五には園林遊戯地門なり。此五種は入出次第の相を呈現す。入相の中初めて淨土に至る、是れ近相なり。謂く大乘正定聚に入り、阿耨多羅三藐三菩提に近づくなり。淨土に入り已れば便ち如來の大會衆の數に入るなり。衆の數に入り已りて、當に修行安心の宅に至るべし。宅に入り已れば、當に修行所居の屋寓に至るべし。修行成就し已りて當に教化地に至るべし。教化地は即ち是れ菩薩の自娛樂の地なり。是故に出門を園林遊戯地門と稱す。此五種の門初の四種の門は人の功德を成就し、第五の門の出の功德を成就するなり。此入出の功德何者か是なる。釋して言はく、『入の第一門とは、阿耨陀佛を禮拜したてまつり、彼國に生ぜんと爲るを以ての故に安樂世界に生ずるを得。是を入の第一門と名く。』佛を禮したてまつり、佛國に生ぜんと願す。是れ初の功德の相なり。『入の第二門とは、阿耨陀佛を讚歎したてまつり、名義に隨順し如來の名を稱し、如來の光明智相に依りて修行するを以ての故に、大會衆の數に入るを得。是を入の第二門と名く。』如來の名義に依りて讚歎したてまつる、是れ第二功德の相なり。入の第三門とは、一心に専ら念じ、彼に生ぜんと作願して著摩他寂靜三昧の行を修するを以ての故に蓮華藏世界に入るを得。是を入の第三門と名く。』寂靜の止を修せんが爲の故に、一心に彼國に生ぜんと願す。是れ第三の功德の相なり。『入の第



佛の所居の住處なり。

【三】 入出二門に約して自利利他を分別す。

四門とは、専ら念じて彼妙莊嚴を觀察して、毘婆舍那を修するを以ての故に、彼處に到りて種種の法味樂を受用することを得。是を入の第四門と名く。『種種の法味樂とは、毘婆舍那の中に、觀佛國土清淨味と、攝受衆生大乘味と、畢竟住持不虛作味と、類事起行願取佛土味有り。是の如き等の無量の莊嚴佛道味有るが故に種種と言ふ。是を第四門の功德の相なり。』出の第五門とは大慈悲を以て一切の苦惱の衆生を觀察し、應化身を示し、生死の關、煩惱の林中に廻入し、遊戲の神通もて教化地に至る。本願力を以て廻向するが故に、是を出の第五門と名く。『示應化身とは、法華經「普門」示現の類の如くなり。遊戲に二義有り。一には自在の義、菩薩衆生を度するは、譬へば師子の鹿を搏つが如く、爲す所難からざること遊戲するが如し。二には度無所度の義なり、菩薩衆生を觀するに畢竟じて所有無し。無量の衆生を度すと雖も、實に一衆生として滅度を得る者無し。示して衆生を度すること遊戲するが如し。』本願力と言ふは、大菩薩法身の中に於て、常に三昧に在せども、而も種種の身種種の神通種種の說法を現するを示す。皆本願力を以て起せり。譬へば阿修羅の琴の、鼓する者無しと雖も、音曲自然なるが如し。是を教化地の第五の功德相と名く。

【二】 菩薩、入の四種の門もて自利の行成就す。應に知るべし。『成就とは、謂く自利満足するなり。應知とは、謂く應に自利に由るが故に則ち能く利他す。是れ自利に能はずして能く利他するには非ざるを知るべしとなり。』菩薩、出の第五門の廻向もて利益他の行成就す。應に知るべし。『成就とは、謂く廻向の因を以て教化地の果を證す。若は因若は果

【遍に二種有り云】  
 云、聖心遍とは自  
 用身、法身遍と  
 は、即ち是れ法身  
 なり、言ふ所の聖  
 心は是れ妙智、言  
 ふ所の法身は是れ  
 妙境なり。

一事として利他する能はざる有る無し。應知とは、謂く應に利他に由るが故に則ち能く自利す。是れ利他に能はずして能く自利するには非ざるを知るべしとなり。『菩薩是の如く五念門の行を修して、自利利他して速に阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得るが故に。』佛の所得の法を名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲す。此菩提を得るを以ての故に、名けて佛と爲す。今速に阿耨多羅三藐三菩提を得と言ふは、是れ早く作佛を得るなり。阿をば無に名け、耨多羅をば上と名け、三藐をば正と名け、三をば遍と名け、菩提をば道と名く。統て之を譯して、名けて無上正遍道と爲す。無上と言は、此道は理を究め性を盡して更に過る者無し。何を以てか之を言ふとならば、正を以ての故に。正とは聖智なり。法相の如く知るが故に稱けて正知と爲す。法性は無相の故に。聖智は無知なり。遍に二種有り。一には聖心遍く一切の法を知る。二には法身、遍く法界に滿つ。若し身若しは心、遍ぜざる無し。道とは無礙道なり、經に言はく、『十方無礙の人一道より生死を出づ』と。一道とは一無礙道なり。無礙とは、謂く生死即ち是れ涅槃なりと知るなり。是の如き等の不二の法門に入るは無礙の相なり。問うて曰はく、『何の因縁有りてか速得成就阿耨多羅三藐三菩提と言へるや。』答へて曰はく、『論に言はく、五念門の行を修して自利利他成就するを以ての故に。』と。然るに曷に其本を求むるに、阿彌陀如來を増上縁と爲す。他利と利他とを談するに左右有り。若し佛より言はば、宜しく利他と言ふべし。衆生より言はば、宜しく他利と言ふべし。今將に佛力を談せんとす。是故に利他を以て之を言ふ。當に知るべし此意なり。凡そ

是れ彼淨土に生ずること、及び彼菩薩人天の所起の諸行は、皆阿彌陀如來の本願力に縁るが故なり。何を以てか之を言ふとなれば、若し佛力に非ずんば四十八願便ち是れ徒設ならん。今均しく三願を取りて用て義意を證せん。願に言はく、「設し我佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して我國に生ぜん」と欲して、乃至十念せんに、若し生ぜずんば、正覺を取らじ。唯五逆と正法を誹謗するをを除く」と。佛の願力に縁るが故に、十念の念佛便ち往生するを得。往生を得るが故に即ち三界輪轉の事を免る。輪轉無きが故に、所以に速なることを得。一の證なり。願に言はく、「設し我佛を得たらんに、國中の人天、正定聚に住し必ず滅度に至らずんば正覺を取らじ」と。佛の願力に縁るが故に正定聚に住す。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至りて、諸の廻伏の難無し、所以に速なることを得。二の證なり。願に言はく、「設し我佛を得たらんに、他方佛土の諸の菩薩衆、我國に來生して究竟して必ず一生補處に至らん。其本願自在の所化あつて、衆生の爲の故に、弘誓の鑑を被て徳本を積累し、一切を度脱して諸佛の國に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恆沙無量の衆生を聞化して無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん。若し爾らずんば正覺を取らじ」と。佛の願力に縁るが故に常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習す。常倫諸地の行を超出するを以ての故に、所以に速なることを得。三の證なり。斯を以て推するに他力を増上縁と爲すに、然らざるを得んや。當に復例を引いて自力他力の相を示すべし。人三塗を畏るるが

【二三】 總結なり。

【論の初に歸禮するは】世尊の二字を指す。  
【述作の人】並べて阿難、天親を指す。

故に禁戒を受持するが如し。禁戒を受持するが故に、能く禪定を修す。禪定を以ての故に神通を修習す。神通を以ての故に能く四天下に遊ぶ。是の如き等を名けて自力と爲す。又劣夫の驢に跨りて上らざれども、轉輪王の行に従へば、便ち虚空に乗じて四天下に遊ぶ。障礙する所無きが如し。是の如き等を名けて他力と爲す。愚なる哉。後の學者、他力の乘すべきを聞いて、當に信心を生ずべし、自ら局分する勿れと。

【二三】 無量壽修多羅優婆提舍願生の偈、略して義を解し竟んぬ。經の始に如是と稱するは信を能入とするを彰し、末に奉行と言ふは服膺の事を表し已んぬ。論の初に歸禮するは宗旨に由有るを明し、終りに義竟ると云ふは、所詮理畢るを示す。述作の人殊なれども茲に於て例を成す。

無量壽經優婆提舍願生偈婆藪槃頭菩薩造并註卷下 終





○當書二卷道綽の撰なり。無量壽經の概論にして、意を求めしむるにあり。内容を十二門に分てり。

# 安樂集 卷上

釋道綽撰

此安樂集一部の内に總じて十二の大門有り、皆經論を引いて證明して信を勧め往を求めしむ。

今先づ第一大門の内に就て、文義衆しと躑も略して九門の料簡を作り、然して後に文に造る。第一に教興の由る所、時に約し機に被るを明して、勸めて淨土に歸せしむ。第二に諸部の大乘に據りて説聽の方軌を顯す。第三に大乘の聖教に據りて、諸の衆生の發心の久近供佛の多少を明して、時會の聽衆をして力め勸みて發心せしめんと欲す。第四に諸經の宗旨の不同を辨す。第五に諸經の得名、各異なるを明す。『涅槃』『般若經』等の如きは、法に就て名と爲す。自ら喩に就く有り、或は事に就く有り、亦時に就き處に就く有り、此例一に非ず。今此『觀經』は、人法に就て名と爲す。佛は是れ人の名、『說觀無量壽』は是れ法の名なり。第六に説人の差別を料簡す。諸經の起説五種に過ぎず、一には佛の白説、二には聖弟子の説、三には諸天の説、四には神仙の説、五には變化の説なり。此『觀經』は五種の説の中世尊の自説なり。第七に略して眞應二身を明し、並に眞應二土を辨す。第八に彌陀の淨國は位上下を該ね、凡聖通じて往くことを顯す。第九に彌陀淨國三界の攝と不攝とを明す。

【一】教興の時機相應なることを明して勸めて淨土に歸せしむ。

【白法】黒法に對す、善法のこと。三學、六度等の善根功德をいふ。【十二部經】佛、說法の體裁に十二長行説、重頌説、授記説、孤起説、無問自説、因縁説、譬喩説、本事説、本生説、方廣説、未曾有説、論議説これなり。

第一大門の中、教興の由る所時に約し機に被らしむるを明して淨土に歸せしむとは、若し教時機に赴けば修し易く悟り易し。若し機教時に乖けば修し難く入り難し。是故に『正法念經』に云はく、行者一心に道を求むる時、常に當に時と方便とを觀察すべし。若し時を得ざれば方便無し、是を名けて失と爲す、利と名けず。何となれば濕木を擲て以て火を求めんに火得べからず、時に非ざるが故に。若し乾薪を折りて以て水を覓めんに、水得べからざるが如し、智無きが故に。是故に『大集月藏經』に云はく、「佛滅度の後第一の五百年には我諸の弟子慧を學する堅固なるを得ん。第二の五百年には定を學する堅固なるを得ん。第三の五百年には多聞讀誦を學する堅固なるを得ん。第四の五百年には塔寺を造立し福を修し懺悔する堅固なるを得ん。第五の五百年には白法隱滯して多く諍訟有らん、微く善法有りて堅固なるを得ん」と。又彼經に云はく、「諸佛世に出でたまふに、四種の法有りて衆生を度す。何等をか四と爲す。一には口に十二部經を説く、即ち是れ法施の度衆生なり。二には諸佛如來に無量の光明相好有り。一切衆生但能く心を繋けて觀察すれば益を獲ずといふこと無し。是れ即ち身業の度衆生なり。三には無量の徳用神通道力種種の變化有り、即ち是れ神通力の度衆生なり。四には諸佛如來に無量の名號有り。若し總若し別、其れ衆生有りて心を繋て稱念すれば、障を除き益を獲て皆佛前に生ぜずといふこと莫し。即ち是れ名號の度衆生なり」と。計るに今時の衆生は即ち佛世を去りて後の第四の五百年に當れり。正しく是れ懺悔し福を修し應に佛の名號を稱すべき時の者なり。若し一念阿彌陀佛を稱すれば即ち能く

【八濁】世に流る  
五つの、劫濁、見  
きこと、劫濁、見  
濁、煩惱濁、衆生  
濁、命濁。

八十億劫生死の罪を除却す。一念既に雨り、況んや常念を修するは即ち是れ恆懺悔の人なり。又若し聖を去る近ければ、則ち前の者は定を修し慧を修する是れ其正學なり。後の者は是れ兼なり。如し聖を去る已に遠ければ、則ち後の者は稱名是れ正なり。前の者は是れ兼なり。何の意か然るや。寔に衆生聖を去る遙遠にして機解浮淺暗鈍なるに由るが故なり。是を以て韋提大士自ら爲にし、及び末世五濁の衆生の多劫に輪廻して徒に痛焼を受くるを哀愍するが故に、能く假に苦縁に遇うて啓開す。出路豁然たり。大憐愍を加へ勸めて極樂に歸せしむ。若し斯に於て進趣せんと欲せば、勝果階ひ難し。唯淨土の一門のみ有りて情を以て怖うて趣入すべし。若し衆典を披尋せんと欲せば、勸めたる處彌多し。遂に以て眞言を探り集めて助けて往益を修せしむ。何となれば前に生ずる者は後を導き、後に去る者は前に防めて、連續無窮にして願くば休止せざらしめんと欲す。無邊の生死海を盡さんが爲の故なり。

第二に諸部の大乘に據りて證驗の方軌を明すと、中にて六有り。第一に「大集經」に云はく、「説法の者に於ては醫王の想を作し、拔毒の想を作せ。所説の法には甘露の想を作し、醍醐の想を作せ。其聽法の者は增長勝解の想を作し、愈病の想を作せ。若し能く是の如くなれば説者聽者は皆佛法を紹隆して、常に佛前に生ずるに堪へたり」と。第二に「大智度論」に云はく、「聽者端視すること渴飲の如く、一心に語議の中に入りて、法を聞いて踊躍し心に悲喜せん。是の如きの人には應に爲に説くべし」と。第三に彼論に又云はく、「二種の人有り



會て更に……教を聽く無量壽經下在の類なり。

【解脱】煩惱の繫縛を解きて迷界の業苦を脱す。迷を轉じて自由自在になること。  
【毗連河沙】尼連禪河の沙の多きが如きといふ形容なり。  
【恆河沙】恆河の沙といふことにして、無數無量の大數をあらはす語。

て福を得ること無量無邊なり。何等をか二と爲す。一には説法を樂ふの人、二には聽法を樂ふの人なり」と。是故に阿難佛に白して言さく、「舍利弗日蓮何を以てか得る所の智慧神通聖弟子の中に於て最も殊勝と爲すや。」「佛阿難に告げたまはく、「此二人は、因中の時に於て法の因縁の爲に千里を難しとせず。是故に今日最も殊勝爲り。」「第四に『無量壽大經』に云はく、「若人善本無ければ此經を聞くことを得ず、清淨にして戒を有てる者乃し正法を聞くことを獲」と。第五に云はく、「會て更に世尊を見たてまつるもの則ち能く此事を信ず。億の如來に奉事するもの樂つて是の如きの教を聽く。」「第六に『無量清淨覺經』に云はく、「善男子善女人淨土の法門を説くを聞いて、心に悲喜を生じて身の毛爲堅て拔出するが如くなる者は、當に知るべし。此人は過去の宿命に已に佛道を作せるなり。若し復人有りて淨土の法門を説くを聞いて、都て信を生ぜざる者は、當に知るべし、此人は始に三惡道より來りて殃咎未だ盡きず、此に爲て信向無きのみ。我説く、此人は未だ解脱を得べからず」と。是故に『無量壽大經』に云はく、「憍慢と弊と懈怠とは以て此法を信じ難し」と。

第三に大乘の聖教に據りて衆生の發心の久近供佛の多少を明すと、『涅槃經』に云ふが如く、「佛迦葉菩薩に告げたまはく、若し衆生有りて飄連河沙等の諸佛の所に於て、菩提心を發して、然して後に乃ち能く惡世の中に於て、是大乘經典を聞いて誹謗を生ぜず。若し衆生一恆河沙等の佛の所に於て菩提心を發す有りて、然る後に乃ち能く惡世の中に於て經を聞いて誹謗を起さず、深く愛樂を生ず。若し二恆河沙等の佛の所に於て菩提心を發す有り

【菩提心】菩薩の上求菩提、下化衆生の心を發するをいふ。

【陀羅尼】ドハーラニー (Dharani) 總持、能持、能遮と譯す。諸の惡法を捨離して衆の善法を持すること。  
【四重五逆】殺生、偷盜、邪淫、妄語、殺父、殺母、殺阿羅漢、滅和合僧、出佛身血。  
【三途】地獄、餓鬼、畜生。

て、然る後に乃ち能く惡世の中に於て是法を謗せず、正解信樂し受持讀誦す。若し三恆河沙等の佛の所に於て菩提心を發す有りて、然る後に乃ち能く惡世の中に於て是法を謗せず、經を書寫す。人の爲に説くと雖も未だ深義を解らず。何を以ての故に、此の如きの教量を須ふるや。今日坐下にして經を聞く者は、曾し已に心を發して多佛を供養すといふことを彰さんが爲なり」と。又大乘經の威力の不可思議なるを顯す。是故に經に云はく、「若し衆生有りて是經典を聞けば、億百千劫にも惡道に墮せず」と。何を以ての故に。是妙經典の流布せらるる處は當に知るべし。其地は即ち是れ金剛なり。是中の諸人も亦金剛の如し。故に知んぬ。經を聞いて信を生ずる者は、皆不可思議の利益を獲るなり。

第四に次に諸經の宗旨の不同を辨すと、若し『涅槃經』に依れば佛性を宗と爲す。若し『維摩經』に依れば不可思議解脫を宗と爲す。若し『般若經』に依れば空慧を宗と爲す。若し『大集經』に依れば陀羅尼を宗と爲す。今此『觀經』は觀佛三昧を以て宗と爲す。若し所觀を論ずれば依正二報に過ぎず。下の諸觀に依つて辨ずる所の如し。若し『觀佛三昧經』に依れば、云はく、「佛父王に告げたまはく、諸佛の出世に三種の益有り。一には口に十部經を説く、法施の利益なり。能く衆生無明の暗障を除き、智慧の眼を開きて諸佛の前に生じて早く無上菩提を得。二には諸佛如來に身相光明無量の妙好有り。若し衆生有りて稱念觀察すれば、若し總相若し別相佛身の現在と過去とを問ふこと無し。皆能く衆生の四重五逆を除滅して永く三途に背き、意の所樂に隨つて常に淨土に生じ乃至成佛す。三には

【伊蘭】 エーラン名、臭氣強く、四十由旬の間を熏ず。花は紅色にして愛食すといふ。

父王を勸めて念佛三昧を行ぜしめん。父王佛に白さく、佛地の果徳眞如實相第一義空、何に因つてか弟子をして之を行ぜしめざると。佛父王に告げたまはく、諸佛の果徳に無量深妙の境界神通解脫有り。是れ凡夫所行の境界に非ざるが故に。父王を勸めて念佛三昧を行ぜしめん。父王佛に白さく、念佛の功其狀云何。佛父王に告げたまはく、伊蘭林の方四十由旬ならんに、一科の牛頭梅檀有りて、根芽有り。雖も猶未だ土を出でざるに、其伊蘭林唯臭して香しきこと無し。若し其華果を斲する有らば狂を發して而して死せん。後の時に梅檀の根芽漸漸に生長して纔に樹と成らんと欲するに、香氣昌盛にして遂に能く此林を改變して普く皆香美ならしむ。衆生見る者皆希有の心を生ぜんが如し。佛父王に告げたまはく、一切衆生生死の中に在りて、念佛する心も亦復是の如し。但能く念を繋けて止まざれば、定めて佛前に生ぜん。一たび往生を得れば即ち能く一切の諸惡を改變して大慈悲を成ぜんこと、彼香樹の伊蘭林を改むるが如し」と。言ふ所の伊蘭林とは衆生の身内の三毒三障無邊の重罪に喩へ、梅檀と言ふは衆生念佛の心に喩ふ。纔に樹を成ぜんと欲すとは、謂く一切衆生但能く念を積みて斷ぜざれば業道成辦するなり。問うて曰はく、「一切衆生の念佛の功を計して、亦一切に應じて知るべし。何に因つてか一念の力能く一切の諸障を斷ずること、一香樹の四十由旬の伊蘭林を改めて、悉く香美ならしむるが如くならんや。」答へて曰はく、「諸部の大乘に依つて念佛三昧の功能不可思議なるを顯さん。何とならば『華嚴經』に云ふが如し。譬へば人有りて獅子の筋を用て、以て琴絃とせんに、音聲一たび奏すれば一切の餘の絃悉く

【報佛】報身のこ  
と、三身の一、因  
位の願行に酬報し  
て成就したる萬德  
圓滿の佛身をいふ  
【化身】三身の一  
機に應じ形を變じ  
て現ずる佛身をい  
ふ。

皆斷壞するが如し。若し人菩提心の中に念佛三昧を行すれば、一切の煩惱一切の諸障悉く皆斷滅す。亦人有りて牛羊驢馬一切の諸乳を搗り取りて一器の中に置かんに、若し獅子の乳一滴を持て之に投ずれば、直に過つて難むこと無し。一切の諸乳悉く皆破壞して變じて清水と爲るが如し。若し人但能く菩提心の中に念佛三昧を行すれば、一切の惡魔、諸障直に過つて難むこと無し」と。又彼經に云はく、「譬へば人有りて翳身藥を持て處處に遊行するに、一切の餘人を見ざるが如し。若し能く菩提心の中に、念佛三昧を行すれば、一切の惡神一切の諸障是人を見ず。所詣の處に隨つて能く遮障すること無し。何が故に能く爾るや。此念佛三昧は、即ち是れ一切の三昧の中の王なるが故なり」と。

第七に略して三身三土の義を明さば、問うて曰はく、『今現在の阿彌陀佛は是れ何の身ぞ。極樂の國は是れ何の土ぞ。』答へて曰はく、『現在の彌陀は是れ報佛、極樂寶莊嚴國は是れ報土なり。然るに古舊相傳へて皆云ふ、阿彌陀佛は是れ化身、土は是れ化土なりと。』此は大なる失と爲す。若し爾らば穢土も亦化身の所居なり。淨土も亦化身の所居ならば未審、如來の報身は更に何の土に依るや。今大乘同性經に依つて報化淨穢を辨定せば、經に云はく、「淨土の中に成佛するは悉く是れ報身なり、穢土の中に成佛するは悉く是れ化身なり」と。彼經に云はく、「阿彌陀如來蓮華聞數星王如來、龍主王如來、寶德如來等の諸の如來の清淨佛刹にして現に道を得たまへる者、當に道を得たまはん者、是の如きの一切は皆是れ報身の佛なり。何者か如來の化身なる。由し今日の躡歩健如來、魔恐怖如來の如き、是の



【法身】三身の一無色無形の理佛のこと。

如き等の一切の如來、穢濁世の中に現に成佛したまへる者、當に成佛したまはん者、兜率より下り乃至一切の正法一切の像法一切の末法を住持したまへる、是の如きの化事は皆是れ化身の佛なり。何者か如來の法身なる。如來の眞法身は色無く形無く、現無く著無く、見るべからず。言説無く住處無く、生無く滅無し。是を眞法身の義と名く」と。問うて曰はく、「如來の報身は常住なり。云何が『觀音授記經』に、阿彌陀佛入涅槃の後觀世音菩薩、次に佛處を補ふと云ふや。答へて曰はく、「此は是れ報身隱沒の相を示現す、滅度にはあらざるなり。彼經に云はく、「阿彌陀佛入涅槃の後、復深厚善根の衆生有りて還見る、故の如し」と。即ち其證なり。又『寶性論』に云はく、「報身に五種の相有り、說法と及び可見と、諸業不休息と及び休息隱沒と不實體とを示現するなり」と。即ち其證なり。問うて曰はく、「釋迦如來の報身報土は何れの方に在らずや。答へて曰はく、『涅槃經』に云はく、「西方此を去ること四十二恆河沙の佛土に世界有り、名けて無勝と曰ふ。彼土の所有の莊嚴亦西方極樂世界の如く、等くして異り有る無し。我彼土に於て世に出現して衆生を化せんが爲の故に、來りて此娑婆國土に在り。但我のみ此土に出づるに非ず、一切如來、亦復是の如し」と。即ち其證なり。問うて曰はく、『鼓音經』に云はく、「阿彌陀佛に父母有り、明に知んぬ、是れ報佛報土に非ず」と。答へて曰はく、『子但名を聞いて經の旨を究め尋ねずして此疑を致せり。之を毫毛に錯りて之を千里に失すと謂ふべし。然るに阿彌陀佛亦三身を具へたまへり。極樂に出現したまふは即ち是れ報身なり。今父母有りと云ふは是れ穢土の中に示現したまへる化身の父

【成壞】四劫の略稱。成劫、住劫、壞劫、空劫、世界の成壞に就いて立つ。

母なり。亦釋迦如來の如く淨土の中に成したまふは其れ報佛なり。此方に應來して父母有るを示して成じたまふは其化佛なり。阿彌陀佛も亦復是の如し。又『鼓音聲經』に云ふが如し。爾時阿彌陀佛聲聞衆と俱なり。國を清泰と號す。聖王の所住なり。其城は縱廣十千由旬なり。阿彌陀佛の父は是れ轉輪聖王なり。王をば月上と名け、母をば珠勝妙顏と名け、魔王をば無勝と名け、佛子をば月明と名け、提婆達多をば寂意と名け、給侍の弟子をば無垢稱と名くと。又上來所引並に是れ化身の相なり。若し是れ淨土ならば豈輪王及び城女人等有らんや。此れ即ち文義明然たり、何ぞ分別を待たん。皆善く尋ね究めずして名に迷うて執を生ぜしむることを致す。問うて云はく、『若し報身に隱没休息の相有らば亦淨土に成壞の事有るべしや。答へて曰はく、『斯の如きの難は古より今に將りて義亦通じ難し。然りと雖も今敢て經を引いて證と爲す、義も亦知るべし。譬へば佛身は常住なれども衆生涅槃有りと見るが如く、淨土も亦爾なり。體成壞に非ざれども、衆生の所見に隨つて成有り壞有り。』『華嚴經』に云ふが如く、『一由導師の種種無量の色を見るが如く、衆生の心に隨うて佛刹を見るも亦然なり』と。是故に『淨土論』に云はく、『一質成せざるが故に淨穢に虧盈有り、異質成せざるが故に原を搜るに即ち冥一なり。無質成せざるが故に緣起すれば則ち萬形なり』と。故に知んぬ若し法性の淨土に據れば則ち清濁を論ぜず。若し報化の大悲に據れば則ち淨穢無きに非ず。又汎く佛土を明すに機感の不同に對して、其三種の差別有り。一には眞より報を垂るるを名けて報土と爲す、猶し日光の四天下を照すが如し。法

四分律 六十卷  
具きに四分律藏といふ、或律の各頌を四分となすが故に此名あり。

身は日の如く、報化は光の如し。一には無にして忽有なる之を名けて化と爲す。即ち四分律に云ふが如き、錠光如來提婆城と、拔提城と相近くして共に親婚を爲して往來す。後の時に忽然として火を化して燒却す。諸の衆生をして此無常を視しむるに、厭を生じ佛道に歸向せしめざる莫し」と。是故に經に云はく、「或は劫火を現じて燒くに天地皆洞然たり。衆生の常想有るものには、照に無常を知らしめ、或は貧乏を濟はんが爲に現するに無盡藏を立して縁に隨うて廣く閑導して菩提心を發さしむ」と。三には穢を隠し淨を顯す、維摩經の如く、「佛是指を以て地を按ずるに、三千刹土嚴淨ならざる莫し」と。今此無量壽國は即ち是れ眞より報を垂るる國なり。何を以てか知るを得たる、『觀音授記經』に云ふに依るに、『未來に觀音成佛して阿彌陀佛の處に替りたまふ』と。故に知んぬ是れ報なり。」

第八に彌陀淨國は位上下を該ね、凡聖通じて往くことを明すとは、今此無量壽國は是れ其報の淨土なり。佛願に由るが故に乃ち上下に該通せり。凡夫の善をして並に往生を得しむるを致す、上を該ぬるに由るが故に、天親龍樹及び上地の菩薩亦皆生ずるなり。是故に大經に云はく、「彌勒菩薩佛に問ふ。未だ知らず、此界に幾許の不退の菩薩有りてか、彼國に生ずることを得る。佛言はく、此娑婆世界に六十七億の不退の菩薩有りて、皆當に往生すべし。若し廣く引かんと欲せば、餘方も皆爾なり」と。問うて曰はく、「彌陀の淨國は既に位上下を該ね、凡聖を問ふこと無く、皆通じて往くと云はば、未だ知らず唯無相を修して生ずるを得るや。爲當凡夫の有相も亦生ずることを得るや。』答へて曰はく、『凡夫智淺ければ

多く相に依つて求むるに決めて往生するを得。然るに相善は力微なるを以て但相の土に生  
 じて唯報化佛を觀るなり。』是故に『觀佛三昧經』の菩薩本行品に云はく、「文殊師利佛に白  
 して言さく、當に知るべし、我過去無量劫數に凡夫爲りし時を念するに、彼世に佛有す、寶  
 威徳上王如來と名く。彼佛出たまふ時今と異なる無し。彼佛亦長丈六身紫金色にして三  
 乘の法を説きたまふこと釋迦文の如し。爾時彼國に大長者有り、一切施と名く。長者子有  
 りき、名をば戒護と曰ふ。子母胎に在りし時、母敬信を以ての故に預め其子の爲に三歸  
 依を受く。子既に生じ已りて年八歳に至つて父母佛を家に請じて供養す。童子佛を見たて  
 まつりて佛の爲に禮を作す。佛を敬ひたまふ心重くして目暫くも捨てず。一たび佛を見た  
 てまつるが故に即ち百萬億那由他劫の生死の罪を除却するを得。是より以後常に淨土に生  
 じて即ち百億那由他恆河沙の佛に値遇したてまつることを得。是諸の世尊亦相好を以て  
 衆生を度脱したまふ。爾時童子一一に親しく侍へたてまつる間に空しく缺る無し。禮拜供養し  
 合掌して佛を觀たてまつる。因縁力を以ての故に復百萬阿僧祇の佛に値遇したてまつるこ  
 とを得。彼諸佛等亦色身相好を以て衆生を化度して、是より以後即ち百千億の念佛三昧門  
 を得、復阿僧祇の陀羅尼門を得たり。既に此を得已りて諸佛現前して乃し爲に無相の法を説  
 きたまふ、須臾の間に首楞嚴三昧を得たり。時に彼童子但三歸を受け一たび佛を禮するが  
 故に。諦に佛身を觀じて心に疲厭無し、此因縁に由つて無數の佛に値へり。何に況んや  
 繫念具足し思惟して佛の色身を觀ぜんをや。時に彼童子豈異人ならんや、是れ我身なり。



【無相離念】眞如の理體を觀じて、有にもあらず、空にもあらず、非有非非を絶してあらゆる念想を拂ふ觀法をいふ。

爾時世尊文殊を讚じて言はく、善い哉善い哉、汝一たび佛を禮するを以ての故に、無數の諸佛に値ふを得たり。何に況んや未來の我諸の弟子勤めて佛を觀ぜん者、勤に佛を念ぜん者をや。佛阿難に勅したまはく、汝文殊師利の語を持て、遍く大衆及び未來世の衆生に告げよ。能し能く佛を禮せん者、若し能く佛を念ぜん者、若し能く佛を觀せん者は、當に知るべし、此人は文殊師利と等しくして異有ること無し、身を他世に捨て文殊師利等の、諸の菩薩其和上爲らんと。此文を以て證す。故に知んぬ淨土は相の土に該通せり。往生せんこと謬らず。若し無相離念を體と爲すと知りて、而して縁の中に往くことを求むる者は多く上輩の生なるべし。是故に天親菩薩の論に云はく、「若し能く二十九種の莊嚴清淨を觀ずるは、即ち略して一法句に入るなり。一法句とは謂く清淨句なり。清淨句とは即ち是れ智慧無爲法身なるが故に。何が故に廣略相入を須ふるや。但し諸佛菩薩に二種の法身有り。一には法性法身、二には方便法身なり。法性法身に由るが故に方便法身を生ず。方便法身に由るが故に法性法身を顯出す。此二種の法身は異にして分つべからず、一にして同すべからず、是故に廣略相入す。菩薩若し廣略相入を知らざれば則ち自利利他すること能はず。無爲法身とは即ち法性身なり。法性寂滅なるが故に即ち法身無相なり。法身無相なるが故に則ち能く相ならずといふこと無し。是故に相好莊嚴即ち是れ法身なり」と。法身は無知なるが故に則ち能く知らざる無し。是故に一切種智は即ち是れ眞實の智慧なり。緣に就て總別二句を觀することを知ると雖も、實相に非ざること莫きなり。實相を知るを

【繡素】 黒衣の人、即ち僧侶と俗人とを繡素といふ。

【有漏の長津】 煩惱を増長せしむる世界。

【四倒】 世間の實相なる非常を常、非樂を樂、非我を我、非淨を淨と倒すること。

【四時】 春、夏、秋、冬なり。

【二】 諸部の大乗に據つて説聽の方軌を顯はす。

以ての故に、即ち三界の衆生の虚妄の相を知るなり。三界の衆生の虚妄を知るを以ての故に、即ち眞實の慈悲を起すなり。眞實の慈悲を知るを以ての故に、即ち眞實の歸依を起すなり。今の行者繡素を問ふ無く、但能く生無生を知りて二諦に違はざる者は、多く應に上輩の生に落在すべし。

第九に彌陀淨國の三界の攝と不攝とを明す。問うて曰はく、『安樂國土は三界の中に於て何れの界の所攝ぞや。』答へて曰はく、『淨土は勝妙にして體世間を出でたり。此三界は乃ち是れ生死凡夫の闇宅なり。復苦樂少く殊に脩短異有り、雖も、統て如し之を觀するに有漏の長津に非ずといふこと莫し。倚伏相乘して循環無際なり。雜生の觸受、四倒の長溝、且は因且は果、虚偽相習へり、深く厭ふべきなり。是故に淨土は三界の攝に非ず。』又『智度論』に云ふに依るに、『淨土の果報は欲無きが故に欲界に非ず、地居なるが故に色界に非ず、形色有るが故に無色界に非ず』と。地居と言ふと雖も精勝妙絶なり。是故に天親の論に云はく、『彼世界の相を觀するに、三界の道に勝過せり。究竟じて虚空の如く、廣大にして邊際無し』と。是故に大經の讚に云はく、『妙土廣大にして數限に超えたり。自然の七寶の合際する所なり。佛の本願力の莊嚴より起れり。清淨大攝受を積首したてまつる。世界の光耀妙に殊絶なり。適悅晏安にして四時無し。自利利他の力圓滿して、方便巧莊嚴を歸命したてまつる』と。

【二】 第二大門の中に三番の料簡有り。第一に發菩提心を明し、第二に異見邪執を破し、

第三に廣く問答を施して疑情を釋去す。初の發菩提心に就て内に四番有り。一には菩提心の功用を出し、二には菩提の名體を出し、三には發心に異有することを顯し、四には問答解釋す。

第一に菩提心の功用を出すとは、大經に云はく、「凡そ淨土に往生せんと欲せば、要す須く菩提心を發すを源と爲すべし」と。云何が菩提なる。乃ち是れ無上佛道の名なり。若し發心作佛せんと欲する者は此心廣大にして法界に遍周せり。此心究竟じて等きこと虚空の若し。此心長遠にして未來際を盡す。此心普く備れば二乗の障を離る。若し能く一たび此心を發せば、無始生死の有淪を傾く。所有の功德菩提に廻向すれば、皆能く遠く佛果に詣てて失滅有ること無し。譬へば華を五淨に寄せぬれば、風口にも萎まず。水靈河に附しぬれば世早にも竭くこと無きが如し。第二に菩提の名體を出すとは、然るに菩提に三種有り。一には法身の菩提、二には報身の菩提、三には化身の菩提なり。法身の菩提と言ふは謂ゆる眞如實相第一義空なり。自性清淨にして體に穢染無し。理天真より出でて修成を假らざるを名けて法身と爲す。佛道の體本なるを名けて菩提と曰ふ。報身の菩提と言ふは備に萬行を修して能く報佛の果を感ず。果因に酬するをもて名けて報身と曰ふ。問通無礙なるを名けて菩提と曰ふ。化身の菩提と言ふは、謂く、報より用を起して、能く萬機に趣くを名けて化身と爲す。益物圓通するを名けて菩提と曰ふ。第三に發心に異有することを顯すとは、今謂く、行者因を修し心を發すに、其三種を具せり。一には要す須く有無を識

【二乘】 聲聞乘、菩薩乘。

【二諦】眞諦と俗諦とをいふ。諦は諦理、動かすべからず。

達すべし。本より已來自性清淨なりと。二には萬行を緣修す、八萬四千の諸波羅蜜門等なり。三には大慈悲を本と爲して恆に運度せんと擬するを懷と爲す。此三因能く大菩提と相應す、故に發菩提心と名く。又『淨土論』に據らば云はく、「今發菩提心と言ふは即ち是れ願作佛の心なり。願作佛の心とは即ち是れ度衆生の心なり。度衆生の心とは即ち衆生を攝取して有佛の國土に生ぜしむるの心なり」と。今既に淨土に生ぜんと願す。故に先づ須く菩提心を發すべし。第四問答解釋すとは、問うて曰はく、「若し備に萬行を修して能く菩提を感じ成佛を得とは何故ぞ。『諸法無行經』に云はく、「若し人菩提を求むれば即ち菩提有ること無し、是人菩提を遠ざかる猶し天と地の如し」と。答へて曰はく、「菩提の正體は理求むるに無相なり、今相を作して求む。理實に當らず。故に入遠と名く。是故に經に言はく、「菩提は心以て得べからず、身を以て得べからず」と。今謂く行者修行して往いて求むるを知れりと雖も了了に識知す。理體求むること無くして仍假名を壞せず。是故に備に萬行を修して故に能く感ずるなり。是故に『大智度論』に云はく、「若し人般若を見るをば是れ則ち縛せられたりと爲す。若し般若を見ざるも是れ亦縛せられたりとす。若し人般若を見るを是れ則ち解脱と爲す。若し般若を見ざるも是れ亦解脱と爲す」と。龍樹菩薩釋して曰はく、「是中四句を離れざる者を縛と爲す。四句を離れたるをば解と爲す。今菩提を祈も但能く此の如く修行すれば即ち是れ不行にして行するなり。行せずして行するものは、二諦の大道りに違せざるなり」と。又天親の『淨土論』に依れば云はく、「凡そ發心して無上菩提に會せんと欲するに、其



らざる理性即ち眞理のこと。俗諦は世俗の淺き思想に於て眞諦は眞實の深き道理。もし眞智もて此兩諦を評量せば、俗諦は虚妄にして、眞諦は確實なるが故に俗空眞有といふべし。此兩面の諦理其者を示さんか、俗諦よりいば萬象は有なり、差別象は有なり、差別はば一切は空なり、平等なり故に眞空俗有といふべし。これ理につきて立つる二諦なり。

二義有り。一には先づ須く三種の菩提門と相違す、法を離るべし。二には須く三種の菩提門に順する法を知るべし。何等をか三と爲す。一には智慧門に依つて自樂を求めずして我心の自身に貪著することを遠離するが故に。二には慈悲門に依つて一切衆生の苦を抜く。無安衆生心を遠離するが故に。三には方便門に依つて一切衆生を憐愍する。心に自身を恭敬し供養するの心を遠離するが故に。是を三種の菩提門の相違の法を遠離すと名く。順菩提門とは、菩薩是の如きの三種の菩提門相違の法を遠離すれば、即ち三種の隨順菩提門の法を得。何等をか三と爲す。一には無染清淨心、自身の爲に諸の樂を求めず、故に菩提は是れ無染清淨の處なり。若し自身の爲に樂を求むるは、即ち菩提門に違す。是故に無染清淨心は是れ菩提門に順ず。二には安清淨心、一切衆生の苦を抜かんが爲の故に、菩提は一切衆生を安穩ならしむる清淨の處なり。若し作心して一切衆生を抜いて生死の苦を離れしめずんば、即ち菩提門に違す。是故に一切衆生の苦を抜くは是れ菩提門に順ず。三には樂清淨心、一切衆生をして大菩提を得しめんと欲するが故に。衆生を攝取して彼國土に生ぜしむるが故に、菩提は是れ畢竟常樂の處なり。若し一切衆生をして畢竟常樂を得しめずんば、即ち菩提門に違す。此畢竟常樂は何に依つてか得る。要す大義門に依る。大義門とは、謂く彼安樂佛國是なり。故に一心に専ら彼國に生ぜんと願せしむ。早く無上菩提に會せしめんと欲すればなり。

第二に異見邪執を破するを明すとす、中に就て其九番有り。第一に妄に大乘の無相を計す

【愛見の大惑】愛見の思惑、見は見惑、見思の煩惱を斷せずして起す所の大悲をいふ。

る異見偏執を破す。第二に菩薩の愛見の大悲を會通す。第三に心外に法無きを繫するを破す。第四に穢國に生ぜんと願じて淨土に往生せんと願ぜざるを破す。第五に若し淨土に生ずれば、多く喜んで樂に著するを破す。第六に淨土に生ぜんと求むるは、是れ小乘に非ずやといふを破す。第七に兜率に生ぜんこと求めて淨土に歸せざれと勸むるを破す。第八に若し十方の淨土に生れんと求めんよりは、西に歸するには如かずといふを會通す。第九に別時の意を料簡す。第一に大乘の無相の妄執を破すとは、中に就て二有り。一には總じて生起す。後代の學者をして明に是非を識りて邪を去つて正に向はしめんと欲す。第二に廣く繫情に就て正を顯はして之を破す。一に總じて生起すとは、然るに大乘の深藏名義塵沙なり。是故に『涅槃經』に云はく、「一名に無量の義あり。一義に無量の名あり。要す須らく遍く衆典を審にして、方に部旨を曉るべし」と。小乘と俗書との文を案じて義を畢るが如きには非ず。何の意を以てか須らく然るべき。但淨土幽廓にして經論隱顯すれば、凡情をして種種に圖度せしむることを致す。恐くは誦語刀刀、百首偏執に涉り雜亂無知にして往生を妨礙せんことを。今且く少狀を擧げて一一に之を破せん。第一に妄に大乘の無相を計するを破すとは、問うて曰はく、「或は人有りて言はく、大乘の無相は彼此を念すること勿れ。若し淨土に生ぜんと願せば、便ち是れ取相なり轉漏縛を増さん。何を以てか之を求めんと。」答へて曰はく、「此の如く計する者は將に謂ふに然らず。何とならば一切諸佛の説法は要す二縁を具す。一には法性の實理に依る。二には其二諦に順することを須ふ。彼が大

【優婆塞】ウパー  
 サカ（Upasaka）清  
 信士と譯す。四部  
 弟子の一、三寶に  
 親近し、三歸五戒  
 を受けたる男子を  
 いふ。佛道に入り  
 たる在家の男子。

乘の無念は但法性に依りて、然も緣求を謗無す。即ち是れ二諦に順ぜざるなり。此の如きの見は滅空の所收に墮す。是故に「無上依經」に云はく、「佛阿難に告げたまはく、一切衆生若し我見を起すこと須彌山の如くなるも、我懼れざる所なり。何を以ての故に。此人は未だ即ち出離を得ずと雖も、常に因果を壞せず、果報を失はざるが故に。若し容見を起すこと芥子の如くなるも我即ち許さず。何を以ての故に。此見は因果を破喪して多く惡道に墮す、未來の生處に必ず我化を背く」と。今行者を勸むる理は無生なりと雖も、然も二諦の道理緣求無きに非ざるを以て、一切往生を得べし。是故に「維摩經」に云はく、「諸佛の國及び衆生空なりと觀すと雖も、而も常に淨土を修して諸の群生を教化す」と。又彼經に云はく、「無作を行すと雖も而も受身を現す。是れ菩薩の行なり。無起を行すと雖も而も一切の善行を起す。是れ菩薩の行なり」と。是れ其眞證なり。問うて曰はく、「今世間に人有りて、大乘の無相を行じて、亦彼此を存せず、全く戒相を護らず、是事云何。」答へて曰はく、「此の如く計する者害を爲すこと滋甚だし。何とならば「大方等經」に云へるが如し。「佛優婆塞の爲に戒を制す、寡婦處女家、沽酒家、藍染家、押油家、熟皮家に至ることを得ず、悉く往來することを得ざれと。阿難佛に白して言さく、世尊何等の人の爲に斯の如きの戒を制したまふ。佛阿難に告げたまはく、行者に二種有り。一には在世人の行、二には出世人の行なり。出世人には、吾上の事を制せず。在世人には、吾今之を制す。何を以ての故に。一切衆生は悉く是れ吾子なり、佛は是れ一切衆生の父母なり。遮制約勒して早く世間を出で涅槃を

【六道】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六趣を云ふ。

得しめんが故に」と。第二に菩薩の愛見の大悲を會通すとは、問うて曰はく、「大乘の聖教に依るに、菩薩の衆生に於て若し愛見の大悲を起さず、即ち應に捨離すべし」と。今衆生を勸めて共に淨土に生ぜしむる、豈愛染取相に非ずや、若爲其塵累を免れん。答へて曰はく、「菩薩の行法功用に二有り。何とならば一には空慧般若を證る。二には大悲を具す。一には空慧般若を修する力を以ての故に、六道生死に入ると雖も、塵染の爲に繫せられず。二には大悲衆生を念するを以ての故に涅槃に住せず。菩薩二諦に處すと雖も、常に能く妙に有無を捨て取捨中を得て大道理に違せず。是故に『維摩經』に云はく、「譬へば人有りて空地に於て宮舎を造立せんと欲するに、意に隨つて無礙なり。若し虚空に於ては終に成ずる能はざるが如し、菩薩も亦是の如し。衆生を成就せんと欲するが爲の故に、願じて佛國を取ると。願じて佛國を取るとは、空に於てするには非ず」と。第三に心外の法無きを繋するを破すとは、中に就て二有り。一には計情を破し、二には問答解釋す。問うて曰はく、「或は人有りて言はく、『所觀の淨境内心に約就すれば、淨土に融通す、心淨ければ即ち是れ心の外に法無し。何ぞ須く西に入るべき』と。答へて曰はく、『但法性の淨土は理虛融に處し、體に偏局無し。此れ乃ち無生の生にして上土のみ入るに堪へたり。是故に『無字寶篋經』に云はく、『善男子復一法有り、是れ佛の覺する所なり。謂ゆる諸法は不去不來、無因無緣、無生無滅、無思無不思、無增無減なり。佛羅喉羅に告げて言はく、汝今我所説の正法の義を受持せんや不や。爾時十方に九億の菩薩有り。即ち佛に白して言さく、我等皆能く此



法門ほふもんを持もてり。當まさに衆生しゆじやうの爲ために流通りゆうつうして絶たえざらしむべし。世尊せそん告つげて言たまはく、是善男子このぜんなんし等則とらち兩肩りやうけんに菩提ぼだいを荷擔かたんす。彼人かのひと即すなはち不斷ふだん辨才べんさいを得え、善よく清淨しやうじやうなる諸佛しよぶつの世界せかいを得う。命終みやうしゆうの時に即すなはち阿彌陀佛あみだぶつ、諸もろくの聖衆しやうじゆうと與ともに其人そのひとの前に住まひて、現見げんけんするを得えて往生わうじやうを得うるなり。自ら中下ちゆうげの輩はい有りて、未いまだ相さうを破かする能あたはざれども、要かならず信佛しんぶつの因緣いんえんに依よつて淨土じやうどに生しやうぜんと求もとむるは、彼國かのくにに至いたると雖いんかへ還かへつて相さうの土どに居こす」と。又また云たまはく、「若もし縁えんを攝せつして本もとに従したがれば、即すなはち是こゝれ心外しんげに法無ほふなし。若もし二諦にたいを分わかち義ぎを明あきざば、淨土じやうど是こゝれ心外しんげの法ほふを妨さまたぐる無なし」と。二にに問答もんたふ解釋げしやくす。問とうて曰いはく、「向さきに無生むじやうの生しやうは唯上ただふやうじ土どのみ能よく入いる。中下ちゆうげは堪たへずと言たまふは、爲當けたた直ただちに人ひとを將たぬて法ほふに約やくして此かくの如ごとき判けんを作なすや、爲當けたた亦聖またしやう教けう有りて來きたし證しやうするや。」答こたへて曰いはく、「智度論ちどろん」に云たまふに依よれば、新發意しんぱついちの菩薩ぼさつは機き解軟弱げなんじやくなり。發心ぱつしんすと言たまふと雖いへども多おほく淨土じやうどに生しやうぜんと願ねがふ。何なにの意いぞ然しかるとならば、譬たとへば嬰兒えいごの父母ふぼの恩養おんやうに近ちかづかざれば、或あるは坑あなに墮おち井いに落おち火蛇くわだ等の難なんあり。或あるは乳ちゆに乏せくして死しす。要かならず父母ふぼの摩洗ません養育やういくするを假かりて方まに長大ちやうだいして能よく家業かげふを紹繼せうけいすべきが如ごとし。菩薩ぼさつも亦爾またしかなり。若もし能よく菩提ぼだい心しんを發おこすに多おほく淨土じやうどに生しやうぜんと願ねがふ。諸佛しよぶつに親近しんじんして法身ほふしんを増長ぞうちやうし方に能よく菩薩ぼさつの家業けごふを匡紹きやうせうし十方じふぱうを濟運さいうんす。斯益このやくあるに爲なるが故ゆゑに多おほく生しやうぜんと願ねがふ」と。又彼論またそのろんに云たまはく、「譬たとへば鳥子とりこの翅翹しやくい未いまだ成ならざるを逼せめて高たかく翔かけしむべからず。先まづ須すらく林りんに依よつて樹じゆを傳つたふべし。羽成うりなり力ちから有りて方まに林りんを捨すてて空そらに遊あそぶべきが如ごとし。新發意しんぱついちの菩薩ぼさつ亦爾またしかなり。先まづ須すらく願ねがふに乘のじて佛前ぶつぜんに生しやうするを求もとめて、法身ほつしん成長ちやうちやうして感かんに

隨て益に趣くべし」と。又阿難佛に白して言さく、「此無相の波羅蜜をば何の處に在りてか説きたまふ。佛の言はく、此の如きの法門をば阿毘跋致地の中に在りて説くべし。何を以ての故に。新發意の菩薩有りて此無相波羅蜜門を聞かば所有清淨の善根悉く當に滅没すべきなり。又來りて但彼國に至れば即ち一切の事畢んぬ。何を以てか此深淺の理を諍はんと。」  
 第四に穢土に生ぜんと願じて淨土に生ずるを願はざるを破すとは、問うて曰はく、「或は人有りて言はく、「穢國に生じて衆生を教化せんを願うて、淨土に往生するを願はず」と。是事云何。」答へて曰はく、「此人亦有る一の徒なり。何とならば若し身不退に居して已去、雜惡の衆生を化せんが爲の故に、能く染に處すれども染せず。惡に逢へども變せず。鵝鴨水に入れども水濕すこと能はざるが如し。此の如き人等、能く穢に處して苦を抜くに堪へたり。若し是れ實の凡夫ならば、唯恐くは自行未だ立たず、苦に逢へば即ち變ぜんことを。」  
 彼を濟はんと欲する者、相與に俱に没しなん。鷄に逼りて水に入るが如似きは、豈能く濕はざらんや。是故に「智度論」に云はく、「若し凡夫發心して即ち穢土に在りて衆生を拔濟せんと願するをば聖意許したまはず」と。何の意か然るとならば、龍樹菩薩釋して云はく、譬へば四十里の氷に如し一人有りて、一斛の熱湯を以て之を投ぐれば、時に當りては少く減するに似如れども、若し夜を経て明に至れば乃ち餘の者よりも高きが如し。凡夫此に在りて發心して苦を救はんも亦復是の如し。貪瞋の境界違順多きを以ての故に。自ら煩惱を起して返つて惡道に墮するが故なり。第五に若し淨土に生ずれば多く喜んで樂に著すを破すとは、



【阿毘跋致】菩薩の地位より再び凡地に退くことの無き位をいふ。

悉く是れ阿毘跋致なり。更に退人の其と雜居する無し。又復位是れ無漏なれば三界を出過して復輪廻せず、其壽命を論ずれば即ち佛と齊し、算數の能く知るところに非ず。其れ水鳥樹林有り、皆能く法を説きて人をして無生を悟解し證會せしむ。四に大經に據つて且らく一種の音樂を以て比較せば、經の讀に言はく、「世の帝王より六天に至るまで、音樂轉妙にして八重有り。展轉して前に勝れたること億萬倍なり、寶樹音麗なること倍して亦然なり。復自然の妙伎樂有り、法音清和にして心神を悦ばしむ。哀婉雅亮にして十方に超えたり。是故に清淨樂を稽首したてまつる」と。第八に十方の淨土に生ぜん願ぜんよりは西方に歸するには如すといふを校量すとは、問うて曰はく、「或は人有りて言はく、十方淨國に生ぜん願じて西方に歸せんと願ぜざれと。是義云何。答へて曰はく、「此義類せず、中に於て三有り。何とならば一には十方の佛國不淨と爲るに非ず。然るに境寛ければ則ち心味し。境狭ければ則ち意專なり。是故に十方隨願往生經に云はく、「普廣菩薩佛に白して言さく、世尊十方の佛土皆爲嚴淨なり、何が故に諸經の中に偏に西方阿彌陀國を歎じて往生を勸めたまふや。佛普廣菩薩に告げたまはく、一切衆生濁亂の者は多く、正念の者は少し、衆生をして專志有らしめんと欲す。是故に彼國を讚歎すること別異と爲すのみ。若し能く願に依つて行を修すれば益を獲ずといふこと莫し」と。二には十方の淨土は皆是れ淨にして而も深淺知り難しと雖も、彌陀の淨國は乃ち是れ淨土の初門なり。何を以てか知るを得たる。『華嚴經』に依るに云はく、「娑婆世界の一劫は極樂世界の一日一夜に當る。極樂世界の



【十念成就して云  
云】臨終に十聲念  
佛して極樂に往生  
するをいふ。

一劫は袈裟幢世界一日一夜に當れり。是の如く優劣相望して乃ち十阿僧祇有り」と。故に知  
んぬ淨土の初門と爲ることを。是故に諸佛偏に勸めたまへり。餘方の佛國は都て此の如く叮  
嚀ならず。是故に有信の徒多く往生を願ず。三には彌陀淨國は既に是れ淨土の初門なり。  
娑婆世界は即ち是れ穢土の末處なり。何を以てか知るを得たる。『正法念經』に云へるが  
如し。一此より東北に一世界有り。名けて斯訶と曰ふ。土田唯三角の沙石のみ有り。一年に三  
たび雨る、一雨濕潤する五寸を過ぎず。其土の衆生唯菓子を食し樹皮を衣と爲し、生を求む  
るに得ず死を求むるに得ず。復一世界有り。一切の虎狼禽獸乃至蛇蝎悉く皆翅有りて飛  
行す。逢ふもの相噉ふ。善惡を簡はず。此れ豈穢土の始處と名けざらんや」と。然るに娑婆  
の依報は乃ち賢聖と流を同らす。此に準するに乃ち是れ穢土の終處なり。安樂世界は既に  
是れ淨土の初門なり。即ち此方と境次で相接せり。往生甚だ便有り、何ぞ去らざらんや。』  
第九に攝論此經と相違するに據つて、別時意の語を料簡すとは、今觀經の中に佛説は  
く、「下品生の人、現に重罪を造る、命終に臨む時善知識に遇うて十念成就して即ち往生する  
を得」と。攝論に云ふに依れば、佛の別時意の語なりと善たまふ。又古來通論の家多く此  
文を判じて云はく、臨終の十念は但往生の因と作るを得、未だ即ち生ずるを得ず。何を以  
てか知るを得たる。論に云はく、「一の金錢を以て千の金錢を買ひ得るといふが如き、一日  
に即ち得るにはあらず。故に知んぬ十念成就の者は、但因と作ることを得て、未だ即ち生  
ずるを得るにあらず。故に別時意語と名く」と。此の如く解する者は將に未だ然らずとせ

【愛樂】愛してねがひもとむる心、信愛欲樂の義なり法を愛し道を求むる信仰上の樂欲をいふ。

ん。何とならば凡そ菩薩、論を作りて經を釋するは、皆遠く佛意を扶け聖情と契會せんと欲するなり。若し論文經に違すること有りといはば是處有ること無し。今別時意語を解せば、謂く佛に常途の説法は皆先因後果を明す。理數炳然たり。今此經の中には但一生の造罪命終の時に臨んで、十念成就して即ち往生を得と説きて、過去の有因無因を論ぜざるは直に是れ世尊當來の造惡の徒を引接して、其をして臨終に惡を捨てて善に歸し念に乗じて往生せしめんとなり。是を以て其宿因を隠せり。此は是れ世尊始を隠して終を顯し。因を沒して果を談ずるをもて名けて別時意語と作す。何を以てか知ることを得たる。但十念成就せしむるは皆過去の因有り。「涅槃經」に云へるが如し。若人過去に已に曾て半恆河沙の諸佛を供養して復經て發心すれば、而も能く惡世の中に於て大乘の經教を説くを聞いて、但能く謗せざれども未だ餘の功有らず。若し經て一恆河沙の諸佛を供養し及び經て發心して然して後に大乘の經教を聞くは直謗せざるのみに非ず。復愛樂を加ふ」と。此諸經を以て來し驗らむるに、明に知んぬ十念成就する者皆過因有りて虚しからず。若し彼過去に因無くんば、善知識にすら尙逢遇べからず。何に況や十念而も成就すべけんや。論に一の金錢を以て千の金錢を買ひ得るは一日に即ち得るには非ずと云へるは、若し佛意に據れば衆生をして多く善因を積ましめて便ち念に乗じて往生せしめんと欲するなり。若し論主に望めば過去の因を閉るに乗る。理も亦爽ふこと無し。若し此解を作さば、即ち上佛經に順じ、下論の意に合はん。即ち是れ經論相扶けて往生の路通す。復疑惑する無し。

第三に廣く問答を施して疑情を釋去するを明すと、自下は『大智度論』に就て廣く問答を施す。問うて曰はく、但し一切衆生曠大劫より來備に有漏の業を造りて三界に繫屬せり。云何が三界の繫業を斷ぜずして直爾に少時阿彌陀佛を念すれば即ち往生を得。便ち三界を出る者、此れ繫業の義復云何が欲せんとする。答へて曰はく、二種の解釋有り。一には法に就て來し破す。二には喩を借つて以て顯す。法に就くと云ふは、諸佛如來に不思議智、大乘廣智、無等無倫最上勝智有り。不思議智力とは能く少を以て多と作し、多を以て少と作し、近を以て遠と爲し、遠を以て近と爲し、輕を以て重と爲し、重をもて輕と爲す、是の如き等の智有りて無量無邊不可思議なり。自下第二に七番有り。並に喩を借つて以て顯す。第一に譬へば百夫百年薪を聚めて積む高さ千仞ならんに、豆許りの火もて焚くに、半日に便ち盡すが如し。豈百年の薪半日に盡さずと云ふを得べけんや。第二に譬へば辯者他の船に寄載すれば風帆の勢ひに因て一日に千里に至るが如し。豈辯者云何が一日に千里に至らんやと云ふを得べけんや。第三に亦下賤の貧人一の瑞物を獲て、而して以て王に貢せんに、王の得る所を慶んで諸の重賞を加へて斯須の頃に富貴空に盈るが如し。豈數十年仕へて備に辛勤を盡せども上下尙達せずして歸る者あるを以て彼富貴を言うて、此事無しと言ふを得べけんや。第四に猶劣夫の己が身力を以て驢を擲るも上らず。若し輪王の行くに従へば、便ち虚空に乗じて飛騰自在なるが如し。豈劣夫の力を以て必ず虚空に昇る能はずと言ふを得べけんや。第五に又十圍の索を千夫も制せざるに、童子劍を

【正定聚】行位退轉すること無く、必ず涅槃に至るべき者。彌陀の淨土は處不退なるが故に彼處に往生すれば皆正定聚に入る【善知識】正法を説きて人をして佛道に入らしめ、解脱を得しむる人をいふ。

揮へば儼爾として兩分するが如し。豈童子の力索を斷つこと能はずと言ふを得べけんや。第六に又鳩鳥水に入れば魚鱗斯に斃れて皆死し、犀角泥に觸れば死する者還て活へるが如し。豈性命一たび斷ちて生くべからずと言ふを得べけんや。第七に亦黃鶻子安を喚ぶに、子安還て活へるが如し。豈墳の下の千齡決めて蘇へるべきこと無しと言ふを得べけんや。一切の萬法は皆自力他力自攝他攝有り。千聞萬閉無量無邊なり。汝豈有礙の識を以て彼無礙の法を疑ふことを得んや。又五不思議の中には佛法最も不可思議なり。汝三界の繫業を以て重と爲し、彼少時の念佛を輕と爲し、安樂國に往生して正定聚に入るを得ざるとは、是事然らず。問うて曰はく、『大乘經に云はく、業道は秤の如く重き處へ先牽く』と。云何が衆生一形より已來、或は百年、或は十年、乃至今日まで惡として造らざるは無し。云何が臨終に善知識に遇うて十念相續して即ち往生を得ん。若し爾らば先牽の義何を以て信を取らん。答へて曰はく、『汝一形の惡業を謂うて重しと爲し、下品の人の十念の善を以て以て輕しと爲す。今當に義を以て校量すべし。輕重の義とは、正しく心に在り縁に在り決定に在り。時節の久近多少には在らざるを明すなり。云何が心に在る。謂く、彼人造罪の時、は自ら虚妄顛倒の心に依止して生ず。此十念とは善知識の方便安慰に依りて實相の法を聞くより生ず。一は實一は虚妄相比するを得んや。何とならば、譬へば千歳の闇室に、光暫く至れば、即便明朗なるが如し。豈闇の室に在る千歳なるをもて去らずと言ふを得べけんや。是故に『遺日摩尼寶經』に云はく、『佛迦葉菩薩に告げたまはく、衆生復數千巨億萬劫愛欲



## 【一形】 一生涯の

の中に在りて罪の爲に覆はると雖も、若し佛經を聞いて一反善を念すれば、罪即ち消盡す」と。是を在心と名く。二に云何が縁に在るとは、謂く彼人罪を造る時自ら妄想依止し、煩惱果報の衆生に依て生ず。今此十念は無上の信心に依止し、阿彌陀如来の眞實清淨無量功德の名號に依て生ず。譬へば人有りて毒箭に中られんに、筋を徹し骨を破らん、若し滅除藥の鼓聲を聞けば、即ち箭出でて毒を除くが如し。豈彼箭深く毒厲きをもて鼓の音聲を聞くと、箭をば抜き去る能はずと言ふを得べけんや。是を在縁と名く。三に云何が決定に在りとは、彼人罪を造る時、自ら有後心有聞心に依止して生ず。今此十念は無後心無聞心に依止して起る、是を決定と爲す。又「智度論」に云はく、「一切衆生臨終の時、刀風形を解き死苦來り逼て大怖畏を生ず。是故に善知識に遇うて大勇猛を發し、心心相續して十念すれば、即ち是れ増上の善根なるを以て便ち往生を得」と。又人有りて敵に對して陣を破るに一形の力一時に盡して用ふるが如し。其十念の善も亦是の如し。又若人臨終の時一念の邪見を生ずれば、増上の惡心なるをもて即ち能く三界の福を傾けて即ち惡道に入るなり。「問うて曰はく、「既に垂終の十念の善能一生の惡業を傾けて淨土に生ずるを得と云ふは、未だ知らず幾ばくの時をか十念と爲すや。答へて曰はく、「經に説きて云ふが如く、百一の生滅一刹那を成す。六十刹那を以て一念と爲すと。此れ經論に依つて汎く心を解す。今時念を解するに、此時節を取らず。但阿彌陀佛、若は總相、若は別相を憶念して所縁に隨ひて觀ず。十念を還るに他の念想間雜する無き、是を十念と名く。」又云ふべし、十念相續とは、是れ

【毫相】 白毫相のこと。佛の兩眉の間に白玉の毫あり右旋宛轉して常に光明を放つ。  
 【相好】 佛所具の三十二相を指す。

聖者の一の數の名なるのみ、但能く念を積み思ひを凝して他事を緣ぜず、業道をして成辨せしむれば便ち罷て用ひず。亦未だ勞しく之が頭數を記せず。又云ふべし、若し久行の人の念は多く應に此に依るべし。若し始行の人の念は數を記するも亦好し。此れ亦聖教に依るなり。又問うて曰はく、「今勸に依つて念佛三昧を行ぜんと欲す、未だ知らず計念の相狀何んが似たる。」答へて曰はく、「譬へば人有りて空曠過なる處に於て、怨賊の刀を抜き勇奮ひて直に來り殺さんと欲するに値遇す。此人徑に走るに一河を度らんとするを視る。未だ河に到るに及ばざるに、即ち此念を作す。我河の岸に至らば衣を脱ぎて渡らんと爲んや、衣を着て浮ぶと爲んや。若し衣を脱ぎて渡れば唯恐くは暇無けん。若し衣を着て浮ばば復畏くは首領全きこと難からん。爾時但一心に河を渡るの方便を作すのみ有りて餘の心想間雜する無きが如し。行者も亦爾なり。阿彌陀佛を念する時、亦彼人渡るを念じて、念念に相次で餘の心想間雜する無きが如し。或は佛の法身を念じ、或は佛の神力を念じ、或は佛の智慧を念じ、或は佛の毫相を念じ、或は佛の相好を念じ、或は佛の本願を念す。稱名も亦爾なり、但能く專至相續して斷えざれば定めて佛前に生ず。『今後代の學者を勸む。若し其一諦に會せんと欲して但念念不可得なりと知るは、即ち是れ智慧門なり。而して能く繫念相續して斷えざれば、即ち是れ功德門なり。是故に經に云はく、「菩薩摩訶薩、恆に功德智慧を以て、其心を修す」と。若し始學の者未だ相を破す能はず。但能く相に依つて專至すれば往生せざる無し。須く疑ふべからず。又問うて曰はく、「無量壽大經」に云はく、「十

【識】眼によりて境を認識する主觀の心をいふ。  
【六塵】六境の性を覆ひ昏ますものなるが故に塵といふ。色聲香味觸法の六境なり。

【因縁生】因と縁との力に依つて生ずること。  
【假名生】實體なきものの名稱に就着して生ずること

はう 方の衆生至心に信樂して我國に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺を取らじ」と。今世人有りて此聖教を聞いて現在の一形に全く意を作さずして、臨終の時に擬して方に修念せんと欲す。是事云何。答へて曰はく、「此事類せず。何とならば經に、「十念相續と云へるは難からざるに似若ども、然も諸の凡夫の心は野馬の如く、識は猿猴よりも劇し、六塵に馳騁す、何ぞ曾て停息せん。各須く宜く信心を發して、預め自ら剋念し、積習して性を成じ、善根をして堅固ならしむべし。佛大王に告げたまふが如し。人善行を積めば死するとき惡念無し。樹の先より傾けるは倒るるに必ず曲れるに隨ふが如し」と。若し刀風一たび至れば百苦身に漉る。若し習ひ先より在らずんば懷念何ぞ辨すべけん。各宜く同志三五をして、預め言要を結んで、命終の時に臨んで、迭に相開曉して、爲に彌陀の名號を稱して安樂國に生ぜんと願す。聲聲相次で十念を成ぜしむべし。譬へば獵印をもて泥を印するに、印壞れて文成するが如し。此命斷する時は、即ち是れ安樂國に生ずる時なり。一たび正定聚に入りぬれば、更に何の憂ふる所かあらん。各宜く此大利を量るべし、何ぞ預め剋念せざらんや。又問うて曰はく、「諸の大乗の經論に皆一切の衆生畢竟して無生なること猶し虚空の若しと。云何が天親龍樹菩薩皆往生を願するや。答へて曰はく、「衆生畢竟無生なること虚空の如しとは二種の義有り。一には凡夫人の所見の如きは實の衆生實の生死等なり。若し菩薩の往生に據らば畢竟して虚空の如く、兎角の如し。二には今生ずとは是れ因縁生なり。因縁生の故に即ち是れ假名生なり。假名生の故に即ち

【三有】 欲界、色界、無色界のこと。

是れ無生なり。大道理に違せざるなり。凡夫の實の衆生實の生死有りと謂ふが如きには非ざるなり。』又問うて曰はく、『夫れ生をば有の本と爲す、乃ち是れ衆累の元なり。若し此過を知りて生を捨てて無生を求むるは脱期有るべし。今既に淨土に生ぜんと勸む、即ち是れ生を棄てて生を求む。生何を盡すべけんや。』答へて曰はく、『然るに彼淨土は、乃ち是れ阿彌陀如來の清淨本願無生の生なり。三有の衆生の愛染虛妄執着の生の如きには非ざるなり。何を以ての故に。夫れ法性清淨にして畢竟無生なればなり。而るに生と言ふは得生の者の情なるのみ。』又問うて曰はく、『上に言ふ所の如き、生は無生なりと知らば、上品生の者なるに當れり。若し爾らば下品生の人十念に乗じて往生するは、豈實の生を取るに非ずや。若し實の生ならば即ち二疑に墮す。一には恐くは往生を得ず。二には謂く此相善く無生の與に因と爲ること能はず。』答へて曰はく、『釋するに三番有り。一には譬へば淨摩尼珠、之を濁水に置けば珠の威力を以て水即ち激清なるが如し。若し人無量生死の罪濁に有りと雖も、若し阿彌陀如來の至極無生の清淨寶珠の名號を聞いて、之を濁心に投ぐれば念念の中に罪滅し、心淨して即便往生す。二には淨摩尼珠の如きは玄黃の帛もて裹んで之を水に投ぐるに、水即ち玄黃にして一ばら物の色の如くなるが如く、彼清淨佛土に阿彌陀如來の無上寶珠の名號有り。無量の功德成就の帛を以て裹んで之を往生する所の者の心水の中に投ぐるに、豈生を轉じて無生の智と爲すこと能はざらんや。三には亦氷の上に火を燃くに、火猛きときは則ち氷液く、氷液くれば火滅するが如し。彼下品往生の人は法性の



【佛名】 ここには南無阿彌陀佛の名號をいふ。

無性を知らずと雖も、但佛名を稱する力を以て往生の意を作して、彼土に往生せんと願すれば、既に無生の界に至る。時に見生の火自然に滅するなり。』又問うて曰はく、『何の身に依るが故に往生を説くや。』答へて曰はく、『此間の假名の人中に於て、諸の行門を修するに、前念は後念の與に因と作る。穢土の假名の人と淨土の假名の人と決定して一なるを得ず。決定して異なるを得ず。前心後心も亦是の如し。何を以ての故に。若し決定して一ならば則ち因果無く、若し決定して異ならば則ち相續に非ず。是義を以ての故に横堅別なりと雖も始終是一の行者なり。』又問うて曰はく、『若人但能く佛の名號を稱して能く諸障を除くとは、若し兩らば譬へば人有りて指を以て月を指すが如し。此指應に能く箇を破すべきや。』答へて曰はく、『諸法萬差なり一概すべからず。何んとなれば自ら名の法に即する有り、自ら名の法に異なる有り。名の法に即する有りとは、諸佛菩薩の名號禁呪の音辭修多羅の章句等の如き是なり。禁呪の辭に日出で、東方乍ち赤く乍ち黃と曰ふが如き、假令西亥に禁を行へども患ふる者亦癒ゆ。又人有りて狗に嚙れたらんに、虎の骨を炙りて之を慰せば、患ふる者即ち癒ゆ。或時に骨無ければ好く掌を擴げて之を摩りて口の中に喚んで虎來虎來と言へば、患ふる者亦癒ゆるが如し。或は復人有りて脚轉筋を患ふるに、木瓜の枝を灸て之を慰せば、患ふる者即ち癒ゆ。或は木瓜無ければ手を炙りて之を磨りて口に木瓜を咬べば患ふる者亦癒ゆ。吾身に其効を得たり。何を以ての故に。名の法に即するを以ての故に。名の法に異なる有りとは、指を以て月を指すが如き是なり。』又問うて曰はく、『若

【無明】 すべて事に開き精神作用をいふ。

【二】 大乘の聖教に據つて諸の衆生の發心の久近俱備の多少を明し、時機の聽衆をして、力め勵んで發心せしめんことを明す。

【三車】 羊鹿牛の三車。法華經譬喩品に、長者、火事を知らずして室内に遊べる諸兒を憐みに早く遁れしめん爲に計略を設け、門外に行きて遊べと

し人但彌陀の名號を稱念すれば、能く十方衆生の無明黑闇を除いて往生を得とは、然も衆生有りて稱名憶念すれども而も無明猶在りて所願を滿ざるは何の意ぞ。答へて曰はく、『如實に修行せず。名義と相應せざるに由るが故なり。所以は何ん。謂く如來は是れ實相の身、是れ爲物の身なりと知らざればなり。復三種不相應有り。一には信心淳ならず。存するが如く、亡するが若くなるが故に。二には信心一ならず。謂く決定無きが故に。三には信心相續せず。謂く餘念聞るが故に、迭ひに相收攝す。若し能く相續すれば則ち是れ一心なり。但能く一心なれば即ち是れ淳心なり。此三心を具して若し生ぜざれば是處り有ること無し。』

【三】 第三に大門の中に四番の料簡有り。第一に難行道易行道を辨じ、第二に時劫の大不相同を明し、第三に無始世劫より已來、此三界五道に處して善惡の二業に乗じて苦樂兩報を受け、輪廻無窮にして受生無數なるを明し、第四に聖教を將て證成し、後代を勸めて信を生じて往くことを求めしむ。

第一に難行道易行道を辨ずとは、中に於て二有り。一には二種の道を出し、二には問答解釋す。余既に自ら火界に居して實に想ふに怖を懷けり。仰ぎ惟れば大聖三車の招慰は日らく羊鹿の運なり。權に息して未だ達せず。佛邪執は上求菩提を障ふと訶したまふ。縦ひ後に迴向すれども仍て迂迴と名く。若し徑ちに大車に攀るも亦是れ一途なり。只恐くは現に退位に居して險徑遙に長きことを。自徳未だ立たず、昇進すること難し。是故に龍樹菩薩の云はく、『阿毘跋致を求むるに二種の道有り。一には難行道、二には易行道なり。難

づれば。兒等去り出  
して唯一つの大白  
牛車有るのみと。  
三車は聲、緣、苦  
の三乘にして大白  
牛車は佛乘なり。

【四天丁】須彌山  
の四方にある四大  
洲なり。一に南瞻  
部洲、二に東勝神  
洲、三に西牛貨洲、  
四に北瞿盧洲。

行道と言ふは、謂く五濁の世無佛の時に於て阿毘跋致を求むるを難と爲す。此難に乃ち多途有り。略して述ぶるに五有り。何とならば一には外道の相善菩薩の法を亂る。二には聲聞の自利大慈悲を障ふ。三には無願の惡人他の勝德を破す。四には所有人天顛倒の善果人の梵行を壞す。五には唯自力のみ有りて他力の持つ無し。斯の如き等の事日に觸るるに皆是なり。譬へば陸路の歩行は則ち苦しきが如し。故に難行道と曰ふ。易行道と言ふは、謂く信佛の因縁を以て淨土に生ぜんと願じて、心を起し徳を立て、諸の行業を修すれば、佛願力の故に即便往生す。佛力住持するを以て、即ち大乘正定聚に入る。正定聚とは即ち是れ阿毘跋致不退の位なり。譬へば水路の乗船は則ち樂しきが如し。故に易行道と名く」と。問うて曰はく、「菩提は是れ一なり修因亦不二なるべし。何が故に此に在りて因を修して佛果に向ふを名けて難行と爲し、淨土に往生して大菩提を期するを乃ち易行道と名くるや。」答へて曰はく、「世の大乘經に辨する所の一切の行法、皆自力他力自攝他攝有り。何者か自力、譬へば人有りて生死を怖畏して、發心出家して定を修し通を發して四天下に遊ぶが如し。名けて自力と爲す。何者か他力、劣夫有りて己身の力を以て驢に擲ぐるに上らず。若し輪王に従へば、即便空に乘じて四天下に遊ぶが如し。即ち輪王の威力の故に他力と名く。衆生も亦爾り。此に在りて心を起し行を立て淨土に生ぜんと願ず、此は是自力なり。命終の時に臨んで阿彌陀如來、光臺迎接して遂に往生を得しむるを即ち他力と爲す。故に大經に云はく、「十方の人天我國に生ぜんと欲せん者は、皆阿彌陀如來の大願業力を以て増上

縁と爲さざること莫し。若し是の如くならずんば、四十八願便ち是れ徒に設けんや。後の學者に語らく、既に他力の乘すべき有り。自ら己が分に局りて徒に火宅に在ることを得ざれ」と。

【劫】カルバ(カレバ)長時と譯す。長時間のこと。

第二に劫の大小を明すとは、「智度論」に云ふが如く、「劫に三種有り。謂く一には小、二には中、三には大なり。方四十里の城の如く高下も亦然なり。中に芥子を満てて長壽の諸天有りて、三年に一を去らん。乃至芥子盡るを一小劫と名く。或は八十里の城の高下も亦然なり。芥子の中に満てて前の如く取り盡すを一中劫と名く。或は百二十里の城の高下も亦然なり。芥子の中に満てて取り盡すこと一に前の説に同じ、方に大劫と名く」と。或は八十里の石の高下も亦然なり。一の長壽の諸天有りて三年に天衣を以て一たび拂はん。天衣の重さ三銖あり、爲に拂ふこと已ますして、此石乃ち盡るを名けて中劫と爲す。其小石大石前の中劫に類す。知るべし。勞しく具に述べず。

第三門の中に五番有り。第一に無始劫より來、此に在りて輪廻窮無く、身を受くること無數なるを明すとは「智度論」に云ふが如し。人中に在りて或は張家に死して王家に生れ、王家に死して李家に生ず。是の如く閻浮提の界を盡して、或は重ねて生じ、或は異家に生じ、或は南閻浮提に死して西拘耶尼に生ず。閻浮提の如く餘の三天下も亦是の如し。四天下に死して四天王天に生ずるも亦是の如し。或は四天王天に死して忉利天に生ず。忉利天に死して餘の上の四天に生ずるも亦是の如し。色界に十八重の天有り、無色界に四重の天有り。此

【四天王天】欲界六天の一。持國天、増長天、廣目天、多聞天の四あり。帝釋天の宰る處なり。



に死して彼に生ず。一一に皆徧すること亦是の如し。或は無色界に死して阿鼻地獄に生じ、阿鼻地獄の中に死して餘の輕繫地獄に生じ、輕繫地獄の中に死して畜生の中に生じ、畜生の中に死して餓鬼道の中に生じ、餓鬼道の中に死して或は人天の中に生ず。是の如く六道に輪廻して苦樂二報を受け生死窮無し」と。胎生既に爾なり。餘の三生も亦是の如し。是故に『正法念經』に云はく、「菩薩化生して諸の天衆に告げて云はく、凡そ人此百千年生を経て樂に著し、放逸にして道を修めず。往福侵し已りて盡きぬれば、還て三塗に墮して衆苦を受くるを覺らず」と。是故に『涅槃經』に云はく、「此身は苦の集る所、一切皆不淨なり。靦縛癰瘡等の根本、義利有ること無し。上諸天の身に至るまで、皆亦復是の如し。」と。是故に又彼經に云はく、「勸めて不放逸に修む、何を以ての故に。夫放逸は是れ衆惡の本なり。不放逸は乃ち是れ衆善の源なり。日月の光諸明の中に最なるが如く、不放逸の法も亦復是の如し。諸の善法に於て最と爲し上と爲し、亦須彌山王の諸山の中に於て最たり上たるが如し。不放逸の法も亦復是の如し。諸の善法に於て最たり上たり。何を以ての故に。一切の惡法は放逸より生ず。一切の善法は不放逸を本と爲す。第二に問うて曰はく、「無始劫より來六道の輪廻際無しと云ふと雖も、未だ一劫の中幾くの身數を受くるを流轉と言ふを知らず。」答へて曰はく、「涅槃經」に説くが如し。「三千大千世界の草木を取りて截りて四寸の籌と爲して、以て一劫の中に受くる所の身の父母の頭數を數んに、猶自ら漸ず」と。或は云はく、「一劫の中に飲む所の母の乳は四大海水より多し」と。或は云はく、「一劫の中に

【毘富羅山】梵音  
(Vishala) 廣と譯  
す。摩伽陀國にあ  
る山の名。

積む所の身骨は毘富羅山の如し」と。是の如く遠劫より已來、徒に生死を受けて今日に至るまで猶凡夫の身と作る。何ぞ曾て思量せんや。傷歎して已ます。第三に又問うて曰はく、「既に曠大劫より來身を受くる無數なりと言はん、爲當直爾に總じて説いて人をして厭を生ぜしむるや、爲當亦經文有りて來證するか。」答へて曰はく、「皆是れ聖教の明文なり。何とならば、『法華經』に云ふが如く、「過去不可説の久遠大劫に佛の出世有りき。大通智勝如來と號す。十六の王子有り、各法座に昇りて衆生を教化す。一一の王子各各六百萬億那由他恆河沙の衆生を教化せり。其佛の滅度より已來至極久遠なり、猶數を知るべからず」と。何とならば經に云はく、「總じて三千大千世界の大地を取りて磨いて以て墨と爲ん。佛の言はく、是人千國土を過ぎて乃ち一點を下すこと大きき微塵の如ならん。是の如く展轉して地種の墨を盡さん。佛の言はく、是人經る所の國土の若は點じ點せざるも、盡く抹して塵と爲して、一塵を一劫とせん彼佛の滅度より已來復是數に過ぎたり」と。今日の衆生は乃ち是れ彼時の十六王子の座下にして曾て曾て教法を受けたり。是故に經に云はく、「是れ本因縁を以て爲に法華經を説く」と。『涅槃經』に復云はく、「一は是れ王子、一は是れ貧人、是の如きの二人互に相往反す」と。王子と言ふは今日の釋迦如來乃ち是れ彼時の第十六の王子なり。貧人と云ふは今日の衆生等是なり。第四に問うて曰はく、「此等の衆生既に流轉多劫なりと云ふ。然るに三界の中何れの趣にか身を受くること多と爲す。」答へて曰はく、「流轉と言ふと雖も然も三惡道の中に於て身を受くること偏に多し。經に説きて云ふが如し。虚空の中に於て方圓八

【五欲】 色聲香味觸の五境をいふ、五境は人の欲を引き起すが故に欲と名く。

【佛性】 本來自性清淨の無爲涅槃にして、眞如法性のことをいふ。佛とは果上の名、性とては種子因本の義、因位に於て佛果に至るべき種子を具するを佛性といふ。これ即ち一切衆生が本來具する理

肘を量り取りて、地より色究竟天に至るまで此量内に於て所有可見の衆生、即ち三千大千世界の人天の身よりも多し。故に知んぬ惡道の身多からん。何が故に此の如くなる。但惡法は起し易く善心は生じ難きが故なり。今時但現在の衆生を見るに、若し富貴を得れば唯放逸破戒を事とし、天の中には即ち復樂に着する者多し。是故に經に云はく、「衆生等しく是流轉して恆に三惡道を常家と爲す。人天には暫く來りて即ち去る、名けて客舍と爲すが故なり」と。「大莊嚴論」に依つて一切の衆生常に須く繫念現前すべきを勸む。偈に云はく、「盛年にして患無き時は懈怠して精進せず。衆の事務を貪營して施と戒と禪とを修せず。死の爲に吞まるるに臨んで方に悔て善を修せんことを求む。智者は應に觀察して五欲の想を除斷すべし。精勤習心の者は終時悔恨無し。心意既に専ら至れば錯亂の念有ること無し。智者は勤めて心を投ずれば臨終に意散せず。習心專至ならざるものは臨終に必ず散亂す。心若し散亂する時は馬を調するに礎を用ふるが如くせよ。若し其れ鬪戰の時廻旋して直ちに行かず」と。「第五に又問うて曰はく、「一切衆生 皆佛性有り、速劫より以來應に多佛に値ふべし。何に因つてか今に至るまで、仍自ら生死に輪廻して火宅を出でざるや。」答へて曰はく、「大乘の聖教に依るに良に二種の勝法を得て以て生死を排はざるに由る。是を以て火宅を出でず。何をか二と爲す。一には謂く聖道、二には謂く往生淨土なり。其聖道の一種は今時に證し難し。一には大聖を去ること遙遠なるに由る。二に理深く解微なるに由る。是故に『大集月藏經』に云はく、「我末法時中の億億の衆生は行を起し道を修せんに、未だ

性に於て、迷にありても減ぜず、悟るものなり。

一人も得る者有らず。當今は末法現に是れ五濁惡世なり。唯淨土の一門のみ有りて通入すべき路なり」と。是故に大經に云はく、「若し衆生有りて、縱令一生惡を造るとも、命終の時に臨んで十念相續して我名字を稱せんに、若し生ぜずんば正覺を取らじ」と。又復一切衆生都て自ら量らず。若し大乘に據らば眞如實相第一義空會て未だ心を措す。若し小乘を論ぜば見諦修道に修入し、乃至那含羅漢に五下を斷じ、五上を除くこと道俗を問ふ無く、未だ其分に有るにあらず。縱ひ人天の果報有れども、皆五戒十善の爲に能く此報を招く。然るに持得する者甚だ希なり。若し起惡造罪を論ぜば何ぞ暴風駛雨に異ならん。是を以て諸佛の大慈勸めて淨土に歸せしめたまふ。縱使一形惡を造れども、但能く意を繋けて專精に常に能く念佛すれば、一切の諸障自然に消除して、定めて往生を得。何ぞ思量せずして都て去る心無きや。

白下は第四に聖教を引いて證成して信を勧めしむとは、『觀佛三昧經』に云ふに依るに、「爾時時會の中に財首菩薩有りて、佛に白して言さく、世尊我過去無量劫の時を念するに佛の出世有り、亦釋迦牟尼佛と名く。彼佛の滅後に一りの王子有り、名けて金幢とけふ。橋慢邪見にして正法を信ぜず。知識の比丘有り、定自在と名く。王子に告げて言はく、世に佛像有り極めて可愛なり、誓く塔に入りて佛の形像を觀る。時に彼王子善友の語に従うて塔に入りて像を觀る。像の相好を見て白して言さく、比丘佛像すら端嚴なること猶尙此の如し。況んや佛の眞身をや。比丘告げて言はく、王子今佛像を見て禮する能



【授記】 佛が修行者の未來の證果を一一區別して豫め説き給ふこと。修道者に關する佛の豫言をいふ。

はざれば當に南無佛と稱すべし。宮に還りて念を繫けて塔の中の像を念す。即ち後夜に於て夢に佛像を見る。心大いに歡喜して邪見を捨離し三寶に歸依す。壽に隨つて命終す。前に塔に入りて佛を稱せし功德に由つて、即ち九百億那由他の佛に值遇するを得て、諸佛の所に於て常に勤精進して、恆に甚深の念佛三昧を得たり。念佛三昧の力の故に諸佛現前に皆授記を與へたまふ。是より以來百萬阿僧祇劫に惡道に墮せず、乃至今日首楞嚴三昧を獲得せり。爾時の王子とは今我財首是れなり。爾時會中に即ち十方の諸の大菩薩有りて、其數無量なり、各本縁を説くに、皆念佛に依つて得たり。佛阿難に告げたまはく、此觀佛三昧は是れ一切衆生の犯罪の者の藥なり、破戒の者の護なり、失道の者の導なり、盲冥の者の眼なり、愚癡の者の慧なり、黑闇の者の燈なり、煩惱の賊の中の大勇猛將なり、諸佛世間の遊戲する所の首楞嚴等の諸大三昧の始出生する處なり。佛阿難に告げたまはく、汝今善く持て慎んで安失すること勿れ。過去未來現在三世の諸佛皆是の如きの念佛三昧を説きたまふ。我十方の諸佛及び賢劫の千佛と、初發心より皆念佛三昧の力に因るが故に、一切種智を得たり」と。又「日蓮所問經」の如き、佛日蓮に告げたまはく、譬へば萬川の長流に浮べる草木有らんに、前は後を顧みず、後は前を顧みず、都て大海に會するが如し。世間も亦爾なり、豪貴富樂自在有りて雖も、悉く生老病死を免ることを得ず。只佛經を信ぜざるに由つて後世に人と爲りて更に甚だ困却して、千佛の國土に生ずることを得る能はず。是故に、我無量壽佛の國は行き易く取り易し」と。而るに人修行して往生する能はず、

反つて九十五種の邪道に事ふ。我是人を説きて眼無き人と名け耳無き人と名くと。經教既に爾り、何ぞ難を捨てて易行道に依らざらんや。

安樂集卷上終

# 安樂集 卷下

釋道綽撰

【一】 諸經の宗旨の不同を辨ず。

【一】 第四に大門の中に三番の料簡有り。第一に中國の三藏法師、並に此土の大徳等皆共に聖教を詳審して淨土に數歸するに依つて、今以て勸依す。第二に此經の宗旨及び餘の大乗の諸部に凡聖の修人に多く念佛三昧を明して以て要門と爲すに據る。第三に問答解釋して念佛する者、種種の功利益を得ること不可思議なるを顯す。

第一に中國及び此土の大徳の所行に依つてとは、余が五翳障に面して豈寧ろ自ら輒くせんや。但遊歴披勘を以て師承有るを敬ふ。何とならば、謂く、中國の大乘法師流支三藏あり。次に大徳有り名利を呵避す。則ち慧寵法師有り。次に大徳有り尋常に敷演して、毎に聖僧の來聽を感ず則ち道場法師有り。次に大徳有り光を和して孤り栖みて二國に慕仰せらる、則ち曇鸞法師有り。次に大徳有り禪觀に獨り秀でたり、則ち大海禪師有り。次に大徳有り聰慧にして戒を守る、則ち齊朝の上統有り。然るに前の六大徳は、並に是れ二諦の神鏡、斯れ乃ち佛法の綱維なり、志行倫を殊にして古今に實に希なり。皆共に大乘を詳審して淨土は乃ち是れ無上の要門なりと數歸す。問うて曰はく、「既に淨土は乃ち是れ要門なりと數歸すと云はば、未だ知らず此等の諸徳臨終の時皆靈驗有りや已不。」答へて曰はく、「皆

有り虚しからず、曇鸞法師の如き、「康存の日常に淨土を修す。亦毎に世俗の君子有りて來りて法師を呵して曰はく、十方の佛國皆淨土爲り、法師何ぞ乃ち獨り意を西に注むる、豈偏見の生に非ずや。法師對へて曰はく、吾既に凡夫にして智慧淺短なり、未だ地位に入らざれば念力須らく均からんや。草を置き牛を引き恆に須らく心を槽檻に繋がしむべきが如し。豈縱放にして全く歸する所無きを得んや」と。復難者粉紼たりと雖も、而も法師獨り決す。是を以て一切の道俗を問ふ無く、但法師と一面に相遇ふ者、若し未だ正信を生ぜざるをば勸めて信を生ぜしめ、若し已に正信を生ずる者には皆勸めて淨國に歸せしむ。是故に法師命終の時に臨んで寺の傍の左右の道俗、皆旛花の院に映するを見、盡く異香を聞ぐ、音樂迎接して往生を遂げたり。餘の大徳命終の時に臨んで皆徵祥有り。若し具に往生の相を談ぜんと欲するに、並に不可思議なり。

【法輪を轉じて】  
 教法を説きて能く  
 邪見を破り正道を  
 開くこと。輪王の  
 輪寶はその越く所  
 よく一切の障礙物  
 を破壊し、道路を  
 開通せしむるが故

第二に此彼の諸經に多く念佛三昧を明して宗と爲すを明すとは、中に就て八番有り。初の二は一相三昧を明し、後の六は縁に就き相に依つて念佛三昧を明す。第一に「華首經」に依るに、「佛堅意菩薩に告げたまはく、三昧に二種有り。一には一相三昧有り。二には衆相三昧有り。一相三昧とは菩薩有り。其世界に具如來有して現在に說法したまふを聞く。菩薩是佛の相を取りて現に前に在り。若は道場に坐し、若は法輪を轉じて大衆圍遶したてまつるを以て、是の如きの相を取る。諸根を收攝して心馳散せず。専ら一佛を念じて是縁を捨てず。是の如きの菩薩、如來の相及び世界の相に於て無相なりと了達して、常に是の如く觀じ是の



に、説法の煩惱を  
破り、邪見を碎く  
ことを之に喩ふ。

如く行じて是縁を離れず。是時に佛像既に現じて、前に在りて而も爲に法を説きたまふ。菩薩爾時、深く恭敬を生じて是法を聽受せしむ。若し深若は淺轉尊重を加ふ。菩薩是三昧に住して諸法は皆可壞の相なりと説くを聞く。聞き已りて受持し、三昧より起つて能く四衆の爲に是法を演説す。佛堅意に告げたまはく、是を菩薩の一相三昧門に入ると名く」と。第二に文殊般若に依つて一行三昧を明さば、一時に文殊師利佛に白して言さく、世尊云何が名けて一行三昧と爲す。佛の言はく、一行三昧とは、若し善男子善女人應に空閑の處に在りて諸の亂意を捨てて佛の場所に隨つて端身正向にして相貌を取らず。心を一佛に繋けて専ら名字を稱して念するに休息無かるべし。即ち是念の中に能く過現未來の三世の諸佛を見たてまつる。何を以ての故に。一佛を念する功德無量無邊にして、即ち無量の諸佛の功德と無二なり、是を菩薩の一行三昧と名く」と。第三に『涅槃經』に依らば、「佛の言はく、若し人但能く至心に常に念佛三昧を修する者は、十方の諸佛恆に此人を見はすこと現に前に在らずが如し」と。是故に『涅槃經』に云はく、「佛迦葉菩薩に告げたまはく、若し善男子善女人有りて、常に能く至心に専ら念佛する者は、若し山林、若し聚落、若し晝若し夜、若し坐若し臥、諸佛世尊常に此人を見はすこと目の前に現するが如し。恆に此人と與に住して、施を受けたまふ」と。第四に『觀經』及び餘の諸部に依るに、「所修の萬行但能く廻願するに皆生ぜざる」と莫し。然も念佛の一行を將に要路と爲す。何とならば、聖教を審量するに始終の兩益有り。若し善を生じ行を起さんと欲せば、則ち普く諸度を該ぬ。若し惡を滅して災を消する

【兆載永劫】百萬  
兆を載といひ、十萬  
しき時間をいふ。久  
【般涅槃】梵にパ  
リニルヴァーチ(Pa  
rinirvana)滅度圓寂  
等と譯す。迷妄を  
脱し、眞理を窮め  
性、寂滅無爲の法  
滅の法身の眞證に  
歸するをいふ。

ときは總じて諸彰を治す」と。故に下の經に云はく、「念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。壽盡れば必ず生ず、此を始益と名く」と。終益と言ふは、『觀音授記經』に云ふに依れば、「阿彌陀佛住世長久にして兆載永劫に亦滅度したまふ有り。般涅槃の時唯觀音勢至のみ有りて、安樂を住持して十方を接引したまふ。其佛の滅度亦住世の時節と等同なり。然るに彼國の衆生一切の佛を觀見する者有る無し。唯一向に阿彌陀佛を專念して、往生する者のみ有りて、常に彌陀は現に在して滅したまはずと見たてまつる。此れ即ち是れ其終時の益なり」と。修する所の餘行も廻向して皆生ず。世尊の滅度に觀ると觀ざると有り、後代を勧めて審量して遠益に沾さしむるなり。第五に『般舟經』に云ふに依るに、「時に跋陀和菩薩有り、此國土に於て阿彌陀佛有すと聞いて數數念を係く、是念に因るが故に阿彌陀佛を見たまつる。既に見佛し已りて、即ち從つて啓問すらく、當に何の法を行じてか彼國に生ずるを得る。爾時阿彌陀佛、是菩薩に語りて言はく、我國に來生せんと欲せば常に我名を念じて休息有る莫れ。是の如くならば我國土に來生するを得ん。當に佛身の三十二相悉く皆具足して、光明徹照し端正無比なるを念すべし」と。第六に『大智度論』に依るに三番の解釋有り。「第一に佛は是れ無上法王なり。菩薩は法臣爲り、尊する所重する所は唯佛世尊なり」と。是故に應に常に念佛すべし。第二に諸の菩薩有りて自ら云はく、我曠劫より以來世尊の我等が法身、智身、大慈悲身を長養するを蒙るを得、禪定、智慧、無量の行願、佛に山つて成ずるを得たり。報恩の爲の故に常に願じて佛に近づきたてまつる。亦大臣の王の

【般若】 プラナーニヤー (Prāṇa) 智慧と譯す。六度のこ  
と。智波羅蜜のこ

恩寵を蒙りて、常に其主を念ずるが如し。第三に諸の菩薩有りて、復是言を作さく、我  
 因地に於て惡知識に遇うて、般若を誹謗し、惡道に墮して、無量劫を經たり。餘行を修す  
 と雖も未だ出るを得る能はず。後に一時に於て善知識の邊に依りしに、我をして教へて念  
 佛三昧を行せしむ。其時即ち能く諸の障を併遣して方に解脫を得たり。斯大益有るが故  
 に願じて佛を離れずと。第七に「華嚴經」に云ふに依るに、「寧ろ無量劫に於て其に一切の  
 苦を受くるとも、終に如來に遠かりて自在力を觀たてまつらざるばあらず」と。又云はく、  
 「念佛三昧は必ず佛を見、命終の後に佛前に生ず。彼臨終を見ては念佛を勸む。又尊像を示  
 して瞻敬せしめよ」と。又「善財童子、善知識を求めて功德雲比丘の所に詣でて白して言さ  
 く、大師云何が菩薩の道を修して普賢の行に歸せんや。是時比丘善財に告げて曰はく、我  
 世尊智慧海の中に於て唯一法を知れり、謂ゆる念佛三昧門なり。何をか此三昧門の中に於  
 て、悉く能く一切の諸佛と、及び其眷屬と、嚴淨の佛刹との能く衆生をして顛倒を遠離せ  
 しむるを觀見す。念佛三昧門とは微細の境界の中に於て、一切の佛の自在の境界を見、諸劫  
 の不顛倒を得。念佛三昧門とは能く一切の佛刹を起すに能く壞る者無し、普く諸佛を見て三  
 世の不顛倒を得。時に功德雲比丘善財に告げて言はく、佛法の深海廣大無邊なり、我知る所  
 の者は唯此一の念佛三昧門を得たり。餘の妙境界は數量に出過せり。我未だ知らざる所な  
 り」と。第八に「海龍王經」に依るに、「時に海龍王佛に白して言さく、世尊の弟子、阿彌陀佛  
 國に生ぜんと求む。當に何の行を修してか彼土に生ずるを得べき。佛龍王に告げたまはく、

若し彼國に生ぜんと欲せば當に八法を行すべし。何等をか八と爲す。一には常に諸佛を念じ、二には如來を供養し、三には世尊を咨嗟し、四には佛の形像を作りて諸の功德を修し、五には往生を廻願し、六には心怯弱ならず、七には一心に精進す、八には佛の正慧を求むるなり。佛龍王に告げたまはく、一切衆生彼八法を具すれば常に佛を離れず」と。問うて曰はく、「八法を具せざれども佛前に生ずるを得て佛を離れざらんや不や。」答へて曰はく、「生ずるを得、疑はざれば、何を以てか知るを得たる。佛『寶雲經』を説きたまふ時のごく、亦十行具足して淨土に生ずるを得て、常に佛を離れずと明せり。時に除蓋障菩薩有りて佛に白さく、「十行を具せずとも生ずるを得るや不巳」佛言はく、「生ずるを得。但能く十行の中に一行具足して闕くる無くば餘の九行も悉く清淨と名く、疑ひを致すこと勿れ」又『大樹緊那羅王經』に云はく、「菩薩四種の法を行じて常に佛前を離れず」と。何等をか四と爲す。一には自ら善法を修して兼て衆生を勧め、皆往生して如來を見たてまつるといふ意を作す。二には自ら勧め他を勧め、正法を聞かんと樂ふ。三には自ら勧め他を勧め、菩提心を發さしむ。四には一向に志を事にして念佛三昧を行す。此四の行を具すれば一切の生處に常に佛前に在つて諸佛を離れず。又經に云はく、佛菩薩の行法を説きたまふに、三十二の器有り。何ぞ布施は是れ大富の器、忍辱は是れ端正の器、持戒は是れ理身の器、五逆不孝は是れ刀山劍樹饑渴の器、發菩提心は是れ成佛の器、常に能く念佛して淨土に往生するは是れ見佛の器なり」と。略して六門を擧ぐ、餘は述べず。聖教既に兩り、行者生ぜんと願せば



何ぞ常に佛を念ぜざらんや。又『月燈三昧經』に云ふに依るに、佛の相好及び德行を念じ、能く諸根をして亂動せざらしめ、心に迷惑無けれども法と合すれば聞を得、智を得る大海の如し。智者是三昧に住して念を攝して行すれば、經行の所に於て能く千億の諸の如來を見たてまつり、亦無量恆沙の佛に値たてまつる」と。

【摩訶衍】大乘のこと。大人の所乘にして大苦を滅し大利益を興ふる菩薩の大機が佛果の大涅槃を得る法門なり。

第三に問答解釋して念佛三昧に種種の利益有るを顯すに、其五番有り。第一に問うて曰はく、『今常に念佛三昧を修せよと云ふは、仍餘の三昧を行ぜざらんや。』答へて曰はく、『今常念と言へども亦餘の三昧を行ぜざれとは言はず、但念佛三昧を行する多きが故に、故に常念と言ふ。全く餘の三昧を行ぜざれと謂ふには非ず。』第二に問うて曰はく、『若し常に念佛三昧を修せよと勸めば、餘の三昧と能く階降有りや以不。』答へて曰はく、『念佛三昧の勝相不可思議なり。此れ云何が知る。摩訶衍の中に説くが如し。云はく、諸餘の三昧は三昧ならざるに非ず、何を以ての故に。或は三昧有り但能く食を除きて瞋癡を除く能はず。或は三昧有り但能く瞋を除きて癡食を除く能はず。或は三昧有り但能く癡を除いて貪瞋を除く能はず。或は三昧有り但能く現在の障を除きて過去未來の一切の諸障を除く能はず。若し能く常に念佛三昧を修すれば、現在過去未來を問ふ無く、一切の諸障を悉く皆除くなり。』第三に問うて曰はく、『念佛三昧既に能く障を除き、福を得る功利大ならば未審し。亦能く行者を資益して年を延べ壽を益さしむるや以不。』答へて曰はく、『必ず得ん。何とならば、惟無三昧經』に云ふが如し、『兄弟二人有り、兄は因果を信じ弟は信心無し。而れども能く相法を解せり。

【三寶】佛寶、法寶、僧寶のこと。

因に其鏡中に自ら面上を見るに、死相已に現じて七日を過ぎざらんとす。時に智者有りて教へて往いて佛に問はしむ。佛時に報へて言はく、七日ならんこと虚からず。若し能く一心に佛を念じ戒を修せば或は難を度するを得ん。即ち教に依つて繫念す。時に六日に至りて即ち二鬼有りて來れり。耳に其念佛の聲を聞いて竟に能く前進む無し。還つて閻羅王に告ぐ。閻羅王符を求め、已に注して云はく、持戒念佛の功德によつて第三の炎天に生ず」と。又『譬喻經』の中に、「一の長者有りて罪福を信ぜず、年已に五十、忽に夜夢見らく、利鬼符を求めて來りて之を取らんと欲す。十日を過ぎじ。其人眠覺めて惶怖する常に非ず。明に至りて相師を求覺夢を占はしむ。師卦兆を作りて云はく、利鬼有り必ず相害せんと欲す、十日に過ぎずと。其人惶怖常に信ず。佛に詣つて求請す。佛時に報へて云はく、若し此を攘はんと欲はば、今より已去意を専らにして佛を念じ戒を持ち、香を燒き燈を燃し、繪幡蓋を懸け三寶を信向せば、此死を免るべし。即ち此法に依つて心を専らにして信向す。利鬼門に到りて功德を修するを見て遂に害する能はず。鬼即ち走り去りぬ。其人斯功德に緣て壽百年に満て、死して天に生ずるを得たり」と。復一りの長者有り、名を執持と曰ふ。戒を退して佛に還し、現に惡鬼に打たる。第四に問うて曰はく、「此念佛三昧は但能く諸障を剷治し、唯世報を招く、亦能く遠く出世の無上菩提を感ずるや以不や」答へて曰はく、「得べし。何となれば『華嚴經』の十地品に云ふが如し。始め初地より乃至十地までに、一一の地の中に於て皆入地の加行道と地滿の功德利と已不住道とを説き訖りて、即ち皆結して云はく、是諸の善

【四攝】菩薩が衆生を度脱せしむるにつき、先づ川ひて衆生を攝招する、四種の法、布施攝、愛語攝、利行攝、同事攝。

【六度】六波羅蜜とも云ふ。生死の苦を滅して、涅槃の彼岸に到るの意にして、菩薩の修する行を云ふ。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。

【諸經の得名】各異なるを明す。涅槃、般若經等の如きは法に就て名となす。自ら喻に就くことあり、亦時に就き處に就くことあり。今例一にあらざる。

【佛は】此觀經は人法に就て名となす。佛は是れ人の名。説觀無量壽は是れ徳の名なり。

薩餘行を修すと雖も、皆念佛念法念僧を離れず、上妙の樂具もて三寶を供養す」と。斯文證を以て知るを得たり。諸の菩薩等乃至上地まで常に念佛念法念僧を學して方に能く無量の行願を成就して功德海を滿す。何に況んや二乘凡夫淨土に生ずるを求めんに、念佛を學せざらん。何を以ての故に。此念佛三昧は即ち一切の四攝六度を具す。通行通伴なるが故に。【第五に問うて曰はく、】初地已上の菩薩は、佛と同じく眞如の理を證すれば佛家に生ずると名く。自ら能く作佛して衆生を濟運す、何ぞ須らく更に念佛三昧を學して佛を見んと願すべけんや。答へて曰はく、其眞如を論ずるに廣大無邊なり、虚空と等しくして其量知り難し。譬へば一の大なる闇室に若し一燈二燈を燃すが如し。其明徧しと雖も、猶闇と爲すなり。漸く多燈に至れば大明と名くと雖も、豈日光に及ばんや。菩薩所證の智は地地相望するに、自ら階降有りと雖も、豈佛の日明の如くなるに比するを得んや。

【二】第五大門の中に四番の料簡有り。第一に汎く修道の延促を明して、速に不退を獲しめんと欲す。第二に此彼の禪觀比較して往を勤む。第三此彼淨穢の二境も亦漏無漏に名くるをもて比較す。第四に聖教を引いて證成して、後代を勤めて信を生じ往を求めしむ。

第一に汎く修道の延促を明すとば、中に就て二有り。一に修道の延促を明す。二に問答解釋す。一に延促を明すとば、但一切衆生苦を厭ひ樂を求め、縛を畏れ解を求めざる無し。皆早く無上菩提を證せんと欲する者、先づ須く發菩提心を首と爲すべし。此心識り難く起

【佛は】此觀經は人法に就て名となす。佛は是れ人の名。説觀無量壽は是れ徳の名なり。

し難し。縦令此心を發得すとも、經に依つて終に須く十種の行を修すべし。謂く信進念  
 戒定慧捨護法發願廻向もて、菩提に進詣すべし。然るに修道の身、相續して絶えざれば、  
 一萬劫を逕て始て不退の位を證す。當今の凡夫をば現に信想輕毛と名け、亦是假名と曰ひ、  
 亦是不定聚と名け、亦是外の凡夫と名く。未だ火宅を出でず、何を以てか知るを得たる。  
 菩薩『瓔珞經』に據るに、「具に入道行位法爾なるを辨ぜり。故に難行道と名く。又但以  
 れば一劫の中に受身生死すら尙數へ知るべからず。況んや一萬劫の中、徒に痛焼を受けん  
 をや。若し能く明かに佛經を信じて淨土に生ぜんと願せば、壽の長短に隨ひて一形に即  
 ち至りて位不退に階ふ。此修道の一萬劫と功を齊す。諸の佛子等何ぞ思量せずして難  
 を捨てて易を求めざらんや」と。『俱舍論』の中に、「亦難行易行二種の道を明すが如し。  
 難行とは論に説きて云ふが如き、三大阿僧祇劫の一一の劫の中に於て、皆福智の資糧六波  
 羅蜜一切の諸行を具せり。一一の行業に皆百萬の難行の道有りて、始めて一位に充つ、是れ  
 難行道なり。易行道とは即ち彼論に云はく、若し別に方便有るに由りて、解脱する有るを  
 ば、易行道と名く」と。今既に極樂に勸歸し一切の行業、悉く彼に廻向して、但能く專至なれ  
 ば壽盡て必ず生ず。彼國に生ずるを得ば、即ち究竟清涼なり。豈易行の道と名けざるべ  
 けんや。須らく此意を知るべし。二に問うて曰はく、「既に淨土に往生せんと願すれば、此  
 壽盡くるに隨ひて、即ち往生を得と言ふは、聖教の證有りや否や。答へて曰はく、「七番有  
 り。皆經論を引いて證成す。一には『大經』に依るに云はく、「佛阿難に告げたまはく、



【九品】九等の品  
 上品、上品、上品  
 中品、中品、中品  
 下品、下品、下品

【四業】佛の四種の弟子  
 比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷

其れ衆生有りて、今世に於て無量壽佛を見たてまつらんと欲せば、應に無上菩提の心を發し、功徳を修行して彼國に生ぜんと願すべし」と。即ち往生を得るが故に。大經の讚に云はく、「若し阿彌陀の徳號を聞きて歡喜し讚仰し心に歸依すれば、下一念に至るまで大利を得、即ち爲功徳の寶を具足す。設ひ大千世界に滿てらん火をも、亦應に直に過ぎて佛名を聞くべし、阿彌陀を聞かば復退せず、是故に至心に稽首して禮したてまつる。二には『觀經』に依るに、九品の内、皆言はく、「臨終正念にして即ち往生を得」と。三には『起信論』に云ふに依るに、「諸の衆生を教へて眞如平等一實なるを觀ぜよと勸む。亦始發意の菩薩有りて、其心軟弱にして自ら、常に諸佛に値ひたてまつりて、親承供養する能はずと謂ひ、意に退せんと欲せば當に知るべし、如來に勝方便有りて信心を攝護したまふ。謂く意を専らにして念佛する因縁を以て隨願往生す。常に佛を見たてまつるを以ての故に永く惡道を離る」と。四には『鼓音陀羅尼經』に云ふに依るに、「爾時世尊諸の比丘に告げたまはく、我當に汝が爲に演說すべし。西方安樂世界に今現に佛有す、阿彌陀と號けたてまつる。若し四業有りて、能く正しく彼の佛の名號を受持して、其心を堅固にして憶念して忘れざれ。十日十夜、散亂を除捨し精勤に念佛三昧を修習して、若し能く念念に絶えざらむれば、十日の中に必ず彼阿彌陀佛を見たてまつるを得て、皆往生することを得」と。五には『法鼓經』に云ふに依るに、「若し入臨終の時に念を作す能はざれども、但彼方に佛有すことを知りて往生の意を作さば亦往生を得」と。六には『十方隨願往生經』に云ふが如

【閻浮提】梵にヤンブドキーバ (Jambudvīpa) 洲と譯す。もと印度のことに名けたるものにて、後、此を以て吾人の住する世界のこととなせり。

し。「若し臨終に死して地獄に墮するもの有らんに、家内の眷屬其亡者の爲に念佛、及び轉誦齋福すれば、亡者は即ち地獄を出でて淨土に往生す」と。況んや其現在に自ら能く修念せば、何を以てか往生するを得ざらん。是故に彼經に云はく、「現在の眷屬亡者の爲に追福すれば、遠人に餉るに定めて食を得るが如し」と。第七に廣く諸經を引いて證成せば、「大法鼓經」に説くが如し。「若し善男子善女人常に能く意を繋けて諸佛の名號を稱念すれば、十方の諸佛一切の賢聖常に此人を見たまふこと日の前に現するが如し。是故に此經を大法鼓と名く」と。當に知るべし、此人は十方の淨土願に隨つて往生す。又「大悲經」に云はく、「何ぞ名けて大悲と爲す。若し専ら念佛相續して斷えざる者は其命終に隨ひて定めて安樂に生ず。若し能く展轉して相勸めて念佛を行する者は、當に知るべし。此等を悉く大悲を行する人と名く」と。是故に「涅槃經」に云はく、「佛大王に告げたまはく、假令大庫藏を開きて一月の中に一切の衆生に布施せん。得る所の功德は人有りて佛を稱する一口の功德には如かじ、前に過ぎたること校量すべからず」と。又一増一阿含經に云はく、「佛阿難に告げたまはく、其れ衆生有りて、一閻浮提の人に衣服飲食臥具醫藥を供養せん。得る所の功德寧ろ多とせんや不や。阿難佛に白して言さく、世尊甚だ多く甚だ多し、數量すべからず。佛阿難に告げたまはく、若し衆生有りて善心相續して佛の名號を稱すること、一たび牛乳を搗る頂の如くならんに、得る所の功德上に過ぎたること量るべからず、能く量る者有ること無けん」と。「小品經」に云はく、「若し人散心に念佛せんに乃至苦を畢るまで其福盡きず。若

し人散華念佛すれば、乃至苦を畢るまで其福盡きず」と。故に知んぬ念佛の利、大なること不可思議なり。『十往生經』諸の大乗經等に並に文證有り。具に引くべからず。

第二に次に此彼の禪觀比較して往生を勸むるを明すとは、但此方は穢境にして亂想入り難し。就令修し得れども唯事の定を獲て多く味染を喜む。又復但能く業を伏して報、上界に生ずれども壽盡くれば多く退す。是故に『智度論』に云はく、『多聞と持戒と禪、未だ無漏の法を得ずんば、此功德有りと雖も、是事未だ信すべからず。若し西に向うて修習せんと欲せば、事境光淨にして定觀成じ易くして、罪を除くこと多劫なり。永く定速に進んで究竟清涼なり。大經に廣く説くが如し』と。問うて曰はく、『若し西方の境界は勝れたるをもて禪定の爲に感じつべくんば、此界の色天は劣なるをもて應に禪定の爲に招くべからざるや。』答へて曰はく、『若し修定の因を論ぜば、彼此に該通せり。然るに彼界は位是れ不退にして、並に他力の持つ有り。是故に説いて勝と爲す。此處は復定を修する尅なりと雖も、但自分の因のみ有りて、闕けて他力の攝する無し。業盡きぬれば退くことを免れず、此に就て如かじと説く。』

第三には此彼淨穢の二境を亦漏無漏と名くるに據らば、若し此處の境界を論ずれば、唯三塗、丘坑、山澗、沙鹵、棘刺、水旱、暴風、惡觸、雷電、霹靂、虎狼、毒獸、惡賊、惡子、荒亂、破散、三災、敗壞有り。正報を語論すれば、三毒、八倒、憂悲、嫉妬、多病、短命、飢渴、寒熱、常に伺命害鬼に追逐せらる、深く穢惡すべし。具に説くべからず、故

【八例】凡夫の四例と菩薩の四例。

【八正】八正道支のことに、中正に理に契ひ、涅槃に至る道なるが故に正道といふ。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定。

に有漏と名く。深く厭ふべし、彼國に往生するは勝れたる者なり。大經に云ふに據るに、十方の人天但彼國に生ずる者は、皆種種の利益を獲ずと云ふこと莫し。何とならば一たび彼國に生ずる者は、行かば則ち金蓮足を捧げ、坐すれば則ち寶座軀を承け、出づれば則ち帝釋前に在り、入れば則ち梵王後に從ふ。一切の聖衆は我と親朋なり、阿彌陀佛は我爲に大師たり。寶樹寶林の下には、意に任せて翱翔し、八徳の池の中には、神を遊ばして、足を濯ふ。形は則ち身同じく金色なり、壽は則ち命佛と齊し。學すれば則ち衆門並進み、止むれば二諦虛融す。十方に濟運するには則ち大神通に乗じ、晏安暫時するには則ち三空門に坐す。遊べば則ち八正の路に入り、至れば則ち大涅槃に到る。一切衆生但彼國に至れば、皆此益を證す。何ぞ思量せずして速に去ざらんや。

第四には聖教を引いて證成して後代を勧め、信を生じて往を求願せしむとは、「觀佛三昧經」に云ふに依るに、爾時會中に十方の諸佛有して、各華臺の中に於て結跏趺坐して空中に於て現じたまふ。東方の善徳如來を首と爲して大衆に告げて言はく、汝等當に知るべし。我は過去無量世の時を念するに、佛有す寶威徳上王と名く。彼佛出でたまふ時、亦今日の如く三乗の法を説きたまへり。彼佛の滅後末世の中に一りの比丘有りて、弟子九人を將て佛塔に往詣し佛像を禮拜す。一の寶像の嚴顯にして觀すべきを見る。觀じ已りて敬禮して日に、諦に之を觀す。各一偈を説いて用て讚歎を爲す。壽の修短に隨うて各自に命終す、既に命終し已りて即ち佛前に生ず。此より已後恆に無量の諸佛に值遇するを得て、



諸佛の所に於て廣く梵行を修して、念佛三昧海を得たり。既に此を得已りて諸佛現前に即ち授記を與へたまふ。十方の面に於て意に隨うて作佛せり。東方の善徳佛とは即ち我身是なり。自餘の九方の諸佛は即ち是れ本昔の弟子九人はなり。十方の佛世尊塔を禮し一偈もて讚するに因由が故に、佛と爲るを得たり、豈異人ならんや。我等十方の佛是なり。是時に十方の諸佛、空より下りて千の光明を放ちて、色身白毫相の光を顯現し、各各に皆釋迦佛の床に坐して、阿難に告げて言はく、汝知るや、釋迦文佛無數の精進、百千の苦行もて佛智慧を求めて是身を報得して、今汝が爲に説きたまふ。汝佛語を持ちて、未來世の天龍大衆四部の弟子の爲に、觀佛相好及び念佛三昧を説くべし。是語を説き已りて、然して後に釋迦文佛に問訊す。問訊し訖已りて各本國に還りたまふ。

【三】 第六大門の中に三番の料簡有り。第一には十方淨土共に來して比較す。第二には義をもて推す。第三に經の住滅を辨す。

第一に十方淨土共に來して比較すとは、其三番有り。一には「隨願往生經」に云ふが如し、「十方の佛國皆悉く嚴淨なり。願に隨うて並に往生を得。然りと雖も悉く西方の無量壽國には如かず」と。何の意を以てか此の如くなる。但阿彌陀佛、觀音大勢至と先に發心せし時、此界より去りたまふ。此衆生に於て偏に是れ緣有り。是故に釋迦處に歎じて歸せしむ。二に大經に據るに、法藏菩薩因中に世饒王佛の所に於て、具に弘願を發して諸の淨土を取りたまふ。時に佛爲に二百一十億の諸佛刹土の天人の、善惡國土の精麤を説きて悉

【三】 説人の差別を料簡す。諸經の起説五種に過ぎず、自説、聖弟子、諸天、神佛、變化の五種説なり、此觀經は五種説の中に世尊の自説なり。

く現じて之を與へたまふ。時に法藏菩薩願して西方を取りて成佛したまふ、今現に彼に在す」と。是れ二の證なり、三に此「觀經」の中に依つて韋提夫人復淨土を請するに、如來光臺において爲に十方一切の淨土を現じたまふ。韋提夫人佛に白して言さく、「此諸佛の土も復清淨にして皆光明有り」と雖も、我今極樂世界の阿彌陀佛の所に生ぜんことを樂ふ」と。是れ其三の證なり。故に知んぬ諸の淨土の中に安樂世界最勝なることを。

第二に義をもて推すとは、問うて曰はく、「何が故に要す面を西に向け坐禮念觀すること須ふるや。」答へて曰はく、「閻浮提には、日出の處を生と名け、没する處を死と名く。死地に藉るに神明の趣入、其相助便なるを以てなり。是故に法藏菩薩願して成佛し、西に在りて衆生を悲接したまふ。坐觀禮念等に面を佛に向ふは、是れ世の禮儀に隨ふに由るなり。」若し是れ聖人は飛報自在を得れば、方所を辨ぜず。但凡夫の人は身心相隨ふ。若し餘方に向はば西に往く必ず難からん。是故に「智度論」に云はく、「一の比丘有り。康存の日阿彌陀經を誦し、及び般若波羅蜜を念す。命終の時に臨んで弟子に告げて言はく、「阿彌陀佛の聖衆と與に今我前に在す」と。合掌歸依して須臾に命を捨つ。是に於て弟子火葬の法に依つて火を以て屍を焚くに、一切焼き盡せども、唯舌根の一種のみ有りて本と異ならず。遂に即ち收め取りて塔を起て供養す」と。龍樹菩薩釋して云はく、「阿彌陀經を誦するが故に、是を以て終に垂とするに佛自ら來迎したまふ。般若波羅蜜を念するが故に、所以に舌根盡きす」と。斯文を以て證す。故に知んぬ一切の行業は但能く廻向するに往かざる無し。故

に、須彌四城經に云はく、「天地初めて開けし時、未だ日月星辰あらず。縱ひ天人來下する有れども、但項の光を用ひて照用す。爾時人民多く苦惱を生ず、是に於て阿彌陀佛二菩薩を遣す。一をば寶應聲と名け、二をば寶吉祥と名く、即ち伏羲女媧是なり。此二菩薩共に相籌議して、第七の梵天の上に向うて、其七寶を取つて此界に來至して、日月星辰二十八宿を造り、以て天下を照して、其四時春秋冬夏を定む。時に二菩薩共に相謂つて言はく、日月星辰二十八宿をして西に行かしむる所以は、一切の諸天人民、盡く共に阿彌陀佛を稽首せしめん」と。是を以て日月星辰皆悉く心を傾けて彼に向ふ。故に西に流るるなり。」

第三に經の住滅を辨ずとは、謂く釋迦牟尼佛の一代の正法五百年、像法一千年、末法一萬年にして、來生咸く盡き、諸經悉く滅す。如來痛燒の衆生を悲哀して、特に此經を留めて止住百年ならしむと。斯文を以て證す。故に知んぬ。彼國は是れ淨土なりと雖も、然も體上下に通ず。相無相を知るは當に上位に生ずべし。凡夫の火宅にあるは一向に相に乗じて往生するなむ。

【四】第七大門の中に、兩番の料簡有り。第一に此彼の取相をもて縛脱を料簡す。第二に次に此彼の修道に功を用ふる輕重もて報を獲る眞僞を明して、故に勸めて彼に向はしむ。

第一に此彼の取相をもて縛脱を料簡すとは、若し西方の淨相を取れば疾く解脫を得。純ら極樂を受けて智眼開朗なり。若し此方の穢相を取れば唯妄樂癡盲厄縛憂怖のみ有り。問う

【四】略して身應二身を明し、兼に身應二上を辨ず。

て曰はく、「大乘の諸經に依るに、皆無相は乃ち是れ出離の要道なり、執相拘礙は塵累を免れずと云ふ、今衆生を勸むるに穢を捨てて淨を忻はしむ、是義云何。」答へて曰はく、「此義類せず、何となれば凡そ相に二種有り。一には五塵の欲境に於て妄愛貪染し境に隨うて執着す。此等の是相を之を名けて縛と爲す。二には佛の功德を愛して淨土に生ぜんと願す、是れ相と言ふと雖も名けて解脱と爲す。何を以てか知るを得たる、「十地經」に云ふが如し、「初地の菩薩尙自ら二諦を別觀して、心を勵まして作意す。先には相に依つて求め、終には則ち無相なり。以て漸く増進して大菩提を體る。七地の終心を盡すとき相心始めて息む、其八地に入りて相求を絶するを方に無功用と名く」と。「是故に論に云はく、「七地已還は惡貪を障と爲し、善貪を治と爲す。八地已上は善貪を障と爲し、「無貪を治と爲す」と。況んや今淨土に生ぜんことを願すれば、現に是れ外凡なり。所修の善根皆佛の功德を愛するより生ず、豈是れ縛ならんや。故に「涅槃經」に云はく、「一切衆生に二種の愛有り。一には善愛、二には不善愛なり。不善愛とは唯愚のみ之を求む、善法愛とは諸の菩薩求む」と。是故に「淨土論」に云はく、「觀佛國土清淨味、攝受衆生大乘味、類事起行願取佛土味、畢竟住持不虛作味、是の如き等の無量の佛道の味有り」と。故に是れ相を取ると雖も、執縛に當るに非ず。又彼淨土に言ふ所の相とは、即ち是れ無漏の相實相の相なり。

第二段の中に此彼の修道功を用ふる輕重をして、報を獲る眞僞を明すとは、若し發心して西に歸せんと欲する者、單に少時の禮觀念等を用ひて、壽の長短に隨うて命終の時に



【見惑】四諦の理に迷ふさはり。三界四諦の下に増減不同なるが故に十八使の見惑となる。

【五】彌陀の淨國は位上下を該ね凡聖通じて往くことを顯す。

臨んで、光臺迎接して迅く彼方に至りて位不退に階ふ。是故に大經に云はく、「十方の人天我國に來生せんに、若し畢に滅度に至らずして更に退轉有らば正覺を取らじ」此方は多時に具に施戒忍進定慧を修して、未だ一萬劫に滿たざる已來は恆に未だ火宅を免れず、顛倒墜墮す。故に功を用ふることに至つて重く、報を獲るは偽なりと名く。大經に復云はく、「我國に生ずる者は、横に五惡趣を截る」と。今此は彌陀の淨刹に約對して娑婆の五道を齊しく惡趣と名く、地獄餓鬼畜生は純惡の所歸なれば、名けて惡趣と爲す。娑婆の人天は雜業の所向なれば亦惡趣と名く。若し此方の修治斷除に依れば、先づ見惑を斷じて三塗の因を離れ、三塗の果を滅す。後に修惑を斷じて人天の因を離れ、人天の果を絶つ。此れ皆漸次に斷除すれば横截と名けず。若し彌陀の淨國に往生するを得れば、娑婆の五道一時に頓に捨つ、故に横截と名く。五惡趣とは其果を截るなり。惡趣自然閉とは其因を閉るなり。此れ所離を明す。昇道無窮極とは其所得を彰すなり。若し能く作意廻願して西に向へば、上一形を盡し下十念に至るまで、皆往かざる無し。一たび彼國に到れば即ち正定聚に入りて、此に道を修する一萬劫と功を齊しするなり。

【五】第八大門の中に三番の料簡有り。第一に略して諸經を擧げて來證して、勸めて此を捨て彼を忻はしむ。第二に彌陀釋迦二佛比較す。第三に往生の意を釋す。

第一に略して諸の大乗經を擧げて來し證して、皆勸めて此を捨て彼を忻はしむとは、一には謂く耆闍崛山の說大經二卷。二には「觀經」一部、王宮耆闍兩會の正說なり。三に

は小卷『無量壽經』舍衛の一説。四には復十方隨願往生經の明證有り。五には復無量清淨覺經二卷一會の正説有り。六には更に十往生經二卷有り。諸餘の大乗經論に指讀する處多し。『請觀音大品經』等の如し。又龍樹天親等の論の如し。教勸一に非ず。餘方の淨土は皆此の如く丁寧ならず。

第二に彌陀釋迦二佛比較すとは、謂く、此佛釋迦如來八十年世に住して暫く現じて即ち去る。去つて而して返りたまはず。初利の諸天に比するに一日にも至らず。又釋迦在しし時救緣亦弱し。毘舍離國にして人の現患を救ひたまひし等の如し。何となれば時に毘舍離國の人民五種の惡病に遭へり。一には眼赤き血の如し。二には兩の耳膿を出す。三には鼻中より血を流す。四には舌燥んで聲無し。五には所食の物化して麤澁と爲る。六識閉塞する猶し醉人の如し。五夜叉有り、或は訖拏迦羅と名く。面の黒き墨の如し、而して五眼有りて、狗牙の上に出でて人の精氣を吸ふ。良醫の善婆其道術を盡せども救ふ能はざる所なり。時に月蓋長者有り。首と爲りて病人を部領し、皆來りて佛に歸して頭を叩いて哀を求む。爾時世尊無量の悲愍を起して病人に告げて曰はく、「西方に阿彌陀佛觀世音大勢至菩薩有す。汝等一心に合掌して見たてまつらんことを求めよ」是に於て大衆、皆佛の勸に従うて合掌して哀を求む。爾時彼佛大光明を放ちたまふ。觀音大勢至一時に俱に到りて大神呪を説きたまふに、一切の病苦皆悉く消除して平復する故の如し。然るに二佛の神力應に亦齊等なるべし。但釋迦如來己が能を申べたまはずして故に彼長ぜるを顯して、一切衆生をして齊

しく歸せざること莫らしめんと欲す。是故に釋迦處處に敷歸せしめたまへり。須らく此意を知るべし。是故に曇鸞法師の正意西に歸するが故に。大經に傍へて奉讀して云はく、「安樂の聲聞菩薩衆、人天の智慧、咸く洞達せり。身相莊嚴殊異無し、但他方に願するが故に名を別つ、顔容端正にして比ぶべき無し、精微の妙軀人天に非ず。虛無の身無極の體なり、是故に平等力を頂禮したてまつる」と。

第三に往生の意を釋すとは、中に就て二有り。一には往生の意を釋し、二には問答解釋す。第一に問うて曰はく、『今淨土に生ぜんと願す、未だ知らず何の意をか作さん。』答へて曰はく、『只疾く自利利他を成じ利物深廣ならんことを欲すればなり。十信三賢あり。正法を攝受して、不二に契會し佛性を見證して實相を明曉す。觀照暉心、有無の二諦、因果先後あり。大地の優劣、三忍三道金剛無礙大涅槃を證し、大乘寛く運んで無限の時に住して爲に無邊の生死海を盡さんと欲するが故に。』問に三番有り。問うて曰はく、『淨土に生ぜんと願するは、物を利せんと欲するに擬すとは、若し爾らば所拔の衆生は今現に此に在り、已に能く此心を發得せば、只應に此に在りて苦の衆生を抜くべし。何に因つてか此心を得竟りて先づ淨土に生ぜんと願せん。衆生を捨て、自ら菩提の樂を求むるに似たり。』答へて曰はく、『此義類せず。何となれば大論に云ふが如く、譬へば二人俱に父母眷屬の深淵に没在するを見て、一人は直に往つて力を盡して之を救ふ。力及ばざる所ありて相與に俱に没す。一人は遙に走りて一つの舟船に取つて乗り來りて濟接するに、並に難を出づるを得たるが如し。菩薩も亦爾なり。

【六】彌陀淨國の三界の攝と不攝とを明す。

若し未だ發心せざる時は生死に流轉する衆生と別無し。但己に菩提心を發す時は、先づ淨土に往生して大悲の船を取りて無礙辯才に乗じ、生死海に入り衆生を濟運せんと願す。二に大論に復云はく、菩薩淨土に生じて大神通を具して、辯才無礙にして衆生を教化する時すら尙衆生をして善を生じ惡を滅し道を増し位に進むこと菩薩の意に稱はしむる能はず。若し即ち穢土に在りて拔濟する者は闕けて此益無し。鷄を逼めて水に入るが如し。豈能く濕はざらんや。三に大經に讚じて云はく、安樂佛國の諸の菩薩、夫れ宣說すべきは智慧に隨ふ。己が萬物に於て我所を亡じ、淨きこと蓮華の若くして塵を受けず、往來進止汎べる舟の若し、利安を務として適莫を捨つ、彼己に猶し空のごとくにして二想を斷す、智慧の炬を燃して長夜を照す、三明六通皆己に足り、菩薩の萬行心眼を觀す。是の如きの功德遷墓無し、是故に至心に彼に生ぜんと願す。

【六】第九大門の中に兩番の料簡有り、第一に苦樂善惡相對し、第二に彼此の壽命長短を明して比較す。

初段の中に就て二有り。一には苦樂善惡相對す。二には大經を引いて證と爲す。初に苦樂善惡相對と言ふは、此娑婆世界に在して苦樂二報有りと雖も、恆に以樂は少く苦は多し。重きときは則ち三塗に痛焼し、輕きときは則ち人天にして、刀兵疾病相續連注して、速劫より已來斷ゆる時有ること無し。縱ひ人天の少樂有りと雖も、猶し泡沫電光の速に起り速に滅するが如し。是故に名けて唯苦唯惡と爲す。彌陀の淨國は水鳥樹林常に法音を吐き、



明かに道教を宣ふ。清白を具足して能く悟入せしむ。一に聖教を引いて證と爲すとは、『淨土論』に云はく、「十方の人天彼國に生ずる者は、即ち淨心の菩薩と無二なり」と。淨心の菩薩は即ち上地の菩薩と畢竟して同じく寂滅忍を得。故に更に退轉せず。又大經の四十八願を引く中に、五番の大益有り、第一に大經に云はく、「十方の人天、我國に來生する有らんに悉く眞金色ならずんば正覺を取らじ」二に云はく、「十方の人天我國に來生せんに若し形色不同にして好醜あらば正覺を取らじ」三に云はく、「十方の人天我國に來生せんに宿命智を得ず、下百千億那由他諸劫の事を知らざるに至らば正覺を取らじ」四に云はく、「十方の人天、我國に來生せんに天耳通を得ず、下百千億那由他の諸佛の所説を聞かず、悉く受持せざるに至らば正覺を取らじ」五に云はく、「十方の人天、我國に來生せんに他心智を得ず。下百千億那由他の諸佛國中の衆生の心念を知らざるに至らば正覺を取らじ。彼國の利益の事を論ぜんと欲するに、具に陳ぶべきこと難し。但當に生ぜん願すべし。必ず思議すべからず。是故に彼方は唯善唯樂にして無苦無惡なり。

第二に壽命長短を明すと、此方の壽命大期百年に過ぎず。百年の内に少しく出でて多く減す。或は生年に天喪し、乃至童子にして身亡す。或は復胞胎にして傷墮す。何の意ぞ然るや。良に衆生因を作す時難せるに由る。是を以て報を受くる亦齊同なるを得ず。是故に涅槃經に云はく、「作業の時黒なれば果報も亦黒なり。作業の時白なれば果報亦白なり。淨と雜とも亦爾なり。又淨度菩薩經に云ふに據るに、「人壽百歲なるも、夜其半を消

す」即ち是れ五十年を滅却す。五十年内に就て十五已來は未だ善惡を知らず。八十已去は昏  
 毫虛劣なり。故に老苦を受く。此より外唯十五年在る有り。中に於て外には則ち王官の逼迫  
 長征の遠防或は繋れて牢獄に在り。内には門戸の吉凶衆事の牽纏熒熒松松として常に求む  
 るに足らず。斯の如く推計するに、幾の時有りてか道業を修することを得べき。此の如く思  
 量するに豈衰れまごころんや。何ぞ厭はざるを得ん。又彼經に云はく、「人世間に生れて凡そ一  
 日一夜を経るに八億四千萬の念有り。一念惡を起せば一惡身を受く、十念惡を念すれば十  
 生の惡身を得。百念惡を念すれば一百の惡身を受く。一衆生の一形の中を計るに百年惡を  
 念すれば、惡即ち三千國土に遍滿して其惡身を受く。惡法既に爾なり。善法も亦然なり」  
 一念善を起せば一善身を受く。百念善を念すれば一百の善身を受く。一衆生の一形の中を  
 計るに百年善を念するは三千國土に善身亦滿つ。若し十年五年阿彌陀佛を念じ、或は多年  
 に至ることを得れば後に至つて無量壽國に生じて、即ち淨土の法身を受くる恆沙無盡にし  
 て不可思議なり。今既に穢土は短促にして命報速からず。若し阿彌陀の淨國に生ずれば壽命  
 長遠にして不可思議なり。是故に「無量壽經」に云はく、「佛、舍利弗に告げたまはく、彼佛  
 を何が故に阿彌陀と號くるや。舍利弗と十方の人天彼國に往生する者は、壽命長遠にして  
 億百千劫、佛と同等なり。故に阿彌陀と號す。各宜しく此利の大なるを量りて皆往生を願す  
 べし。又『善王皇帝尊經』に云はく、「其れ人有り道を學んで西方阿彌陀佛國に往生せんと  
 念欲する者は、憶念する晝夜一日若は二日或は三日若は四日若は五日六日七日に至り、若し

【七】大經に依つて類を引きて證説し、廻向の義を明す。

復中に於て遷悔せんと欲する者も、我是善王の功德を説くを聞かば命盡きんと欲する時、八菩薩有りて、皆悉く飛び來つて此人を迎へ取りて西方阿彌陀佛國の中に到つて、終に止むるを得ざらしめん」と。此より已下又大經偈を引いて證と爲す。讚に云はく、「其衆生有りて安樂に生ずれば、悉く三十有二の相を具す、智慧満足して深法を入り、道要を究暢して障礙無し、根の利鈍に隨つて忍を成就す、三忍乃至不可説なり、宿命五通常に自在にして、佛に至るまで、更に惡趣に雜らさず、他方の五濁世に生じて、示現して大牟尼の如くならんをば除く、安樂國に生ずれば大利を成す。是故に至心に彼に生ぜん」と願す」と。

【七】第十大門の中に兩番の料簡有り。第一に大經に依つて類を引いて證説す。第二に廻向の義を釋す。第一に大經に依つて類を引いて證説すれば、十方の諸佛西方に歸することゝ勸めたまはざること無く、十方の菩薩同じく生ぜざること無し。十方の人天意に有りて齊しく歸す。故に知んぬ不可思議の事なることを。是故に大經の讚に云はく、「神力無極の阿彌陀、十方無量の佛讚じたまふ所なり。東方恆沙の諸佛國より、菩薩無數、悉く往いて觀たたまつる。亦復安樂國の、菩薩聲聞、諸の大衆を供養し、經法を聽受して道化を宣ふ、自餘の九方も亦是の如し」第二に廻向の義を釋すとは、但一切衆生既に佛性有りて、人人皆成佛を願する心有り。然も所修の行業未だ一萬劫に満たざる已來、猶未だ火界を出でざるに依つて、輪廻を免れず。是故に聖者、斯長苦を愍みて西に廻向することを勸めたまふ。大益を成ぜんが爲なり。然るに廻向の功六を越えず。何等をか六と爲す。一には所

【八】一切衆生を  
勸めて善知識に託  
して西に向はしめ  
死後生縁の勝劣を  
明す。

修の諸業もて彌陀に廻向すれば、既に彼國に至り、還つて六道を得て衆生を濟運す。此れ即ち道に住せざるなり。二には因を廻して果に向ふ。三には下を廻して上に向ふ。四には還を廻して速に向ふ。此れ即ち世間に住せざるなり。五には衆生に廻施して悲念して善に向はしむ。六には廻入して分別の心を去却す。廻向の功只斯六を成ず。是故に大經に云はく、「其れ衆生有りて我國に生ずる者は、自然に勝進して常倫諸地の行を超出して佛道を成ずるに至るまで、更に廻復の難無し」故に大經の讚に云はく、「安樂の菩薩聲聞の輩、此世界に於て比方無し、釋迦無礙の大辯才、諸の假令を設けて少分を示す、最賤の乞人を帝王に並べ、帝王を復金輪王に比す、是の如く展轉して六天に至る、次第に相類するに皆始の如し、天の色像を以て彼に喩ふるに、千萬億倍も其類に非ず、皆是れ法藏の願力の爲せるなり、稽首して大心力を頂禮したてまつる」と。

【八】第十一大門の中略して兩番の料簡を作す。第一に一切衆生を勸めて善知識に託して西に向ふ意を作さしむ。第二に死後に生縁の勝劣を辨す。第一に勸めて善知識に託すとは、「法句經」に依らば、衆生の與に善知識と作るべし。寶明菩薩有りて佛に白して「世尊云何が名けて善知識と爲す。佛の言はく、善知識とは能く深法を説く。謂く空と無相と無願となり。諸法平等にして、業無く報無く因無く果無し。究竟如如にして實際に住す。然るに畢竟空の中に於て熾然として一切の諸法を建立す。是を善知識と爲す。善知識とは是れ汝が父母なり。汝等が菩提の身を養育するが故に。善知識とは是れ汝か眼目なり、能



一切の善惡の道を見しむるが故に。善知識とは是れ汝が大船なり、汝等を運度して生死海を出づるが故に。善知識とは是れ汝が繩、繩なり、能く汝等を挽き抜いて生死を出づるが故に。と。又勸む衆生の與に善知識と作るも、必ず須らく西に歸すべし、何を以ての故に。斯火界に住すれば違順の境多きに由りて多く退没有りて出ること難きが故なり。是故に舍利弗此に於て發心して菩薩の行を修すること已に六十劫を経たり、惡知識の乞眼の因縁に逢うて遂に即ち退轉す。故に知んぬ火界にして道を修すること甚だ難きことを。故に勸めて西方に歸せしめん。一たび往生を得れば三學自然に勝進し萬行普く備ふ。故に大經に云はく、「彌陀の淨國は造惡の地毛髮の如き許も無し」と。

第二に次に衆生の死後受生の勝劣を辨すれば、此界の衆生壽盡き命終るとき皆善惡の二業に乗じて、恆に司命獄率忘愛煩惱の爲に相與に生を受けざること莫し。乃至無數劫より來、未だ免離する能はず。若し能く信を生じて淨土に歸向し、意を策して精を專にすれば、命終らんと欲する時、阿彌陀佛觀音聖衆光臺と迎接したまふ。行者歡喜して隨從し合掌して臺に乗じて須臾に即ち到る、快樂ならざる無し。乃至成佛に至る又復一切の衆生業を造ること不同なり。其三種有り。謂く上中下なり。皆閻羅に詣でて判を取らざる莫し。若し能く信佛の因縁もて、淨土に生ぜんと願じて、所修の行業並に皆廻向すれば、命終らんと欲する時佛自ら來迎して、死王に干されず。

【九】第十二大門の中に一番有り。一十往生經に就て證と爲して往生を勸む。佛阿彌

【九】十往生經に依つて證となして往生を勸むるを明

陀佛國に生ずることを説きたまふに、諸の大衆の爲に觀身正念にして解脱するを説きたまふが如し。『十往生經』に云はく、「阿難、佛に白して言さく、「世尊一切衆生身を觀するの法は其事云何。唯願くば之を説きまたへ」と。佛、阿難に告げたまはく、「夫れ觀身の法は東西を觀ぜず、南北を觀ぜず、四維上下を觀ぜず、虚空を觀ぜず、外縁を觀ぜず、内縁を觀ぜず、身色を觀ぜず、色聲を觀ぜず、色像を觀ぜず、唯無縁を觀ぜず。是を正に眞に觀身の法と爲す。是觀身を除きて十方に諦かに求るに、在在處處更に別法として解脱を得る無し」と。佛、復阿難に告げたまはく、「但自ら身を觀するに善力自然なり、解脱自然なり。何を以ての故に。譬へば人有りて精進直心にして正解脱を得るが如し。是の如きの人は解脱を求めざるに解脱は自ら至る」と。阿難、復佛に白して言さく、「世尊世間の衆生若は是の如きの正念解脱有り、應に一切の地獄餓鬼畜生三惡道無かるべし」と。佛、阿難に告げたまはく、「世間の衆生解脱を得ず、何を以ての故に。一切衆生皆虚は多く實は少きに由りて一ら正念なること無し。是因縁を以て地獄の者は多く解脱の者は少し。譬へば人有りて自らの父母及び師僧に於て、外には孝順を現じ、内には不孝を懐くが如く、外には精進を現じ内には不實を懐く、是の如きの惡人報未だ至らずと雖も三塗遠からず。正念有ること無ければ、解脱を得ず」阿難、復佛に白して言さく、「若し是の如くならば更に何の善根を修めてか正しき解脱を得ん」佛、阿難に告げたまはく、「汝今善く聽け、吾今汝が爲に説かん。十往生有り。解脱を得べし。云何が十と爲す。一には身を觀じて正念に常に歡喜を懐いて飲食衣服

の法を以て佛及び僧に施して、阿彌陀佛國に往生す。二には正念にして甘露良藥を以て一りの病比丘及び一切衆生に施して、阿彌陀佛國に往生す。三には正念にびて一の生命を害せず。一切を慈悲して阿彌陀佛國に往生す。四には正念にして師の所に從つて戒を受け淨慧をして梵行を修し、心に常に歡喜を懷きて阿彌陀佛國に往生す。五には正念に父母に孝順し師長に敬奉し、憍慢の心を起さず、阿彌陀佛國に往生す。六には正念にして僧房に往詣して塔寺を恭敬し、法を聞いて一義を解りて阿彌陀佛國に往生す。七には正念して一日一夜の中に八戒齋を受持して、一をも破せずして、阿彌陀佛國に往生す。八には正念にして若し能く齋月窟日の中に房舍を遠離し、常に善師に詣して阿彌陀佛國に往生す。九には正念にして常に能く淨戒を持ちて禪定を勤修し法を護りて惡口せず、若し能く是の如く行すれば阿彌陀佛國に往生す。十には正念にして若し無上道に於て誹謗の心を起さず、精進に淨戒を持ち復無智の者を教へて是經法を流布して無量の衆生を教化す。是の如き諸人等悉く皆阿彌陀佛國に往生することを得し。爾時會中に一の菩薩有り、山海慧と名く。佛に白して言さく、「世尊、彼阿彌陀佛國に何なる妙樂勝事有りてか一切衆生皆彼に往生せんと願するや」と。佛、山海慧菩薩に告げたまはく、「汝今應に起立合掌して身を正し、西に向つて正念に阿彌陀佛國を觀じ、阿彌陀佛を見たてまつらんと願すべし」と。爾時一切の大衆亦皆起立合掌して共に阿彌陀佛を觀たてまつる。爾時阿彌陀佛大神通を現じ大光明を放ちて、山海慧菩薩の身を照したまふ。爾時山海慧菩薩等即ち阿彌陀佛の國土を見たてまつるに、有ゆる莊嚴妙

好かうの事こと皆みな悉ことごとくく七寶しつぽうなり。七寶しつぽうの山やま七寶しつぽうの國くに土つちあり。水鳥すゐてう樹林じゆりん常に法音ほふおんを吐はく。彼國かかくにには日にちに常つねに法輪ほふりんを轉てんず。彼國かかくにの人民にんみん外事げじを習まなはず、正ただしく内事うちじを習まなふ。口くちには方等ほうとうの語ごを説とき、耳みみには方等ほうとうの聲こゑを聽きこふる。心こころには方等ほうとうの義ぎを解すず。爾時そのとき山海さんかい慧えい菩薩ぼさつ佛ぶつに白まをして言まをさく、「世尊せそん我われ等ら今いま彼國かかくにを觀けん見けんするに勝妙しょうめうの利益りやく不可いか思議ぎなり。我われ今いま願ねがふば一切いっさい衆生じゆじやうをして悉ことごとくく皆みな往生おんじやうせしめ、然しかして後のちに我われ等らも亦また彼國かかくにに生なぜんと願ねがふ」と。佛ぶつ之のを記しして曰いはく、「正觀しやうくわん正念せうねんせば正解しやうげ脱だつを得えて皆みな悉ことごとくく彼かに生しやうず。若もし善男子ぜんなんし善女人ぜんにんによ有りて正ただしく是經このきやうを信しんじ是經このきやうを愛樂あいげうして衆生じゆじやうを觀導くわんどうせば、説と者しやうも聽き者しやうも悉ことごとくく皆みな阿彌陀佛あみだぶつ國くにに往生おんじやうせん。若もし是この如ごとき等らの人ひと有あらば、我われ今いま日にちより常つねに二十五にじふごの菩薩ぼさつをして是人このひとを護持ごぢせしめん。常つねに是人このひとをして無病むびやう無惱むなうならしめん。若もし人ひと若もし非人ひにん其便そのたよりを得えず。行住ぎやうぢゆう坐臥ざが晝夜ぢゆうやを問とふ無なし。常つねに安穩あんゑんなるを得えん」と。山海さんかい慧えい菩薩ぼさつ、佛ぶつに白まをして言まをさく、「世尊せそん我われ今いま尊教そんけうを頂受ちやうじゆして敢あへて疑うたがひ有あらず。然しかるに世よに衆生じゆじやう有りて、多おほく誹謗ひまうして是經このきやうを信しんぜざること有あらん。是この如ごときの人ひとは後のちに於おいて云何いひか」と。佛ぶつ、山海さんかい慧えい菩薩ぼさつに告つげたまはく、「後のちに於おいて閻浮提えんぶだいに或あるは比丘びくし比丘尼びくに有りて是經このきやうを讀誦どくじゆすること有ある者ものを見て、或あるは相瞋あひあむし心こころに誹謗ひまうを懷いだかん。是この謗正法ぼうしやうぽうに由よるが故ゆゑに、是人このひと現身このひとげんしんの中に諸もろの惡重あくじゆう病身びやうしん根こん不具ふぐ。聾盲ろうめう瘡癩そうらい水腫すいしゆ鬼魅きまいを來致らいぢして坐臥ざが安やすからず、生しやうを求もとむるに得えず。死しを求もとむるに得えず。或あるは乃すなはち死しを致いたして地獄ぢごくに墮おじ八萬劫はちまうせう中に大苦惱だいくなうを受うく。百千萬ひやくせんまん世よ未まだ曾かつて水食すいきの名なを聞きかず。久ひさしくして後のちに出いづるを得えれども牛馬ごま猪羊ぢやうに在あつて人ひとの爲ために殺せつせられて大極苦だいくを受け、後のちに人ひとと爲なるを得えとも常つねに下處げじよに生しやうじて、百千萬ひやくせんまん世よにも白在はくざい



を得ず。永く三寶の名字を聞かず。是故に無智無信の人の中にして、是經を説くこと莫れ」と。

撰集流通の徳を普く一切に施す、先づ菩提心を發して同じく淨國に歸向して皆共に佛道を成ぜん。

安樂集卷下終

【當書】は玄義分、序分義、定善義、散善義の四巻より成る。觀經の疏にして、世に四帖の疏と稱せらる。第一に玄義分は觀無量壽經の經文を逐次解釋する前に、その玄義を序題、釋名、宗旨、説人、定散、和會、得忍の七門に分ち論釋したるものなり。

【一】當書撰述の由來を明す。

【四流】四暴流、四種の煩惱なり。欲暴流、有暴流、見暴流、無明暴流を云ふ。

【三賢】十住、十行、十廻向の菩薩を三賢といふ。

【正使】煩惱の體のこと。

【習氣】煩惱の餘蘊をいふ。

【六通】天眼、天耳、他心、宿命、神通、漏盡の六通をいふ。

# 觀經玄義分

卷第一

沙門善導集記

先づ大衆を勸めて願を發し三寶に歸せしむ。

【一】道俗の時衆等、各無上心を發すべし、生死甚だ厭ひ難く、佛法復欣ひ難し。共に金剛の志を發して横に四流を超越すべし。彌陀界に入らんと願じて歸依合掌して禮したてまつれ。世尊我一心に、盡十方の法性眞如海と、報化等の諸佛と、一一の菩薩身と、眷屬等の無量なると、莊嚴と及び變化と、十地と三賢との海と、時劫の滿と未滿と、智行の圓と未圓と、正使の盡と未盡と、習氣の亡と、未亡と、功用と無功用と、證智と未證智と、妙覺と及び等覺の、正受金剛心と、相應一念の後の、果徳涅槃の者に歸命したてまつる。我等咸く三佛菩提の尊に歸命したてまつる。無礙の神通力をもて、冥加して願くば攝受したまへ。我等咸く三乘等の賢聖佛の大悲心を學して長時に退すること無き者に歸命したてまつる。請願くば遙に加備したまへ。念念に諸佛を見たてまつらん。我等愚癡の身、曠劫より來、流轉して、今釋迦佛の末法の遺跡たる、彌陀の本誓願、極樂の要門に逢へり。定散等しく廻向して、速に無生の身を證せん。我菩薩藏の頓教一乘海に依りて、偈を説いて三寶に歸して、佛心と相應せしむ。十方恆沙の佛、六通をもて我を照知したまへ。今二

【二章の教】釋迦は要門を開き、編陀は弘願を彰す。

尊の教に乗じて廣く淨土の門を開く。願くば此功德を以て、平等に一切に施し、同じく菩提心を發して、安樂の國に往生せん。  
此觀經一部の内、先づ七門を作りて料簡し、然して後に文に依りて義を釋せん。第一に先づ序題を標し第二に次に次に其名を釋し、第三に文に依りて義を釋し並に宗旨の不同と教の大小を辨す。第四に正しく説人の差別を顯し、第五に定散の二善に通別異有ることを料簡し、第六に經論の相違を和會するに廣く問答を施して疑情を釋去す。第七に韋提佛の正説を聞いて益を得る分齊を料簡す。

【二】序題を標す諸法の實體を眞如と名く。即ち絶對平等の理體を眞如と名く。

【四攝】菩薩が衆生を度脱せしむる四種の法、布施、愛語、利行、同事の四攝法なり。

【一】第一に先づ序題を標すとは、竊に以れば眞如廣大にして、五乘も其邊を測らず、法性深高なれば、十聖も其際を窮むること莫し、眞如の體量と量性とは、蠢蠢の心を出でず。法性の無邊と、邊體とは則ち元來不動なり。無塵の法界は凡聖齊しく圓に、兩垢の如如は則ち普く含識を該たり。恆沙の功德寂用湛然なり。但し、以るに垢障覆ふこと深ければ淨體顯照するに由無し。故に大悲をして西化を隱し驚いて火宅の門に入り、甘露を灑ぎて群萌を潤し、智炬を輝して則ち重昏を永夜に朗かならしむ。三檀等しく備へ四攝齊しく收めて、長劫の苦因を閉示し、永生の樂果に悟入せしむ。群迷の性隔、樂欲の不同を謂す。一實の機無しと雖も等しく五乘の用有り。慈雲を三界に布き、法雨を大悲に注がしむることを致す。等しく塵勞を治すに有り、普く未聞の益に沾はずといふこと莫し。菩提の種子、此に藉りて以て心を抽んで、正覺の芽、念念に茲に因つて增長す。心に依りて勝行

【門】 法門の意。

【韋提云云】 摩揭

陀國頻婆娑羅王の

后妃韋提希、王子

阿闍世の爲に七重

の牢獄に幽閉せら

れたる時深く厭世

の念を生じ靈鷲山

に向つて釋尊の説

法を請へり。佛た

めに靈山法華の會

座より王宮に降臨

し獄中に於て韋提

希のために觀無量

壽經を説き給へ

り。

【思惟】 定善觀の

前方便にして淨土

の莊嚴を心に思ひ

浮ぶること。

を起すに、門八萬四千に餘れり。漸頓則ち各所宜に稱うて緣に隨ふ者は則ち皆解脫を蒙る。然るに衆生障り重くして、悟を取る者明く難し。教益多門なるべしと雖も、凡惑遍攬するに由無し、遇韋提請を致して、我今安樂に往生せんと樂欲す。唯願くば如來我に思惟を教へたまへ、我に正受を教へたまへといふに因りて、然も娑婆の化主は其請に因るが故に即ち廣く淨土の要門を開き、安樂の能人は別意の弘願を顯彰したまふ。其要門とは即ち此觀經の定散二門是なり。定は即ち慮を息めて以て心を凝し、散は即ち惡を廢てて以て善を修す。斯二行を廻して往生を求願するなり。弘願と言ふは大經に説くが如し。一切の善惡の凡夫生を得ることは、皆阿彌陀佛の大願業力に乗じて増上緣と爲さずと云ふこと莫し。又佛の密意弘深なり、教門曉め難し、三賢十聖も測つて闕ふ所に非ず。況んや我信外の輕毛なる、敢て旨趣を知らんや。仰ぎ惟れば釋迦は此方より發遣し彌陀は即ち彼國より來迎したまふ。彼に喚び此に遣る、豈去らざるべけんや。唯勤心に法を奉つて、畢命を期と爲すべし、此穢身を捨つれば即ち彼法性の常樂を證すべし。此れ即ち略して序題を標し竟んぬ。

【三】 第二に次に名を釋すとは、經に言はく、「佛說無量壽觀經一卷」と。佛と言ふは乃ち是れ西國の正音なり。此土には覺と名く、自覺他覺行窮滿せる之を名けて佛と爲す。自覺といふは凡夫に簡異す、此れ聲聞は狭劣にして唯能く自利のみありて闕けて利他の大悲無きに由るが故に。覺他と言ふは二乘に簡異す。此れ菩薩は智有るに由るが故に。能く自利

無きに由るが故に。覺他と言ふは二乘に簡異す。此れ菩薩は智有るに由るが故に。能く自利

無きに由るが故に。覺他と言ふは二乘に簡異す。此れ菩薩は智有るに由るが故に。能く自利

無きに由るが故に。覺他と言ふは二乘に簡異す。此れ菩薩は智有るに由るが故に。能く自利

無きに由るが故に。覺他と言ふは二乘に簡異す。此れ菩薩は智有るに由るが故に。能く自利



【機】教法を聞いて修證し得る者をいふ、此處にては一切衆生の意。

し悲有るが故に能く利他す。常に能く悲智雙へ行じて有無に著せざるなり。覺行窮滿と言ふは菩薩に簡異す。此れ如來は智行已に窮まり、時劫已に滿ちて、三位を出過するに由る。故に名けて佛と爲す。説と言ふは口音に陳唱す、故に名けて説と爲す。又如來機に對して法を説きたまふこと多種不同なり。漸頓宜しきに隨ひ隱彰 異有り。或は六根通じて説きたまふ。相好も亦然なり。念に應じ縁に隨うて皆證益を蒙るなり。無量壽と言ふは乃ち是れ此地の漢音、南無阿彌陀佛と言ふは又是れ西國の正音なり。又南は是れ歸、無は是れ命、阿は是れ無、彌は是れ量、陀は是れ壽、佛は是れ覺なり。故に歸命無量壽覺と言ふ。此れ乃ち梵漢相對するに其義此の如し。今無量壽と言ふは是れ法、覺とは是れ人なり、人法並べ彰す故に阿彌陀佛と名く。又人法と言ふは是れ所觀の境なり、即ち其二有り。一には依報、二には正報なり、依報の中に就て即ち其三有り。一には地下の莊嚴、即ち一切の寶幢光明の互に相映發する等、是なり。二には地上の莊嚴、即ち一切の寶地池林寶樓宮閣等是なり。三には虚空の莊嚴、即ち一切の變化の寶宮華網寶雲化鳥風光の動發せる聲樂等はなり。前の如く三種の差別有りと雖も、皆是れ彌陀淨國は無漏眞實の勝相なり。此れ即ち總じて依報の莊嚴を結成するなり。又依報と言ふは、日觀より下華座觀に至る已來は總じて依報を明す。此依報の中に就て即ち通有り別有り。別と言ふは華座の一觀は是れ其別依なり、唯彌陀佛に屬するなり。餘の上の六觀は是れ其通依なり。即ち法界の凡聖に屬す、但し得生の者をして共に同じく受用せしむ、故に通と言ふなり。又此六の中に就て即ち眞有

【定散】定散二心のこと、定心は妄想を止め、念を凝らし得る心。散心は塵動にして静まらざる心。

り假有り。假と言ふは即ち口想水想氷想等是れ其假依なり。是れ此界の中の相似可見の境相なるに由るが故に。眞依と言ふは即ち瑠璃地より下寶樓觀に至る已來は是れ其眞依なり。是れ彼國の眞實無漏の可見の境相なるに由るが故に。二に正報の中に就て亦其二あり。一には主莊嚴即ち阿彌陀佛是なり。二には聖衆莊嚴即ち現に彼に在す衆、及び十方法界より同じく生ぜざる者是なり。又此正報の中に就て亦通有り別有り。別と言ふは即ち阿彌陀佛是なり。即ち此別の中に亦眞有り假有り。假正報と言ふは即ち第八の像觀是なり。觀音勢至等も亦是の如し。此れ衆生障り重く染惑處深きに由つて、佛乍ちに眞容を想はんに、顯現するに由無からんことを恐るるが故に、眞像を假立して以て心想を往せしめ、彼佛に同じて以て境を證せしむるが故に假正報と言ふなり。眞正報と言ふは即ち第九の身眞觀是なり。是れ前の假正に由りて漸く以て亂想を息めて心眼開くことを得、粗彼方の清淨二報種種の莊嚴を見て以て昏惑を除く、障りを除くに由るが故に、彼眞實の境相を見ることを得るなり。通正報と言ふは即ち觀音衆衆等已下是なり。向より來言ふ所の通別眞假は正しく依正二報を明すなり。觀と言ふは照なり。常に淨信心の手を以て以て智慧の輝を持ち、彼彌陀の正依等の事を照す。經と言ふは經なり。經能く緯を持ちて匹丈を成ずることを得るに其丈用有り。經能く法を持ち理事相應し定散機に隨つて義落せず。能く修趣の者をして必ず教行の緣因に藉りて願に乗じ往生して彼無爲の法樂を證せしむ、既に彼國に生じぬれば更に畏るる所無く、長時に行を起して果菩提を極む、法身常住なること比へば

【四】宗旨の不同  
教の大小を辯釋す

【二藏】菩薩藏、  
聲聞藏。

【二教】頓教、漸  
教。

【五】説人の差別  
を辨ず。

【六】定散兩門を  
料簡す。

虚空の若し。能く此益を招く故に曰うて經と爲す。一卷と言ふは此觀經一部兩會の正説なりと言ふと雖も、總じて斯一を成ず、故に一卷と名く。故に『佛説無量壽觀經』一卷と言ふ。此れ即ち其名義を釋し竟んぬ。

【四】三に宗旨の不同、教の大小を辯釋すとは、『維摩經』の如きは不思議解脱を以て宗と爲し、『大品經』の如きは空慧を以て宗と爲す。此例に非ず。今此觀經は即ち觀佛三昧を以て宗と爲し、亦念佛三昧を以て宗と爲す。一心に廻願して淨土に往生するを體と爲す。

教の大小と言ふは、問うて曰はく、『此經は二藏の中には何の藏にか攝し、二教の中には何の教にか收まる。』答へて曰はく、『今此觀經は菩薩藏に收む、頓教の攝なり。』

【五】四に説人の差別を辯ずとは、凡そ諸經の起説五種に過ぎず。一には佛の説、二には聖弟子の説、三には天仙の説、四には鬼神の説、五には變化の説なり。今此觀經は是れ佛の自説なりと。問うて曰はく、『佛何の處に在して説き、何人の爲にか説きたまへる。』答へて曰はく、『佛王宮に在して韋提等の爲に説きたまふ。』

【六】五に定散兩門を料簡するに即ち其六あり。一には能請の者を明す。即ち是れ韋提なり、二には所請の者を明す。即ち是れ世尊なり。三には能説の者を明す。即ち是れ如来なり。四には所説を明す。即ち是れ定散二善の十六觀門なり。五には能爲を明す。即ち是れ如来なり。六には所爲を明す。即ち韋提等是なり。問うて曰はく、『定散二善は誰の致請に因る。』答へて曰はく、『定善の一門は韋提致請す。散善の一門は是れ佛の自説なり。』問

【謗法】 大乘法を講誦す。

【無信】 大乘法を信ぜず。

【八難】 佛を見ず正法を聞くを得ざるを難といふ。在地獄、在畜生、在餓鬼、在長壽、在北鬱單越州、盲聾瘖瘂、世智辯聰、生佛前佛後の八難なり。

【一形】 一生涯のこと。

【三福】 世福、戒福、行福。  
【九品】 上上、上中、上下、中上、中中、下下、中下、下上の九品

うて曰はく、『未審し定散二善は出でて何の文にか在る。今、既に教備りて虚しからず、何の機か受くることを得る。』答へて曰はく、『解するに二義有り。一には謗法と無信と八難及び非人、此等は受けざるなり。斯れ乃ち朽林碩石の生潤の期有るべからざるがごとし。此等の衆生は必ず受化の義無し。斯を除きて已外は一心に信樂して往生を求願すれば、上一の形を盡し、下十念を收む。佛の願力に乗じて皆往かずといふこと無し。此れ即ち上の何機得受の義を答へ竟んぬ。二に出でて何の文に有りとは、即ち通有り別有り。通と言ふは即ち三義の不同有り。何とならば一に韋提白佛唯願爲我廣說無憂惱處よりは、即ち是れ韋提心を標して自ら爲に通じて所求を請す。二に唯願佛日教我觀於清淨業處よりは、即ち是れ韋提自ら爲に通じて去行を請す。三に世尊光臺現國よりは、即ち是れ前の通請の爲我廣說の言を酬ゆ。三義の不同有りと雖も前の通を答へ竟んぬ。別と言ふは即ち二義有り。一に韋提白佛我今樂生極樂世界彌陀佛所よりは、即ち是れ韋提自ら爲に別して所求を選ぶ。二に唯願教我思惟教我正受よりは、即ち是れ韋提自ら爲に別行を修せんことを請す。二義の不同有りと雖も、上の別を答へ竟んぬ。此より已下は次に定散兩門の義を答ふ。問うて曰はく、『何が定善と名け云何が散善と名くる。』答へて曰はく、『目觀より下十三觀に至る已來を名けて定善と爲し、三福九品を名けて散善と爲す。問うて曰はく、『定善の中に何の差別か有る。出でて何の文にか在る。』答へて曰はく、『何の文にか出でたるとは、經に教我思惟教我正受と言ふ。即ち是れ其文なり。差別と言ふは即ち二義有り。一には謂く思惟二



には謂く正受なり。思惟と言ふは即ち是れ觀の前方便なり。彼國の依正二報總別の相を思想するなり。即ち地觀の文の中に説きて言はん。此の如く想ふ者をば、名けて粗極樂國土を見ると爲す。即ち上の教我思惟の一句に合す。正受と言ふは信心都て息し緣慮並べて亡じて三昧と相應するを名けて正受と爲す。即ち地觀の文の中に説きて言はく、「若し三昧を得れば彼國の地を見ること了了分明なり」と。即ち上の教我正受の一句に合す。『定散二義の不同ありと雖も總じて上の問を答へ竟んぬ。又向より來の解は諸師と不同なり。諸師は思惟の一句を將て、用て三福九品に合して以て散善と爲す。正受の一句を用て通じて十六觀に合して以て定善と爲す。斯の如きの解は將に謂ふに然らず。何とならば『華嚴經』に説くが如きは思惟正受は但是れ三昧の異名にして此地觀の文と同じ、斯文を以て證するに、豈散善に通ずることを得んや。又向より來、韋提上には請じて但教我觀於清淨業處と言ひ、次下には又請じて教我思惟正受と言へり。二請有り且雖も唯是れ定善なり。又散善の文は都て請する處無し。但是れ佛自ら聞したまへり。次下の散善緣の中に説いて亦令未來世一切凡夫と云へる已下は即ち是れ其文なり。

【七】六に經論の相違を和會するに、廣く問答を施して疑情を釋去すとは、此門の中に就て即ち其六つ有り。一には先づ諸の法師に就て九品の義を解す。二には即ち道理を以て來つて之を破す。三には重ねて九品を擧げて返對して之を破す。四には文を出し來つて定めて凡夫の爲にして聖人の爲にせざることを證す。五には別時の意を會通す、六には二乘

【七】經論の相違を和會す。

【八】諸の法師に就て九品の義を解す。

種不生の義を會通す。

【上輩】善根厚き修道者  
【中輩】善根少き修道者  
【須陀洹】預流果初めて聖者の流類に預り入りし位  
【下輩】智慧淺く功德少き者  
【九】道理をもて來し破す  
【法性生身】八地以上の菩薩の身をいふ  
【變易生身】身命實際なき不思議身なり  
【分段】身命共に麤細長短等の分段ありて分段段に受くるが故に

【八】初めに諸師の解と言ふは、先づ上輩の三人を擧ぐ。上が上と言ふは是れ四地より七地に至る已來の菩薩なり。何が故に知ることを得る。彼に到りて即ち無生忍を得るに由るが故に。上が中とは是れ初地より四地に至る已來の菩薩なり。何が故に知ることを得る。彼に到りて一小劫を経て無生忍を得るに由るが故に。上が下とは是れ種性以上初地に至る已來の菩薩なり。何が故に知ることを得る。彼に到りて三小劫を経て始めて初地に入るに由るが故に、此三品の人は皆是れ大乘の聖人の生ずる位なり。次に中輩の三人を擧げば諸師の云はく、中が上とは是れ三果の人なり。何を以てか知ることを得る。彼に到りて即ち羅漢を得るに由るが故に、中が中とは是れ内凡なり。何を以てか知ることを得る。彼に到りて須陀洹を得るに由るが故に、中が下とは是れ世善の凡夫なり。苦を厭ひて生ずることを求む。何を以てか知ることを得る。彼に到りて一小劫を経て羅漢果を得るに由るが故なり。此三品は唯是れ小人等なり。下輩の三人は是れ大乘始學の凡夫なり。過の輕重に隨つて分ちて三品と爲す。共に同じく一位にして往生を求願すとは未だ必ずしも然らず、知るべし。』

【九】第二に即ち道理を以て來し破すとは、上に初地より七地に至る已來の菩薩と言ふは、『華嚴經』に説くが如き初地已上七地已來は即ち是れ法性生身變易生身なり。斯等は會て分段の苦無し。其功用を論ずれば已に二大阿僧祇劫を経て雙べて福智を修し人法兩ながら空す。並に是れ不可思議なり。神通自在にして轉變無方なり。身報土に居して常に報佛

【八相成道】佛菩薩が衆生を濟度せんが爲に世間に出現して八相を示し成道を現じ給ふを云ふ。降兜率、胎、降生、出家、降魔、成道、說法、涅槃。

の説法を聞き、十方を悲化して須臾に遍滿すと。更に何の事を憂へてか乃ち韋提に藉つて其が爲に佛を請するに安樂國に生ずることを求めんや。斯文を以て證するに諸師の所説豈錯りに非ずや。上の二を答へ竟んぬ。上が下とは上に種性より初地に至る已來と言ふは、未だ必ずしも然らず、經に説くが如き此等の菩薩を名けて不退と爲す。身生死に居して生死の爲に染せられず、鵝鴨の水に在れども水濕すこと能はざるが如し。『大品經』に説くが如き此位の中の菩薩は二種の眞の善知識の守護を得るに由るが故に不退なり。何と云へば、一には是れ十方の諸佛、二には是れ十方の諸大菩薩、常に三業を外に加するを以て諸の善法に於て退失有ること無し、故に不退の位と名くと。此等の菩薩亦能く八相成道して衆生を教化す、其功行を論せば已に一大阿僧祇劫を経て福智を雙べ修す等なり、既に斯勝徳有り。更に何事を憂へてか乃ち韋提の請に藉りて生ずることを求めんや。斯文を以て證す。故に知んぬ、諸師の所判還りて錯りを成す。此れ上輩を責め竟んぬ。次に中輩の三人を責めば諸師の云はく、中が上は是れ三果とは然るに此等の人は三塗永く絶ち四趣に生ぜず。現在に罪業を造ると雖も必定して來報を招かず。佛の説きて言ふが如し。此四果の人は我と同じく解脱の床に坐すと。既に斯功力有り。更に復何を憂へてか乃ち韋提の請に藉りて生路を求めんや。然るに諸佛の大悲は苦ある者に於てす。心偏に常没の衆生を愍念したまふ、是を以て勸めて淨土に歸せん。亦水に溺たる人の如きは急に須らく偏に救ふべし。岸上の者をば何ぞ濟ふことを用て爲ん。斯文もて證す。故に知んぬ、諸師の判する所の義前の錯り

【二〇】九品を擧げて返對して破す。

に同じ、以下知るべし。

【二〇】第三に重ねて九品を擧げて返對して破すとは、諸師の云はく、「上品上人は是れ四地より七地に至る已來の菩薩とは何が故ぞ。觀經に云はく、「三種の衆生當に往生を得べし。何をか三と爲す。一には但能く戒を持ち慈を修す。二には戒を持ち慈を修する能はざれども但能く大乘を讀誦す。三には戒を持ち經を讀む能はざれども唯能く佛法僧等を念す。此三人各己が業を以て精を専らにし意を勵まして、一日一夜乃至七日七夜相續して斷ぜず。各所作の業を廻して往生を求願すれば、命終らんと欲するとき、阿彌陀佛及び化佛菩薩大衆と光を放ち手を授けて、彈指の頃の如くに即ち彼國に生ず」と。此文を以て證するに、正しく是れ佛世を去つて後の大乘極喜の上品の凡夫なり。日數少しと雖も作業時猛し、何ぞ判じて上聖に同じきを得ん。然るに四地七地已來の菩薩は其功用を論ずるに不可思議なり。豈一日七日の善に藉りて華臺に授手迎接せられて往生せんや。「此れ即ち上が上を返對し竟んぬ。次に上が中を對せば、諸師の云はく、「是れ初地四地已來の菩薩とは何が故ぞ。觀經に云はく、「必ずしも大乘を受持せず」と。云何が不必と名くる。或は讀み讀まず、故に不必と名く。但善解と云うて未だ其行を論ぜず。又言はく、「深く因果を信じ大乘を謗せず。此善根を以て往生を廻願すれば、命終らんと欲する時阿彌陀佛及び化佛菩薩大衆と一時に手を授けて即ち彼國に生ず」と。此文を以て證するに、亦是れ佛世を去りて後の大乘の凡夫なり、行業稍弱くして終る時の迎候に異有らしむることを致す。然るに初地



【無上道心】無上菩提を求むる心。

四地已來の菩薩は、其功用を論ずるに「華嚴經」に説くが如き乃ち是れ不可思議なり。豈華提の請を致すに藉りて方に往生を得んや。上が中を返對し竟んぬ。次に上が下に對せば、諸師の云はく「是れ種性以上より初地に至る已來の菩薩とは何が故ぞ。觀經に云はく、「亦因果を信ず」と。云何が亦信なる。或は信じ信ぜず故に名けて亦と爲す。又言はく、「大乘を謗せず但無上道心を發す」と。唯此一句を以て正業と爲す、更に餘善無し。斯一行を廻して往生を求願すれば命終らんと欲する時、阿彌陀佛及び化佛菩薩大衆と一時に手を授けて、即ち往生を得と。斯文を以て證するに、唯是れ佛世を去りて後の一切の大乗心を發せる衆生なり、行業強らずして去る時の迎候に異有らしむるを致す。若し此位の中の菩薩の力勞を論ずれば、十方淨土に意に隨うて往生す。豈華提其が爲に佛を請するに藉りて、勸めて西方極樂國に生ぜんや。上が下を返對し竟んぬ。即ち此三品は去る時、異有り、云何が異なる。上が上は去る時佛と無數の化佛と一時に手を授く。上が中は去る時佛と千の化佛と一時に手を授く。上が下は去る時佛と五百の化佛と一時に手を授く。直に是れ業に強弱有れば斯差別有らしむることを致すのみ。次に中輩の三人を對せば、諸師の云はく、「中が上は是れ小乘の三果とは何が故ぞ。觀經に云はく「若し衆生有りて五戒八戒を受持し。諸戒を修行じ五逆を造らず、衆の過患無からん。命終らんと欲する時、阿彌陀佛比丘聖衆と光を放ち法を説いて來つて其前に現じたまふ。此人見じりて即ち往生を得」と。此文を以て證するに、亦是れ佛世を去りて後小乘戒を持てる凡夫なり。何ぞ小聖ならん。中が中とい

【見道】 四聖諦の理を現觀し、見惑八十八使を斷ずる位をいふ。

【善知識】 正法を説きて人をして佛道に入らしめ解脱を得しむる人をいふ。

ふは、諸師の云はく、『見道已前の内凡とは何が故ぞ。觀經に云はく、『一日一夜の戒を受持して往生を廻願すれば、命終らんと欲する時佛を見たてまつりて即ち往生を得』と。此文を以て證するに豈是れ内凡の人と言ふを得んや。但是れ佛世を去りて後の無善の凡夫なり。命日夜を延べて、小戒の共小戒を授くるに逢遇うて、廻して往生を願すれば佛の願力を以て即ち生ずることを得。若し小聖を論ぜば、去ること亦妨無し。但し此觀經は佛凡の爲に説きたまへり。聖には下らず。中が下とは、諸師の云はく、『小乘の内凡已前の世俗の凡夫、唯世福を修して出離を求むとは何が故ぞ。觀經に云はく、『若し衆生有りて父母に孝養し、世の仁慈を行ぜん。命終らんと欲する時、善知識の爲に彼佛の國土の樂事四十八願等を説くに、此人聞き已りて即ち彼國に生ず』と。此文を以て證するに、但是れ佛法に遇はざるの人なり。孝養を行すと雖も、亦未だ心に出離を希求すること有らず。直に是れ臨終に善の勸めて往生せしむるに遇はん。此人勸に因りて廻心して即ち往生を得。又此人世に在りて自然に孝を行す。亦出離の爲の故に孝道を行せず。』次に下輩の三人を對せば諸師の云はく、『此等の人は乃ち是れ大乘始學の凡夫なり。過の輕重に隨つて分ちて三品と爲す。未だ道位有らず、階降を辨へ難しとは、將に謂ふに然らず。何とならば此三品の人は佛法と世俗との二種の善根有ること無し。唯惡のみを作るを知れり。何を以てか知るを得たる。下が上の文に説くが如き、但五逆と謗法とを作らず。自餘の諸惡は悉く皆具に造りて慳悭乃至一念も有ること無し。命終らんと欲する時、善知識の爲に大乘を説き、教へて佛を

【三塗】地獄、餓鬼、畜生。

稱せしむるに遇うて一聲す、爾時、阿彌陀佛即ち化佛菩薩を遣はして此人を來迎して即ち往生を得と。但し此の如きの惡人、目に觸るるに皆是なり。若し善緣に遇へば即ち往生を得、若し善に遇はずば定めて三塗に入りて未だ出づべからず。下が中とは此人先に佛戒を受く、受け已りて持たずして即便毀破す。又常住僧物現前僧物を偷み、不淨に説法して乃至一念慚愧の心有ること無し。命終らんと欲する時、地獄の猛火一時に俱に至りて、現じて其前に在り。火を見る時に當りて、即ち善知識の爲に彼佛國土の功德を説きて勸めて往生せしむるに遇ふ。此人聞き已りて即便佛を見る、化に隨うて往生すと。初め善に遇はざれば猛火來迎す。後に善に逢ふが故に化佛來迎す。斯れ乃ち皆是れ彌陀願力の故なり。下が下とは此等の衆生不善業たる五逆十惡を作れり。諸の不善を具す。此人惡業を以ての故に定めて地獄に墮して多劫窮り無かるべし。命終らんと欲する、時善知識教へて阿彌陀佛を稱し、勸めて往生せしむるに遇ふ。此人教に依りて佛を稱す、念に乗じて即ち生ず。此人若し善に遇はずんば必定して下沈せん。終に善に遇ふに由りて七寶來迎す。又此觀經の定善及び三輩上下の文の意を見るに、總て是れ佛世を去りて後の五濁の凡夫なり。但し緣に遇うて異有るを以て、九品をして差別せしむることを致す。何とならば上品の三人は是れ大に遇へる凡夫、中品の三人は是れ小に遇へる凡夫、下品の三人は是れ惡に遇へる凡夫なり。惡業を以ての故に、終に臨みて善に藉り佛の願力に乗じて乃ち往生を得。彼に到りて華聞きて方に始めて發心す。何ぞ是れ始學大乘の人と言ふを得んや。若し此見を作

【二】文を出して顯證す。

【傳説】此處には觀經を云ふなり。

【淨業】念佛は淨土往生の正業なるが故に淨業と名く

さば、自ら失し他を悞る害を爲すこと茲れ甚だし。今一一に文を出し顯證を以てするは、今の時の善惡の凡夫をして同じて九品に活はしめんと欲す。信を生じて疑ひ無ければ、佛の願力に乗じて悉く生ずるを得。」

【二】第四に文を出して顯證すとは、問うて曰はく、「上來返對の義云何が知ることを得る。世尊定めて凡夫の爲にして聖人の爲にせずとは未審し。直に人情を以て義に準ずるか、爲當亦聖教有りて來證するや。」答へて曰はく、「衆生は垢重にして智慧淺近なり。聖意の弘深なる。豈寧ろ自ら輒くせんや。今者一一に悉く佛説を取りて以て明證と爲ん。此證の中に就て即ち其十句有り。何とならば第一に觀經に云ふが如き「佛耆提に告げたまはく、我今汝が爲に廣く衆の譬を説かん、亦未來世の一切の凡夫、淨業を修せんと欲せん者をして西方極樂國土に生ずることを得しめん」是れ其一の證なり。二に「如來今未來世の一切衆生の煩惱賊の爲に害せらるる者の爲に清淨の業を説く」とは、是れ其二の證なり。三に「如來今耆提希及び未來世の一切衆生に西方極樂世界を觀するを教へん」とは、是れ其三の證なり。四に「耆提、佛に白さく、我今佛力に因るが故に彼國土を見る、若し佛の滅後の諸の衆生等、濁惡不善にして五苦に逼められたらん。云何が當に彼佛の國土を見るべき」とは是れ其四の證なり。五に日觀の初に云ふが如き、佛耆提に告げたまはく「汝及び衆生、念を専らにせよ」といふより已下乃至「一切衆生生育に非ざるよりは、日有らん 徒日を見」といふ已來は、是れ其五の證なり。六に地觀の中に説いて、  
が如き、「佛阿難に告げたまはく、



汝佛語を持ちて、未來世の一切衆生の苦を脱れんと欲せん者の爲に、是觀地の法を説け」とは、是れ其六の證なり。七に華座觀の中に説いて言ふが如き、「華座佛に白さく、我佛力に因りて阿彌陀佛及び二菩薩を見たてまつるを得。未來の衆生は云何が見たてまつるを得ん」とは、是れ其七の證なり。八に次下に請を答ふる中に説いて言はく、「佛華提に告げたまはく、汝及び衆生彼の佛を觀せんと欲はん者、當に想念を起すべし」といふは是れ其八の證なり。九に像觀の中に説いて言へるが如き、「佛華提に告げたまはく、諸佛如來は一切衆生の心想の中に入りたまふ。是故に汝等心に佛を想ふ時」とは、是れ其九の證なり。十に九品の中に一に説いていふが如し。諸の衆生の爲にすとは、是れ其十の證なり。「上來十句の不同有り」と雖も、如來此十六觀の法を説きたまふは但常没の衆生の爲にして、大小の聖に干らざるを證明す。斯文を以て證するに豈是れ謬りならんや。

【三】 別時意を會通す。  
 【別時意】 言説と眞意と、その顯はす時分に異りあるを云ふ。

【二】 第五に別時意を會通すとは、即ち其二あり。一に論に云はく、「如し人多寶佛を念じて即ち無上菩提に於て退墮せざるを得」とは、凡そ菩提と言ふは、乃ち是れ佛果の名亦是れ正報なり。道理成佛の法は、要す須らく萬行間かに備へて方に乃ち刻成すべし。豈念佛の一行を將て即ち成ずることを望まん者は、是處有ること無けん。未證と言ふと雖も萬行の中に是れ其一行なり。何を以てか知るを得ん。「華嚴經」に説くが如し。功德雲比丘善財に語りて言はく、「我佛法三昧海の中に於て唯一行を知れり。謂ゆる念佛三昧なり」と。此文を以て證す。豈一行なるに有らずや。是れ一行と雖も生死の中に於て乃至成佛まで永く

【廣長の舌相】三十二相の一佛の廣く長き舌のことに虚妄なきことをあらはす也。

退没せず、故に不墮と名く。問うて曰はく、「若し爾らば『法華經』に云はく、一たび南無佛と稱すれば皆已に佛道を成ず、亦應に成佛し竟るべし、此二文何の差別か有る。」答へて曰はく、「論の中に佛を稱するは唯自ら佛果を成ぜんと欲す、經の中に佛を稱するは九十五種の外道に簡異せんが爲なり、然れども外道の中には都て佛を稱するの人無し、但使佛を稱すること一口もすれば、即ち佛道の中に在りて攝す。故に已竟と言ふ。」二に論の中に説いて云はく、「如し人唯發願に由りて安樂土に生ずとは、久しきより來、論を通ずるの家に、論の意を會せずして、錯つて下品上生の十聲の稱佛を引いて、此と相似せしめて、未だ即ち生ずることを得ず。一の金錢を千と成すことを得るが如きは、多日に乃ち得、一日に即ち千と成すことを得るに非ず。十聲の稱佛も亦復是の如し。但し遠生の與に因と作る、是故に未だ即ち生ずることを得ず。佛直に當來の凡夫の爲に惡を捨てて佛を稱せしめんと欲して、誑言して生ずと善ふ。實には未だ生ずることを得ず。名けて別時意と作すと善ふ」は、何が故ぞ、阿彌陀經に云はく、「佛舍利弗に告げたまはく、若し善男子善女人有りて、阿彌陀佛を説くを聞かば、即ち名號を執持すべし。一日乃至七日一心に生ぜんことを願すれば命終らんと欲する時、阿彌陀佛語の聖衆と迎接して往生せしむ。次下に十方に各恆河沙等の如きの諸佛、各廣長の舌相を出して、遍く三千大千世界に覆うて、誠實の言を説きたまふ。汝等衆生皆應に是一切諸佛の護念したまふ所の經を信ずべし」護念と言ふは即ち是れ上の文の一日乃至七日佛を稱するの名なり。今既に斯聖教有りて以て明證と爲

す。未審し今の時の一切の行者、知らず何の意ぞ。凡小の論には乃ち信受を加へて諸佛の  
 誠言をば返りて將に妄語とす。苦なる哉。奈ぞ劇しく能く此の如き不忍の言を出す。然り  
 と雖も仰ぎ願くば一切の往生を欲せん、知識等善く自ら思量せよ。寧ろ今世を傷りて錯り  
 て佛語を信ぜよ、菩薩の論を執して以て指南とすべからず、若し此執に依らば、即ち是れ  
 自ら失し他を悞たん。問うて曰はく、「云何が行を起して而も往生を得ずといふ。」答へて曰  
 はく、「若し往生せんと欲はば要す行願 具足することを須ひて方に生ずることを得べし。  
 今此論の中には但發願と行有ることを論せず。」問うて曰はく、「何が故に論せざる。」  
 答へて曰はく、「乃至一念も曾て未だ心を措かず、是故に論せず。」問うて曰はく、「願行の  
 義に何の差別か有る。」答へて曰はく、「經の中に説くが如し。但其行のみ有るは行 即ち孤  
 にして亦至る所無し。要す須らく願行 相扶けて所爲皆尅すべし。是故に今此論の中に直  
 に發願と行有ることを論せず。是故に未だ即ち生ずることを得ず。遠生の與に因と  
 なるときは其義實なり。」問うて曰はく、「願の意云何が乃ち生ぜずと言ふ。」答へて曰はく、  
 「他の説いて西方の快樂不可思議なりと言ふを聞きて、即ち願を作して言はく、我も亦生を  
 願ぜん」と、此語を薄ひりて更に相續せず、故に願と名く。今此觀經の中の十聲の稱佛は  
 即ち十願 十行 具足すること有り。云何が具足する、南無と言ふは即ち是れ歸命なり。亦  
 是れ發願廻向の義なり。阿彌陀佛と言ふは即ち是れ其行なり。斯義を以ての故に必ず往生  
 を得。又來論の中に多寶佛を稱して佛果を求むる爲にす。即ち是れ正報、下に唯願を發し

【三】二乗種不生の義を會通す。

【法藏比丘】彌陀の因位の名。

て淨土に生ずるを求むるは即ち是れ依報なり。一は正、一は依、豈相似たることを得んや。然も正報は期し難し、一行は精と雖も未だ尅せず、依報は求め易し、所以に一願の心のみ未だ入らず。然りと雖も譬へば邊方に化に投ふことは即ち易く、主となることは即ち難きが如し、今の時の往生を願する者は、並に是れ一切投化の衆生なり、豈易きに非ずや。但能く上一形を盡し下十念に至るまで、佛の願力を以て皆往かずといふこと莫し、故に易と名く。斯れ乃ち言を以て義を定むべからず、信を取る者は疑ひを懐く、要す聖教を引いて來し明らむ、之を聞かん者をして方に能く惑を遣らしめんと欲す。

【三】第六に二乗種不生の義を會通すとは、問うて曰はく、彌陀淨國は爲當是れ報なりや是れ作なりや。答へて曰はく、「是れ報にして化にあらず。云何が知ることを得る、『大乘同性經に説くが如し、「西方安樂の阿彌陀佛は是れ報佛報土なり」と、『又無量壽經』に云はく「法藏比丘世饒王佛の所に在して菩薩の道を行じたまひし時、四十八願を發して一に願じて言はく、若し我佛を得たらんに、十方の衆生、我名號を稱して我國に生ぜん」と願せば、下十念に至るまで、若し生せずんば正覺を取らず、今既に成佛す、即ち是れ酬因の身なり」又觀經の中に「上輩の三人、命終の時に臨んで皆阿彌陀佛及び化佛と與に此人を來迎す」と言へり。然も報身化を兼ねて共に來り手を授く、故に名けて與と爲す、此文を以て證す。故に知んぬ是れ報なりと、然るに報應の二身は眼目の異名なり、前の翻の報は應と爲り、後の禮の應報と作る。凡そ報と言ふは因行虚しからず、定めて來果を招く、果因に應



【三大僧祇】 三無  
數劫のこと。

【須菩提】 佛十大弟子の一と稱せらる。賢位のうれ念處位に於て修すの觀法に於受、心、法の四念住。

【四正勤】 四種の隨惑の方法

【四如意足】 欲、念、精進、思惟の四如意足にして所願を満足せず。

【三解脱門】 解脱を得る三種の方法、無相、無作の三解脱門なり。

するを以て、故に名けて報と爲す。又三大僧祇に所修の萬行必定して菩提を得べし、今既に道成す、即ち是れ應身なり、斯れ乃ち過現の諸佛三身を辯立す、斯を除きて已外は更に別の體無し。縱使無窮の八相名號塵沙なれども、體を尅して論ずれば、衆て化に歸して攝す。今彼彌陀現に是れ報なり。問うて曰はく、「既に報と言ふは報身は常住にして永く生滅無し。何が故に」觀音授記經に「阿彌陀佛亦入涅槃の時有り」と説く。此一義若爲が通釋せん。答へて曰はく、「入不入の義は唯是れ諸佛の境界なり。尙三乘淺智の闕ふ所に非ず、豈況んや小月輒く能く知らんや。」然りと雖も必ず知らんと欲はば敢て佛經を引いて以て明證と爲さん。何と云はば、大品經の涅槃非化品の中に説きて云ふが如し、佛須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何、若し化人有りて化人を作さば、是化頗る實事にして、空ならざるもの有りや不や」須菩提の言さく、「不」世尊佛、須菩提に告げたまはく、「色即ち是れ化なり。受想行識も即ち是れ化なり。乃至一切種智も即ち是れ化なり」須菩提、佛に白して言さく、「世尊若し世間の法是れ化にして、出世間の法も亦是れ化ならば、謂ゆる四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三解脱門、佛の十力四無所畏、四無礙智、十八不共法、并に諸法の果、及び賢聖人、謂ゆる須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩、諸佛世尊是法も亦此れ化なりや不や」佛、須菩提に告げたまはく、「一切の法皆是れ化なり。是法の中に於て聲聞法の變化有り。辟支佛法の變化有り。菩薩法の變化有り。諸佛法の變化有り。煩惱法の變化有り。業因緣法の變化有り。是因緣を以ての故に、須菩提一切

【新發意の菩薩】  
新に發心したる菩薩。

の法は皆是れ化なり」須菩提、佛に白して言さく、「世尊是諸の煩惱斷の謂ゆる須陀洹果、  
 斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道の諸の煩惱習を斷ぜるも、皆是れ變化なりや  
 不や」佛、須菩提に告げたまはく、「若し法の生滅の相有るは皆是れ變化なり」須菩提言さ  
 く、「世尊何等の法か變化に非ざる」佛の言はく、「若し法の無生無滅なる是れ變化に非ず」  
 須菩提言さく、「何等か是れ不生不滅にして變化に非ざる」佛の言はく、「無誑相涅槃は法の  
 みに變化に非ず。世尊佛の自ら説きたまふが如き、諸法は平等にして聲聞の作に非ず。辟支佛  
 の作に非ず。諸の菩薩摩訶薩の作に非ず。諸佛の作に非ず。有佛のとき、無佛のとき諸法  
 の性は常に空なり。性空は即ち是れ涅槃なり」と。「云何が涅槃の一法のみ化の如くに非ざ  
 る」佛、須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し。諸法は平等にして聲聞の所作に非ず、  
 乃至性空即ち是れ涅槃なり。若し新發意の菩薩、是一切の法は皆畢、竟性空なり。乃至涅槃  
 も亦皆化の如しと聞かば、心則ち驚怖せん。是れ新發意の菩薩の爲の故に生滅の者は化の如  
 し。不生不滅の者は化の如くには非ずと分別するをや」今既に斯聖教を以て驗かに知んぬ。  
 彌陀は定めて是れ報なることを。縱使後涅槃に入るとも、其義妨げ無し。諸の有智の者應  
 に知るべし。問うて曰はく、「彼佛及び土既に報なりと言はば、報法は高妙なり。小聖階ひ  
 難し、垢障の凡夫云何が入るを得ん。答へて曰はく、「若し衆生の垢障を論ぜば、實に欣越  
 し難し。正しく佛願に託して、以て強緣と作すに由つて、五乘をして齊しく入らしむるこ  
 とを致す。問うて曰はく、「若し凡夫小聖生ずることを得と言はば、何が故に天親の『淨

【根缺】 雖百億等不具のものをいふ

【化佛菩薩】 衆生濟度の爲に種種の形を變へて現れ給ふ佛、菩薩。

士論に女人及び根缺二乗種は生ぜずと云ふ。今彼國の中、現に二乗有り。斯の如きの論教若爲が消釋せん。答へて曰はく、「子但其文を誦して理を闡はず、況んや加ふるに封拙を以てし、迷ひを懷きて啓悟するに由無し。今佛教を引いて、以て明證と爲して、汝が疑情を却けん、何とならば即ち觀經の下輩の三人是なり。何を以てか知ることを得る。下品上生に云ふが如き、或は衆生有りて、多く惡法を造り、慚愧有ること無し、此の如きの愚人命終らんと欲する時、善知識の爲に大乘を説き、教へて阿彌陀佛を稱せしむるに遇ふ。佛を稱する時に當りて、化佛菩薩其前に現在し、金光華蓋迎へて彼土に遷る、華開きて已後觀音爲に大乘を説きたまふに、此人聞き已りて即ち無上道心を發す。」問うて曰はく、「種と心と何の差別か有る。」答へて曰はく、「但し以れば便なるを取りて言ふ義は、差別無し。華開く時に當りて此人身器清淨にして、正しく法を聞くに堪へたり。亦大小を簡ばず、但聞くことを得しむ。即便信を生ず。是を以て觀音爲に小を説かず、先づ爲に大を説きたまふ。大を聞きて、歡喜して即ち無上道心を發す。即ち大乘種生すと名け、亦大乘心生すと名く。亦華開く時に當りて觀音先づ爲に小乘を説きたまはば、小を聞きて信を生ぜん。即ち二乗種生すと名け、亦二乗心生すと名けん。此品既に雨り、下の二も亦然なり。此三品の人俱に彼に在りて發心す、正しく大を聞くに由りて即ち大乘種生すと名け、小を聞かざるに由るが故に。所以に二乗種生ぜず、凡そ種と言ふは即ち是れ其心なり。上來二乘種不生の義を解し竟んぬ。女人及び根缺の義は彼に無きが故に知るべし。又十方の衆

【四】 韋提、佛の正説を聞いて益を得る分齊を料簡す

【異方便】 眞實の道に入らしむるために奇異なる設備を施したる權假の教。

生小乗の戒行を修して往生を願する者、一も妨礙無く悉く往生を得。但し彼に致りて先づ小果を證し、證し已りて即ち轉じて大に向ふ。一たび大に向つて轉じて以去更に退して二乗の心を生ぜず、故に二乗種不生と名く。前の解は不定の始に就き、後の解は小果の終に就く。應に知るべし。

【四】 第七に韋提、佛の正説を聞いて益を得る分齊を料簡すとは、問うて曰はく、「韋提既に忍を得ると言ふ。未審し何の時に忍を得たる、出でて何の文にか在る。」答へて曰はく、「韋提の得忍は出でて第七觀の初に在り。經に云はく、「佛、韋提に告げたまはく、佛當に汝が爲に苦惱を除く法を分別し解説すべし。是語を説きたまふ時、無量壽佛空中に住立したまふ。觀音勢至左右に侍立せり。時に韋提時に應じて見たてまつることを得。足を接し禮を作し歡喜讚歎して即ち無生法忍を得」と。何を以てか知ることを得る。下の利益分の中に説きて言ふが如き、「佛身及び二菩薩を見たてまつることを得て、心に歡喜を生じて未曾有なりと歎じて、廓然として大悟し無生忍を得」と。是れ光臺の中に國を見たてまつる時得たるには非ず。問うて曰はく、「上の文の中に説いて言さく、「彼國土の極妙の樂事を見て、心歡喜するが故に時に應じて即ち無生法忍を得」と。此一義云何が通釋せん。」答へて曰はく、「此の如きの義は但是れ世尊、前の別請に酬ふ、勸むる利益を擧ぐる方便の由序なり。」何を以てか知ることを得る。次下の文の中に説きて、諸佛如來に異の方便有して、汝をして見ることを得しめたまふと言ふ。次下の日想水想乃至十三觀已來を盡く異の方便と



名く。衆生をして此觀門に於て一一に成ずることを得て、彼妙事を見て心歡喜するが故に、即ち無生を得しめんと欲す。斯れ乃ち直に是れ如來末代を慈哀して擧勸して修することを勵まし、積學の者をして遺無く聖力冥加して現益有らしめんと欲するが故なり。證して曰はく、「掌に機糸を握る十有三結、條條理に順じて、以て玄門に應じ訖りぬ。此義周りて三たび前の證を呈すものなり。」上來七段の不同有りと雖も、總じて是れ文前の玄義なり。經論の相違妨難を料簡して、一一に教を引いて證明す。信ぜんものをして疑ひ無く、求めんものをして滞り無からしめんと欲す。應に知るべし。

【序分義】四帖の疏の第二。觀無量壽經の序分を解釋したるなり三序六縁に分ちて釋す。

【一】觀經一卷の本文科段に就て、序正流通の義を明す。

【阿難】(Ananda) 歡喜と譯す、釋尊十大弟子の一、佛の從弟、二十餘年間佛に隨ひ多聞第一と稱せらる。  
【耆闍崛山】(Griffiths) ドフラクータ (Dhruvān) 鷲峯と譯す、中印度摩伽陀國王舍城の東北に聳ゆる山にして釋尊說法の地として有名なり。  
【二】證信序を明す。

# 觀經序分義

卷第一

沙門善導集記

【一】此より以下に就て料簡するに略して五門を作りて義を明さん。一に如是我聞より下五苦所逼云何見極樂世界に至る已來は其序分を明し、二に日觀の初の句の佛告韋提汝及衆生より下、下品下生に至る已來は正宗分を明し、三に說是語時より下諸天發心に至る已來は正しく得益分を明し、四に阿難白佛より下韋提等歡喜に至る已來は、流通分を明す。此四の義は佛王宮に在らず一會の正説なり。五に阿難耆闍の大衆の爲に傳説するよりは復是れ一會なり。亦三分有り。一に爾時世尊足步虚空還耆闍崛山より已來は其序分を明し、二に阿難廣爲大衆説如上事より已來は正宗分を明し、三に一切大衆歡喜奉行より已來は流通分を明す。然るに化は必ず由有り。故に先づ序を明す。由序既に興しぬれば正しく所説を陳ぶ。次に正宗を明す爲に説くこと既に周れば、所説を以て末代に傳持せしめんと欲して、勝を歡じて學を勸め、後に流通を明す。上來五義の不同有りと雖も、略して序正流通の義を料簡し竟んぬ。

【二】又前の序の中に就て復分つて二と爲す。一に如意我聞よりの一句を名けて證信序

と爲し、二に一時より下云何見極樂世界に至る已來は正しく發起序を明す。初に證信と言ふは即ち二義あり。一には謂く、如是の二字は即ち總じて教主を標す、能説の人なり。二には謂く、我聞の兩字は即ち別して阿難を指す、能聽の人なり。故に如是我聞と言ふ。此れ即ち雙べて二意を釋す。又如是と言ふは即ち法を指す、定散兩門なり。是は即定の辭なり。機行すれば必ず益あり。此れ如來の所説言錯謬なきことを明す。故に如是と名く。又如と言ふは衆生の意に如ふなり。心の所樂に隨つて佛即ち之を度したまふ。機教相應するを復稱して是と爲す。故に如是といふ、又如是と言ふは、如來の所説は漸を説くこと漸の如く、頓を説くこと頓の如く、相を説くこと相の如く、空を説くこと空の如く、人の法を説くこと人の法の如く、天の法を説くこと天の法の如く、小を説くこと小の如く、大を説くこと大の如く、凡を説くこと凡の如く、聖を説くこと聖の如く、因を説くこと因の如く、果を説くこと果の如く、苦を説くこと苦の如く、樂を説くこと樂の如く、遠を説くこと遠の如く、近を説くこと近の如く、同を説くこと同の如く、別を説くこと別の如く、淨を説くこと淨の如く、穢を説くこと穢の如くなることを明さんと欲す、一切の諸法千差萬別なるを説きたまふに、如來の觀知歷歷了然たり。心に隨うて行を起すに各益すること不同なり、業果法然として衆て錯失無し。又稱して是と爲す、故に如是と言ふ。我門と言ふは阿難は是れ佛の侍者なるを以て、常に佛後に隨うて多く聞き廣く識り、身座下に臨んで能く聽き能く持して教旨親しく承くと云ふことを明して傳説の錯り無きを表せんと欲す。故

【稟承】 相承のこと。

【三】 發起序を明す。

【阿闍世】 アヂヤ一タシヤトル(Asastu)未生怨と譯す。中印度摩伽陀國、頻婆娑羅王の子、提婆に唆かされて父王を弑し自立して覇權を中印度に振ふ。後佛に歸して、教團の大施主となる。

に我聞といふなり。又證信と言ふは阿難、佛敎を稟承して末代に傳持するに衆生に對するを爲ての故に。是の如きの觀法、我佛に従うて聞くと云ふことを明して、可信を證誠せんと欲す。故に證信序と名く。此は阿難に就て解するなり。

【二】 二に發起序の中に就て細分するに七と爲す。初に一時佛在より下法王子而爲上首に至る已來は、化前序を明す。二に王舍大城より下顔色和悅に至る已來は、正しく發起序禁父の縁を明し、三に時阿闍世より下不令復出に至る已來は、禁母縁を明し、四に時韋提希被幽閉より下共爲眷屬に至る已來は、厭苦縁を明し、五に唯願爲我廣說より下教我正受到至る已來は、其欣淨縁を明し、六に爾時世尊即便微笑より下淨業正因に至る已來は、散善顯行縁を明し、七に佛告阿難等諦聽より下云何得見極樂國土に至る已來は、正しく定善示觀縁を明す。上來七段の不同行りと雖も廣く發起序を料簡し竟んぬ。

【四】 二に次に化前序を解せば、此序の中に就て即ち其四有り。初に一時と言ふは正しく起化の時を明す。佛將に說法せんとするには先づ時處に託りたまふ。但衆生の開悟必ず因縁に藉るを以て、化主機に臨んで時處を待ちたまふ。又一時と言ふは、或は日夜十二時年月四時等に就く。此れ皆是れ如來機に應じて攝化したまふ時なり。處と言ふは、彼宜しき所に隨つて如來說法したまふ。或は山林處に在し、或は王宮聚落處に在し、或は曠野塚間處に在し、或は多少入天處に在し、或は聲聞菩薩處に在し、或は八部人天王等の處に在し、或は純凡の若は多なると一二との處に在し、或は純聖の若は多なると一二との處に在し



## 【洪鐘】 大鐘。

【聲明】(Savataṇa) 佛の聲教を  
の聲。佛の聲教を  
聞きて四諦の理を

て、其時處に隨うて如來觀知して増せず減ぜず。緣に隨うて法を授けて各所資を益したまふ。斯れ乃ち洪鐘響くと雖も必ず拍くを待つて方に鳴る。大聖の慈を垂るる必ず請を待つて當に説きたまふべし。故に一時と名く。又一時とは阿闍世正しく逆を起す時。佛何の處にか在す。此一時に當りて如來獨り二乘と彼眷屬に在す。此れ即ち下を以て上を形す意なり。故に一時と曰ふ。又一時と言ふは佛と二衆と一時の中に於て、彼眷屬に在して即ち阿闍世の此惡逆を起す因縁を聞きたまふ。此れ即ち上を以て下を形す意なり。故に一時と曰ふ。二に佛と言ふは此れ即ち化主を標定す。餘佛に簡異して獨り釋迦なることを顯す意なり。三に在王舍城より已下は正しく如來造化の處を明す。即ち其二有り。一には王城聚落到遊びたまふ。在俗の衆を化せんが爲なり。二には香山等の處に遊びたまふ。出家の衆を化せんが爲なり。又在家とは五欲を貪求すること相續して是れ常なり。縱ひ清心を發せども猶し水に畫くが如し。但縁に隨うて普く益することを以て大悲を捨てざれども、道俗形殊なれば共に住するに由無し。此を境界住と名く。又出家とは身を亡し命を捨て欲を斷じ眞に歸して、心金剛の若く回鏡に等同す。佛地を怖求して即ち弘く自他を益す。若し羸塵を絶離するに非ずんば此德證すべきに由無し。此を依止住と名く。四に與大比丘衆より下而爲上首に至る已來は佛の徒衆を明す。此衆の中に就て即ち分ちて二と爲す。一には聲聞衆、二には菩薩衆、聲聞衆の中に就て即ち其九有り。初に與と言ふは佛身衆を兼ぬ。故に名けて與と爲す。二には總大、三には相大、四には衆大、五には耆年大、六には數大、七に

悟り涅槃に入る。  
【菩薩】(Bodhisattva) 覺有情と譯す。大心ありて佛道に入り、四弘誓願を發して、六度の行を修し、佛果を求む。

【六道】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六趣

は尊宿大、八には内實德大、九には果證大なり。問うて曰はく、「一切の經の首に皆此等の聲聞有りて以て猶置とするは何の所以か有る。」答へて曰はく、「此に別意有り。云何が別意なる。此等の聲聞多くは是れ外道なりき。」賢愚經に説くが如し、優樓頻螺迦葉五百の弟子を領して邪法を修事す。伽耶迦葉二百五十の弟子を領して邪法を修事す。總じて一千有り。皆佛化を受けて羅漢道を得たり。其二百五十とは即ち是れ舍利と目連との弟子なり。共に一處に領して邪法を修事す。亦佛化を受けて皆道果を得たり。此等の四衆を合して一處と爲す。故に千二百五十人有り。問うて曰はく、「此衆の中に亦外道に非ざる者有り。何が故に總じて標するや。」答へて曰はく、「經の中に説くが如し。此諸の外道、常に世尊に隨つて相捨離せず。然るを結集の家外德を簡び取るが故に異名有り。是れ外道なる者は多く、非ざる者は少なし。又問うて曰はく、「未審し此等の外道、常に佛後に隨つては何の意か有る。」答へて曰はく、「解するに二義有り。一には佛に就て解し、二には外道に就て解す。佛に就て解すとは、此諸の外道邪風久しく扇ぐこと、是れ一生のみに非ず眞門に入ると雖も氣習由る在り。故に如來をして知覺して外化せしめざらしむ。畏くは衆生の正見の根芽を損じ惡業增長して此世後生に果實を收めざらんことを。此因縁に爲りて攝して自ら近かして外益を聽したまはず。此れ即ち佛に就て解し竟んぬ。次に外道に就て解すとは、迦葉等意らく自ら唯曠劫より久しく生死に沈んで六道に修還する苦み言ふべからず。愚癡惡見にして邪風に封執し、明師に値はず

【青年】 年老いたる倍。

【權方便】 眞實に  
入らしむるため、  
かりに設けられた  
手段。

して永く苦海に流る。但し宿縁を以て遇慈尊に會ふことを得ること有り。法澤私無ければ我曹潤を蒙る。尋で佛の恩徳を思ふに身を碎くの極り惘然たり。親しく靈儀に事へて響くも替るに由無からしむることを致す。此れ即ち外道に就て解し竟んぬ。又問うて曰はく、「此等の尊宿を云何が衆所知識と名くる。答へて曰はく、「徳の高きを尊と曰ひ、青年なるを宿と曰ふ。一切の凡聖彼内徳の人に過ぎたるを知り、其外相の殊異なるを識る。故に衆所知識と名く。上來九句の不同有り」と雖も聲聞衆を解し竟んぬ。次に菩薩衆を解す。此衆の中に就て即ち其七有り。一には相を標し、二には數を標し、三には位を標し、四には果を標し、五には徳を標し、六には別して文殊の高徳の位を顯し、七には總じて結す。又此等の菩薩無量の行願を具して一切功德の法に安住し、十方に遊歩して權方便を行じ、佛法藏に入りて彼岸を究竟す。無量世界に於て化して等覺を成す。光明顯曜にして普く十方を照し、無量の佛土六種に震動す。縁に隨うて開示して即ち法輪を轉す。法鼓を打ち法劍を執り法雷を震ひ法雨を雨らし法施を演ぶ。常に法音を以て諸の世間を覺らしむ。邪網を擱裂し諸見を消滅し、諸の塵勞を散じ諸の欲塵を壞す。顯明清白にして佛法を光融し正化を宣流す。衆生を愍傷するに未だ曾て慢恣せず。平等の法を得て無量百千の三昧を具足す。一念の頃に於て周遍せざること無し。群生を荷負して、之を愛すること子の如し。一切の善本皆彼岸に度る。悉く諸佛の無量の功德を獲て、智慧開朗なること思議すべからず。七句の不同有りと雖も菩薩衆を解し訖んぬ。上來二衆の不同有りと雖も廣

【五】發起序の中  
の禁父縁を明す。

く化前序を明し竟んぬ。

【五】二に禁父の縁の中に就て即ち其七有り。一には爾時王舎大城より以下は總じて起  
化の處を明す。此れ往古の百姓但城の中に舍を造るに即ち大火に焼かるるも、若し是れ王  
家の舍宅には悉く火近くこと無し。後の時百姓共に王に奏す。臣等宅を造れば數天  
火に焼かる。但是れ王舎のみ悉く火近くこと無し。何の所以有るか知らず。王奏人に  
告ぐ、「今より以後卿等宅を造らん時、但我今王の爲に舍を造ると言へ。」奏人等各王勅を  
奉けて歸還りて舍を造るに更に焼かれず。此に因りて相傳へて、故王舎と名くることを明  
す。大城と言ふは、此城極めて大にして居民九億なり。故に王舎大城と云ふ。起化處と言  
ふは即ち其二有り。一には謂く、闍王惡を起せば即ち父母を禁するの縁有り。禁に因りて  
即ち此沙婆を厭うて無憂の世界に託せんことを願す。二には即ち如來請に赴きたまへば光  
變じて臺と爲る。靈儀を影現したまふに、夫人即ち安樂に生ぜんことを求む。又心を傾け  
て行を請すれば、佛三福の因を開きたまふ。正觀は即ち是れ定門なり。更に九章の益を  
顯す。此因縁に爲るが故に起化處と名く。

【三福】世出世の  
善を三種に分ちて  
三福とす、世福、  
戒福、行福。  
【悦忽】須臾の頃  
ふ。しばらくの間をい  
ふ。

二に有一太子より下惡友之教に至る已來は正しく闍王悦忽の間に惡人の悞つ所を信受す  
ることを明す。太子と言ふは其位を彰す。阿闍世と言ふは其名を顯す。又阿闍世とは乃ち是  
れ西國の正音なり。此地の往翻には未生怨と名け亦は折指と名く。問うて曰はく、「何が故に  
未生怨と名け及び折指と名くるや。」答へて曰はく、「此れ皆昔日の因縁を擧ぐ。故に此名有



り。『因縁と言ふは元本父子息有ること無し。處處に神に求むるに竟に得ること能はず。忽ちに相師有りて而も王に奏して言さく、『臣知る、山の中に一りの仙人有り。久しからずして壽を捨て、命終して已後必ず當に王の與に子と作るべし。』王聞いて歡喜す。『此人何の時にか命を捨てん。』相師王に答ふ。『更に三年を経て、始て命終すべし。』王の言さく、『我今年老いて國に繼祀無し。更に三年を満てんこと、何に由りてか待つべき。』王即ち使を遣はして山に入り、往いて仙人に請じて曰はしむ。『王、子無く闕けて紹繼無し。處處に神に求むるに得ること能はざるに困しむ、乃ち相師有り。大仙を瞻見るに久しからずして命を捨てて王の與に子と作らんと。請願くば大仙恩を垂れて早く起きたまへ。』と。使人教を受けて山に入りて仙人の所に到りて具に王請の因縁を説く。仙人使者に報へて言はく、『我更に三年を経て始めて命終すべし。王即ち起けと勅せることは是事不可なり。』と。使仙の教を奉けて還りて大王に報するに具に仙の意を述ぶ。王の曰はく、『我は是れ一國の主なり。所有の人物皆我に歸屬す。今故に禮を以て相屈するに乃ち我意を承けず。』王更に使者に勅す。『卿往いて重ねて請ぜよ。請ぜんに若し得ずんば當に即ち之を殺すべし。既に命終し已りなば我與に子と作らざるべけんや。』使人勅をうけて仙人の所に至りて具に王の意を善ふ。仙人使の説を聞くと雖も意に亦受けず。使人勅を奉けて、即ち之を殺さんと欲す。仙人の曰はく、『卿當に王に語るべし。我命未だ盡きず王心口を以て人をして我を殺さしむ。我若し王の與に兒と作らば還心口を以て人をして王を殺さしめん。』と。仙人此語を善ひ已りて即ち

【提婆達多】デー  
ブダッタ (Devadatta) 調達ともいふ  
釋尊の從兄弟。

【檀越】ダーナパ  
テ (Dānapati) 施  
主と譯す、布施を  
行ふ人のこと。

死を受く、既に死し已りて即ち王宮に託して生を受く。其日夜に當りて夫人即ち有身を覺ゆ。王聞いて歡喜す。天明けて即ち相師を喚うて以て夫人を觀しむ。「是れ男か是れ女か。」と。相師觀已りて王に報じて言さく、「是れ兒にして女に非ず。此兒王に於て損有らん。」と。王の曰はく、「我國土皆捨てて之に屬せん。縱ひ所損有りとも吾亦畏り無し。」と。王此語を聞きて憂喜交懷く。王夫人に白して言さく、「吾夫人と共に私に自ら平章せん。相師兒吾に於て損有りと善ふ。夫人之を生まん日を待ちて、高樓の上に在りて天井の中に當りて之を生んで人をして承け接らしむること勿れ。落ちて地に在らんに豈死せざる容けんや。吾亦憂ふること無く聲亦露れず。」と。夫人即ち王の計を可として其生む時に及んで一に前の法の如くす。生れ已りて地に墮つるに、命便ち斷えず。唯手の小指を損す。因りて即ち外人同じく唱へて折指太子と言ふ。未生怨と言ふは、是れ提婆達多惡妬の心を起すに因る。故に彼太子に對して昔日の惡縁を顯發す。云何が妬心して惡縁を起す。提婆惡性にしと人と爲り兇猛なり。復出家すと雖も恆常に佛の名聞利養を妬む。然るに父の王は是れ佛の檀越、一時の中に於て多く供養を將て如來に奉上す。謂く金銀七寶名衣上服百味菓食等一。一色色皆五百車香華伎樂し、百千萬の衆讚敷圍遶して送りて、佛に向うて佛及び僧に施す。時に調達見已りて妬心更に盛なり。即ち舍利佛の所に向うて身通を學せんと求む。尊者語つて言はく、「人者且く四念處を學せよ。身通を學すべからず。」既に請するに心を遂げず。更に餘の尊者の邊に向うて求むるに、乃至五百の弟子等悉く人の教ふる無し。皆

四念處を學せしむ。請ずることじむことを得ず。遂に阿難の邊に向うて學す。阿難に語つて言はく、「汝は是れ我弟なり。我通を學せんと欲す。一二次第に我に教へよ。」と。然るに阿難初果を得と雖も未だ他心を證せず。阿兄の私密に通を學して佛の所に於て惡計を起さんと欲することを知らず。阿難遂に即ち喚うて靜處に向うて次第に之を教ふ。跏趺正座せしめ先づ心を取て身を擧げて動に似る相を教ふ。地を去ること一分一寸と想ひ、一尺一丈と想ひ、舍に至らば空無礙の想を作し、直に過ぎて空中に上ると想ひ、還りて心を攝して下りて本の座處に至ると想へ。次に身を將て心を擧げて、初の時地を去ること一分一寸等亦前の法の如し。身を以て心を擧げ心を以て身を擧げ、亦隨うて既に上空に至り已つて還りて身を攝取して下りて本の座處に至れ。次に身心合して擧ぐと想へ、還前の法に同じく一分一寸等周りて復始めよ。次に身心一切質礙は色境の中に入るに不質礙の想を作すと想へ。次に一切の山河大地等の色自身の中に入るに、空無礙の如しと想うて、色相を見ざれ。次に自身或は大にして虚空に遍滿して坐臥自在にして、或は坐し或は臥して手を以て日月を捉り動すと想ひ、或は小身と作りて微塵の中に入るに、一切皆無礙の想ひを作せ。『阿難是の如く次第に教へ已る。時に調達既に法を受得し已りて即ち別に靜處に向うて七日七夜一心專注して即ち身通を得、一切自在皆成就することを得。既に通を得已りて即ち太子の殿の前の向ひ空中に在りて大神變を現す。身上に火を出し身下に水を出し、或は左邊に水を出し右邊に火を出し、或は大身を現じ、或は小身を現じ、或は空中に坐臥し隨意自在な

【舍利弗】 シャー  
 リブトラ (Sāriputra)  
 佛の教團中必須の  
 地位をしめ、智慧

す。太子見りて左右に問うて曰はく、「此は是れ何人ぞ。」左右太子に答へて言さく、「此は是れ尊者提婆なり。」太子聞き已りて心大いに歡喜す。遂に即ち手を舉げて喚んで曰はく、「尊者何ぞ下り來らざる。」提婆既に喚ふを見已りて即ち化して嬰兒と作りて直に太子の膝の上に向ふ。太子即ち抱いて口を鳴うて之を弄ぶ。又口の中に唾はく。嬰兒遂に之を咽む。須臾に本心に還復す。太子既に提婆が種種の神變を見て轉敬重を加ふ。既に太子の心の敬重せるを見已りて即ち父の王の供養の因縁を説く。色別五百の乗車に載せて佛の所に向うて佛及び僧に奉む。太子聞き已りて即ち尊者に語る。「弟子も亦能く色各五百車を具備して尊者を供養し及び衆僧に施すこと彼の如くならざるべけんや。」提婆が曰はく、「太子此意大いに善し。」と。此より已後大いに供養を得て心轉高慢す。譬へば杖を以て惡狗の鼻を打つに轉狗の惡を増すが如し。是も亦是の如し。太子今利養の杖を將て提婆が貪心の狗の鼻を打つに轉惡を加すこと盛なり。此に因りて僧を破し佛法の戒を改めて教戒不同なり。佛普く凡聖の大衆の爲に說法したまふの時を待ちて、即ち會の中に来りて佛に従うて徒衆を索む。并に諸の法藏盡く我に付屬したまへ。世尊は年將に老邁したまふ。宜しく靜に就て内に自ら將に養ふべし。」と。一切の大衆、提婆が此語を聞きて愕爾として迭互に相看て甚だ驚怖を生ず。爾時世尊、即ち大衆に對して提婆に語りて言はく、「舍利日連等は即ち大法將なれども、我尙佛法を將て付屬せず。況んや汝は癡人唾を食へる者をや。」と。時に提婆佛の衆に對して毀辱したまふを聞いて由毒箭の心に入るが如し。更に癡狂の意を發す。此因



第一と稱せらる。  
 【日連】 マーウド  
 ガルヤヤーナ (Mā  
 udGalīyāna) 胡  
 豆と譯す。佛十大  
 弟子の一にして神  
 通第一と稱せらる

縁に藉りて即ち太子の所に向うて共に悪計を論ず。太子既に尊者を見て、敬心に承問して言はく、「尊者今日顔色憔悴す。往昔に同じからず。」提婆答へて曰はく、「我今憔悴すること正しく太子の爲なり。」太子敬うて問はく、「尊者我爲に何の意がある。」提婆即ち答へて曰はく、「太子知るや不や。世尊年老いて、堪任する所無し。當に之を除いて我自ら佛と作るべし。父王年考いたまへり、亦之を除いて太子自ら正位に坐すべし。新王新佛治化せば豈樂しからずや。」太子之を聞いて極めて大いに瞋怒して云はく、「是説を作すこと勿れ。」又言はく、「太子瞋ること莫れ。父の王、太子に於て全く恩徳無し。初めて太子を生ぜんと欲する時、父王即ち夫人をして百尺の樓の上に在りて天井の中に當りて生ぜしむ。即ち地に墮ちて死せしめんことを望む。正しく太子の福力を以ての故に命根斷えず。但小指を損ず。若し信ぜずんば自ら小指を看よ。以て驗と爲すに足れり。」太子既に此語を聞いて更に重ねて審めて言はく、「實に爾已や不や。」提婆答へて言はく、「此れ若し實ならずんば、我故に來りて漫語を作すべけんや。」此語に因り已りて遂に即ち提婆が悪見の計を信用す。故に隨順調達悪友之教と善ふ。

三に收執父王より一不得王に至る已來は、正しく父王子の爲に幽禁せらるるを明す。是れ闍世提婆が悪計を取りて頓に父子の情を捨つることを明す、直に極り固き恩を失ふのみに非ず。逆の響鼓に因りて路に滿てり。忽に王身を掩ふを收と曰ふ。既に得て捨てざるを執と曰ふ。故に收執と名く。父と言ふは別して親の極を顯す。王と言ふは其位を彰

【瓔珞】印度の貴  
婦人等が頸、胸な  
どにかけたる珠玉  
の裝飾、菩薩また  
之を飾りに用ふ。

す。頻婆といふは其名を彰す。幽閉七重室内と言ふは所爲既に重く事も亦輕きに非ず。淺く人間に禁じて全く守護無かるべからず。但し王の宮閣理めて外人を絶つとも、唯群臣のみ有りて即ち久しきより來承奉せるを以て若し嚴制せずんば恐くは情通有らん。故に内外をして交を絶たしめて閉ぢて七重の内に在り。

四に國大夫人より下密以上王に至る已來は、正しく夫人密に王に食を奉むることを明す。國大夫人と言ふは、此れ最大なることを明す。夫人と言ふは其位を標す。韋提と言ふは其名を彰す。恭敬大王と言ふは、此れ夫人既に王の身禁ぜらるるを見て門戸極めて難く音信通ぜず。恐くは王の身命を絶たんことを。遂に即ち香湯滲浴して身をして清淨ならしめて、即ち酥蜜を取りて先づ其身に塗り後に乾麩を取りて始めて酥蜜の上に安き、即ち淨衣を着て之を覆ひて外衣の上に在いて始めて瓔珞を着る。常に服法の如くにして、外人をして恠まざらしめ、又瓔珞を取りて孔の一端を藕を以て之を塞ぎ、一頭の孔の中に蒲桃の漿を盛れて滿ち已りて還りて塞く。但是れ瓔珞なり。悉く皆此の如くす。莊嚴すること既に竟りて徐く歩んで宮に入りて王と相見ることを明す。問うて曰はく、諸臣勅を奉けて王を見ることを許さず。未審し夫人を門家制せずして放して入ることを得しむるは何の意かある。答へて曰はく、諸臣は身異に復はれ外人なれば、情通すること有らんことを恐れて嚴しく重制を加へしむることを致す。又夫人は身是れ女人にして、心に異なる計無し。王と宿縁業重くして久しく近きて夫妻なり。體を別にして心同じ。人をして外慮無からしむること

【八戒】 八關齋戒に同じ、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒、不坐高廣大床、不著花鬘璪瓔、不習歌舞戲樂の八戒。

を致す。是を以て入ることを得て王と相見る。』

五に爾時大王食麩より下授我八戒に至る已來は、正しく父王禁に因りて法を請すること  
を明す。此れ夫人既に王を見已りて即ち身上の酥麩を刮取りて團を以て王に授與す、王得て  
即ち食す。麩を食すること既に竟りて、即ち宮内に於て夫人淨水を求め得て王に與へて口  
を漱がしむ。口を淨むること已竟て虚しく時を引くべからず。朝心寄る所無し。是を以て  
虔恭合掌して面を廻して普閑に向ひ敬を如來に致して加護を請求することを明す。是れ身  
業の敬を明す。亦通じて意業有り。而作是言已下は正しく口業の請を明す。亦通じて意業  
有り。大目連是吾親友とは其二の意有り。但し目連俗に有りては是れ王の別親なり。既に  
出家を得、即ち是れ門師なり。宮閑に往來すること都て障礙無し。然るに俗に在りては親  
たり。出家せるを友と名く。故に親友と名く。願興慈悲授我八戒とは、此れ父王法を敬ふ  
情深くして人を重くすること已に過ぎたるを明す。若し未だ幽難に逢はずば佛僧を請じ  
奉へるに難しとするに足らず。今既に因はれて屈を致すに由無し。是を以て但目連を請じ  
て八戒を受く。問うて曰はく、「父王遙に敬ふには先づ世尊を禮し、其受戒に及んで即ち目  
連を請するは何の意か有る。」答へて曰はく、「凡聖の極尊、佛に過ぎたるは無し。心を傾け  
願を發すには即ち先づ大師を禮す。戒は是れ小緣なれば、是を以て唯目連の來り授けんこ  
とを請す。然るに王の意は貴ぶこと得戒を存す。即ち是れ義周し、何ぞ迂げて世尊を屈する  
に勞せんや。問うて曰はく、「如來の戒法乃ち無量有り、父王唯八戒を請じて餘を請ぜず。」

【他心智】根力弱  
き他人の現在の心  
を知る智慧をいふ

答へて曰はく、「餘戒は稍寛くして時節長遠なり。恐畏くは中間に失念して生死に流轉せんことを。其八戒とは餘の佛經に説くが如し。在家の人出家の戒を持たんと。此戒の持心極めて細く極めて急なり。何の意ぞ然るとならば、但時節稍促りて唯一日一夜を限りて作法として即ち捨つ。云何が此戒の用心と行と細なることを知る。戒の文の中に具に顯して云ふが如し。佛子今且より明旦に至るまで一日一夜諸佛の殺生したまはざるが如く能く持つや否や。」答へて言はく、「能く持つ。第二に又云はく、「佛子今且より明旦に至るまで一日一夜諸佛の、偷盜したまはず、婬を行せず、妄語せず、飲酒せず、脂粉を身に塗ることを得ず、歌舞唱妓及び往いて觀聽することを得ず、高廣大床に上ることを得ざるが如くすべし。』此上の八つは是れ戒にして齋に非ず、中を過ぎて食することを得ず。此一は是れ齋にして戒に非ず。此等の諸戒皆諸佛を引いて證と爲す。何を以ての故に。唯佛と佛と正習俱に盡したまへり。佛を除いて已還は惡習等由在り。是故に引いて證と爲す。是を以て此戒の用心起行極めて是れ細急なりと知ることを得。又此戒に佛八種の勝法有りと説きたまへり。若し人一日一夜具に持ちて犯せざれば所得の功德、人天二乘の境界に超過せり。經に廣く説くが如し。斯益有るが故に、父王口口に之を受けしむることを致す。

六に時大目連より下爲王說法に至る已來は、其父王請に因りて聖法を蒙ることを得ることを明す。此れ目連他心智を得て遙に父王の誠意を知りて即ち神通を發して彈指の頃の如くに王の所に到ることを明す。又恐くは人神通の相を識らざらんことを。故に快き鷹を引



いて嘯と爲す。然るに日連の通力、一念の頃に四天下を遶ること百千の匝なり。豈鷹と類を爲すことを得んや。是の如きの比拔は乃ち衆多有り。具に引くべからず。「賢愚經」に具に説くが如し。日日如是授王八戒と言ふは、此父王命を延べて日連をして數來らしめて戒を受けしむることを致すことを明す。問うて曰はく、「八戒既に勝れたりと言ふは一たび受くるに即ち足りぬ。何ぞ日日に之を受くることを須ふる。」答へて曰はく、「由は高きを厭はず、海は深きを厭はず、刀は利を厭はず、日は明を厭はず、人は善を厭はず、罪は除くを厭はず、賢は徳を厭はず、佛は聖を厭はず。然るに王の意は既に囚禁せられて更に進止を蒙らざれば念念の中人の喚殺せんことを畏る。此が爲に晝夜に心を傾けて、仰いで八戒を思む。積善增高にして、來業に擬資せんと望欲す。」世尊亦遣富樓那爲王說法と言ふは、此れ世尊慈悲の意重くして王の身を感念したまふに、忽ち因勞に遇うて恐くは憂悴を生ぜんことを。然も富樓那は聖弟子の中に於て最も能く說法す。善く方便有りて人の心を開發す。此因縁の爲に如來發遣して王の爲に法を説きて以て憂惱を除くことを明す。

七に如是時間より下顔色和悅に至る已來は、正しく父王食と聞法とに因りて多日死せざることを明す。此は正しく夫人多時に食を奉めて以て飢渴を除き、二聖又戒法を以て内に資けて善く王の意を聞く。食は能く命を述べ戒法は神を養ふ、苦を失し憂を亡じて顔色和悅ならしむることを致すことを明す。上來七句の不同有りと雖も廣く禁父の縁を明し竟んぬ。

【六】 發起序の中  
禁母縁を明す。

【六】 三に禁母の縁の中に就て即ち其八有り。一に時阿闍世より下由存在耶に至る已來

【一食の飯】一時に呑み下す食物の量、俗にいふ一口なり。

は、正しく父の音信を問ふを明す。此は闍王父を禁ずること日數既に多し。人の交總て絶ちて水食通ぜざること二七なれば餘命終るべきこと有り。是念を作し已りて即ち宮門に致りて守門の者に、父王今者猶存在せりやと問ふことを明す。問うて曰はく、「若し人一食の飯を食して限七日に至りぬれば即ち死す。父王三七を経たるを以て計るに命斷ゆべきこと疑ひ無し。闍王何を以てか直に問うて「門家父王今者死し竟れりや」と曰はざる。云何が疑ひを致して而も「猶存在せりや」と問ふことは何の意か有る。答へて曰はく、「此は是れ闍王意密の間なり。但し萬基の主なるを以て舉動宜しきに隨ふべからざらんや。父王既に是れ天性情親し。言うて「死せりや」と問ふべきこと無し。恐くは失當時に在りて以て譏過を成さんことを。」但し以れば内心に死を標して口に在りやと問へるは永き惡逆の聲を息めんと欲するが爲なり。二に時守門人白言より下不可禁制に至る已來は、正しく門家事を以て具に答ふることを明す。此れ闍世前に父王在りやと問へば今次に門家奉答することを明す。白言大王国大夫より已下は、正しく夫人密に王に食を奉ることを明す。王既に食を得れば食能く命を延べて多日を經と雖も父の命猶存す。此れ乃ち夫人の意にして、是れ門家の過には非ず。問うて曰はく、「夫人の食を奉るに身の上に麩を塗りて衣の下に密に覆ふ。出入往還に人の見ることを得ること無し。何が故に門家具に夫人食を奉るの事を顯すや。」答へて曰はく、「一切の和密久しく行はずべからず。縦ひ巧に牢く藏せども事還りて彰露る。父王既に禁ぜられて宮内に在り。夫人日々に往還す。若し密に麩を持ちて食せしめずんば王の

命活いのちくわつすることを得るに由よし無し。今密いまみつと言ふは門家に望のぞみて夫人の意を述ぶ。夫人密して外人知らずと謂へども其門家盡く以て之を覺らざらんや。今既に事窺こゝろみりて相隱あひかすに由無し。是を以て、一一に具に王に向うて説く。沙門日連と言ふより已下は、正しく二聖空に騰りて來去し門路に由らず日日夜還して王の爲に法を説くことを明す。大王當に知るべし。夫人食を進む、先に王の教を奉けず。所以に敢て遮約せず。二聖空に乗ず、此れ亦門制に猶らず。三に時阿闍世聞此語より下欲害其母に至る已來は、正しく世王の瞋怒を明す。此れ闍王既に門家の分疏を聞き已りて即ち夫人に於て心に惡怒を起し口に惡辭を陳ずることを明す。又三業の逆三業の惡を起す。父母を罵りて賊とするを口業の逆と名く。沙門を罵るをば口業の惡と名く。劍を執りて母を殺せんとするを身業の逆と名く。身口の所爲心を以て主と爲す。即ち意業の逆と名く。又復前方便を惡とし後正行を逆と爲す。我母是賊と言ふより已下は、正しく口に惡辭を出すことを明す。云何が母を罵りて賊とする。賊の伴なればなり。但し闍王の元の心怨を父に致して、早く終らざることを恨む、母乃ち和して糧を進むるが爲の故に死せざらしむ。是故に罵りて我母は是れ賊なり。賊と伴なればなりと言ふ。沙門惡人と言ふより已下は此れ闍世母の食を進むることを瞋り、復沙門王の與に來去するを聞きて更に瞋心を發さしむることを致すことを明す。故に何の咒術有りて而も惡王をして多日に死せざらしむると言ふ。即執利劍と言ふより已下は、此れ世王瞋盛にして逆、母に及ぶことを明す。何せん其れ痛しき哉。頭を撮いて劍を擬す。身命頓に須臾に有り。慈

母合掌して身を曲げ頭を低れて兒の手に就く。夫人爾時、熱き汗遍く流れて心神悶絶す。  
 嗚呼哀れなる哉。恍惚の間に斯苦難に逢へる。四に時有一臣名曰月光より下却行而退  
 に至る已來は、正しく二臣切諫して聽さざることを明す。此れ二臣乃ち是れ國の輓相立政  
 の綱紀、萬國に名を揚げ、八方防習せんことを得んことを望む。忽に闍王の勃逆を起して  
 劍を執りて其母を殺せんと欲するを見るに是惡事を見るに忍びず、遂に耆婆と顔を犯して  
 諫を説くることを明す。時と言ふは闍王母を殺せんと欲する時に當る。有一大臣と言ふは其  
 位を彰す。月光と言ふは其名を彰す。聰明多智と言ふは其徳を彰す。及與耆婆と言ふは  
 耆婆は亦是れ父王の子奈女の兒なり。忽に家兄の母に於て逆を起すを見て遂に月光と  
 同じく諫む。爲王作禮と言ふは、凡そ大人を諮諫せんと欲するの法は要す須らく拜を設け  
 て以て身敬を表すべし。今此二臣も亦爾なり。先づ身敬を設けて王の心を覺動し手を劔め  
 躬を曲げて方に本意を陳ぶ。又白言大王と言ふは、此れ月光正しく辭を陳ぜんと欲する  
 こと闍王聞心聽覽せんことを得んと望むことを明す。此囚縁の爲の故に須らく先づ白すべ  
 し。臣聞毘陀論經説と言ふは、此れ廣く古今の書史歷帝の文記を引くことを明す。古人の  
 云はく、「言典に關らざるは君子の慚づる所なり。」今既に諫事輕からず、豈虚言を以て妄に  
 説すべけんや。劫初已來と言ふは其時を彰す。有諸惡王と言ふは、此を總じて非禮暴逆の  
 人を標することを明す。貪國位故と言ふは、此れ非意に父の坐處を貪り奪ふ所を明す。殺  
 害其父と言ふは、此れ既に父に於て、惡を起すことは久しく留むべからず。故に須らく



命を斷ずべしと明す。一萬八千と言ふは、此れ王今父を殺する彼と類同することを明す。未曾聞有無道害母と言はば、此れ古より今に至るまで、父を害して位を取ることを史籍良談す。國を食して母を殺すは都て記せる處無きことを明す。若し劫初已來を論ぜば惡王の國を食する但其父を殺して慈母に加へず。此れ即ち古の今に異なるを引く。大王今者國を食して父を殺す。父は則ち位の貪るべき有り、古に類同せしむべし。母は即ち位の求むべきこと無し。横に逆害を加ふ。是以に今は昔に異なるを將す。王今此殺母を爲さば利利の種を汚さんと言ふ。利利と言はば乃ち是れ四姓の高元王者の種代代相承す。豈凡碎に同じからんや。臣不忍聞と言ふは、王惡を起して宗親を損辱し惡聲流布することを見るに、我性望耻慚するに地無し。是旃陀羅と言ふは、乃ち是れ四姓の下流なり。此れ乃ち性凶惡を懷いて仁義を閑はず。人の皮を著たりと雖も行禽獸に同じ。王は上族居にして萬基の主に押臨す。今既に惡を起して恩に加ふ。彼下流とは何ぞ異ならんや。不宜住此と言ふは即ち二義有り。一には王今惡を造りて風禮を存せず。京邑神州豈旃陀羅をして主たらしめんや。此れ即ち宮城を擯出する意なり。二には王國に在りと雖も、我宗親を損す。遠く他方に擯して永く無聞の地に絶つには如かず。故に不宜住此と言ふ。時二大臣説此語と言ふより已下は、此れ二臣直諫切に語極めて巖く、廣く古今を引いて王の心開悟することを得んを望むを明す。以手按劍と言ふは、臣自ら手の中の劍を按す。問うて曰はく、「諫辭讎惡にして顔を犯すを避けず。君臣の義既に乖けり。何を以てか身を廻らして直に

去らずして乃ち却行而退と言ふや。答へて曰はく、「罽言王に逆ふと雖も害母の心を息ま  
 んことを望む。又瞋毒未だ除かず、劍を繋けて己を危くせんことを恐る。是を以て劍を按  
 して自ら降いで逆行して退く。」五に時阿闍世驚怖より下汝不爲我耶に至る已來は、正し  
 く世王怖を生ずることを明す。是れ闍世、既に二臣の諫辭麤切なるを見、又劍を按して去  
 るを親て、臣われに背いて彼父王に向つて更に異計を生ぜんことを恐るるを明す。情地をして  
 安からざらしむることを致す。故に惶懼と稱す。彼既に我を捨つ。誰が爲にするかを知ら  
 ず。心疑つて決せず。遂に即ち口に問うて之を審む。故に耆婆汝不爲我と言ふ。耆婆と言  
 ふは是れ王の弟なり。古人の云はく、「家に衰禍有るときは親しきに非ざれば救はず。」と。  
 汝既に是れ我弟なれば豈月光に同せんや。六に耆婆自言より下慎莫害母に至る已來は、  
 二臣重ねて諫することを明す。此は耆婆實を以て大王に答ふることを明す。若し我等を相  
 とすることを得んと欲せば、願くば母を害すること勿れと。此れ直に諫すること竟んぬ。  
 七に王聞此語より下止不害母に至る已來は、正しく闍王諫を受けて母の殘命を放すことを  
 明す。此れ世王既に耆婆が諫を得已りて心に悔恨を生じ前の所造を愧ぢて即ち二臣に向つ  
 て哀を求め命を乞ふ。因りて即ち母を放して死の難を脱れしめ手の中の劍本の匣に還歸す  
 ことを明す。八に勅語内官より下不令復出に至る已來は、其世王の餘瞋母を禁すること  
 を明す。此れ世王の臣の諫を受けて母を放すと雖も猶餘瞋有りて外に在らしめず。内官に  
 勅語し深宮に閉置して、更に出して父王と相見しむること莫きを明す。上來八句の不同有

【七】發起序の中  
に厭苦縁を明す。

りと雖も廣く禁母の縁を明し竟んぬ。

【七】四に厭苦の縁の中に就て即ち其四有り。一に時章提希より下憔悴に至る已來は、正しく夫人子の爲幽禁せらるることを明す。此れ夫人死の難を勉ると雖も更に深宮に閉ぢ在れて、守當極めて牢くして出るを得るに由無し。唯念念に憂を懐くことのみ有りて自然に憔悴することを明す。傷歎して曰はく、禍なる哉。今日の苦闇王、利刃の中間に喚び結ぢて復深宮に置く難に遇値り。『問うて曰はく、夫人既に死を勉れて宮に入ることを得。宜しく訝樂すべし。何に因りてか反りて更に愁憂するや。』答へて曰はく、『即ち三義の不同なり。一には夫人既に自ら閉ざされて、更に人として食を進めて王に與ふる無し。王又我難に在るを聞きて、轉更に愁憂せん。今既に食無くして憂を加へば、王の身命定めて久しからざるべきことを明す。二には夫人既に囚難を被る。何の時か、更に如來の面及び諸の弟子を見んといふことを明す。三には夫人教を奉けて禁じて深宮に在り、内官守當して水泄通ぜず。且夕の間に唯死路を愁ふることを明す。斯三義有りて身心を切逼す。憔悴すること無きことを得んや。二に遙向耆闍崛山より下未舉頭頭に至る已來は、正しく夫人禁に囚りて佛を請じ意に陳ぶる所有ることを明す。此れ夫人既に囚禁に在りて自身佛邊に到ることを得るも由無し。唯單心のみ有りて面を耆闍に向うて遙に世尊を禮し佛の慈悲弟子が愁憂の意を表知したまはんことを願ふことを明す。如來在昔之時と言ふより已下は、此に二義有り。一には父の王未だ禁ぜられざる時は或は王及び我身親しく佛邊に到るべ

し。或は如來及び諸の弟子をして親しく王の請を受くべし。然るに我及び王身俱に囚禁に在りて因縁斷絶し彼此情乖けることを明す。二には父王禁に在りてより已來、數世尊、阿難をして來つて我を慰問せしめたまふことを蒙ることを明す。云何が慰問したまふ。父王の囚禁を見たまふを以て、佛恐くは夫人の憂惱せんことを、是因縁を以て故に慰問せしめたまふ。世尊威重無由得見と言ふは、此れ夫人内に自ら卑謙して佛弟子に歸尊す。穢質の女身福因尠薄なり。佛徳威高くて輕しく觸るるに由無し。願くば目連等をして我と相見しめたまへと言ふことを明す。問うて曰はく、「如來は即ち是れ化主なり。應に時宜を失ひたまはざるべし。夫人何を以てか三たび致請を加へずして乃ち目連等を喚ぶ、何の意か有る。」答へて曰はく、「佛徳尊嚴なり。小縁もて敢て輒く請せず。但阿難を見て語を傳へて往いて世尊に白さしめんと欲す。佛我意を知りたまはば、復阿難をして佛の語を傳へて我に指授せしめたまはん。斯義を以ての故に、阿難を見んと願ふ。」作是語已と言ふは、總じて前の意を説き竟るなり。悲泣雨淚と言ふは、此れ夫人自ら唯罪重ければ、佛の加哀を請するに敬を致す情深くして悲涙目に滿てり。但靈儀を渴仰するを以て、復加遙に禮し頂を叩いて跣跡として須臾く未だ擧げざることを明す。三に爾時世尊より下天華持用供養に至る已來は、正しく世尊自ら來りて請に起きたまふことを明す。此れ世尊耆闍に在りと雖も已に夫人の心念の意を知りたまふことを明す。勅大目連等從空而來と言ふは、此れ夫人の請に應ずることを明す。佛從香山洩と言ふは、此は夫人宮内の禁約極めて難し。佛若



【二僧】日蓮侍左  
阿難在右。

し身を現じて來赴したまはば恐畏くは閻世知聞して更に留難を生ぜんことを。是因縁を以ての故に須らく此に洩し彼に出でたまふべきことを明す。時韋提禮已舉頭と言ふは、此れ夫人の敬を致すの時を明す。見佛世尊と言ふは、此れ世尊宮中に已に出でて夫人をして頭を擧げて即ち見しむることを致すことを明す。釋迦牟尼佛と言ふは餘佛に簡異す。但し諸佛名通じて身相異ならず。今故に釋迦を標定して疑ひ無からしむ。身紫金色と言ふは其相を顯し定む。坐百寶華と言ふは餘坐に簡異す。日蓮侍左等と言ふは、此れ更に餘衆無くして唯二僧のみ有ることを明す。釋梵護世と言ふは、此れ天王衆等佛世尊の隠れて王宮に顯れたまふを見て必ず希奇の法を説きたまはん。我等天人韋提に囚るが故に未聞の益を聽くことを得んと。各本念に乗じて普く空に住臨して天耳遙に淪して華を雨らして供養することをも明す。又釋と言ふは即ち是れ天帝なり。梵と言ふは即ち是れ色界の梵王等なり。護世と言ふは即ち是れ四天王なり。諸天と言ふは即ち是れ色欲界等の天衆なり。既に天王の佛邊に來り向へるを見て彼諸の天衆亦王に従うて來り、法を聞いて供養す。四に時韋提希見世尊より下與提婆共爲眷屬に至る已來は、正しく夫人頭を擧げて佛を見たてまつり、口言に傷歎し怨結の情深きことを明す。自絶瓔珞と言ふは、此れ夫人身の莊の瓔珞猶愛して未だ除かず。忽に如來を見たてまつりて羞慚ぢて自ら絶つことを明す。問うて曰はく、「云何が自ら絶つや。答へて曰はく、「夫人は即ち是れ貴中の貴、尊中の尊なり。身の四威儀に多くの人供給し、著たる所の衣服皆傍人を使ふ。今既に佛を見たてまつりて耻愧づ

情深くして鉤帶に依らず、頓に自ら擧き却く。故に自絶と言ふ。擧身投地と言ふは、此  
 れ夫人内心に感結して怨苦堪へ難し。是を以て坐より身を踊らして立ち、立より身を踊ら  
 して地に投ずることを明す。此れ乃ち歡恨處深ければ更に禮拜威儀を事とせざるなり。  
 號泣向佛と言ふは、此れ夫人佛前に宛轉して悶絶號泣することを明す。白佛と言ふより已  
 下は、此夫人婉轉涕哭すること量久しくして少しく惶めて始めて身の威儀を正し合掌して  
 佛に白す。我一生より已來未だ曾て其大罪を造らず。未審し宿業の因縁、何の殃咎有りてか  
 而も此兒と共に母子と爲るとはといふを明す。此れ夫人既に自ら障り深くして、宿因を識  
 らず。今兒の害を被るに、是れ横に來れりと謂へり。佛の慈悲、我に徑路を示したま  
 へと願ふことを明す。世尊復有何等因縁と言ふより已下は、此れ夫人佛に向うて陳訴す。  
 我は是れ凡夫、罪惑盡きざれば斯惡報有るも、是事甘心す。世尊は曠劫に道を行じて正習  
 俱に亡じたまへり、衆智朗然として果圓なるを佛と號す。未審し何の因縁有りてか乃ち提  
 婆と共に眷屬と爲りたまふやといふを明す。此意二有り。一には夫人、怨を子に致すこと  
 を明す。忽に父母に於て狂に逆心を起せばなり。二には又提婆、我闍世に致へて斯惡計  
 を造らしむるを恨むことを明す。若し提婆に因らずんば、我兒終に此意無し。此因縁の爲  
 の故に斯問を致す。又夫人佛に問うて、與提婆眷屬と言ふは即ち其二有り。一には在家の  
 眷屬、二には出家の眷屬なり。在家と言ふは、佛の伯叔に共四人有り。佛は即ち是れ白  
 淨王の兒、金毘は白飯王の兒、提婆は斛飯王の兒、釋魔男は是れ甘露飯王の兒なり。此を

【八】後起序の中  
の狀淨縁を明す。

在家の外眷屬と名く。出家の眷屬と言ふは佛の與に弟子と爲る故に内眷屬と名く。上來四句の不同有りと雖も廣く厭苦の縁を明し竟んぬ。

【八】五に欣淨の縁の中に就て即ち其八有り。一に唯願世尊爲我廣説より下濁惡世也に

至る已來は、正しく夫人通じて所求を請じ、別して苦界を標することを明す。此れ夫人自

身の苦に遇うて世の非常を覺するに六道同じく然なり、安心の地有ること無し。此に佛

淨土の無生を説きたまふを聞かば穢身を捨てて彼無爲の樂を證するを願せんことを明す。

二に濁惡處より下不見惡人に至る已來は、正しく夫人所厭の境を擧出することを明す。

此れ閻浮は總て惡にして未だ一處として食すべきこと有らず。但幻惑の愚夫なるを以て斯

長苦を飲むことを明す。此濁惡處と言ふは、正しく苦界を明す。又器世間を明す。亦是れ

衆生の依報の處なり。亦衆生の所依處と名く。地獄等と言ふより已下は、三品の惡果最も

重ければなり。盈滿と言ふは、此三の苦聚は直獨り閻浮を指すのみに非ず、娑婆にも亦皆

遍く有り故に盈滿と言ふ。多不善聚と言ふは此れ三界六道不同にして種種恆沙なることは

心の差別に隨ふことを明す。經に云はく、業能く識を莊り世世處處に各趣き縁に隨うて

果報を受け、對面すれども相知らず。」と。願我未來と言ふより已下は、此れ夫人真心徹到し

て苦の娑婆を厭ひ樂の無爲を欣うて永く常樂に歸することを明す。但し無爲の境は輕爾と

して即ち階むべからず。苦惱の娑婆は輒然として離るることを得るに由無し。金剛の志を

發すに非ざるよりは永く生死の元を絶たんや。若し親り慈尊に従ふにあらずんば何ぞ能

【閻浮】穢州にし  
て吾人の住する世  
界のこととなせり

【穢】穢土にして  
娑婆界、この世を  
指す。  
【淨】淨土にして  
西方極樂を指す。

く斯長歎を勉れん。然るに願我未來不聞惡聲惡人とは、此れ闍王調達が父を殺し僧を破す  
るが如き、及び惡聲等願くば亦聞かず見ざることを明す。但し闍王は既に是れ親生の子  
なるすら、上父母に於て殺心を起す、何に況んや疎人として相害せざらんや。是故に夫人  
親疎を簡ばす總じて皆頓に捨す。三に今向世尊より下懺悔に至る已來は、正しく夫人淨土  
の妙處は善に非ざれば生ぜず、恐くは餘德有りて障へて、往くことを得ざらんことを。是  
を以て哀哀して更に須らく懺悔すべきことを明す。四に唯願佛日より下清淨業處に至る  
已來は、正しく夫人通じて去行を請することを明す。此れ夫人上には即ち通じて生處を請  
じ、今亦通じて得生の行を請することを明す。佛日と言ふは、法喻變べて標するなり。譬  
へば日出でて衆闇盡く除くが如く、佛智光を輝かせば、無明の夜日朗かなり。教我觀於  
清淨と言ふより已下は、正しく既に能く穢を厭ひ淨を欣ぶ。若爲が安心し注想して清淨  
の處に生ずることを得んやと言ふことを明す。五に爾時世尊放眉間光より下令草提見に至  
る已來は、正しく世尊廣く淨土を現じて前の通請を酬へたまふことを明す。此れ世尊夫人  
の廣く淨土を求むるを見たまふを以て、如來即ち眉間の光を放ちて十方の國を照し光  
を以て國を攝し、頂上に還來して化して金臺と作すに須彌山の如きことを明す。如の言  
は似なり。須彌山に似たり。此山腰は細く上闊し、有ゆる佛國並に中に於て現す。種種不同  
にして莊嚴異有り、佛の神力の故に了として分明なり。草提に加備して盡く皆見ること  
を得しむ。問うて曰はく、草提上には我爲に廣く無夢の處を説きたまへと請す。佛今何



が故に爲に廣く説きたまはずして、乃ち金臺を爲して普く現するは何の意か有る。答へて曰はく、「此れ如來の意密を彰す。然も章提の言を發して請を致す。即ち是れ廣く淨土の門を開くなり。若し之が爲に總じて説かば、恐くは彼見ずして心猶惑を致さん。是を以て一に顯現して、彼眼の前に對して彼所須に信せて心に隨ひて自ら選ばしむ。六に時章提白佛より下皆有光明に至る已來は、正しく夫人總じて所現を領して佛恩を感荷することを明す。此れ夫人總じて十方の佛國を見るに、並に悉く精華なれども、極樂の莊嚴に比せんと欲するに全く比況に非ざることを明す。故に我今樂生安樂國と云ふ。問うて曰はく、「十方の諸佛は、斷惑殊なること無く、行畢り果圓にして亦應に二つ無かるべし。何を以てか一種の淨土に即ち斯優劣有るや。」答へて曰はく、「佛は是れ法王、神通自在なり。優と劣と凡惑の知る所に非ず。隱顯機に隨うて、化益を存することを望む。或は可し、故に彼優たるを隱して、獨り西方の勝れたるを顯はす。七に我今樂生彌陀より已下は、正しく夫人別して所求を選ぶことを明す。此れ彌陀の本國、四十八願よりす。願願皆増上の勝因を發す。因に依りて勝行を起せり。行に依りて勝果を感ず。果に依りて勝報を感成し、樂に依りて悲化を顯通し、悲化に依りて智慧の門を顯開す。然るに悲心盡くること無ければ智も亦窮無し。悲智雙へ行じて即ち廣く甘露を聞く。茲に因りて法潤普く群生を攝す。諸餘の經典に勸むる處彌多し。衆聖心を齊しくして皆同じく指讚したまふ。此因縁有りて如來密に夫人をして別して選ばしむるを致すを明す。八に唯願世尊より已下は、正しく

【九】發起序の中  
の散善顯行縁を明  
す。

【法爾】古も今も  
常にしかあること

【二乗】聲聞、緣  
覺なり。

夫人別行を請求することを明す。此れ韋提既に得生の處を選び還別行を修して己を勵まし  
心を注ぎて必ず往益を望むことを明す。教我思惟と言ふは即ち是れ定の前方便、彼國の依  
正二報四種の莊嚴を思想し憶念するなり。教我正受と言ふは此れ前の思想に因つて漸漸微  
細に覺悟俱に亡す。唯定心のみ有りて、前の境と合するを名けて正受とすることを明す。  
此中に略して己に料簡しぬ。下の觀門に至りて更に當に廣く辯ずべし。應に知るべし、上  
來八句の不同有りと雖も、廣く欣淨の縁を明し竟んぬ。

【九】六に散善顯行の縁の中に就て即ち具五有り。一に爾時世尊即便微笑より下成那含  
に至る已來は、正しく光父の王を益することを明す。此れ如來夫人極樂に生ぜんと願じ、  
更に得生の行を請するを見たまふに、佛の本心に稱ひ又彌陀の願意を顯すことを以て、斯  
二請に依りて廣く淨土の門を開く。直に韋提の去ることを得るのみに非ず、有識之を聞い  
て皆往く。斯益有るが故に所以に如來微笑したまふことを明す。有五色光從佛口出と言ふ  
は此れ一切の諸佛の心口の常の威儀法爾として凡そ出す所の光必ず利益有ることを明す。  
一一光照頻婆頂と言ふは、正しく口の光餘方を照さずして唯王頂を照すことを明す。然も  
佛の光は身の出處に隨うて必ず皆益有り。佛の足の下より光を放てば、即ち地獄道を照益  
す。若し光膝より出づれば畜生道を照益す。若し光陰藏より出づれば鬼神道を照益す。若  
し光臍より出づれば修羅道を照益す。光心より出づれば人道を照益す。若し光口より出づ  
れば二乗の人を照益す。若し光眉間より出づれば大乘の人を照益す。今此光口より出でて

【大乘】菩薩なり

【記】佛が修行者  
未來の證果を一  
區別して豫め説  
き給ふこと。

【刹】梵音クシエ  
トラ(Ksetra)田  
上、園と譯す、園  
土のこと。

【攀緣】猿の木の  
枝を飛び廻りて休  
むことなきが如く  
心外境のために轉  
ぜられて靜平を得  
る能はざるをいふ

直に王頂を照すは即ち其小果を授くることを明す。若し光眉間より出でて即ち佛頂より入るは即ち菩薩に記を授くるなり。斯の如きの義は廣多にして無量なり、具に述ぶべからず。爾時大王雖在爾閉と云ふより已下は、正しく父の王光頂を照すことを蒙りて、心眼開くことを得て障障多しと雖も自然に相見る。斯れ乃ち光に因りて佛を見ること意の期する所に非ざれば、敬を致し歸依するに即ち第三の果を超證することを明す。二に爾時世尊より下廣説衆譬に至る已來は、正しく前に夫人の別して所求の行を選ぶに答ふることを明す。此れ如來上の耆闍を没して王宮に出で訖るより此文に至るまで、世尊默然として坐して總じて未だ言説したまはざることを明す。但し中間の夫人の懺悔請問放光現國等は乃ち是れ阿難佛に從うて王宮に此因縁を見、事了りて山に還り傳へて耆闍の大衆に向うて上の如きの事を説くに、始めて此文有り、亦是れ時に佛語無きには非し、應に知るべし。爾時世尊告章提と云ふより已下は、正しく告命許説を明す。阿彌陀佛不遠と言ふとは正しく境を標して以て心を任せしむることを明す。即ち其三有り。一には分齊遠からず、此より十萬億の刹を超過すれば即ち是れ彌陀の國なることを明す。二には道里遙なりと雖も去る時一念に即ち到ることを明す。三には章提等及び未來有縁の衆生心を注めて觀念すれば定境相應して行人自然に常に見ることを明す。斯三義有り、故に不遠と云ふ。汝當繫念と言ふより已下は、正しく凡惑障深くして心多く散動す。若し頓に攀緣を捨てずんば淨境現ずることを得るに由無し、此れ即ち正しく安心修行を教ふ。若し此法に依るをば名けて淨業成

【淨業】念佛のこ  
と、念佛は淨土往  
生の正業なるが故  
に名く。

すと爲すことを明す。我今爲汝と言ふより已下は、此れ機縁未だ具せざれば偏に定門を説く  
べからず。佛更に機を觀じて自ら三福の行を開かれたまふを明す。三に亦未來世より下極  
樂國土に至る已來は、正しく機を擧げ修を勤め得を益するを明す。此れ夫人の請する所、  
利益彌深くして未來に及ぶまで、廻心すれば皆到るを明す。四に欲生彼國者より下名爲  
淨業に至る已來は、正しく三福の行を勤修するを明す。此れ一切衆生の機に二種有り。一  
には定、二には散なり。若し定行に依れば、即ち生を攝すること盡きず。是を以て如來  
方便して三福を顯開して以て散動の根機に應ずることを明す。欲生彼國と言ふは所歸を標  
指す。當修三福と言ふは行門を總標す。云何が三と名くる。一には孝養父母即ち其四有り。  
一に孝養父母と言ふは此れ一切の凡夫皆縁に藉りて生ずるを明す。云何が縁に藉る。或は  
化生有り、或は濕生有り、或は卵生有り、或は胎生有り。此四生の中に、各各に復四生有り。  
經に廣く説くが如し。但し是れ相因りて生ずれば、即ち父母有り。既に父母有れば即ち大  
恩有り。若し父無くば能生の因即ち闕けん。若し母無くば所生の縁即ち乖く。若し二人俱  
に無くば即ち託生の地を失はん。要す須らく父母の縁具して方に受身の處有るべし。既に  
身を受けんと欲するに自の業識を以て内因と爲し、父母の精血を以て外縁として因縁和合  
す、故に此身有り。斯義を以ての故に父母の恩重し。母懷胎し已りて十月を経るまでに行  
住坐臥常に苦惱を生じ、復産の時死の難を憂ふ。若し生じ已りぬれば三年を経るまでは常  
恆に尿に眠り尿に臥して、床被衣服皆亦不淨なり。其長大に及んでは婦を愛し兒を親みて



【三衣】僧の著る  
 べき三種の衣服、  
 即ち三種の袈裟也  
 僧伽梨(大衣)鬱多  
 羅留(七條)安陀會  
 (五條)のこと。

父母の處に於て却りて憎疾を生じて恩孝を行はざる者は即ち畜生と異なること無し。又父母は世間福田の極なり。佛は即ち是れ出世福田の極なり。然るに佛在世の時、時年の飢餓なるに遇うて人皆餓死して白骨縱横なり。諸の比丘等乞食するに得難し。時に於て世尊比丘等の去りし後を待ちて獨り自ら城に入りて乞食したまふ。日より中に至るまで門口に喚び乞ひたまへども、食を與へたてまつる者無し。佛還鉢を空しくして歸りたまふ。明日復去きたまふに又還得たまはず。後の日復去きたまふに又亦得たまはず。忽ち一りの比丘有り、道に逢うて佛を見たてまつるに顔色常に異にして飢相有すに似たり。即ち佛に問うて言さく、世尊今已に食し竟りたまへりや。佛の言はく、比丘我三日を経て已來、乞食するに一匙をも得ず。我今飢虚して力無し、能く汝と共に語せんや。比丘佛語を聞き已りて悲涙して自ら勝ふること能はず。即ち自ら念言すらく、佛は是れ無上の福田衆生の覆護なり。我此三衣を賣却して一鉢の飯を買ひ取りて佛に奉上せん。今正しく是れ時なり。と。是念を作し已りて即ち一鉢の飯を買ひ得て急ぎ將て佛にたてまつる。佛知しめして、而も故に問うて言はく、比丘時年飢餓して人皆餓死す。汝今何れの處にしてか此一鉢の純色の飯を得て來れる。比丘前の如く具に世尊に白す。佛又言はく、比丘の三衣は即ち是れ三世の諸佛の幢相なり。此衣因縁極めて尊く極めて重く極めて恩有り。汝今此飯を易へ得て我に與ふことは大いに汝が好心を領すれども我此飯を消せず。比丘重ねて佛に白して言さく、佛は是れ三界の福田聖中の極なるに、尙消せずと言はば、佛を除いて已外は誰か

【三歸依】 歸依佛  
依とは歸順信賴、  
佛法僧の三寶に歸  
順するをいふ。

能く消せん。佛言はく、「比丘汝父母有りや已不や。答へて言さく、「有り。汝將て父母に  
供養し去れ。」比丘の言さく、「佛尙消せじと云ふ。我父母豈能く消せんや。佛言はく、「消  
することを得ん。何を以ての故に。父母能く汝が身を生ぜり。汝に於て大重恩有り。此に爲  
りて消することを得ん。佛又比丘に問ひたまはく、「汝が父母佛を信ずる心有りや不や。比  
丘言さく、「都て信心無し。」佛言はく、「今信心有るべし。汝が飯を與ふるを見ば大いに歡喜  
を生ぜん。此に因りて即ち信心を發さん。先づ教へて三歸依を受けしめよ。即ち能く此食を  
消せん。」時に比丘既に佛の教を受けて懇仰して去りぬ。此義を以ての故に大いに須らく父  
母に孝養すべし。又佛母摩耶佛を生じて七日を経已りて即ち死して忉利天に生ず。佛後成  
道したまうて四月十五日に至りて即ち忉利天に向うて一夏母の爲に說法したまふ。十月懷  
胎の恩を報ぜんが爲なり。佛自ら尙自ら恩を收めて父母に孝養したまふ。何に況んや凡夫と  
して孝養せざらんや。故に知んぬ、父母の恩深く極めて重きことを、奉事師長とは、此れ  
禮節を教示して學識徳を成じ、因行虧くること無く乃ち成佛に至る、此れ猶師の善友の力  
なり。此大恩最も須らく敬重すべきを明す。然るに父母及び師長をば名けて敬上の行と  
爲す。慈心不殺と言ふは、此れ一切の衆生皆命を以て本と爲すことを明す。若し惡縁を  
見ては怖れ走り藏れ避ることは但命を護るが爲なり。經に云はく、「一切の諸の衆生壽  
命を愛せざること無し。殺すること勿れ杖を行すること勿れ已を怒つて噓と爲すべし」と。  
即ち證と爲す。修十善業と言ふは、此れ十惡の中に殺業最も惡なり。故に之を列ねて初に在

十善の中には長命最も善なり。故に之を以て相對することを明す。已下の九惡九善は下の九品の中に至りて次に廣く述べし。此れ世善を明す。又慈下の行と名く。二に受持三歸と言ふは、此れ世善は輕微にして報を感ずること具ならず、戒徳は巍巍として能く菩提の果を感ずることを明す。但し衆生の歸信淺より深に至る。先づ三歸を受けしめて後に衆戒を教ふべし。具足衆戒と言ふは、然るに戒に多種有り。或は三歸戒或は五戒八戒十善戒二百五十戒五百戒沙彌戒或は菩薩の三聚戒十無盡戒等なり。故に具足衆戒と名く。又一の戒品の中に亦少分戒多分戒全分戒有り。不犯威儀と言ふは、此れ身口意業行住坐臥に能く一切の戒の與に方便の威儀を爲すことを明す。若しは輕重麤細皆能く護持して犯すれば即ち悔過す。故に不犯威儀と云ふ。此を戒善と名く。三に發菩提心と言ふは是れ衆生の欣心大に趣いて淺く小因を發すべからず。廣く弘心を發すに非ざるよりは、何ぞ能く菩提と相會することを得んと云ふことを明す。唯願くば我身身虚空に同じく、心法界に齊しうして衆生を盡さん。我身業を以て恭敬供養禮拜し、來去を迎送して盡さしめん。又我我口業を以て讚歎說法せんに、皆我化を受けて言の下に道を得ん者をば盡さしめん。又我意業を以て入定觀察し身を法界に分け機に應じて度せんに、一として盡さざること無からん。我此願を發しぬ、運運増長して猶し虚空の如く、處として遍ぜざること無からん。行流無盡にして後際を徹窮するまでに身に疲倦無く心に厭足無からん。又菩提と言ふは即ち是れ佛界の名なり、又心と言ふは即ち是れ衆生の能求の心なり、故に發菩提心と云ふ。四

【三有】 欲界、色界、無色界のこと

【含靈】 心識を含有する者、衆生、有情のこと。

【二】 發起序の中の定善示觀縁を明す。

に深信因果と言ふは即ち其二有り。一には世間の苦樂の因果を明す。若し苦の因を作れば即ち苦の果を感ず、若し樂の因を作れば即ち樂の果を感ず。印を以て泥に印するに印壞れて文成するが如し、疑ひを得ず。讀誦大乘と言ふは此れ經教は之を喻ふるに鏡の如し。數讀み數尋ねれば智慧を開發す。若し智慧の眼開けぬれば即ち能く苦を厭ひて涅槃等を欣樂することを明す。勸進行者と言ふは、此れ「苦法は毒の如く惡法は刀の如し。三有に流轉して衆生を損害す。今既に善は明鏡の如く法は甘露の如し。鏡は即ち正道を照して以て眞に歸し甘露は即ち法雨を注いで竭ること無し。含靈をして潤を受け等しく法流に會せしめんと欲すること」を明す。此因縁を以ての故に須らく相勸むべし。如此三事と言ふより已下は、總じて上の行を結成す。五に佛告韋提より下正因に至る已來は、其聖を引いて凡を勵すことを明す。但し能く決定して心を注むれば必ず往くこと疑ひ無し。上來五句の不同有りと雖も、廣く散善顯行の縁を明し竟んぬ。

【二〇】 七に定善示觀の縁の中に就て即ち其二有り。一に佛告阿難より下清淨業に至る已來は正しく勸聽許説を明す。此れ韋提前に請じて極樂に生ぜんと願じ、又得生の行を請するに如來已に許したまへり。今此文に就て正しく正受の方便を開顯せんと欲するを明す。此れ乃ち因縁の極要にして利益處深し、曠劫に希に開く。如今始めて説きたまふ。斯義に爲るが故に如來をして總じて二人に命ぜしむることを致す。告阿難と言ふは我今淨土の門を開説せんと欲す。汝好く傳持して遺失せしむること莫れとなり。告韋提と言ふは是



【三惡】地獄、餓鬼、畜生の三種なり。

【六賊】六境の心と汚し眞性を覆ひ昏ますに似ていふ。

れ汝は是れ清法の人なり。我今説かんと欲す。汝好く審かに聴き思量諦受して錯失せしむること莫れとなり。爲未來世一切衆生と言ふは但し別來化に臨みたまふは偏に常汝の衆生の爲なれば、今既に等しく慈雲を布いて普く來潤を沾さんことを望欲したまふ。爲煩惱賊害と言ふは、此れ凡夫は障重く妄愛迷深くして、三惡の火坑闇に人の足の下に有ることを謂はざるを明す。縁に隨うて行を起して進道の資糧と作さんと擬すれども、何んせん其六賊知聞し競ひ來りて侵し奪ふ。今既に此法財を失ふ、何ぞ憂苦無きことを得んや。説清淨業と言ふは、此れ如來衆生の罪を見たまふを以ての故に、爲に懺悔の方を説いて相續して斷除せしめて、畢竟じて永く清淨ならしめんと欲することを明す。又清淨と言ふは、下の觀門に依りて專心に念佛して想を西方に注むれば念念に罪除かるるが故に清淨なり。二に善哉より已下は、正しく夫人の間、聖意に當ることを明す。三に阿難汝當受持より下宣説佛語に至る已來は、正しく勸持勸説を明す。此法深要なれば好く須らく流布すべしとなり。此れ如來前に則ち總じて告げて安心聽受せしむ。此文は則ち別して阿難に勸して受持して忘るること無く、廣く多人の處にして爲に説いて流行せしむることを明す。佛語と言ふは此れ別來曠劫に已に口の過を除き、言説有るに隨うて一切聞く者自然に信を生ずることを明す。四に如來今者より下得無生忍に至る已來は、正しく勸修得益の相を明す。此れ如來夫人及び未來等の爲に觀の方便を顯して、想を西方に注めしめて娑婆を捨厭し極樂を貪欣せしめんと欲することを明す。以佛力故と言ふより已下は、此れ衆生の業障目に觸るるに

【竹篾】竹の皮の薄きに喩ふ。

生盲なれば掌を指すに遠しと謂ひ、他方竹篾を隔つるに即ち之を千里に踰ゆ。豈況んや凡夫分外の諸佛の境内に心を闕はんや。聖力の冥に加するに非ざるよりは彼國何に由りてか觀ることを得ん」と言ふことを明す。如教明鏡自見面像と言ふより已下は、此れ夫人及び衆生等入觀して心を任せしめ神を凝して捨てざれば心境相應して悉く皆顯現す。境の現する時に當りて鏡の中に物を見るが如似く異なること無きことを明す。心歡喜故得忍と言ふは、此れ阿彌陀佛國の清淨の光明忽ち眼前に現するとき、何ぞ踊躍に勝へん。茲喜に因るが故に即ち無生の忍を得ることを明す。亦喜忍と名け、亦悟忍と名け、亦信忍と名く。此れ乃ち玄に談じて未だ得處を標さざることは、夫人等をして心に此益を慍はしめんと欲す。勇猛專精に心に想ひ見る時方に忍を悟るべし。此れ多く是れ十信の中の忍なり。解行已上の忍には非ず。五に佛告韋提より下令汝得見に至る已來は、正しく夫人は是れ凡にして聖に非ず。聖に非ざるに由るが故に、仰きて聖力冥に加はることを惟ふに、彼國遙なりと雖も觀るを得ることを明す。是れ如來恐くは衆生惑ひを置して、夫人は是れ聖にして凡に非ずと謂ひ言ひて疑ひを起すに由るが故に、即ち自ら怯弱を生ぜん。然るに韋提は現に是れ菩薩なり、假に凡身を示す。我等罪人比及するに由無し。此疑ひを斷ぜんが爲の故に汝是凡夫と云ふを明す。心想羸劣と言ふは是れ凡なるに由るが故に、曾て大の志無ければなり。未得天眼と言ふは、此れ夫人肉眼の見る所の遠近言を爲すに足らず。況んや淨土彌遙なり。云何が見るべけんやと言ふことを明す。諸佛別來有異方便と言ふより已下は、

此れ若し心に依りて見る所の國土の莊嚴は、汝凡の能く普く悉すべきに非ざれば、功を佛に歸するを明す。六に時章提白佛より下見彼國土に至る已來は、其夫人重ねて前の恩を牒して彼問を生起せんと欲するの意を明す。此れ夫人佛意を領解するを明す。上の光臺見る所の如き、是れ已能く向に見ると謂ひき。世尊開示したまふに、始めて是れ佛の方便の恩なることを知る。若し爾らば佛今世に在せば、衆生念を蒙りて西方を見ることを得しむべし。佛若し涅槃したまうて、加備を蒙らざらん者は、云何が見ることを得ん。七に若佛滅後より下極樂世界に至る已來は、正しく夫人の悲心物の爲にして、己が往生と同じく永く娑婆を遁つて長く安樂に遊ばんことを明す。此れ如來の期心の運度は、後際を徹窮して未だ休まず。但世代り時移りて、群情淺促なるを以ての故に、如來をして永生の壽を減じ長劫を泯して以て人年に類し、憍慢を攝して以て無常を示し、剛強を化して同じく磨滅に歸せしむることを明す。故に若佛滅後と云ふ。諸衆生と言ふは、此れ如來化を息めば衆生歸依たるに處無く、蠢蠢周摩して縦横に六道に走らんことを明す。濁惡不善と言ふは、此は五濁を明す。一には劫濁、二には衆生濁、三には見濁、四には煩惱濁、五には命濁なり。劫濁と言ふは然るに劫は實に是れ濁に非ず。劫滅の時に當りて諸惡加増すればなり。衆生濁と言ふは劫若し初めて成ずるときは衆生純善なり。劫若し未なる時は衆生の十惡彌盛なり。見濁と言ふは自身の衆惡をば總じて變じて善と爲し、他の上の非無きを見て是ならずと爲す。煩惱濁と言ふは當今劫末の衆生惡性親しみ難く六根に對するに隨うて貪瞋

競ひ起る。命濁と言ふは前の見惱の二濁に由りて多く殺害を行じて恩養するに慈無し。既に斷命の苦因を行す。長年の果を受けんと欲せば何に由りてか得べけん。然るに濁は體是れ善に非ず。今略して五濁の義を指し竟んぬ。五苦所逼と言ふは八苦の中に生苦老苦病苦死苦愛別の苦を取りて此を五苦と名く。更に三苦を加ふれば即ち八苦と成る。一には五陰盛苦、二には求不得苦、三には怨憎會苦、總じて八苦と名く。此五濁五苦八苦等は六道に通じて受く。未だ無きもの有らず。常に之に通惱せらる。若し此苦を擧げざる者は即ち凡數の攝に非ず。云何當見と言ふより已下は、此れ夫人苦機を擧出する此等の罪業極めて深し。又佛を見たてまつらず加備を蒙らずば、云何が彼國を見んやと言ふことを明す。上來七句の不同有りと雖も、廣く定善示觀の縁を明し竟んぬ。初めには證信序を明し、次には化前序を明し、後には發起序を明す。上來三序の不同有りと雖も、總じて序分を明し竟んぬ。

觀經序分義卷第二終



【定善義】四帖の疏の第三觀無量壽經の正宗分十六觀中の定善十三觀を解釋す。

# 觀經正宗分定善義

卷第三

沙門善導集記

此より已下は次に正宗を辯す。即ち其十六有り。還りて一一の觀の中に就て文に對して料簡せん。勞しく豫じめ顯さず。今正宗を定め立つること諸師と同じからず。今直に以て法に就て定めば、日觀の初の句より下下品下生に至る已來は是れ其正宗なり。日觀より已上は多義の不同有りと雖も、此文勢を見るに但是れ由序なり。應に知るべし。

【一】 日觀を明す。

【一】 初の日觀の中に就て先づ擧げ次に辯じ後に結す。即ち其五有り。一に佛告韋提より下想於西方に至る已來は、正しく總じて告げ總じて勸むることを明す。是れ韋提前に彌陀佛國を請じ、又正受の行を請するに如來時に當りて即ち爲に説かんと許したまふ。但機緣未だ備らざれば行を顯すこと未だ周からざるを以て更に三福の因を開いて以て未聞の益を作し。又如來重ねて告げて流通を勸發したまふ。此法聞き難ければ廣く開悟せしむることを明す。佛告韋提汝及衆生と言ふは此れ告勸を明す。若し等しく麁勞を出でて佛國に生ずるを求めんと欲せしものは宜しく、須らく意を勵すべし。應當專心と言ふより已下は、此れ業生散動にして識猿猴よりも劇しく、心六塵に遍じて暫くも息むに由無し、但境緣一に

【流通】 佛法の流れひろまること。

【三昧】梵音サマ  
一トビ(Samathi)  
等持と譯す。正心  
行處とも云ふ。定  
を修すれば心を一  
境に安住せしめて  
動かざるが故に名

有るを以て日に觸れて食を起し想を亂る、心を三昧に安んぜんこと何んぞ得べき、縁を捨て靜に託するに非ざるよりは相續して心を注むるを明す。直に西方を指して餘の九域を簡ぶ。是を以て身を一にし、心を一にし、廻向を一にし、處を一にし、相續を一にし、歸依を一にし、正念を一にす。是を想成就して正受を得と名く。此世後生に心に隨つて解脱す。二に云何作想より下皆見日没に至る已來は、正しく所觀の事を牒することを明す。此れ諸の衆生等、久しく生死に流れて安心を解らざれば、西方を指すと雖も、云何が作意するかを知らず。故に如來爲に反問を生じ疑執を遣除して以て正念の方を示さしめたまふを明す。凡作想と言ふは、此れ總じて前の意を牒して後の入觀の方便を顯すことを明す。一切衆生と言ふは總じて得生の類を擧ぐ。自非生盲と言ふより已下は、此れ機の堪と不堪とを簡ぶことを明す。生盲と言ふは母胎の中より出でて眼即ち物を見ざる者を名けて生盲と言ふ。此人には教へて日觀を作さしむることを得ず。日輪の光相を識らざるに由るが故に。生盲を除いて以外縁に遇うて患ふる者には教へて日觀を作さしむるに盡く成就することを得。未だ眼を患へざる時、其日輪の光明等の相を識るに由りて、今日を患ふと雖も但善く日輪等の相を取らしめて正念に堅持して時節を限らざれば、必ず成就するを得るなり。問うて曰はく、「韋提の上の請には極樂の境を見んと願す。如來の許説に至るに及んで、即ち先づ教へて心を住めて日を觀ぜしむるは何の意か有る。」答へて曰はく、「此に三の意有り。一には衆生をして境を識りて心を住めしめんと欲して、方を指

【春秋の二際】 春秋兩度の彼岸。

【身の四大】 二肘二肘。

【身の五大】 二肘二肘及び頭、五體ともいふ。  
【識大】 たましひのこと。

すことと在る有り。冬夏の兩時を取らず、唯春秋の二際を取る。其日正東より出でて直西に没す。彌陀佛國日の没する處に當りて、直に西方十萬億刹を超過す、即ち是なり。二には衆生をして自らの業障に輕重有ることを識知しめんと欲す。云何が知ることを得る。教へて心を住めて目を觀するに由る、初めて心を住めんと欲する時教へて跏趺正坐せしむ。右の脚左の脛の上に著けて外と齊くし、左の足右の脛の上に安じて外と齊くし、左の手を右の手の上に安じて身をして正直ならしめ、口を合せて齒相近くすること勿れ。舌上の顎を拄へよ。咽喉及び鼻の中の氣道をして宣通せしめんが爲の故に。又身の四大、内外共に空にして都て一物も無しと觀ぜしむ。身の地大皮肉筋骨等心に想へ。西方に散向して西方の際を盡すに乃至一塵の相を見ず。又想へ身の水火の血汗津淚等心に想へ。北方に散向して北方の際を盡すに乃至一塵の相を見ず。又想へ身の風大東方に散向して東方の際を盡すに乃至一塵の相を見ず。又想へ身の火大南方に散向して南方の際を盡すに乃至一塵の相を見ず。又想へ身の虚空と一合して乃至一塵の相を見ず。又想へ身の五大皆空にして唯識大のみ有り湛然として凝住す。猶し圓鏡の如く、内外明照にして朗然清淨なりと。此想を作す時亂想除くことを得て心漸く凝定す。然して後徐徐として心を轉じて諦かに目を觀すれば其利根なる者は一坐にして即ち明相現前するを見ん。鏡の現する時に當りて、或は鏡の大きさの如く或は鏡の面の大きさの如し。此明の上に於て即ち自ら業障の輕重の相を見る。一には黑障猶し黑雲の目を障ふるが如し。二には黄障又黄雲の目を障

【闍提】一闍提と  
 もいふ。梵音イツ  
 チユハーンテカ  
 (Tchhanika) 斷  
 善根と譯す。本來  
 解脫の因を缺きて  
 到底成佛する能は  
 ざるもの。

ふるが如し。三には白障、白雲の日を障ふるが如し。此日猶雲の障ふるが故に朗然とし  
 て顯照することを得ず。衆生の業障も亦是の如し。淨心の境を障蔽して心をして明照なら  
 しむること能はず。行者若し此相を見れば、即ち須らく道場を嚴飾し、佛像を安置し、清淨に  
 洗浴し、淨衣を著し、又名香を焼いて諸佛一切賢聖に表白し、佛の形像に向つて現在の一生  
 に無始より已來乃し身口意業に造る所の十惡五逆四重謗法闍提等の罪を懺悔すべし。極め  
 て須らく悲涕して涙を雨し深く慚愧を生じ、内心隨に徹り骨を切りて自ら責むべし。懺悔  
 し已りて還りて前の坐法の如く安心して境を取れ。境若し現する時前の如きの三障盡く  
 除いて所觀の淨境朗然として明淨ならん。此を頗に障を滅すと名く。或は一懺して即  
 ち盡すを、利根の人と名く。或は一懺に但黑障を除き、或は一懺に黃白等の障を除くこと  
 を得。或は一懺に但白障を除く。此を漸除と名く、頓滅と名けず。既に自ら業相の是の如  
 くなるを識らば唯須らく勤心に懺悔すべし。日夜の三時六時等に但憶して即懺することを  
 得るは最もこれ上根、上行の人なり。譬へば湯火の身を焼くに亦覺むれば即ち却くるが如  
 し。豈徒に時を待ち處を待ち縁を待ち人を待ち方に始めて除くべけんや。三には衆生を  
 して彌陀の依正二報種種の莊嚴光、明等の相の内外照躍して此日に超過せること百千萬倍  
 せるを識せしめんと欲す。行者等若し彼境の光相を識らずんば即ち此日輪の光明の相  
 を看よ。若し行任坐臥に禮念憶想して常に此解を作せ。久しからざるの間に即ち定心を得  
 て彼淨土の事の快樂莊嚴を見る。此義の爲の故に世尊先づ日想觀を作さしめたまふ。三に



當起想念より下狀如懸鼓に至る已來は、正しく觀察を教ふ。此れ身の威儀を正しくして面を西方に向け境を守り心を住め堅執して移らざれば所期皆應ずることを明す。四に已見日已より下明了に至る已來は、觀成の相を辯ず。此れ心を標して日を見るに想を制し縁を除いて念念移らざれば淨相了然として現ずることを明す。又行者初めて定中に在りて此日を見る時即ち三昧定樂を得て身心内外融液して不可思議なり。此を見る時に當りて好く須らく心を攝して定をして上心の食取を得ざらしむべし。若し貪心を起せば心水即ち動ず。心動ずるを以ての故に淨境即ち失す。或は動或は闇或は黑或は青黃赤白等の色にして安定することを得ず。此事を見る時即ち自ら念言せよ。此等の境相搖動して安んぜざるは我貪心の動念に淨境を動滅せしむることを致す。即ち自ら安心正念にして還りて本より起せば動相即ち除りて靜心還りて現す。既に此過を知らば、更に増上の貪心を起すことを得ざるなり。已下の諸觀の邪正得失一に此に同じ、日を觀するに日を見れば、心境相應す、名けて正觀と爲す。日を觀するに日を見ずして乃ち餘の雜境等を見るは心境相應せず。故に邪と名く。斯れ乃ち娑婆の閻宅は事に觸れて以て比方すべき無し。唯朗日の輝を舒ぶるのみ有りて想を寄せて遠く極樂を標す。五に是爲より已下は總じて結す。上來五句の不同有りと雖も廣く日觀を明し竟んぬ。

【二】二に水觀の中に就て亦先づ擧げ次に辯し後に結す。即ち其七有り。一に次作水想より下内外映徹に至る已來は、總じて地の體を標す。問うて曰はく、一前に日を觀するに教ふ

【二】 水想觀を明す。

【穢國】穢惡の國  
士、三毒五濁のけ  
がれ満ちたる處、  
この娑婆世界の如  
き國土をいふ。

るは業相等を知るなり。故に日を觀ぜしむ。今此觀の中に又水を觀するを教へて何の所以か有る。答へて曰はく、「日輪常に照すを以て極樂の長暉を表す。復恐くは彼地平かならずんば此穢國の高下に類せんことを。但娑婆の闇宅には唯日のみ能く明かななり。此界は丘坑にして未だ高下無きの處に非ざるを以て能く平かなる者を取らんと欲するに水に過ぎたる無ければ斯可平の相を示して彼瑠璃地に況するなり。」又問うて曰はく、「此界の水は濕うて又軟かなり。未審し彼地も亦此水に同するや。」答へて曰はく、「此界の平水を以て彼地の等しく高下無きに對す。又水を轉じて氷と成すは彼瑠璃地の内外映徹せるに對す。此れ彌陀曠劫に等しく行じて偏無く正習俱に亡じて能く地輪の映徹せるを感ずることを明す。」又問うて曰はく、「既に水を想うて以て心を住せしめ水を轉じて以て氷を成し氷を轉じて以て瑠璃地を成すに對へて如何が作法して而も境を現ぜしむ。」答へて曰はく、「若し住身の威儀は前に前の日觀の中に法に同じ。又水を觀じて以て定心を取らんと欲せば還りて須らく相似の境に對して觀すべし。即ち定を得べきこと易し。行者等靜處に於て一椀の水を取りて床の前の地の上に著けて好く之を滿ち盛り、自身は床の上に在りて座し自の眉間に當りて一の白き物の豆許の大きさの如くなるを著けて、頭を低れ面を水の上に臨めて、一心に此白き處を照し見て更に異縁する莫れ。又水初め地に在りて波浪住せず面を臨ましめて之を觀するに面像を見ず。觀を爲すこと休まざれば漸漸に面現す。初の時面相住せず。乍ち長く乍ち短く乍ち寛く乍ち狭く乍ち見え見ずして此相現する時更に須らく極細の用心すべし。久

## 【三界】 欲界、色

しからざるの間に水波微細にして動ずるに似て動せず。面相漸く明かに現するを得、面上の眼耳鼻口等を見ると雖も、亦未だ取るを須ひず。亦妨ぐるを須ひず。但身心を縦にして有りとなりて取ること勿れ。唯白所を取りて了了に之を觀じて正念を守護して、意を失し異縁せしむる勿れ。此を見る時に當りて、心漸く住するを得て水性湛然なり。又行者等白心の中の水の波浪任せざるを識知せんと欲せば、但此水の動不動の相を觀じて、即ち白心の境の現不現、明闇の相を知るなり。又水の靜かなる時を得ち、一米許なるを取りて、水上に當りて手に信せて之を水の中に投ぐれば、其水波即ち動いて椀の内に遍す。白らの面上に臨ましめて之を觀るに、其白き者即ち動ず。更に豆許を著けて之を水に投ぐるに、波浪大にして面上の白き者及び白身の頭面、總じて皆隠没して現せず。水の動ずるに猶るが故なり。椀と言ふは即ち身器に喩ふ。水と言ふは即ち白心の水に喩ふ。波浪と言ふは即ち亂想煩惱に喩ふ。漸漸に波浪息すと云ふは即ち是れ衆縁を制捨して心を一境に住せしむるなり。水靜にして境現すと云ふは、即ち是れ能縁の心亂るること無ければ所縁の境動せず。内外恬怕にして所求の相顯然なり。又細想及び麤想有れば心水即ち動ず。心水既に動ずれば靜境即ち失す。又細塵及び麤塵之を寂靜の水の中に投ぐれば其水の波浪即ち動ず。又行者等但此水の動不動の相を看て即ち自心の住不住を識るなり。又境現の不失邪正等は一に前の目觀に同じ。又天親の讚に云はく、「彼世界の相を觀するに三界の道に勝過せり。究竟じ

界、無色界。

【無漏】漏は缺漏の義にして煩惱の異名。煩惱を増上せしめざるものを無漏といふ。

【涅槃】梵音ニルヴァーナ(Nirvana)寂滅と譯す。迷妄を脱し眞理を窮めて、寂滅無爲の法

て虚空の如く廣大にして邊際無し」と。此れ即ち總じて彼國の地の分量を明す。二に下有金剛七寶より下不可具見に至る已來は、正しく地下の莊嚴を明す。即ち其七有り。一には幢の體等しく是れ無漏の金剛なるを明す。二に地を擧げて相顯映せる莊嚴を明す。三に方楞具足して圓相に非ざるを表するを明す。四に百寶合成して量摩沙に出づるを明す。五に寶千光を出して光無邊の際に周きを明す。六に光に異色多くして色他方を照して、機に隨うて變現し、時として益せざる無きを明す。七に衆光彩を散じて日輪を映絶す。新往の者の之を觀て卒に周悉し難きことを明す。讚に云はく、「地下の莊嚴七寶の幢有り。無量無邊にして無數億なり。八方八面にして百寶を以て成せり。彼を見れば無生然に悟る。無生の寶國は永く常たり。一一の寶無數の光を流す。行者心を傾けて、常に日に對つて神を騰げて踊躍して西方に入れ」と。又讚じて云はく、「西方は寂靜にして無爲の都なり。畢竟逍遙にして、有無を離れたり。大悲心に薰じて法界に遊ぶ。分身して物を利すること等しくして、殊なること無し。或は神通を現じて法を説き、或は相好を現じて無餘に入る。變現の莊嚴心に隨ひて出づ。群生見る者罪皆除く」と。又讚じて云はく、「歸去來、魔郷には停るべからず。曠劫より來、六道に流轉して盡く皆經たり。到る處餘樂無く。唯愁數の聲のみを聞く。此生平を畢へて後彼涅槃の城に入る」と。三瑠璃地上より下分齊分明に至る已來は、正しく地上の莊嚴顯標殊勝なるを明す。此れ依持圓淨を明す。七寶の地林等は是れ能依、瑠璃の寶地は是れ所依なり。地は是れ能持池臺樹等は是れ所持な



性を究め不生不滅  
の法身の眞證に歸  
するをいふ。

【三忍】喜、悟、  
信の三忍をいふ。  
彌陀をたのみたる  
他力信仰のこと。

り。此れ彌陀の因行周備せるに山りて、感報をして圓明ならしむることを致す。明淨の義は即ち無漏を體と爲せばなり。讀に、はく、「寶地の莊嚴比量無し。處處の光明十方を照す。寶閣華臺皆遍滿す。雜色寶麗として量るべきこと難し。寶雲寶蓋空に臨んで覆ひ、聖衆通を飛して互に往來す。寶幢幡蓋風に隨ひて轉じ、寶樂聲を含んで念に應じて廻る。惑疑を帶して生ずるの華未だ開けず。合掌蓮葩たること胎に處するに喩ふ。内に法樂を受け、微苦無し。障盡くれば須臾に華自ら開く。耳目精明にして、身金色なり。菩薩徐徐として寶衣を授く。光體に觸るるに三忍を成ずるを得。即ち佛を見んと欲して金臺より下る。法侶を迎へ將みて大會に入るるに尊顏を瞻仰して善哉と讚らる。と。金繩と言ふより已下は、正しく黄金を道に作せる狀に金繩に似るを明す。或は雜寶を以て地と爲し琉璃を道と作し、或は琉璃を以て地と爲し白玉を以て道と作し、或は紫金白銀を以て地と爲し百寶を道と作し、或は不可説の寶を以て地と爲し還りて不可説の寶を以て道と作し、或は千萬寶を以て地と爲し二三寶を道と作し、是の如く轉相間雜し、轉共に合成し轉相照曜し、轉相顯發して、光光色色各各不同なれども、而も雜亂無し。行者等但金道のみ有りて、而も餘寶を道と作すこと無しと言ふこと莫れ。四に一一寶中有五百色光より下樂器以爲莊嚴に至る已來は、正しく空裏の莊嚴を明す。即ち其六有り。一に寶多光を出すことを明す。二に喩を以て其相を顯すことを明す。三に光變じて臺と成ることを明す。四に光變じて樓閣を成すことを明す。五に光變じて華幢と成ることを明す。六に光變じて寶樂の音と成る

【四倒四眞】 正理を顛倒したる四種の見解。世間の實相なる非常を常、非樂を樂と、非我を我と、非淨を淨と倒計すること。四眞とは四倒を破して得たる四正見のこと。

【三】 地想觀を明す。

ことを明す。又地上の雜寶、一一に各五百色の光を出し、一一の色光の上に空中に上湧して一の光臺と作り、一一の臺の中に寶樓千萬ありて、各各一二三四乃至不可説の寶を以て、以て莊嚴と爲して合成せることを明す。如華又如星月と言ふは佛慈悲を以て人の識らざらんことを畏れたまふが故に喻を借りて以て之を顯す。於臺兩邊各有百億華幢と言ふは寶地衆多にして光明無量なり。一一の光等化して光臺と作りて空中に遍滿す。行者等行住坐臥に常に此想を作せ。五に八種清風より下無我之音に至る已來は、正しく光樂音と變じて轉じて説法の相を成ずることを明す。即ち其三有り。一に八風光より出づることを明す。二に風光即ち出でて即ち樂を鼓ち音を發することを明す。三に四倒四眞恆沙等の法を顯説することを明す。讚に云はく、「安樂國は清淨にして常に無垢の輪を轉ず。一念及び一時に諸の群生を利益す。佛の諸の功德を讚するに、分別の心有ること無し。能く速に功德大寶海を満足せしむ」と。六に是爲より下は總じて結す。上來六句の不同有りと雖も廣く水觀を明し竟んぬ。

【三】 三に地想觀の中に就て亦先づ擧げ次に辯じ後に結す。即ち其六有り。一に地想成時よりは、正しく前を結し後を生ずるを明す。二に「一觀之より下不可具説に至る已來は、正しく觀成の相を辨ずるを明す。即ち其六有り。一には心に一境を標じて、總雜して之を觀ずることを得ざれといふを明し、二には既に一境に專なれば、境即ち現前す。既に現前することを得れば必ず明了ならずしむるを明す。三には境既に心に現せば目を閉ぢ目を開

【四威儀】 行、住、坐、臥

【正受】 觀無量壽經に韋提夫人が釋尊に對し、天人に思惟を教へたまへ、我に正受を教へたまへと希ひしを云ふ

【三惡】 三惡道にして地獄、餓鬼、畜生

くに、守を失すること莫らしむるを明す。四には身の四威儀に晝夜に常に念じ、唯睡時を除いて憶持して捨てざることを明す。五には心を凝すこと絶えざれば、即ち浄土の相を見ることを明す。此を想心中の見と名く。猶覺相有るが故に、六には想心漸く微にして、覺念頓に除き、正受と相應して三昧を證すれば、眞に彼境の微妙の事を見る。何に由りてか具に説かんやといふことを明す。斯れ乃ち地廣くして、無邊なり。寶幢一に非ず、衆珍彩を躍かして轉變彌多し。是を以て物を勤めて心を傾かしむ。恆に目に對するが如くならしむ。三には是爲より下は總じて結す。四に佛告阿難より下説是觀地法に至る已來は、正しく流通を勸發して、緣に隨ひて、廣く説かしむることを明す。即ち其四有り。一には告命を明す。二には佛語を勸持して、廣く未來の大衆の爲に、前の觀地の益を説かしむることを明す。三には機を簡んで、受くるに堪へ信するに堪へて、此娑婆生死の身の八苦五苦三惡道の苦等を捨つることを得んと欲して、聞きて即ち信行せん者には身命を惜まず、急に爲に之を説くべきことを明す。若し一人苦を捨てて生死を出づるを得れば、是を眞に佛恩を報ずと名く。何を以ての故に。諸佛世に出でて種種の方便もて衆生を勸化したまふは、直に惡を制し福を修して、人天の樂を受けしめんと欲するにはあらず。人天の樂は猶し電光の如し。須臾に即ち捨てて、還りて三惡に入りて長時に苦を受く。此因縁を爲して但勸めて即ち浄土に生ぜんことを求めて、無上菩提に向はしめたまふ。是故に今の時の有縁相勸めて、誓うて浄土に生ぜしむるは即ち諸佛本願の意に稱ふなり。若し樂つて信樂せずんば

『清淨覺經』に云ふが如し。「若し人有りて淨土の法門を説くを聞いて聞けども聞かざるが如く見れども見ざるが如くなるは、當に知るべし、此等は始めて三惡道より來りて罪障未だ盡きず。此が爲に信向無きのみ。佛の言はく、我説く、此人は未だ解脫を得べからず」。此經に又云はく、「若し人淨土の法門を説くを聞いて即ち悲喜交流れ身の毛豎つことを爲す者は、當に知るべし、此人は過去に已に曾て此法を修習して今重ねて聞くことを得。即ち歡喜を生じ正念に修行して必ず生ずることを得」と。四には正しく實地を觀することを教ふることを以て心を住せしむるを明す。五に若觀是地者より下心得無疑に至る已來は、正しく觀の利益を顯すを明す。即ち其四有り。一には法を指すに、唯實地を觀じて餘境を論ぜざるを明す。二には無漏の實地を觀するに因りて、能く有漏多劫の罪を除くを明す。三には身を捨てて已後、必ず淨土に生ずるを明す。四には修因正念にして、疑を雜するを得ざれと言ふを明す。往生を得と雖も、華に含まれて未だ出でず。或は邊界に生じ、或は宮胎に墮す。或は大悲の菩薩の、開華三昧に入りたまふに因りて、疑障乃ち除き、宮華開發し、身相顯然なり。法侶携へ將みて佛會に遊ばしむ。斯れ乃ち心を注めて實地を見るに、即ち宿障の罪愆を滅す。願行の業已に圓なれば、命盡きて往かざることを疑ふ無し。今已に斯勝益を觀る。更に勧めて邪正を辯知せしむ。六に作是觀より已下は、正しく觀の邪正を辯することを明す。邪正の義は、前の日觀の中に已に説く。上來六句の不同有りと雖も、廣く地觀を明し竟んぬ。



## 【四】寶樹觀を明す。

【四】四に寶樹觀の中に就て亦先づ擧げ次に辯じ後に結す。即ち其十有り。一に佛告阿難より下次觀寶樹に至る已來は、正しく告命して、總じて觀の名を擧げ、前を結し後を生ずるを明す。二に觀寶樹と言ふは重ねて觀の名を牒す。一一觀之と言ふより已下は、後の觀の相を生じて正しく儀則を教ふ。此れ彌陀の淨國廣闊無邊なるを明す。寶樹寶林豈七行を以て量とせんや。今七重と言ふは或は一樹有り。黄金を根と爲し紫金を莖と爲し白銀を枝と爲し碼碯を條と爲し珊瑚を葉と爲し白玉を華と爲し眞珠を菓と爲す。是の如き七重互に根莖乃至華菓等を爲せば、七七四十九重なり。或は一寶を一樹と爲す者有り。或は二三四乃至百千萬億不可説の寶を一樹と爲す者有り。此義彌陀經の義の中に已に廣く論じ竟んぬ。故に七重と名く。行と言ふは、彼國の林樹多しと雖も修行整直にして而も雜亂無し。想と言ふは、未だ眞觀を閑らて自在に心に隨はざれば、要す假想に藉りて以て心に住すれば方に能く益を證す。三に一一より下由旬に至る已來は、正しく樹の體量を明す。此れ諸の寶の林樹皆彌陀の無漏の心中より流出するを明す。佛心是れ無漏なるに由るが故に其樹亦是れ無漏なり。讚に云はく、「正道の大慈悲は出世の善根より生ず。淨光圓滿足して鏡と日月輪との如し」量と言ふは一一の樹の高さ三十二萬里なり。亦老死の者無く亦小生の者無く亦初生漸長の者無し。起るに即ち同時に頰に起きて量數等齊なり。何の意ぞ然るとならば彼界位は是れ無漏無生の界なり。豈生死漸長の義有らんや。四に其諸寶樹より下以爲映飾に至る已來は、正しく雜樹雜嚴雜飾の異相を明す。即ち其四有り。一に

【法藏の因】彌陀の因位の名、昔法藏菩薩國王より發心出家して沙門となり、世自在王佛の所に於て四十八願を建てたることを云ふ。

は林樹の華葉間雜して不同なるを明す。二には一一の根莖枝條葉等皆衆寶を具するを明す。三には一一の華葉轉互に不同にして瑠璃の色の中より金色の光を出す。是の如く轉相間雜するを明す。四には更に一切の雜寶を將て而も之を嚴飾するを明す。又讚に云はく、「諸の珍寶の性を備へて妙莊嚴を具足せり。無垢の光炎熾なり。明淨にして世間を曜す」と。又讚じて云はく、「彌陀の淨國寶樹多し四面に條を垂れて天衣掛り遮れり。寶雲蓋を含み化鳥聲を連ね、旋轉して空に臨み法音を奏して會に入る。他方の聖衆響を聽いて以て心を聞き、本國の能人は形を見て悟を取ると」と。五に妙眞珠網より下色中上者に至る已來は、正しく樹上の空裏の莊嚴の相を明す。即ち其七有り。一には珠網空に臨んで樹に覆へるを明す。二には網に多重有るを明す。三には宮殿の多少を明す。四には一一の宮内に諸の童子多きを明す。五には童子の身に珠の瓔珞を服せるを明す。六には瓔珞の光照の遠近を明す。七には光上の色に超えたるを明す。六に此諸寶林より下有七寶葉に至る已來は、其林樹多しと雖も而も雜亂無く、華實開く時内より出でざることを明す。斯れ乃ち法藏の因深くして、自然にして有らしむるを致す。七に一一樹葉より下婉轉葉間に至る已來は、正しく華と葉と、色相の不同とを明す。即ち其五有り。一には葉量の大小等しくして、差別無きを明す。二には葉光色を出す多少を明す。三には疑うて識らざらんことを恐れて、喩を借りて以て顯して、天の瓔珞の如しと言ふことを明す。四には葉に妙華有りて色天金に比し、相火輪に喩ふるを明す。五には迭に相顯照して葉の間に婉轉することを明

【依正の二嚴】依  
報の莊嚴、正報の  
莊嚴

す。八には湧生諸葉より下亦於中現に至る已來は、正しく葉に不思議の徳用の相有るを明す。即ち其五有り。一には寶の葉生ずる時、自然に湧出するを明す。二には喩を借りて以て葉の相を標するを明す。三には葉に神光有りて、化して幡蓋となるを明す。四には寶蓋圓明にして、内に三千の界を現するに、依正の二嚴種種の相現するを明す。五には十方の淨土、普く蓋の中に現じて、彼國の人天親見せずと言ふこと無きを明す。又此樹の量彌高く、縱廣彌闊く、華葉衆多にして、神變一に非ず。一一の樹、既に然なれば、彼國に遍滿する所有の諸の樹の葉衆多なること、盡く皆此の如し。應に知るべし。一切の行者、行住坐臥に、常に此想を作せ。九に見此樹已より下分明に至る已來は、觀成の相を信ず。即ち其三有り。一には觀成の相を結することを明す。二には次第に之を觀じて、雜亂するを得ざれといふことを明す。三には一一に心を起して、境に住することを明す。先づ樹根を觀じ、次に華枝乃至華葉を想ひ、次に網宮を想ひ、次に童子の環珞を想ひ、次に葉の量、華葉の光色を想ひ、次に幡蓋、廣く佛事を現することを想ひ、既に能く一一に次第に之を觀する者は、明了ならずといふこと無し。十には爲より下は總じて結す。斯れ乃ち寶樹暉を連ね、網簾殿に空じ、華千色を分つて、葉他方を現す。上來十句の不同有りと雖も廣く寶樹觀を明し竟んぬ。

【五】寶池觀を明す。

【五】五に寶池觀の中に就て亦先づ擧げ次に辯じ後に結す。即ち其七有り。一に次當想水より已下は、總じて觀の名を擧ぐ。即ち是れ前を牒して後を生ず。此れ寶樹精なりと雖

も、若し池水無ければ、亦未だ好と名けざるを明す。一には世界を空しからざらしめんが爲、二には依報を莊嚴せんが爲なり。斯義の爲の故に此池渠の觀有り。二に極樂國土より下如意珠王生に至る已來は、正しく池數を明し、并に出處を辯ず。即ち其五有り。一には所歸の國を標指するを明す。二には池に八數の名有るを明す。三には一一の池岸七寶合成するを明す。正しく寶光映徹通照するに由りて、八德の水一ら雜寶の色に同じ。故に寶水と名く。四には是諸の衆寶體性柔軟なるを明し。五には八池の水。皆如意寶の中より出づるを以て、即ち如意水と名くるを明す。此水に即ち八種の德有り。一には清淨潤澤、即ち是れ色入の攝なり。二には臭からず、即ち是れ香入の攝なり。三には輕し、四には冷し、五には軟なり、即ち是れ觸入の攝なり。六には美し、是れ味入の攝なり。七には飲む時調適す。八には飲み已りて患無し、是れ法入の攝なり。此八德の義、已に彌陀義の中に在りて、廣く説き竟んぬ。又讚じて云はく、極樂に莊嚴せる安養國八德の寶池、流れて遍滿す。四岸暉を含んで七寶を間へ、水色分明にして寶光を映ず。體性柔軟にして堅觸無く、菩薩徐に行いて寶香を散ず。寶香寶雲寶蓋と成る。寶蓋空に臨んで寶幢に覆ふ。寶幢の嚴儀寶殿を圍めり。寶殿の寶鈴珠網に垂る。寶網寶樂千重に轉じ、機に隨ひて寶宮樓を讚歎す。一一の宮樓に、佛會有り。恆沙の聖衆、坐して思量す。願くば此有緣、常に憶念せよ。命を捨て同じく彼法堂に生ぜん。三に分爲十四支より下以爲底沙に致る已來は、正しく池異溜を分つて旋澗して亂るること無きを明す。即ち其三有り。一には渠數の多少を明



【三身】報、法、  
應の三身。

し、二には一一の渠岩、黄金の色を作すを明す。三には渠下の底沙、雜寶の色を作すを明す。金剛と言ふは、即ち是れ無漏の體なり。四に一一水中より下尋樹上下に至る已來は、正しく水に不思議の用有るを明す。即ち其五有り。一には別して渠の名を指して、彼莊嚴の相を顯すを明し、二には渠内の寶華の多少を明し、三には華量の大小を明し、四には摩尼寶の水、華の間に流注するを明し、五には寶水渠より出でて、諸の寶樹を尋ねて、上下するに礙無し。故に如意水と名くるを明す。五に其聲微妙より下諸佛相好者に至る已來は、正しく水に不可思議の徳有るを明す。即ち其有二り。一には寶水、華の間に流注して微波相觸るるに、即ち妙聲を出して聲の中に皆妙法を説くを明し、二には寶水、岸に上りて樹の枝條華葉等々を尋ねて、或は上り或は下る中間に相觸るるに、皆妙聲を出して、聲の中に皆妙法を説く。或は衆生の苦の事を説いて、菩薩の大悲を覺動して勸めて他を引せしめ、或は人天等の法を説き、或は二乘等の法を説き、或は地前地上等の法を説き、或は佛地三身等の法を説くを明す。六に如意珠王より下念佛法僧に至る已來は、正しく摩尼に多く徳有るを明す。即ち其四有り。一には珠玉の内より金光を出すことを明し、二には光化して百寶の鳥と作ることを明し、三には鳥聲哀雅にして、天の樂を以て比方すること無しを明す。四には寶鳥、音を連ねて、同聲に念佛法僧を讚歎することを明す。然るに佛は是れ衆生無上の大師なり。罪を除いて、正に向はしむ。法は是れ衆生無上の良藥なり。能く煩惱の毒病を斷じて、法身清淨ならしむ。僧は是れ衆生の無上の福田なり。但

【四事】 供養に用ふる四種のもの、衣服、飲食、散華、焼香。

【六】 寶樓觀を明す。

心を四事傾け、疲勞を憚からざらしむれば、五乗の依果。自然に念に應じて、所須而も至る。其寶珠前には八味の水を生じ、後には種種の金光を出す。直に闇を破し、昏を除くのみならず、到る處に能く佛事を施す。七に是爲より下は總じて結す。上來七句の不同有り、と雖も廣く寶池觀を明し竟んぬ。

【六】 六に寶樓觀の中に就て亦先づ擧げ次に辯じ後に結す。即ち其十一有り。初に衆寶國土と言ふは、即ち是れ總じて觀の名を擧げて、前を牒し後を生ず。此れ淨土に寶流有りて灌注すと雖も、若し寶樓富麗無ければ亦未だ精と爲らず。此を爲して依報の莊嚴種種に圓備するを明す。二に一一界上と言ふは、正しく寶樓の住處を明す、地界彼國に遍すれば樓も亦窮無し。三に有五百億と言ふは、正しく其數を顯す、一界の上に既に然り、彼國に遍滿して亦皆是の如し、應に知るべし。四に其樓閣中より下作天伎樂に至る已來は、正しく閣内の莊嚴を明す。五に又有樂器より下不鼓自鳴に至る已來は、正しく樓外の莊嚴を明す。寶樂空中飛んで聲法響を流す。晝夜六時に天の寶幢の如く思無くして自の事を成す。六に此衆音中より下念比丘僧に至る已來は、正しく樂識無しと雖も即ち說法の能有るを明す。七に此想成じより下寶池に至る已來は、正しく觀成の相を顯すを明す。此れ心を專にして境に住し、寶樓を見んと怖うて、念を刻して移らざれば、上より莊嚴總じて現するを明す。八に是爲より下は總じて結す。九に若見此者よりは前の觀の相を牒して後の利益を生ず。十に除無量より上生彼國に至る已來は、正しく法に依りて觀察すれば、障を除く

## 【七】 華座觀を明

こと多劫なり。身器清淨にして佛の本心に應ひ、身を捨てて他性に必ず往くこと疑ひ無きを明す。十一に作是觀者より下邪觀に至る已來は、觀の邪正の相を辯ず。上來十一句の不同有りと雖も、廣く寶樓觀を明し竟ぬ。

【七】 七に華座觀の中に就て亦先づ擧げ次に辯じ後に結す。即ち其十九有り。一に佛告阿難より下除苦惱法に至る已來は、正しく勅聽許説を明す。即ち其三有り。一には二人に告命するを明し。二には勅聽して之をして諦に受け、正念に修行せしむると明し、三には佛爲に華座の觀法を説きたまふ。但能く心を住して緣念すれば、罪苦除くことを得るを明す。二に汝等憶持より下解説に至る已來は、正しく流通を勧發するを明す。此れ觀法深奥して、急に常没を救ふ。衆生の妄愛迷心にして、六道に漂流す。汝此觀を持ち處に觀修して普く知聞して、同じく解脫に昇ることを得しむるを明す。三に説是語時より下不得爲比に至る已來は、正しく娑婆の化主は物の爲の故に、想を西方に住せしめ、安樂の慈尊は情を知りたまふが故に、即ち東域に影臨したまふを明す。斯れ乃ち二尊の許應に異ること無し。直に是れ隱顯殊なること有り。正しく器朴の類萬差なるに由りて、互に郢匠たらしむるを致す。説是語時と言ふは、正しく此意の中に就て、即ち其七有ることを明す。一には二人は告勸する時を明し、二には彌陀聲に應じて即ち現じて、往生を證得するを明し、三には彌陀、空に在して立ちたまふことは、但使心を廻し、正念にして我國に生ぜんと願すれば、立どころに即ち生ずることを得しむるを明す。問うて曰はく、『佛徳

【八苦】生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦。罪業にしばらくすること。

尊高なり輒然として輕舉したまふべからず。既に能く本願を捨てずして、來りて大悲に應ぜば、何が故に端坐して機に赴かざる。答へて曰はく、「此れ如來別に密意有るを明す。但以れば娑婆は苦界なり、雜惡同じく居して八苦相燒き、動すれば違返を成ず。詐り親んで笑を含み六賊常に隨ひ三惡の火坑臨臨として入りなんと欲す。若し足を擧げて以て迷ひを救はずんば業繫の牢、何に由りてか勉るるを得ん。斯義の爲の故に立據して即ち行いて端坐して、以て機に起くに及ばず。四には觀音勢至、以て侍者として餘衆無きを表するを明す。五には三尊身心圓淨にして光明踰盛なることを明す。六には佛身の光明朗にして十方を照す。垢障の凡夫、何ぞ能く具に觀んといふことを明す。七には佛身無漏なれば光も亦同じく然なり。豈有漏の天金を將て之に比方せんやといふことを明す。四に時韋提希見無量より下、作禮に至る已來は、正しく韋提は實に是れ垢凡の女質なれば、言ふべきに足らざれども、聖力冥に加するを以て、彼佛現じたまふ時、稽首するを蒙るを得るを明す。斯れ乃ち序には、淨國に臨んで喜歡して以て自ら勝ること無し。今は乃ち正しく彌陀を觀たてまつりて、更に益心開けて忍を悟る。五に白佛言より下、及二菩薩に至る已來は、正しく夫人、佛恩を領荷して、物の爲に疑を陳じて、後の問を生ずるを明す。此れ夫人の意とは佛今現に在せば尊の加念を蒙りて、彌陀を觀たてまつるを得たり。佛滅後の衆生は、云何が見たてまつるべきやといふことを明す。六に未來衆生より下、及二菩薩に至る已來は、其夫人物の爲に請を置いて、已に同じく見しめんといふを明す。七に



【惑障】四障の一、衆生が貪欲、瞋恚、愚癡等の惑によりて心性を穢し、正道を障礙すること

佛告韋提より下、當起想念に至る已來は正しく總じて告げ、説を許すの言を明す。問うて曰はく、「夫人の請を置すは、已に通じて生の爲にす。如來の酬答に至るに及んで、但韋提のみ指して生に通ぜざるや。」答へて曰はく、「佛身、化に臨んで法を説いて以て機に逗す。請せざるすら尙自ら普く弘む。何ぞ別して指すことを論じて等く備へざらん。但、文略せるを以ての故に兼て之が爲にすること無し、心必ず有り。」八に七寶地上より下、華想に至る已來は正しく觀の方便を教ふるを明す。問うて曰はく、「衆生盲闇にして、想に逐ひて勞を増す。日に對するに冥きこと夜遊の若し。遠く淨境を標す、何に由りてか悉にすべき。」答へて曰はく、「若し衆生の惑障動念に望めば徒に自から疲勞しなん。仰いで聖力の遙に加するに憑めば、所觀をして皆見しむることを致す。」云何が作法して心を任して見るを得しむるや。作法せんと欲せば、諸の行者等先づ佛像の前に於て、心を至して懺悔して所造の罪を發露し、極めて慚愧を生じ悲泣して涙を流すべし。悔過既に竟りて、又心口に釋迦佛、十方恆沙等の佛を請じ、亦彼彌陀の本願を念じて言へ。弟子某甲等、生盲にして罪重く障隔處深し。願くば佛の慈悲攝受護念し指授開悟せしめたまへ。所觀の境願くば成就することを得ん。今願に身を捨てて仰いで彌陀に屬す。見ると見ざるも皆是れ佛恩の力なりと。此語を道ひ已りて更に復至心に懺悔し竟已んぬ。即ち靜處に向うて面を西方に向ひ、正坐踟躕すること一の前法の同じ。既に心を住し已らば、徐徐として心を轉じて彼寶地の雜色、分明なるを想へ。初めて想はんには、多境を亂想するを得ざれ。即

ち定を得難し、唯方寸一尺等を觀ぜよ。或は一日二日三口、或は四五六七日、或は一月一年二三年等、日夜を問ふ無く、行住坐臥に身口意業常に定と合せよ。唯萬事俱に捨てて由し失意聾盲癡人の如くなれば、此定必ず即ち得易し。若し是の如くならざれば、三業縁に隨うて轉じ、定想波に逐うて飛ぶ。縱ひ千年の壽を盡すとも、法眼未だ曾て開けじ。若し心に定を得る時は或は先づ明相現する有り。或は先づ寶地等の種種に分明なる不思議の者を見るべし。二種の見有り。一には想見猶し知覺有るが故に、淨境を見ると雖も未だ多く明了ならず。二には若し内外の覺滅して即ち正受三昧に入れば、見る所の淨境即ち想見に非ず、比較とするを得んや。九に令其蓮華より下八萬四千光に至る已來は、正しく寶華に種種の莊嚴有るを明す。即ち其三有り。一には一一の華葉、衆寶の色を備ふるを明し、二には一一の葉に衆多の寶脈有るを明し、三には一一の脈に衆多の光色有るを明す。此れ行者をして、心を住し一一に之を想はしめて、悉く心眼をして見ることを得しむ。既に華葉を見已りなば、次に葉の間の衆寶を想ひ、次に寶多光を出すに、光寶蓋と成るを想ひ、次に華臺臺上の衆寶及び珠網等を想ひ、次に臺上の四柱の寶幢を想ひ、次に幢上の寶幔を想ひ、次に幔の上の寶珠光明雜色にして、虛空に遍滿して、各異相を現ずることを想へ。是の如く次第に一一に心を住して捨てざれば、久しからざるの間に即ち定心を得。既に定心を得れば彼諸の莊嚴一切顯現す。應に知るべし。十に了了より下は觀成の相を辯す。十一に華葉小者より下、遍覆地上に至る已來は、正しく葉葉に種種の莊嚴有るを

【釋迦毘楞伽】 明淨提のあらゆる寶を一にして比較するも威華寶に及ばず。その威華寶を四天下に充滿せしめて比較するまゝ、この釋迦毘楞伽寶に及ばずといふ。

明す。即ち其六有り。一には華葉の大小を明し、二には華葉の多少を明し、三には葉の間  
の珠の映する多少を明し、四には珠に千光有るを明し、五には一一の珠の光變じて寶蓋と  
成るを明し、六には寶蓋上虚空を照し、下寶地を覆ふを明す。十二に釋迦毘楞伽より下以  
爲交飾に至る已來は、正しく臺上の莊嚴の相を明す。十三に於其臺上より下妙寶珠以爲映飾  
に至る已來は、正しく幢上の莊嚴の相を明す。即ち其四有り。一には臺上に自ら四幢有る  
を明し、二には幢の體量の大小を明し、三には幢上に自ら寶幢有りて、狀天宮に似たる  
を明す、四には幢上に自ら衆多の寶珠有りて、輝光映飾するを明す。十四に一一寶珠よ  
り下施作佛事に至る已來は、正しく珠光に不思議の徳用の相有るを明す。即ち其九有り。一  
には一一の珠に、多くの光有るを明し、二には一一の光、各異色を作すを明し、三には  
一一の光色、寶土に遍するを明し、四には光の至る所の處、各異種の莊嚴を作すを明し、  
五には或は金盞珠網華雲寶樂と作りて、十方に遍滿するを明す。十五に是爲より下は、  
總じて觀名を結す。十六に佛告阿難より下、比丘願力所成に至る已來は、正しく華座  
得成の所由を明す。十七に若欲念彼佛者より下、自見面像に至る已來は、正しく重ねて觀の  
儀を顯して、前の如く次第に心を往して、雜亂するを得ざれといふことを明す。十八に此  
想成者より下、生極樂世界に至る已來は、正しく觀成の相を結するを明す。即ち一の益  
有り。一には除罪の益を明し、二には得生の益を明す。十九に作是觀者より下、名爲邪觀  
に至る已來は、正しく觀の邪正の相を辯するを明す。斯れ乃ち、華は寶地に依り、葉は奇

【八】 像觀を明す

珍を問へ、臺は四幢を登し、光は佛事を施す。上來十九句の不同有りと雖も、廣く華座觀を明し竟んぬ。

【八】 八に像觀の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ後に結す。即ち其十三有り。一に佛告阿難より下、次當想佛に至る已來は、正しく前を結し後を生ずるを明す。所以者何と言ふは是れ其間なり。須らく佛を想ふべき所以は何ん。二に諸佛如來より下、心想中に至る已來は、正しく諸佛の大慈、心に應じて即ち現じたまふを明す。斯勝益有るが故に汝を勸めて之を想はしむ。問うて曰はく、「韋提の上の請には唯彌陀を指す。未審し如來今總じて諸佛を擧げたまふは何の意か有る。」答へて曰はく、「諸佛は三身同じく證し、悲智果圓なる、等齊にして二無し。端身一坐したまひてより影現すること無方なり。意有緣に赴く時、法界に臨むを顯はさんと欲す。法界と言ふは三義有り。一には心遍するが故に法界を解す。二には身遍するが故に法界を解す。三には障礙なきが故に法界を解す。正しく心到るに由るが故に身亦隨うて到る。身は心に隨ふが故に是法界身と言ふ。法界と言ふは是れ所化の境。即ち衆生界なり。身と言ふは是れ能化の身即ち諸佛の身なり。入衆生心想中と言ふは乃ち衆生念を起して諸佛を見たてまつらんと願すれば、佛即ち無礙智を以て知りたまふによつて即ち能く彼想心の中に入りて現じたまふ。但し諸の行者若は想念の中、若は夢定の中に佛を見る者は、即ち斯義を成するなり。三に是故汝等より下從心想生に至る已來は、正しく利益を結勸するを明す。此れ心を標して、佛を想ふを明す。但佛解を作して頂

【無礙智】 佛智のこと、何物にもさへられず、一切の事理を知りつくす智慧なるが故に名づく。



【二十二相】 應身  
佛の身に具ふる三  
十二の相好 是安  
平、千輪、手指纖  
長、手足柔軟、手足  
圓、足跟、足  
趺高好、腦如寶王、  
手過膝、馬腹、身  
體、毛孔生青、身  
身毛上靡、身各、  
臂、肘、七、身、  
面、身、身、  
十、白、  
牙、白、  
子、明、  
味、廣、  
深、眼、  
眼、  
白、  
【八十隨形好】三  
十二相の對、好は  
相の細なるものを  
いふ。即ち相に隨

きより足に至るまで心に想うて捨てず。一一に之を觀じて暫くも休息すること無し。或は頂相を想ひ、或は眉間の白毫、乃至足下千輪の相を想へ。此想を作す時、佛像輪嚴にして相好具足し、了然として現す。乃ち心一一の相を緣するに由るが故に、即ち一一の相現す。心若し緣ぜずんば衆相見るべからず。但自心に相作すれば即ち心に感じて現す。故に是心即是三十二相と言ふ。八十隨形好と言ふは佛相既に現すれば衆好皆隨ふ。此れ正しく如來の想者を教へて具足し觀ぜしむるを明す。是心作佛と言ふは自らの信心に依りて相を緣すれば作の如し。是心是佛と言ふは心能く佛を想へば想到依りて佛身而も現す。即ち是心佛なり。此心を離れて外に更に異佛無ければなり。諸佛正遍知と言ふは、此れ諸佛は圓滿無障礙智を得て、作意と不作意とに常に能く遍く法界の心を知りたまふを明す。但能く想を作せば、即ち汝が心想よりして現したまふこと、生ずるに似如りと。或は行者有りて此一門の義を將て唯識法身の觀と作し、或は自性清淨佛性の觀と作す者は其意甚だ錯れり。絶えて少分も相似たること無し。既に像を想へと言ひて、三十二相を假立せる者の眞如法界の身、豈相有りて緣すべく、身有りて取るべけんや。然るに法身は無色にして眼對を絶す。更に類として方ぶべき無し。故に虚空を取りて以て法身の體に喩ふ。又今此觀門等は唯方を指し相を立てて心を住せしめて境を取らしむ。總て無相離念を明さす。如來は縣に知りたまふ。末代罪濁の凡夫は相を立てて、心を住するすら尙得ること能はず。何に況んや相を離れて事を求めば、衛通無き人の空に居して念を立てんが如似しと。四に是故應

伴せる八十種の好、如來の色身の相好也。

【四威儀】行、住坐、臥の四事。

當より下、三佛陀に至る已來は、正しく前の所益の如く專注すれば必ず成ずるを以て、展轉して相教へ勸めて彼佛を觀ぜしむるを明す。五に想彼佛者よりは前を牒し後を生ず。先當想像と言ふは所觀の境を定む。六に閉日閉目より下、如觀掌中に至る已來は、正しく觀成の相を辯ずるを明す。即ち其四有り。一には身の四威儀、眼の閉合に一の金像を見ること目の前に現するが似く、常に此像を作せといふを明し、二には既に能く像を觀するに像即ち須らく坐處有るべく、即ち前の華座を想ひ、像上に在して坐したまふと想へといふを明し、三には像の坐せるを想見し已らば、心眼即ち開くるを明し、四には心眼既に開けなば、即ち金像及び彼極樂の諸の莊嚴の事を見るに、地上虚空了然として礙り無からんといふを明し、又像を觀する住心の法は、一ら前に説くが如し。頂より一一に之を想うて面眉毫相眼鼻口耳咽喉眉臂手指までにし、又心を抽んで、上に向つて胸腹臍陰脛膝踵是十指千輪等を想へ。一一に之を想うて上より下に向ふを順觀と名け、下の千輪より上に向ふを、逆觀と名く。是の如く逆順に心を住すれば、久しからずして必ず成ずるを得。又佛身及び華座寶地等も必ず須らく上下通觀すべし。然るに十三觀の中に此寶地寶華金像等の觀最も要なり。若し人に教へんと欲はば、即ち此法を教へよ。但此一法成すれば餘觀即ち自然に了す。七に見此より已下は、上の像身觀を結成して、後に二菩薩を生ず。八に復當更作一大蓮華より下、座右華坐に至る已來は、正しく上の三身觀を成じて後の多身觀を生ずるを明す。此二菩薩を觀せんと欲はば、一ら佛を觀する法の如くすべし。九に此想成時よ

【修多羅】梵音、(Sūtra) 契經、直說等と譯す。總て聖教のこと。

【九】眞身觀を明す。

り下遍滿彼國に至る已來は、正しく上の多身觀を結成して、後の說法の相を生ずるを明す。此れ諸の行者等、行住座臥に常に彼國の一切の寶樹一切の寶樓華池等を緣するを明す。若し禮念し、若し觀想して常に此解を作せ。十に此想成時より下、憶持不捨に至る已來は正しく定に因りて極樂の莊嚴を見るを得。又一切の莊嚴皆能く妙法を説くを聞く。既に此を見聞し已らば、恆に持つて失すること莫きを定心を守ると名くるを明す。十一に令與修多羅合より下、見極樂世界に至る已來は、觀の邪正の相を辯ず。十二に是爲より下は總じて結す。十三に作是觀者より下、得念佛三昧に至る已來は、正しく刻念して觀を修すれば、現に利益を蒙むるといふことを明す。斯れ即ち群生障り重くして、眞佛の觀階ひ難し。是を以て大聖哀を垂れて、且く心を形像に注めしむ。上來十三句の不同有りと雖も、廣く像觀を明し竟んぬ。

【九】九に眞身觀の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其十二有り。一に佛告阿難より、下身相光明に至る已來は、正しく苦命して、前の觀を結成して後の眞身の觀を生ずるを明す。二に阿難當知より下、金色に至る已來は、正しく眞佛の身相天金の色に踰えたるを顯すを明す。三に佛身高六十より下、由旬に至る已來は、正しく身量の大小を明す。四に眉間より下、菩薩爲侍者に至る已來は、正しく總じて身相を觀するを明す。即ち其六有り。一には毫相の大小を明し、二には眼相の大小を明し、三には毛孔光の大小を明し、四には圓光の大小を明し、五には化佛の多少を明し、六には侍者の多少を明

五に無量壽佛より下、攝取不捨に至る已來は、止しく身の別相を觀るに、光有緣を益するを明す。即ち其五有り。一には相の多少を明し、二には好の多少を明し、三には光の多少を明し、四には光照の遠近を明し、五には光の所及の處偏に攝益を蒙ることを明す。問うて曰はく、『備に衆行を修するに但能く廻向すれば皆往生を得。何を以てか佛の光普く照すに唯念佛の者のみを攝するは何の意か有る。』答へて曰はく、『此に三義有り。一には親縁を明す。衆生行を起して口常に佛を稱すれば佛即ち之を聞きたまふ。身に常に佛を禮敬すれば佛即ち之を見たまふ。心に常に佛を念すれば佛即ち之を知りたまふ。衆生佛を憶念すれば佛亦衆生を憶念したまふ。彼此の三業相捨離せず、故に親縁と名く。二には近縁を明す。衆生佛を見んと願すれば、佛即ち念に應じて現じて目の前に在す。故に近縁と名く。三には増上縁を明す。衆生稱念すれば即ち多劫の罪を除く。命終らんと欲する時佛聖衆と自ら來りて迎接したまふ。諸の邪業繫能く礙る者無し、故に増上縁と名く。』自餘の衆行は是れ善と名くと雖も、若し念佛に比すれば、全く比較に非ざるなり。是故に諸經の中處處に廣く念佛の功能を讚す。『無量壽經』の四十八願の中の如き、唯專ら彌陀の名號を念じて生を得るを明す。又『彌陀經』の中の如き、又此經の定散の陀の名號を念じて生ずるを得。又十方恆沙の諸佛不虛を證誠したまふ。又此經の定散の文の中に唯專ら名號を念じて生ずることを得るを標す。此例一に非ず。廣く念佛三昧を顯し竟んぬ。六に其光相好より已下は少を結して多を顯す。輒く觀せんと欲せば周悉を爲し



【凡境】 凡夫所住之境界。

【定】 靜慮と譯す。心を專一に止めて散ぜしめし、その境に專注せしむるをいふ。

難し。七に但當憶想より已下は、正しく莊嚴微妙にして凡境に出過す。未だ目の前に證せずと雖も、但當に憶想して心眼をして見しむべしと云ふを明す。八に見此事者より下、攝諸衆生に至る已來は正しく功呈して失せず、觀の益成することを得るを明す。即ち其五有り。一には觀に因りて十方の諸佛を見るを得ることを明し、二には諸佛を見たてまつるを以ての故に、念佛三昧を結成するを明し、三には但一佛を觀するに、即ち一切の佛身を觀るを明し、四には佛身を見るに由るが故に、即ち佛心を見るを明し、五には佛心は慈悲を體と爲し、此平等の大慈を以て、普く一切を攝するを明す。九に作此觀者より下、得無生忍に至る已來は、正しく身を捨てて他世に彼に生ずる益を得るを明す。十に是故智者より下、現前授記に至る已來は、重ねて修觀の利益を結勸するを明す。即ち其五有り。一には能く觀を修する人を簡び出すを明し、二には心を專にして無量諸佛を諦觀するを明し、三には相好衆多なれば、總雜して觀することを得ざれ、唯白毫の一相を觀ぜよ。但白毫を見るを得れば、一切の衆相、自然に現すと云ふことを明し、四には既に彌陀を見たてまつれば、即ち十方の佛を見たてまつるを明し、五には既に諸佛を見たてまつれば、即ち定中に於て、授記を蒙むるを得ることを明す。十一に是爲遍觀より已下は、總じて結す。十一に作此觀より已下は、正しく觀の邪正の相を辯ずるを明す。斯れ乃ち眞形量遠にして毫五山の若し。震響、機に隨うて光有識を活す。含靈をして、歸命し注想して、遺り無ければ、佛の本弘に乗じて、齊しく彼國に臨ましめんと欲す。上來十二句の不同有りと雖も、廣く

【二〇】 觀音觀を明す。

眞身觀を明し竟んぬ。

【二〇】 十に觀音觀の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其十五有り。一に佛告阿難より下、菩薩に至る已來は、正しく前の眞身觀を結成し、後の菩薩觀を生ずるを明す。二に此菩薩身長より下、皆於中現に至る已來は、正しく總じて身相を標するを明す。即ち其六有り。一には身量の大小を明し、三には身色佛と同じからざるを明し、三には肉髻佛の螺髻と同じからざるを明し、四には圓光の大小を明し、五には化佛侍者の多少を明し、六に身光に普く五道の衆生を現するを明す。三に頂上毘楞伽より下、二十五山旬に至る已來は、正しく天冠の内の化佛の殊異なるを明す。四に觀音より已下は、正しく面色身色と同じからざるを明す。五に眉間より下、蓮華色に至る已來は、正しく毫光轉變して十方に遍滿し化侍彌多くして、更に紅蓮の色に比するを明す。即ち其五有り。一には毫相七寶の色を作すを明し、二には毫光の多少を明し、三には光に化佛有る多少を明し、四には侍者の多少を明し、五には化侍變現して、十方に遍滿するを明す。六に有八十億光明より下、莊嚴事に至る已來は、正しく身服の光瓔、衆寶の作に非ざるを明す。即ち其六有り。一には手の掌に雜蓮の色を作すことを明し、二には一一の指の端に八萬の印文有ることを明し、三には一一の文に八萬餘の光有ることを明し、五には光體柔軟にして等しく一切を照すことを明し、六には此寶光の手を以て有縁を接引することを明す。八に擧足時より下、莫不彌滿に至る已來は、正しく足に徳用の相有るを明す。九に其

【一】 勢至觀を明

餘身相より已下は、指して佛に同ず。十に唯頂上より下、不及世尊に至る已來は、正しく師徒位、別にして果願未だ圓かならざれば、二相をして虧くること有らしむるを致す、不足の地に居ることを表はすといふを明す。十一に是爲より下は、總じて結す。十二に佛告阿難より下、當作是觀に至る已來は、正しく重ねて前の文を結して其後の益を生ずるを明す。十三に作是觀者より下、何況諦觀に至る已來は、正しく觀の利益を勸むるを明す。十四に若有欲觀觀音より下、如觀掌中に至る已來は、正しく重ねて觀の儀を顯し、物を勸め心に傾けて兩益に沾さしむるを明す。十五に作是觀より已下は、正しく觀の邪正の相を辯ずるを明す。斯れ乃ち觀音願重くして、十方に影現し、寶手輝を停めて、機に隨うて引接す。上來十五句の不同有りと雖も、廣く觀音觀を明し竟んぬ。

【二】 十一に勢至觀の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其十三有り。

一に次觀大勢至より已下は、總じて觀の名を擧ぐ。二に此菩薩身量大小より已下は、次に觀の相を辯す。則ち其五有り。一には身量觀音に等類するを明し、二には身色觀音に等類するを明し、三には面相觀音に等類するを明し、四には身光相好觀音に等類するを明し、五には毫相光を舒べて轉變すること、觀音に等類するを明す。三に圓光面各百二十五由旬より已下は、正しく圓光等觀音に同じからざるの相を明す。則ち其四有り。一には圓光の大小を明し、二には光照の遠近を明し、三には化佛の多少を明し、四には化佛の侍者の多少を明す。四に擧身光明より下、名大勢至に至る已來は、正しく身光遠く備へ

て有縁を照益し、等しく他方に及ぶまで、皆紫金の色を作すを明す。即ち其八有り。一には身光の總別の不同なるを明し、二には光照の遠近を明し、三には光の觸るる所の處、皆紫金の色と作すを明し、四に但勢至と宿業縁有る者のみ、即ち此光を視觸することを得るを明し、五には但一毛孔の光を見れば、即ち能く多く諸佛の淨妙の身光を見ることを明す。此れ即ち少を擧げて、以て多益を顯して之を行する者をして、憍心渴仰して入觀せしめて以て之を證せしめんと欲す。六には光に依りて、以て名を立つることを明す。七には光の體用を明す。即ち無漏を體と爲す。故に智慧光と名く。又能く十方三惡の苦を除息するを無上力と名く。即ち爲れ用なり。八には大勢至と名くるは、此れ即ち德に依て名を立つることを明す。五に此菩薩天冠より下、皆於中現に至る已來は、正しく天冠の莊嚴の相、觀音と同じからざるを明す、即ち其四有り。一には冠上の寶華の多少を明し、二には一一の華上寶臺の多少を明し、三には一一の臺の中に十方の諸佛の淨土を映現するを明す。四には他方の土、現すれども彼此都て増減無きことを明す。六に頂上肉髻より下、普現佛事に至る已來は正しく肉髻の寶瓶の相を明す。七に餘諸身相より已下は指して觀音に同す。八に此菩薩行時より下、如極樂世界に至る已來は、正しく行の時觀音と同じからざる相を明す。即ち其四有り。一には行不同の相を明し、二には震動遠近の相を明し、三には所震動の處に華現すること多きを明し、四には所現の華高くして且顯はれ、多諸の瑩飾以て極樂の莊嚴に類するを明す、九に此菩薩坐時より下、慶吉衆生に至る已來は、正しく坐する



【地前】五十二位のうち初地以前の位のこと。  
【地上】五十二位のうち初地以後の位をいふ。

【分段生滅】三界生死の果報のこと

時觀音に同じからざる相を明す。即ち其七有り。一には坐する相を明し、二には先づ木國を動する相を明し、三には次に他方を動する遠近の相を明し、四には下上の佛刹を動搖する多少の相を明し、五には彌陀觀音等の分身、雲集したまふ相を明し、六には空に臨んで側塞して、皆寶蓋に坐するを明し、七には分身の説法、各所宜に應ずるを明す。問うて曰はく、『彌陀經』に云はく、「彼國の衆生諸苦有ること無く但諸の樂のみを受く、故に極樂と名く」と。何が故ぞ。此經に分身法を説いて乃ち苦を度すと云ふは、何の意か有る。答へて曰はく、『今苦樂と言ふは二種有り。一には三界の中の苦樂。二には淨土の中の苦樂なり。三界の苦樂と言ふは苦は則ち三塗八苦等。樂は則ち人天五欲放逸繫縛等の樂なり。是れ樂と言ふと雖も然も是れ大苦なり。必竟じて一念眞實の樂有ること無し。淨土の苦樂と言ふは苦は則ち地前を地上に望めて苦と爲し、地上を地前に望めて樂と爲し、下智證を上智證に望めて苦と爲し、上智證を下智證に望めて樂と爲す。此例一を擧ぐるに知るべし。今度苦樂生と言ふは但下位を進めて上位に昇らしめ、下證を轉じて上證を得しむる爲なり。本の所求に稱ふを即ち名けて樂と爲す、故に度苦と云ふなり。若し然らずば淨土の中の一切の聖人は皆無漏を以て體と爲し大悲を用と爲す。畢竟常住にして分段の生滅を離れたり。更に何の義に就てか名けて苦と爲さん。十に作此觀者より下、十一觀に至る已來は、正しく觀の邪正を辯じ總じて分齊を結するを明す。十一に觀此菩薩者より已下は、正しく修觀の利益、罪を除くこと多劫なるを明す。十二に作此觀者より下、淨妙國土に至

【三】 普觀を明す

る已來は、正しく總じて前の文を結し、重ねて後の益を生ずるを明す。十三に此觀成已より下は、正しく總じて二身を牒して、觀成の相を辯ずるを明す。斯れ乃ち勢至威高くて坐するに他國を搖し、能く分身をして雲集して法を演べて生を利し、永く胞胎を絶ちて常に法界に遊ばしむ。上來十三句の不同有りと雖も、廣く勢至觀を解し竟んぬ。

【二】 十二に普觀の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其六有り。一に見此事時より已下は、正しく前を牒し、後を生ずるを明す。二に當起自心より下、皆演妙法に至る已來は、正しく心を凝し、觀に入りて、即ち常に自の往生の想を作すを明す。即ち其九有り。一には自生の想を明し、二には西に向ふ想を明し、三には華に坐する想を明し、四には華の合する想を明し、五には華の聞く想を明し、六には寶光來りて身を照す想を明し、七に既に光の照すことを蒙りて、眼聞く想を作すことを明し、八に眼目既に開きて、佛菩薩を見たてまつる想を作すことを明し、九には法を聞く想を明す。三に與十二部經合より下不失に至る已來は正しく定散に遺ること無く、心を守りて常に憶することを明す。一には則ち觀心明淨なり。二には則ち諸惡生せず、内に法樂と相應し、外に則ち三邪の障り無きに由りてなり。四に見此事已より下は觀盛の益を明す。五に是爲より下は總結す。六に無量壽より下、常來至此行人之所に至る已來は、正しく重ねて能觀の人を擧げ、即ち彌陀等の三身の護念の益を蒙ることを明す。斯れ乃ち群生、念を注めて西方の依正二嚴を見んと願すれば了了に常に眼に見るが如し。上來六句の不同有りと雖も廣く普

【彌陀等の三身】  
彌陀、觀音、勢至

【三】 雜想觀を明す。

觀を解し竟んぬ。

【三】 十三に雜想觀の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其十一有り。一に佛告阿難より已下は、正しく告命し、結観して、後を生ずるを明す。二に先當觀於一丈六より已下は、正しく像を觀じて以て眞を表し、水を想うて、以て地を表するを明す。此は是如來、諸の衆生をして境を易へ心を轉じて觀に入らしめたまふ。或は地水の華の上に在し、或は寶宮寶閣の内に在し、或は寶林寶樹の下に在し、或は寶臺寶殿の中に在し、或は虚空寶雲華蓋の内に在す。是の如き等の處に一一に心を住せしめて之を想うて、皆化佛の想を作さしめ、機境相稱うて成ずることを得易からしめんが爲の故なり。三に如先所説より下非心力所及に至る已來は、正しく境大に心小さくして卒に成就し難ければ、聖意をして悲傷して勸めて小を觀ぜしむるを致すことを明す。四に然彼如來より下必得成就に至る已來は、正しく凡心は狭小に聖量は彌寛くして、想を注むるに由無し、恐らくは成就し難からんことを。斯れ乃ち小を以ての故に成じ難きに非ず、大に由るが故に現ぜざるに非ず。直是れ彌陀願重くして想者をして皆成ぜしむるを致すことを明す。五に但想佛像より下具足身相に至る已來は正しく比較して勝るを顯すことを明す。像を想ふすら尙、自ら福を得ること無量なり。何に況んや眞佛を觀ぜし者の益を得る功更に甚し。六に阿彌陀より下、丈六八尺に至る已來は、正しく能く所觀の佛像を觀するに身に大小有りりと雖も、明かに皆是れ眞なるを明す。即ち其三有り。一には彌陀の身通無礙にして意に

【五眼】肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼なり。  
【六通】六種の神通。天眼、天耳、他心、宿命、神足、漏盡なり。  
【三輪】佛教を三輪に分つ、轉法輪、照法輪、持法輪。

【一四】 總結を述べ

隨うて遍周することを明す。如意と言ふは二種有り。一には衆生の意の如し。彼心念に隨うて皆應じて之を度す。二には彌陀の意の如し。五眼圓に照し六通自在にして機の度すべき者を觀じて、一念の中に前無く後無く身心等しく起き三輪開悟して各の益すること同じからざるなり。二には或は大身を現じ或は小身を現ずることを明し、三には身量に大小有りと雖も皆眞金の色を作すことを明す。此れ則ち其邪正を定む。七に所現之形より已下は、正しく身は大小殊有りと雖も、光相即ち眞と異ること無きを明す。八に觀世音菩薩より已下は、正しく指して前の觀に同ずるを明す。佛大なれば侍者亦大なり、佛小なれば侍者も亦小なり。九に衆生但觀首相より已下は、正しく勸めて二別なるを觀せしむることを明す。云何が二別なる。觀音の頭首上には一立化佛有す。勢至の頭首の上には一の寶瓶有り。十に此二菩薩より已下は、正しく彌陀觀音勢至等しく、宿願縁重く、誓同じくして、惡を捨てて等しく菩提に至るまで、影響の如く相隨ひて、遊方化益したまふことを明す。十一に是爲より下は總じて結す。上來十一句の不同有りと雖も廣く雜想觀を解し竟んぬ。

上日觀より下雜想觀に至る已來は、總じて世尊前の韋提第四の請に、教我思惟正受と言へる兩句を答へたまふことを明す。

【一四】 總じて讀じて云はく、初に日觀を教へて昏闇を除かしめ水を想うて氷と成して内心を淨む。他下の金幢相映發し地上の莊嚴億萬重、寶雲寶蓋空に臨んで轉じ、人天の音樂



互に相尋げり。寶樹瓔を垂れて雜菜に間り、池徳水を流して華の中に注ぐ。寶樓閣皆相接し、光相照して等しくして蔭無し。三華獨廻にして衆座を超え、四幢纒を承けて網珠羅なる。稟識の心迷ひて由未だ曉らざれば、心を住して像を觀じて靜に彼に坐せしむ。一念心開けて眞佛を見ば、身光相好轉た彌多し。救苦の觀音法界を緣じて、時として變じて娑婆に入らずと言ふこと無し。勢至の威光能く震動し、緣に隨うて照攝して、彌陀に曾せしむ。歸去來極樂は身を安んずるに實に是れ精なり。正念に西に歸つて華含むと想へ。佛と莊嚴とを見るに説法の聲有り。復衆生有りて心に惑を帶す。眞の上境を緣するに恐らくは成じ難からんことを、如來をして漸觀を開せしむることを致す。華池丈六等の金形、變現の靈儀大小有りと雖も物の時宜に應じて有情を度す。普く同生の知識等を勸む、專心に念佛して西に向うて傾け。」

又前の請の中に就て、初め口觀より下華座觀に至る已來は、總じて依報を明し、二に像觀より下雜想觀に至る已來は、總じて正報を明す。上來依正二報の不同有りと雖も、廣く定善一門の義を明し竟んぬ。

四帖の疏の第四  
觀無量壽經の正宗  
分十六觀中の散善  
三分及び得益分流  
通分を解釋したる  
ものなり。

【一】三福に就て  
差別の意義を明す

觀經 正宗 分散善義 卷第四

沙門善導集記

【一】此より已下は、次に三輩散善一門の義を解す。此義の中に就て即ち其二有り。一には三福を明して以て正因と爲し、二には九品を明して以て正行と爲す。今三福と言ふは第一の福は即ち是れ世俗の善根なり。會より來、未だ佛法を聞かず。但自ら孝養仁義禮智信を行す、故に世俗の善と名く。第二の福は此を戒善と名く。此戒の中に就て即ち人天聲聞菩薩等の戒有り。其中に或は具受と不具受有り、或は具持と不具持有り。但能く廻向すれば盡く往生を得。第三の福は名けて行善と爲す。此は是れ大乘心を發せば凡夫自ら能く行を行じ、兼て有縁を勧めて惡を捨て心を持たしめて廻して淨土に生ず。又此三福の中に就て或は一人有り、單に世福を行じ廻して亦生ずるを得。或は一人有り、單に戒福を行じて廻して亦生ずるを得。或は一人有り、單に行福を行じて廻して亦生ずるを得。或は一人有り、具に三福を行じて廻して亦生ずるを得。或は人等有りて、三福俱に行せざるをば、即ち十惡邪見闍提の人と名く。九品と言ふは、文に至りて當に辨すべ

【二】上輩三品の意義を明す。

し。應に知るべし。今略して三福の差別の義意を料簡し竟んぬ。

【二】十四に上輩觀の行善の文の前に就て、總じて料簡するに、即ち十一門と爲す。一には總じて告命を明し。二には其位を辯定す。三には總じて有縁の類を擧ぐ。四には三心を辯定して以て正因と爲す。五には正しく機の堪と不堪とを簡ぶことを明し。六には正しく受法の不同を明し。七には正しく修業の時節延促に異有るを明し。八には所修の行を廻して彌陀佛國に生ぜんと願するを明し。九には命終の時に臨んで、聖來りて迎接したまふ不同と去時の遲疾とを明し。十には彼に到りて華開く遲疾の不同を明し。十一には華開已後の得益に異有ることを明す。今此十一門の義は九品の文に約對するに、一一の品の中に就て皆此十一有り。即ち一百番の義と爲す。又此十一門の義は上輩の文の前に就て總じて料簡するに亦得たり。或は中下輩の文の前に就て各料簡するに亦得たり。又此義若し文を以て來し勘ふれば即ち具と不具と有り。隱顯有り且雖も、若し其道理に據らば悉く皆有るべし。此因縁の爲の故に廣く開顯して出すことを須ふ。依りて行ぜん者をして解り易く、識り易からしめんと欲す。上來十一門の不同有りと雖も、廣く上輩三品の義意を料簡し竟んぬ。

【三】上輩中の上品上生を明す。

【三】次に先づ上品上生の位の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其十二有り。一に佛告阿難より已下は、則ち雙べて二意を標す。一には告命を明し、二には其位を辯定するを明す。此れ即ち大乘を修學する上善の凡夫人なり。三に若有衆生より

【四】三心正因を有す。第一に至誠心に就いて述ぶ。

【三業】身、口、意の三業。

便往生に至る已來は、正しく總じて有生の類を擧ぐるを明す。即ち其四有り。一には能信の人を明し、二には往生を求願することを明し。三には發心の多少を明し、四には得生の益を明す。

【四】四に何等爲三より下必生彼國に至る已來は、正しく三心を辯定して以て正因と爲すことを明す。即ち其二有り。一には世尊機に隨ひて益を顯すこと、意密にして、知り難し。佛の自ら問うて自ら徴したまふに非ずば解るを得るに由無きを明し、二には如來還りて自ら前に三心の數を答へたまふを明す。經に云はく、「一には至誠心なり。『至は眞なり、誠は實なり。一切衆生の身口意業に修する所の解行必ず眞實心の中に作すべきを明さんと欲す。外に賢善精進の相を現じ内に虚假を濼くを得ざれ。貪瞋邪偽對詐百端にして惡性侵め難く事は蛇蝎に同じ。三業を起すと雖も名けて雜毒の善と爲す。亦虚假の行と名く。眞實の業と名けざるなり。若し此の如きの安心起行を作す者、縱使身心を苦勵して日夜十二時急に走り急に作すこと頭燃を灸ふが如くする者は衆て雜毒の善と名く。此雜毒の行を廻して彼佛の淨土に生ずるを求めんと欲する者は此れ必ず不可なり。何を以ての故に。正しく彼阿彌陀佛因中に菩薩の行を行じたまふ時、乃至一念一利那も三業に修する所皆是れ眞實心の中に作し、凡そ施爲趣求したまふ所亦皆眞實なるに由つてなり。又眞實に二種有り。一には自利眞實。二には他利眞實なり。自利眞實と言ふは復二種有り。一には眞實心の中に自他の諸惡及び穢國等を制捨して行住坐臥に一切の菩薩の諸惡を制捨するに同く我も亦



【四事】 供養に用ふる四種のもの、房舎、衣服、飲食、散華燒香のこと。

【五】 第二に深心に就いて述ぶ。

是の如くならんと想ふなり。二には眞實心の中に自他凡聖等の善を勤修して、眞實心の中に口業に、彼阿彌陀佛及び依正二報を讚歎す。又眞實心の中に口業に三界六道等の自他の依正二報の苦惡の事を毀厭し、亦一切衆生の三業所爲の善を讚歎す。若し善業に非ざるをば敬うて而も之を遠ざけ、亦隨喜せざるなり。又眞實心の中の身業に合掌し禮敬して、四事等を以て彼阿彌陀佛及び依正二報を供養す。又眞實心の中の身業に此生死三界等の自他の依正二報を輕慢し厭捨す。又眞實心の中の意業に彼阿彌陀佛及び依正二報を思想し觀察し憶念して、目の前に現するが如くす。又眞實心の中の意業に此生死三界等の自他の依正二報を輕賤し厭捨し。不善の三業は必ず眞實心の中に捨つべく、又若し善の三業を起さば必ず眞實心の中に作すべく、内外明闇を簡はず皆眞實なるを須ふ。故に至誠心と名く。

【五】 『二には深心なり。深心と言ふは即ち是れ深く信ずるの心なり。亦二種有り。一には決定して深く信ず。自身は現に是れ罪惡生死の凡夫曠劫より已來常に没し常に流轉して出離の縁有ること無しとす。二には決定して深く信ず、彼阿彌陀佛の四十八願は衆生を攝受し疑無く慮無く彼願力に乗じて定めて往生を得と。又決定して深く信ず、釋迦佛此觀經の三福九品定散二善を説きて彼佛の依正二報を證讚して人をして欣慕せしむることを。又決定して深く信ず、『彌陀經』の中に十方恆沙の諸佛、一切の凡夫決定して生ずるを得るを證勸したまふことを。又深信とは、仰ぎ願くは一切の行者等一心に唯佛語を信じて身命を顧みず。決定して依行せよ、佛の捨てしめたまふ者は即ち捨て、佛の行ぜしめたまふ者

【了教】了義の對す。眞實の義を對明了に詮顯する教

は即ち行じ、佛の去らしめたまふ處をば即ち去れ、是を佛教に隨順し佛意に隨順すと名く。是を佛願に隨順すと名け、是を眞の佛弟子と名く。又一切の行者但能く此經に依りて深く信する行者は必ず衆生を誤たざるなり。何を以ての故に。佛は是れ満足大悲の人なるが故に。實語したまふが故に佛を除いて已還は知行未だ滿たず。其れ學地に在りて正習二障有りて未だ除かず。果願未だ圓かならず。此等の凡聖は縱使諸佛の意を測量すれども未だ決了すること能はず。平章有りて雖も要す佛證を請うて定と爲すべし。若し佛意に稱へば即ち印可して如是如是と言ふ。若し佛意に可はざれば、即ち汝等所説是義不如是と言ふ。印せざる者は即ち無記無利益の語に同じ。佛の印可したまふ者は即ち佛の正教に隨順す。若し佛の所有の言説は即ち是れ正教、正義、正行、正解、正業、正智なり。若は多若は少衆て菩薩人天等に問うて其是非を定めず。若し佛の所説は即ち是れ了教なり。菩薩等の説は盡く不了教と名くるなり。應に知るべし。是故に今の時、仰いで勸む、一切の有縁の往生人等、唯深く佛語を信じて專注奉行すべし。菩薩等の不相應の教を信用して、以て疑礙を爲し惑を抱いて自ら迷ひて往生の大益を廢失すべからず。又深心は深信なりとは決定して自心を建立して教に順じて修行し永く疑錯を除いて一切の別解別行異學異見異執に退失傾動せられざるなり。問うて曰はく、凡夫智淺くして惑障の處深し。若し解行不同的人多く經論を引いて來して相妨げて難證して、一切罪障の凡夫、往生するを得ずと言はんに逢はば、云何が彼難を對治して信心を成就し、決定して直に進んで怯退を生ぜざらんや。

答へて曰はく、「若し人有りて、多く經論を引いて證して生ぜずと云はば、行者即ち報へて云へ。仁者經論を將て來し證して生ぜずと道ふと雖も、我意の如きは決定して汝が破を受けず。何を以ての故に、然るに我亦是れ彼諸經論を信せざるにはあらず。盡く皆仰いで信ず。然れども佛、彼經を説く時は、處別、時別、對機別、利益別なり。又彼經を説きたまふ時は即ち觀經、彌陀經、等を説きたまふ時に非ず。然るに佛の説教機に備はる時亦同じからず。彼は即ち通じて人天菩薩の解行を説き、今觀經の定散二善を説きたまふは唯韋提及び佛滅後の五濁五苦等の一切の凡夫の爲に證して生ずるを得と言へり。此因縁に爲りて我今一心に此佛教に依つて決定して奉行す。縱使汝等百千萬億有りて生ぜずと道ふとも、唯我往生の信心を増長し成就せんと。又行者更に向うて説いて言へ、仁者善く聽け。我今汝が爲に更に決定の信の相を説かん。縱使地前の菩薩羅漢辟支等若は一若は多乃至十方に遍滿して皆經論を引いて證して生ぜずと言ふも我亦未だ一念の疑心を起さず。唯我清淨の信心を増長し成就せん。何を以ての故に。佛語は決定成就の了義一切の爲に破壊せられざるに由るが故に。又行者善く聽け、縱使初地已上十地已來若は一若は多乃至十方に遍滿して。異口同音に皆釋迦佛彌陀を指讀し三界六道を毀皆し衆生を勸勵して、專心に念佛及び餘善を修すれば、此一身を畢へて後、必定して彼國に生ぜば此れ必ず虛妄なり。依信すべからず。我此等の所説を聞くと雖も亦一念の疑心を生ぜず。唯我決定して上上の信心を増長し成就せん。何を以ての故に。乃ち佛語は眞實決了の義なるに由るが故に。佛は是れ實

【同體の大悲】佛が衆生の苦を見てそのまま己が苦となしてあはれみ給ふこと。

知實解實見實證にして、是れ疑惑の心の中、の語に非ざるが故に。又一切菩薩の異見異解に破壊せられず。若し實に是れ菩薩ならば衆て佛教に違せず。又此事を置く行者當に知るべし。縱使化佛報佛若し一若し多乃至十方に遍滿して各各に光を輝し舌を吐いて、遍く十方に覆ひて、一一に説て釋迦の所説相讃めて一切の凡夫を勸發して、専心に念佛し及び餘善を修して廻願すれば、彼淨土に生ずるを得とせば此は是れ虚妄なり。定めて此事無しと言はん。我是等の諸佛の所説を聞くと雖も、畢竟じて一念疑退の心を起して彼佛國に生ずるを得ざるを畏れず。何を以ての故に。一佛は一切佛なり。所有の知見解行證悟果位大悲等同にして少しの差別無し。是故に一佛の制したまふ所は、即ち一切の佛同じく制したまふ。前の佛殺生十惡等の罪を制斷し畢竟じて犯せず行ぜざるをば、即ち十善十行隨順六度の義に名くるが如し。若し後佛出世する有らんに、豈前の十善を改め十惡を行ぜしむべけんや。此道理を以て推驗するに、明かに知りぬ、諸佛は言行相違失せざることを。縱令釋迦一切の凡夫を指へ、勸めて此一身を盡して專心專修して命捨てて已後定めて彼國に生ぜば即ち十方の諸佛悉く皆同じく讚じて勸め同じく證したまはん。何を以ての故に。同體の大悲なるが故に。一佛の所化は即ち是れ一切佛の化なり。一切佛の化は即ち是れ一佛の所化なり。即ち彌陀經の中に説く釋迦極樂の種種の莊嚴を讚歎したまふ。又一切の凡夫を勸めて一日七日一心に彌陀の名號を專念すれば、定めて往生を得。次下の文に云はく「十方に各恆河沙等の諸佛有して同じく釋迦能く五濁惡時惡世界惡衆生惡見惡煩惱惡



邪無信の盛なる時に於て、彌陀の名號を指讀して衆生稱念すれば必ず往生を得るを勸勵  
 したまふを讚じたまふと。即ち其證なり。又十方の佛等衆生の釋迦一佛の所説を信せざら  
 んことを恐畏て、即ち共に同心同時に各舌相を出して遍く三千世界に覆うて誠實の言を  
 説きたまふ。汝等衆生皆應に是釋迦の所説所讚所證を信すべし。一切の凡夫罪福の多少時  
 節の久近を問はず。但能く上は百年を盡し、下は一日七日に至る。一心に彌陀の名號を專  
 念すれば定めて往生を得ること必ず疑無し。是故に一佛の所説は即ち一切の佛同じく其  
 事を證誠したまふ。此を人に就て信を立つと名く。次に行に就て信を立つとは、然るに  
 行に二種有り。一には正行二には雜行なり。正行と言ふは専ら往生の經に依りて行を  
 行するは是を正行と名く。何者か是なる。一心に専ら此觀經『彌陀經』『無量壽經』  
 等を讀誦し、一心に彼國の二報莊嚴を專注し思想を觀察し憶念し、若し禮せば即ち一心に  
 専ら彼佛を禮し、若し口に稱せば即ち一心に専ら彼佛を稱し、若し讚歎し供養せば即ち一  
 心に専ら讚歎供養す。是を名けて正と爲す。又此正の中に就て復二種有り。一には一心に  
 専ら彌陀の名號を念じて行住坐臥に時節の久近を問はず念念に捨てざるをば、是を正定  
 の業と名く。彼佛願に順するが故に、若し禮誦等に依らば即ち名けて助業と爲す。此正助  
 二行を除いて已外の自餘の諸善をば悉く雜行と名く。若し前の正助二行を修すれば心常  
 に親近して憶念斷えざれば名けて無間と爲す。若し後の雜行を行すれば、即ち心常に間斷  
 す。廻向して生ずることを得べしと雖も、衆て疎雜の行と名くるなり。故に深心と名く。

【六〇】第三に廻向發願心に就いて述ぶ。

【不退の位】佛道の修行の過程に於いて既に得たる功德を決して退失することなき位置をいふ。

【六】『三には廻向發願心なり。』廻向發願心と言ふは、過去及び今生の身口意業に修する所の世出世の善根と及び他の一切の凡聖の身口意業に修する所の世出世の善根とを隨喜せると、此自他所修の善根を以て、悉く皆眞實の深信の心の中に廻向して彼國に生ぜんと願す。故に廻向發願心と名くるなり。又廻向發願して生ずとは、必ず須らく決定眞實の心の中に廻向し願じて得生の想を作すべし。此心深く信ずること由し金剛の若くにして一切の異見異學別解別行の人等に動亂破壊せられず。唯是れ決定して一心に提りて正直に進んで彼人の語を聞いて、即ち進退し心に怯弱を生ずること有りて回顧して道に落ちて、即ち往生の大益を失するを得ざれ。問うて曰はく、『若し解行不同の邪雜の人等有りて來りて相惑亂し或は種種の疑難を説いて往生を得ざらんと道はん。或は云はく、『汝等衆生曠劫より已來及び今生の身口意業に一切の凡聖の身の上にて共に十惡五逆四重諦法闍提破戒破見等の罪を造りて、未だ除盡すること能はず。然るに此等の罪は三界惡道に繫屬す。云何が一生の修福の念佛を以て即ち彼無漏無生の國に入りて永く不退の位を證悟することを得んや』と。』答へて曰はく、『諸佛の教行數塵沙に越え、識を稟くる機緣情に隨うて一に非ず。譬へば世間の人の眼に見つべく信すべきが如きは、明の能く闇を破し空の能く有を含み地の能く載養し水の能く生潤し火の能く成壞するが如き、此の如き等の事を悉く待對の法と名く。即ち目に見つべし、千差萬別なり。』何に況んや佛法不思議の力量種種の益無からんや。隨うて一門より出るは即ち一煩惱の門を出るなり。隨うて一門に入るは即ち一解脫智慧門

## 二河白道の

【七】

に入るなり。此に爲りて縁に隨うて行を起して、各解脱を求む、汝何以が乃ち將に有縁に有らざる。要行を以て我を障惑するや。然るに我愛する所は即ち是れ我有縁の行にして即ち汝が求むる所に非ず。汝が愛する所は即ち是れ汝が有縁の行にして亦我求むる所に非ず。是故に各樂ふ所に隨うて、其行を修すれば、必ず疾く解脱を得るなり。行者當に知るべし。若し解を學ばんと欲はば凡より聖に至り乃至佛果まで一切礙り無し、皆學ぶことを得よ。若し行を學ばんと欲はば必ず有縁の法に藉れ、少しく功勞を用ふるに多く益を得。【七】又一切の往生人等に白さく、「今更に行者の爲に一の喻譬を説いて信心を守護して以て外邪異見の難を防がん。何者か是なる。譬へば人有りて西に向つて百千の里を行かんと欲するが如き、忽然として中路に二つの河有るを見る。一には是れ火の河南に在り。二には是れ水の河北に在り。二河各濶さ百歩各深くして底無く南北邊無し。水火の中間に正つて一の白道有り、闊さ四五寸許りなるべし。此道東岸より西岸に至るに亦長さ百歩其水の波浪交過ぎて道を濕し、其火焰亦來りて道を燒く。水火相交りて、常にして休息すること無し。此人既に空曠の適なる處に至るに更に人物無し。多く群賊惡獸有りて、此人の單獨なるを見て競ひ來りて殺せんと欲す。此人死を怖れて直に走りて西に向ふに忽然として此大河を見る。即ち自ら念言すらく、「此河は南北邊畔を見ず、中間に一の白道を見れども極めて是れ狭小なり。二の岸相去ること近しと雖も何に由りてか行くべき、今日定めて死せんこと疑はず。正に到り廻らんと欲すれば群賊惡獸漸漸に來逼せん。正しく南北

に避け走らんと欲すれば惡獸毒蟲競ひ來りて我に向ふ。正しく西に向うて道を尋ねて去らんと欲すれば復恐らくは此水火の二河に墮せんことを。當時の惶怖復言ふべからず。即ち自ら思念すらく、「我今廻るとも亦死なん、住まるとも亦死なん、去るとも亦死なん。一種として死を勉れずば我寧ろ此道を尋ねて前に向うて去かん。既に此道有り必ず度るべし。」此念を作す時、東の岸に忽ち人の勸むる聲を聞く。「仁者但決定して此道を尋ねて行け。必ず死の難無けん、若し住らば即ち死なん。又西の岸の上に人有りて喚んで言はく、「汝一心に正念にして直に來れ。我能く汝を護らん。衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ。」此人既に此に遣り、彼に喚ぶを聞いて、即ち自ら身心を正當にして決定して道を尋ねて直に進んで疑怯退の心を生ぜず。或は行くこと一分二分するに東の岸の群賊等喚んで言はく、「仁者廻り來れ此道峻惡にして過るを得じ。必ず死なんこと疑はず。我等衆て惡心もて相向ふこと無し。」此人喚ぶ聲を聞くと雖も亦回顧せず。一心に直に進んで道を念うて行くに、須臾に即ち西の岸に到りて永く諸難を離る。善友相見て慶樂已むこと無し。此は是れ極樂なり。次に喩を合せば、東の岸と言ふは即ち此娑婆の火宅に喩ふ。西の岸と言ふは即ち極樂の寶國に喩ふ。群賊惡獸詐り親しむと言ふは、即ち衆生の六根六識六塵五陰四大に喩ふるなり。人無き空廻の澤と言ふは、即ち常に惡友に隨うて眞の善知識に値はざるに喩ふ。水火の二河と言ふは、即ち衆生の貪愛は水の如く瞋憎は火の如くなるに喩ふるなり。中間の白道四五寸と言ふは即ち衆生の貪瞋煩惱の中に能く清淨なる願往生の心を生ずるに喩ふ。



乃ち貪瞋強きに由るが故に即ち喩ふるに水火の如し。善心微なるが故に喩ふるに白道の如し。又水波常に道を濕すとは即ち愛心常に起りて能く善心を染汚するに喩ふ。又火焰常に道を焼くとは即ち瞋嫌の心能く功德の法財を焼くに喩ふ。人道の上を行いて直に西に向ふと言ふは即ち諸の行業を廻して直に西方に向ふに喩ふ。東の岸に人の聲の勸め遣るを聞いて道を尋ねて直に西に進むと言ふは、即ち釋迦已に滅したまひて、後の人見ざれども由教法の尋ぬべき有るに喩ふ。即ち之を喩ふるに聲の如し。或は行くこと一分二分するに群財等喚び廻すと言ふは、即ち別解別行愚見の人等、妄に見解を説いて迭に相惑亂し、及び自ら罪を造りて退失するに喩ふるなり。西の岸の上に入有りて喚ぶと言ふは即ち彌陀の願意に喩ふるなり。須臾に西岸に到りて、善友相見て喜ぶと言ふは、即ち衆生久しく生死に沈んで曠劫に淪廻し迷倒して自ら纏うて解脱するに由無し。仰いで釋迦發遣して西方に指向ふることを蒙り、又彌陀の悲心招喚したまふに藉りて、今二尊の意に信順して水火の二河を顧みず、念念に遺ること無く、彼願力の道に乗じて命を捨て已後彼國に生ずるを得、佛と相見れば、慶喜すること何ぞ極まらんに喩ふなり。又一切の行者行住坐臥に三業の修する所晝夜時節を問ふこと無く常に此解を作す。故に廻向發願心と名く。又廻向と言ふは彼國に生じ已りて還りて大悲を起し、生死に廻入して衆生を教化するを亦廻向と名くるなり。三心既に具すれば行として成ぜずと云ふこと無し。願行既に成じて若し生ぜずとせば、是處有ること無し。又此三心は亦通じて定善の義を攝す。應

【八】 簡機を明す

に知るべし。

【八】 五に復有三種衆生より已下は正しく機の法を奉け教に依りて修行するに堪能なるを簡ぶを明す。六に何等爲三より下六念に至る已來は、正しく受法の不同を明す。即ち其三有り。一には慈心不刹を明す。然るに刹業に多種有り或は口殺有り或は身殺有り或は心殺有り。口殺と言ふは處分許可するを名けて口刹と爲す。身刹とは身手等を動かして指授することを名けて身殺と爲す。心殺と言ふは方便を思念して計校する等を名けて心殺と爲す。殺業を論ぜば四生を簡はず皆能く罪を指き淨土に生ずることを障ふ。但一切の生命に於て慈心を起せば即ち是れ一切衆生に壽命安樂を施す亦是れ最上勝妙の戒なり。此れ即ち上より初の福第三の句に慈心不殺と言へるに合す。即ち止と行との二善有り。自ら殺せず、故に止善と名く。他をして殺さざらしむ。故に行善と名く。自他初めて斷ずるを止善と名く。畢竟じて永く除くを行善と名く。止持の二善有りと雖も總じて慈下の行を結成す。具諸戒行と言ふは若し人天二乗の器に約すれば即ち小戒と名け、若し大心大行の人に約すれば即ち菩薩戒と名く。此戒若し位を以て約せば常に此上輩三の位の者を即ち菩薩戒と名くべし。正しく人位定まれるに由るが故に自然に轉成す。即ち上の第二の福の戒分の善根に合す。一は誦誦大乘を明すとは此れ衆生の性習同じからず法を執すること各異なるを明す。前の第一の人は但修慈持戒を用て能と爲し、次に第二の人は唯誦誦大乘を將て是と爲すことを明す。然るに戒は即ち能く五乘三佛の機を持ち、法は即ち三賢十地萬行の智慧を薰成

【讀誦大乘】 無量壽經觀經等の大乘經典を讀誦すること。  
【五乘三佛】 五乘

とは人、天、緣覺、  
聲聞、菩薩。三佛  
は彌陀、觀音、勢

す。若し徳用を以て來し比校すれば、各一の能有り。即ち上の第三の福の第三の句に讀誦大乘と云へるに合す。三には修行六念を明すとす。謂ゆる佛法僧を念じ戒捨天等を念す。此れ亦通じて上の第三福の大乘の意義に合す。念佛と言ふは即ち専ら阿彌陀佛の口業の功德、身業の功德、意業の功德を念するなり。一切の諸佛も亦是の如し。又一心に専ら諸佛所證の法並に諸の眷屬の菩薩僧を念じ、又諸佛の戒を念じ及び過去の諸佛現在の菩薩等の作し難きを能く作し、捨て難きを能く捨て、内を捨て、外を捨て、内外を捨てたまふを念す。此等の菩薩但法を念することを欲して身財を惜まず。行者等既に此事を念知せば即ち須らく常に仰いで前賢後聖の身命を捨つる意を學ぶことを作すべし。又念天とは即ち是れ最後身十地の菩薩なり。此等は難行の行已に過ぎ三祇の劫已に超え萬徳の行已に成じ灌頂の位已に證せり。行者等既に念知し已りなば即ち自ら思念せよ。我身無際より已來、他と共に同時に願を發して惡を斷じ菩薩の道を行ぜり。他は盡く身命を惜まず、道を行じ位を進んで因圓に果熟して聖を證せる者大地微塵に踰えたり。然るに我等凡夫乃至今日まで虚然として流浪す。煩惱惡障は轉轉して増多く福惠は微微なること重昏に對して明鏡に臨むが若し。忽ちに此事を思付するに心驚き悲數するに勝へざる者をや。七に廻向發願より已下は、正しく各各前の所修の業を廻して所求の處に向ふを明す。八に具此功德より已下は、正しく修行の時節の延促を明す。上一形を盡し下一日一時一念等に至り、或は一念十念より一時一日一形に至る大意は、一たび發心して已後誓つて此生を終るまで退轉有る

【一形】 一生涯の  
こと。

【具三】一は至誠心、二は深心、は者廻向發願心なり

こと無く、唯淨土を以て期と爲し、又具此功德と言ふは、或は一人上の二を具し或は一人下の二を具し或は一人三種盡く具す。或は人有りて三種分無き者を名けて人の皮を著たる畜生と作す。人と名けず。又具三不具三を問はず。廻すれば盡く往生を得。應に知るべし。九に生彼國時より下往生彼國に至る已來は、正しく命終の時に臨んで聖來りて迎接したまふの不同と去時の遅疾とを明す。即ち其十一有り。一には所歸の國を標定すること。二には重ねて其行を顯して決定精勤の者を指出するを明し、亦是れ功德の強弱を較量す。三には彌陀化主の身自ら來赴したまふことを明し、四には觀音より已下、更に無數の大衆等皆彌陀に従うて行者を來迎することを顯すを明し、五には寶宮衆に隨ふことを明し、六には重ねて觀音勢至共に金臺を執りて、行者の前に至ることを明し、七には彌陀光を放つて行者の身を照したまふことを明し。八には佛既に光を舒べて照し、及び即ち化佛等と同時に手を接することを明し、九には既に接し臺に昇さんとして、觀音等同聲に行者の心を讚勸することを明し、十には自ら見れば臺に乗じ佛に従ふことを明し、十一には正しく去時の遅疾を明す。十に生彼國より已下は、正しく金臺彼に到りて更に華合の障無きことを明す、十一に見佛色身より下陀羅尼門に至る已來は、正しく金臺到りて後の得益不同を明す。即ち其三有り。一には初めて妙法を聞いて即ち無生を悟る。二には須臾に歷事して次第に授記せらる。三には本國他方にして更に聞持の二益を證す。十二に是名より已下は總じて結す。上來十二句の不同有りと雖も廣く上品上生の義を解し竟んぬ。



【九】上品中生を明す。

【化佛】衆生の機に應じて種種に形を變じて現れ給ふ佛身を云ふ。

【九】次に上品中生の位の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其八有り。一には上品中生者より已下は、總じて位の名を擧ぐ。即ち是れ大乘次善の凡夫人なり。二に不必受持より下生彼國に至る已來は、正しく第六第七第八門の中の所修の業を廻すると、西方を定め指すことを明す。即ち其四有り。一には受法不定にして或は讀誦を得ざるを明し。二には善く大乘の空の義を解するを明し。或は諸法は一切皆空なり、生死無爲も亦空なり、凡聖明闇も亦空なり、世間の六道、出世間の三賢十聖等若し其體性に望めば畢竟じて不二なりと聽聞す。此説を聞くと雖も其心坦然として疑滯を生ぜず。三には深く世出世の苦樂二種の因果を信じて此等の因果及び諸の道理に疑謗を生ぜざるを明す。若し疑謗を生ずれば即ち福行を成せず。世間の果報すら尙得べからず。何に況んや淨土に生ずることを得んや。此れ即ち第三の福の第二、第三の句に合す。四には前の所業を廻して所歸を標指するを明す。三に行行者より下迎接汝に至る已來は、正しく彌陀諸の聖衆と與に臺を持して來り應じたまふを明す。即ち其五有り。一には行者の命延久しからざるを明し、二には彌陀衆と與に自ら來りたまふことを明し、三には侍者臺を持ちて行者の前に至ることを明し、四には佛聖衆と同聲に讚歎して本所修の業を述ぶることを明し、五には佛行者の疑を懷かんことを恐れたまふが故に、我來りて汝を迎ふるを明す。四に與千化佛より下、七寶池中に至る已來は、正しく第九門の中の衆聖の授手と去時の遲疾とを明す。即ち其五有り。一には彌陀、千の化佛と同時に手を授けたまふことを明し、二には行者既に授

【須臾の間】梵音  
(Kṣana)の譯、極  
めて短き時間を云  
ふ。

手を蒙りて即ち自ら身を見れば己身紫金の臺に坐することを明し、三には既に自ら臺に坐するを見て、合掌して仰ぎて彌陀等の衆を讚することを明し、四には正しく去時の遅疾を明し、五には彼に到りて寶池の内に止住することを明す。五に此紫金臺より已下は、正しく第十門の中の彼に到りて華開く時節の不同を明す。行強き由るが故に上上は即ち金剛臺を得。行劣なるに由るが故に、上中は即ち紫金臺を得。生じて寶池に在りて宿を遷て而も聞く。六に佛及菩薩俱時放光より下得不退轉に至る已來は、正しく第十一門の中の華開已後の得益の不同を明す。即ち其五有り。一には佛光身を照すことを明し、二には行者既に體を照すことを蒙りて日即ち開明なることを明し、三には人中の習へる所彼に到りて衆聲の彰はす所還其法を聞くことを明し、四には既に眼開け法を聞くことを得て、即ち金臺より下り、親り佛邊に到つて歌揚して徳を讚することを明し、五には時を遷ること七日にして即ち無生を得ることを明す。七日と言ふは恐くは此間の七日なり。彼國の七日を指さず。此間に七日を遷るは彼處には即ち是れ一念須臾の間なり。應に知るべし。七に應時即能飛至十方より下現前授記に至る已來は、正しく他方の得益を明す。即ち其五有り。一には身十方に至ることを明し、二には一一に歷く諸佛を供することを明し、三には多くの三昧を修することを明し、四には延時の得忍を明し、五には一一の佛邊にして、現に授記を蒙ることを明す。八に是名より已下は總じて結す。上來八句の不同有りと雖も、廣く上品中生を解し竟んぬ。

上品下生を明す。

【二】次に上品下生の位の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其八有り。一に上品下生者より已下は、總じて位の名を擧ぐ。即ち是れ大乘下善の凡夫人なり。二に亦信因果より下無上道心に至る已來は、正しく第六門の中の受法の不同を明す。即ち其三有り。一には所信の因果不定なるを明す。或は信じ信ぜず、故に名けて亦と爲す。或は亦前の深信に同じかるべし。又信すと雖も深からず善心數退し惡法數起る。此れ乃ち深く苦樂の因果を信ぜざるに由つてなり。若し深く生死の苦を信する者は罪業畢竟じて重ねて犯せず。若し深く淨土無爲の樂を信する者は善心一たび發つて永く退失すること無し。二に信間斷すと雖も一切の大乗に於て疑謗するを得ざるを明す。若し疑謗を起す者は縱使千佛身を遠るとも救ふべきに由無し。三には已上の諸善亦功無きに似たることを明す。唯一念を發して苦を厭ひ諸佛の境界に生じ、速に菩薩の大悲願行を滿じ、還つて生死に入つて普く衆生を度せんと樂ふが故に發菩提心と名く。此義第三の福の中に已に明し竟んぬ。三に以此功德より已下は、正しく第八門の中の前の正行を廻して所求の處に向ふことを明す。四に行者命欲終時より下七寶池中に至る已來は、正しく第九門の中の臨終の聖來りて迎接したまふと去時の遅疾とを明す。即ち其九有り。一には命延久しからざるを明し、二には彌陀諸の聖衆と金華を持ちて來り應じたまふことを明し、三には化佛同時に手を授けたまふことを明し、四には聖衆同聲に等しく讚するを明し、五には行者の罪滅するが故に清淨と云ひ、本の所修を述するが故に發無上道心と云ふを明し、六には行者靈儀を

親ると雖も疑心にして往生を得ざらんことを恐る。是故に聖衆同聲に告げて我來りて汝を迎ふと言ふを明し、七には既に告を蒙り、及び即ち自身を見れば、已に金華の上に坐して籠籠として合することを明し、八には佛身の後に隨つて一念に即ち生ずることを明し、九には彼に到つて寶池の中に在るを明す。五に一日一夜より已下は、正しく第十門の中の彼に到りて華開く時節の不同を明す。六に七日之中より下皆演妙法に至る已來は、正しく第十一門の中の華開已後の得益の不同を明す。七に遊歴十方より下、住歡喜地に至る已來は、正しく他方の得益を明す、亦後益と名く。八に是名より已下は總じて結す。上來八句の不同有りと雖も、廣く上品下生を解し竟んぬ。

讀じて云はく、上輩は上行上根の人なり。淨土に生れんことを求めて貪瞋を斷ず。行の差別に就て三品を分つ。五門相續して三因を助く。一日七日専ら精進なれば、畢命に臺に乗じて六塵を出づ。慶しき哉、逢ひ難きに今遇ふことを得たり。永く無爲法性の身を證せん。上來三位の不同有りと雖も、總じて上輩一門の義を解し竟んぬ。

【二】十五に中輩觀の行善の文の前に就て、總じて料簡するに、即ち十一門と爲す。一には總じて告命を明し、一には正しく其位を辯定するを明し。三には正しく總じて有縁の類を擧ぐることを明し。四には正しく三心を辯定して以て正因と爲すことを明し。五には正しく機の堪と不堪とを簡ぶことを明し、六には正しく受法の不同を明し。七には正しく修業の時節に延促異有ることを明す。八には正しく所修の行を廻して彌陀佛の國に生ぜん

【二】中輩三品の意義を明す。





【四輩】四部衆とも云ふ。佛の四種の弟子、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷のこと。

【四諦】苦集滅道の四。迷悟兩界の因果を説明せるもの。

【三】中輩の中の中品中生を明す。

【八齋戒】不殺生、不偷盜、不邪淫、

の俗縁の家業王官長征遠防等を離るることを讀じたまふを明す。汝今出家して四輩に仰がれ萬事憂へず、適然として自在に、去住障無し。此に爲つて道業を修することを得。是故に讀めて衆苦を離ると云ひたまふ。五には行者既に見聞し已りて欣意に勝へず、即ち自ら身を見れば已に華臺に坐し、頭を低れて佛を禮することを明し、六には行者頭を低るには此に在り、頭を擧ぐれば已に彼國に在ることを明す。六に蓮華尋常よりは正しく第十門の中の彼に到りて華開くる遅疾の不同を明す。七に當華敷時より下八解脫に至る已來は、正しく第十一門の中の華開已後の得益の不同を明す。即ち其三有り。一には寶華尋で發くを明す。此れ戒行精強なるに由るが故なり。二には法普同じく四諦の徳を讀するを明す。三には彼に到りて四諦を説くを聞いて即ち羅漢果を獲るを明す。羅漢と言ふは此には無生と云ふ、亦無著と云ふ。因亡するが故に無生なり、果喪るが故に無著なり。三明と言ふは宿命明と天眼明と漏盡明となり。八解脫と言ふは內有色外觀色は一の解脫なり。內無色外觀色は二の解脫なり。不淨相は三の解脫なり。四空と及び滅盡と總じて八と成る。八には名より已下は總じて結す。上來八句の不同有りと雖も、廣く中品上生を解し竟んぬ。

【三】次に中品中生の位の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其七有り。一に中品中生者よりは總じて行の名を擧げて其位を辯定す。即ち是れ小乘下善の凡夫人なり。二に若有衆生より下威儀無缺に至る已來は正しく第五六七門の中の簡機と時分と受法の不同を明す。即ち其三有り。一には八齋戒を受持するを明し、二には沙彌戒を受持する

不安語、下飲酒、不坐高廣大床、不著花鬘、不習歌舞、戲樂戲なり。

【沙彌戒】出家して未だ修行熱せざるもの戒、殺生、偷盜、非梵行、妄語、飲酒、塗飾、香鬘、歌舞、觀聽、眠坐高廣樂麗床座、食非時食、受蓄金銀等寶。

【具足戒】比丘の二百五十戒又は比丘尼の三百四十八戒をいふ。この戒を持てば無量の威徳身に具足するが故に名く。

【四】中輩の中の中品下生を明す。

を明し、三には具足戒を受持するを明す。此三品の戒は皆同じく一日一夜清淨にして犯す無く、乃至輕罪まで極重の過を犯するが如くにして、三業の威儀失有らしめざるなり。此れ即ち上の第二の福に合す、應に知るべし。三に以此功德より已下は、正しく所修の業を廻して所求の處に向ふを明す。四に戒香薰修より下七寶池中に至る已來は、正しく第九門の中の行者終る時聖來りて迎接したまふと去時の遲疾とを明す。即ち其八有り。一には命延久しからざるを明し、二には彌陀諸の比丘衆と與に來りたまふことを明し、三には佛金光を放ちて、行者のみを照したまふを明し、四には比丘華を持ちて來現することを明し、五には行者自ら空聲等の讚を見聞するを明し、六には佛讚めて汝深く佛語を信じ隨順して疑無し、故に來りて汝を迎ふと言ひたまふことを明し、七には既に佛讚を蒙りて即ち見るに自ら華座に坐し、坐し已れば華合することを明し、八には華既に合し已つて即ち西方寶池の内に入ることを明す。五に經於七日より已下は、正しく第十門の中の彼に到りて華聞く時節の不同を明す。六に華既敷已より下成羅漢に至る已來は、正しく第十一門の中の華開已後の得益の不同を明す。即ち其四有り。一には華開けて佛を見たてまつることを明し、二には合掌して佛を讚することを明し、三には法を聞いて初果を得ることを明し、四には半劫を經已りて方に羅漢と成ることを明す。七には是名より已下は、總じて結す。上來に七句の不同有りとは雖も、廣く中品中生を解し竟んぬ。

【四】次に中品下生の位の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其七有り。

一に中品下生より已下は、正しく總じて行の名を擧げて其位を辯定することを明す。即ち是れ世善上福の凡夫人なり。二に若有善男子より下、行世仁慈に至る已來は、正しく第五第六門の中の簡機と授法との不同を明す。即ち其四有り。一には簡機を明し、二には父母に孝養し六親に奉順するを明す。即ち上の初の福の第一第二の句に合す。三には此人性調ひ柔善にして自他を簡ばず物の苦に遭へるを見て慈敬を起すを明す、四には正しく此品の入會て佛法を見聞せず亦怖求するを解らず、但自ら孝養を行することを明す。應に知るべし。三に此人命欲終時より下、四十八願に至る已來は、正しく第八門の中の臨終に佛法に遇逢る時節の分齊を明す。四に聞此事じより下、極樂世界に至る已來は、正しく第九門の中の得生の益と去時の遅疾とを明す。五に生經七日よりは、正しく第十門の中の彼に到りて華の開と不開とを異と爲すことを明す。六に遇觀世音より下、成羅漢に至る已來は、正しく第十一門の中の華開已後の得益不同を明す。即ち其三有り。一には時を遷て已後觀音大勢に遇ふを得るを明し、二には既に二聖に逢ひて妙法を聞くを得るを明し、三には一小劫を遷て已後始めて羅漢を悟ることを明す。七に是名より已下は總じて結す。上來七句の不同有りと雖も、廣く中品下生を解し竟んぬ。

讚じて云はく、「中輩は中行中根の人なり。一日の齋戒もて金蓮に處す。父母に孝養するを教へて廻向せしめ、爲に西方快樂の因なりと説く。佛聲聞衆と與に來りて取りて、直に彌陀華座の邊に到る。百寶の華籠りて七日を經、三品の蓮開けて小眞を證す。」上來三位



【一五】下輩三品の意義を明す。

の不同有り（いへど）、總じて中輩一門の義を解し（おほ）、竟んぬ。

【一五】十六に下輩觀の善惡二行の文の前に就て、料簡するに、即ち十一門と爲す。一には總じて告命を明し、二には其位を辯定し、三には總じて有縁の生類を擧げ、四には三心を辯定して以て正因と爲し、五には機の堪と不堪とを簡び、六には苦樂の二法を受くる不同を明し、七には修業の時節に延促の異有るを明し、八には所修の行を廻して所求の處に向ふことを明し、九には臨終の時の聖來りて迎接したまふ不時と去時の遲疾とを明し、十には彼に到りて華開くる遲疾の不同を明し、十一には華開已後の得益に、異有ることを明す。上來十一門の不同有りと雖も、總じて下輩の三位を料簡し竟んぬ。

【一六】下輩の中の下品上生を明す。

【一六】次に下品上生の位の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其九有り。一に佛告阿難より已下は、正しく告命を明す。二に下品上生者よりは、正しく其位を辯定することを明す。即ち是れ十惡を造る輕罪の凡夫人なり。三に或有衆生より下、無有慚愧に至る已來は、正しく第五門の中の簡機に一生已來の造惡の經重の相を擧出するを明す。即ち其五有り。一には總じて造惡の機を擧ぐるを明し、二には衆惡を造作するを明す。三には衆惡を作ると雖も、諸大乘に於て誹謗を生ぜざるを明す、四には重ねて造惡の人を牒して智者の類に非ざるを明す、五には此等の愚人衆惡を造ると雖も、總じて愧心を生ぜざるを明す。四には命欲終時より下、生死之罪に至る已來は、正しく造惡の人等臨終に善に遇うて法を聞くことを明す。即ち其六有り。一には命延久しからざることを明し、

【善知識】 正法を説きて、人をして佛道に入らしめ、解脱を得せしむる人をいふ。

二には忽ちに往生の善知識に遇ふことを明し、三には善人爲に衆經を讀することを明し、四には已に聞經の功力罪を除くこと千劫なることを明し、五には智者轉じて教へて彌陀の號を稱念せしむることを明し、六には彌陀の名を稱するを以ての故に罪を除くこと五百萬劫なることを明す。問うて曰はく、「何が故に經を聞くこと十二部なるには但罪を除くこと千劫、佛を稱すること一聲するには即ち罪を除くこと五百萬劫なる。何の意ぞ。」答へて曰はく、「造罪の人障重くして加ふるに死苦の來り逼むるを以てせば善人多くの經を説くと雖も滄受の心浮散す。心散するに由るが故に罪を除くこと稍輕し。又佛名は是れ一なり。即ち能く散を攝して以て心を住せしむ。復教へて正念に名を稱せしむ。心重きに由るが故に即ち能く罪を除くこと多劫なり。五に爾時彼佛より下、生寶池中に至る已來は、正しく第九門の中の終時に化衆の來迎したまふと去時の遅疾とを明す。即ち其六有り。一には行者正しく名を稱する時、彼彌陀即ち化衆をして、聲に應じて來現せしむることを明し、二には化衆、既已身現じて即ち同じく行人を讚することを明し、三には聞く所の化讚但稱佛の功を述べて我來りて汝を迎ふというて聞經の事を論ぜざるを明す。然るに佛の願の意を望めば唯正念に名を稱することを勧め、往生の義疾きこと雜散の業に同じからず。此經及び諸部の中の如き、處處に廣く歎じて勧めて名を稱せしむるを將て要益と爲す。應に知るべし。四には既に化衆の告を蒙り及び即ち光明の室に遍するを見ることを明し、五には既に光照を蒙りて報命尋ち終ることを明し、六には華に乗じ佛に従つて寶池の中に生ずること

【二七】下輩の中の  
下品中生を明す。

を明す。六に經七日より已下は、正しく第十門の中の彼に到りて華開く遲疾の同じからざるを明す。七に當華敷時より下、得入初地に至る已來は、正しく第十一門の中の華開已後の得益に異有ることを明す。即ち其五有り。一には觀音等先づ神光を放つことを明し、二には身行者の寶華の側に赴くことを明し、三には爲に前生聞く所の教を説くことを明し、四には行者聞き已りて領解し發心することを明し、五には遠く多劫を運て百法の位に證臨すること明す。八に是名より已下は總じて結す。九に得聞佛名より已下は、重ねて行者の益を擧ぐ、但念佛のみ獨り往生を得るに非ず。法僧通念するも去ることを得。上來九句の不同有りと雖も、廣く下品上生を解し竟んぬ。

【二七】次に下品中生の位の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其七有り。一に佛告阿難より已下は、總じて告命を明す。二に下品中生者よりは、正しく其位を辯定するを明す。即ち是れ破戒次罪の凡夫人なり。三に或有衆生より下、應墮地獄に至る已來は、正しく第五第六門の中の簡機と造業とを明す。即ち其七有り。一には總じて造惡の機を擧ぐるを明し、二には多く諸戒を犯するを明し、三には僧物を偷盜することを明し、四には邪命說法を明し、五には總じて愧心無きことを明し、六には衆罪を兼造して内には心に惡を發し外には即ち身口に惡を爲す。既に自身不善なれば又見る者の皆憎むが故に諸の惡心もて自ら莊嚴すと云ふを明し、七には斯罪狀を驗らむるに定めて地獄に入るべきを明す。四に命欲終時より下、即得往生に至る已來は、正しく第九門の中の終時の善惡來迎

を明す。即ち其九有り。一には罪人命延久しからざるを明し、二には獄火の來現を明し、三には正しく火現する時善知識に遇ふことを明し、四には善人爲に彌陀の功德を説くことを明し、五には罪人既に彌陀の名號を聞けり。即ち罪を除くこと多劫なることを明し、六には既に罪滅を蒙れば火變じて風となることを明し、七には天華風に隨うて來應して目の前に羅列することを明し、八には化衆の來迎することを明し、九には去時の遲疾を明す。五に七寶池中より下六劫に至る已來は、正しく第十門の中の彼に到りて華開く時節の不同を明す。六に蓮華乃敷より下、發無上道心に至る已來は、正しく第十一門の中の華開已後の得益に異有るを明す。即ち其三有り。一には華既に開け已れば、觀音等覺聲もて安慰することを明し、二には爲に深甚の妙典を説くことを明し、三には行者の頓解し發心することを明す。七には是名より已下は總じて結す。上來七句の不同有りと雖も、廣く下品中生を解し畢りぬ。

【二八】次に下品下生の位の中に就て、亦先づ擧げ、次に辯じ、後に結す。即ち其七有り。一に佛告阿難より已下は、總じて告命を明す。二に下品下生者よりは正しく其位を辯定するを明す。即ち是れ具に五逆等を逃れる重罪の凡夫人なり。三に或有衆生より下、受苦無窮に至る已來は、正しく第五第六門の中の簡機の造惡の輕重の相を明す。即ち其十有り。一には造惡の機を明し、二には總じて不善の名を擧ぐるを明し、三には罪の輕重を簡ぶことを明し、四には總じて衆惡を結し智人の業に非ざることを明し、五には惡を逃ること既に

【二八】下品下生を明す。



【抑止門】攝取門の對。衆生の放逸を抑へ止めんが爲に方便して且く攝取の慈悲を隠し悪逆の者は救はれずと言ひて誠を垂ること。

多ければ罪亦輕きに非ざることを明し、六には業として其報を受けざるに非ず、因として其果を受けざるに非ず、因業既に是れ樂に非ず、果報惡んぞ能く苦ならざらんといふを明し、七には造惡の因既に具すれば酬報の劫未だ窮まらざることを明す。問うて曰はく、「四十八願の中の如き、唯五逆と誹謗正法とを除いて往生を得しめず。今此觀經の下品下生の中に謗法を簡びて五逆を攝することは何の意か有る。」答へて曰はく、「此義仰いで抑止門の中に就て解せん。四十八願の中に謗法と五逆とを除けるが如きは、然るに此二業は其障極めて重し。衆生若し造れば直に阿鼻に入る。歷劫周障すとも出つべきに由無し。但し如來其れ斯くの過を造らんを恐れて、方便して止めて往生を得ずと言ふ。亦是れ攝せざるには非ず。又下品下生の中に五逆を取りて謗法を除くことは其五逆は已に作れり。捨てて流轉せしむべからず。還りて大悲を發して攝取して往生せしめん。然るに謗法の罪は未だ爲らず、又止めて若し謗法を起さば即ち生ずるを得ずと言ふ。此は未造業に就て解す。若し造らば還攝して生ずることを得しめん。彼に生ずることを得と雖も華合して多劫を運ん。此等の罪入華の内に在る時三種の障有り。一には佛及び諸の聖衆を見ることを得ず。二には正法を聽聞することを得ず。三には歷事供養することを得ず。此を除いて已外は更に諸の苦無けん。經に云はく、「猶し比丘の三禪に入る樂の如し」と。應に知るべし、華中に在りて多劫聞けずと雖も、阿鼻地獄の中に長時永劫、諸の苦痛を受くるに勝れざるべけんや。此義抑止門に就て解し竟んぬ。四に如此愚人より下生死之罪に至る已來は、正しく聞

【四重】四種の重罪。殺生、偷盜、邪淫、妄語のこと。

法念佛して現益を蒙ることを得るを明す。即ち其十有り。一には重ねて造悪の人を牒すること、二には命延久しからざるを明し、三には臨終に善知識に遇ふことを明し、四には善人安慰して、教へて念佛せしむることを明し、五には罪人死苦來り逼めて、佛名を念ずることを得るに由無きことを明し、六には善友苦みて念を失すと知りて轉じて教へて口づから彌陀の名號を稱せしむることを明し、七には念數の多少と聲聲無間とを明し、八には罪を除くことと多劫なることを明し、九には臨終正念なれば即ち金華の來應有ることを明し、十には去時の遅疾と直に所歸の國に到るとを明す。五に於蓮華中滿十二劫より已下は、正しく第十門の中の彼に到りて華の開く遅疾の不同を明す。六に觀音大勢より下、發菩提心に至る已來は、正しく第十一門の中の華開已後の得益に異有るを明す。即ち其三有り。一には二聖爲に甚深の妙法を宣ぶることを明し、二には罪を除いて歡喜することを明し、三には後に勝心を發することを明す。七に是名より已下は總じて結す。上來七句の不同有りと雖も、廣く下品下生を解し竟んぬ。

讚に云はく、下輩は下行下根の人なり。十惡五逆等と貪瞋と、四重と偷僧と正法を謗すと、未だ曾て慚愧して前の愆を悔いず。終る時苦の相雲の如く集り。地獄の猛火罪人の前にあり。忽ち往生の善知識急に勸めて、専ら彼佛の名を稱せしむるに遇ふ。化佛菩薩聲を尋ねて到る、一念心を傾ければ寶蓮に入る。三華障重くして多劫に開く。時に始めて菩提の因を發す。上來三位の不同有りと雖も、總じて下輩一門の義を解し竟んぬ。

前には十三觀を明して以て定善と爲す。即ち是れ韋提請を到し如來已に答へたまふ。後には三福九品を明して名けて散善と爲す。是れ佛の自説なり。定散兩門異なること有りとし雖も總じて正宗分を解し竟んぬ。

【九】 得益分を明

【二九】 三に得益分の中に就て、亦先づ擧げ、次に辨ず。即ち其七有り。初めて説是語と言ふは、正しく總じて前の文を牒して後の得益の相を生ずるを明す。一に韋提より已下は、正しく能く聞法の人を明す。三に應時即見極樂より已下は、正しく夫人等上の光臺の中に於て極樂の相を見るを明す。四に得見佛身及二菩薩より已下は、正しく夫人第七觀の初に於て、無量壽佛を見たてまつる時、即ち無生の益を得たりしを明す。五に侍女より已下は正しく斯勝相を觀て各無上の心を發して淨土に生ぜんと求むることを明す。六に世尊悉記より已下は、正しく侍女尊記を蒙るを得て皆彼國に生じて即ち現前三昧を獲んことを明す。七に無量諸天より已下は、正しく前の厭苦の縁の中に、釋梵護世の諸天等佛に王宮に從うて、空に臨んで法を聽くに、或は釋迦毫光の轉變を見、或は彌陀金色の靈儀を見、或は九品往生の殊異を聞き、或は定散兩門俱に攝することを聞き、或は善惡の行齊しく歸するを聞き、或は西方淨土日に對して遠きに非ざることを聞き、或は一生育精に志を定すれば永く生死と流を分つことを聞く。此等の諸天、既に如來の廣く希奇の益を説きたまふことを聞いて、各無上の心を發すことを明す。斯れ乃ち佛は是れ聖の中の極、語を發すれば經と成る。凡惑の類、滄を蒙りて、能く之を聞くものをして益を獲しむ。上

【二九】 流通分を明

來七句の不同有りりと雖も、廣く得益分を解し竟んぬ。

【二九】 四に次に流通分を明す。中に於て二有り。一には王宮の流通を明し、二には耆闍の流通を明す。今先づ王宮の流通分の中に就て、即ち其七有り。一には爾時阿難より已下は、正しく請發の山を明す。二に佛告阿難より已下は、正しく如來依正を雙べ標して、以て經の名を立て、又能く經に依りて行を起せば、三障の雲自ら卷くといふて前の初の問の云何名此經の一句を答ふるを明す。三に汝當受持より已下は、前の後の問の云何受持の一句を答ふ。四に行此三昧者より下、何況憶念に至る已來は、正しく比較して勝れたるを顯して、人を勸めて奉行せしむることを明す。即ち其四有り。一には總じて定善を標して、以て三昧の名を立るを明し、二には觀に依りて修行すれば即ち三身を見るの益有ることを明し、三には重ねて能く教を行するの機を擧ぐるを明し、四には正しく比較して勝れたるを顯すことを明す。但三身の號を聞くに、尙多劫罪見を滅す。何に況や正念に歸依して證を獲ざらんや。五に若念佛者より下、生諸佛家に至る已來は、正しく念佛三昧の功能超絶して實に雜善を以て比類と爲すを得るに非ざることを顯す。即ち其五有り。一には専ら彌陀佛の名を念ずることを明し、二には能念の人を指讀することを明し、三には若し能く相續して念佛する者、此人甚だ希有なりと爲す。更に物の以て之に方ぶべきこと無し。故に分陀利を引いて喩へと爲すを明す。分陀利と言ふは、人中の好華と名け、亦希有華と名く。亦人中の上上華と名け、亦人中の妙好華と名く。此華相傳へて蔡華と名くる、是なり。若し念



## 【一】 耆闍會を明

佛する者は、即ち是れ人中の好人、人中の妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の最勝人なり。四には専ら彌陀の名を念ずる者は、即ち觀音勢至常に隨うて影護すること、亦親友知識の如くなるを明す、五に今生に既に此益を蒙れば命を捨てて即ち諸佛の家に入る、即ち淨土是れなり。彼に到れば長時に法を聞き、歴史供養して因聞に果滿す。道場の坐、豈賒ならんやと言ふことを明す。六に佛告阿難汝好持是語より已下は、正しく彌陀の名號を付屬して遐代に流通せしめたまふことを明す。上より來定散兩門の益を説くと雖も、佛の本願に望めば意衆生をして一向に専ら彌陀佛の名を稱せしむるに在り。七に佛說此語時より已下は、正しく能言能傳等の未だ聞かざる所を聞き、未だ見ざる所を見、遇甘露を澆して意躍して以て自ら勝ふること無きを明す。上來七句の不同有りと雖も、廣く王宮の流通分を解し竟んぬ。

【二】 五に耆闍會の中に就て、亦其三有り。一に爾時世尊より已下は、耆闍の序分を明す。二に爾時阿難より已下は、耆闍の正宗分を明す。三に無量諸天より已下は、耆闍の流通分を明す。上來三義の不同有りと雖も、總じて耆闍分を明し竟んぬ。

初に如是我聞より下、云何が見極樂世界に至る已來は、序分を明し。二に口觀より下、下品下生に至る已來は、正宗分を明し。三に説是語時より下、諸天發心に至る已來は、得益分を明し。四に爾時阿難より下、章提等歡喜に至る已來は、王宮の流通分を明し。五に爾時世尊より下、作轉而退に至る已來は、總じて耆闍分を明す。上來五分の不同有りと雖も、

【三】 發願請求を  
明す。

【三】 證誠靈驗を  
明す。

總じて觀經 一部の文義を解し竟んぬ。

竊に以れば眞宗遇ひ巨く淨土の要逢ひ難し、五趣をして齊しく生ぜしめんと欲す。是を以て勤めて後代に聞かしむ。但如來の神力轉變無方なり。顯顯機に隨うて王宮に密に化す。是に於て普閻の聖衆小智疑ひを懷く。佛後に山に還りたまふに委況を闡はず、時に阿難爲に王宮の化定散兩門を宣ぶ。異衆此に因りて同く聞いて奉行して頂戴せざる無し。

【三】 敬つて白す。一切有縁の知識等余既に是れ生死の凡夫智慧淺短なり。然るに佛教幽微なれば敢て輒く異解を生ぜず。遂に即ち心を標し願を結して靈驗を請求す。方に造心に盡く虚空遍法界の一切の三寶、釋迦牟尼佛、阿彌陀佛、觀音勢至彼土の諸の菩薩大海衆、及び一切の莊嚴相等に南無歸命したてまつるべし。某今此觀經の要義を出して古今を楷定せんと欲す。若し三世の諸佛、釋迦佛、阿彌陀佛等の大悲願の意に稱はば、願くば夢の中に於て上の所願の如きの一切の境界、諸相を見るを得しめたまへと。佛像の前に於て願を結し已りて、日別に阿彌陀經を誦すること三遍、阿彌陀佛を念すること三萬遍にして至心に發願す。

【三】 即ち當夜に於て見る、西方の空中に上の如きの諸相境界悉く皆顯現す。雜色の寶山百重千重に種種の光明下地を照して地金色の如し。中に諸佛菩薩有して或は坐し或は立し或は語し或は默す。或は身手を動かし或は住して動せざる者あり。既に此相を見て合掌して立して觀す。量久しくして乃ち覺め、覺め已りて欣喜に勝へば、於即義門を條録す。此より已後毎夜夢の中に常に一の偈有り、來りて玄義の科文を指授す。既に了れば更に復

見え、後の時に本を脱し竟已て、復更に至心に七日を要期して日別に阿彌陀經を誦するこ  
 と十遍、阿彌陀佛を念すること三萬遍、初夜後夜に彼佛の國土の莊嚴等の相を觀想して誠  
 心に歸命すること一ら上の法の如くす。當夜即ち見るに三具の磔輪道の邊獨り轉ず。忽ち一  
 人の白き駱駝に乗る有り、來前んで勸むを見る。師當に努方て決定して往生すべし、退轉を  
 作す莫れ。此界は極惡にして苦多し、勞はしく貪樂せざれと。答へて曰はく、大に賢者の  
 好心の視誨を蒙る。某畢命を期と爲して敢て憊慢の心を生ぜざれ。云云。第二夜に見ら  
 く、阿彌陀佛の身、眞金色にして寶樹の下金蓮華の上に在して坐したまひ、十僧圍遶して  
 亦各一寶樹の下に坐す。佛樹の上には乃ち天衣有りて掛り繞り、面を正くし西に向うて合  
 掌して坐して觀す。第三夜に見らく、兩の幢杆あり、極大高顯にして幢懸て五色なり。道路  
 縱横にして入觀るに無礙なり。既に此相を得、已に即便休止して七日に到らず。

【三】上來所有の靈相は本心物の爲にして己身の爲にせず、既に此相を蒙れり、敢て隱藏  
 せず。謹んで以て義の後に中呈して、聞いて末代に被らしむ。願くば含量をして之を聞  
 いて信を生じ、有識の觀ん者をして西に歸せしめんことを。此功德を以て衆生に廻施す。  
 悉く菩提心を發して慈心もて相向ひ、佛眼もて相見て菩提まで眷屬とし、眞の善知識と  
 作り同じく淨國に歸し共に佛道を成ぜん。此義已に證を請うて定め竟んぬ。一句一字も加  
 減すべからず。寫さんと欲する者、一に經法の如くすべし。應に知るべし。

觀經正宗分散善義卷第四 終

【三】 結勸流行を  
 明す。

# 往生禮讚偈

沙門善導集記

【當書一卷善導の撰なり。大無量壽經及び龍樹、天親、彦琮等の作りし禮讚偈によりて六時禮讚の日課を修するの法、並びに其功德を説く。】  
【一】當書撰述の由來を明す。  
【大經】無量壽經をいふ。

【二】六時禮讚を概論す。

【十六觀】觀經に説ける十六の觀法是を修すれば派昇して淨土往生を得といふ。日思、水想、地想、寶樹、寶池、寶樓、華座、像、眞身、觀音、勢至、普、雜想、上輩、中輩、下輩の十六、前三十三は定善、後三は散善なり。善導の名くるところ。  
【三】三心を説く安心なり。  
【安心】法を心の中にすゑ置くこと法に依り確信安住して動かざること

一切衆生を勧めて、西方極樂世界の阿彌陀佛國に生ぜん願せしむる六時禮讚の偈。  
【一】謹んで大經及び龍樹天親、此土の沙門等の所造の往生禮讚に依つて、一處に集在し、分つて六時と作し、唯相續係心して往益を助成せんと欲す。亦願くば未聞を曉悟せしめて遠く遐代に沾さんのみ。

【二】何者ぞ、第一に、謹んで大經に、釋迦及び十方の諸佛、彌陀の十二光の名を讚歎し、禮念するは定んで彼國に生ず。と勧めたまふに依り十九拜、日没の時に當つて禮す。第二に、謹んで大經に依りて要文を採集して以て禮讚の偈を爲り二十四拜、初夜の時に當りて禮す。第三に、謹んで龍樹菩薩の願往生禮讚の偈に依り十六拜、中夜の時に當りて禮す。第四に、謹んで天親菩薩の願往生禮讚の偈に依り二十拜、後夜の時に當りて禮す。第五に、謹んで彦琮法師の願往生禮讚の偈に依り二十一拜、晨朝の時に當りて禮す。第六に、沙門善導願往生禮讚の偈、謹んで十六觀に依りて作る二十拜、午時に當りて禮す。  
【三】問うて曰はく、今、人を勧めて往生せしめんと欲するに、未だ知らず、若爲が、安心し起行し作業して、定めて彼國土に往生するを得るや。答へて曰はく、必ず彼國土に



【起行】安心の對  
樹立したる信念に  
隨ひ、三業に起す  
所行。

【作業】行業をな  
すこと。起行の相  
續を令ぐせしむる  
行法。

【國土】西方極  
淨淨土。

【觀經】觀無量壽  
佛。

【眞前】心身を備  
亂する精神作用。

【火七】火を衆生  
の五濁等の苦に喩  
へ、七を三界に喩  
ふ。波婆を指す。

【四】五念門を説  
く。起行なり。

生ぜんと欲せば、『觀經』に説くが如くせば、三心を具して必ず往生するを得ん。』

何等をか三と爲す。一には至誠心。謂ゆる身業に彼佛を禮拜し、口業に彼佛を讚歎し

稱揚し、意業に彼佛を專念し觀察す。凡そ三業を起すに必ず須らく眞實なるべし。故に至

誠心と名く。二には深心。即ち是れ眞實の信心なり。自身は是れ具足煩惱の凡夫、善根薄

少にして、三界に流轉して火宅を出でずと信知し、今彌陀の本弘誓願及び名號を稱するこ

と下十聲一聲等に至り、定めて往生することを得と信知し、乃至一念も疑心あること無

し。故に深心と名く。三には廻向發願心。所作の一切の善根悉く皆回して往生を願す。

故に廻向發願心と名く。此三心を具すれば必ず往生することを得。若し一心をも少きぬれ

ば、即ち生ずることを得ず。觀經に具に説くが如し、應に知るべし。

【四】又天親の『淨土論』に云ふが如く、「若し彼國に生ぜんと願すること有らん者には

勸めて五念門を修せしむ。五門若し具すれば定めて往生することを得」と。

何をか五と爲す。一には身業禮拜門。謂ゆる一心專至して恭敬合掌し、香華供養して彼

阿彌陀佛を禮拜す。禮には即ち専ら彼佛を禮して畢命を期と爲し、餘禮を雜へず、故に禮

拜門と名く。二には口業讚歎門。謂ゆる意を専らにして彼佛の身相光明、一切の聖衆の

身相光明、及び彼國中の一切の寶莊嚴の光明等を讚歎す。故に讚歎門と名く。三には意

業憶念觀察門。謂ゆる意を専らにして彼佛及び一切の聖衆の身相光明、國土の莊嚴等を

念觀す。『觀經』に説くが如く唯睡時を除いて此事等を、恆に憶し恆に念じ、恆に想ひ恆に

【三業】 心口意の三業に阿彌陀を念ずる所作をいふ。  
【四威儀】 行住坐臥の四事。

【三乘】 聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三種の人をいふ。各各自已に適する教法に乗じて迷界を出づるが故にこの名あり。

【五道】 五趣。地獄、餓鬼、畜生、人間、天上のこと。

【六神通】 天眼、天耳、他心、宿命、神足、漏盡の六種の神通。

【五】 四修を説く作業なり。

観ず。故に觀察門と名く。四には作願門。謂ゆる心を専らにして、若は晝、若は夜、一切の時一切の處に、三業四威儀の所作の功德、初中後を問はず、皆須らく眞實心の中に發願して彼國に生ぜん願すべし。故に作願門と名く。五には廻向門。謂ゆる心を専らにして、若は自作の善根及び一切の三乘五道、一一の聖凡等の所作の善根に深く隨喜を生ず。諸佛菩薩の所作の隨喜の如く、我も亦是の如く隨喜して此隨喜の善根及び已が所作の善根を以て、皆悉く衆生と之を共にして彼國に廻向す。故に廻向門と名く。又彼國に到り已りて六神通を得て、生死に廻入して、衆生を教化すること後際を徹窮して心に厭足無く、乃ち成佛に至るを亦廻向門と名く。

五門既に具すれば、定めて往生することを得。一一の門、上の三心と合す。隨つて業行を起せば、多少を問はず、皆眞實の業と名くるなり。應に知るべし。

【五】 又勧めて四修の法を行じ、用て三心五念の行を策して、速に往生することを得しむ。

何をか四と爲す。一には恭敬修。謂ゆる彼佛及び彼一切の聖衆等を恭敬し禮拜す。故に恭敬修と名く。畢命を期と爲し、誓つて中止せず、即ち是れ長時修なり。二には無餘修。謂ゆる専ら彼佛の名を稱して、彼佛及び一切の聖衆等を専ら念じ専ら想ひ、専ら禮し専ら讚じ、餘業を雜へず、故に無餘修と名く。畢命を期と爲し、誓つて中止せず、即ち是れ長時修なり。三には無間修。謂ゆる相續して恭敬し禮拜し、稱名し讚歎し、憶念し觀察し、

【隨犯隨悔】罪を犯すに隨ひ一それを懺悔す。

【二六】四修の利益を説く。

【七】一佛稱名の故を説く。

【名字】南無阿彌陀佛の名號のこと

【大聖】大聖人の意、釋尊のこと。

【大道理】勝れたる教法のこと。

廻向し發願す。心心相續して餘業を以て來し問へず。故に無間修と名く。又貪瞋煩惱を以て來し問へず。隨犯隨懺して、念を隔て時を隔て日を隔てしめず。常に清淨ならしむるを亦無間修と名く。畢命を期と爲し、誓つて中止せず、即ち是れ長時修なり。

【二八】又菩薩は已に生死を免れて、所作の善法廻して佛果を求むるは即ち是れ自利なり。衆生を教化して未來際を盡すは即ち是れ利他なり。然るに今時の衆生は悉く煩惱に繫縛せられ、未だ惡道生死等の苦を免れず。隨緣起行して一切の善根具に速に廻りぬ。阿彌陀佛國に往生せんと願す。彼國に到り已れば、更に畏るる所無し。上の如く四修せば自然任運にして自利利他具足せざる無し、應に知るべし。

【七】又文殊般若に云ふが如く、一行三昧を明して唯勸む。獨り空閑に處して諸の亂意を捨て、心を一佛に係け相貌を觀ぜず、専ら名字を稱すれば、即ち念の中に於て彼阿彌陀佛及び一切佛等を見ることを得」と。

問うて曰はく、「何が故ぞ、觀を作さしめず、直に専ら名字を稱せしむるは、何の意有りや。」答へて曰はく、「乃ち衆生障重うして境細に心麤なれば、識麤り神飛んで觀成就し難きに由てなり。是を以て大聖悲憐して直に勸めて専ら名字を稱せしむ。正しく稱名は易きに由るが故に、相續して即ち生ず。問うて曰はく、「専ら一佛を稱せしむ。何が故ぞ境現すること即ち多き。此れ豈邪正相交り、一多雜り現するに非ずや。」答へて曰はく、「佛佛齊しく證して形に二別無く、縱使一を念じて多を見るとも、何の大道理に乖かんや。」

【八】 面を西に向はしむるを説く。

【悲智果圓かに】 慈悲と、智慧と、ごとりが缺けめなく具はること。

【一形】 一生涯のこと

【九】 專雜二行の利害を説く。

【八】 又『觀經』に云ふが如く、「佛は坐觀禮念等を勧めたまふ。皆面を西方に向ふを須ふるものは最勝なり。樹の先より傾けるは倒るるに必ず曲れるに隨ふが如くなるが故に、必ず事の礙り有りて西方に向ふに及ばずんば、但西に向ふの想を作すも亦得たり」と。

問うて曰はく、「一切の諸佛三身、同く證し悲智果圓かに、亦應に無二なるべし。方に隨ひて禮念して一佛を課稱せば、亦應に生ずることを得べし。何が故ぞ偏に西方を敬じて、勸めて禮念等を専らにせしむるは、何の義か有る。」答へて曰はく、「諸佛の所證は平等にして是れ一なれども、若し願行を以て來し收むるに、因縁無きに非ず。然るに彌陀世尊本發の深重の誓願、光明名號を以て十方を攝化し、但信心求念する者をして上は一形を盡し、下は十聲一聲等に至るまで、佛の願力を以て往生することを得易からしむ。是故に釋迦及以諸佛、勸めて西方に向はしめて別異と爲せるのみ。」

【九】 亦是れ餘佛を稱念するに、障を除き罪を滅すること能はざるには非ず。應に知るべし。若し能く上の如く念念相續し、畢命を期と爲す者は、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず。何を以ての故に。外の雜緣無く正念を得るが故に。佛の本願と相應することを得るが故に。教に違はざるが故に。佛語に隨順するが故に。若し專を捨てて雜業を修せんと欲する者は、百の時に希に一二を得、千の時に希に三五を得。何を以ての故に。乃ち雜緣亂動し正念を失するに由るが故に。佛の本願と相應せざるが故に。教と相違するが故に。佛語に順ぜざるが故に。係念相續せざるが故に。憶想間斷するが故に。廻願殷重眞實ならざ



【善知識】 正法を説きて人をして佛道に入らしめ、解脱を得しむる人を云ふ。

【無爲】 本來常住にして何物にも造作せられざる法をいふ。 日没禮讚。

【南無釋迦云々】 以下日没禮讚の文なり。

【稽首】 首を地につけて禮拜すること。

るが故に。貪瞋諸見煩惱來つて間斷するが故に。慚愧懺悔の心あること無きが故に。懺悔に三品あり、一には要、二には略、三には廣、下に具に説くが如し。意に隨ひて用ふるに皆得たり。又相續して彼佛恩を報ずることを念ぜざるが故に。心に輕慢を生じ、業行を作すと雖も、常に名利と相應するが故に。人我自ら覆ひて同行善知識に親近せざるが故に。樂、雜縁に近いて往生の正行を自障障他するが故に。何を以ての故に。余此頃諸方の道俗を見聞するに、解行不同にして專雜異有り、もし意を専らにして作す者は、十は即ち十生ず。雜を修して不至心の者は、千が中に一も無し。此二行の得失は前に辨ずるが如し。仰ぎ願くは一切の往生の人等、善く自ら思量せよ。已に能く今身に彼國に生ぜん願せん者は、行住坐臥に、必ず須らく心を勵し己を刻して晝夜廢すること莫く、畢命を期と爲すべし。上、一形に在るは少苦に似たれども、前念に命終して、後念に即ち彼國に生じ、長時永劫、常に無爲の法樂を受く。乃ち成佛に至り生死を経ず、豈快に非ずや、應に知るべし。

【一〇】 第一に、謹んで『大經』に、釋迦佛、阿彌陀佛の十二光の名を禮讚して往生を求願せよ」と勸めたまふに依り、一十九拜、日没の時に當りて禮す。中下の懺悔を取るも亦得たり。

南無釋迦牟尼佛等一切三寶

我今稽首して禮したてまつる、廻願して無量壽國に往生せん

【福田】 如來のこ  
と。

【舍利】 梵シヤリ  
ーヲ(Sarira) 佛の  
遺骨をいふ。

【歸命頂禮】 歸命  
は三寶(佛法僧)に  
歸順すること。頂  
禮は頭を地につけ  
て敬禮すること。

【三垢】 貪、瞋、  
癡の三毒の煩惱の

往  
生  
禮  
讚  
偈

此之一佛は現に是れ今時道俗等の師なり。三寶と言ふは即ち是れ福田無量なり、若し能く之を禮すること一拜すれば、即ち是れ師恩を念報して以て己が行を成ず。斯一行を以て回して往生を願ず。

南無十方三世盡虛空遍法界微塵刹土中一切三寶

我今稽首して禮したてまつる、廻願して無量壽國に往生せん

然るに十方虚空無邊なり、三寶無盡なり、若し禮すること一拜すれば、即ち是れ福田無量なり、功德無窮なり。能く心を至して之を禮すること一拜すれば、一一の佛の上、一一の法の上、一一の菩薩聖僧の上、一一の舍利の上、皆身口意業の解脱分の善根を得來りて、行者を資益して以て己が業を成ず。斯一行を以て回して往生を願ず。

南無西方極樂世界阿彌陀佛

願くは衆生と共に 悉く歸命せん、故に我頂禮して彼國に生ぜん

問うて曰はく、「何故ぞ阿彌陀と號する。」答へて曰はく、「彌陀經」及び「觀經」に云はく、「彼佛の光明無量にして、十方の國を照すに障礙する所無し。唯念佛の衆生を觀、攝取して捨てたまはず、故に阿彌陀と名く。彼佛の壽命及び其人民、無量無邊阿僧祇劫なり。故に阿彌陀と名く。」又釋迦佛及び十方の佛、彌陀の光明に十二種の名あるを讚歎して、善く衆生を勧めたまへり。」稱名禮拜相續不斷なれば現世に無量の功德を得、命終の後定めて往生することを得。「無量壽經」に説いて云ふが如くんば、それ衆生あつて斯光に遇ふ者は、三垢消滅し身意柔軟なり。歡喜踊

【三塗】地獄、餓鬼、畜生のこと。

【増上勝縁】衆生娑陀の名號を稱念すれば即ち多劫の罪消滅し、臨終に佛聖衆と共に來迎し給ひて邪業緊の能く破る者無からしむるをいふ。

躍して善心生ず。若し三塗勤苦の處に在りて此光明を見れば、復苦惱なし。壽終の後皆解脱を蒙る。無量壽佛の光明顯赫にして十方を照耀す。諸佛國土聞かざること莫し。但我のみ今其光明を稱するにあらず、一切の諸佛聲聞緣覺諸菩薩衆、咸共に歎譽すること亦復是の如し。若し衆生ありて其光明威神の功德を聞いて、日夜に稱説して至心不斷なれば、其所願に隨ひて其國に生ずることを得、常に諸の菩薩聲聞の衆に、共に歎譽して其功德を稱せられん。佛言はく我無量壽佛の光明威神の巍巍殊妙なることを説いて、晝夜一劫せんに、尙盡すこと能はざる者なり。諸の行者に白す、當に知るべし。彌陀の身相光明は、釋迦如來一劫に説きたまふとも盡すこと能はざるものなり。『觀經』に云ふが如く、一一の光明遍く十方世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。今既に『觀經』に此の如きの不思議増上の勝縁ありて行者を攝護す、何ぞ相續して稱觀禮念し往生を願ぜられん。應に知るべし。

南無西方極樂世界無量光佛  
 願くば衆生と共に 咸く歸命せん、故に我頂禮して彼國に生ぜん

南無西方極樂世界無邊光佛  
 願くば衆生と共に 咸く歸命せん、故に我頂禮して彼國に生ぜん

南無西方極樂世界無礙光佛  
 願くば衆生と共に 咸く歸命せん、故に我頂禮して彼國に生ぜん

南無西方極樂世界無對光佛

願ねがくば衆しゆ生じやうと共ともに 咸ことごとくく歸き命めいせん、故ゆゑに我われ頂ちやう禮らいして彼かの國くにに生しやうぜん  
南な無む西さい方ほう極ごく樂らく世せ界かい炎えん王わう光くわう佛ぶつ

願ねがくば衆しゆ生じやうと共ともに 咸ことごとくく歸き命めいせん、故ゆゑに我われ頂ちやう禮らいして彼かの國くにに生しやうぜん  
南な無む西さい方ほう極ごく樂らく世せ界かい清せい淨じやう光くわう佛ぶつ

願ねがくば衆しゆ生じやうと共ともに 咸ことごとくく歸き命めいせん、故ゆゑに我われ頂ちやう禮らいして彼かの國くにに生しやうぜん  
南な無む西さい方ほう極ごく樂らく世せ界かい歡くわん喜ぎ光くわう佛ぶつ

願ねがくば衆しゆ生じやうと共ともに 咸ことごとくく歸き命めいせん、故ゆゑに我われ頂ちやう禮らいして彼かの國くにに生しやうぜん  
南な無む西さい方ほう極ごく樂らく世せ界かい智ち慧えい光くわう佛ぶつ

願ねがくば衆しゆ生じやうと共ともに 咸ことごとくく歸き命めいせん、故ゆゑに我われ頂ちやう禮らいして彼かの國くにに生しやうぜん  
南な無む西さい方ほう極ごく樂らく世せ界かい不ふ斷たんとくわう光くわう佛ぶつ

願ねがくば衆しゆ生じやうと共ともに 咸ことごとくく歸き命めいせん、故ゆゑに我われ頂ちやう禮らいして彼かの國くにに生しやうぜん  
南な無む西さい方ほう極ごく樂らく世せ界かい難なん思し光くわう佛ぶつ

願ねがくば衆しゆ生じやうと共ともに 咸ことごとくく歸き命めいせん、故ゆゑに我われ頂ちやう禮らいして彼かの國くにに生しやうぜん  
南な無む西さい方ほう極ごく樂らく世せ界かい無む稱じやう光くわう佛ぶつ

願ねがくば衆しゆ生じやうと共ともに 咸ことごとくく歸き命めいせん、故ゆゑに我われ頂ちやう禮らいして彼かの國くにに生しやうぜん  
南な無む西さい方ほう極ごく樂らく世せ界かい超ちやう日にち月げつ光くわう佛ぶつ

願ねがくば衆しゆ生じやうと共ともに 咸ことごとくく歸き命めいせん、故ゆゑに我われ頂ちやう禮らいして彼かの國くにに生しやうぜん



南無西方極樂世界阿彌陀佛

哀愍して我を覆護し、法種をして增長せしめ

此世及び後生に、願くば佛常に攝受したまへ

南無西方極樂世界觀世音菩薩

願くば衆生と共に、咸く歸命せん、故に我頂禮して彼國に生ぜん

南無西方極樂世界大勢至菩薩

願くば衆生と共に、咸く歸命せん、故に我頂禮して彼國に生ぜん

此二菩薩は、一切衆生の臨命終の時に、共に華鬘を持って行者に授與す。阿彌陀佛は大光明を放ちて行者の身を照す。復無數の化佛菩薩聲聞大衆等と共に、一時に手を授けて如彈指の

頌に即ち往生することを得。報恩の爲の故に、心を至して之を禮すること一拜す。

南無西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆

願くば衆生と共に、咸く歸命せん、故に我頂禮して彼國に生ぜん

此等の諸菩薩亦佛に隨つて來りて行者を迎接す。報恩の爲の故に心を至して之を禮すること一拜す。

普く師僧父母及び善知識、法界の衆生、三障を斷除して、同じく阿彌陀佛國に往生せん

ことを得んが爲に、歸命して懺悔す。

至心に懺悔す。

【彈指頌】 一彈指と同じ。

【法界】 宇宙。事物物心。すべてのの世界。

【三障】 煩惱障、業障、報障にして正道を障ふる三種のさわり。

【懺悔】 過去の罪惡をさとりて悔い改むること。

【作梵】 清淨の音を傳ふるといふ意にて梵唄といふ。

【無上菩提】 佛のさとり。

【無量壽國】 阿彌陀佛の壽命は長遠にして計りがたきが故に、彌陀の淨土をかくいふなり。【薩婆若】 梵にサルバチユニヤト(Śarvajñā)一切智と譯す。【總持門】 陀羅尼門のこと。

南無懺悔十方佛、願くば一切の諸の罪根を滅したまへ

今久近所修の善を將て、廻して自他の安樂の因と作す

恆に願くば一切臨終の時、勝緣勝境悉く現前せん

願くば彌陀大悲王、觀音勢至十方尊を觀たてまつらん

仰ぎ願くば神光授手を蒙りて、佛の本願に乗じて彼國に生ぜん

懺悔廻向發願しじつて、至心に阿彌陀佛に歸命したてまつる

次に作梵し竟りて、偈を説きて發願す。

禮懺諸の功德もて、願くば命終の時に臨みて

無量壽佛の、無邊功德の身を見たてまつらん

我及び餘の信者は、既に彼佛を見じりて

願くば離垢の眼を得、安樂國に往生して

無上菩提を成ぜん

禮懺し已んぬ一切恭敬す。

佛の善徳を得たまふに歸す、道心恆に不退ならん、願くば諸の衆生と共に廻願して、

無量壽國に往生せん

法の薩婆若に歸す、大總持門を得ん、願くば諸の衆生と共に、廻願して、無量壽國に往

生せん

【和南】梵にワン  
ダナ (Vandana)  
稽首、禮拜、敬禮  
などと譯す。

【人間云云】以下  
日沒禮讚無常偈。  
【六道】地獄、餓  
鬼、畜生、修羅、餓  
人間、天上の六趣。

【願くば云云】以  
下發願文。

【煩惱云云】以下  
初夜禮讚無常偈。

僧の諍論を息むるに歸す、同じく和合海に入らん。願くば諸の衆生と共に廻願して、無量壽國に往生せん

願くば諸の衆生、三業清淨にして佛敎を奉持し、一切の賢聖を和南せん。願くば諸の衆生と共に廻願して、無量壽國に往生せん

諸衆等聽きたまへ、日沒無常の偈を説かん。

人間忽として衆務を営み、年命の日夜に去ることを覺らす

燈の風中に滅なんこと期し難きが如し、忙忙たる六道定趣無し

未だ解脱して苦海を出ることを得ず、云何が安然として驚懼せざる

各開け強健有力の時、自策自勵して常住を求めよ

此偈を説き已りて、更に當に心口に發願すべし。

願くば弟子等、命終の時に臨んで、心顛倒せず、心錯亂せず、心失念せず、身心に諸

の苦痛無く、身心快樂にして禪定に入るが如く、聖業現前したまひ、佛の本願に乗じて阿

彌陀佛國に上品往生せしめたまへ。彼國に到り已りて、六神通を得て十方界に入りて、

苦の衆生を救攝せん。虚空法界も盡きんや、我願も亦是の如くならんと。發願し已つて至

心に阿彌陀佛に歸命したてまつる。

初夜の偈に云はく、

煩惱深うして底無く、生死の海邊り無し

【汝等云云】以下  
中夜禮讚無常偈。

【時光云云】以下  
後夜禮讚無常偈。

【寂滅云云】以下

晨朝禮讚無常偈。  
【寂滅】生も滅も  
共に無くなりて無  
爲寂滅になりたる  
境界のこと。

【沙門】出家して  
佛道を修むる人を  
いふ。

【六念】念佛、念  
法、念僧、念戒、念  
施、念天の稱。  
この六念を修すれ  
ば涅槃に趣くこと  
を得といへり。

【人生ける云云】

苦を度るの船未だ立たず、云何が楽しんで睡眠せん  
勇猛に勤精進して、心を攝して常に禪に在け

中夜の偈に云はく、

汝等臭屍を抱いて臥すこと勿れ、種種の不浄を假に人と名く、  
重病を得て箭の體に入るが如し、衆の苦痛集る安んぞ眠るべき  
後夜の偈に云はく、

時光選りて流轉し、忽ち五更の初に至る  
無常念念に至り、恆に死王と居す

諸の行道の者を勸む、勤修して無餘に至れ  
平日の偈に云はく、

寂滅の樂を求めんと欲せば、當に沙門の法を學すべし  
衣食、身命を支ふ、精盡衆に隨つて得

諸衆等今日、晨朝に各六念を誦せよ  
日中の偈に云はく、

人生けるととき精進ならずんば、喩へば樹の根無きが若し  
華を採つて日中に置かんに、能く幾時か鮮かなることを得ん  
人命も亦是の如し、無常は須臾の間なり



以下日中禮讚無常偈。  
【一】 初夜禮讚。

諸の行道の衆を勸む、勤修して乃ち眞に至りたまへ  
【二】 第二に、沙門善導譯んで、大經に依りて要文を採集して、以て禮讚の偈を爲す、  
二十四拜、初夜の時に當りて禮す。懺悔、前後に同じ。

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彌陀の智願海は、深廣にして涯底無し

名を聞いて往生せんと欲すれば、皆悉く彼國に到る

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

此世界の中に於て、六十有七億の

不退の 諸の菩薩、皆當に彼に生ずることを得べし

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

小行の 諸の菩薩、及び少福を修する者

其數計ふべからず、皆當に彼に生ずることを得べし

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

十方佛刹の中の、菩薩比丘衆

【不退】 修行の過  
程に於て、既に得  
たる地位功德を決  
して退失すること  
無き菩薩位をいふ。  
不退轉ともいふ。

【最勝尊】如来をいふ。最も勝れたる尊き人の意。

【生死の雲】生死界に迷ふ因たる煩惱のこと。

劫を極むるも計ふべからず、皆當に彼に生ずるを得べし

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

一切の諸の菩薩、各天の妙華と

寶香と無價の衣とを齎つて、彌陀佛を供養したてまつる

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

咸然として天樂を奏し、和雅の音を暢發し

最勝尊を歌歎して、彌陀佛を供養したてまつる

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

慧日世間を照して、生死の雲を消除したまふ

恭敬して遶ること三匝して、彌陀尊を稽首したてまつる

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彼嚴淨の土を見るに、微妙にして思議し難し

因つて無上心を發す、願くば我國も亦然ならんと

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

時に應じて無量尊、容を動かして欣笑を發し  
口より無數の光を出して、遍く十方の國を照したまふ

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

光を廻して身を圍遶すること、三匝して頂より入る  
一切の天人衆、踴躍して皆觀喜す

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

梵聲は雷震の如く、八音妙響暢べたまふ  
十方より來れる正士、吾悉く彼願を知れり

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彼嚴淨の國に至らば、便ち速かに神通を得ん  
必ず無量尊に於て、記を受けて等覺を成すべし

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

【梵聲】 清らかなる聲、即ち佛の聲をいふ。

【八音】 如來の八種の音聲。即ち、極好、柔軟、和適、尊慧、不女、不誤、深遠、不竭の八なり。

【記】 記別ともいふ。修通者に關する佛の豫言をいふ。

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

億の如來に奉事するに、飛化して諸刹に遍し

恭敬し歡喜し去つて、還つて安養國に到る

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

若し人善本無ければ、佛名を聞くことを得ず

憍慢と弊と懈怠とは、以て此法を信じ難し

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

宿世に諸佛に見ゆるもの、則ち能く此事を信ず

謙敬して聞いて奉行し、踴躍して大に歡喜す

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

其れ彼彌陀佛の、名號を聞くことを得る有りて

歡喜して一念に至るまで、皆當に彼に生ずることを得べし

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん



【大千】大千世界

設たてひ大千だいせんに滿みらん火ひをも、直ただちに過すつて佛ぶつ名みやうを聞きけ

名なを聞きいて歡くわん喜しして讚さんずれば、皆みな當たうに彼かに生しやうずることを得うべし

願ねがくば諸しよの衆しゆ生じやうと共に、安あん樂らく國こくに往わう生じやうせん

南なん無む至し心しん歸き命めい禮らい西さい方ほう阿あ彌み陀た佛ぶつ

萬ま年ねんに三さん寶ぼう滅めつすれども、此こ經きやう住じゆうすること百ひやく年ねんならん

爾なん時に聞きいて一いつ念ねんせんも、皆みな當たうに彼かに生しやうずることを得うべし

願ねがくば諸しよの衆しゆ生じやうと共に、安あん樂らく國こくに往わう生じやうせん

南なん無む至し心しん歸き命めい禮らい西さい方ほう阿あ彌み陀た佛ぶつ

佛ぶつ世ぜには甚はだ値ぢひ難がたく、人ひと信しん慧え有あることも難がたし

希けい有ゆうの法ほふを聞きくに遇あへること、此これ復また最もつとも難がたしと爲なす

願ねがくば諸しよの衆しゆ生じやうと共に、安あん樂らく國こくに往わう生じやうせん

南なん無む至し心しん歸き命めい禮らい西さい方ほう阿あ彌み陀た佛ぶつ

自みづから信しんじ人ひとをして信しんぜしむるは、難がたきが中なかに轉うたた更さらに難がたし

大だい悲ひを傳つたへて普あまく化けすれば、眞ま成ぢやうに佛ぶつ恩おんを報けうするなり

願ねがくば諸しよの衆しゆ生じやうと共に、安あん樂らく國こくに往わう生じやうせん

南なん無む至し心しん歸き命めい禮らい西さい方ほう阿あ彌み陀た佛ぶつ

哀あ慙いぜんして我われを覆ふく護ごし、法ほふ種しゆをして増ぞう長ちやうせしめ

【三】 中夜禮讚。

此世及び後生に、願くば佛常に攝受したまへ  
願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界觀世音菩薩

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界大勢至菩薩

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

普く師僧父母及び善知識法界の衆生、三障を斷除して同じく阿彌陀佛國に往生せんこと

を得んが爲に、歸命し懺悔す。

【三】 第三に謹んで、龍樹菩薩の願往生禮讚の偈に依り、一十六拜、中夜の時に當りて

懺悔前後  
禮す。に同じ。

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

天人に恭敬せられたまふ、阿彌陀仙の兩足尊を稽首したてまつる

彼微妙安樂國に在して、無量の佛子衆に圍遶せられたまふ

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

【奢摩他】舍摩他とも書く。梵音シマトハ (Samat) 止、止息、寂靜、正受、能調、能滅などと譯す。

【天鼓】一切利天の善法堂の前にある太鼓。人の叩くを須たゞ、自然に鳴る。怨來、怨去、愛欲、生厭の四種の聲を出すといふ。

【俱翅迦】鳥名、聲うるはしく形醜なり、よく繁茂せる林を好み、枯樹に栖まずといふ。

金色の身は淨うして山王の如し、奢摩他の行は象の歩むが如し

兩目は淨くして青蓮華の如し、故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

面善は圓淨にして滿月の如く、威光は猶し千の日月の如し

聲は天鼓俱翅羅の如し、故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

觀音頂戴して冠中に住す、種種の妙相寶もて莊嚴せらる

能く外道と魔との憍慢を伏す、故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

無比無垢にして廣うして清淨なり、衆德皎潔なること虚空の如し

所作の利益に自在を得たまへり、故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

十方名聞の菩薩衆、無量の諸魔常に讚歎す

諸の衆生の爲に願力もて住したまふ、故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に住せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
金底寶間の池に生ぜる華は、善根所成の妙臺座なり

彼座上に於て山王の如し、故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に住せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

十方所來の諸の佛子、神通を顯現して安樂に至り

尊顏を瞻仰して常に恭敬す、故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に住せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

諸有は常無く我等無し、亦水月と電と影と露との如し

衆の爲に法の名字無きことを説きたまふ、故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に住せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彼尊の佛刹には惡の名も無し、亦女人惡道の怖も無し

衆人心を至して彼尊を敬ふ、故に我彌陀尊を頂禮したてまつる



【諸趣】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六趣を指す。

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彼尊の無量方便の境には、諸趣と惡知識と有ること無し

往生すれば不退にして菩提に至る、故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

我彼尊の功德の事を説く、衆善無邊にして海水の如し

獲る所の善根清淨なる者、衆生に回施して彼國に生ぜしめん

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

哀愍して我を覆護し、法種をして增長せしめ

此世及び後生、願くば佛常に攝受したまへ

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界觀世音菩薩

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界大勢至菩薩

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

【三障】正道を妨ぐる三種の障。煩惱障、業障、報障なり。

【空慧を以て云ふ】光明は智慧の相なり。故に今遍照の光明を以てと云ふべきを、其體を表して空慧と云ふ。

南無至心歸命禮西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

普く師僧父母及び善知識、法界の衆生三障を斷除して、同じく阿彌陀佛國に往生せんことを得んが爲に、歸命し懺悔す。

至心に懺悔す

無始自從身を受けて來た、恆に十惡を以て衆生に加ふ

父母に孝せず三寶を謗じ、五逆不善の業を造作す

是衆罪の因縁を以ての故に、妄想顛倒して纏縛を生ず

應に無量生死の苦を受くべし、頂禮して懺悔したてまつる、願くは滅除せしめたまへ。

懺悔し已んぬ、至心に阿彌陀佛に歸命したてまつる

至心に勸請したてまつる

諸佛大慈無上尊、恆に空慧を以て三界を照らしたまふ

衆生盲冥にして覺知せず、永く生死の大苦海に没す

群生を抜いて諸の苦を離れしめんが爲に、勸請したてまつる、常に住して法輪を

轉じたまへ

勸請し已んぬ、至心に阿彌陀佛に歸命したてまつる

至心に隨喜す

【原劫】多くの劫を厚意。劫は極めて長き時間をあらはす。劫波云々三略。

歴劫より已來嫉妬を懷く、我慢放逸は癡に由りて生ず

恆に瞋恚毒害の火を以て、智慧慈善根を覺燒す

今日思惟し始めて惺悟して、大精進隨喜の心を發す

隨喜し已んぬ、至心に阿彌陀佛に歸命したてまつる

至心に廻向す

三界の内に流浪して、癡愛をもて胎獄に入る

生じ已つて老死に歸し、苦海に沈没す

我今此福を修す、廻して安樂土に生ぜん

廻向し已んぬ、至心に阿彌陀佛に歸命したてまつる

至心に發願す

願くば胎藏の形を捨てて、安樂國に往生し

速かに彌陀佛の無邊、功德の身を見たてまつり

諸の如來、賢聖を觀奉らんことも亦復然たり

六神通の力を獲て、苦の衆生を救攝せん

虛空法界も盡きんや、我願も亦是の如し

發願し已んぬ、至心に阿彌陀佛に歸命したてまつる

餘悉く上の法に同じ。

【二】 第四に謹んで、天親菩薩の願往生禮讚の偈に依り、二十拜、後夜の時に當りて

【一】 後夜禮讚。

【三界の道】三有とも云ふ。一切衆生の生死輪回する世界を三趣に分つ欲界一色界一無色界。

禮す。懺悔前後

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

世尊我一心に、盡十方

無礙光如來に歸命したてまつる、佛の教と相應せん

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彼世界の相を觀するに、三界の道に超過せり

究竟じて虚空の如く、廣大にして邊際無し

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

正道の大慈悲は、出世の善根より生ず

淨光 明満足して、鏡と日月輪との如し

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

諸の珍寶の性を備へて、妙莊嚴を具足し

無垢の光焰熾にして、明淨にして世間を曜す

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん



南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

寶華千萬種にして、池流泉に彌覆せり

微風華葉を動せば、交錯して光亂轉す

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

宮殿 諸の樓閣、十方を觀るに礙り無し

雜樹に光色を異にして、寶欄遍く圍遶せり

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

無量の寶交絡して、羅網虚空に遍す

種種の鈴響を發して、妙法音を宣吐す

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

梵音の悟深遠なり、微妙にして十方に聞ゆ

正覺の阿彌陀、法王善く住持したまふ

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

【梵音】 清淨なる  
音聲の義如來の音  
聲、又は經法の聲  
をいふ。

【正覺華】 閃位の  
願行に酬いて、正  
覺を成就したる如  
來が、坐し給へる  
蓮華を云ふ。

【根缺】 聾瞶盲の  
如く、不具なるも  
のをいふ。

如來淨華の衆は、正覺の華より化生す

佛法味を愛樂し、禪三昧を食と爲す

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

永く心身の惱を離れて、樂を受くること常に間無し

大乘善根の界、等うして譏嫌の名も無し

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

女人及び根缺と、二乗の種とは生ぜず

衆生の願樂する所、一切能く満足す

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

無量寶王、微妙の淨華臺にまします

相好の光一尋にして、色像群生に超えたり

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

天人不動の衆は、清淨の智海より生ず

須彌山王の如く、勝妙にして過る者無し

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

天人丈夫の衆、恭敬して遶りて瞻仰したてまつる

天の樂と華と衣と妙香等を、雨らして供養したてまつる

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

安樂國は清淨にして、常に無垢輪を轉す

一念及び一時に、諸の群生を利益す

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

佛の諸の功徳を讚するに、分別の心あること無し

能く速かに、功徳大寶海を満足せしむ

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

哀愍して我を覆護し、法種をして增長せしめ

此世及び後生に、願くば佛常に攝受したまへ

【二四】 晨朝禮讚。

【法藏】阿彌陀佛の因位の名なり。五劫思惟して四十願を發す、兆載永劫に六度萬行を修す。故に因彌遠と云ふ。

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界觀世音菩薩

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界大勢至菩薩

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

普く師僧父母及び善知識、法界の衆生、三障を斷除して同じく阿彌陀佛國に往生せんことを得んが爲に、歸命し懺悔す。

【二四】 第五に、謹んで彥珠法師の願往生禮讚の偈に依り、二十一拜、且起の時に當りて禮す。懺悔前後

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

法藏の因彌遠ければ、極樂の果も還深し

異珍參りて地を作し、衆寶間りて林と作る

華は開く希有の色、波は揚ぐ寶相の音

何か當に授手を蒙りて、一たび往生の心を遂ぐべき

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん



南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

濁世には還入り難し、淨土の願逾深し

金繩直うして道を界ひ、珠網縷うして林に垂る

色を見れば皆眞色、音を聞けば悉く法音

西方遠しと謂ふこと莫れ、唯十念の心を須ひよ

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

已に窮理の聖と成りて、眞に遍空の威有り

西に在りて時に小を現す、但是れ暫く機に隨ふなり

葉珠相映飾し、砂水共に澄輝す

無生の果を得んと欲せば、彼土に必ず須らく依るべし

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

五山の毫獨り朗かに、寶手の印恆に分れたり

地水俱に鏡と爲り、香華同じく雲と作る

業深きは往き易きことを成し、因淺きは實に聞き難し

必ず望むらくは疑惑を除いて、超然として獨り群ならざれ

【五山の毫】眉間  
の白毫は五須彌山  
の如きを云ふ

【十念の心】十念  
を具足して南無阿  
彌陀佛と稱すれば  
即ち淨土に往生す  
ることを得

【無縁云云】觀經に無縁の慈を以て諸の衆生を攝すとあるによる。  
【有相云云】觀經の念佛を行ずる者等の如きは、皆相善を以て彼國に往生すると云ふに依る。

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

心は眞慈を帯びて満てり、光は法界を含んで團なり

無縁能く物を攝し、有相定んで難きに非ず  
華は木心に隨つて變じ、宮は移りて身自ら安し

出世の境を聞かんと怖はば、須らく共に禪に入りて看るべし  
願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
廻向漸く功を爲せば、西方の路稍通ず

寶幢厚地に承け、天香遠風に入る

開華は重なりて水に布き、覆網は細くして空に分つ

願生何の意にてか切なる、正に樂の無窮なるが爲なり  
願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

當生の處を選ばんと欲せば、西方に最も歸すべし

樹を間てて重閣を開き、道に満てて鮮衣を布く

香飯心に隨つて至り、寶殿身を逐うて飛ぶ

緣有れば皆入ることを得、正に自ら往く人希なり

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

十劫に道先づ成りて、界を嚴りて群萌を引く

金砂水を徹して照し、玉葉枝を滿ちて明けし

鳥は本珠の中より出で、人は唯華の上に生ず

敢て請ふ西方の聖、早晩か定んで相迎へたまはん

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

十方諸佛の國は、盡く是れ法王の家なれども

偏に有縁の地を求む、冀くば早かに邪無きを得ん

八功如意の水、七寶自然の華

彼に於て心能く係れば、當に必ず往くべし餘かなるに非ず

願くば諸の衆生と共に安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

淨國衰變無し、一たび立ちて古今然なり

光臺に千寶を合し、音樂八風に宣ぶ

【毘舍】毘舍離國の人民五種の惡病あり。

【韋提】觀經説示の韋提希夫人を指す。

【六時云云】小經に晝夜六時に諸鳥和雅の音を出すによる。

【四寸云云】華敷きて、瓣香芬烈たり、足その上を履むに陷下すること四寸なるに依る。

【三福】釋尊が觀無量壽經に於て示せる散善の行業な

池には多し説法の鳥、空には滿つ散華の天生を得ては退くことを畏れず、意に隨うて既に蓮を聞く願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

生華一像に非ず、聖衆亦量り難し

蓮開けて人獨り處し、波生りて法自ら揚ぐ

無災なるは處の靜なるに由り、不退なるは朋の良に爲る

彼前生の輩に問ふ、斯に來ることは幾劫にか強むる

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

光舒べて毘舍を救ひ、空に立ちて韋提を引く

天來りて香蓋を捧げ、人去りて寶衣を齎す

六時鳥を聞いて合り、四寸華を踐んで低る

相看るに正しからずといふこと無し、豈復長き迷あらんや

願くば諸の衆生と共に安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

普く勸む三福を弘めて、成く五燒を滅せしめよ



り。福は善業の意  
 世出の善を三種  
 に分類して三福と  
 備す。世福、戒福  
 行福と云なり。世  
 福とは、父母に孝  
 養し、師長に奉事  
 し、慈心にて殺さ  
 ず、十善業を修す  
 るなり。戒福とは  
 三歸を奉持し、衆  
 戒を具足し威儀を  
 犯さざるなり。行  
 福とは、菩提心を  
 起し、深く因果を  
 信じ、大乘を讀誦  
 し、行者を勸進す  
 るなり。而して、  
 世俗の善根の故に  
 世福といひ、佛説  
 の律の故に戒福  
 といひ、大乘の行  
 法の故に行福とい  
 ふ。

【五燒】 五感、殺

生、偷盜、邪淫、

妄語、飲酒を犯

せる者の受くる果

報なり。即ち來世

に於て三塗の苦境

に沈むをいふ。

發心の功已に至れば、念を係るに罪便ち消ゆ  
 烏華かにして珠の光を轉じ、風好くして樂の聲を調ぶ  
 但行道の易きを忻べ、寧ぞ聖果の遙なるを愁へんや  
 願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん  
 南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

珠色は仍水を爲し、金光即ち是れ臺なり  
 時に到りて華自ら散り、願に隨うて華還開く  
 池に遊んで 更に出沒し、空に飛んで互に往來す  
 直心に能く彼に向ひ、善有れば併せて須らく廻すべし  
 願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん  
 南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

心を洗ふ甘露の水、目を覺ばしむ妙華の雲  
 同生の機識り易く、等壽の輩分ち難し  
 樂多けれども道を廢すること無く、聲遠けれども聞くを妨げず  
 如何が五濁を食りて、安然として火に自ら焚くや  
 願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん  
 南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

【六根】眼耳鼻舌  
身意なり。  
【三塗】火塗(地  
鼠)血塗(畜生)刀  
塗(飛鬼)の稱。三  
惡趣に同じ。

臺の裏に天人現はれ、光の中に侍者看えたり  
空に懸る四寶の閣、廻るに臨む七重の欄

疑多きは邊地久し、徳少きは上生難し

日く餘願を論すること莫れ、西方己心に安んず

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

六根常に道に合ひ、三塗永く名を絶つ

念の頃に遊方遍く、還る時に得忍成る

地平にして極り無く廣く、風長へにして是處清し

言を有心の輩に寄す、共に一苦の城を出でよ

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

哀愍して我を覆護し、法師をして増長せしめ

此世及び後生に、願くば常に攝受したまへ

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界觀世音菩薩

千輪足下に明かに、五道光中に現す

【口に宣べ云云】  
八地已上の菩薩皆  
此徳を具足す。

【一の金蓮云云】  
大勢至右に、觀音  
左に坐して一つの  
端陀に奉侍す。

【二五】 日中禮讚。

悲引恆に絶ゆること無く、人歸亦未だ窮らず

口に宣べて猶定に在り、心靜にして更に通を飛ばす

名を聞いて皆往かんことを願ふ、日に幾く華叢をか發く

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界大勢至菩薩

慧力は無上を標し、身光は有縁に備ふ

諸の寶國を動搖して、一の金蓮に持坐す

鳥群は寶鳥に非ず、天類豈眞天ならんや

須らく知るべし妙樂を求めば、會ず是れ戒香を全うせよ

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

普く師僧父母及び善知識、法界の衆生、三障を斷除して、同じく阿彌陀佛國に往生せん

ことを得んが爲に、歸命し懺悔す。

【二五】 第六に沙門善導の願往生禮讚の偈、讀んで十六觀に依りて、二十拜を作る、日

中の時に當りて禮す。懺悔、前後

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彼彌陀の極樂界を觀するに、廣大寛平にして衆寶もて成す

四十八願より莊嚴起る、諸の佛刹に超えて最も精爲り

本國他方の大海衆は、劫を窮めて算數すれども名を知らじ

普く勤む西に歸して彼會に同ずれば、恆沙の三昧自然に成す

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

地下の莊嚴七寶の幢、無量無邊無數億なり

八方八面百寶をもて成す、彼を見れば無生自然に悟る

無生の寶國永く常爲り、一一の寶、無數の光を流す

行者心を傾けて常に目に對して、神を騰げ踊躍して西方に入れ

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

地上の莊嚴轉極り無し、金繩道を界ふ、工匠に非ず

彌陀の願智巧に莊嚴す、菩薩人天、華を散じて上つる

寶地に寶色あつて寶光飛ぶ、一一の光は無數の臺と成る

臺中の寶樓千萬億なり、臺の側に百億の寶幢圍れり

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん



南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

一一の臺の上虚空の中、莊嚴寶樂亦窮り無し

八種の清風、光を尋ねて出づ、時に隨つて樂を鼓つ、應に機の音あり

機音は正受にして稍難しと爲す、行住坐臥に心を攝して觀じ

唯睡時を除いて常に憶念せよ、三昧は無爲にして即ち涅槃なり

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

寶國寶林に諸の寶樹あり、寶華寶葉寶根莖なり

或は千寶を以て林を分つて異なり、或は百寶有つて共に行を成す

行行相當り葉相次げり、色各同じからず光も亦然なり

等量齊く高くして三十萬なり、枝條相觸れて無生を説く

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

七重の羅網七重の宮、綺互回光して相映發す

化天童子皆充滿せり、瓔珞の輝光は日月に超えたり

行行の寶葉色千般なり、華敷きて等しうして旋金輪の如し

菓光を變じて衆寶の蓋と成る、塵沙の佛刹現じて無邊なり

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

寶池寶岸寶金の沙、寶渠寶葉寶蓮華有り

十二山旬にして皆正等なり、寶羅寶網寶欄巡る

徳水流を分ちて寶樹を尋ね、波を聞き樂を觀て恬怕を證す

言を寄す有縁の同行者、努めて迷を翻して本家に還れ

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

一一の金繩道の上に界ひ、寶樂寶樓千萬億なり

諸天童子は香華を散じ、他方菩薩は雲の如くに集る

無量無邊にして能く計ること無し、彌陀を稽首して恭敬して立つ

風鈴 樹響は虚空に過じ、三尊を歎説するに極り有ること無し

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彌陀の本願、華王の座、一切の衆寶以て成ずることを爲せり

臺上の四幢に寶幔を張り、彌陀獨り坐して眞形を顯す

眞形の光明は法界に遍じ、光觸を蒙る者は心不退なり

【三尊】彌陀、觀音、勢至。

晝夜六時に専ら想念すれば、終る時快樂にして三昧の如し

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彌陀の身心は法界に遍じ、衆生心想の中に影現す

是故に汝に勸む常に觀察して、依心起想して眞容を表せよ

眞容の寶像は華座に臨めり、心開けて彼國の莊嚴を見ば

寶樹三尊華遍滿し、風鈴樂響は文と同じ

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彌陀の身色は金山の如し、相好光明十方を照す

唯念佛のみ有つて光攝を蒙る、當に知るべし本願最も強しと爲す

六方の如來舌を舒べて證す、専ら名號を稱すれば西方に至ると

彼に到り華開けて妙法を聞けば、十地の願行自然に彰る

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

觀音菩薩の大慈悲、已に菩提を得れども捨てて證せず

一切の五道を身中に入れて、六時に觀察して三輪應す

【光攝】 光明攝のこと。

【六方の如來云云】 小經の東西南北上下の各世界の諸佛が廣長の舌相を出して證説し給へるを云ふ。

應現の身光紫金色なり、相好威儀轉極り無し。  
恆に百億光王の手を舒べて、普く有縁を攝して本國に歸る。  
願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん。

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

勢至菩薩は思議し難し、威光普く無邊際を照す。

有縁の衆生 光 觸を蒙れば、智慧を増長して三界を超ゆ。

法界傾搖すること轉蓬の如し、化佛雲集して虚空に滿つ。

普く有縁を勸む常に憶念して、永く胞胎を絶ちて六通を證せよ。

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん。

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

正坐跏趺して三昧に入れば、想心に乘じて西方に至る。

彌陀の極樂界を觀見するに、地上虚空七寶をもて莊れり。

彌陀の身量極めて無邊なり、重ねて衆生に勸む小身を觀ぜよ。

丈六八尺、機に隨つて現す、閻光化佛、前眞に等し。

願くば 諸の衆生と共に、安樂國に往生せん。

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

上輩は上行にして上根の人なり、淨土に生ずることを求めて貪瞋を斷ず。

【跏趺】 結跏趺坐  
なり。

【丈六八尺】 一丈六尺の佛身釋迦佛の身量は一丈六尺なりしといふ。佛在世の常人の身量は八尺にして佛は其倍なるが故に一丈六尺なりといふ。



【無爲法性の身】  
佛果のこと。

【十惡】殺生、偷  
盜、邪淫、妄語、  
綺語、惡口、兩舌  
貪欲、瞋恚、愚癡  
の十種の惡業の稱  
【五逆】五逆罪ともいふ  
父を殺す、母を殺す、  
阿羅漢を殺す、佛  
舎を破す、佛  
身より血を出すの  
罪なり。

行の差別に就いて三品を分つ、五門相續して三因を助く  
一日七日専ら精進なれば、畢命に臺に乗じて六塵を出づ  
慶ばしい哉逢ひ難うして今遇ふことを得たり、永く無爲法性の身を證せん  
願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
中輩は中行にして中根の人なり、一日齋戒して金蓮に處す  
孝養父母を廻向せしめて、爲に西方快樂の因なりと説く  
佛聲聞衆と來取して、直ちに彌陀の華座の邊に到る  
百寶の華に藏つて七日を經、三品蓮開けて小身を證す  
願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

下輩は下行にして下根の人なり、十惡五逆等の貪瞋  
四重と偷僧と謗正法と、未だ曾て慚愧して前愆を悔いず  
終る時苦相雲の如くに集る、地獄の猛火罪人の前に在り  
忽に往生の善知識に遇ふに、急に勸めて専ら彼佛名を稱せしむ  
化佛菩薩は聲を尋ねて到り、一念心を傾けて寶蓮に入る  
三華障重うして多劫に閉く、時に始めて菩提の因を發す

【般若】梵に(Prasajya)智慧と譯す。

【七覺】七覺支のこと。修道の時その眞偽、善惡を觀察覺了するを云ふ。

【八背】八種の解脱觀を云ふ。欲界の五欲を背棄し、その執著心を捨つるが故に背捨と云ふ。

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彌陀佛國は能と所との感なり、西方極樂は思議し難し

渴して般若を聞き漿を思ふことを絶つ、念じて無生を食し即ち飢を斷つ

一切の莊嚴皆法を説く、心の領納無うして自然に知る

し覺の華池意に隨つて入り、八背神を凝して一枝に會す

無量の菩薩を同學と爲す、性海の如來盡く是れ師なり

彌陀の心水身頂に沐し、觀音勢至衣を與へて被せしむ

歎爾ち空に騰つて法界に遊ぶ、須臾に記を授かりて無爲と號す

此の如く逍遙して極り無き處、吾今去らずんば何の時をか待たん

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

哀愍して我を覆護し、法種をして增長せしめ

此世及び後生に、願くば佛常に攝受したまへ

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

南無至心歸命禮西方極樂世界觀音勢至諸菩薩清淨大海衆

願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん

【三障】正道を妨ぐる三種のさわり煩悩障、業障、報障なり。

【六】懺悔に三品あるを説く。

【七】以下廣懺悔文なり。  
【十二部經】十二分經とも云ふ。佛説法の體裁に十二様あるをいふ。  
【八龍八部】天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽のこと。

普く師僧父母及び善知識法界衆生、三障を斷除して同じく阿彌陀佛國に往生せんことを得しめんが爲に歸命し、懺悔す。上の二品の懺悔發願等前に同じ。要の中の要を須たば初を取れ。略の中の略を須たば中を取れ。廣の中の廣を須たば下を取れ。其廣は實に心に生を願することある者に就いて勸む。或は四衆に對し、或は十方の佛に對し、或は舍利尊像大衆に對し、或は一人に對す。若は獨自等なり。又十方盡虛空の三寶及び盡衆生界等に向ふ。具に向つて發露懺悔すべし。

【六】懺悔に三品あり、上中下なり。上品の懺悔とは、身の毛孔の中より血流れ、眼の中より血出づる者を、上品の懺悔と名く。中品の懺悔とは、遍身に熱汗毛孔より出で、眼の中より血流るる者を、中品の懺悔と名く。下品の懺悔とは、遍身徹して熱く、眼の中より涙出づる者を、下品の懺悔と名く。此等の三品は差別有りとし雖も、即ち是れ久しく解脫分の善根を植ゑたる人なり。今生に、法を敬ひ人を重んじ、身命を惜しまず、乃至小罪までも、若し懺すれば即ち能く心に徹し髓に徹せしむることを致す。能く此の如く懺すれば久近を問はず、有ゆる罪障頭に皆滅盡す。若し此の如くならずんば、縱使日夜十二時急走すとも、衆て是れ益無けん。作さざる者の若し、應に知るべし、流淚流血等を能くせずと雖も、但能く真心徹到すれば即ち上と同じ。

【七】敬つて白す、十方の諸佛、十二部經、諸大菩薩、一切の賢聖、及び一切の天龍八部、沙界の衆生、現前の大衆等、證知したまへ。我發露懺悔す、無始より已來、乃ち今身

【三寶】佛寶、法寶、僧寶の稱。三寶に大乘の三寶、小乘の三寶、同體三寶、別體三寶、住持三寶等あり。

【三聚戒】攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒にして大乘の菩薩戒なり。

に至るまで、一切の三寶、師僧父母、六親眷屬、善知識、法界の衆生を殺害せること數を知るべからず。一切の三寶、師僧父母、六親眷屬、善知識、法界の衆生の物を偷盜せること數を知るべからず。一切の三寶、師僧父母、六親眷屬、善知識、法界の衆生の前に於て邪心を起せること數を知るべからず。妄語をもて一切の三寶、師僧父母、六親眷屬、善知識、法界の衆生を欺誑せること數を知るべからず。綺語をもて一切の三寶、師僧父母、六親眷屬、善知識、法界の衆生を調咤せること數を知るべからず。惡口をもて一切の三寶、師僧父母、六親眷屬、善知識、法界の衆生を罵辱し、誹謗し、毀咎せること數を知るべからず。兩舌をもて一切の三寶、師僧父母、六親眷屬、善知識、法界の衆生を鬪亂し、破壞せること數を知るべからず。或は五戒、八戒、十戒、十善戒、二百五十戒、五百戒、菩薩の三聚戒、十無盡戒、乃至一切の戒、及び一切の威儀戒等を破り、自ら作し、他を教へ、作すを見て隨喜せること數を知るべからず。是の如き等の衆罪、亦十方の大地の無邊に、微塵の無數なるが如く、我等が作れる罪も亦復無數なり。虚空無邊なれば、我等が作れる罪も亦復無邊なり。方便無邊なれば、我等が作れる罪も亦復無邊なり。法界無邊なれば、我等が作れる罪も亦復無邊なり。衆生無邊なれば、我等が劫奪殺害も亦復無邊なり。三寶無邊なれば、我等が侵損劫奪殺害も亦復無品無邊なれば、我等が毀犯も亦復無邊なり。是の如き等の罪、上は諸菩薩に至り、下は聲邊なり。戒聞緣覺に至るまで、知ること能はざる所なり。唯佛と佛とのみ乃ち能く我罪の



多少を知りたまへり

今三寶の前、法界衆生の前に於て發露懺悔す、敢て覆藏せず、唯願くば十方の三寶、法界の衆生、我懺悔を受け、我清淨を憶したまへ。今日より始めて、願くば法界の衆生と共に、邪を捨て正に歸し、菩提心を起し、慈心をもて相向ひ、佛眼をもて相看、菩提まで眷屬とし、眞の善知識と作つて同じく阿彌陀佛國に生じ、乃ち成佛するに至らん。是の如き等の罪永く相續を斷ちて更に敢て作らじ、懺悔し已んぬ。至心に阿彌陀佛に歸命したてまつる。廣儀

【八】 人觀睡眠の思の願を説く。

【六道】 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六趣。

【九】 彌陀稱念の利益を説く。

【二八】 若し入觀し及び睡眠せん時、應に此願を發すべし。若し坐し若し立ち、一心に合掌し正面向西して、十聲に阿彌陀佛、觀音勢至、諸菩薩清淨大海衆を稱し竟りて、弟子某甲、現に是れ生死の凡夫、罪障深重なり。六道の苦に淪めること具に云ふべからず。今日善知識に遇うて彌陀の本願の名號を聞くことを得て、一心に稱念して往生を願求す。願くば佛の慈悲もて本弘誓願を捨てたまはずして攝受したまへ。弟子は彌陀佛の身相光明を識、らず。願くば佛の慈悲もて弟子に、身相觀音勢至、諸菩薩等及び彼世界の清淨莊嚴光明等の相を示現したまへ。此語を道ひ已りて一心正念にして即ち意に隨つて入觀し、及び睡り、或は正しく發願する時、即ちとを見ることを得る有り、或は睡眠する時見ることを得る有り、不至心を除く。此願、此來大に現驗有り。

【二九】 問うて曰はく、阿彌陀佛を稱念し禮觀するに、現世に何の功德利益か有る。答へ

【本誓重願】彌陀  
如來因位の四十八  
願、別しては第十八  
願を指す。

て曰はく、「若し阿彌陀佛を稱すること一聲すれば、即ち能く八十億劫の生死の重罪を除滅す。亂念じ下も亦是の如し。『十往生經』に云はく、「若し衆生ありて阿彌陀佛を念じて往生を願すれば、彼佛即ち二十五の菩薩をして行者を擁護せしめたまふ。若し行、若し坐、若し住、若し臥、若し晝、若し夜、一切の時、一切の處に、惡鬼惡神をして其便を得しめざるなり」と。又『觀經』に云ふが如き、「若し阿彌陀佛を稱し禮念し、彼國に往生せんと願すれば彼佛即ち無數の化佛、無數の化觀音勢至菩薩をして行者を護念せしめ、復前の二十五菩薩等と百重千重に行者を圍繞して、行住坐臥、一切の時處、若し晝、若し夜を問はず、常に行者を離れたまはず。今既に斯勝益の憑むべきあり。願くば諸の行者、各須らく心を至して往くことを求むべし」と。又『無量壽經』に云ふが如し、「若し我成佛せんに、十方の衆生、我名號を稱して、下十聲に至るまで、若し生ぜずんば正覺を取らじ」と。彼佛、今現に世に在して成佛したまへり。當に知るべし、本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得。又『彌陀經』に云ふが如し、「若し衆生有りて阿彌陀佛を説くを聞いて、即ち應じて名號を執持すること若は一日、若は二日、乃至七日、一心に佛を稱して亂れざれば、命終らんと欲する時、阿彌陀佛諸の聖衆と現に其前に在ます。此人終る時、心顛倒せずして即ち彼國に往生することを得。佛、舍利弗に告げたまはく、我是利を見るが故に是言を説く。若し衆生有りて是説を聞かん者は、應當に發願して彼國に生ぜん」と。次に説いて云はく、「東方の如恆河沙等の諸佛、南西北方及び上下一一の方の如恆河沙等

【一切諸佛所護念經】阿彌陀經を指す。

【證誠】六方の諸佛が事のまことなることを證明す。

の諸佛、各本國に於て其舌相を出して遍く三千大千世界に覆うて、誠實の言を説きたまふ。汝等衆生皆應に是一切諸佛所護念經を信すべし。云何が護念と名くる。若し衆生有りて阿彌陀佛を稱念すること、若は七日及び一日、下十聲に至り、乃ち一聲一念等に至るまで、必ず往生を得。此事を證誠す。故に護念經と名く」と。次下の文に云はく、「若し佛を稱して往生する者は、常に六方恆河沙等の諸佛に護念せらる、故に護念經と名く」と。

今既に此増上の誓願の憑むべき有り、諸の佛子等、何ぞ意を勵して去らざるや。

往生禮讚偈終

當書三卷。源信の撰なり。經論の要文集め往生極樂の教行を勸説したる書、永觀二年四月起草して明年四月に功成りしものなり。

【源信】天台宗の人、横川の慧心院に住せし故、時人慧心僧都といふ。後慧心流の祖と仰がる。

【一】當書撰述の由來を明す。

【顯密】顯教と密教。顯教は衆生の機に應じて顯了に説きたる教。密教は法身の大日如來が自用法屬と共に自の眷屬と共に三密門を説く教をいふ。

【事理】事は相對差別の現象、理は絶對平等の本。

【二】大別して十門に分つ中初に厭離穢土門を明す。

【三界】三界的の生死輪回する世

# 往生要集 卷上本

天台首楞嚴院沙門 源信撰

【一】夫れ往生極樂の教行は、濁世末代の日足なり。道俗貴賤誰か歸せざる者有らん。但し顯密の教法、其文一に非ず、事理の業因、其行惟れ多し。利智精進の人は未だ難しと爲さず、予が如き頑魯の者、豈敢てせんや。是故に念佛の一門に依つて聊か經論の要文を集め、之を披いて之を修せば覺り易く行じ易からん。總じて十門有りて分つて三卷と爲す。一には厭離穢土、二には欣求淨土、三には極樂の證據、四には正修の念佛、五には助念の方法、六には別時の念佛、七には念佛の利益、八には念佛の證據、九には往生の諸業、十には問答料簡なり。之を座右に置いて廢忘に備ふ。

【二】大文第一に、厭離穢土とは、夫れ三界は安きこと無し。最も厭離すべし。今其相を明すに總じて七種あり。一には地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人、六には天、七には總結なり。

【三】第一の地獄にも亦分つて八と爲す。一には等活、二には黑繩、三には衆合、四には叫喚、五には大叫喚、六には焦熱、七には大焦熱、八には無間なり。

【四】初に等活地獄とは此閻浮提の下一千由旬に在りて縱橫一萬由旬なり。此中の罪人



界を三種に分つ。欲界、色界、無色界のこと

【三】 地獄處を明す

【四】 地獄處の中

【割淨提】 須彌山

の南方に位し、佛

に護ひ去を聞くこ

す、もとも印度のこ

とに名けたるもの

にて以て吾人の住

する世界のことと

なせり

【山句】 印度の里

數の名、一山句は

四十里、又は三十

里に當ると云ふ

【四天王天】 佛法

を護る四天王。帝

は互に常に害心を懷けり。若し適相見すれば、獵者の鹿に逢ふが如く、各鐵爪を以て互に厮裂し、血肉既に盡きて唯殘骨のみあり。或は獄卒手に鐵杖鐵棒を執り頭より足に至るまで遍く皆打築し身體破碎すること猶し沙掃の如し。或は極利なる刀を以て分分に肉を割くこと厨者の魚肉を屠るが如し。涼風來り吹けば尋いで活くこと故の如し。欬然として復起り前の如く苦を受く。或は云はく、「空中に聲ありて云はく、此諸の有情還つて等活すべし」と。或は云はく、「獄卒鐵叉を以て地を打つて唱へて活活と云ふ」と。是の如き等の苦、其に述ぶべからず。

已上は智度論、瑜我論、諸に依りて之を撰す。人間の五十年を以て四天王天の一日一夜と爲し、其壽五百歲なり。四天王天の壽を以て此地獄の一日一夜と爲して其壽五百歲なり。殺生の者此中に墮す。念經に依る。下の六も亦之に同じ。

【優婆塞戒經】には初天の一年を以て初地獄の日夜と爲す、下亦之に准す。此地獄の四門の外に復十六の眷屬の別處あり。一には屎泥處。謂く、極熱せる屎泥あり。其味最も苦し。金剛の喙ある蟲其中に充滿す。罪人中に在りて此執屎を食はんに、諸蟲聚集して一時に競食す。皮を破りて齒を嚙ひ、骨を折りて髓を啖ふ。昔鹿を殺し鳥を殺し者此中に墮す。二には刀輪處。謂く、鐵壁周匝して高きこと十由旬、猛光熾然として常に其中に滿つ。人間の火は此に比すれば雪の如し、纒に其身に觸るれば碎くること芥子の如し。又熱鐵を雨らすこと猶し盛雨の如し。復刀林あり、其刃極利なり。復刃を雨らすこと雨の如くにして下る有りて、衆苦交至つて堪忍すべからず。昔物を食りて生を殺しし者此中に墮す。三には瓮熱處。謂く、罪人を執りて鐵

【正法念處經】 善惡の業因によりて果報を異にすることを説き、地獄、餓鬼、畜生、修羅天上の光景を詳説

【山句】 印度の里數の名、一山句は四十里、又は三十里に當ると云ふ

【四天王天】 佛法を護る四天王。帝釋天王の外臣にして、出家を守護す故に護世の諸天といふ

【割淨提】 須彌山の南方に位し、佛に護ひ去を聞くことす、もとも印度のこととに名けたるものにて以て吾人の住する世界のこととなせり

【山句】 印度の里數の名、一山句は四十里、又は三十里に當ると云ふ

【四天王天】 佛法を護る四天王。帝釋天王の外臣にして、出家を守護す故に護世の諸天といふ

【正法念處經】 善惡の業因によりて果報を異にすることを説き、地獄、餓鬼、畜生、修羅天上の光景を詳説

【山句】 印度の里數の名、一山句は四十里、又は三十里に當ると云ふ

【四天王天】 佛法を護る四天王。帝釋天王の外臣にして、出家を守護す故に護世の諸天といふ

【正法念處經】 善惡の業因によりて果報を異にすることを説き、地獄、餓鬼、畜生、修羅天上の光景を詳説

【優婆塞戒經】佛道に入りたる在家の男子が殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五の過非を防止する戒律をいふ。

【五】地獄の中に黒繩地獄を明す。

甕の中に入れ、煎熟すること豆の如し。昔殺生して之を煮食せし者此中に墮す。四には多苦處。謂く、此地獄には十千億種無量の楚毒あり、具に説くべからず。昔繩を以て人を縛し、杖を以て人を打ち、人を驅つて遠路に行かしめ、嶮處より人を落し、煙を薫べて人を惱まし、小兒を怖れしむ。是の如き等に種種に人を惱めし者皆此中に墮す。五には闇冥處。謂く、黒闇の處に在りて常に闇火の爲に焼かれ、大力の猛風金剛山を吹き、合磨合碎すること猶し散沙の如し、熱風に吹かるること利刀の割くが如し。昔大炎にて羊の口鼻を掩ひ、二埒の中に龜を置き、押殺せし者此中に墮す。六には不喜處。謂く、大火炎ありて晝夜梵燒す。熱炎の勢ある烏狗犬野干、其聲極惡にして甚大怖畏すべし。常に來りて食噉し骨肉狼藉たり。金剛の勢ある蟲ある骨中に往來して其髓を食ふ。昔貝を吹き鼓を打ちて畏るべきの聲を作し、鳥獸を殺害せし者此中に墮す。七には極苦處。謂く、嶮岸の下に在りて常に劍火の爲に焼かる。昔放逸に生を殺しし者此中に墮す。餘の九處は經中に説かず。

【五】二に黒繩地獄とは等活の下に在り。縱廣前に同じ。獄卒、罪人を驅りて熱鐵の地に臥せ、熱鐵の繩を以て縱横に身に圜ち、熱鐵の斧を以て繩に隨つて切割き、或は鋸を以て解き、或は双を以て屠り、百千段と作して處處に散じ在く。又熱鐵の繩を懸けて交へ横へすること無數なり。罪人を驅りて其中に入らしむれば惡風暴吹して其身を交絡し、肉を燒き骨を烙して楚毒極り無し。已上は瑜伽論、智度論。又左右に大なる鐵山あり。山上に各鐵幢を建て、幢の頭に鐵繩を張り、繩の下に多く熱せる鑊あり。罪人を驅るに鐵山を負はせ繩

【閻羅】閻羅王のこと。玉の一にして地獄の主なり

【初利天】梵にトラーヤートリントン(Trayastri-loka)の三十三天と釋土。六欲天の第二須彌山の頂、閻浮提の上、八万由旬の處にあり、城廓また八万由旬にして喜見城と名づく帝釋ここに住す。

【六】地獄趣の中に衆合地獄を明す。

の上より行かしまれば遙かに鐵鑊に落つ。推煮すること極り無し。觀佛三昧經。等活地獄及び十六の別處、一切の諸苦を十倍に重ね受く。獄卒、罪人を苛責して曰はく、「心は是れ第一の怨なり。此怨最も悪たり。此怨能く人を縛して閻羅の處に送到す。汝獨り地獄に燒けて惡業の爲に食せられ、妻子兄弟等の親族眷屬も救ふこと能はず」と。乃至廣說後の五地獄は各前前の一切地獄所有の諸苦を以て十倍に重ね受く。例して應に之を知るべし。念經の意。人間の一百歳を以て初利天の一日夜と爲して、其壽一千歳なり。初利天の壽を以て一日夜と爲して此地獄の壽一千歳なり。殺生し偷盜せし者此中に墮す。復異處あり、等喚受苦處と名く。謂く、峻岸の無量由旬なるに擧在して、熱炎ある黑繩をもて束縛す。繋ぎ已りて然して後に之を推して利なる鐵刀ある熱池の上に墮す。鐵炎の牙ある狗に噉食せられ、一切の身分、分分に分離す。唱聲吼喚すれども救者あること無し。昔法を説くに惡見の論に依り、一切不實にして一切を顧みず。岸に投じて自殺せし者此中に墮す。復異處あり、畏驚處と名く。謂く、獄卒杖を怒らし急打して晝夜常に走り、手に火炎ある鐵刀を執り、弓を挽き箭を矯いて後に隨つて走逐し、斫折して之を射る。昔物を食るが故に人を殺し人を縛し食を奪ひし者此中に墮す。略抄。正法念經。

【六】三に衆合地獄とは黑繩の下に在り。縱廣前に同じ。多く鐵山有りて兩山相對す。牛頭馬頭等の諸の獄卒手に器械を執り、驅つて山間に入らしむ。是時兩山迫り來りて合押し、身體摧碎し血流れて地に滿つ。或は鐵山ありて空より落ち罪人を打つに、碎くるこ

と沙羅しゃらの如ごとし。或あるは石山いしやまに置き、巖いわを以もつて之これを押おす。或あるは鐵臼てつじゆに入れ鐵杵てつしよを以もつて搗つく。極ごく惡あくの獄鬼ごくき、並ならに熱鐵ねつてつの師子虎狼ししころう等の諸獸しよじゆ、烏鶯うゑ等の鳥とり、競きひ來きたりて食噉しきたんす。瑜伽論よごろん大論だいろん。又鐵炎てつえんの芻くちある鶯わし、其腸そのはらわたを取り已おりて樹頭じゆとうに掛か在ざいして之これを噉食たんじきす。彼かれに大江たいかうありて中ちゆうに鐵鈎てつこうあり、皆みな悉しつく火ひに然しかゆ。獄卒ごくそつ、罪人ざいじんを執とり彼河かれが中に擲なち、鐵鈎てつこうの上うへに墮おす。又彼江かれかう中に熱ねつせる赤銅しやくどうの汁じゆうありて彼罪人かれざいじんを漂たふす。或あるは身みの、日ひの初はつめて出でるが如ごとき者ものあり、身みの沈しん沒もつして重石ぢゆうせきの如ごとき者ものあり、手てを舉あげて天てんに向むひて號哭ごうきくする者ものあり、共ともに相あ近ぢんづいて號哭ごうきくする者ものあり、久くしく大苦たいくを受うくれども主ななく救すくなし。又復また獄卒ごくそつ、地獄ぢごくの人ひとを取りて刀葉林たうえりに置おきて、彼樹頭かれじゆとうに好端正こうたんぢゆうにして嚴飾げんじきせる婦女にょにょあるを見みしむ。是このの如ごときを見み已おりて即すなはち彼樹かれじゆに上のぼらんとす。樹葉じゆえつは刃やいばの如ごとくにして、其身肉そのみにくを裂ひき、次つぎに其筋そのすぢを裂ひき、是このの如ごとく一切いっさいの處ところを劈割ひやくわいして已すでに樹じゆに上のぼることを得え已おりて、彼婦女かれにょにょを見みれば復地またぢに在あり、欲ほつの媚眼めいげんを以もつて罪人ざいじんを上のぼりて是このの如ごときの言ことを作なす。汝なんぢを念おもふ因緣いんげんをもて我われ此處こゝに到いたる。汝なんぢ今いま何が故ゆゑぞ近ぢかく我われに來きたらざる、何なにぞ我われを抱かかさざる一ひとと。罪人ざいじん見み已おれば欲心熾盛ほつしんしじやうにして次第しだいに復下またくだらんとす。刀葉たうえつ上うへに向むいて利きなること剃刀てしとうの如ごとし。前まへの如ごとく遍あまり一切いっさいの身分みぶんを割わき、既すでに地ちに到いたり已おりぬれば、彼婦女かれにょにょは復樹頭またじゆとうに在あり、罪人ざいじん見み已おりて、復樹またじゆに上のぼる。是このの如ごとく無量百千億むりやうひやくせんおく濩く、自心じしんに誑たぶされて、彼地獄かれぢごく中に是このの如ごとく轉行てんかうし、是このの如ごとく燒やかるるは邪欲じやくよくを因いんと爲なせばなり。乃すなはち至いたりて廣說かうじやく獄卒ごくそつ、罪人ざいじんを呵責かじやくするに偈げを説といて曰いはく、異人惡いじんあくを作りて、異人苦報いじんくほうを受うくるに非あらず。自業自得果じごふじとくぐちの、衆生皆是しゆじやうみなたかくの如ごとし」と、念經ねんぎやう 正法しやうぽう 人間にんげんの二百歳にひやくさいを以もつて夜摩天やまてんの一日夜いちにちやと爲なす。

往生要集卷上本



己の業によりて自己に果報を得るをいふ。  
【復命人】姓にヤシ、字にアツキ、善時又は時分と譯す。この天は口に快樂を唱ふるが故に名づくる。華華明合を以て晝夜をわかす。

し、其壽二千歳、彼天高を以て此地獄の一日夜と爲して其壽二千歳なり。殺生し偷盜し邪淫せし者此中に墮す。此大地獄に復十六の別處あり。謂く、一處あり、惡見處と名く。他の兒子を取つて強逼し邪行して、號哭せしめし者此に墮して苦を受く。謂く、罪人百の兒子を見れば地獄の中に在り。獄卒若は鐵杖を以てし若は鐵錐を以てして其陰中に刺し、若は鐵鉤を以て其陰中に釘つ。既に白子に星の如きの苦事あるを見れば、愛心悲絶して堪忍すべからず、此愛心の苦は火燒の苦に於ては十六分の中の其一同にも及ばず、彼人是の如く心の苦に通じ已れば、復身の苦を受く。謂く、頭面下に在るに熱せる鋼汁を盛り、其喪門に灌ぎ其身内に入れ、其熱藏大小腸等を燒く。次第に燒已りて下に在りて出づ。具に身心の二苦を受くること無量百千年中に止らず。又別處ありて多苦惱と名く。謂く、男の男に於て邪行を行ぜし者此に墮ちて苦を受く。謂く、本の男子を見れば、一切の身分に皆悉く熱炎あり。來りて其身を抱くに一切の身分皆悉く解散す。死し已りて復活く。極めて怖畏を生じ、走避して去つて嶮岸に墮す。炎の猪ある鳥、炎の口ある野干ありて、之を獵食す。復別處あり。忍苦處と名く。他の婦女を取りし者此に墮して苦を受く。謂く、獄卒之を樹頭に懸く。頭面は下に在りて足は上に在り。下に火炎を燃て一切の身を燒く。燒き盡して復生す。叫喚し口を開けば、火口より入りて其心肺生熱藏等を燒く、餘は經に説くが如し。已上正法念經より之を略抄す。

【七】 地獄の中  
四に叫喚地獄を明す。

【七】 四に叫喚地獄とは、衆合の下に在り。縱廣前に同じ。獄卒の頭黄なること金の如

【兜率天】 欲界六  
 天の第四、須彌山  
 の頂上十二万由旬  
 の處にあり。七寶  
 の宮殿ありて無量  
 の諸天にありて説  
 法し、闍浮提に下生  
 成佛する時の來る  
 を待てり。

往生要集卷上本

し。眼中より火出づ。緋色の衣を著す。手足長大にして疾送すること風の如し。口より惡  
 聲を出して罪人を射る。罪人惶怖し頭を叩いて哀を求む。願くば慈悲を垂れて少しく放捨  
 せられよと。此言ありと雖も彌瞋怒を増す。或は鐵棒を以て頭を打つて熱鐵の地より  
 走らしむ。或は熱鐵に置き以覆して之を炙り、或は熱鐵に據ちて之を煎煮し、或は鹽つて  
 猛炎ある鐵室に入らしむ。或は鉛を以て口を閉いて洋銅を灌ぎ、五藏を燒爛して下より  
 直に出す。唯我一人、罪人傷を説き、閻羅人を傷み恨みて言はく、「汝何ぞ悲心無きや、復何ぞ  
 寂靜ならざるや、我は是れ悲心の聖なり。我に於て何ぞ悲み無きや」と。時に閻羅人、罪  
 人に答へて曰はく、「已に愛羅に誰かされて應不善業を作り、今惡業の報を受く。何故ぞ我  
 を瞋恨する」と。又云はく、「汝本と惡業を作るときは、欲癡の爲に誰か。彼時何ぞ悔い  
 ざるや、今悔ふとも何ぞ及ぶ所あらん」と。金剛人間の四百歳を以て兜率天の一日夜と爲  
 し、其壽四千歳なり。兜率の壽を以て此地獄の一日夜と爲して壽四千歳なり。殺盜淫飲酒  
 せし者此中に墮す。復十六の罪處あり、其中に一處あり、火米糞と名く。昔酒を賣るに水  
 を加益せし者此中に墮して四百四病を具す。風黃冷熱各百一病あり。其一の病の力は一日夜  
 に於て能く四大州の若干の人をして皆死せしむるを也。又身より異出でて其皮肉骨髓を破  
 りて飲食す。復刑處あり雲火霧と名く。昔酒を以て人に與へ、醉はしめりて調戲して人  
 に涉し彼をして羞恥せしめし者此に墮して苦を受く。謂く、獄の火滿つること厚さ二百肘、  
 獄卒、罪人を提へて火中に行かしむれば、是より頭に至るまで一切洋消す。之を擧ぐれば

【世】有漏の迷界に在ること。

【出世】有漏迷界を解脱すること。

【解脫】煩惱の繫縛を解きて迷界の業苦を脱すること。

【八】地獄趣の中五に大叫喚地獄を明す。

【化樂天】樂變化人の異名。

【九】地獄趣の中六に焦熱地獄を明す。

還生す。是の如きの無量百千歳、苦に與ふること止まず。餘は經文の如し。又獄卒、罪人を呵嘖し偈を説いて云はく、「佛の所に於て癡を生じ、世出世の事を壞し、解脱を燒する」と火の如くなるものは、謂ゆる酒の一法なり」と。念經

【八】五に大叫喚地獄とは、叫喚の下に在り、縱廣前に同じ。苦相も亦同じ。但し前の四地獄及び諸の十六の別處の一切の諸苦を十倍に重ね受く。人間の八百歳を以て化樂天の一日夜と爲し、其壽八千歳なり。彼天壽を以て此獄の一日夜と爲し、其壽八千歳なり。殺盜淫飲酒妄語せし者此中に墮す。獄卒、罪人を呵嘖し偈を説いて云はく、「妄語は第一の火なり、尙能く大海をも燒く、況んや妄語の人を燒くことは、草木の薪を燒くが如し」と。復

十六の別處あり、其中の一處を受鋒苦と若く、熱鐵の利針をもて口舌俱に刺し、啼哭すること能はず。復別處あり、受無邊苦と名く。獄卒熱せる鐵鉗を以て其舌を拔出す。抜き已れば復生す。生くるときは則ち復抜く。二眼を抜くことも亦然なり。復刀を以て其身を削る。刀甚だ薄く利なること剃頭刀の如く、是の如き等の異類の諸苦を受くること皆是れ妄語の果報なり。餘は經説の如し。正法念

【九】六に焦熱地獄とは大叫喚の下に在り、縱廣前に同じ。獄卒、罪人を捉へて熱せる鐵地の上に臥せ、或は仰け或は覆せ、頭より足に至るまで大なる熱鐵の棒を以て或は打ち或は築いて肉搏の如くならしむ。或は極熱せる大なる鐵鍬の上に置いて猛炎をもて之を炙り、左右に之を轉じ表裏燒薄す。或は大なる鐵串を以て下より之を貫き、頭に徹して出づ。

【他化天】 他化自在天とも云ふ。六欲天の最高にあるを以て第六天ともいふ

【四大】 四種の火の

反覆して之を炙り、彼有情の諸根毛孔及以口中悉く皆炎をして起らしむ。或は熱鐵に入  
れ或は鐵樓に置けば鐵火猛盛にして骨髓に徹す。大論。若し此獄の豆許の火を以て閻浮  
提に置かば一時に焚燒せん。況んや罪人の身は軟なること生蘇の如し。長時に焚燒す、  
豈忍ぶべけんや。此地獄の人間の五地獄の火を望見せば猶ほ霜雪の如し。念經人間の千六  
百歳を以て他化天の一日夜と爲し、其壽萬六千歳なり。他化天の壽を以て日夜と爲して、  
此獄の壽も亦然なり。殺盜淫飲酒妄語邪見なりし者此中に墮す。四門の外に復十六の別處  
あり。其中に一處あり、分荼利迦と名く。謂く、彼罪人、一切の身分に芥子許も火炎無き  
處無し。異なる地獄の人は是の如く説言す「汝速疾に來れ、汝速疾に來れ。此に分荼利迦池  
あり、水ありて飲むべく、林に潤影あり」と。隨つて走趣すれば道上に坑あり、中に滿つる  
は熾火なり。罪人入り已れば一切の身分皆悉く燒盡す。燒け已りて復生じ、生じ已りて  
復燒く。渴欲息まずして便ち前進み入る。既に彼處に入れば分荼離迦の炎燃ゆること高さ  
五百由旬なり。彼火に燒炙せられ死して復活く。若し人自ら餓死して天に生くることを得  
んと望み、復他人を教へて邪見に住せしめし者此中に墮す。復別處あり、閻火風と名く。  
謂く、彼罪人惡風に吹かれ、虚空の中に在りて依處とする所無し。輪の如く疾く轉ずれば  
身見るべからず、是の如く轉じ已れば異なる刀風生ず。身を碎くこと沙の如く、十方に分  
散す。散じ已りて復生す。生じ已りて復散す。恆常に是の如し。若し人は是の如きの見を作  
さん、「一切の諸法には常無常あり、無常なる者は身なり、常なる者は四大なり」と。彼邪見



こと。地、水、火、風の四大をいふ。  
【二〇】地獄趣の中七に大焦熱地獄を明す。

【中有】四有の一期世に死したる後未だ次の生を受けざる間をいふ。この間の人類の身量の小兒の五六歳位肉眼にはみえざるなり。其時間は七日或は七七日等一定せず。

の人は是の如きの苦を受けん。餘は經に説くが如し。正法念經  
【二〇】七に大焦熱地獄とは、焦熱の下に在り。縱廣前に同じく苦相も亦同じ。大論。但し前の六地獄の根本と別處との一切の諸苦を十倍して具に受く、具に説くべからず。其壽半中劫なり。殺盜婬飲酒妄語邪見並に淨戒の尼を汗しし者此中に墮す。此惡業の人は先づ中有に於て大地獄の相を見る。閻羅の人ありて面に惡狀あり、手足は極熱なり。身を振し、肘を怒らす。罪人これを見て極めて大いに忙怖す。其聲雷の吼が如し。罪人之を聞いて恐怖更に増す。其手に利刀を執る。腹肚甚大にして黒雲の色いろの如く、眼の炎は燈の如し、鈎牙は鋒のごとく利し、臂手皆長じ、搖動して勢いきまを作すに一切の身分皆龜起す。是の如く種種畏るべき形狀にて罪人の咽を緊繫す。是の如く將る去りて六十八百千由旬の地海州城を過ぎ、海外の邊に在りて復行くこと三十六億由旬にして漸漸ぜんぜんに下に向ふこと十億由旬なり。一切の風の中に業風は第一なり。是の如き業風は惡業の人を將り、去つて彼處に到る。既に彼に到り已れば、閻魔王種種に呵嘖す。呵嘖既に已れば惡業の罰もて縛せられ、出でて地獄に向ひ、遠く大焦熱地獄の普く大炎然あるを見る。又地獄の罪人啼哭の聲を聞きて悲恐恐怖して無量の苦を受く。是の如く無量百千萬億無數年歳に啼哭の聲を聞きて十倍に恐怖し、心驚いて怖畏す。閻羅の人之を呵嘖して言はく、汝地獄の聲を聞くすら已に是の如く怖畏す。何に況んや地獄に燒かれて乾ける薪草を燒くが如くなるをや。火の燒くるは是れ燒くにあらず、惡業乃ち是れ燒くなり、火の燒くは則ち滅すべけれども、業の燒く

【優婆夷】三寶に親近し三歸五戒を受けたる女子のこと。佛道に入りたる在家の女。

【比丘】梵にブヒクシヒ (Bhikṣu) 男の出家したるものをいふ。僧のこと。

【二】地獄趣の中八に阿鼻地獄を明す。

【増劫】住劫中人壽十歳より百歳毎に一歳を増して八萬歳に至る間をいふ。

は滅すべからず、云云。是の如く苦に呵嘖し已り將て地獄に向へば大火聚あり、其聚擧りて高きこと五百由旬、其量寛廣二百由旬なり。炎然の熾盛なるは彼人の所作の惡業の勢力なり。急に其身を擲ちて彼火聚に墮すること大山の岸より險岸に推在するが如し。正法念經略 此大焦熱地獄の四門の外に十六の別處あり。其中の一處は一切間なく、乃至虚空皆悉く炎然し、針の孔許も炎然ならざる處なし。罪人は火中に發聲唱喚す。無量億歳に

常に燒けて止まず、清淨の優婆夷を犯しし者此中に墮す。復別處あり、普受一切苦惱と名く謂く、炎刀をもて一切の身皮を剝割し其肉を侵さず、既に其皮を剝ば身とともに相連りて熱地に敷在し火を以て之を燒き熱鐵の沸けるを以て其身體に灌ぐ。是の如く無量億千歳に大苦を受く。也比丘、酒を以て持戒の婦女を誘誑し其心を壞し已りて、然して後に共に行じ、或は財物を與へし者此中に墮す。餘は經の中に説くが如し。正法念經略抄。

【二】八に阿鼻地獄とは大焦熱の下欲界の最底の處に在り。罪人彼に趣向する時、先づ中有の位に啼哭して偈を説いて言はく、「一切唯火炎なり、空に遍じて中間無し、四方及び四維、地界に空處なし、一切の地界處に、惡人皆遍滿す、我今歸する所なく、孤獨にして同伴無し、惡處の闇中に在りて、大火災聚に入る、我虚空の中に於て、且月を見ず」と。時に閻羅人、嗔怒の心を以て答へて曰はく、「或は増劫或は滅劫にも、大火あつて汝が身を燒かん、癡人已に惡を作る、今何を用てか悔を生ぜん、是れ天修羅、健達婆龍鬼に非ず、業羅に繫縛せらる、人の能く汝を救ふこと無し、如し大海の中に於て唯一掬の水を取らんに此

【滅劫】増劫の對住劫二十小劫中、人壽百歲毎に一歳を減じ八萬歳より一歳に至る間をいふ。

苦は一掬の如く、後苦は大海の如し」と。既に呵嘖し已りて將に地獄に向ひ、彼を去ること二萬五千由旬にして彼地獄啼哭の聲を聞いて、十倍に悶絶す。頭面は下に在り、足は上に在りて二千年を經、皆下に向つて行く。念經略抄彼阿鼻城は縱廣八萬由旬なり、七重の鐵城、七層の鐵網、下に十八の隔あり、刀林周匝し四角に四の銅狗あり、身長は四十由旬にして、眼は電の如く牙は劍の如し。齒は刀山の如く、舌は鐵刺の如し。一切の毛孔より皆猛火を出し、其烟臭惡にして世間に喻なし。十八の獄卒あり、頭は羅刹の如く口は夜叉の如し。六十四の眼ありて鐵丸を迸散す。鈎牙は上に出でて高きこと四由旬、牙頭に火流れて阿鼻城に滿つ。頭上に八の牛頭あり、一一の牛頭に十八の角あり、一一の角頭に皆猛火を出す。又七重の城内に七の鐵幢あり、頭に火踊ること猶し沸泉の如し。其炎流迸して亦城内に滿つ。四門の閻の上に八十の釜あり、沸銅踊出して又城内に滿つ。一一の隔の間に八萬四千の鐵蟒大蛇ありて、毒を吐き火を吐きて、身は城内に滿つ。其蛇哮吼すること百千の雷の如く、大鐵丸を雨らして亦城内に滿つ。五百億の蟲あり、八萬四千の犛あり、犛の頭に火流ること雨の如くにして下る。此蟲下るとき獄火彌盛にして遍く八萬四千山旬を照す。又八萬四千の苦中の苦なる者集りて此中に在り。觀佛三昧。瑜伽の第四に云はく、東方多百踰繕那三寶の大鐵地の上より、猛熾の火の焰を騰げて來るありて、彼有情を刺し、皮を穿ち肉に入り、筋を斷ち骨を破り、復其髓に徹し、燒くこと脂燭の如し。是の如く衆身に皆猛熾と成る。東方よりするが如く、南西北方も亦復是の如し」と。此因縁に由

【欲界の六天】欲界の天に六種あるをいふ。この六天は皆欲樂を主とするが故に六欲天と名づく。四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天のこと

【一中劫】二十小劫を以て一中劫となす、一小劫に一

りて彼諸の有情は猛焰と和雜し、唯火聚の四方より來るを見る。火焰和雜して間隙有ること無く、所受の苦痛も亦間隙無し。唯苦逼啼喚の聲を聞いて衆生あるを知る。又鐵箕を以て三熱の鐵炭を盛滿して之を箴揃す。復熱せる鐵地の上に置き、大熱せる鐵山に登らしむ。上れば復下り、下れば復上る。其口中より其舌を拔出し百の鐵釘を以て之を張り、鐵繩なからしむること牛皮を張るが如し。復更に熱せる鐵地の上に仰臥し、熱せる鐵鉗を以て口を鉗して開かしめ、三熱鐵丸を以て其口中に置く。即ち其口及び咽喉を燒き、府藏に徹して下より出す。又洋銅を以て其口に灌ぎ喉及び口を燒き府藏に徹して下より流出す。以上瑜伽に三熱を言ふ者。燒然は燒然を極め、遍く燒然を極むるなり。前の七大地獄並及別處一切の諸苦を以て一分と爲さんに阿鼻地獄は一千倍勝る。是の如き阿鼻地獄の人、大焦熱地獄の罪人を見れば他化自在天の處を見るが如し。四天下の處、欲界の六天も地獄の氣を聞かば即ち皆消盡せん。何を以ての故に。地獄の人は極臭なるを以ての故に。地獄の臭氣何故に來らずとならば一の大山あり。一は出山と名け、二は没山と名け、彼臭氣を遮す。苦し人一切地獄所有の苦惱を聞かば皆悉く堪へず、此を聞くとときは則ち死なん。是の如き阿鼻大地獄處は千分の中に於て一分をも説かず。何を以ての故に。説盡すべからず、聽くことを得べからず、譬喩すべからず。若し人ありて説き、人ありて聽かんに、是の如きの人は血を吐いて死なん。正法念經略抄。此無間獄は壽一中劫なり。俱舍五逆罪を造り因果を撥撫し、大乘を誹謗し四重を犯し、虚しく信施を食する者、此中に墮す。觀佛三昧經。此無間獄の四門の外にも亦十六の眷屬別處あり、其



増一減あるを以て一中劫に二十増減あり。  
【四重】 四重罪のこと、殺生、偷盜、邪淫、妄語。

【辟支佛】 梵にブラトエーカブツドハ(Pratyekabuddha) 獨覺と譯す。飛花落葉等によりて無師獨悟する人を云ふ。

中の一處を鐵野干食處と名く。謂く、罪人の身上に火然ゆること十由旬量にして、諸の地獄の中、此苦最勝なり。又鐵罇を雨らすこと盛なる夏雨の如く、身體破碎すること猶ほ乾肺の如し。炎牙ある野干常に來りて食噉し、一切の時に於て苦を受けて止まず。昔佛像を焼き、僧房を焼き、僧の臥具を焼きし者此中に墮す。復別處有りて黑肚處と名く。謂はく、飢渴身を焼きて自ら其肉を食し、食し已りて復生じ、生じ已りて復食す。黑肚蛇有りて彼罪人を繞り、始め足甲より漸漸に齧食し、或は猛火に入れて焚燒し、或は鐵鑊に在いて煎煮し、無量億歳に是の如きの苦を受く。昔佛の財物を取りて之を食用せる者此中に墮す。復別處有りて、雨山聚處と名く。謂く、一由旬量の鐵山、上より下りて彼罪人を打ち、碎くこと沙搗の如し。碎き已りて復生じ、生じ已りて復碎く。又十一の炎ありて周遍して身を焼く。又狐卒刀を以て遍く身分を割き、極熱せる白鑊汁をもて其割處に入る。四百四病具足す、常に長久に苦を受くることありて年歳有ること無し。昔辟支佛の食を取りて自ら食し、之を與へざりし者此に墮す。復別處ありて閻婆度處と名く。惡鳥あり、身の大なること像の如し。名けて閻婆といふ。犛利にして炎を出す。罪人を執りて遙に空中に上げ、東西に遊行せしむ。然後之を放てば、石の地に墮つるが如く碎けて百分と爲る。碎け已りて復合し、合し已りて復散す。又、利双道に滿ちて其石脚を割く。或は炎の齒ある狗ありて、來りて其身を齧む。長久の時に於て苦惱を受く。昔人用の川を決斷し、人をして渴死せしむる者此に墮す。餘は經に説くが如し。已上正。『瑜伽』の第四に通じて八大地

【那落迦】梵にナ  
ラカ(Naraka)地  
獄のことなり。

獄の近邊別處を説いて云はく、「謂く彼一切の諸の大那落迦に皆四方四岸四門有りて鐵牆圍遶す。其四方四門より出で已るに、其一一の門外に四出の園を置く。謂く、燖煨齊膝、彼諸の有情出でて舍宅を求めんが爲に、遊行して此に至り、足を下すの時、皮肉及び血並びに即ち消爛す。足を擧ぐれば還つて生ず。次に此燖煨に間無くして即ち屍糞泥あり、此諸の有情、舍宅を求めんが爲に、彼より出で已りて漸漸に遊行し、其中に陥入すれば首足俱に没しぬ。又屍糞泥の内に多く諸蟲あり、孃矩吒と名く。皮を穿ちて肉に入り、筋を斷ち骨を破り、髓を取りて食す。次に屍糞泥に間無くして利刀劍あり、刃を仰いで路を爲し、彼諸の有情、舍宅を求めんが爲に、彼より出で已りて遊行し、此に至りて足を下すの時は、皮肉筋血悉く皆消爛す。足を擧ぐるの時は還復故の如し。次に刀劍刃路に間無くして双葉林有り、彼諸の有情、舍宅を求めんが爲に、彼より出で已りて行いて彼陰に趣き、纔に其下に坐す。微風逐ひ起れば、双葉墮落し、其身一切の支節を斫截して、便即地に躡す。黒薰なる狗有り、脊胎を擡擧して、之を噉食す。此双葉林より間無くして鐵設拉なる末黎林あり。彼諸の有情、舍宅を求めんが爲に、便ち來りて之に趣き、遂に其上に登らん。之に登る時に當りて一切の刺鋒悉く回りに下に向ひ、之を下らんと欲する時は一切の刺鋒復回りに上に向ふ。此因縁に由りて其身を慣刺して諸の支節に遍す。爾時便ち鐵の猪ある大鳥ありて彼頭上に上り、或は其臍に上りて、眼精を啗啄して之を噉食す。鐵設拉なる末黎林より間無くして廣大河あり、沸熱せる灰水其中に彌滿す。彼諸

の有情、舍宅を尋求して彼より出で已り、來りて此中に墮すれば、猶し豆を以て之を大鑊に置くが如し、猛熾なる火を然して之を煎煮し、湯の騰湧するに隨ひて周旋回復す。河の兩岸に於て諸の獄卒あり、手に杖索及以大綱を執り、行烈して住す。彼有情を遮りて出づることを得しめず。或は索を以て羅し、或は綱を以て漉す」と。復廣大なる熱鐵地の上に置きて、彼有情を仰きて之に問うて言はく、「汝等今者何の所須を欲するや」と。是の如く答へて言はん、「我等今者竟に覺知なし、然るに種種の飢苦の爲に逼らる。」と。時に彼獄卒即ち鐵鉗を以て口を鉗んで閉かしめ、便ち極熱燒然の鐵丸を以て其口中に置く。餘は前に説くが如し。若し彼答へて言はん、「我今唯渴苦の爲に逼らる」と。爾時に獄卒、即便洋銅を以て其口に灌ぐ。是因縁に由りて長時に苦を受く。乃至先世に造る所の一切の能く那落迦を感ずる惡不善業未だ盡きずんば、未だ此中を出でざるなり。若し刀劍刃路、若し双葉林若し鐵設拉なる木梨林、之を總じて一と爲す、故に四圍あるなり。以上は瑜迦並びに俱舍の外に各四圍あれば合して十六と爲す。正法念經 復頌部陀等の八寒地獄あり、具に經論の如し、之を述ぶるに違あらず。

【一】 餓鬼趣を明す。

【雪山】 印度の北邊に在るヒマラーヤ山の古稱。

【二】 第二に餓鬼道を明さば住處二有り。一には、地の下五百由旬に在りて閻魔王界有り。二には人天の間に在りて其相甚だ多し。今少分を明さば、或は身の長一尺、或は身量人の如く、或は百由旬、或は雪山の如し。大乗 或は鬼有りて鑊身と名く、其身長大にして人に過ぐることを兩倍す。面目有ること無く、手足猶し鑊脚の如し。熱火中に満ちて其身

を焚燒す。昔財を貪り屠殺せし者、此報を受く。或は鬼有りて食吐と名く。其身廣大にし  
 て長半山旬、常に嘔吐を求むるに困しんで得ること能はず。昔或は丈夫自ら美食を嘔ひ  
 て妻子に與へず、或は婦人自ら食して夫子に與へざりしは此報を受く。或は鬼有りて食氣  
 と名く。世人病に依りて水邊林中に祭を設け、此香氣を嗅ぎて以て自ら活命す。昔妻子  
 等の前に於て獨り美食を嘔ひし者此報を受く。或は鬼ありて食法と名く。嶮難の處に於て  
 馳走して食を求め、色は黒雲の如く、涙流れて雨の如し。若し僧寺に至らんに、人有りて  
 咒願し誑法せん時、此に因りて力を得て活命せん。昔名利を貪らんが爲に不淨說法せし  
 者此報を受けん。或は鬼有りて食水と名く。飢渴身を燒す、周障して水を求むるに困しん  
 で得ること能はず、長髮面を覆ひて目に見る所無く、河邊に走趣す。若し人河を渡らん  
 に、脚足の下に遺落せる餘水有れば速疾に接取し、以て自ら活命す。或は人水を掬して  
 亡せし父母に施すときは、則ち少分を得て命存立することを得。若し自ら水を取らば水を  
 守る諸鬼、杖を以て搥打す。昔酒を活りに水を加へ、或は蚘蟻を沈め、善法を修せざり  
 し者、此報を受く。或は鬼有りて悻望と名く。世人亡せし父母の爲に祀を設くるの時、得  
 て之を食へども、餘は悉く食すること能はず。昔人勞して小物を得たるを誑惑し之を取  
 用せし者、此報を受く。或は鬼有りて海渚の中に生じ、樹林河水有ること無く、其處甚だ  
 熱す。彼の冬日を以て人間の夏に比ぶれば、過踰ること十倍す。唯朝露を以て自ら活命  
 す。海渚に住すと雖も、海の枯渴を見る。昔行路の人、病苦に疲極して其賈るを欺取し



直を與ふること薄少にせし者、此報を受く。或は鬼有りて常に塚間に至りて、屍を焼く火を噉ひて猶足ること能はず、昔刑獄に典主して人の飲食を取りし者、此報を受く。或は鬼有りて生じて樹中に在り、逼達して身を押しこと賊木蟲の如し、大なる苦惱を受く。昔陰涼の樹を伐り、及び衆僧園林を伐りし者、此報を受く。念經。或は復鬼有りて頭髮垂下して遍く身體を纏ひ、其髮は刀の如く其身を刺切す。或は變じて火と作りて周匝焚燒す。或は鬼有りて晝夜各五子を生ず。生ずるに隨つて之を食へども、猶常に飢乏す。六波羅。復鬼有りて一切の食は皆噉ふこと能はず、唯自ら頭を破り腦を取りて食す。或は鬼有りて火口より出づ、飛蛾の火に没するを以て飲食と爲す。或は鬼有りて糞涕濃血洗器の遺餘を食す。論又外障に依りて食を得ざる鬼有り、謂く、飢渴常に急にして身體枯竭す、適清流を臨んで走向し彼に越けば大力の鬼有りて杖を以て打つ。或は變じて火と作り、或は悉く枯澇す。或は内障に依りて食を得ざる鬼あり、謂く、口は針孔の如く腹は大山の如し、縦ひ飲食に逢ふとも之を噉ふに由無からん。或は内外の障無くして用ふること能はざるの鬼あり、謂く、適少食に逢うて食噉すれば、變じて猛焰と作り身を燒きて出でぬ。瑜伽論。人間の一月を切て一日夜と爲して月年と成し、壽五百歲なり。『正法念經』に云はく、「慳貪嫉妬の者、餓鬼道に墮す」と。

【三】 畜生趣を明す。

【三】 第三に畜生道を明さば、其住處に二あり。根本は大海に住し、支末は人天に雜はる。別して論ずれば三十四億の種類あり、總じて論ずれば三を出でず。一には禽類、二に

は獸類、三には蟲類なり。是の如き等の類は強弱相害す。若は飲、若は食、未だ曾て暫くも安からず。晝夜の中常に怖懼を懷く。況んや復諸の水性の屬は漁者の爲に害せられ、諸の陸行の類は獵者の爲に害せらる。若は象馬牛驢駱駝驛等の如きは、或は鐵鉤をもて其腦を斷ち、或は鼻中を穿つ。或は縛をもて首を繋ぎ、身常に重きを負うて諸の杖捶を加へらる。但し水草を念うて餘は知る所無し。又、蜘蛛鼠狼等は罈中に生じて罈中に死す。蠖蝨蚤等は人身に依りて生じ、還つて人に依りて死す。又諸の龍衆は三熱の苦を受けて晝夜休むこと無し。或は復蟒蛇は其身長大なれども、豐駭にして足なし。跣轉腹行して諸の小蟲の爲に啖食せらる。或は復一毛が百分の如き有り。或は窓中に遊塵するが如く、或は十千山旬の如し。是の如き諸の畜生、或は一時頃或は七時頃を經、或は一劫乃至百千萬億劫に無量の苦を受くる有り、或は諸の逆縁に遇うて數殘害せらる。此等の諸苦勝げて計ふべからず。愚癡無情にして徒に信施を受けて他物を償はざる者は此報を受く。已上の諸文は經論に散在す。

【二四】 修羅趣を明す。  
【四大洲】 須彌山の四方にある四つの洲。南瞻部洲、東勝神洲、西牛貨洲、北俱盧洲。

【二四】 第四に、阿修羅道を明さば二あり。根本の勝れたる者は須彌山の北巨海の底に住し、支流の劣れる者は四大洲の間山巖の中に在り。雲雷若し鳴れば、是れ天鼓なりと謂ひて怖畏周章し心大に戰悼す、亦諸天の爲に侵害せられ、或は身體を破り、或は其命を夭す。又曰はく、日三時に苦しめ具に自ら來りて逼害し、種種に憂苦すること勝説すべからず。

【五】 人間趣を明す。

【六】 人間趣の中一に不淨相を明す。

【五根】 眼、耳、鼻、舌、身の五根をいふ。

【二五】 第五に、人道を明さば、略そ三相あり。應に審かに觀察すべし。一には不淨の相、二には苦相、三には無常の相なり。

【二六】 一に不淨とは凡そ人身の中に三百六十の骨ありて、節節相拄ふ。謂く、指骨は足骨に拄ひ、足骨は踝骨に拄ふ。踝骨は腓骨に拄ひ、腓骨は脛骨に拄ひ。脛骨は腕骨に拄ふ。腕骨は腰骨に拄ひ、腰骨は脊骨に拄ふ。脊骨は肋骨に拄ひ、又脊骨は項骨に拄ひ、項骨は頷骨に拄ひ、頷骨は牙齒に拄ひ、上に髑髏あり。又項骨は肩骨に拄ひ、肩骨は髀骨に拄ふ。髀骨は腕骨に拄ひ、腕骨は掌骨に拄ひ、掌骨は指骨に拄ふ。是の如く展轉して次第に鎖成す。經。三百六十の骨聚りて成ずる所は朽ちたる壞舍の如し。諸節をもて支持し、四の細脈を以て周匝彌布す。五分肉は猶し泥塗の如し。六脈相繫して五百の筋、七百の細脈を纏ひ、以て編絡を爲す。十六の蠶脈鈎帶相連して二の肉繩あり、長三尋半、内に於て纏結す。十六の腸胃は生熱藏を繞る。二十五の氣脈は猶し窻隙の如し。一、百七關の肉は破碎せる器の如く、八萬の毛孔は亂草の覆へるが如し。五根七竅に不淨盈滿す。七重の皮をもて裏み、六味をもて長養す、猶し祠火の吞受して厭くこと無きが如く是の如きの身は一切臭穢にして自性潰爛す。誰か此に於て愛重して憍慢すべけんや。寶積經或は云はく、九百の鬚は其上を覆ひ、九百の筋其間に連り、三萬六千の脈ありて、三升の血中に在りて流注す。九十九萬の毛孔あり、諸の汗常に出づ。九十九重の皮は其上を裏めり。已上は身中の骨肉等なり。又腹中に五藏あり、葉葉相覆ひて靡靡として下に向ふ。狀蓮華の如

し。孔竅空疎にして内外相通じ、各九十重あり。肺の藏は上に在りて其色白く、肝の藏は其色青し。心の藏は中央に在りて其色赤く、脾の藏は其色黄なり。腎の藏は下に在りて其色黒し。又六府あり、謂く、大腸を傳送の府と爲し、亦肺府と爲す。長三尋半、其色白し。膽を清淨の府と爲し、亦肝の府と爲す、其色青し。小腸を受盛の府と爲し、亦心の府と爲せ、長十六尋、其色赤し。胃を五穀の府と爲し、亦脾の府と爲す。三升の糞中に在り、其色黄なり。膀胱を津液の府と爲し、亦腎の府と爲す、一斗の尿中に在り、其色黒し。三焦を中瀆の府と爲す。此の如き等の物縱横に分布し、大小の二腸は赤白交色す。十八に周轉して毒蛇の蟠るが如し。中府藏。又項より跌至至り、髓より膚に至るまでに八萬戸の蟲あり、四頭四口九十九尾、形相一に非ず。一一の戸に復九萬の細蟲あり、秋毫よりも小なり。禪經次第寶積經に云はく、初め胎より出づる時に七日を經れば、八萬の戸蟲身より生じ、縱横に食噉す。一戸蟲あり、名けて虱髮と爲す。髮根に依りて住し、常に其髮を食ふ。二戸蟲あり、繞眼と名く、眼に依りて住し、常に眼を食ふ。四戸蟲あり、腦に依りて腦を食ふ。一戸を稻葉と名け、耳に依りて耳を食ふ。一戸を藏口と名け、鼻に依りて鼻を食ふ。二戸あり、一を遙擲と名け、二を遍擲と名く、唇に依りて唇を食ふ。一戸を針口と名け、舌に依りて舌を食ふ。五百戸は左邊に依りて左邊を食ふ。右邊も亦然り。四戸あり、生藏を食ふ。二戸あり、熱藏を食ふ四戸あり、小便道に依つて尿を食ひて住す。四戸あり、大便道に依つて糞を食ひて住す。乃至一戸あり、黒頭と名け、脚に依りて脚を食



ふ。是の如きの八萬は此身に依止して晝夜食噉し、身をして熱惱し心をして憂惱有らしめて、衆病現前するときは良醫有りとも能く除瘡を爲すこと無けん」と。第五十五七に「僧伽吒經」に説くらく、「人の將に死せんとする時、諸蟲怖畏し互相に噉食して、諸の苦痛を受けしむ。男女眷屬大悲痛を生ず。諸蟲相食して、唯二蟲のみ有りて七日闕淨す。七日を過ぎ已れば一蟲は命盡きて一蟲は猶存す」と。已上。縦ひ上膳の衆味を食ふとも、宿を經るの間に皆不淨と爲る。譬へば糞穢は大小俱に臭きが如し。此身も亦爾なり、少より老に至るまで唯是れ不淨なり、海水を傾けて洗はんも淨潔ならしむべからず。外に端嚴の相を施すと雖も内には唯諸の不淨を裏むこと猶し畫瓶に糞穢を盛るが如し。大論止觀の意。故に「禪經」の偈に云はく、「身は臭にして不淨なりと知れ、愚者は故に愛惜す、外に好顏色を觀て内の不淨を觀せず」と。身上身不淨。況んや復命終の後、塚間に捐捨し一二日乃至七日を經れば、其身臃脹して色青瘡に變ず、臭爛皮穿して膿血流出す。鸚鵡鷄梟野干狗等の種種の禽獸噉嚼し食噉せん。禽獸食し已れば、不淨潰爛して無量種の蟲蛆有りて臭處に雜出ず、惡むべきこと死狗よりも過る。乃至白骨と成り已れば、支節分散して手足髑髏各異處にあり。風吹き日に暴し、匪灌き霜封ず、積ること歳年有れば色相變異し、遂に腐朽碎末して塵土と與に相和す。以上究竟不淨なり。故に「止觀」に云はく、「未だ此相を見ずんば、愛染甚だ強からん。若し此を見已れば、欲心都て罷んで懸に忍ぶに耐へざらん。糞を見

【止觀】 摩訶止觀 の略。

【七】人間趣の中  
二に苦相を明す。

【五陰】色、受、  
想、行、識の五蘊、  
蘊は積聚の義な  
り。

【八】人間趣の中  
三に無常相を明す

されば猶能く飯を噉へども、忽に臭氣を聞けば即ち嘔吐するが如し」と。又云はく、  
「若し此相を證れば、復高眉翠眼皓齒丹唇なりと雖も、一聚の尿に粉をもて其上を覆ふが  
如し、亦爛屍の假に繒彩を著くるが如し、尙眼にすら見られず、況んや身に近づくべけん  
や。鹿杖を雇うて自害せり、況んや歎抱姪樂せんや。是の如きの想は是れ姪欲病の大黃湯  
なり」と。

【七】二に苦とは、此身は初生の時より常に苦惱を受く。『寶積經』に説くが如し。「若  
は男、若は女、適いて生れて地に墮つるとき、或は手を以て捧げ、或は衣をもて承接す。或  
は冬夏の時冷熱の風觸るるに大苦惱を受く、生ける牛を剝いで墻壁に觸れんが如し」と。  
取。長大なる後も亦苦惱多し。同經に説くらく、「此身を受くるに二種の苦有り。謂ゆる眼  
耳鼻舌咽喉牙齒智腹手足に諸の病生ずること有り。是の如く四百四病其身に逼切する  
を名けて内苦と爲す。復外苦有り。謂ゆる、或は牢獄に在りて搥打し楚撻せられ、或は耳  
鼻を刺がれ、及び手足を刑らる。諸の惡鬼神而も其便を得ん。復蚊蛇蜂等の毒蟲の爲に  
暖食せられ、寒熱飢渴風雨並びに至る。種種の苦惱其身を逼切す。此五陰の身一一の威儀  
行住坐臥、皆苦ならざること無し。若し長時行ひて暫くも休息せざる、是を名けて外苦と  
爲す。住及び坐臥も亦復苦なり」と。略諸餘の苦相は眼前に見つべければ説くことを俟つ  
べからず。

【八】三に無常とは、『涅槃經』に云はく、「人命の停らざること山の水よりも過ぎたり。

【府陀羅】梵にチヤンダーラ (Chandra) 居者、殺者など譯す。印度種姓の名、最下卑の種族にして四姓の下に位す。屠殺等を業とす。

今日は存すと雖も、明は亦保ち難し。云何が心を縦にして惡法に任せしめん」と。『出曜經』に云はく、「此日已に過ぐれば命即ち減少す。小水の魚の如し。斯れ何の樂か有らん」と。『摩耶經』の偈に云はく、「譬へば府陀羅の、牛を駈つて屠所に至るに、歩歩死地に近づくが如し、人命も亦是の如し」と。上。『設ひ長壽の業有りと雖も、終に無常を免れず、設ひ富貴の報を感ずと雖も、必ず衰患の期有り』と。『大經』の偈に云ふが如し、「一切諸の世間に、生ずる者は皆死に歸す、壽量無量なりと雖も、要必ず終盡有り、夫れ盛なれば、必ず衰ふること有り、會は別離あり。壯年は久しく停らず、盛なる色は、病に侵され、命は死の爲に吞まる、法として常なるもの有ること無し」と。又『罪業應報經』の偈に云はく、「水渚常に滿ちず、火盛なるは久しく然えず、日出づれば須臾に沒す、月滿ち已れば、復缺く、尊榮高貴なる者、無常の速なることは是に過ぎたり、當に念懃精進して、無上尊を頂禮すべし」と。上。唯に諸の凡下のみ、此怖畏有るに非ず、仙に登りて、通を得る者も、亦復是の如し。『法句譬喻經』の偈に云ふが如し。「空にも非ず、海中にも非ず、山石の間に入るにも非ず、地の方處に脱止し、死を受けざるもの有ること無し」と。空に騰り、海に入り、巖に隱るる。當に知るべし、諸餘の苦患は、或は免るる者有らんも、人の因縁は、經に廣く説くが如し。須らく説の如く修行して、常樂の果を欣求すべし。『止無常の一事は終に避くる處なし』。『觀』に云ふが如し「無常の殺鬼は豪賢を擇ばず、危脆として堅からず、恃怙すべきこと無し、云何が安然として百歳を規望し、四方に馳求して、貯積聚斂し、聚斂未だ足らざるに

【五塵】色、聲、香、味、觸の五塵に汚し煩惱を起さしむる者なるが故に塵と名く。  
 【六欲】色欲、形欲、威儀姿態欲、言語音聲欲、細滑欲、人相欲。  
 【二九】天上趣を明す。

溘焉として長く往かば、所有の産貨一徒らに他の有と爲り、冥冥として獨り逝かんに唯是非を訪はん。若し無常を覺ゆること、暴水猛風掣電よりも過ぐれば、山海空市に逃避する處無し」と。是の如く觀已りて、心大いに怖畏し、「眠は席に安んぜず、食は哺に甘んぜず、頭然を救ふが如く以て出要を求めよ」と。又云はく、「譬へば野干の耳尾牙を失はんには、詐眠脱せんと望むとも忽ち頭を斷たんと聞いて心大いに驚怖するが如し。生老病に遭ふは尙急なりと爲さず、死の事者にせざらんは、那ぞ怖れざることを得ん。怖心起る時湯火を履むが如く、五塵六欲も食染するに暇有らざらん」と。已上。人道是の如し、實に厭離すべし。

【二九】第六に天道を明さば三有り。一には欲界、二には色界、三には無色界なり。其相既に廣くして具に述ぶべきこと難し。且らく一處を擧げて以て其餘を例せん。彼忉利天の如きは快樂極ること無しと雖も、命終に臨まん時は五衰の相現す。一には頭上の華鬘忽に萎む。二には天衣は塵垢に著せらる。三には腋下に汗出づ。四には兩目數胸く。五には本居を樂まず。是相現はるる時天女眷屬皆悉く遠離し、之を棄つること草の如し。林間に偃臥して悲泣し歎いて曰はく、「此諸の天女は我常に憐愍す。云何ぞ一旦に我を棄つること草の如くす。我今依無く怙無し。誰か我を救はん者ぞ。善見宮城は今に於て將に絶えなんとす。帝釋の寶座には朝謁するに山無けん。殊勝殿の中には永く瞻望を斷つ、釋天の寶象には、何れの日か同じく乘らん。衆草苑の中には、復能く見ること無けん。麤漉



【五妙の音樂】宮商、角、徵、羽の五妙、微妙なる音樂。

【上二界】色界、無色界のこと。欲界に對して上界をいふ。

【二】厭離穢土門の總結を述ぶ。  
【五欲】財、色、名、食、欲、睡眠欲を云ふ。

苑の内には、甲冑長く辭す。雜苑林の中には、宴會するに日無し。歡喜苑の中には、遊止するに期無く、劫波樹の下、白玉の軟石には、更に坐する時無けん。曼陀枳尼殊勝池の水には沐浴するに由無けん。四種甘露も卒に食することを得難く、五妙の音樂は、頓に聽聞を絶つ。悲しいかな、此身獨り此苦に墮る。願くば慈悲を垂れて我壽命を救ひ、更に少日を延びしめば亦樂しからずや。彼馬頭山の沃焦海に墮せしむることなかれ」と。是言を作すと雖も、敢て救ふ者なし。六波羅當に知るべし、此苦は地獄よりも甚し。故に「正法念經」の偈に云はく、「天上より退せんと欲する時、心に大苦惱を生ず、地獄の衆苦毒は、十六の一にも及ばず」と。又、大徳の天既に生ずるの後は、舊天の眷屬捨てて、彼に従はん。或は威徳天有りて心に順はざる時は、驅つて宮を出し、住することを得る能はざらしめん。伽餘の五の欲天も悉く此苦あり、上二界の中には此の如きの事無しと雖も、終に退没の苦あり、乃至悲想も阿鼻を免れず、當に知るべし、天上も亦樂しむべからざることを。 已上天道

【三】第七に總じて厭離を結すとは、謂く、一箇の偏苦は耽荒すべきに非ず。四山合し來る、避遁するところ無けん。而るに諸の衆生は貪愛を以て自ら蔽はれ、深く五欲に著す。常に非ざるを常と謂ひ、樂に非ざるを樂と謂ふ。彼癡を洗ひて臆を置くが如し。猶なんぞ厭はざらん。況んや復刀山火湯漸く將に至らんとす、誰の智ある者か此身を寶玩せんや。故に「正法念經」の偈に云はく、「智者は常に憂を懷いて、而も獄中の囚に似たり、愚人

【三途】地獄、餓鬼、畜生の三惡趣をいふ。

【毘布羅山】摩伽陀國にある山の名

は常に歡樂して、猶し光音の天の如し」と。『寶積經』の偈に云はく、「種種の惡業をもて財物を求め、妻子を養育して歡娛と謂ふ、命終に臨まん時に苦身に過るも、妻子の能く相救ふ者無し、彼三塗怖畏の中に於て、妻子及び親識を見ず、車馬財寶も他人に屬す、苦を受くるとき誰か能く苦を分たん者ぞ、父母兄弟及び妻子、朋友僮僕並びに珍財、死に去れば一も來りて、相親しむもの無し、唯黑業のみ有りて常に隨逐す、乃至閻羅常に彼罪人に告ぐ、少罪だも我能く加ふる有ること無し、汝自ら罪を作りて今自ら來る、業報自ら招くは代る者無く、父母妻子も能く救ふこと無し、唯當に出離の因を勤修すべし、是故に應に枷鎖の業を捨て、善く遠離を知り安樂を求むべし」と。又、『大集經』の偈に云はく、「妻子珍寶及び王位、命終に臨まん時は隨はざる者なり、唯戒及び施不放逸は、今世後世の伴侶と爲る」と。是の如く展轉して惡を作り苦を受け、徒生徒死して輪轉すること際り無し。經の偈に云ふが如し、「一人一劫の中受くる所の諸の身骨常に積んで腐敗せずんば、毘布羅山の如し」と。一劫すら尙爾り、況んや無量劫をや。我等未だ曾て道を修せず、故に徒に無邊劫を経たり。今若し勤修せずんば未來も亦然るべし。是の如く無量生死の中に人身を得ることは甚だ難し。縱ひ人身を得るも諸根を具ふことは亦難し。縱ひ諸根を具すとも佛教に遇ふことは亦難し。縱ひ佛教に遇ふとも信心を生ずることは亦難し。故に『大經』に云はく、「人趣に生くる者は瓜上の土の如く、三塗に墮する者は十方の土の如し」と。『法華經』に云はく、「無量無數劫にも是法を聞くことは亦難し、能く是法を聞く者有らば此人も亦復難し」と。

【踰繕那】由旬に同じ、一由旬は三十里或は四十里にして印度の里程なり。

【瓔珞】印度の貴人殊に婦人少年などが頭、頸、胸などに裝飾となす。

【沙門】梵にシユラマナ(Samana)勤息、止息等と稱す。出家して佛道を修むる人をいふ。【婆羅門】梵にブラフマナ(Brahmana)

而るに今適此等の縁を具す、當に知るべし、應に苦海を離れて浄土に住生すべきは只今生に在ることを。而るに我等頭に霜雪を載くも心は俗塵に染み、一生盡くと雖も希望盡きず。遂に白日の下を辭し、獨り黄泉の底に入るの時、多百踰繕那の洞然猛火の中に墮し、天に呼び地を叩くと雖も更に何の益か有らん。願くば諸の行者、疾く厭離の心を生じて、速かに出要の路に隨へ。寶山に入らば手を空しうして歸ることなかれ。問ふ。何等の相を以て應に厭心を生ずべきや。答ふ。若し廣觀せんと欲せば、前の所説の如く六道の因果不淨苦等なり。或は復龍樹菩薩の禪陀迦王を勸發する偈に云はく、「是身は不淨九孔より流れ、窮已有ること無きは河海の如し、薄皮覆蔽して清淨に似たり、猶し瓔珞を假つて自ら莊嚴するが如し、諸の智有るの人乃ち分別して、其虚誑なるを知つて便ち棄捨す、譬へば疥者の猛焰に近づくが如し、初は暫く悦ぶと雖も後には苦を増さん、貪欲の想も亦復然り、始めは樂着すと雖も終に患多し、身の實相は皆不淨なりと見れば、即ち是れ空無我なりと觀す、若し能く斯觀を修習する者は、利益の中に於て最も無上なり、色族及び多聞ありと雖も、若し戒智無くんば禽獸のごとし、醜賤に處して聞見少しと雖も、能く戒智を修むれば勝上と名く、利衰の八法は能く免るること莫し、若し除斷するあらば眞に匹無し、諸有の沙門婆羅門、父母妻子及び眷屬彼意の爲に其言を受けて、廣く不善非法の行を造ること莫れ、設ひ此等の爲に諸過を過さんも、未來の大苦は唯身に受けん、夫れ衆惡を造りて即ち報いされば、刀劍交傷割するが如くに非ざらんも、臨終に罪相始めて俱に現じ、後地獄に入

(二) 淨行、淨齋と譯す。印度四姓の最高位に位する種族。僧侶の階級也【牟尼】釋迦牟尼佛のこと。

【齋戒】心身を一つしむこと。飲食動作をみだりにせず心を清淨にすること。

【梵天】大梵天、梵にマハーブラフマン (Mahabrahman) 色界十八天の一、初禪天の第三初禪天の主なる大梵天王、此にに住して娑婆世界を領す。

往生要集卷上本

りて諸苦に嬰らん、信と戒と施と聞と慧と慇懃と、不放逸と是の如きの七法を埒財と名く、眞實にして比無しとは牟尼の説なり、世間の諸の珍寶に超越す、足ることを知らば貧しと雖も富めりと名くべし、財有るも多欲ならば是を貧と名く、若し財業に嬰なれば諸苦を増さん、龍の多首なるは酸毒を益すが如し、當に美味は毒藥の如しと觀じて、智慧の水を以て灑いで淨からしむべし、此身を存せんが爲には應に食すべしと雖も、色味を貪りて憍慢を長ずることなかれ、諸の欲染に於て當に厭を生じ、勤めて無上の涅槃の道を求むべし、此身を調和して安隱ならしめ、然る後に宜しく應に齋戒を修すべし、一夜を分別するに五時あり、二時の中に於て當に眠息すべし、初中後夜には生死を觀じ、宜しく勤めて度を求め空しく過ぐることを勿るべく、譬へば少鹽をもて恆河に置かんに、水をして鹹味あらしむること能はざるが如く、微細の惡は衆善に遇へば、消滅散壞すること亦是の如し、梵天離欲の婬を受くと雖も、還つて無間熾然の苦に墮せん、天宮に居して光明を具すと雖も、後には地獄黑闇の中に入らん、謂ゆる黑繩等の活地獄の、燒割刺剝及び無間、是八地獄常に熾然なるは、皆是れ衆生惡業の報なり、若し圖畫を見、他言を聞き、或は經書に隨つて自ら憶念し、是の如きを知る時すら以て忍び難し、況んや復己身に自ら經歷せんをや、若し復人有つて一日中に、三百の牙を以て其體を鑽らんも、阿鼻地獄一念の苦に比すれば、百千萬分の其一にも及ばず、畜生の中に於ても苦無量なり、或は繫縛及び鞭撻有り、或は明珠羽角牙骨毛皮肉の爲に残害せらる、餓鬼道の中の苦も亦然り、諸の所須の欲意に隨はず、飢



【塵勞】心を勞する塵、煩惱のこと。

渴に逼られ寒熱に困しむ、疲乏等の苦甚だ無量なり、屎尿糞穢諸の不淨だも、百千萬劫に能く得ること無し、設ひ復推求して少分を得るも、更相に劫奪し尋いで散失す、清涼の秋月にも熾熱を患へ、溫和の春日にも轉寒苦す、若し園林に趣けば衆果盡きぬ、設ひ清淨の流に至るとも變じて枯竭す、罪業の縁の故に、壽長遠にして經ること一萬五千歳あり、衆の楚毒を受くるに空缺すること無し、皆是れ餓鬼の果報なり。煩惱の駛河は衆生を漂し、深く熾熱の苦を怖畏することを爲す、是の如きの諸の塵勞を滅せんと欲せば、應に眞實解脫の諦を修し、諸の世間假名の法を離れば、則ち清淨の不動の處を得べし。」偈あり。今略抄す。若し略を存せば、馬鳴菩薩の賴吒和羅伎の聲に唱うて云ふが如し。「有爲の諸法は、幻の如く化の如し、三界の獄縛は一として樂ふべきこと無し、王位高顯にして、勢力自在なるも、無常既に至れば、誰か存することを得る者ぞ、空中の雲の、須臾に散滅するが如し、是身は虚偽なること、猶し芭蕉の如し、怨と爲り賊と爲る、親近すべからず、毒蛇ある篋の如し、誰か當に愛樂すべけんや、是故に諸佛、常に此身を呵す。」上此中具に無常苦空無我を演ぶれば、聞く者道を悟る。或は復堅牢比丘壁上の偈に云はく、「生死斷絶せざること、は、貪欲嗜味の故なり。怨を養うて丘塚に入り、虚しく諸の辛苦を受け、身臭きこと死屍の如し、九孔より不淨を流し、圃蟲の糞を樂しむが如し、愚にして身を貪らんも、異なること無し、憶想をもて安に分別するときは、則ち是れ五欲の本なり、智者は分別せざれば、五欲則ち斷滅せん、邪念より貪著を生じ、貪著より煩惱を生ず、正念にして貪欲無くんば、

【有爲法】爲作造  
作せらるるもの  
即ち衆縁の合離に  
依りて生滅する法  
をいふ。  
【諸行は云云】萬  
有は皆うつりかは  
りて常住ならず。  
これ生死の法なり  
【生滅滅云云】生  
も滅もともに無く  
なり。涅槃寂靜の  
境に入りて初めて  
眞樂ありと。  
【雪山の居士】修  
業中の釋迦牟尼を  
指す。  
【西域記】大唐西  
域百三十八ヶ國の  
風土及び佛法の靈  
跡を記載す。

餘の煩惱も亦盡きん。」上過去の彌樓提駄婆の滅後、正法滅せん時、陀摩戸利菩薩此偈を求め得て佛法を弘宣し無量の衆生を利益せり。或は復「仁王經」に四非常の偈あり、見るべし。若し極略を樂はば「金剛經」に云ふが如し。「一切の有爲法は、夢幻泡影の如く、露の如く亦電の如し、應に是の如きの觀を作すべし。」或は復「大經」の偈に云はく、「諸行は無常にして、是れ生滅の法なり、生滅滅し已りて、寂滅なるを樂と爲す。」上祇園寺無常堂四の角に頗梨鐘有り、鐘の音の中に亦此偈を説く。病僧音を聞きて苦惱即ち除きて、清凉の樂を得ること三禪に入るが如くして、淨土に生ずるに垂んとす。況んや復雪山の居士は全身を捨てて此偈を得たり。行者善く思念せよ、之を忽爾にすることを得ざれ。説の如く觀察して、應當に貪瞋癡等の惑業を離れ、師子の人を追ふが如くすべし。應に外道無益の苦行を作して癡狗の塊を追ふが如くすべからず。問ふ、「不淨苦無常は其義了り易し。現に法體あるを見る、何ぞ説いて空と爲さんや。」答ふ、「豈經に説かずや、夢幻化の如しと。故に夢境に例して當に空の義を觀すべし。」西域記に云ふが如し、「波羅痾斯國の施鹿林の東に行くこと二三里にして湖池有り。昔一の隱士有りて此池の側に於て蘆を結び、迹を屏し、博く伎術を習ひ神理を究極し、能く瓦礫をして寶と爲し人畜をして形を易へしむれども、但末だ風雲に駭して仙鶴に陪すること能はず。圖を閲し古を考へ更に仙術を求めんとす。其方に曰はく、一烈士に和して、長刀を執りて壇隅に立たしめ、屏息絶言して昏より旦に逮り、仙を求むる者は中壇に坐し、手づから長刀を按じて口に神呪を誦じ、收視返聽

して明を遮さば仙に登らんと。遂に仙方に依りて一の烈士を求め、數重賂を加へ、潜に陰徳を行す。隱士の曰はく、願くば一夕聲せざらんのみと。烈士の曰はく、死せんも尙辭せず、豈徒に息を屏さんをやと。是に於て壇場を設け仙法を受け、方に依つて事を行じ、坐して日の暁るを待つ。暁暮の後、各其務を司る。隱士は神咒を誦し、烈士は鋸刀を按り、殆んど將に曉ならんとす。忽に聲を發して叫ぶ時に、隱士問うて曰はく、子を誡めて聲無からしむ。何を以て驚き叫ぶやと。烈士の曰はく、命を受けて後夜分に至り惛然として夢の若く變異して更に起れり。昔乎へし主射ら來りて慰謝するを見る。厚恩を荷ふことを感じて、忍んで語を報いざれば、彼人震怒して遂に殺害せられ、中陰の身を受け、屍を顧みて嘆惜す。猶願くば世を歷るとも言はずして以て厚德に報いんとす。遂に南印度の大婆羅門の家に託生するを見る。乃至胎を受け胎を出でて備に苦危を経るも、恩を荷ひ徳を荷して嘗て聲を出さざりき。業を受けて冠婚し親を喪ひ子を生ずるに泊びしも、毎に前の恩を念ひ、忍んで語らざりしかば、宗親戚屬咸見て惟異す。年六十有五を過ぎて、我妻謂つて曰はく、汝言ふべし、若し語らずんば當に汝が子を殺すべし。我時に惟念す。已に生世を隔てて自ら顧れば、衰老して唯此穉子あり。因て其妻を止め、殺害すること無からしめんとして遂に此聲を發するのみと。隱士の曰はく、我過なり。此れ魔嬖なるのみと。烈士は恩を感じ事の成らざるを悲んで、憤恚して死せりと。已上夢境是の如し、諸法も亦然なり。妄想の夢未だ覺めず、空に於て謂つて有と爲す。故に「唯識論」に云はく、「未だ眞覺を

得ずんば常に夢中に處す。故に佛説いて、生死の長夜と爲す」と。問ふ、「若し無常苦空等の觀を作さば、豈小乘の自調自度に異ならんや。」答ふ、「此觀は小に局らず、亦通じて大乘有り、法華に云ふが如し、「大慈悲を室と爲し、柔和忍辱を衣とし、諸法空を座と爲し、此に處して爲に說法す」と。上諸法の空觀すら尙大慈悲心を妨げず。何に況んや苦無常等は菩薩の悲願を催すをや。是故に「大般若」等の經に不淨等の觀を以て亦菩薩の法と爲す。若し知らんと欲せば更に經文を讀め。問ふ、「是の如き觀念何の利益有るや。」答ふ、「若し常に是の如く心を調伏せば、五欲微薄にして乃至臨終にも正念亂れざれば惡處に墮せず、「大莊嚴論」の勸進繫念の偈に云ふが如し、「盛年患無きの時、懈怠して精進せず、衆の事務を貪り營んで、施戒禪を修せず、死の爲に吞まるるに臨んで、方に悔いて善を修せんことを求む、智者應に觀察して、五欲の想を斷除すべし、精勤習心の者は、終時悔恨無し、心意既に專至なれば、錯亂の念有ること無し、智者勤めて心を提らば、臨終に意散せず、習心專至ならざれば、臨終に必ず散亂せん。」上

又「寶積經」の五十しの偈に云はく、「應に此身に觀すべし、筋脈更ひに纏繞し、濕皮相裏覆す、九處に瘡門有り、周遍して常に屎尿諸の不淨を流隘す、雲へば舎と箆とに、諸の穀麥等を盛るが如し、此身も亦是の如し、雜穢其中に滿ち、骨の機關を運動す、危脆にして堅實に非ず、愚夫は常に愛樂し、智者は染着無し、漢唾汗常に流れ、膿血恆に充滿す、黃脂亂汗を雜へ、腦髓中に滿つ、胸膈痰瘡流れ、内に生熱藏有り、肪膏と皮膜と、五藏



諸の腸胃、是の如く臭爛等の、諸の不淨と同じく居る、罪身は深く畏るべし、此れ即ち是れ怨家なり、無識耽欲の人、愚癡にして常に保護す、是の如き臭穢の身は、猶し朽ちたる城廓の如し、日夜煩惱に逼られ、遷流して暫くも停ること無し、身の城骨の墻壁、血肉を塗泥と作し、畫彩せる貪瞋癡、處に隨つて枉飾せり、惡むべし骨身の城、血肉相連合し、常に惡知識に、内外の苦をもて相煎らる、難陀、汝當に知るべし、我所説の如く、晝夜常に繫念して、欲境を思ふこと勿れ、若し遠離せんと欲せば、常に是の如きの觀を作して、解脫の處を勤求せば、速に生死の海を超えなん。』諸餘の利益は、『大論』『止觀』等を見るべし。

【三】大別して十門に分つ中二に歌求淨土門を明す

【二】大文第二に欣求淨土とは、極樂の依正は功德無量なり。百劫千劫に説かんと盡すこと能はず、算分喩分も亦知る所に非ず。然るに『群疑論』には三十種の益明けし、『安國抄』には二十四の樂を標す。既に知る稱揚は只人心に在ることを。今十樂を擧げて淨土を讚げんに、猶し一毛をもて之れ大海に滴するが如し。一には聖衆來迎の樂、二には蓮華初開の樂、三には身相神通の樂、四には五妙境界の樂、五には快樂無退の樂、六にははら接結縁の樂、七には聖衆俱會の樂、八には見佛聞法の樂、九には隨心供佛の樂、十には増進佛道の樂なり。

【三】聖衆來迎の樂を明す

【二】第一に聖衆來迎の樂とは、凡そ惡業の人は命盡くる時、風火先に去る。故に動蕪して苦多し。善行の人は命盡くる時、地水先に去る。故に緩緩として苦無し。何に況んや

念佛功積り、運心年深き者は命終の時に臨んで、大喜自ら生ず。然る所以は彌陀如來、本願を以ての故に、諸の菩薩百千の比丘衆と與に、大光明を放ちて峻然として目前に在す時に、大悲觀世音は百福莊嚴の手を伸べ、寶蓮臺を擧げて行者の前に至る。大勢至菩薩は、無量の聖衆と與に同時に讚歎し、手を授けて引接したまふ。是時行者目に自ら之を見て心中に歡喜し、身心安樂なること禪定に入るが如し。當に知るべし草菴に目を瞑するの間は、便ち是れ蓮臺に跏を結ぶの程なるを。即ち彌陀佛の後に從ひ、菩薩衆の中に在りて一念の間に西方極樂世界に生ずることを得ん。觀經平等覺經並に傳記等の意に依る。彼初利天上の億千歳の樂、大梵王宮の深禪定の樂、此等諸樂は未だ樂と爲すに足らず。輪轉際無うして三途を免れず。而るに今觀音の掌に處し、寶蓮の胎に託しなば、永く苦海を越過して初めて淨土に往生す。爾時歡喜の心は言を以て宜ぶべからず。龍樹の偈に云はく、「若し人命終の時、彼國に生ずることを得る者は、即ち無量の徳を具す、是故に我歸命す。」

【二三】蓮華初開の樂を明す。

【二三】第二に蓮華初開の樂とは、行者彼國に生じ已りて、蓮華初開の時、所有の歡樂前に倍すること百千、猶し盲者の始めて明眼を得るが如く、亦邊鄙の忽ち王宮に入るが如し。自ら其身を見れば、身既に紫磨金色の體と作る。亦自然の寶衣有りて鑽釧寶冠、莊嚴無量なり。佛の光明を見て清淨眼を得、前の宿習に因りて衆の法音を聞き、色に觸れ聲に觸るるに奇妙ならざること無し。盡虚空界の莊嚴は、眼雲路に迷ひ、轉妙法輪の音聲は、聽寶刹に滿つ。樓殿林池は表裏照曜し、鳧鷖鴛鴦は遠近に群飛す。或は衆生の駛雨の

【一實】眞如のこ  
と。眞如は法界に  
遍滿せる無差別平  
等の理體にして諸  
法の實相なるが故  
に一實といふ。

【二四】身相神通の  
樂を明す。  
【三十二相】應身

如く十方世界より生ずるを見る。或は聖衆の恆河の如くに無數の佛土より來るを見る。或は樓臺に登つて十方を望む者有り。或は宮殿に乗じて虚空に住する者あり。或は空中に住して誦經說法する者有り。或は空中に住して坐禪入定する者有り。地上林間も亦復是の如し。處處に復河を涉り流に濯ぎ、樂を奏し華を散じ、樓殿に往來し如來を禮讚する者有り。是の如き無量の天人聖衆、心に隨つて遊戲す。況んや化佛菩薩の香雲華雲は國界に充滿す。其に名くべがらず。又漸に瞬を廻して遙に以て瞻望すれば、彌陀如來は金山王の如くにして寶蓮華の上に坐し、寶池の中央に處す。觀音勢至は威儀尊重にして亦寶華に坐して佛の左右に侍す。無量の聖衆は恭敬し圍繞す。又寶池の上に寶樹行列し、寶樹の下各各一佛二菩薩あり。光明嚴飾して瑠璃地に遍す。夜闇の中に火炬火を然すが如し。時に觀音勢至、行者の前に來至して、大悲の音を出して種種に慰諭す。行者、蓮臺より下りて五體を地に投じ、頭面に敬禮して即ち菩薩に從ひ、漸く佛の所に至り七寶の階に跪いて萬徳の尊容を瞻たてまつり、一實の道を聞いて普賢の願海に入り、歡喜して涙を雨らし渴仰して骨に徹す。始めて佛界に入りて未曾有なることを得ん。行者昔娑婆に於て纔に經文を讀みしに、今正に此事を見れば、歡喜の心幾くぞや。多く觀經等龍樹の偈にははく、「若し人善根を種ゑて、疑ふときは則ち華開かず、信心清淨なる者は、華開いて則ち佛を見ん。」

【二四】第三に身相神通の樂とは、彼土の衆生は其身眞金色にして内外俱に清淨に、常に光明有りて彼此互に照す。三十二相莊嚴を具足し端正殊妙にして世間に比無し。諸

佛の身に具へ給ふ  
三十二の相好。

【那由他】梵に、  
(Nayuta) 百阿由  
多を一那由多とす  
印度の數詞にして  
數千萬といふこと

【四靜慮】色界四  
禪定のこと。初禪  
は有尋有伺定、二  
禪は無尋唯伺定、  
三禪は無尋無伺定  
四禪は捨念法事定  
これなり。

の聲聞衆は身光一尋、菩薩の光明は百由旬を照す。或は十萬由旬と云ひ、第六天の主を以て彼土の衆生に比せんに、猶し乞匈の帝王の邊に在るが如し。又彼諸の衆生は皆五通を具して妙用測り難く、心に隨つて自在なり。若し十方界の色を見んと欲せば歩を運ばずして即ち見、十方界の聲を聞かんと欲せば座を起たずして即ち聞く。無量宿命の事は今日の所聞の如く、六道衆生の心は明鏡に像を見るが如し。無央數の佛刹は咫尺の如く往來す。凡て横に百千萬億那由他の國に於ける、豎に百千萬億那由他劫に於けるも、一念の中に自在無礙なり。今此界の衆生は三十二相に於て誰か一相を得たる。五神通に於て誰か一通を得たる。燈日に非ずんば以て照すこと無く、行歩に非ずんば以て至ること無し。一紙なりと雖も其外を見ず。一念なりと雖も其後を知らず。樊籠未だ出でざれば事に隨つて礙有り。而るに彼土の衆生は一人として此德を具せざるもの有ること無し。百大劫の中に於て相好の業を種えず、四靜慮の中に於て神通の因を修せず、只是れ彼土任運生得の果報なり。亦樂しからざらんや。多く雙觀經平等覺經等に依る。龍樹の偈に云はく、「人天の身相同じて、猶し金山の頂の如し。諸勝所歸の處なり、是故に頭面して禮す。其れ彼國に生ずること有らんものは、天眼耳通を具す、十方並に無礙なるをもて、聖中の尊を稽首す、其國の諸の衆生は、神變と及び神通と亦宿命智を具す、是故に歸命禮す。」



往生要集 卷上末

天台首楞嚴院沙門 源信撰

【一】五妙境界の樂を明す。  
【四十八願】無量壽經に説かれたる阿彌陀の四十八願のこと。

【欄楯】手摺のこと。

【八功德水】澄淨清冷、甘美、輕軟潤澤、安和、除患増益の八徳を具へたる水。

【二】第四に五妙境界の樂とは、四十八願をもて淨土を莊嚴す。一切の萬物美を窮め妙を極む。見る所は悉く是れ淨妙の色、聞く所は解脫の聲に有らざる無し。香味觸の境も亦復是の如し。謂く、彼世界は瑠璃を以て地と爲し、金繩をもて其道を界す。坦然平正にして高下有ること無く、極廣曠湯として邊際有ること無し。晃耀微妙奇麗清淨にして諸の妙衣を以て其地に遍布す。一切の人天を踐んで行く、地相。衆寶國土の一一の界上には五百億七寶所成の宮殿樓閣あり、高下心に隨ひ、廣狹念に應ず。諸の寶の床座には妙衣をもて上に敷けり。七重の欄楯、百億の華幢には、珠の瓔珞を垂れ寶の幡蓋を懸く。殿裏の樓上には諸の天人有りて常に伎樂を作して如來を歌詠す。已上。講堂精舍宮殿樓閣の内外左右に諸の浴池あり。黃金池の底には白銀の沙あり。白銀池の底には黄金の沙あり。水精池の底には瑠璃の沙あり。瑠璃池の底には水精の沙あり。珊瑚琥珀碾磑瑪瑙白玉紫金も亦復是の如し。八功德水中に充滿す。寶沙映徹して深く照さざること無し。八功德とは、一には澄淨、二には清冷、三には甘美、四には輕軟、五には潤澤、六には安和、七には飲む時に飢渴等の無量の過患を除く、八には飲み已れば定めて能く諸根四大を長養し、種種殊勝の善根を増益。四邊の階道は衆寶合成す。種種の寶華は池の中に彌覆す。青蓮には青光あり、

【十力】如來の具  
 給ふ十力を云ふ  
 【無畏】如來の四  
 無所畏にして佛  
 說法のとき畏怖の  
 相なきこと、正等  
 覺無畏、漏永盡無  
 畏、說障法無所畏、  
 說出苦道無所畏の  
 四。

【不共の法】自他  
 別別に感生したる  
 法のこと。

【五根】三十七道  
 品のうち、信根、  
 精進根、念根、定  
 根、慧根、

【五力】三十七道  
 品の一、五根に同  
 じと雖も、今はこ  
 れを以て惡を排し  
 斥くる意に用ひて  
 五力といふ。

【七菩提分】七覺  
 支にして修道の時  
 その眞偽善惡を觀  
 察覺了するを覺支

黄蓮には黄光有り、赤蓮白蓮も各其光有り、微風吹き來りて華光亂轉す。一一の華の中  
 に各菩薩有り。一一の光の中に諸の化佛有り。微澗廻り流れて轉相灌注す。安詳とし  
 て徐ろに逝いて、遅からず疾からず。其聲微妙にして佛法ならざる無し。或は苦空無我諸  
 波羅蜜を演說し、或は十力無畏不共の法音を流出す。或は大慈悲の聲、或は無生忍の聲、  
 其所聞に隨つて歡喜すること無量なり。清淨寂滅眞實の義に隨順し、菩薩聲聞所行の  
 道に隨順す。又鳧鴈鶩鴛鴦鸚鵡孔雀鸚鵡迦陵頻迦等の百寶色の鳥、晝夜六時に和雅の音  
 を出して念佛念法念比丘僧を讚歎し、五根五力七菩提分を演暢す。三途苦難の名行ること  
 無く、但自然快樂の音のみ有り。彼諸の菩薩及び聲聞衆、寶池に入り洗浴せん時は、淺  
 深念に隨つて其心に違はず、心垢を蕩除して清明澄潔に、洗浴して已に訖れば各各自去  
 つて、或は空中に在り、或は樹下に在りて、經を講じ經を誦する者有り、經を受け經を聽  
 く者有り、坐禪する者有り、經行する者有り。其中未だ須陀洹を得ざる者は則ち須陀洹  
 を得、乃至未だ阿羅漢を得ざる者は則ち阿羅漢を得、未だ阿惟越致を得ざる者は阿惟越致  
 を得、皆悉く道を得て歡喜せざること莫し。復清める河あり、底には金沙を敷き、淺深  
 寒溫は曲さに人の好に従ふ。衆人遊覽して同じく河の濱に萃る。已上。池の畔、河の岸に  
 梅檀樹有り、行行相當し葉葉相次す。紫金の葉、白銀の枝、珊瑚の華、磲磔の實、一寶  
 七寶、或は純、或は雜、枝葉華果、莊嚴映飾す。和風時に來りて諸の寶樹を吹けば、羅  
 網微動して妙華徐ろに墮ち、風に隨つて馥を散じ、水に雜つて芬を流す。沉んや微妙の音

と名く。擇法、精進、喜、捨、捨、定、念の七覺支をいふ。

【須陀洹】須陀洹のこと、聲聞四果の一、三界の見惑を斷じ盡し、初めて聖者の流類に預り入る位。

【河羅漢】聲聞四果の一、三界の見惑の煩惱を斷盡し、盡智無生智を得て無學位に住し、世間に堪へたる聖者るいふ聲聞の究竟位なるに定まりて、菩薩の地位より再び凡地に退くことなき位をいふ。

【阿惟越致】佛に在るに定まりて、第六天の最高にあるを以て第六天といふ。欲界の天主大魔王の居る所。他人の變化する樂事をかきて已が樂となす。故に此名あり。

を出して宮商相和す。譬へば百千種の樂を同時に俱に作すが如し。聞く者は自然に佛法僧を念す。彼第六天の萬種の音樂は、此樹一種の音聲に如かず。葉間には華を生じ、華上には果有り、皆光明を放ち、化して寶蓋と爲る。一切の佛事蓋中に映現す。乃至十方嚴淨の佛土を見んと欲せば、寶樹の間に於て皆悉く照見す。樹上に七重の寶網あり、寶網の間に五百億の妙華宮殿あり、宮殿の中に諸の天童子あり、瓔珞光耀して自在に遊樂す。是の如く七寶の諸樹、世界に周遍す。名華軟草も亦處に隨つて柔軟香潔なる有り、觸るる者は樂を生ぜん。樹林、衆寶の羅網、虚空に彌滿して諸の寶鈴を懸け、妙法の音を宣ぶ。天華妙色は繽紛として亂墮し、寶衣嚴具は旋轉して來下す。鳥の飛んで空より下るが如く諸佛に供散す。又無量の樂器有り、懸に虚空に處す。鼓せずして自ら鳴り、皆說法を説く。已上復如意の妙香塗香扶香無量の香芬馥して世界に遍滿す。若し聞くこと有る者は塵勞垢習自然に起らず、凡て地より空に至るまで宮殿華樹一切の萬物、皆無量の雜寶百千種の香を以て共に合成す。其香普く十方世界に薰ず。菩薩聞者は皆佛行を修す。復彼國の菩薩羅漢、諸の衆生等、若し食せんと欲する時には、七寶の杙は自然に現前し、七寶の鉢には妙味中に滿ち、世間の味に類せず、亦天上の味にも非ず。香美なること比無く、甜酢意に隨ひ、色を見、香を聞きて身心清潔なり、即ち同じく食し已るに色力增長す。事已れば化し去る。時至れば復現す。又彼土の衆生衣服を得んと欲せば、念に隨つて即ち至る。佛の讚する所の如き、法に應ひて妙服自然に身に在り。裁縫染治浣濯を來めず。又

を出して宮商相和す。譬へば百千種の樂を同時に俱に作すが如し。聞く者は自然に佛法僧を念す。彼第六天の萬種の音樂は、此樹一種の音聲に如かず。葉間には華を生じ、華上には果有り、皆光明を放ち、化して寶蓋と爲る。一切の佛事蓋中に映現す。乃至十方嚴淨の佛土を見んと欲せば、寶樹の間に於て皆悉く照見す。樹上に七重の寶網あり、寶網の間に五百億の妙華宮殿あり、宮殿の中に諸の天童子あり、瓔珞光耀して自在に遊樂す。是の如く七寶の諸樹、世界に周遍す。名華軟草も亦處に隨つて柔軟香潔なる有り、觸るる者は樂を生ぜん。樹林、衆寶の羅網、虚空に彌滿して諸の寶鈴を懸け、妙法の音を宣ぶ。天華妙色は繽紛として亂墮し、寶衣嚴具は旋轉して來下す。鳥の飛んで空より下るが如く諸佛に供散す。又無量の樂器有り、懸に虚空に處す。鼓せずして自ら鳴り、皆說法を説く。已上復如意の妙香塗香扶香無量の香芬馥して世界に遍滿す。若し聞くこと有る者は塵勞垢習自然に起らず、凡て地より空に至るまで宮殿華樹一切の萬物、皆無量の雜寶百千種の香を以て共に合成す。其香普く十方世界に薰ず。菩薩聞者は皆佛行を修す。復彼國の菩薩羅漢、諸の衆生等、若し食せんと欲する時には、七寶の杙は自然に現前し、七寶の鉢には妙味中に滿ち、世間の味に類せず、亦天上の味にも非ず。香美なること比無く、甜酢意に隨ひ、色を見、香を聞きて身心清潔なり、即ち同じく食し已るに色力增長す。事已れば化し去る。時至れば復現す。又彼土の衆生衣服を得んと欲せば、念に隨つて即ち至る。佛の讚する所の如き、法に應ひて妙服自然に身に在り。裁縫染治浣濯を來めず。又

【滅盡三昧】一切の心想すべて滅盡して寂靜となる定にして、無色界の第四非想非非想處天に屬する禪定なり。

【兜羅綿】梵にタ  
ーラ(トリス)  
草木の  
花祭なり。

【二】快樂無退の樂を明す。

光明周遍すれば日月燈燭を用ひず。冷暖調和して春秋冬夏有ること無し。自然の徳風温冷調適なり。衆生の身に觸るるに皆快樂を得ること、譬へば比丘の滅盡三昧を得るが如し。毎日晨朝に妙華を吹散して佛土に遍滿す。馨香芬烈す。微妙柔軟なること兜羅綿の如し。足其上を履めば陷下すること四寸、隨つて足を擧げれば還つて復故の如し。晨朝を過ぎれば、其華地に没す。舊き華既に没すれば更に新華を雨らす。中時晡時初中後夜も亦復是の如し。此等所有の微妙なる五境は、見聞覺者をして身心適悦せしむと難も、而有情の貪著を増長せず、更に無量殊勝の功徳を増す。凡そ八方上下無央數諸の佛國の中に極樂世界の有ゆる功徳は最も第一と爲す。二百一十億の諸佛の淨土嚴淨なる妙事を以て皆此中に攝在す。若し是の如き國土の相を観ん者は、無量億劫の極重惡業を除き、命終の後必ず彼國に生ぜん。平等覺經、思惟經等の意に依りて之を記す。世親の偈に云はく、「彼世界の相を観するに、三界の道に勝過す。究竟じて虚空の如く、廣大にして邊際無し、寶華千萬種、池流泉に彌覆せり。微風華葉を動かせば、交錯して光亂轉す、宮殿諸の樓閣十方を觀るに無礙なり、雜樹に異る光色有つて、寶欄遍く圍繞す、無量の寶をもて絞絡し羅網虚空に遍す。種種の鈴響を發して、妙法音を宣吐す。衆生の願樂する所は、一切皆満足す、故に我は彼阿彌陀佛國に生ぜんと願す。」

【二】第五に快樂無退の樂とは、今此娑婆世界は耽玩すべきこと無し。輪王の位も七寶久しからず。天上の樂も五衰早く來る。乃至有頂も輪廻して期無し。況んや餘の世人をや。



【輪王】 轉輪聖王のこと、須彌四洲を統領する王。  
 【五衰】 衣服垢穢、頭上華萎、身體臭穢、腋下汗流、不樂本座にして、この五相現るれば必ず死すべし。  
 【有頂】 有頂天のこと、三界九地の絶頂なるが故に此名あり。

【八難】 在地獄、在畜生、在餓鬼、在長壽天、在北鬱單越州、盲聾瘖癡世智辯聰生佛前佛後の八難なり。

事と願と違ひ、樂と苦と俱なり。富者未だ必すしも壽あらず、壽者未だ必すしも富ます。或は昨は富んで今は貧し。或は朝に生れて暮に死す。故に經に云はく、「出づる息は入る息を待たず、入る息は出づる息を待たず。唯眼前に樂去つて哀來るのみに非ず。亦命終に臨んで罪に墮す苦に墮す。彼西方世界は、樂を受くること窮り無く、人天交接して兩ながら相見ることを得ん。慈悲心に薰じて互に一子の如し。共に瑠璃地の上に經行し、同じく梅檀林の間に遊戯す。宮殿より宮殿に至り、林地より林地に至る。若し寂ならんと欲する時は、風浪絃管自ら耳下を隔つ。若し見んと欲する時は、山川溪谷尙眼前に現す。香味觸法念に隨つて亦然り。或は飛梯を渡りて伎樂を作し、或は虚空に昇つて神通を現す。或は他方の大士に従つて迎送し、或は天人聖衆に伴つて以て遊覽す。或は寶池の邊に至つて新生の人を慰問す。汝知るや不や。是處を極樂世界と名く。是界主を彌陀佛と號す。今當に歸依すべし。或は同じく寶池の中に在りて、各蓮臺の上に坐して、互に宿命の事を説く。我本其國に在りて發心し、道を求めし時其經典を持し、其戒行を護り、其善法を作し、其布施を修す。各好喜する所の功德を語り、具に來生する所の本末を陳す。或は共に十方の諸佛利生の方便を語り、或は共に三有の衆生拔苦の因縁を議す。議し已りて縁を追うて相去り、語り已れば樂に隨ひて共に往く。或は復七寶山に登り、七寶坊は十往生經に出づ。八功池に浴す。寂然として宴默し、讀誦して解説す。是の如きの遊樂は相續して無間なり。處は是れ不退にして、永く三途八難の畏を免れ、壽も亦無量なれば、終に生老病

【五陰盛苦】 五苦  
八苦の一、有情を  
形成せる色受想行  
識の五陰の熾盛な  
るより生ずる身心  
の苦惱をいふ。

【三】 引接結縁の  
樂を明す。

【六趣】 衆生が業  
によりて趣き住む  
處を六處に分ちた  
るもの。地獄、餓  
鬼、畜生、修羅、  
人間、天上の六。  
【六道】 六趣に同  
じ。

死の苦無し。心事相應すれば、愛別離の苦無く、慈眼をもて等しく視れば、怨憎會の苦無く、白業の報なれば、求不得の苦無く、金剛の身なれば五陰盛の苦無し。一たび七寶莊嚴の臺に託して、長く三界の苦輪の海に別る。若し別願有れば他方に生ずると雖も、是れ自在の生滅にして業報の生滅に非ず。尙不苦不樂の名無し。何に況んや諸苦をや。龍樹の偈に云はく、「若し人彼國に生れば、終に惡趣及び阿修羅に墮せず、我今歸命禮す。」

【三】 第六に引接結縁の樂とは、人の世に在りて求むる所は意の如くならず。樹靜ならんと欲すれども風停まず、子養はんと欲すれども親待たず。志肝磨を吞すと雖も、力水菽に堪へず。君臣師弟朋友、一切の恩所、一切の知識も皆亦是の如し。空しく癡愛の心を勞して彌輪廻の業を増す。況んや復業果推遷し生處相隔てなば、六趣四處に何の處なるを知らざらん。野獸山禽誰か舊親を辨ぜん。心地觀經の偈に云ふが如し。世人子の爲に諸罪を造り、三塗に墮在して長く苦を受けん。男女は聖に非ず、神通無ければ、輪廻を見ず、報すべきこと難し、有情輪廻して六道に生ず、猶し車輪の始終無きが如し。或は父母と爲り、男女と爲りて、世世生生互に恩有り」と。若し極樂に生ぜば、智慧光明にして神通洞達す。世世生生の恩所知識、心に隨つて引接せん。天眼を以ては生處を見、天耳を以ては言音を聞き、宿命智を以ては其恩を憶ひ、他心智を以ては其心を了し、神通を以ては隨逐變現し、方便力を以ては教誡示導す。「平等經」に云ふが如し。彼土の衆生は、皆自ら前世に從來せし所の生を知り、及び八方上下來現在の事を知り、彼諸

天人人民、蜂飛、蟻動の類、心意に念ふ所に言はんと欲する所を知る。何歳何劫、當に此國に生じて菩薩道を作し阿羅漢を得んも、皆豫め之を知るべし。又『華嚴經』の普賢の願に云はく、「願くば我命終せんと欲する時に臨みて、盡く一切諸の障礙を除き、面り彼佛阿彌陀を見て、即ち安樂刹に往生することを得ん、我既に彼國に往生し已らば、現前に此大願を成就し、一切圓滿して盡く餘無く、一切の衆生界を利樂せん。」無緣すら尙爾り況んや結縁をや。龍樹の偈に云はく、「無垢莊嚴の光、一念及び一時、普く諸佛の會を照して、諸の群生を利益せん。」

【四】 樂衆俱會の樂を明す。

【四】 第七に聖衆俱會の樂とは、經に云ふが如し。「衆生聞ん者は應當に願を發して彼國に生れんと願ふべし。所以は何ん。是の如き諸の上善人と俱に一處に會することを得る」と。上。彼諸の菩薩聖衆の德行は思議すべからず。普賢菩薩の言はく、「若し衆生有りて未だ善根を種ゑざると、及び少善を種ゑたると、聲聞菩薩猶我名字をも聞くを得ざらん。況んや我身を見んをや。若し衆生ありて、我名を聞くことを得ば、阿耨菩提に於て復退轉せず、乃至夢中に我を見聞せん者も、亦復是の如し」と。華嚴經また云はく、「我常に諸の衆生に隨順して未來一切劫を盡さんも、恆に普賢廣大の行を修して無上大菩提を圓滿せん。普賢の身相は虚空の如し。眞に依りて住すれば國土に非ず。諸の衆生心の所欲に隨つて普く身を示現して一切に等し、一切刹の中の諸佛の所に種種の三昧をもて神通を現じ、一の神通悉く周遍す。十方國土遺れる者無し。一切刹如來の所の如く、彼刹の塵の中に

【三昧】 三摩地梵譯す。定を修すれば心を一境に住せしめて動かさるが故に名く。

も悉く亦然り」と。同經。

【阿鼻】 地獄のこと。

【無上道】 無上菩提にして、佛のさとりなり。

文殊師利大聖尊は三世の諸佛以て母と爲す。十方如來の初發心は、皆是れ文殊の教化力なり。一切世界の諸の有情、名を聞いて身及び光相を見、並に類に隨つて諸の化現を見んものは、皆佛道を成ぜんこと思議し難からん。心地觀經の意。若し但名を聞かん者は、十二億劫生死の罪を除かん。若し禮拜し供養せん者は恆に佛の家に生れん。若し名字を稱すること一日より七日すれば、文殊必ず來らん。若し宿障有る者は、夢中に見ることを得て所求圓滿せん。若し形像を見ん者は、百千劫の中にも惡道に墮せず。若し慈心を行する者は即ち文殊を見ることを得ん。若し名を受持し讀誦すること有らん者は、設ひ重障有らんも阿鼻極惡の猛火に墮せずして、常に他方清淨の佛土に生ぜん。像は、經に廣く説くが如し。又百千億那由他の佛の衆生を利益せんも、文殊師利の一劫中に於て作す所の利益に及ばず。故に若し文殊師利菩薩の名を稱へん者は、福彼百千億諸佛の名號を受持するよりも多し。寶積經の意。彌勒菩薩も功德無量なり。若し但名を聞かん者は黑闇の處に墮せず。一念名を稱せん者は千二百劫の生死の罪を除却す。歸依すること有らん者は無上道に於て不退轉を得ん。上生經の意。稱讚し禮拜せん者は百千萬億阿僧祇劫の生死の罪を除かん。虛空藏經佛無量千萬劫に修せし所の願智行廣大にして量るべからず。稱揚せんも能く盡すこと無し。華嚴經の偈、以上の三菩薩は常に極地藏菩薩は毎日晨朝に恆沙の定に入り、法界に周遍して樂世界に在り。四十華嚴經に出づ。苦の衆生を抜く。所有の悲願は餘の居士に超ゆ。十輪經の意。彼經の偈に云はく、「一日地藏を稱



【名】阿彌陀佛の  
名號をいふ。

せん、功德大名聞は、俱胝劫の中に、餘の智者を稱する徳に勝れん、假使百劫の中に、其  
 功德を讚說せんも、猶尙盡すこと能はず、故に皆當に供養すべし」と。觀世音菩薩の言は  
 く、「衆生苦行つて三たび我名を稱せんに、往いて救はずんば正覺を取らじ」と。慧經。若  
 し百千俱胝那庾多諸佛の名號を稱念する有らんに、復暫時も我名號に於て至心に稱念する  
 ことあらん。彼二の功德は平等平等なり。諸有の我名號を稱念せん者は一切皆不退轉地  
 を得ん。十一。面經。「衆生若し名を聞かば、苦を離れて解脱を得ん、亦地獄に遊戯して、大悲代  
 りて苦を受けん」と。請觀音經の偈。「弘誓深きこと海の如し、劫を歴るも思議せざらん、多くの千億  
 の佛に侍して、大清淨の願を發し、神通力を具足し、廣く智の方便を修し、十方の諸  
 の國土、刹として身を現せざること無し、念念に疑を生ずること勿れ、觀世音淨聖は、  
 苦惱死厄に於て、能く爲に依怙と爲る。一切の功德を具し、慈眼もて衆生を視る。福壽は  
 海のごとく無量なり、是故に應に頂禮すべし」と。法華經。大勢至菩薩の曰はく、「我能く現任  
 して諸の惡趣の未度の衆生を度せん」と。寶積經。智慧の光を以て普く一切を照し、三途を離  
 れしむるに無上力を得たり。故に此菩薩を大勢至と名く。此菩薩を觀ぜん者は、無數劫阿  
 僧祇生死の罪を除いて胞胎に處せず、常に諸佛淨妙の國土に遊ぶの意。「無量無邊無數劫  
 に、廣く願力を修して彌陀を助け、常に大衆に處して法言を宣ふ、衆生聞かん者は淨眼を得  
 ん、神通をもて十方國に周遍して、普く一切衆生の前に現す。衆生若し能く至心に念せば皆  
 悉く導いて安樂に至らしむ」と。龍樹の讚。又云はく、「觀音勢至は大名稱有り、功德智慧俱

【一生補處】一生を過ぐれば佛處を補ふべき等覺の位を云ふ。

に無量なり。慈悲を具足して世間を救ひ、遍く一切の衆生海に遊ぶ。是の如き勝人には甚だ遭ひ難し、一心に恭敬し頭面に禮したてまつる」と上。是の如き一生補處の大菩薩は其數恆沙の如し。色相端嚴にして功德具足し、常に極樂國に在りて彌陀佛を圍繞す。又諸の聲聞衆も其數量り難し。神智洞達し威力自在なり。能く掌中に於て一切の世界を持す。設し大目連の如きもの百千萬億無量無數有つて、阿僧祇劫に於て悉く共に彼初會の聲聞を計較せんも、知る所の數は猶し一滄の如く、其知らざる所は大海の水の如し。其中に般泥洹し去る者無央數なり。新に阿羅漢を得る者も亦無央數なれども、都て増減を爲さず。譬へば大海は、恆水を減すと雖も、恆水を加ふと雖も、増無く亦減無きが如し。諸の菩薩衆は復上の數に倍す。「大論」に云ふが如し。「彌陀佛國は菩薩僧多く聲聞僧少し」と上。是の如きの聖衆、其國に充滿せり。互に遙に相瞻望し、遙に語聲を聞く。同一に道を求めて異類有ること無し。何に況んや復十方恆河沙佛土の無量無數の菩薩聖衆、各神通を現じて安樂國に至り、尊顔を瞻仰して恭敬供養す。或は天の妙華を齎し、或は妙なる寶香を燒き、或は無價の衣を獻じ、或は天の伎樂を奏して和雅の音を發し、世尊を歌歎し經法を聽受して道化を宣布す。是の如く往來して晝夜絶えず、東方に去れば西方より來り、西方に去れば北方より來り、北方に去れば南方より來る。四維上下も互に亦是の如し、更相開避すること猶し盛なる市の如し。此等の大士は一たび其名を聞くすら尙少縁に非ず。況んや百千萬劫にも誰か相見ることを得る者ぞ。然るに彼國土の衆生、常に一處に會して互に

言語を交へ、問訊し恭敬し親近し承習す。亦樂しからずや。已上又觀經觀經龍樹の偈に云はく、「彼土の諸の菩薩は、諸の相好を具足して、皆自ら身を莊嚴せり、我今歸命禮す。三界の獄を超出して、日は蓮華葉の如し、聲聞衆無量なり。是故に稽首して禮す。」又云はく、「十方より來れる所の諸の佛子、神通を顯現して安樂に至り、尊顔を瞻仰して常に恭敬す、故に我彌陀佛を頂禮す。」

【五】見佛聞法の樂を明す。四無量心のこと。慈、悲喜、捨の四無量をいふ。この四心は菩薩の利他の廣大心なるが故に無量心といふ。

【三解脱】三解脱門のこと。解脱を得る三種の方法、空、無相、無作の三解脱門なり。

【舍衛】梵にシユラー、波斯、テイ(Spasi)聞者城と譯す。拘薩羅國の都城。

【三寶】佛、法、僧の三寶。

【五】第八に見佛聞法の樂とは、今此娑婆世界は佛を見て法を聞くこと甚だ難し。師子吼菩薩の言はく、「我等無數百千劫に四無量三解脱を修して、今大聖牟尼尊を見るは、猶し盲龜の浮木に値へるが如し」と。又、橋童は全身を捨てて始めて半偈を得たり。常啼は肝府を割いて遠く般若を求めたり。菩薩すら尙雨り。何に況んや凡夫をや。佛舍衛に在すと二十五年前に九億の家あり、三億は佛を見、三億は纒に聞き、其餘の三億は見ず聞かず。在世すら尙雨り。何に況んや滅後をや。故に「法華」に云はく、「是諸の罪の衆生は惡業の因縁を以て阿僧祇劫を過せども三寶の名をも聞かず」と。而も彼國の衆生は常に彌陀佛を見、恆に深妙の法を聞くをや。謂く、嚴淨の地上に菩提樹有り、枝葉四に布き、衆寶合を成せり。樹上に寶羅網を覆ひ、條の間に珠の瓔珞を垂れたり。風枝葉を動かせば聲妙法を演ぶ。其聲流布して諸の佛國に遍す。其聞くこと有らん者は深法忍を得て、不退轉に住し耳根清徹なり。樹色を靚、樹香を聞き、樹味を嘗め、樹光に觸れ、樹相を緣ぜんも、一切亦然り。佛道を成ずるに至るまで六根清徹なり。樹下に座有り、莊嚴無量なり。座上に

【鳥瑟】梵に(カウ)と譯す。佛頂又は頂髻の、肉髻相のこと。

【白毫】佛の兩眉の間に白玉の毫あり。之を白毫といふ。三十二相の一、白毫相のこと。

佛有す、相好無邊なり。鳥瑟高く顯れて晴天の翠濃なるごとく、白毫右に旋つて秋月の光満つるがごとし。青蓮の眼、丹果の唇、迦陵頻の聲、師子相の智、仙鹿王の臚、千福輪の趺、是の如き八萬四千の相好、紫磨金の身を纏絡す。無量塵數の光明は億千の日月を集るが如し。有時には七寶の講堂に在り、妙法を演暢すれば梵音深妙にして衆心を悅可す。菩薩聲聞天人大眾一心に合掌して尊顔を瞻仰す。即時に自然の微風七寶の樹を吹き、無量の妙華風に隨つて四散す。一切の諸天は諸の音樂を奏す。斯時に當つて熙怡快樂勝けて言ふべからず。或は復廣大の身を現じ、或は丈六八尺の身を現じ、或は寶樹の下に在し或は寶池の上に在す。衆生の木の宿命の道を求めし時の心に喜願する所に隨ひ、大小意に隨つて爲に經法を説き、其をして開解得道せしむ。是の如く種種の機に隨つて種種の法を説きたまふ。又觀音勢至の兩菩薩常に佛の左右の邊に在りて坐侍し政論す。佛常に是兩菩薩と共に對坐して八方上下去來現在の事を議す。或時には東方恆沙國の無量無數の諸菩薩衆皆悉く無量壽佛の所に往詣して、恭敬し供養す。及び諸菩薩聲聞の衆南西北四方四維上下も亦復是の如し。彼嚴淨土の微妙難思議なるを見て、因て無量の心を發して、我國も亦然らんと願ふ。時に應じて世尊容を動かして微笑し、口より無數の光を出して遍く十方の國を照す。廻光身を圍ること三匝して頂に入る。一切の天人衆踊躍して皆歡喜す。大士觀世音、服を弊へ稽首して佛に問ふ、「何に緣てか咲きたまふこと唯然り。願くば説きたまへ」時に梵聲雷の如く、八音妙響を暢べて當に菩薩に記を授け、告げて言はく、「仁、諦に



【決】記別のこと佛が修行者の未來の證果を一一區別して豫め説き給ふこと。修道者に關する佛の豫言をいふ。

【六】隨心供佛の樂を明す。

【衣衾】花を盛る

聽け。十方より來れる正土吾悉く彼願を知れり。嚴淨の土を志求す、決を受けて當に作佛すべし。一切の法は猶し夢と幻と響の如しと覺了し、諸の妙華を満足せば、必ず是の如き利を成ぜん。法は電と影の如しと知りて、菩薩道を究竟し、諸の功德の本を具して、決を受けて當に作佛すべし。諸法の性は一切空我なりと通達して、専ら佛土を淨めんことを求めば必ず是の如き利を成ぜん」と。上。巴。泥んや復水鳥樹林皆妙法を演ぶ。凡そ聞かんと欲する所は自然に聞くことを得。是の如きの法樂亦何處にか在らんや。平等覺經等の意に依る。龍樹讚じて曰はく、「金底寶間の池に生ずる華に、善根所成の妙臺座有り、彼座上に於て山玉の如し、故に我彌陀佛を頂禮す、諸有は無常無我等なり、亦水月電影露の如し、衆の爲に説法すれども名字無し、故に我彌陀佛を頂禮す、願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん。」

【六】第九に隨心供佛の樂とは、彼土の衆生は晝夜六時に、常に種種の天華を持して無量壽佛を供養し、又意有りて他方の諸佛を供養せんと欲せば、即ち前んで長跪し叉手して佛に白せば則ち之を可す。皆大いに歡喜し、千億萬の人各自ら躡飛し、等輩相追うて俱に共に散飛し、八方上下無央數の諸佛の所に到り、皆前んで禮を作し、供養し恭敬す。是の如く毎日晨朝に、各衣衾を以て衆の妙華を盛り、他方の十萬億佛に供養す。及び諸の衣服伎樂一切の供具、意に隨つて出生して供養し恭敬す。即ち食時を以て本國に還到し、飯食し經行して、諸の法樂を受く。或は言はく、「毎日三時に諸佛を供養す」と。行者今遣

【七】 増進佛道の樂を明す。

【身子】 舍利弗のこと。

舍利弗の

教に從つて十方佛土種種の功德を聞くことを得て、見るに隨ひ聞くに隨ひ、遙に戀慕を生じ、各謂つて言はん、「我等何の時か十方の淨土を見ることを得ん、諸佛菩薩に值ふことを得ん」と。教文に對する毎に嗟嘆せざることを無からん。而も若し適いて極樂園に生るるを得ば、或は自力により、或は佛力を承けて朝に往きて暮に來り、須臾に去り須臾に還る。遍く十方一切の佛刹に至り、面り諸佛に奉へ、諸の天士に值遇して恆に正法を聞き、大菩提の記を受け、乃至普く一切の塵刹に入りて諸の佛事を作し、普賢の行を修せば亦樂しからずや。阿彌陀經、平等覺の意。龍樹の偈に云はく、「彼土の大菩薩、日日三昧に於て、十方の佛を供養す、是故に稽首して禮したてまつる。」

【七】 第十に増進佛道の樂とは、今此娑婆世界は道を修め果を得ること甚だ難し。何となれば、苦を受くる者は常に憂へ、樂を受くる者は常に著す。苦と云ひ樂と云ひ、解脱を遠離し、若は昇り若は沈み、輪廻に非ざること無し。適發心修行の者有りと雖も、亦成就し難し。煩惱内に催し、惡緣外に牽いて、或は二乗の心を發し、或は三惡道に還る。譬へば猶し水中の月の波に隨つて動き易く、陣前の軍の刃に臨めば則ち還るがごとし。魚子長じ難く、菴果熟すること少し。彼身子等の六十劫に退くが如きは是なり。唯釋迦如來のみ無量劫に於て、行じ難きを苦行し、功を積み徳を累ねて菩薩道を求めんとして未だ曾て止息したまはず。三千大千世界を觀るに、乃至芥子計の如きも是菩薩、身命を捨てたまふ處に非ざる有ること無し。衆生の爲の故に、然る後に乃ち菩提道を成ずることを得たり。

【無生忍】不生不滅の眞如法性を認知して決定安住する位。  
 【八相】佛がこの世界に出現して、衆生に隨順して、一生の間に示し給ふ八種の相。降兜率、託胎、降生、出家、降魔、成道、說法、涅槃。

其餘の衆生は己が智分に非ず。象子も力微なれば身刀箭に斃せらる。故に龍樹菩薩の云はく、「譬へば四十里の水に如し一人有りて一升の熱湯を以て之に投ぜんに、當時は水滅するに似たれども、夜を経て明に至れば乃ら餘者より高きが如し。凡夫此に在りて發心して苦を救はんも亦復是の如し。貪瞋の境、順違多きを以ての故に、自ら煩惱を起して還つて惡道に墮せん」と。已。彼極樂國土の衆生は多くの因縁有るが故に、畢竟して退せずして佛道に増進す。一には佛の悲願力常に攝持するが故に。二には佛光常に照して菩提心を増すが故に。三には水鳥樹林風鈴等の聲常に念佛念法念僧の心を生ぜしむるが故に。四には純ら諸菩薩以て善友と爲り、外に惡縁無く内に重感を伏するが故に。五には壽命永劫にして佛と共に齊等なれば、佛道を修習するに生死の間隔有ること無し。故に「華嚴」の偈に云はく、「若し衆生有りて一たび佛を見ば、必ず諸の業障を淨除せしめん」と。一たび見るすら尙爾り。何に況んや常に見んをや。此因縁に由て彼土の衆生は所有の萬物に於て我我所の心無く、去來進止心に係る所無し。諸の衆生に於て大悲心を得れば、自然に増進して無生忍を悟り、究竟して必ず一生補處に至る。乃至速に無上菩提を證し、衆生の爲の故に八相を示現し、縁に隨つて嚴淨の國土に在りて妙法輪を轉じて諸の衆生を度し、諸の衆生をして其國を欣求せしむるなり。我今日極樂を志願するが如きも、亦十方にいて衆生往を引接し、彌陀佛の大悲本願の如くせん。是の如きの利益は亦樂しからずや。一世の勤修は是れ須臾の間なり。何ぞ衆事を棄てて淨土を求めざらんや。願くば諸の行者、努力め

【妙法輪】 教法のこと。諸佛の教法はよく衆生の迷妄を破碎すること恰も車輪の轉じて瓦礫を碎くが如くなるが故に法輪と名

【八】 大別して十門に分つ中、三に極樂證據門を明す

【十方】 東南西北四維上下

【九】 十方に對するを明す

て懈ること匪ざれ。多く雙觀經並に天台十疑等の意に依る。龍樹の偈に云はく、「彼尊無量の方便の境には、諸趣惡知識有ること無し。往生すれば退せずして菩提に至る、故に我彌陀佛を頂禮す。我彼尊の功德の事を説かん、衆善邊無きこと海水の如し。獲る所の善根は清淨なる者なり。願くば衆生と共に彼國に生ぜん。願くば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん。」

【八】 大文第三に、極樂の證據を明さば二あり。一には十方に對し、二には兜率に對せん。

【九】 初に十方に對すとは、問ふ、「十方に淨土有り、何ぞ唯極樂に生ぜんことを願ふや。」答ふ、「天台大師の云はく、「諸の經論處處に唯衆生を勸めて偏に阿彌陀佛を念じ、西方の極樂世界を求めしむ。『無量壽經』觀經』往生論』等の數十餘部の經論の文に慇懃に指授して西方に生ぜんことを勸む。是を以て偏に念ずるなり。」大師、一切の經論を披閱すること凡て十五遍なりと。應に知るべし、述ぶる所信ぜずんばあるべからず。迦才師の三卷の『淨土論』には十二經七論を引く。一には『無量壽經』二には『觀經』三には『小阿彌陀經』四には『鼓音聲經』五には『稱揚諸佛功德經』六には『發覺淨心經』七には『大集經』八には『十往生經』九には『藥師經』十には『般若三昧經』十一には『大阿彌陀經』十二には『無量清淨平等覺經』なり。已上の雙觀無量壽經清淨覺經一には『往生論』二には『起信論』三には『十住毘婆沙論』四には一切經中の彌陀偈、五には『寶性論』六には龍樹の十二禮の偈、七には『攝大乘論』の彌陀偈なり。已上智樣師私に加へ



て云はく、「法華經」の藥王品、「四十華嚴經」の普賢願、「日蓮所問經」の「三千佛名經」、「無  
 字寶篋經」、「千手陀羅尼經」、「十一面經」、「不空羂索」、「如意輪」、「隨求尊勝」、「無垢淨  
 光」、「光明阿彌陀」等の諸顯密教の中に専ら極樂を勧むること稱げて計ふべからず。故に偏  
 に願求するなり」と。問ふ、「佛の言はく、諸佛の淨土は實に差別無しと。何が故に如來は偏  
 に西方を讚するや。」答ふ、「隨願往生經」に、「佛此疑を決して言はく、「娑婆世界は人貪  
 濁多くして、信向の者少く、邪を習ふ者多し。正法を信ぜず、專一なること能はざれば心  
 亂れて志無からん。實に差別無けれども諸の衆生をして專心に在ること有らしむ。是  
 故に彼國土を讚歎するのみ。諸の往生の人、悉く彼に隨つて願くば果を獲ざること無し」  
 と。又「心地觀經」に云はく、「諸の佛子等、應當に至心に一佛及び一菩薩を見ること  
 を求むべし。是の如きを名けて出世の法要と爲す」と。云云。是故に専ら一の佛國を求むる  
 なり。問ふ、「其心を専らにせんが爲ならば、何が故に中に於て唯極樂を勧むるや。」答ふ、  
 「設ひ餘の淨土を勧めんも、亦此難を避くるにあらず。佛意測り難し、唯仰信すべし。譬  
 へば癡人の火坑に墮つるが若きは、自ら出づること能はず。知識之を救ふに一の方便を以  
 てすれば、癡人力を得て應に務めて速に出づべし。何の暇有つてか縱横に餘の術計を論  
 ぜん。行者も亦爾り。他の念を生ずること勿れ。日蓮所問經」に云ふが如し。譬へば萬川  
 の長流に浮べる草木有るが如きは、前は後を顧みず、後は前を顧みず、都て大海に會す。  
 世間も亦爾り。豪貴富樂自在なる有りと雖も、悉く生老病死を免るることを得ず。只佛

【舌を舒べ】佛の虚妄なきことをあらはす相なり。

【末法】釋尊入滅の後遺教の信奉せらるる程度によりて分ちたる正、像、末の三時期の一。像法の後萬年をいふ。

經を信ぜざるに由りて、後世に人と爲らんも更に甚だ困劇にして、千佛の國土に生ずるを得る能はざらん」と。是故に我説く、無量壽佛國は行き易く取り易しと。而るに人修行し往生すること能はずして、還つて九十五種の邪道に事ふ。我説く、是人を無眼の人と名け無耳の人と名くと。『阿彌陀經』に云はく、「我是利を見るが故に是言を説く。若し信すること有らん者は、應當に發願して彼國土に坐すべし」と。上。佛誠慇懃なり、唯應に仰信すべし、況んや復機縁無きに非ず。何ぞ強ひて之を拒まん。天台の「十疑」に云ふが如し、「阿彌陀佛別に大悲の四十八願有りて衆生を接引す。又被佛光明遍徧く法界の念佛の衆生を照し、攝取して捨てたまはず。十方各恆河沙の諸佛、舌を舒べ三千世界を覆ひて、一切の衆生の阿彌陀佛を念じて佛の大悲本願力に乗じて、決定して極樂世界に生ずるを得るを證識す」と。又、『無量壽經』に云はく、「末後法滅の時、特に此經を留むること百年、世に在りて衆生を接引して彼國土に生れしめん」と。故に知る、阿彌陀と此世界の極惡の衆生と、偏に因縁あることを。上。慈悲の云はく、「末法萬年には餘經悉く滅し、彌陀の一教物を利すること偏に増せん。大聖特り留まること百歳、時末法を経ること一萬年に滿つれば、一切の諸經並に從つて滅没せん。釋迦の恩重ければ教を留むること百年なり」と。上。又、懷感禪師の云はく、「般舟三昧經」に説く、跋陀和菩薩、釋迦牟尼佛に請うて言はく、未來の衆生は云何にしてか十方諸佛を見ることを得んと。佛教へて阿彌陀を念じて即ち十方一切佛を見しむと。此佛特に娑婆の衆生と有縁なるを以て、先に此佛に於て心を専らにして稱念せば

【一】兜率に對するを明す。

三昧成じ易し」と。上。又觀音勢至は本是土に於て菩薩の行を修して彼國に轉生すと。宿縁の追ふ所豈機應無からんや。」

【二】第二に兜率に對すとは、問ふ、「玄奘三藏の云はく、一西方の道俗並に彌勒の業を

作す。同じく欲界なれば其行成じ易きが爲に、大小乗の師皆此法を許す。彌陀の淨土は

恐くは凡そ鄙穢をもて修行せば成じ難からん。舊の經論の如きは、七地已上の菩薩、分に

隨つて報佛の淨土を見ると。新論の意に依れば、三地の菩薩始めて報佛の淨土を見ること

を得べしと。豈下品の凡夫即ち往生を得べけん」と。上。天竺既に雨り。今何ぞ極樂を勸む

るや。答ふ、「中國と遼州と、其處異なりと雖も、顯密の教門、其理是れ同じ。如今引く所

の證據既に多し。寧んぞ佛教の明文に背いて天竺の風聞に従ふべけんや。何に況んや祇洹

精舎の無常院に病者をして、西に面して佛の淨刹に往くの想を作さしむるをや。具に下

の臨終行儀の如し。明かに知んぬ、佛意偏に極樂を勸むることを。西域の風俗豈之に乖かん

や。又懷感禪師の「群疑論」には極樂と兜率とに於て十二の勝劣を立す。一には化主佛と

菩薩と別なるが故に。一には淨穢土の別。三には女人の有無。四には壽命の長短。五には

内外の有無。天內院不退外院退あり。六には五衰の有無。七には相好の有無。八には五通の

有無。九には不善心の起と不起と。十には減罪の多少。謂く、彌勒の名を稱ふれば千二百

劫の罪を除き、彌陀の名を稱ふれば八十億劫の罪を減す。十一は苦受の有無。十二には

【五通】天眼、天耳、宿命、他心、神足の五神通。

【祇洹精舎】梵にゲエータワナ、平ガエーラ (Jetavana vihara) 祇樹給孤獨園に建てられたる精舎。釋尊及び衆僧の説法修道の爲に須達長者の寄進せし所。

【引接】 來迎引接のこと。

【正覺】 佛のさとりのこと。

斯の如くなりと雖も、然も並に佛の勸讚、相是非すること莫れ。凡そ二界勝劣の慈恩は十異を立す。前の八は感師の所立を出でず。故に更め抄せず。其第九に云はく、西方は佛來迎す。兜率は爾らず。感師の云はく、「來迎は同じきなり」と。第十に云はく、西方は經論慇懃に勸むること極めて多し。兜率は多に非ず、亦慇懃に非ずと云云。感師又往生の難易に於て十五の同義、八の異義を立す。八の異義とは、一には本願の異。謂く、彌陀は引接の願有り。彌勒は願無し。願無くんば自ら浮んで水を渡るが若し。願有るは舟に乗じて水に遊ぶが若し。二には光明の異。謂く、彌陀佛は光もて念佛の衆生を照し攝取して捨てたまはず。彌勒は爾らず。光照有るは晝日の遊の如く、光無きは暗中の來往に似る。三には守護の異。謂く、無數化佛、觀音勢至常に行者の所に至ればなり。又、「稱讚淨土經」に云はく、「十方十號伽沙の諸佛之れ攝受せらる」と。又、「十往生經」に云はく、「佛、二十五菩薩を遣はして常に行人を守護す」と。兜率は爾らず。護有るは多人と共に遊んで強賊の所逼を畏れざるが如し。護無きは孤り嶮徑に遊び必ず暴客の爲に侵さるるが似し。四には舒舌の異。謂く、十方の佛舌を舒べて證誠す。兜率は爾らず。五には衆聖の異。謂く、華聚菩薩、山海慧菩薩、弘誓願を發すらく、「若し一の衆生有りて西方に生るること盡きざらんに、我若し先づ去らば正覺を取らじ」と。六には滅罪の多少。前の如し。七には重惡の異。謂く、五逆罪を造らんも亦西方に生ずることを得。兜率は爾らず。八には教説の異。謂く、「無量壽經」に云はく、「横に五逆趣を截り、惡趣自然に閉ぢ、道に昇ること窮極無し。往



【西域】印度、于闐、月氏等の國を呼ぶ、

【盧遮那佛】毘盧舍那にして、光明遍照と譯す。  
【般若經】滅度、圓寂などと譯す。

き易くして人無し」と。兜率は爾らず。十五の同義も猶生じ難きを説くべからず。況んや異に八門有りて乃ち説いて往き難きを言ふをや。諸の學者、理及び教を尋ねて其難易の二門を鑑み永く其惑を除くべし」と。已上略抄但十五同義は彼論を見るべし。問ふ、「玄奘の所傳會せずんば有るべからず。」答ふ、「西域の行法は暗ければ以て決し難し。今試に會して云はく、西域の行者は多く小乘に有り。十五國は大乗を學び、十五國は大小兼學し、四十一國は十乘を學ぶ。上生兜率は大小共に許す。他土の佛土に住くことは、大は許し小は許さず。彼は共に許すが故に、並に兜率と云ふならん。流沙より以東は盛に大乘を興す。彼西域の雜行に同すべからず。何に況んや諸教の興隆は必ずしも一時にあらず。就中念佛の教は多く末代の經道滅後濁惡の衆生を利するの計なり。彼時は天竺未だ興盛ならざるか。若し爾らざれば上足の基師豈別に「西方要決」を著して十の勝劣を立て自他を勸むべけんや。問ふ、「心地觀經」に云はく、「我今弟子を彌勒に付して龍華會中に解脱を得たり」と。豈如來も兜率を勸進するに非ずや。答ふ、「此亦違ひ無し。誰か上生心地等の兩三の經を遮せん。然れども極樂の文の顯密且つ千なるに如かず。又、「大悲經」の第三に云はく、「當來世に於て法の滅せんと欲する時、當に比丘比丘尼有りて我法の中に於て出家を得已りて、手に兒の臂を牽いて共に遊行し、酒家より酒家に至り、我法の中に於て非梵行を作すべし。乃至。但使性は是れ沙門なるも沙門の行を訂し、自ら沙門と稱して形は沙門に似、當に、袈裟衣を被著すること有らん者は、此賢劫に於て彌勒を首と爲す。乃至最後の盧遮那佛の所にして般若經に入り遺餘有ること無かるべし。何を

以ての故に。是の如きの一切諸の沙門の中、乃至一たび佛名を稱し、一たび信を生ぜん者の所作の功德は、終に虚言にあらざればなり。上。「心地觀經」の意も亦是の如し。故に彼經に龍華と云ひて兜率と云はず。今之を案するに、釋尊入滅より慈尊出世に至るまで隔ること五十七俱胝六十万千歳なり。新婆娑の意。其間の輪廻劇苦幾處ぞや。何ぞ終焉の暮に即ち蓮胎に託せんことを願はずして、悠悠たる生死に留つて龍華會に至ることを期せんや。何に況んや若し適極樂に生ぜば晝夜念に隨つて兜率宮に往來し、乃至龍華會の中に新に對揚の首と爲らん。猶し富貴にして故郷に歸るが如し。誰人か此事を欣樂せざらんや。若し別縁有らん者は、餘方も亦佳し。凡て意樂に隨ふべし、異執を生ずること勿れ。故に感法師の云はく、「兜率を志求する者は、西方行人を毀つこと勿れ。西方に生れんと願ふ者は兜率の業を毀つこと莫れ。各性欲に隨ひ、情に任せて修學せよ。相是非すること莫れ。何ぞ但勝處に生ぜず、亦乃ち三途に輪轉せん」云云。

【二】大別して十門に分つ中、四に正修念佛門を明す

【三】五念門の中禮拜門を明す。

【四】身、口、意の三業。

【五】全身の總稱。

【二】大文第四に正修念佛とは、此に亦五あり。世親菩薩の「往生論」に云ふが如し。「五念門力行を修して成就すれば、畢竟して安樂國土に生じ、彼阿彌陀佛を見るを得ん。一には禮拜門。二には讚歎門。三には作願門。四には觀察門。五には廻向門」と云云。此中の作願廻向の二門は、諸の行業に於て應に之を通用すべし。

【三】初に禮拜門とは、是れ即ち三業相應の身業なり。一心に歸命して五體を地に投じ遙に西方の阿彌陀佛を禮す。多少を論ぜず、但誠心を用ひよ。或は應に「觀佛三昧經」

【眞際】眞實際のこと。人法の一を空することによりて顯はさるる眞如のこと。  
 【優曇華】靈瑞華ともいふ。三千年に一度開く花なり

の文を念すべし。我今一佛を禮すれば即ち一切の佛を禮するなり。若し一佛を思惟すれば即ち一切の佛を見る。一一の佛の前に一の行者有つて是を接して禮を爲すは皆是れ己身なり。私に云はく、一切の佛は是れ彌陀の分身なり。或は是れ十方一切の諸佛。或は應に念すべし、能禮所禮の性空寂にして自身他身の體無二なり。願くば衆生と共に道を體解して無上の意を發し、眞際に歸せん」と或は應に「心地觀經」の六種の功德に依るべし。「一には無上大功德。二には無上大恩徳。三には無足二足及以多足の衆生の中の尊なり。四には極めて値遇し難きこと優曇華の如し。五には獨り三千大千世界に出づ。六には世出世間の功德圓滿して一切の義依なり。此の如き等の六種の功德を具して常に能く一切衆生を利益す」と。上。經文は極めて略なり、今須らく言を加へて以て禮法を爲すべし。「一には應に念すべし、一たび南無佛と稱するすら皆已に佛道を成す。故に我歸命して無上の功德田を禮す」と。二には應に念すべし、「慈眼をもて衆生を視ること平等にして一子の如し。故に我歸命して極大なる慈悲の祠を禮す」と。三には應に念すべし、「十方の諸大士、彌陀尊を恭敬す。故に我歸命して無上の兩足尊を禮す」と。四には應に念すべし、「一たび佛名を聞くことを得れば、優曇華よりも過ぐ。故に我歸命して極難値遇者を禮す」と。五には應に念すべし、「一百俱胝界に二尊並び出でず。故に我歸命して希有の大法王を禮す」と。六には應に念すべし、「佛法の衆徳海は三世同一體なり。故に我歸命して圓融の萬徳尊を禮す」と。若し廣行を樂ぶ者は、應に龍樹菩薩の十二禮に依るべし。又善導和尚の六時の禮法有り。具に出だすべからず。設し餘行無けれども、但禮拜

【二三】五念門の中  
讚歎門を明す。  
【阿耨菩提】阿耨  
多羅三藐三菩提、  
無上正遍知、無上  
正等覺と譯す。佛  
の覺智をいふ。

【八道】八正道支  
に同じ。中正道に  
至る道なるが故に  
正道といふ。正見、  
正思惟、正語、正  
業、正命、正精進、  
正念、正定。

に依りて亦往生を得ること『觀虛空藏菩薩佛名經』に云ふが如し。阿彌陀佛を至心に敬禮せば、三惡道を離れて後に其國に生ずることを得んと。

【二三】第二に讚歎門とは是れ三業相應の口業なり。『十住婆娑』の第三に云ふが如し。阿彌陀佛の本願は是の如し。若し人我を念じ名を稱して自ら歸せば、即ち必定して阿耨菩提を得ることに入らん。是故に常に應に憶念して偈を以て稱讚すべし。無量の光明、慧有つて身は眞金山の如し。我今身口意をもて、合掌し稽首し禮す。十方現在の佛は、種種の因縁を以て、彼佛の功德を歎ず、我今歸命して、佛足の千幅輪を禮す、柔軟にして蓮華の色有り、見る者は皆歡喜して、頭面に佛足を禮す、眉間の白毫光は、猶し清淨なる月の如く、面光の色を増益す、頭面に佛足を禮す、彼佛の言説する所は、諸の罪根を破除す、美言益する所多し、我今稽首禮す、一切の賢聖衆、及び諸の天人衆、咸皆共に歸命す、是故に我亦禮す、彼八道の船に乗じて、能く度し難き海を度す、自ら度して亦彼を度す、我自在者を禮す、諸佛有つて無量劫に、其功德を讚揚せんも、猶尙盡すこと能はず、清淨人に歸命して我今亦是の如く、無量の徳を稱讚す、是福因縁を以て、願くば佛常に我を念ぜよ、此福因縁を以て、獲る所の上妙の徳、願くば諸の衆生類も、皆亦悉く當に得べし。〔彼論に三十二偈有り、今略して要を抄す。具なることは別抄に在り。或は後、『往生論』の偈『眞言教』の佛讚、阿彌陀の別讚あり。此等の文を、一遍多遍、一行多行も但應に至誠にすべし、多少を論ぜざん。設ひ餘行無くとも、唯讚歎に依つて亦應に願に隨つ



【二四】 五念門の中  
作願門を明す。

【二五】 作願門の中  
菩提心を明す。

【二六】 菩提心の行  
相を明す。

て必ず往生を得べし。『法華』の偈に云ふが如し。『或は歡喜の心を以て、歌唄して佛徳を頌し。乃至一小音も、皆已に佛道を成ぜん。』一音既に爾り、何に況んや常讚せんをや。佛果尙爾り、何に況んや往生をや。眞言の讚佛は別益甚深なり、顯露にすること能はず。

【二四】 第三に作願門とは、以下の三門は是れ三業相應の意業なり。禪禪師の『安樂集』に云はく、『大經』に云はく、凡そ淨土に往生せんと欲せば、要す須らく菩提心を發すを源と爲すべし。云何が菩提なる。乃ち是れ無上佛道の名なり。若し心を發して佛と作らんと欲せん者は、此心を廣大にして法界に周遍し、此心を長遠にして未來際を盡し、此心を普く備へて二乗の障を離れ、若し能く一たび此心を發せば無始生死の有輪を傾けん」と。『淨土論』に云はく、『發菩提心とは正に是れ願作佛の心なり。願作佛の心とは即ち是れ度衆生の心なり。度衆生の心とは即ち是れ衆生を攝受して有佛の國土に生ぜしむる心なり。今既に淨土に生ぜんと願ふが故に、先づ須らく菩提心を發すべきなり』と。上

料簡なり。

【二六】 初に行相とは、總じて之を謂はば、願作佛の心なり。亦上求菩提下化衆生の心と名く。別して之を謂はば四弘誓願なり。此に二種あり。一には事を緣する四弘願は是れ即ち衆生緣の慈なり。或は復法緣の慈なり。二には理を緣する四弘、是れ無緣の慈悲なり。

【無餘涅槃】煩惱障を斷じて得たる涅槃。

【緣因佛性】智慧を緣助して益明かならしむる六度等の修行。

【正因佛性】一切の衆生が具へ持つる眞如の理。

【了因佛性】眞如の理を照了し證悟する智慧。

【一色一香云々】たとひ微薄なる一の色、一の香と雖もすべて中道の理を有せざること無しの意。

事を緣する四弘と言ふは、一には衆生無邊誓願度。應に念すべし、一切衆生に悉く佛性有り、我皆無餘涅槃に入らしめんとす。此心即ち是れ饒益有情戒なり、亦是れ恩徳の心なり。亦是れ緣因佛性にして應身の菩提の因なり。二には煩惱無邊誓願斷。此は是れ攝律儀戒なり、亦是れ斷徳の心なり、亦是れ正因佛性にして法身の菩提の因なり。三には法門無盡誓願知。此は是れ攝善法戒なり。亦是れ智徳の心なり、亦是れ了因佛性にして、報身の菩提の因なり。四には無上菩提誓願證。此は是れ佛果菩提を願求す。謂く、前三の行願を具足するに由て三身圓滿の菩提を證得し、還つて亦廣く一切の衆生を度せんとなす。二に理に緣るの願とは、一切の諸法は本來寂靜にして、有に非ず無に非ず、常に非ず斷に非ず、生にあらす滅にあらす、垢にあらす淨にあらす、一色一香も中道に非ざること無し。生死即ち涅槃、煩惱即ち菩提なり。一一の塵勞門を翻ぜば、即ち是れ八萬四千の諸波羅蜜なり。無明の變じて明と爲るは、氷を變じて水と成すが如く、更に遠き物に非ず、餘處より來るにあらす、但一念の心に普く皆具足す。如意珠は寶有るに非ず、寶無きに非ざるが如し、若し無と謂はば即ち妄語なり。若し有と謂はば即ち邪見なり、心を以て知るべからず、言を以て辯すべからず。衆生此不思議不縛の法の中に於て思想して縛を作し、無脱の法の中に於て脱を求む。是故に普く法界の一切衆生に於て大慈悲を起し四弘誓を興す。是を順理の發心と名く。是れ最上の菩提心なり。止觀第一を見るべし。又「思益經」に云はく、「一切の法は法に非ずと知り、一切の衆生は衆生に非ずと知る。是を菩薩無上菩提心を發

【苦集】 苦は生死の苦、集は其原因たる業煩惱。【道滅】 滅は苦集の滅し了りたる悟境、道は其悟境に到達する修行なり

すと名く」と。又『莊嚴菩提心經』に云はく、「菩提心とは有に非ず造に非ず、文字を離る。菩提は即ち是れ心なり、心は即ち是れ衆生なり。若し能く是の如く解す、是を菩薩菩提を修すと名く。菩提は過去未來現在に非ず。是の如くんば心と衆生と亦過去未來現在に非ざるなり。能く是の如く解するを名けて菩薩と爲す。然れば是中に於て實に所得無し。所得無きを以ての故に得たり。若し一切の法に於て所得無くんば是を菩提を得と名くるなり。始行の衆生の爲に故に、菩提有り」と説く。乃至是中に於て亦心有ること無く、亦心を造る者無し。亦菩提有ること無く、亦菩提を造る者無し。亦衆生有ること無く、亦衆生を造る者無し」と。乃至云云。

此二の四弘に各二義あり。一に云はく、初の二願は衆生の苦集二諦の苦を抜き、後の二願は衆生の道滅二諦の樂を與ふ。二に云はく、初の一は他に約し、後の三は白に約す。謂く、衆生の二諦の苦を抜いて衆生の二諦の樂を與ふるは、總じて初願の中に在り。此願を究竟圓滿せんと欲するが爲に、更に自身に約して後の三願を發す。『大般若經』に云ふが如し、「有情を利せんが爲に大菩提を求む、故に菩薩と名く。而も依著せず、故に摩訶薩と名く」と。已又前の三は是れ因是れ別なり。第四は是れ果是れ總なり。四弘已後に自他法界同じく利益し、共に極樂に生じて佛道を成せんと云ふべし。心中に應に念すべし、「我衆生と共に極樂に生じて前の四弘願を圓滿し究竟せん」と。若し別願有らば四弘の前に之を唱へよ。若し心に不淨あれば正道の因に非ず。若し心に限あらば大菩提に非ず。若し至誠

【法性】 諸法の體性、眞如のこと。

【如來藏】 眞如のこと。

無くんば其力強からず。是故に要す須らく清淨深廣にして心を誠にすべし。勝他名利等の事の爲にせざれ。而も佛眼所照の無盡法界の一切衆生、一切の煩惱、一切の法門、一切の佛徳に於て、此四種の願行を發せ。問ふ、『何の法の中に於て無上道を求むるや。』答ふ、『此に利鈍の二差別あり。』大論に云ふが如し、『黄石の中には金性有り、白石の中には銀性有るが如し。是の如く一切世間の法の中に皆涅槃の性有り。諸佛賢聖は智慧方便持戒禪定を以て引導し、是涅槃法性を得しむ。利根なる者は、即ち是諸法は皆是れ法性なりと知る。譬へば神通の人の能く瓦石を變じて皆金たらしむるが如し。鈍根なる者の、方便分別して之を求め乃ち法性を得る、譬へば大冶の石を鼓して然る後に金を得るが如し』と。已又云はく、『苦行頭陀し、初中後夜、勤心に觀禪し、苦んで道を得るは、聲聞の教なり。諸法の相は無縛無解なりと觀じて、心の清淨なることを得るは菩薩の教なり。文殊師利の本縁の如し』と。即ち『無行經』の喜根菩薩の偈を引いて云はく、『姪欲即ち是れ道なり。患癡も亦是の如し。此の如き三事の中に、無量諸佛の道あり、若し人有りて、姪怒癡及び道を分別せば、是人は佛道を去ること、譬へば天と地との如し』と。是の如くして七十餘の偈有り。又同論に云はく、『一切法の不可得なる、是を佛道と名く、即ち是れ諸法實相なり。此不可得も亦不可得なり』と。略又迦葉菩薩佛に白して言さく、『一切諸法の中に、悉く安樂の性あり、唯願くば大世尊、我爲に分別して説け』と。又『般若經』に云はく、『一切の有情は、皆如來藏なり、普賢菩薩、自體遍するが故に』と。『法句經』に云はく、『諸佛』



【五蓋】心を蓋ふ五種の煩惱。欲貪蓋、瞋恚蓋、嫉妬蓋、悔蓋、疑蓋。

【染淨】けがれたると、きよきと。

は貪瞋に依りて、道場に處す、塵勞は諸佛の種なり、本來動ずる所無し、五蓋及び五欲を諸佛の種性と爲す、常に是を以て莊嚴す、本來動ずる所無し、諸法は本より來た、是も無く亦非も無し、是非の性は寂滅なれば、本來動ずる所無し」と。  
已上の六文は是れ利根入菩提心のみ。

問ふ、煩惱と菩提と若し一體ならば、唯應に意に任せて惑業を起すべきや。「答ふ、是の如きの解を生ぜば、之を名けて惡取空なる者と爲す、専ら佛弟子に非ず。今反質して云はん、汝若し煩惱即菩提の故に欣うて煩惱惡業を起さば、亦應に生死即涅槃の故に欣うて生死の猛苦を受くべし。何故ぞ刹那の苦果に於ては猶堪へ難きを厭ひ、永劫の苦因に於ては自恣に作らんことを欣ふや。是故に當に知るべし、煩惱と菩提と體は是れ一なりと雖も、時用異なるが故に、染淨同じからざること水と氷との如く、亦種と果との如し。其體は是れ一なれども時に隨つて用の異有り、此に由て道を修する者は本有の佛性を顯し、道を修せざる者は終に理を顯はすこと無けん。『涅槃經』の三十二に云ふが如し。「善男子、若し人有りて、是種子の中に果有りや果無しやと問はば、應に定めて答へて言ふべし、亦有り亦無しと。何を以ての故に。子を離れて外に果を生ずること能はず、是故に有り」と名く。子未だ牙を出さず、是故に無しと名く。是義を以ての故に、亦有り亦無し。所以は何ん。時節異有れども其體は是れ一なればなり。衆生の佛性も亦復是の如し。若し衆生の中別に佛性有りと言はば、是義然らず。何を以ての故に。衆生は即ち佛性なり。佛性は即ち衆生なり。直、時の異なるを以て淨と不淨と有ればなり。善男子、若し問ふ有りて云はん、是子能

【那落】梵に(नल) (nala)地獄のこと。

【涅槃】梵に(निवृत्ति)滅度、圓寂、寂滅等と譯す。迷妄を脱し、眞理を窮めて、寂滅無爲の法性を究め、不生不滅の法身の眞證に歸するをいふ。

く果を生ぜんや不や、是果は能く子を生ぜんや不やと。應に定めて答へて言ふべし、亦生じ生ぜず」と。已。問ふ、「凡夫勤修に堪へずんば何ぞ虚しく弘願を發さんや。」答ふ、「設ひ勤修に堪へざらんも、猶須らく悲願を發すべし。其益無量なればなり。前後に明すが如し。調達は六萬藏の經を誦せしも、猶那落を免れず。慈童は一念の悲願を發し、忽ち兜率に生るることを得たり。則ち知る、昇沈差別は心に在りて行に非ず。何に況んや誰人か一生の中に一たび南無佛と稱せざらん、一食だも衆生に施さざらん。願くば此等微少の善根を以て皆應に四弘の願行に攝入すべし。故に行願相應せば虚妄の願と爲らず。『優婆塞戒經』の第一に云ふが如し。『若し人一心に生死の過咎、涅槃の安樂を觀察すること能はずんば、是の如きの人は復慧施持戒多聞有りと雖も、終に解脱分の法を得ること能はじ。若し能く生死の過咎を厭患し深く涅槃の功德安樂を見んに、是の如きの人は復少施少戒少聞なりと雖も、即ち能く解脱分の法を獲得せん」と。已上。無量世に於て無量財を以て無量人に施し、於て十二部經を受持し讀誦するを、名けて多施戒聞と爲す。一把麩を以て一乞人に施し、一日一夜に八禁を受持し、一四句の偈を讀むを少施戒聞と名く。經に廣く説くが如し。是故に行者事に隨つて心を用ふれば、乃至一善だも空しく過ぐる者無けん。『大般若經』に云ふが如し。『若し諸の菩薩、深般若波羅蜜多の方便善巧を行ぜば、一心一行として空しく過して一切智に向向せざる者あること無けん』と。已。問うて云はく、「何んが心を用ひんや。」答ふ、『寶積經』の九十三に云ふが如し。食を須たんに食を施す、一切智力を具足せんが爲の故に。飲を須たんに飲を施す、渴愛の力を斷ぜんが爲の故に。衣を須たんに衣

【菩提樹】梵に一切諸佛が菩提を成ずる道場にある樹をいふ。

【愛語】愛語攝、四攝の一、人をしめて親愛の心を生ぜしむる言葉をいふ。

を旅す、無上慚愧の衣を得んが爲の故に。坐處を施すは菩提樹下に坐せしめんが爲の故に。燈明を施すは佛眼の明を得んが爲の故に。紙墨等を施すは大智慧を得んが爲の故に。藥を施すは衆生結使の病を除かんが爲の故に。是の如く乃至或は自ら財無くんば、當に心に施を生ずべし。無量無邊の一切衆生の有力無力を開示するを得んと欲して、上の如く布施するは是れ我善行なり」と。已上經文此廣なり。今是の如く事に隨つて常に心願を發し、願くば此衆生をして速に無上道を成ぜしめん、願くば我是の如く漸漸に第一の願行を成就し、檀度を圓滿し、速に菩提を證して廣く衆生を度せんと。一の愛語を發し、一の利行を施し、一の善事を同ぜんも、此に準じて應に知るべし。若し暫く一念の惡を制伏せん時も、應に是念を作すべし。願くば我是の如く漸漸に第二の願行を成就し、諸の惑業を斷じ、速に菩提を證して廣く衆生を度せんと。若し一文一義を讀誦し修習せん時も、應に是念を作すべし、願くば我是の如く漸漸に第三の願行を成就し、諸の佛法を學び速に菩提を證して廣く衆生を度せんと。一切の事に觸れて常に用心を作せ。我今身より漸漸に修學し、乃至極樂に生ぜば、自在に佛道を學び、速に菩提を證し、究竟して生を利せんと。若し常に此念を懷き、力に隨つて修行せば、滯は微なりと雖も、漸く大器に盈るが如し。此心能く巨細の萬善を持し、漏落せしめず、必ず菩提に至らん。『華嚴經』の入法界品に云ふが如し。『譬へば金剛の能く大地を持して墜沒せしめざるが如し。菩提の心も亦復是の如く、能く菩薩の一切の願行を持して、墮落して三界に沒せしめずと云云』

【薩婆若海】 薩婆若智の廣きことを海に喩へたる語。

【隨喜】 すべて他人の善を自己の善の如く喜ぶこと。

問ふ、「凡夫は常途の用心に堪へずんば、爾時の善根は唐捐なりとせんや。」答ふ、「若し至誠心をもて心に念じ口に言はん、「我今日より乃至一善だも己身有漏の果報の爲にせず。盡く極樂の爲にし、盡く菩提の爲にせん」と。此心を發して後には、有ゆる諸善若は覺し若は覺せざらんも、自然に無上菩提に趣向す。一たび渠溝を穿れば諸水自ら流入して江河に轉至し遂に大海に會るが如し、行者も亦雨り。一たび心を發しつる後は、諸の善根の水自然に四弘願の渠に流入し、極樂に轉生して、遂に菩提薩婆若海に會す。何に況んや時時に前願を憶念せんをや。具には下の回向門の如し。問ふ、「凡夫は力無し。能く捨てんとして捨て難し。或は復貧乏なり。何の方便を以てか心をして理に順せしむるや。」答ふ、「寶積經」に云はく、「是の如く布施せんに、若し力有ること無くして、之を學すること能はず、財を捨つること能はずんば、是菩薩は應に是の如く思惟すべし。我今當に勤めて精進を加へ、時時漸漸に慳貪悋惜の垢を斷除すべし。我當に勤めて精進を加へ、時時漸漸に財を捨てて施與することを學し、施せば常に我施心をして増長し廣大ならしむべし。」又「因果經」の偈に云はく、「若し貧窮の人有りて、財の布施すべき無くんば、他の施を修する時を見て、隨喜の心を生ぜよ、隨喜の福報は、施と等しうして異なること無し。」十住毘婆沙の偈に云はく、「我今是れ新學なり、善根未だ成就せず、心に未だ自在を得ず、願くば後に當に相與ふべし。」行者應當に是の如く心を用ふべし。問ふ、「此中、理を緣じて菩提心を發さんも、亦因果を信じ勤めて道を修行すべきや。」答ふ、「理必ず然るべし。『淨名經』



【阿鞞跋致】梵に (Avivartita) 不退、不退轉と譯す。菩薩の地位より再び凡地に退くことのない位をいふ。【增上慢】四慢、七慢の一、殊勝の法及び證を得ずして得たりと思ひたかぶること。

に云ふが如し。「諸佛の國及與衆生空なりと觀すと雖も、而も常に淨土を修して諸の群生を教化す」と。「中論」の偈に云はく、「空なりと雖も亦斷ぜず、有なりと雖も常にあらす、業果報失はざる、是を佛の所説と名く。」又「大論」に云はく、「若し諸法皆空なるときは則ち衆生無し、誰か度すべき者ぞ。是時は悲心便ち弱く、或時衆生を以て愁むべくんば、諸法空の觀に於て弱し。若し方便力を得れば、此二法に於て等しうして偏黨無くんば、大悲心も諸法の實相を妨げず、大悲を妨げず、是の如き方便を生ぜん。是時便ち菩薩の法位に入り、阿鞞跋致地に住することを得ん」と。抄「問ふ、「若し偏に解を生ぜば其過云何。」答ふ、「無上依經」の上卷に空見を明して云はく、「若し人有りて我見を執すること須彌山の巔を十六分に作すが如くすとも我許可せず」と。又「中論」第二の偈に云はく、「大聖の空法を説くは、諸見を離れんが爲の故なり、若し復空有りとするは、諸佛の化せざる所なり。」「佛藏經」の念佛品に、有所得の執を破して云はく、「有所得とは我人壽者命者有り」と説く。無所有の法を憶念し分別し、或は斷常と説き、或は有作と説き、或は無作と説かんと。我清淨の法は是因縁を以て漸漸に滅盡せん。我久しく生死に在りて、諸の苦惱を受けて成ぜし所の菩提は、是諸の惡人爾時に毀壞せん」と。抄又同經の淨戒品に云はく、「我見人見衆生見有る者は多く邪見に墮し、斷滅の見有る者は多く疾かに道を得ん。何を以ての故に、是れ捨て易きが故に。是故に當に知るべし、是人は寧ろ自ら利刀を以て舌を

【本來空寂】 萬象は皆假有にして本來實有に非ずといふこと。

【二七】 菩提心の利益を明す。

【比丘】 梵に(Bhikṣu)乞士と譯す。男の出家したるものをいふ。僧のこと。

割かんも、應に衆の中に不淨說法すべからず」と。有所得執を名け『大論』に二執の過を並明して云はく、「譬へば人の陝道を行かんに、一邊は深水なり、一邊は大火なり、二邊俱に死せんが如く、有に著し無に著せば二事俱に失せん」と。已是故に行者常に諸法の本來空寂なることを觀じ、亦常に四弘の願行を修習せよ。空と地とに依りては空舍を造立せんも、唯地唯空は終に成ずること能はざるが如し。此は是れ諸法の三諦相即するに出る。故に『中論』の偈に云はく、「因縁より生ずる所の法は、我説く即ち是れ空なり、亦名けて假名と爲す、亦是れ中道の義なり。」云云。更に『止觀』を檢せよ。問ふ、「有を執るの見は罪過既に重し。事を縁する菩提心、豈勝利有らんや。」答ふ、「堅く有を執する時は過失乃ち生ず。言ふ所の縁事とは必ず堅執するに非ざるなり。若し爾らずんば、應に有を見て道を得るの類無かるべし。空を見るも亦爾り。譬へば火を用ひんに、手觸るれば害を爲し、觸れざれば益有るが如し。空有も亦爾り。

【二七】 二に利益を明さば若し人、説の如く菩提心を發せば、設ひ餘行を少かんも、願に隨ひ決定して極樂に往生せん。上品下生の類の如き是なり。是の如く利益無量なり。今略して一端を示さん。『止觀』に云はく、「寶梁經」に云はく、比丘にして比丘の法を修せざるは、大千に唾する處も無し。況んや人の供養を受けんをや。六十の比丘悲泣して佛に白す。我等乍ち死なんも人の供養を受くること能はずと。佛言はく、汝慚愧の心を起す。善い哉、善い哉と。一の比丘佛に白して言さく、何等の比丘か能く供養を受けん。佛言は

【四果向】小乗の修行證果の階位。【三十七品】四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八正道支の稱。

【搗食】四食のこと。不淨依止食、清淨、依止食、淨不淨依止食、能顯依止住食。

【結使】結は心身を纏縛する義、使は心身を驅役する義、煩惱の異名なり。

く、比丘の數に在りて僧の業を修し僧の利を得ば、是人能く供養を受けん。四果向は是れ僧の數なり。三十七品は是れ僧の業なり。四果は是れ僧の利なり。比丘重ねて佛に白す。若し大乘心を發せる者は復云何。佛の言はく、若し大乘の心を發して一切智を求むる者は數に墮せず、業を修せず、利を得ざらんも、能く供養を受けんと。比丘驚いて問ひたてまつる。云何ぞ是人は能く供養を受くるや。佛言はく、是人は衣を受け用ひて大地に敷き、搗食を受くること須彌山の若くすとも、亦能く畢に施主の恩を報ぜん。當に知るべし、小乗の極果は大乘の初心に及ばざることを。已上信施。又云はく、「如來蜜藏經」に説く、若し人父の縁覺と爲りしを害して三寶の物を盜み、母の羅漢と爲りしを汚して不實の事をもて佛を謗り、兩舌をもて賢聖を問て、惡口をもて聖人を罵り、求法の者を壞亂す。五逆の初業は之れ瞋なり。持戒人の物を奪ふは之れ貪なり。邊見は之れ癡なり。是を十惡の者と爲す。若し能く如來の、因縁の法は我人衆生壽命無く、生無く滅無く、染無く著無く、本性清淨なりと説くを知り、又一切の法に於て本性清淨なることを知りて、解知し信入する者は、我人地獄及び諸の惡道に趣向すと説かず。何を以ての故に。法に積聚無く法に集惱無し。一切の法は、生にあらす住にあらす、因縁和合して生起することを得、生じれば還滅す。心の生じ已りて滅するが若く、一切の結使も亦生じ已りて滅す。是の如く解すれば犯する處無し。若し犯有り住有らば、是處有ること無し。百年の闇室に若し燈を然ぜん時に、闇は、我は此室の主なり、此に住まること久し、去ることを肯んぜずと

【菩薩】(Bodhisattva) 覺有情、大心衆生と譯す。大心ありて佛道に入りたる人。

【摩訶薩】(Mahasattva) 大有情と譯す。菩薩の行を修じて一切衆生を濟度する人。

【閻浮檀金】 閻浮樹の下を流るる河の中を生ずる沙金をいふ。

往生要集卷上末

言ふべからず。燈若し生ずれば闇即ち滅するが如し。其義も亦是の如し。此經に具に前の四菩提心を指す」と。已上彼經下卷に在り。前四『華嚴經』の入法界品に云はく、「譬へば善見藥王の一切の病を滅するが如く、菩提心も一切衆生諸の煩惱の病を滅す。譬へば牛馬羊の乳を合して一器に在かに、師子の乳をもて彼器中に投ずるときは、餘の乳は消盡し直に過るに礙無きが如し。如來師子菩提心の乳をもて無量劫に積みし所の諸業煩惱の乳中に著けば、皆悉く消盡して聲聞緣覺の法の中に住せず」と。『大般若經』に云はく、「若し諸の菩薩は多く五欲相應の非理の作意を發起すと雖も、而も一念無上菩提相應の心を起さば即ち能く折滅せん」と。已上三文、入法界品に云はく、「譬へば人有りて不可壞の藥を得れば、一切の怨敵其便を得ざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。菩提心不壞の法樂を得れば、一切煩惱諸塵怨敵の壞すること能はざる所なり。譬へば人有りて住水寶珠を得て、其身に瓔珞し、深水の中に入らんも没溺せざるが如く、菩提心住水の寶珠を得るときは、生死の海に入らんも沈没せざるなり。譬へば金剛は百千劫に於て水中に處するも、而も爛壞せず、亦變異無きが如く、菩提の心も亦復是の如し。無量劫に於て生死中に處すれども、諸の煩惱業、斷滅すること能はず、亦損滅すること無し」と。又同經の法幢菩薩の偈に云はく、「若し智慧有るの人、一念も道心を發せば、必ず無上尊と成らん、愼んで疑惑を生ずること莫れ」と。已上、終に敗壞せず、必ず菩提に至るの益。又入法界品に云はく、「譬へば閻浮檀金は、如意寶を除けば、一切の寶に勝るが如く、菩提の心閻浮檀金も亦復是の如し。一切智を除け

七三



【無漏】有漏の對漏は缺漏の義にして煩惱の異名。煩惱を増上せしめざるものを無漏と名

ば諸の功徳に勝る。譬へば迦楞毘伽鳥は穀中に在る時すら大勢力有りて餘鳥の及ばざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。生死の穀に於て菩提心を發せば、功徳勢力は聲聞緣覺の及ぶ能はざる所なり。譬へば波利質多樹華の一日衣に薰るは、瞻蔔華婆師華をもて千歳薰ずと雖も及ぶこと能はざる所なるが如し。菩提心の華も亦復是の如し。一日薰ずる所の功徳の香は、十方の佛所に徹す。聲聞緣覺は無漏の心を以て諸の功徳を薰ること百千劫に於て及ぶこと能はざる所なり。譬へば、金剛は破して全からずと雖も、一切の衆寶は猶し及ぶこと能はざるが如し。菩提の心も亦復是の如し。少しく懈怠すと雖も、聲聞緣覺諸の功徳寶の及ぶこと能はざる所なり。已上。經中三百餘賢首品の偈に云はく、「菩薩生死に於て、最初に發心せし時、一向に菩提を求むること、堅固にして動かすべからず、彼一念の功徳、深廣にして涯際無し。如來分別して説かば、劫を極むとも盡すこと能はじ。」此れ發心を云ひて凡聖を通又同經の偈に云はく、「一切衆生の心、悉く分別して知るべし。具には弘決に見ゆ。又同經の偈に云はく、「一切衆生の心、悉く分別して知るべし。一切利の微塵は、尙其數を算ふべく、十方の虚空界をも、一毛もて猶量るべし。菩薩の初發心は、究竟じて測るべからず。又『出生菩提心經』の偈に云はく、「若し此佛利の諸の衆生に、信心及び持戒に住せしめん、彼最上の大福壽の如きは、道心の十六分に及ばず。若し諸の佛刹恆河沙なるに、皆悉く寺を造り福を求むるが故に、復諸の塔を造ること須彌の如くせんも、道心の十六分にも及ばず。乃至の如き人等勝法を得ん、若し菩提を求めて衆生を利せん。彼等は衆生の最勝なる者なり、此れ比類無し、況んや上有

【無上道】 菩提を道と云ふ。無上菩提に同じ、佛のきとりのこと。

【第一義】 根本の意義、最も勝れたる道理。

【願作佛】 佛にならんと願ふ心。

らんや、是故に此諸法を聞くことを得ば、智者常に樂法の心を生じ、當に無邊の大福壽を得、速に無上道を證することを得べし。」「寶積經」の偈に云はく、「菩提心の功德に、若し色方の分有らば、虚空界に周遍して、能く容受する者無けん。云云。」「菩提心は是の如きの勝利あり、是故に迦葉菩薩の禮佛の偈に云はく、「發心と畢竟と二にして別無し、是の如き二において心前の心を難しとす、自ら未だ度するを得ずして先づ他を度すればなり、是故に我初發心を禮す。」と。又彌伽大士は、善財童子の已に菩提心を發せるを聞いて、即ち師子の座より下り、大光明を放ちて三千界を照し、五體を地に投じて童子を禮讚すと已上。總じて勝「問ふ、緣事の誓願も亦勝利有りや。」答ふ、「緣理の如くならずと雖も、此亦勝利有り。何を以て知るとならば、上品下生の業に、但無上道の心を發すと云ひて、第一義を解すと云はず。故に知る、唯是れ事の菩提心なるを。若し爾らずんば彼中生の業と、應に別無かるべし。」「一『往生論』に菩提心を明して、「但一切衆生の苦を抜くを以ての故に、一切衆生をして大菩提を得しむるを以ての故に、衆生を攝取して彼國土に生ぜしむるを以ての故に」と云へり云云。若し緣事の心往生の力無くんば、論主豈緣理の心を示さざるや。二『大論』の第五の偈に云はく、「若し初發心の時、當に佛と作るべしと誓願するに、已に諸の世間を過ぐ、應に世の供養を受くべし。」云云。此論亦但願作佛と云ふ。明らけし、事の菩提心も亦畢に信施を消することを。三『止觀』に祕藏經を引きじりて云はく、「初の菩提心すら已に能く重重の十惡を除く。況んや第二第三第四の菩提心をや」云

【三藏教】此には小乘教のことをいふ。

【不退の位】佛道修行の過程に於て、既に得たる功德を決して退失することなき位。

云ふ言ふ所の初とは、是れ三藏教の界内の事を縁する菩提心なり。何に況んや深く一切衆生に悉く佛性有り信じ、普く自他共に佛道を成ぜんと願ふは、豈罪を滅すること無からんや。其「唯識論」に云はく、「菩提と有情との實有を執らずんば、猛利の悲願を發起するに由無けん」と。上士の大士の悲願すら尙有を執りて起す。則ち知る、事の願も亦勝利有ることを。其餘は下の回向門の如し。問ふ、「衆生本佛性有り」と信解せば、豈理を縁するに非ずや。答ふ、「此は是れ大乘至極の道理を信解するなり。必ずしも第一義空相應の觀慧に非ず。問ふ、「十疑」に「維集論」を引いて云はく、「若し安樂淨土に生ぜんと願ふこと有りて、即ち往生を得る者有り。若し人無垢佛の名を聞いて即ち阿耨菩提を得る者有り。此は是れ別時の因にして全く行無し」と。上慈恩も同じく云はく、「願と行と前後す。故に別時と説く。佛を念じて即生せずと謂ふに非ず」と。上明かに知る、願有りて行無くんば、是れ別時の意なり。云何が上品下生の人、但菩提の願に由つて即ち往生を得るや。答ふ、「大菩提心は功能甚深にして、無量の罪を滅して無量の福を生ず。故に淨土を求めんに、求むるに隨つて即ち得ん。言ふ所の別時の意とは但自身の爲に極樂を願求す。是れ四弘願廣大の菩提心に非ず。問ふ、「大菩提心若し此力有らば、一切の菩薩初發心より決定して應に悪趣に墮つる者無かるべし。答ふ、「菩薩未だ不退の位に至らざる前は、染淨の二心間雜して起る。前念は衆罪を滅すと雖も、後念は更に衆罪を造らん。又菩提心に淺深強弱あり、惡業に久近不定あり。是故に退位は昇沈不定なり。菩提心に滅罪の力無きに非ず。且く愚管を述ぶ。見ん者取捨せよ。」

【二八】菩提心の料簡を明す。

【甘露】梵に(三三三)不死と譯す如來の教法を云ふ

【二八】三に料簡とは、開ふ、「入法界品に云はく、「譬へば金剛は金性より生じて餘寶より生ずるに非ざるが如く、菩提心の寶も亦復是の如し。大悲の衆生を救護する性より生じて餘善より生ずるに非ず」と。「莊嚴論」の偈に云はく、「恆に地獄に處すと雖も、大菩提を障ふるにあらず、若し自利の心を起さば、是れ大菩提の障なり」と。又「丈夫論」の偈に云はく、「悲心をもて一人に施さば、功德は大さ地の如し、己が爲に一切に施さば、報を得ること芥子の如し、一の厄難の人を救はんは、餘の一切の施に勝る、衆星は光有り」と雖も、一の月の明に如かず。」上明けし、自利の行は是れ菩提心の所依に非ず、報を得んも亦少なり。云何が獨り速に極樂に生ぜんと願はんや。答ふ、「豈前に言はずや、極樂を願はん者は要す四弘願を發し、願に隨つて勤修せよと。此れ豈是れ大悲心の行に非ずや。又極樂を願求するは是れ自利の心に非ず。然る所以は、今此娑婆世界は諸の留難多くして、甘露未だ霑はざるに苦海朝宗す。初心の行者何の暇有つて道を修せん。故に今爲に菩薩の願行を圓滿して自在に一切の衆生を利益せんと欲して、先づ極樂を求む。自利の爲にあらず、「十住毘婆沙」に云ふが如し、「自ら未だ度することを得ずんば、彼を度すること能はじ。人の自ら泥に没せるが如き、何ぞ能く餘人を拯濟せん。又水の爲に漂はされて溺を濟ふこと能はざるが如し。是故に説く、我度し已りて當に彼を度すべし」と。又「法句」の偈に説くが如し、「若し能く自ら身を安んじて善處に在りて、然る後に餘人を安んじて自ら所利を同じうせよ。」と。上故に「十疑」に言はく、「淨土に生ぜんと求むる所以は、一切衆生の苦を



【纏縛】諸の煩惱は衆生を縛りて生死に流轉せしむるが故に纏縛といふ

【菩提心】菩薩が上は菩提を求め下は衆生を化せんと發心するをいふ。

救拔せんと欲すればなり。故に即ち自ら思惟す。我今力無し。若し惡世煩惱境の中に在らば、境の強きを以ての故に、自ら纏縛せられ、三途に淪溺し、動じて數劫を経ん。此の如き輪轉は無始より已來、未だ曾て休息せず、何れの時か能く衆生の苦を救ふことを得ん。此が爲に淨土に生じて諸佛に親近し、無生忍を證して、方に能く惡世の中に於て衆生の苦を救ふことを求む」と。上餘の經論の文具に『十疑』の如し。應に知るべし、念佛修善を業因と爲し、往生極樂を華報と爲し、證大菩提を果報と爲し、利益衆生を本懷と爲す。譬へば世間に、木を植うれば華を開き、華に因つて果を結び、果を得るときは餐受するが如し。問ふ、念佛の行は四弘の中に於て、是れ何の行に攝するや。答ふ、念佛三昧を修するは是れ第三の願行なり。隨つて伏滅する所有れば是れ第二の願行なり。遠近に良縁を結ばんは是れ第一の願行なり。功を積んで徳を累ぬるは第四の願を成ずるなり。自餘の衆善は例知せよ。別釋を俟たざるなり。問ふ、一心に佛を念せば、理亦往生す。何ぞ要す經論に菩提願を勸むるや。答ふ、『大莊嚴論』に云はく、佛國事大なり。獨行の功徳は成就すること能はず。要す願力を須つ。牛力有りとは雖も、車を挽くには要す御者を須つて能く所至有るが如し。佛國土を淨むるは、願に因つて引成す。願力を以ての故に福慧增長す」と。上。『十住毘婆沙論』に云はく、一切諸法は、願を根本と爲す。願を離るるときは、則ち成ぜず。是故に發願す」と。又云はく、若し人佛と作らんと願ひ、心に阿彌陀を念せば、時に應じて爲に身を現じたまふ。是故に我歸命す」と。上。大菩提心は既に此力有り。

【九品】觀經所說の九等の品位、上上、上中、上下一、中上、中中、中下一、下上、下中、下下の九品なり。

【韻曲】心所の名他人に向ひて内心を隠し、詐り親む精神作用をいふ。

往生要集卷上末

是故に行者要す此願を發せよ。問ふ、若し發願せずんば、終に往生せざるや。答ふ、

諸師不同なり。有が云はく、九品生の人とは皆菩提心を發す。其中品の人とは本是れ小乘なりと雖も、後に大心を發して彼國に生ずることを得れども、彼本習に由つて暫く小果を證

す。其下品の人、大心を退くと雖も、而も其勢力猶在れば生ずることを得んこと。慈悲之有が云はく、中下品は但福分に由つて生じ、上品は福分道分を具して生ずると云云。道分とは

是れ菩提心の行なり。問ふ、菩提心の如きは、諸師異解す。淨土を欣ぶ心も亦同じからざるや。答ふ、大菩提心は異説有り、淨土を欣ぶの願は九品皆應に具すべし。問ふ、

若し淨土の業は願に依つて報を得ば、人の惡を作して地獄を願はざるが如きは、彼應に地獄の果報を得べからざるや。答ふ、罪報は量有り、淨土の報は量無し。二果既に別なり、二因何ぞ一例せん。『大論』の第八に云ふが如し、罪福は定報有り、雖も、但願を作さ

ん者小福を修せんも、願力有るが故に大果報を得ん。一切の衆生皆樂を得んと願うて、苦を願ふ者無し。是故に地獄を願はざるなり。是を以ての故に、福は無量の報有れども罪報は量有り」と。抄。問ふ、何等の報を以て世世に大菩提の願を増長して妄失せざるや。答

ふ、『十住毘婆沙』の第三の偈に云はく、乃至身命、轉輪聖王位を失はんも、此に於て尙應に妄語して、誦曲を行すべからず、能く諸の世間、一切衆生の類をして、諸の菩薩衆に於て、恭敬の心を生ぜしめよ、若し人有りて能く、是の如きの善法を行せば、世世に無上菩提の願を、増長することを得ん。文中に亦二十二種あり、若

し提心を失ふことを見るべし。

往生要集 卷中本

天台首楞嚴院沙門源信撰

【一】 五念門の中 觀察門を明す。

【一】 第四に觀察門とは、初心の觀行は深奥に堪へず、「十住毘婆沙」に云ふが如し。「新發意の菩薩は先に佛の色相を念ぜよ」と。又諸經の中初心の人の爲には、多く相好の功德を説く。是故に今當に色相の觀を修すべし。此分を三と爲す。一には別相觀、二には總相觀、三には雜略觀なり。意樂に隨つて應に之を用ふべし。

【二】 觀察門の中 一に別相觀を明す

【二】 初に別相觀とは亦二有り。先に華座を觀ず。「觀經」に云はく、「彼佛を觀せんと欲せば當に想念を起すべし。七寶地の上に於て蓮華の想を作せ。其蓮華の一一の葉をして百寶の色と作さしめよ。八萬四千の脈有り、猶し天の畫の如し。脈に八萬四千の光有り。了了分明にして皆見ることを得しめよ。華葉の小なる者は縱廣二百五十由旬なり。是の如きの華は八萬四千の葉あり。一一の葉間に百億の摩尼珠王あり、以て映飾と爲せり。一一の摩尼珠より千の光明を放つ。其光蓋の如くにして七寶合成せり、地の上に遍布す。釋迦毘楞伽寶を以て其臺と爲す。此蓮華臺に八萬の金剛甄叔迦寶梵摩尼寶妙眞珠網を以て交飾と爲せり。其臺上に於て自然に四柱の寶幢有り。一一の寶幢は百千萬億の須彌山の如し。幢の上の寶幢は夜摩天宮の如し。五百億の微妙の寶珠有りて以て飾映と爲し、一一の寶珠

【法藏比丘】彌陀の因位の名、梵名曇摩迦留（Dharmakara）の譯。國王より發心出家して沙門となり、世自在王佛の所に於て四十八願を建てたる比丘。

【肉髻】三十二相の一、佛の頂上の肉の高起して髻の如くなれるをいふ

に八萬四千の光有り、一一の光も八萬四千の異種の金色を作す。一一の金光、其寶土に遍ぜり。處處に變化して各異相を作す。或は金剛臺と爲り、或は眞珠網と作り、或は雜華雲と作つて、十方の面に於て意に隨つて變現して佛事を施作す。是を華座想と爲す。是の如き妙華は是れ本、法藏比丘願力の成ずる所なり。若し彼佛を念ぜんと欲せば、當に先づ此華座の想を作すべし。此想を作す時に雜觀することを得ざれ、皆應に一一に是を觀すべし。一一の葉、一一の珠、一一の光、一一の臺、一一の幢、皆分明ならしむること、鏡中に於て自ら面像を見るが如くせよ。此觀を作す者を名けて正觀と爲す。若し他觀する者は名けて邪觀と爲す。已上。此座相を觀する者は五萬劫生死の罪をつぎ滅除し、必定して當に極樂世界に生ずべし。次に正しく相好を觀す。謂く、阿彌陀佛華臺の上に坐し、相好炳然として其身を莊嚴せり。一には頂上の肉髻能く見る者無し。高く顯れ周圍なること猶し天蓋の如し。或は廣く觀んことを樂はば、次に應に觀すべし。彼頂上に大光明有りて千色を具足せり。一一の色に八萬四千の支を作し一一の支の中に八萬四千の化佛有り、化佛の頂上に亦此光を放つ。此光相次いで乃し上方の無量の世界に至る。上方の世界より、化菩薩有りて、雲の如く下りて諸佛を圍遶す。大集經に云はく、父母師僧和上を恭敬して肉髻相を得、云云。若し此相二には頂上に八萬四千に於て隨喜を生ずる者は千億劫の極重惡業を除却して三途に墮せず。亦雜亂せず、紺青稠密にして髮毛あり、皆上に向ひ靡いて右旋して生ず。永く禡落無く、亦雜亂せず、紺青稠密にして香潔細軟なり。或は廣く觀んことを樂はば、應に觀るべし、一一の毛孔に旋りて五の光を生ず。若し之を申ぶる時は修長にして量り難しと。釋尊の如きは髮長きこと尼狗樓陀精舍より父王宮に至り、城を遮ること七師。



【觀羅綿】 觀羅は梵音ターラ(二)ニシテ草木の花鬘なり。

無量光普く照して紺瑠璃の色を作す。色中に化佛有り、稱げて數ふべからず。此相を現じ已れば、還つて佛頂に住して右に旋りて宛轉して即ち蠡文を成す。大集經に云はく、惡事故に髮毛金。三には其髮際に於て五千の光有り、間錯して分明なり。皆上に向ひ磨いて諸髮を圍遶せり。頂を遶ること五匝、天の畫師の所作も畫法の如く、團圓正等なり。細きことは一絲の如し、其絲間に於て諸の化佛を生じ、化菩薩有りて以て眷屬と爲り、一切の色像も亦中に見ゆ。廣觀を樂ふ者は此觀を用ふべし。四には耳厚く廣長にして輪埵成就せり。或は應に廣く觀すべし。旋りて七毛を生じ五光を流出す。其光千色有り。色ごとに千の化佛まします。佛ごとに千光を放ち遍く十方の無量世界を照すと。此隨好の業因勸味經に云はく、此好を觀する者は八十億劫生死の罪を滅す。後世常に陀羅尼人眷屬たり云云。下に諸の利益を云ふ、皆亦觀佛三昧經に依りて註す。五には額廣く平正にして形相殊妙なり。此好業因並に利益勸ふべし。六には面輪圓滿す。光澤熙怡端正にして皎潔なること猶し秋月の如し。雙眉の皎潔なること天帝の月に似たり。其の比ひ無くして紺瑠璃の光有り。來り求むる者を見れば歡喜を生ずるが故に、面輪圓滿なり。此相し。七には眉間の白毫右に旋りて宛轉す。柔軟なること觀羅綿の如く、鮮白なること珂雪に逾えたり。或は次に應に廣く觀すべし、之を舒ぶれば直く長大にして、白瑠璃筒の如く、放ち已れば右に旋りて頗裂珠の如し。丈六の佛の白毫長丈五。右に十方の面に於て無量の光を現すること萬億の日の如くして、具に見るべからず。但光の中に於て諸の蓮華を現す。上無量塵數の世界を過ぐれども、華華相次いで團圓正等なり。一一の華の上に一の化佛坐せり。相好莊嚴眷屬圍遶

【六波羅密】の修する行をいふ善薩  
布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅密をいふ  
【不共の法】自他別別に感生したる法のこと。

す。一一の化佛復無量の光を出し、一一の光中にも亦無量の化佛有り。是諸の世尊、行する者無數、住する者無數、坐する者無數、臥する者無數にして、或は大悲を説き、或は三十七品を説き、或は六波羅密を説き、或は諸の不共の法を説く。若は廣く説かば一切の衆生より十地の菩薩に至るまで亦之を知ること能はざるなり。大集經に云はく、他の揚し、此相を得。觀佛經に云はく、無量功より晝夜精進して身心懈ること無きこと頭然を救ふが如く六度三十七品十力無畏大悲諸妙の功德を勤修し、此白毫を得此相を觀ずれば、九十六億那由他恆河沙微塵數劫生死は八には如來の眼睫は猶し牛王の若し。紺青齊整にして相雜亂せず。或は次に應に廣く觀すべし。上下に各生ぜる五百の毛有りて優曇華の鬚の如し。柔軟にして愛樂すべし。一一の毛端に一光を流出す。頗梨色の如くして、頭を遠ること一塵して純ら微妙なる諸の青蓮華を生ず。一一の華臺に梵天王有りて青色の蓋を執る。大集經に云はく、むるが故に、牛王暁相を得。大經に云はく、九には佛眼は青白にして上下俱に胸ぐ、白は白寶に過ぎ、青は青蓮華に勝れたり。或は次に應に廣く觀すべし、眼より光明を出す、分れて四支と爲り、遍く十方の無量世界を照す。青光の中に於て青色の化佛有り。白光の中に於て白色の化佛有り。此青光の化佛も復諸の神通を現すと。大集經に云はく、慈心を修集して衆生を愛視し紺色日相を得云云。少時間に於て此相を觀ずれば未來生處に眼常十には鼻修高直にして其孔現はれず、鐸れる金鉦の如く鸚鵡の喙の如し。表裏清淨にして諸の塵翳無く、一一の光明を出し遍く十方を照して種種無量の佛事を變作す。此隨好を觀ずれば千劫の罪を滅し未來生處に上妙十一に

【頻婆果】(Bimba) 樹の果實、その色眞紅にして潤澤あり。

【伽陵頻】梵音カラギンカ(Kalavinka) 妙聲、好聲と譯す。鳥の名、鼓中にありて聲を發す、其聲の妙なる餘鳥に超え、如來

は唇色赤好にして頻婆果の如し。上下相稱ひ、量の如く嚴麗なり。或は次に應に廣く觀ずべし、團圓の光明佛口より出づ、猶し百千の赤眞珠の貫くが如し、鼻と白毫と髮との間に出入す。是の如く展轉して圓光の中に入る。此唇隨好業等十二には四十の齒齊へること淨密にして根深く、白きこと珂雪に逾ゆ。常に光明有り、其光紅白にして人日に映耀す。大經に云はく、兩舌惡口毒心を遠離十三には四牙鮮白にして光潔鋒利なること月の初めて出でたるが如し。大集經に云はく、身口意淨の故に四牙の白相を得。十四には世尊の舌相は薄淨廣長にして、能く面輪を覆ひて耳髮の際乃至梵天に至る。其色赤銅の如し。或は次に廣く觀ずべし。舌上に五畫あり、猶し印文の如し。笑ふ時舌を動かせば五色の光出づ。佛を遶ること七匝して還つて頂より入る。所有の神變無量無邊なりと。大集經に云はく、口相を得云云。此相を觀すれば百億八萬四千劫の罪を除き、他世に八十億の佛に値ふ。十五には舌下の兩邊に二の寶珠有り、甘露を流注し舌根の上に滴らす。諸天世人十地菩薩は此舌根無く亦此味無し。大般若經に異說有り、勸飲食施與の故に十六に如來の咽喉は琉璃筒の如く、狀は蓮華を累ねたるが如し。所出の音上味の相を得。十六に如來の咽喉は琉璃筒の如く、狀は蓮華を累ねたるが如し。所出の音聲は四韻和雅にして等しく聞えざる無く、其聲洪震にして猶し天鼓の如し。發す所の言は婉約にして伽陵頻の音の如し。任運に能く大千世界に遍す。若し作意する時には無量無邊なり。然も衆生を利せんが爲に類に隨つて増減せず。大經に云はく、彼短を誅めず、正法を誘の衆生に於て、常に十七には頸より圓光を出す。咽喉の上に點相有りて分明なり。一一の點柔軟語の故に云云。十七には頸より圓光を出す。咽喉の上に點相有りて分明なり。一一の點中より一一の光を出す。其一一の光前の圓光を遶り、七匝を満足して衆畫分明なり。一一

の音聲を除きては  
天人等も及ぶもの  
なしといふ。

【十二因縁】 三界  
の迷の因果を十二  
分にちて衆生輪  
廻のさまを示した  
るもの、無明、行  
觸、名色、六處、  
觸、受、愛、取、こ  
有、生、老死、こ  
れなり。

の畫の間に妙蓮華有り、華の上に七佛有す。一一の化佛に各七菩薩有りて、以て侍者と爲り、一一の菩薩は如意珠を執る。其珠に金光有りて、青黃赤白及び摩尼色皆悉く具足し、諸光を圍遶すること上下左右各各一尋にして佛頸を圍遶し、了了として畫の如し。無上依經に云はく、衣服飲食車乘臥具、諸の莊嚴物、歡喜施與して身金色回光の一丈相を得。十八には頸より二光を出す、其光に萬の色有りて遍く十方一切の世界を照す。此光に遇ふ者は辟支佛と成る。此光諸の辟支佛の頸を照す。此相現する時、行者遍く十方一切の諸の辟支佛の鉢を虚空に擲ちて十八變を作し、一一の足下に皆文字有り、其字十二因縁を宣説するを見る。十九には缺食骨滿の相光十方を照して琥珀の色を作す。此光に遇ふ者は聲聞の意を發す。是諸の聲聞此光明を見るに、光分れて千支と爲り、一支千色なれば十千の光明有り。光に化佛有り、一一の化佛に四の比丘有りて以て侍者と爲る。一一の比丘皆苦空無常無我を説く。已上。三種に廣觀をふべし。二十には世尊の肩頂は圓滿にして殊妙なり。法華文句に云はく、極に施をして、二十一年に如來の腋下は悉く皆充實にして、紅紫の光を放ち、諸の佛事を作し衆生を利益す。無上依經に云はく、衆生の中に於て利益の事を爲し四正勤を修に。二十二には佛の双臂肘は脩直備圓にして心に畏るる所なし、兩肩平整にして兩腋下滿の相を得。二十三には佛の雙臂肘は脩直備圓にして、象王の鼻平立して膝を摩するが如し。或は次に應に廣く觀すべし、手掌に千輻の理有りて各百千の光を放ち、遍く十方を照し、化して金水と成る。金水の中に一の妙水有り、水精の色に如し。餓鬼見れば熱を除き、畜生は宿命を識り、狂像見れば師子王たり、師子は金翅鳥と見、諸龍亦金翅鳥王と見る、是れ諸の畜生各尊ぶ所なりと見れ



ば、心に恐怖を生じて合掌し恭敬す。恭敬するを以ての故に、命終して天に生ず。大集經に  
 怖畏を救護し臂肘脩を得、他の事業を得。二十二には諸指圓滿し充密纖長にして甚だ愛樂すべし。  
 見れば佐助するが故に手摩膝相を得。一一の端に於て各卍字を生じ、其爪光潔なること華赤銅の如し。於て恭敬し禮拜し合掌し  
 起立するが故に一一の指間は猶し鴈王の如く、威輓網有りて金色交絡し、交綺  
 畫に同じ。閻浮金に勝ること百千萬億なり。其色明達にして眼界を過ぐ。張る時は則ち見  
 れ、指を斂むるときは見えず。大集經に云はく、四攝法を修して二十五には其手柔軟なるこ  
 と觀羅綿の如く、一切に勝過して内外俱に握れり。大集經に云はく、父母師長の苦は病苦する  
 に手軟相に勝ること百千萬億なり。頤臆並に身上の半感容廣大なること師子王之如し。諸の有  
 を得り、二十六には世尊の額臆並に身上の半感容廣大なること師子王之如し。諸の有  
 情に於て法の如く所作して能く上首と爲り、而も助伴を二二十七には胸に卍字有り、實相の印と  
 作して我慢を離れ、諸の猶振無きが故に、此相を得。二二十七には胸に卍字有り、實相の印と  
 名け、大光明を放つ。或は次に應に廣く觀すべし。光中に無量百千の衆華あり、一一の  
 華上に無量の化佛有り、是諸の化佛に各千光有りて衆生を利益し、乃至遍く十方の佛  
 の頂に入る。時に諸佛の胸より百千の光を出す。一一の光六波羅蜜を説く。一一の化佛  
 一化人の端正微妙にして狀彌勒の如きを遣はして行者を安慰す。此相光を見れば十二に  
 には如来の心相は紅蓮華の如し、妙なる紫金光を以て間錯を爲し、瓊璃の筒の如し、懸け  
 て佛胸に在り、合せず閉せず、團圓なること心の如し。萬億の化佛、佛心の間に遊ぶ。又  
 無量摩數の化佛佛心の中に在りて、金剛臺に坐し、無量の光を放つ、一一の光の中に亦無  
 り、摩數の化佛有り、廣長舌を出し、萬億の光を放つて諸の佛事を作す。佛心を念ずれば、十二億劫



右及び頂上に各八萬四千の毛生ずる有り。柔潤紺青にして右に旋りて宛轉す。或は次に應に廣く觀すべし、一一の毛端に百千萬塵數の蓮華有りて、一一の蓮華に無量の化佛を生じ、一一の化佛に諸の偈頌を現す。聲聲相次いで猶し雨滴るが如しと。無上依經に云はを修し、中下品無く、恒に増上せしめ、身毛上躡右旋宛轉相を得。優婆塞戒經に云はく、智者に親近し、聞を樂ひ論を樂ひ、聞已りて修を樂ひ、道路を治することを樂ひ、棘刺を除去するが故に。四十には世尊の足下に千輻輪の文有り、網叢衆相圓滿せざること無し。瑜我に云はく、其父母に於て種種に供養が故に。此相を得云云。千輻輪相を見れば千劫極重惡業を除却す。四十一には世尊足下に平滿の相有りて妙に善く安住す。猶し齋底の如し。地は高下すと雖も、足の蹈む所に隨つて皆悉く坦然として等しく觸れざること無し。大經に云はく、戒を持して動ぜず、施して心移らず、諸指鐵長、鞞網具足し、内外握等。四十二には廣を樂ふ者應に觀すべし、足下及び跟に各一の相及び業因は前の手相に同じ。四十二には廣を樂ふ者應に觀すべし、足下及び跟に各一華を生じて諸光を圍遶し、十匝を満足す。華華相次いで一一の華上に五化の佛有り。一一の化佛に五十五の菩薩有りて以て侍者と爲り、一一の菩薩は頂に摩尼珠の光を生ず。此相現する時、佛の諸毛孔に八萬四千の微細の小光明を生じ、身光を嚴飾して極めて可愛ならしむ。此光は一尋なれども其相は衆多なり。乃至他方の諸大菩薩此を觀するの時は、此光隨つて大なりと。上

是諸の相好行相利益廢立等の事諸文同じからず、然るに今三十二の略相は、多く「大般若」に依り、廣相隨好及び諸の利益は「觀佛經」に依る。又相好の業に其總別あり、總因と

言ふは『瑜伽』の四十九に云はく、始め清淨勝意樂地より一切所有の菩提の資糧に差別有ること無く、能く一切の相及び隨好を感ず」と云云。別因と言ふは、彼論に三種有り、一には六十二因、具には論の文の如し。二には淨戒、若し諸の菩薩淨戒を毀犯せば尙下賤の人身をも得ること能はず、何に況んや能く大丈夫の相を感ぜん。三には四種の善修有り、一には善く事業を修す、二には善巧方便、三には有情を饑益す、四には無倒回向なり。已別因の中に、亦多くの差別有れども、今は且く因果相順せる者を取るなり。前後次第は諸文亦同じからざれども、今は宜しきに隨つて取りて次第を爲すなり。相好間雜して以て觀法と爲すは、亦是れ『觀佛經』の例なり。順觀の次第大途是の如し。逆觀は之に反して足より頂に至るなり。『觀佛三昧經』に云はく、「眼を閉ちて見ることを得るは、心想の力をもつて了了分明なること佛の在世の如くす。是相を觀すと雖も、衆多なることを得ざれ、一事より起ちて復一事を想ひ、一事想ひ已りて復一事を想ひ、逆順反覆して十六反を経、是の如くして心想をして極めて明利ならしめ、然る後に心を住めて念を一處に繫け、是の如くして漸漸に舌を擧げて腭に向へ、舌をして正しく住まらしめて二七日を経て、然る後に身心安穩なることを得べし」と。尊和尚の云はく、「十六遍の後心を住めて白毫相を觀ぜよ。雜亂することを得ざれ」と。

【三】 觀察門の中  
二に總相觀を明す

【三】 二に總相觀とは、先づ前の如く衆寶莊嚴せる廣大の蓮華を觀じ、次に阿彌陀佛の華臺の上に坐するを觀するに、身色は百千萬億の閻浮檀金の如し。身の高さは六十萬億那



由他恆河沙山旬なり。眉間の白毫は右に旋りて婉轉して五須彌山の如く、眼は四大海水の如し、清白分明なり。身の諸の毛孔より光明を演出して須彌山の如し。圓光は百億大千界の如し。光中に無量恆河沙の化佛有り、一一の化佛は無数の菩薩を以て侍者と爲す。是の如く八萬四千の相有りて、一一の相に各八萬四千の隨好有り、一一の好に復八萬四千の光明有り、一一の光明遍く十方の世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てず。當に知るべし、一一の相の中に各七百五俱胝六百萬の光明を具し、巖然赫奕として、神徳巍巍たること金山王の大海の中に在るが如し。無量の化佛菩薩光中に充滿して、各各神通を現じ、彌陀佛を圍遶す。彼佛是の如く無量の功德相好を具足し、菩薩衆會の中に在りて正法を演説す。行者是時都て餘の色相無く、須彌鐵圍大小の諸山悉く現ぜず、大海江河土地樹林悉く現ぜず、目に溢つる者は但是れ彌陀佛の相好なり。世界を周遍せる者は是亦れ閻浮檀金の光明なり。譬へば劫水世界の彌滿すれば、其中萬物は沈没して現ぜず、混濁汚汗として唯大水を見るが如し。彼佛の光明も亦復是の如く、高く一切世界の上面に出でて、相好の光明照耀せざること靡し。行者心眼を以て己身を見れば彼光明所照の中に在り。已上。觀經双觀經般舟經大論等の意に依る。或は應に觀すべし、彼佛は是れ三身一體の身なり、彼一身に於て所見不同なり。或は丈六、或は八尺、或は廣大の身有れども所現の身は皆金色にして利益する所各無量なり。一切の諸佛と其事同一なり。應化又一一の相好は凡聖共邊を得ず、梵天共頂を見ず。日蓮は其聲を窮めず、無形第一の體

【十力】 如来の十力。處非處智力、靜慮業異熟智力、解脫等持等至智力、根上下智力、種種勝解智力、種種界智力、遍處行智力、宿住隨念智力、宿住生死智力、漏盡智力。

【四無畏】 正等覺無畏、漏永盡無畏、說障法無所畏、說出苦道無所畏。

【四念住】 身念住、受念住、心念住、有爲無爲。

【有爲無爲】 有爲は因縁によりて生じたる諸現象をいふ。無爲は本來常住にして何物にも造作せらるることなき法をいふ。

【陰入界】 五蘊十二處、十八界のこと。

なり。莊嚴に非ずして莊嚴す。十力、四無畏、四念住、大悲、八萬四千の三昧門、八萬四千の波羅蜜門、恆沙塵數の法門究竟圓滿す。一切の諸佛と其意同一なり。報微妙なる淨法身に諸相好を具足すれば、一一の相好即ち是れ實相なり。實相は法界なれば具足して滅する無し。生にあらす、滅にあらす、去來無く、一にあらす、異にあらす、斷に非ず、常に非ず、有爲無爲の諸の功德は、此法身に依つて常に清淨なり。一切の諸佛と其體同一なり。身是故に三世十方諸佛の三身、普門、摩訶無量の法門佛業、法海圓融の萬德、凡て無盡法界なるも、備さば彌陀の一身に在れば、縦にあらす、横にあらす、亦一異に非ず、實に非ず、虚に非ず、亦有無に非ず、本性清淨にして心言路絶す。譬へば如意珠の中に寶有るに非ず、寶無きに非ざるが如し。佛身の萬德も亦復是の如し。又陰入界に即して、名けて如來と爲すに非ず、彼諸の衆生に皆悉く之れ有るが故に、陰入界を離れて、名けて如來と爲すに非ず、之を離るれば則ち是れ無因縁の法なるが故に、即ち非ず、亦離に非ず。寂靜にして但名有るのみ。是故に當に知るべし、所觀の衆相は即ち是れ三身即ち一相好光明なり、諸佛同體の相好光明なり、萬德圓融の相好光明なり。色は即ち是れ空なり、故に之を眞如實相と謂ひ、空は即ち是れ色なり、故に之を相好光明と謂ふ。一色一香も中道に非ざること無し、受想行識も亦復是の如し。我所有の三惡道と輪陀佛の萬德と、本來空寂にして一體無礙なり。願くば我佛を得て、聖法王に齊しからんことを。

已上。觀經、心地觀經、金光明經、念佛三昧經、般若經、止觀等の意に依る。

【四】 觀察門の中  
に雜略觀を明す

【結跏趺坐】 左の  
趾を右の股の上に  
おき、右の趾を左  
の股の上におく。  
坐相のこと。

【四】 雜略觀とは、彼佛の眉間に一の白毫有り、右に旋りて宛轉して五須彌の如し、中に於て復八萬四千の好有り、一一の好に八萬四千の光有り、其光微妙にして衆寶の色を具す。總じて之を言へば、七百五俱胝、六百萬の光明有り、十方に赫奕として億千の日月の如し。其光の中に一切の佛身を現じ、無數の菩薩、衆會圍繞す。復微妙の音を出して諸法海を宣暢す。又彼一一の光明遍く十方の世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てず、我も亦彼攝取の中に在りて、煩惱に眼を障へられて見ること能はずと雖も、大悲愍

くこと無く、常に我身を照す。或は應に自心を超して極樂國に生じ、蓮華中に於て結跏趺坐し、蓮華合するの想を作すべし。尋いで蓮華開く時、尊顔を瞻仰し、白毫相を觀す。時に五百色の光有りて、來りて我身を照し、即ち無量の化佛菩薩、虛空の中に滿つるを見る。水鳥樹林及與諸佛所出の音聲皆妙法を演ぶと、是の如く思想して心をして欣悅せしむ。願くば、諸の衆生と共に安樂國に往生せん。已上。觀經、華嚴等の意にも。若し極略を樂ふ者は、應に念すべし、彼佛の眉間の白毫相旋轉して、猶し頗梨珠の如し、光明遍照して我等を攝す。願はくば衆生と共に彼國に生ぜん。若し相好を觀念するに堪へざるあらば、或は歸命の想に依り、或は引攝の想に依り、或は往生の想に依りて、應に一心に稱念すべし。已上。意樂同じからざる。行住坐臥、語默作作、常に此念を以て胸中に在き、飢えて食を念ふが如く、渴して水を追ふが如くせよ。或は低頭し舉手し、或は舉聲し稱名し、外儀異なりと雖も心念は常に存し、念念相續して寤寐にだも忘ること莫れ。問ふ、彼佛の眞身

【一如】一は絶待  
 唯一、如は平等無  
 差別の義、絶對平  
 等の眞如法性をい  
 ふ。

は、是れ凡夫心力の及ぶ所に非ざれば、但應に像を觀すべし、何ぞ大身を觀せんや。『答ふ、  
 『觀經』に云はく、無量壽佛は身量無邊なり、是れ凡夫心力の及ぶ所に非ず。然るに彼  
 如來宿願力の故に憶想すること有る者は、必ず成就することを得ん。但佛像を想ふすら  
 無量の福を得。況んや復佛具足の身相を觀ぜんをや。』上。明かに知る、初心も亦樂欲に隨  
 つて眞身を觀することを得ることを。問ふ、『言ふ所の彌陀の一身即ち一切の佛身なりとは  
 何の證據有りや。』答ふ、『天台大師の云はく、阿彌陀佛を念すれば即ち是れ一切の佛を念  
 す。故に『華嚴經』に云はく、一切諸佛の身は即ち是れ一佛の身なり。一心一智慧なり、  
 力無畏も亦然り』と。上。又『觀佛三昧經』に云はく、『若し一佛を思惟すれば即ち一切  
 の佛を見る』と云云。問ふ、『諸佛の體性二無きが如く、念する者の功德も亦別無しと爲ん  
 や。』答ふ、『等しうして差別無し。故に『文殊般若經』の下卷に云はく、『一佛の功德無量無  
 邊なるを念すれば、亦無量諸佛の功德と二無し。不思議の佛法は等しうして分別無く、皆  
 一如に乗じて最正覺を成じ、悉く無量の功德辯才を具す。是の如く一行三昧に入る者は  
 盡く恆沙の諸佛法界無差別の相を知る』と。問ふ、『諸相の功德は肉髻梵音是を最勝なり  
 と爲す。今多く白毫を勸むるは何の證據有りや。』答ふ、『其證甚だ多し。略して一兩を出  
 せば、『觀經』に云はく、『無量壽佛を觀る者は一の相好より入る。但眉間の白毫を觀じて  
 極めて明了ならしめよ。眉間の白毫を見る者は、八萬四千の相好自然に當に見るべし』と。  
 又『觀佛經』に云はく、『如來に無量の相好有りて、一一の相中に八萬四千の諸の小相



好有り。是の如きの相好は白毫の小分の功德に及ばず。是故に今日來世の諸の惡衆生の爲に白毫相の大慧光明を説くは、惡を消する觀法なり。若し邪見極重の惡人ありとも、此觀法其足の相貌を聞いて瞋恨の心を生ぜば、是處有ること無し。縱使瞋を生ぜんも、白毫の相光は亦復覆護す。暫く是語を聞けば、三劫の罪を除いて後身の生處諸佛の前に生ぜん。是の如く種種百千億種の諸觀、光明微妙の境界悉く説くべからず。白毫を念する時は自然に當に生ずべし」と。又云はく、「靈心をもて像を観るすら、尙是の如きの無量の功德を得。況んや復佛の眉間白毫の相光を繫念し觀ぜんをや」と。又云はく、「釋迦文佛、行者の前に現じて告げて言はく、「汝觀佛三昧力を修す。故に我は涅槃相の力を以て汝に色身を示し、汝をして諦觀せしむ。汝今坐禪して多く觀することを得ざれ」と。汝後世の人は多く諸惡を作す、但眉間白毫相の光を觀ぜよ。此觀を作す時、所見の境界は上の所説の如し」と。餘の利益は下の別時行及び利益門に至る。應に知るべし。問ふ、「白毫の一相を觀するも亦三昧と名くるや。」答ふ、「爾り、故に『觀佛經』の第九に云はく、「若し能く心を繫けて一の毛孔を觀する、此人をば名けて念佛定を行すと爲す。佛を念するを以ての故に、十方の諸佛常に其前に立ちて爲に正法を説きたまふ。此人は即ち能く三世の諸の如來の種を生ずと爲す。何に況んや具足して佛の色身を念ぜんをや」と。問ふ、「何故ぞ淨土の莊嚴を觀せざるや。」答ふ、「今廣く之を行するに堪へざる者の爲に、唯略觀を勸む。若し觀せんと欲せば、應に『觀經』を讀むべし。何に況んや前に十種の事を明す、即ち是れ淨土

【五】五念門の中廻向門を明す。

【普賢の行願】一行を修すれば即ち一切諸行を具すとす。華嚴圓融の妙行のこと。

の莊嚴なり。問ふ、「何故ぞ觀音勢至を觀せざるや。」答ふ、「略す、故に述べざるなり、佛を念じて已後、應に二菩薩を觀じ、或は名號を稱すべし。多少意に隨へ。」

【五】第五に廻向門を明さば、五義具足す。是れ眞の廻向なり。一には三世一切の善根を聚集す。華嚴經の意。二には薩婆若心相應す。三には此善根を以て一切の衆生と共にす。四には無上菩提に廻向す。五には能施所施物皆不可得なりと觀じて、能く諸法の實相と和合せしむ。大意。此等の義に依りて、心に念じ口に言へ。所修の功德及以三際一切の善根、一。自他法界の一切衆生に廻向して平等に利益し、二。滅罪生善して共に極樂に生じ、普賢の行願速疾に圓滿し、自他同じく無上菩提を證し、未來際を盡して衆生を利益し、三。法界に廻施し、四。大菩提に廻向す。五。問ふ、「未來の善根未だ有らず、何を以てか廻向せん。」答ふ、「華嚴經」に第三の廻向の菩薩の行相を説いて云はく、「三世の善根を以て所著無く、相無く相を離れて悉く以て廻向す」と。刊定記に二釋有り、一には未來の善根は未だ有らずと雖も、今若し發願せば願重じて種を成ず。攝持力の故に未來の所修任運に衆生の菩提に注向す、更に廻向することを待たざるなり。二には此教中に依れば、菩薩は乃至一念の善を修するにも、法性に攝するが故に、九世に遍するが故に、彼善根を用ひて廻向す。問ふ、「第二を何んが薩婆若相應の心と名くるや。」答ふ、「論」に云はく、「阿耨菩提の意は即ち是れ薩婆若心に應ず」と。應とは心を繫けて、我當に作佛すべしと願ふなり。問ふ、「第三第四何故ぞ要す一切衆生と共にし、及び無上菩提に廻向するや。」答ふ、「六波羅蜜

經』に云はば、云何が少施の功德多きや。方便力を以て少分の布施を廻向し、發願して一切衆生と同じく無上正等菩提を證せんとす。是を以て功德無量無邊なること、猶小雲の漸く法界に遍するが如し。」なり。大論の意も亦之に同じ。『寶積經』四十六に云はく、「菩薩摩訶薩所有の已生の諸の妙善根をもて一切無上菩提に廻向し、此善根をして畢竟盡くすること無からしむ。譬へば小水を大海に投せば乃至劫燒の中にも盡くすること有ること無きが如し」と。又『大莊嚴論』の偈に云はく、「施を行ずるに妙色財を求めず、亦天人の趣を感じんことを願はずして、専ら無上勝菩提を求めば、施は微なるも便ち無量の福を感ず。」上。故に諸の善根を以て盡く佛道に廻向せよ。又『大論』に云はく、「譬へば慳貪の人因縁無きには乃至一錢だも施さず、貪慳積聚して但増長を望むが如し。菩薩も亦是の如し。福徳の若は多、若は少、餘事に向はず。但愛惜し積集して薩婆若に向はしむ」と。已。問ふ「若し爾らば唯應に菩提に廻向すべし、何が故に更に往生極樂と云ふや。」答ふ「菩提は是れ果報、極樂は是れ華報なり。果を求むるの人蓋ぞ華を期せざらんや。是故に九品の業に皆云はく、「極樂國に生ぜんと廻向し願求す」と。問ふ「發願と廻向と何の差別有りや。」答ふ「誓つて所求を期する、之を名けて願と爲し、所作の業を廻して彼に趣向する。之を廻向と謂ふ。問ふ「薩婆若と無上菩提と、二差別無くんば何んが分ちて二と爲さん。」答ふ、「論』に廻向を明すとき、之を分ちて二と爲せり。故に今之に願す。更に『論』の文を檢せよ。問ふ「次に何が故に所有の事を觀じて悉く空ならしむるや。」答ふ、「論』に云は

く、「著心取相の菩薩の修する福德は、草より生ずる火の滅を得べきこと安きが如し。若し體得實相の菩薩、大悲心を以て衆行を行ぜば、破を得べきこと難し。水中の火は能く滅する者無きが如し」と。問ふ、「若し爾らば、應に唱へて空にして所得無しと言ふべし。何が故に今廻施法界と云はんや。」答ふ、「理は實に然るべし、今國土の風俗に應ず。故に法界と云ふ。理も亦違ふこと無し。然る所以は、法界は即ち是れ圓融無作の第一義空なり。所修の善を以て彼第一義空に廻趣し相應せしむるを、廻施法界と名くるなり。」問ふ、「最後に何の意あつてか唱へて廻向大菩提と言ふや。」答ふ、「此は是れ薩婆若と相應せしむるなり。此も亦土風に順じて之を末後に置く。薩婆若と言ふは、即ち是れ菩提なり。前の『論』の文の如し。」問ふ、「有相の廻向には利益無きや。」答ふ、「上に數論するが如く、勝劣有りと雖も猶巨益有り。『大論』の第七に云ふが如し。」小因、大果、小緣、大報有り。佛道を求めて一偈を讀じ、一たび南無佛と稱し一捻の香を焼かんも、必ず作佛を得るが如し。何に況んや諸法の實相は不生不滅、不生不滅にして、行すれば因縁も業も亦失はずと聞知するをや。」云。此文深妙にして、鬚中の明珠なり。則ち知る、我等の成佛は疑ひ無きことを。歸命龍樹尊、我心願を證成せよ。」

【六】大別して十門に分つ中、助念方法を明す。

【六八】大文第五に助念方法とは、一目の羅は鳥を得ること能はず、萬術をもて觀念を助け往生の大事を成ぜよ。今七事を以て略して方法を示さん。一には方處供具、二には修行の相貌。三には懈怠を對治す。四には惡を止め善を修す。五には衆罪を懺悔す。六には魔



【七】 方處供具を明す。

【木標子】 むくろ樹の種子。

【八】 修行の相貌を明す。

事を對治す。七には總じて行要を結す。

【七】 第一に方處供具とは、内外俱に淨くして一の閑處を下し、力に隨つて華香供具を辨じ、若し華香等の事を闕少すること有らば、但佛の功德威神を念ぜよ。若し親り佛像に對せば須らく燈明を辨すべし。若し遙に西方を觀んには、或は闇室を須ひよ。感禪師、闇若し華香を供する時は、須らく「觀佛三昧經」の供養の文意に依るべし。其所得の福無量無邊にして、煩惱自ら滅少し、六度自ら圓滿せん。其文通途所用に異ら。故に更に抄せず。若し念珠を用ふる時、淨土を求めんと欲せば木標子を用ひよ。功德を多くせんと欲せば菩提子乃至或は水精蓮子等を用ひよ。念殊功德經

【八】 第二に修行の相貌とは、「攝論」等に依つて四種の相を用ふ。一には長時修「要決」に云はく、「初發心より乃至菩提まで恆に淨因を作して終に退轉無し」善導師の云はく、「畢命を期と爲し、誓つて中止せず」二には慳重修。謂く、極樂の佛法僧寶に於て、心に常に憶念し、専ら尊重を生ず。「要決」に云はく、「行住坐臥、西方に背かず。啞唾便痢、西方に向はず」導師の云はく、「面を西方に向ふ者は最も勝れたり。樹の先より傾けるが、倒るるには必ず曲るに隨ふが如し。必ず事の礙有りて西に向ふに及ばざる者は、但西に向ふの想を作すも亦得たり」と。三には無間修。「要決」に云つて謂く、「常に念佛して往生の心を作し、一切の時に於て心恆に相巧す。譬へば人有りて他に抄掠せられ、身は下賤と爲りて備に艱辛を受け、忽に父母を思ひて走りて國に歸らんと欲するも、行裝未だ辨せず、由

【戲論】 謬れる見  
解のこと、愛論、  
見論をいふ、鈍根

つて他郷に在りて日夜思惟し、苦み忍ぶに堪へずんば、時暫くも捨てて爺嬢を念ぜざる無し。計を爲すこと既に成りて便ち歸り、達することを得て父母に親近して縱任に歡娛せんが如し。行者も亦爾なり。往煩惱に囚りて善心を壞亂し、福智の珍財並に皆散失し、久しく生死に沈んで、制すれども自由ならず、恆に魔王の與に僕使と作り、六道に驅使せられ身心を苦切す。今善縁に遇うて、忽ち彌陀慈父の、弘願に違せず。群生を濟拔すと聞いて日夜驚忙し、發心して往を願ふ。所以に精勤倦まずして當に佛恩を念ひ、報盡くるを期と爲し、心恆に計念すべし。導師の云はく、「信心相續して餘業を以て間へず。又貪瞋等を以て間へざれ。隨つて犯せば隨つて懺じ、念を隔て時を隔て日を隔てしめず、常に清淨ならしめよ」と。私に云はく、「晝夜六時、或は三時二時要す方法を具して精勤修習し、其餘の時處には威儀を求めず、方法を論ぜず、心口に廢すること無く、常に應に佛を念すべし」と。四には無餘修。「要決」に云はく、「専ら極樂を求めて彌陀を禮念し、但諸餘の業行は雜起せしめず、所作の業は日別に須らく念佛讀經を修して餘課を留めざるべきのみ」と。導師の云はく、「専ら彼佛名を稱し、彼佛及び一切の聖衆等を專念し專想し導禮し專讚して、餘業を雜へざれ」と。已。問ふ、「其餘の事業は何の過失有るや。」答ふ、「寶積經」の九十二に云はく、「若し菩薩有りて、樂ひて世業を作し衆務を營めば、應ぜざる所と爲す。我説く、是人は生死に住すと。」又同偈に云はく、「戲論諍論の處は、多く諸の煩惱を起す、智者應に遠離すべし、當に百由旬を去るべし。」云。自餘の方法は具には「止觀」の如し。問ふ

の人は愛論を起し  
利根の人は見論を  
起す。在家の人は  
愛論、出家は見論  
を固執す。

【三業】身、口、  
意の三業を云ふ。

【阿耨菩提】阿耨  
多羅三藐三菩提、  
梵音アヌツタラサ  
ムヤクサンボド  
ヒ (Anuttarasamy  
aksambodhi) 無上  
正遍知と譯す。佛  
の覺智をいふ。

一若し爾らば在家の人は念佛の行に堪へ難きや。答ふ、「世俗人は縁務を棄つること難くんば、但常に念を西方に繫けて、誠心に應に彼佛を念じ、『木槵經』の瑠璃王の行の如くすべし。又迦才の『淨土論』に云はく、「譬へば龍行くとときは雲即ち之に隨ふが如く、心若し西に近けば、業も亦之に隨ふ」と云。問ふ、「既に知る、修行に總じて四相有ることを、其修行の時の用心云何」答ふ、「觀經」に云はく、「若し衆生有りて彼國に生ぜん願ふ者は、三種の心を發せば即便往生す。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり」と。善導禪師の云はく、「一に至誠心とは、謂く、禮拜讚歎念觀して、三業に必ず須らく眞實なるべきが故なり。二に深心とは、謂く、自身は是れ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流轉し、未だ火宅を出でずと信知し、今彌陀の本弘誓願、名號を稱すること下十聲一聲等に至るに及ぶまで、定めて往生を得と信知し、乃至一念だも疑心有ること無し。三に廻向發願心とは、謂く、所作の一切の善根を悉く皆廻向して往生を願ふが故なり。此三心を具すれば必ず往生を得ん。若し一心を少かば即ち生ずることを得ず」と。略こ之を抄す。經文上品上生に在りと雖も、禪師の釋の如きは理九品に通ず。餘師の釋は具すること能はず。『鼓音聲經』に云はく、「若し能く深信して狐疑無き者は、必ず阿彌陀佛國に往生することを得ん」と。『涅槃經』に云はく、「阿耨菩提は信心を因と作す。是菩提の因は復無量なりと雖も、若し信心を説くときは則ち已に説盡す」と。已明かに知る、道を修むるには信を以て首と爲すことを。又善導和尚の云はく、「若し人觀及び睡時、應に此願を發すべし。若し坐、若し立、一心に合掌して正しく面を

西に向けて十聲、阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩清淨大海衆と稱し竟りて、佛菩薩及び極樂界の相を見るの願を發さば、即ち意に隨つて入觀し、及び睡らば見ることを得ん、至心ならざるを除く。『問ふ』行者常途に往生を計念する、其相何に似たるや。『答ふ』前に引く所の『要訣』に、本國に歸らんと欲するの譬、是れ其相なり。又、『安樂集』に云はく、『譬へば人有りて、空曠の迥なる處に於て怨賊に值遇す。劍を抜き勇を奪ひ、直に來りて此人を殺さんと欲するに、徑に走り、一河を渡るべきを觀る。未だ河に到るに及ばざるに即ち此念を作す。我、河の岸に至らば、衣を脱して渡ると爲さんや。衣を着けて浮ぶと爲さんや。若し衣を脱して渡らば、唯恐らくは暇無からん。若し衣を着て浮ばば、復首領全うし難きを畏る。爾時に但一心に河を渡るの方便を作すのみ有りて餘の心相間雜すること無きが如し。行者も亦爾り。阿彌陀佛を念する時、亦彼人の渡るを念ふが如く、念念相次いで餘の心想間雜すること無し。或は佛の法身を念じ、或は佛の神力を念じ、或は佛の智慧を念じ、或は佛の毫相を念じ、或は佛の相好を念じ、或は佛の本願を念ぜよ。稱名も亦爾り。但能く專至相續して斷たずんば、定めて佛前に生ぜん』と。已上元曉師も之に同じ。『問ふ』『念佛三昧は唯心念と爲んや、亦口唱と爲んや。』答ふ、『止觀』の第二に云ふが如し。或は唱念俱に運び、或は先に念じて後に唱へ、或は先に唱へて後に念ず。唱念相繼いで休息する時無く、聲聲念念唯阿彌陀在れ』と。又感禪師の云はく、『觀經』に言はく、是人苦に逼られて念佛するに違あらず。善友教令して阿彌陀佛と稱すべし、是の如くして至



心に聲をして絶えざらしむと。豈苦惱に逼られて念想成し難きも聲をして絶えざらしめば、至心便ち得るに非ずや。今此れ聲を出して念佛定を學するも亦復是の如し。聲をして絶えざらしめば、遂に三昧を得て佛聖衆の目前に皎然たるを見ん。故に『大集の日藏分』に言はく、『大念は大佛を見、小念は小佛を見んと。大念とは大聲に佛を稱するなり。小念とは小聲に佛を稱するなり。斯れ即ち聖教なり。何の惑か有らん。現に見るに即ち今の諸の修學の者は唯須らく聲を勵まして念佛すれば、三昧成じ易かるべし。小聲に佛を稱せば遂に馳散多し。此れ乃ち學者の知る所にして、外人の曉むべきに非ず。已上彼經には但云はく、小を欲すれば小を見る等と云云。然るに感師既に三昧を得たり。彼所釋應に仰いて信受すべし、更に諸本を勘へよ。小念は小を見、大念は大を見る。文は日藏經の第九に出たり。

【九】懈怠を對治するを明す。

【九】第三に對治懈怠とは、行人恆時に勇進すること能はずして、或は心蒙昧し或は心退屈せん。兩時、應に種種の勝れたる事に寄りて自心を勸勵すべし。或は三途の苦果を以て、淨土の功德に比して應に是念を作すべし。我已に惡道にして多劫を経て、無利の勤苦すら尙し能く超ゆ。少行を修行して菩提の大利を得ん。應に退屈を生ずべからず。淨土の相一前に前、或は往生淨土の衆生を緣じて應に是念を作すべし。十方世界の諸の有情、念念に安樂國に往生す。彼既に丈夫なり。我も亦爾なり。應に自ら輕んじて退屈を生ずべからず。往生の人下の利益。門料簡門の如し。或は應に佛の奇妙の功德を緣すべし。問ふ、『何等の功德なる。』答ふ、『其事無邊なり、略して其要を擧げん。

一には應に四十八の本願を思念すべし。又『無量清淨覺經』に云はく、『阿彌陀佛、



念を作すべし。我今既に佛の尊號を聞くことを得たり。願くば我當に佛と作りて、十方の諸佛の如くなるべし」と。

三に佛の相好の功德とは、『六波羅蜜經』に云はく、「諸の世間に於て、有ゆる三世の一切の衆生、學無學の人、及び辟支佛、是の如き有情無量無邊の所有の功德を如來一毛の功德に比すれば、百千萬分の中に其一にも及ばず。是の如く一一の毛端は、皆如來の無量の功德より出生する所なればなり。一切の毛端の有ゆる功德を共して、一つの髮の功德を成す。是の如き佛の髮は八萬四千あり。一一の髮の中に、各上の如き功德を具す。是の如く合集して、共に一の髓好の功德を成す。一切の髓好の功德を共して、一の相の功德を成す。一切の相の功德合集して、百千倍に至りて眉間の毫相の功德を成す。其相圓滿せり、宛轉右遶して頗軀迦寶の如く、明淨鮮白にして猶し夜闇の中の明星の如し。毫相は之を舒ぶれば上色界の阿迦膩吒天に至る。之を卷けば舊の如し。復毫相と爲り眉間に於て住す。毫相の功德百千倍に至りて肉髻の相を成す。是の如き肉髻千倍の功德は、梵音聲相の功德に及ばず。又『寶積經』に無數の校量あり、學者勸ふべし。又『大集心佛三昧經』の第五に云はく、「此の如く世界及び十方の無量無邊の諸の世界の中の有ゆる衆生、假使盡く皆一時に成佛し、彼諸の世尊、無量劫を經るまで皆還りて佛の一毛の功德を數ぜんも終に亦盡きず」と。已。華嚴の偈に云はく、「清淨の慈門刹座のごとく數を共して如來の一の妙相を生ず。一一の諸相然らざること無し。是故に見る者は厭足無し」と。應に是念を作す

べし、願くば我當に佛の無邊功德の相を見るべしと。

四に光明威神とは、謂く「平等覺經」に云はく、「無量清淨佛は是れ阿彌陀佛なり光明最尊第一にして比無し。諸佛の光明皆及ばざる所なり。佛有り、頂の光明七尺を照す。佛有り、

一里を照す。佛有りて五里。佛有りて二十里四十里八十里、乃至百萬の佛國、二百萬の佛

國、八方上下なり。無央數の諸佛の頂の光の所照は皆是の如し。無量清淨佛の頂の

中の光明は千萬の佛國を交照す」と。已上取意。私に云はく、觀經に云はく、彼佛の圓光の佛

國を照す。二經「雙觀經」に云はく、「無量壽佛の威神光明は最勝第一にして、諸佛の

意同じきのみ。光明及ぶ能はざる所なり。或は佛有り、光百佛世界、或は千佛世界を照す。要を取り

て之を言はば、乃ち東方恆河沙の佛刹を照す。南西北方四維上下も亦復是の如し。是故に

無量壽佛を、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、無量光佛、無量光佛、無量光佛、

云はく、最勝自光佛、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、無量光佛、無量光佛、

在なるが故にと清淨光佛の云はく、無貪の善根の所生なるが故にと。歡喜光佛、一に云はく、

無願の所生なるが故にと。智慧光佛、一に云はく、智慧の所發なるが故にと。不斷光佛、一に云はく、恆

に難思光佛、無稱光佛が故にと、自餘の名義は知るべし、煩しく記せず。超日月光佛と號

す。若し三途勤苦の處に在りて、此光明を見れば復苦惱無く、壽終の後に皆解脱を蒙る。

但我今其光明を稱するのみに非ず。一切の諸佛も亦復是の如し。若し衆生有りて、其光

明の威神の功德を聞いて、日夜稱説し至心に斷ぜざらん。意の所願に隨つて其國に生ずる

【三途】火途(地獄)血途(畜生)刀途(餓鬼)の稱。三惡趣に同じ。



【波斯匿王】梵音  
ブラセーナゲツト  
(Prasenajit) 和  
悦、月光勝軍と譯  
す。舍衛國の王、祇  
陀太子の父、釋尊  
の說法に依つて深  
く佛敎に歸せり。

ことを得ん。我無量壽佛の光明威神巍巍殊妙なることを説かば、晝夜一劫するも尙盡す  
こと能はず」と。已上取意、平等覺經には別して頂の『譬喻經』の第三に釋迦文佛の光明の相を  
光と云ふ。觀經は總じて光と云ふ。『譬喻經』の第三に釋迦文佛の光明の相を  
明して云はく、「佛滅して百年阿育王なる有り、國內の庶民佛の遺典を歌ふ。王意に信ぜず、  
念言すらく、佛何の徳有りてか人に過踰せん。而るを共に專信して其文を誦習するやと。  
即ち大臣に問はく、國の中に頗る佛を見る者有りやと。答へて曰はく、聞く、波斯匿王の  
妹出家して比丘尼と作れり、年酉垂に在り。云はく、佛を見ると言ふことを。王即ち自ら  
出でて往詣して問うて曰はく、道人佛を見るや不や。答へて云はく、實に雨り。問うて曰は  
く、何の殊異か有る。道人曰はく、佛の功德巍巍として量り難し。我愚賤の能く之を陳ぶ  
る所に非ず。粗一事を説かば、殊特を知るべし。我時に八歳なり、世尊來りて王宮に入る、  
即ち前んで之を禮す。頭上の金釵墮落して地に在り、之を求むれども得ず。其所以を惟し  
む。如來過ぎ去れども足跡千輻輪有り、光明を現じて晃き、七日有りて即ち滅す。登時  
金鈿地と與に色を同くす。是を以て見えず。光滅後釵を得。乃ち殊特なるを知る。王聞い  
て歡喜し心煥として開悟す」と。略『華嚴經』の偈に云はく、「一一の毛孔より光明を現じ、  
普く虚空に遍じて大音を發す。諸の幽冥の所照さざる無し。地獄の衆苦咸く滅せしむ」と。  
と。應に是念を作すべし、願くば佛光我を照して生死の業苦を滅したまへと。  
五に無能害とは、『寶積經』の三十七に云はく、「風劫の起る時、世に大風有り、僧伽多  
と名く。彼風、此三千世界、須彌鐵圍及び四大州、八萬小州、大山大海を擧ぐることを高さ

【鉢特摩】梵音バ

百躡繚那乃至無量百千躡繚那にして、已に碎末して塵と爲り、又擊壞すれば煩摩天宮を滅し、乃至遍淨天の所有の宮殿も亦皆散滅す。即ち此風を以て如來の衣を吹かば、一毛端の際すら尙動かすこと能はず。何に況んや衣の角及び全衣なる者をや」と。上。「十住論」に云はく、「諸佛は思議すべからず、喻を假りて知るべし。假使一切の十方世界の衆生皆勢力有らん。設し一魔有りて兩所の勢力有らん。復十方の一一の衆生をして力惡魔の如くならしめて、共に佛を害せんと欲すとも尙佛の一毛を動すこと能はず。況んや害する者あらん」と。偈に云はく、「若し諸の世間の中に、佛を害すること有らんと欲する者は、是事は皆成ぜず、不殺の法を成ずるを以てなり」と。應に是念を作すべし、願くば我當に佛の金剛不壞の身を得べしと。

六に飛行自在とは、同論に云はく、「佛虚空に於て擧足下足、行住坐臥、皆自在を得。若し大聲聞の神通自在なるは、一日に五十三億二百九十六萬六千の三千大千世界を過ぐ。是の如きの聲聞百歳に過ぐる所を佛は一念に過ぎたまはん。乃至恆河の中の沙の一つの沙を一河と爲し、是諸の恆河沙の大劫に過ぐる所の國土を佛は一念の中に過ぎたまふ。若し寶蓮華を踏んで去らんと欲せば、即ち能く成辦す。是の如く飛行すれども一切礙無し」と。「觀佛經」に云はく、「虚空に於て足を擧げて行きたまふ時、千輻輪の相より皆八萬四千の蓮華を雨す。是の如く衆の華に塵數の佛有りて亦虚空を歩す」と。略抄。又空を踏んで行くに、而も千輻輪は地の際に現す。悅意の妙香の鉢特摩華、自然に踊出して如來の足を

往生要集卷中本

ドマ (Dama) 紅蓮華と譯す。

【乳蘇】牛乳を製熟するに五味の階段あり、乳酪、生蘇、熱酥、醍醐味なり。

承く。若し畜生趣の一切の有情如來の足の爲に觸れらるる者は極めて七夜を滿るまで諸の快樂を受く。命終の後善趣の樂世界の中に往生せん。寶積。若し四十里の盤石を以て色究竟天より下せば、一萬八千三百八十三年を経て此地に到らん。直に下すも尙爾なり、之を推して應に知るべし、聲聞の飛行と如來の飛行と展轉して不可思議なることを。『華嚴經』の慧林菩薩の讚佛の偈に云はく、「自在の神通力無量なれば思議し難し。來ること無く亦去ること無し、法を説いて衆生を度す」と。應に是念を作すべし、願くば我神通を得て諸の佛土に遊戯せん。

七に神通無礙とは、「十住論」に云はく、「佛は能く恆河沙等の世界を末にして微塵の如くならしめ、又能く還りて合せしめ或は又能く無量無邊阿僧祇の世界を變じて皆金銀等と作さしめ、又能く恆河沙等の世界の大海の水を變じて皆乳蘇等と爲らしむ」と。『淨名經』に菩薩不思議解脱を説いて云はく、「三千大千世界を斷取すること陶家の輪の如し。右の掌の中に著いて擲けて恆河沙世界の外に過ぐれども、其中の衆生は已の住する所を覺えず知らず。又復還りて本處に置けども都て人をして往來の想有らしめず。而も此世界の本相は故の如し。又下方に於て恆河沙等の諸佛世界を過ぎて一の佛土を取りて、上方に擧著して恆河沙無數の世界を過ぐ。針鋒を持して一の藥葉を擧ぐるが如し。而も感ます所無し。須彌山を以て芥子の中に納れ、四大海を以て一の毛孔に入るも亦復是の如し。其中の衆生覺えず知らず。唯應に度すべき者乃ち之を知見す」と。已。菩薩すら尙し爾なり、何に況ん

や佛力をや。故に『度諸佛境界經』に云はく、「能く十方の世界をして一の毛孔に入らしむ。乃至一の微塵に於て能く無量無數不可說の世界を現すれども、一切衆生亦迫窄無量無數不可說劫の威儀果報の事は能く一念の中に於て現す。一念の威儀果報の事は無量無數不可說劫の中に於て現す。是の如く所作の心功用無く、思惟を作すに非ず」と。云云。『華嚴經』の眞實幢菩薩の偈に云はく、「一切諸の如來は神通力自在なり、悉く三世の中に於て之を求むれども得べからず」と。應に是念を作すべし、我今亦佛の神力に轉ぜられて何の佛土にか在り、誰の毛孔に在るかを知らず、我何の時に於てか之を覺知することを得んと。

八に隨類化現とは『十住論』に云はく、「佛は一念の中に十方無量無邊恆河沙等の世界に於て無量の佛身を變化し、一一の化佛亦能く種種の佛事を施作す」と。已上四事。『度諸佛境界經』に云はく、「如來の所現は異の功用無く異の思惟無し、衆生の性に隨うて自ら見ることに同じからず。十五日の夜の閻浮提の人、各月の其上に現在するを見れども、月は我其上に現げんと作意せざるが如し、『華嚴』の偈に云はく、「如來の廣大の身は法界を究竟す、此座を離れずして而も一切の處に遍す」と。又云はく、「智慧甚深にして功德海普く十方の無量國に現す。諸の衆生の應に見るべき所に隨うて光明遍く照して法輪を轉ず」と。應に是念を作すべし、願くば我當に法界に遍する身を見るべしと。

九に天眼明徹とは『十住論』に云はく、「大力の聲聞は天眼を以て小千國土を見る、亦中

【法輪】 教法のこと。諸佛の教法はよく衆生の迷妄を破砕すること恰も車輪の轉じて瓦礫を碎くが如くなるが故に法輪と名く



の衆生の生時死時を見る。小力の辟支佛は十の小千國土を見る、中の衆生の生時死時を見る。中力の辟支佛は百の小千國土を見る、中の衆生の生時死時を見る。大力の辟支佛は三千大千國土を見る、中の衆生の生死の所趣を見る。諸佛世尊は無量無邊不可思議世間を見る、亦是中の衆生の生時死時を見る」と。已。『華嚴經』の偈に云はく、「佛眼廣大にして邊際無し、普く十方の諸の國土を見る、其中の衆生量るべからざれども大神通を現じて悉く調伏す」と。應に是念を作すべし、今彌陀如來遙に我身業を見んと。

十に聞聲自在とは、『十住論』に云はく、「假令恆河沙等の三千大千世界の衆生一時に言を發し、又一時に百千種の伎樂を作し、若し遠若は近意に隨うて能く聞く。若し中に於て一の音聲を聞かんと欲せば意に隨うて聞くことを得、餘の者は聞えず。又無邊世界を過ぎて最も細聲を皆亦聞くことを得。若し衆生をして聞かしめんと欲せば能く聞くことを得しむ抄略。『華嚴』の文殊の偈に云はく、「一切世間の中有ゆる諸の音聲も、佛の智は皆隨つて了る、亦分別有ること無し」と。已。應に是念を作すべし、今彌陀如來定めて我所有の語業を聞かんと。

十一に知他心智とは、『十住論』に云はく、「佛は能く無量無邊の世界に現在せる衆生の心及び諸の染淨の所緣等を知る。又能く無色の衆生の諸の心を知る」と。抄略。『華嚴』の文殊の偈に云はく、「一切衆生の心普く三世に在り、如來は一念に於て一切悉く明達す」と。應に是念を作すべし、今彌陀如來は必ず我意業を知らんと。

十一二に宿住隨念智とは、「十住論」に云はく、「佛若し自身及び一切衆生の無量無邊の宿命を念ぜん」と欲せば、一切の事皆悉く知る、知らざること有る無し。恆河沙等の劫の事を過ぎしも、是人は何の處に生じ、姓名、貴賤、飲食、資生、苦樂、所作の事業、所受の果報、心は何なる所行かある。本何よりか來る。是の如き等の事即ち能く知見す。偈に云はく、「宿命もて無量を知る、天眼もて無邊を見る、一切の人天の中に能く其限を知るもの無し」と。應に念すべし、願くば佛我宿業をして清淨ならしめよと。

十三には智慧無礙とは「寶積經」三十七に云はく、「假使人有りて恆河沙等の世界に有ゆる一切の草木を取り、悉く焼いて墨と爲し擲げて他方恆河沙等の世界の大海に置き、百千歳に於て就て以て之を磨し、盡く墨汁と爲さんも、佛は大海の中より一一の墨の滴りを取りて分別し。是は某の世界の是の如き草木、某の根、某の莖、某の枝、某の條華果葉等を了知す。又如し人有りて一毛の端を持し、水の一滴に露し來りて佛の所に至り而も是言を作し、敢て滴水を以て、持用て相寄す、後に若し須ひんには、當に還りて我に賜ふべしと。爾時、如來其滴水を取り、剋伽河の中に置かん、而して彼河の流浪洄洑の爲に旋轉せられ和合引注して、大海に至る。是人百年を滿ち已りて佛に白して言さく、先に寄せし滴水を今我に還せと請ふ。爾時、佛一分の毛端を以て大海の内に就き、木水の滴を露し用て是人に還す」と。抄「六波羅蜜經」に云はく、「是の如き四州及び諸の山王を用て紙素と爲し、八大海水を以て其墨と爲し、一切草木を用て其筆と爲し、一切の人天の一

【慈氏】彌勒菩薩のこと。  
【一生補處】一生を過ぐれば淨處を補ふべき覺の位をいふ。

劫に書寫せられん。舍利弗が得る所の智慧に比すれば、十六分の中其一にも及ばず。又此三千大千世界に於て、其中の衆生有ゆる智慧、舍利弗の如く等しく異り有ること無けん。菩薩布施の波羅蜜多に達する有ゆる智慧は、彼に過ぐることを百倍す。又此三千大千世界に有ゆる衆生、皆布施波羅蜜多の智慧を具せんも一の菩薩の所得の淨戒、波羅蜜多の智慧に及ばず、乃至般若も亦是の如し。又此三千大千世界に有ゆる衆生、皆六波羅蜜の智慧を具するも一初地の菩薩の智慧に及ばず。乃至十地展轉して是の如し。又此十地の菩薩智慧も汝慈氏の一生補處の喜薩の智慧に比すれば、百千分の中其一にも及ばざるなり。此三千大千世界の一切の衆生、有ゆる智慧皆慈氏の如く等しくして異なること有ること無く、是の如き菩薩道場に坐し魔怨を降伏して將に正覺を成ぜんとす、有ゆる智慧も佛の智慧に於てせば百千萬分にして其一に及ばざるなり」と。『寶積經』に云はく、「假使十方の無量無邊の一切世界に有ゆる衆生皆悉く繫屬一生補處の菩薩の智慧を成就せるを如來十力の一の處非處の智に比せんと欲せば、百千萬分の其一にも及ばず。乃至烏波尼沙陀分の其一にも及ばず。乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり」と。『華嚴經』の偈に言はく、「如來の甚深の智普く法界に入り、能く三世に隨つて轉じ世の與に明なる道を爲す」と。同じき經の普明智菩薩讚佛の偈に云はく、「一切の諸法の中に法門邊有ること無し、一切の智を成就して深法海に入る」と。上。應に是念を作すべし、願くば今彌陀、我三業を照見したまへ、願くば世尊の如く慧眼第一の淨を得ん。

【無餘涅槃】煩惱障を斷じて得たる五蘊和合の身體もすべて滅して今は全く所依なきが故に名く、即ち灰身滅智したる處に顯はるる涅槃をいふ。

十四に能調伏心とは、『十住論』に云はく、「諸佛若は定に入り若は定に入らず、心を一縁の中に繫げんと欲せば、意の久近に隨つて意の如く能く住す。此縁の中より更に餘の縁に住するも意に隨つて能く住す。若し佛常心に住して人をして知らざらしめんと欲せば則ち知ること能はず。假使一切衆生の他心を知るの智大梵王の如く、大聲聞辟支佛の如く智慧を成就して他人の心を知りて、佛の常心を知らんと欲すとも、若し佛聽かずんば則ち知ると能はざるなり」と。應に念すべし、願くば我をして佛覺三昧を得しめよと。

十五に常在安慧とは、同じく論に云はく、「諸佛は安穩にして常に動ぜず、念常に心に在り、何を以ての故に。先に知りて後に行じて生ず。意の所縁の中に隨ひ無礙の行に住するが故に。一切の煩惱を斷ずるが故に。動の性を出過せるが故に。佛阿難に告ぐるが如し。佛此夜に於て阿耨菩提を得て、一切の世間の、若は天魔梵沙門婆羅門に於て、盡苦の道を以て教化すること周く畢りて無餘涅槃に入らん。其中間」に於て、佛諸受に於て起を知り住を知り生を知り滅を知り、諸の相諸の觸諸の覺諸の念も亦起を知り住を知り生を知り滅を知り、惡魔七年晝夜に息まず、常に佛に隨逐すれども佛の短を得ず、佛の念安慧に在らざるを見ず。偈に云はく、「其念は大海の如し、湛然として安穩に在り、世間に法有りて能く擾亂する者無し。」と。應に念すべし、願くば佛我轟動なる覺觀の心を除滅せよと。

十六に悲念衆生とは、『大般若經』に云はく、「十方世界に一の有情として如來の大悲能く照さざる所無し」と。『寶積經』に云はく、「假使兢河沙等の諸佛世界を過ぎて唯一の衆生



なりとも、是れ佛の化の限ならん。爾時、如來躬ら其所に往き、爲に法要を説いて、其をして悟入せしむ」と。同じき經の偈に云はく、「一の衆生を利せんが爲に、無邊の劫海に住し、其をして調伏を得しめん、大悲の心是の如し。」と『華嚴經』の文殊諸佛の偈に云はく、「一の地獄の中に無量の劫を経るは、衆生を度せんが爲の故に、而も能く是苦を忍ぶ。」と『大經』の偈に云はく、「一切の衆生の異苦を受くるは、悉く是れ如來の一人の苦至衆生は佛の能く救ふことを知らず、故に如來及び法僧を謗する。」と『大論』に云はく、「佛は佛眼を以て一日一夜各三時に一切の衆生の誰か度すべき者なるかを觀じて、時を失はしむること無し」と。有論に云はく、「譬へば魚の子、母若し念ぜざれば、子則ち爛壞するが如し。衆生も亦爾り、佛若し念ぜざれば善根即ち壞す」と。『莊嚴論』の偈に云はく、「菩薩衆生を念じて之を愛すること骨髓に徹し、恆時に利益せんと欲す。猶し一子の如し、故に此等の義に由る。」と。有懺悔の偈に云はく、「父母に子有り、始めて生れて便ち盲聾し、慈悲の心慙重なれば捨てずして養活す。子は父母を見ざれども父母は常に子を見るが如く、諸佛は衆生を觀ること猶し羅睺羅の如し、衆生は見ずと雖も實に諸佛の前に在り。」と。上。應に是念を作すべし、彌陀如來は常に我身を照し、我善根を護念し我機縁を觀察したまふ、我若し機縁熟せば時を失はずして引接せられんと。

【釋摩羅】梵音ラ  
 一フラ (Rahula)  
 覆障と譯す。佛十  
 大弟子の一、釋尊  
 の子、釋尊成道の  
 後、郷に還り給ひ  
 し時、出家して佛  
 の弟子となる、密  
 行第一と稱せらる

摩數の三千大千世界の衆生、皆舍利弗の如く辟支佛の如く、皆悉く智慧樂説を成就して、

【機縁】衆生の機

に佛の教化を受く

べき因縁あること

【引接】佛が攝取

の御手を以て衆生

を引導したまふこ

と。

【四念處】三賢位

のうち念處位に於

て修する觀法。身

念住、受念住、心

念住、法念住。吾

人が淨樂、我常の

四顛倒の妄見を起

す對象は身受心法

の妄見を破せんが

爲に能觀の智を以

て身は不淨なり、

受は苦なり、心は

無常なり、法は無

我なりと觀す。

【阿育王】梵音ア

シヨカ (Asoka)

無憂と譯す、前三

世紀の印度の王、

父王の歿後その兄

弟を殺して王位に

登り狂暴を極めし

も後佛敎に歸する

悲心を發し國中に

壽命上の如く摩訶大劫ならん。是諸の人等四念處に因りて其形壽を盡して如來を問難せ

ん。如來還りて四念處の義を以て其所問に答ふ。言義重からずして樂説窮まり無けん」と。

又云はく、「佛に所説有るは皆利益有り、終に空言ならず、是亦希有なり。乃至無色界の結使の一豪釐分をも

生、智慧勢力皆辟支佛の如きも、是諸の衆生若し佛意を承けずして一人を度せん」と欲せ

ば、是處有ること無し。若し是諸の人説かん時には、乃至無色界の結使の一豪釐分をも

斷すること能はず。若し佛、衆生を度せんと欲して言説する所らば、乃至外道邪見諸龍

夜叉等、及び餘の佛語を解らざる者皆悉く解せしむ。是等も亦能く無量の衆生を轉化

す。乃至是故に佛を最上の導師と名く」と。偈に云はく、「四問答の中に於て、超絶して倫匹

無し、衆生諸の問難、一切皆得易し。若し三時の中に於て、諸の所説有る者、言必ず

虚設ならず、常に大果報有り。」と。上「華嚴經」の偈に云はく、「諸佛廣大なる音は、法界に

聞えざることを無し。菩薩は能く了知して、善く音聲海に入る。」と。「淨名經」の偈に云は

く、「佛は一音を以て法を演説するに、衆生は類に隨つて各解を得。皆世尊は其語を同う

すと謂へり。斯れ即ち神力不共の法なり。」と。又「譬喻經」の第三に云はく、「阿育王意に

佛を信ぜず、時に海邊に鳥有り、名けて鵲隨と爲す。其音甚だ哀和にして頗る髮髻として

佛の音聲萬分の一に似たる有り。王其音を悼いて歡喜し即ち無上道の意を發す、宮中の線

女凡そ七千人復無上道の意を發す。王是より遂に三尊を信す。鳥の音聲もて度する所是の如

し。況んや至眞の清淨妙音に於ける者をや」と。意を取り、應に念すべし、我何の時にか

八萬四千の寺塔を  
四方に又傳道僧を  
教化に派遣して各  
大いに從事せしめ  
盡せり。佛敎興隆に

彼辯説を聞くことを得んと。

十八に觀佛法身とは、文殊師利菩薩の言の如し。「我如來を觀するに即ち眞如の相、動無く作無く分別する所無く異の分別無し。方處に即するに非ず、方處を離るるに非ず、有に非ず無に非ず、常に非ず斷に非ず、三世に即せるに非ず、三世を離るるに非ず、生無く滅無く、去無く來無く、染と不染と無く、二と不二と無し。心言路絶し、若し此等の眞如の相を以て如來を觀するを眞に佛を見ると名け、亦如來を禮敬し親近すと名く。實に有情に於て能く利樂を爲すなり」と。若。『占察經』の下卷に地藏菩薩の言はく、「一實境界とは、謂く衆生の心體は本より已來生ぜず滅せず、自性清淨にして障り無く礙り無し。猶し虚空の如し。分別を離るるが故に平等普遍にして至らざる所無し、十方に圓滿し究竟じて一相なり。二無く別無し、變ぜず異せず、増無く減無し。一切衆生の心、一切聲聞辟支佛の心、一切菩薩の心、一切諸佛の心、皆同じく生ぜず滅せず、無染寂靜の眞如の相なるを以ての故に。所以は何ん。一切の心有りて分別を起す者、猶し幻化の如く定實有ること無し。乃至一切の世界に心の形狀を求むるに一區の分として而も得べき者無し。但衆生の無明の癡闇に薰習せし因縁を以て、妄に境界を現じて念著を生ぜしむ。謂ゆる此心は自ら無なりと知ること能はざれば、妄に自ら有なりと謂ひて、覺知の想を起し我と我所を計す。而れども實には覺知の想有ること無し。此妄心は畢竟じて體無く見るべからざるを以ての故なり」と。乃至廣く説かば、信解を以て此理を觀念し、此一實境界とは即ち是れ如來法身なり。

『華嚴經』の一切慧菩薩の偈に云はく、「法性は本空寂にして取無く亦見無し。性空なれば即ち是れ佛なり、思量を得べからず」と。已。應に念すべし、我何の時にか本有性を顯すことを得んと。

十九に總觀佛徳とは、普賢菩薩の云ふが如し。「如來の功徳は、假使十方の一切の諸佛、不可説不可説の佛刹、極微塵數劫を経て相續して演説すとも窮盡すべからず」と。已。又阿彌陀佛は威神極り無し。『變觀經』に云ふが如し、「無量壽佛は威神極り無ければ、十方の世界の無量無邊不可思議の諸佛如來も稱數せざること莫し」と。龍樹の偈に云はく、「世尊の諸の功徳は度量を得べからず。人尺寸を以て空を量り盡すべからざるが如し」と。同じく彌陀を讚する偈に云はく、「諸佛無量劫に、其功徳を讚揚すとも、猶盡すこと能はず、清淨の人に歸命す」と。應に念すべし、願くば我佛を得ん、正法王に齊しくせんと。

二十に欣求教文とは、『般舟經』に云はく、「是三昧は値ふことを得難し。正使是三昧を求め、百億劫に至りて但其名聲を聞くことを得んと欲すとも、聞くことを得る能はず。何に況んや學することを得る者をや。轉た復行じて人を教へんをやと。偈に言はく、「我自ら往世の時を識念するに、其數六萬歳を具足す。常に法師に隨つて捨離せざれども、初より是三昧を聞くことを得ず。佛有り、號して具至誠と曰ふ。時に智ある比丘あり和隣と名く。彼佛世尊の泥洹の後、比丘常に是三昧を持す。我時に王君子の種たり、夢中には三昧を聞くに逮ぶ。和隣比丘斯經を有てり、王當に従うて此定意を受くべし、夢より覺已りて即ち

【泥洹】涅槃と眞  
理を窮めて寂滅無  
爲の法性を究め不  
生不滅の法身の眞  
證に歸するをいふ



往きて求むるに、即ち比丘の三昧を持するを見て、即ち鬚髮を除きて沙門と作り、學すること八千歳にして一時に聞く、其數八萬歳を具足して、此比丘を供養し奉事す。時に魔の因縁數興起して、初より未だ曾て一反だも聞くことを得ず、是故に比丘比丘尼及び清信士清信女、是經法を持して汝等に囑す。是三昧を聞かば疾かに受行し、常に是を習持する法師を敬つて一劫を具足すとも解ることを得ること無し。乃至假使億千那術劫に是三昧を求むれども聞くことを得難し。設令世界の恆沙の如き中に滿つる珍寶を用て布施せんも、若し是一偈の説を受くること有りて敬誦せば功德は彼よりも過ぐ。」と。『雙觀經』に云はく、「設ひ大火有りて三千大千世界に充滿せんも、要す當に此を過ぎて是經法を聞き、歡喜信樂し受持讀誦して説の如く修行すべし。所以は何ん。多く菩薩ありて此經を聞かんと欲すとも、而も得ること能はざればなり。若し衆生有りて此經を聞かば無上道に於て終に退轉せず」と。上。是故に應當に專心に信じ受持し讀誦して、説の如く修行すべし。上。應に此念を作すべし、或は大干猛火聚を過ぎ或は億劫を經んも應に法を求むべし。我既に深三昧に値遇す、如何が退屈して勤修せざらん。行者此諸の事に於て若は多若は少、樂に隨つて憶念せよ。若し憶念すること能はずんば須らく卷を披いて文に對して、或は決擇し或は誦詠し、或は戀慕し或は敬禮すべし。近くは勤心の方便と爲り、遠くは見佛の因縁を結ぶ。凡そ三業四儀佛の境界を忘るること勿れと。問ふ。如來の是の如き種種の功德を信受し憶念せば何の勝利有るや。答ふ。『度諸佛境界經』に云はく、「若し十方世界の微塵等の諸佛及

び聲聞衆に於て百味の飲食微妙の天衣を施すこと日日廢れずして恆沙劫を滿てん。彼佛の滅後に一一の佛の爲に十方界の一一の世界に於て塵數の塔を起て、衆寶莊嚴し種種に供養すること一日に三時、日に廢れずして恆沙劫を滿てん。復無數無量の衆生に教へて諸の供養を設けんも、若し一人有りて此如來の智慧功德不可思議なる境界を信ぜば、得る所の功德彼に勝ること無量なり」と。取。又『華嚴』の偈に云はく、「如來の自在力は、無量劫にも遇ひ難し、若し一念の信を生ぜば、速に無上の道を證せん」と。餘は下の利益門の如し。問ふ、「凡夫の行人は物を逐うて意移る。何んが常に念佛の心を起すを得る。」答ふ、「彼若し直爾に佛を念ずる能はずんば、應に事事に寄せて其心を勸發すべし。謂く、遊戲談笑の時は、願くば極樂界の寶池寶林の中に於て、天人聖衆と是の如く娛樂を得んと。若し憂苦の時は、願くば諸の衆生と共に苦を離れて極樂に生ぜん」と。若し尊德に對さば當に願すべし、極樂に生じて是の如き世尊を奉せんと。若し卑賤を見ば當に願すべし、極樂に生じて孤獨の類を利樂せんと。凡そ人畜を見る毎に常に應に是念を作すべし、願くば此衆生と共に安樂國に往生せんと。若し飲食の時は常に願すべし、極樂の自然の微妙なる食を受けんと。衣服臥具、行住坐臥、違縁順縁、一切準へて知れ。事に寄せて願を作すは是

往生要集 卷中末

天台首楞嚴院沙門源信撰

【一】 惡を止め善を修するを明す。

【増上慢】 殊勝の法及び證を得ずして得たりと思ひたかぶること。

【二】 第四に止惡修善とは、『觀佛三昧經』に云はく、「此念佛三昧を若し成就せん者は五の因縁あり。一には戒を持ちて犯さざれ。二には邪見を起さざれ。三には憍慢を生ぜざれ。四には悲らず嫉まざれ。五には勇猛に精進すること頭然を救ふが如くせよ。此五事を行じて正しく諸佛の微妙なる色身を念ぜば、心をして退せざらしむ。亦當に大乘經典を讀誦すべし。此功德を以て佛力を念ずるが故に、速疾に無量の諸佛を見ることを得ん」と。

已上問ふ、「此六種の法は何の義有りや。」答ふ、「同經に云はく、「淨戒を以ての故に、佛像の面を見ること眞金の鏡の如く、了了として分明なり」と。又『大論』に云はく、「佛は醫王の如く、法は良藥の如く、僧は瞻病人の如く、或は服藥禁忌なるが如し」と。已上故に知る、設し法藥を服すとも禁戒を持たずんば、煩惱の病患を除癒するに由無けん。故に『般舟經』に云はく、「戒を破ること大さ毛髮の如きをも得ざれ」と。已上は戒『觀佛經』に云はく、「若し邪念及び貢高の法を起さば、當に知るべし、此人は是れ増上慢にして佛法を破滅す。多く衆生をして不善の心を起さしめ、和合僧を亂し異を顯して衆生を惑さん。是れ惡魔の伴なり。是の如きの惡人は復偈を念すと雖も甘露の味を失はん。此人の生處は貢高

【拘留孫佛】過去七佛の第四、人壽四萬歳の時、安和城に生る、種は婆羅門、姓は迦葉、父は禮得、母は善樹下といふ、尸利沙法度生せり。

なるを以ての故に、身位に卑小にして下賤の家に生れ、貧窮の諸衰、無量の惡業、以て嚴飾と爲さん。此の如き種種衆多の惡事は、當に自ら防護して永く生ぜざらしむべし。邪見橋慢『六波羅蜜經』に云はく、「無量劫中に諸の善を修行せんも安忍の力及び智慧の眼無くんば一念の瞋火に燒滅せられて餘無けん」と。又『遺教經』に云はく、「功徳を却むる賊は瞋恚に過ぐるは無し」と。又或處に説いて云はく、「能く大利を損ふは瞋に過ぐるは無し。一念の因縁も悉く俱胝廣劫の修せし所の善を焚滅す。是故に慇懃に常に捨離せよ」と。

『大集』の月藏分に無瞋の功徳を説いて云はく、「常に賢聖と相會して三昧を著すことを得ん」と。已上瞋恚 『雙觀經』に云はく、「今世の恨の意微しく相憎嫉すれば後世に轉劇しくして大怨と成るに至らん」と云云。又他人を嫉毀するは其罪甚だ重し、『寶積經』の九十一に云ふが如し、「佛施鹿園に在す時、六十の菩薩有り、業障深重にして諸根闇鈍なり、佛足を頂禮して悲感し、涙を流して自ら起つ能はず。時に佛告げて言はく、汝等應に起つべし、復悲蹄して大熱惱を生ずる勿れ。汝曾し拘留孫佛の法の中に於て、出家して道を爲ししが、自ら多聞持戒頭陀少欲に執著す。時に二りの説法せる比丘有り。諸の親友多くして名聞利養す、汝等嫉妬の心を以て妄言し誹謗して、彼親友の諸の衆生をして隨順の心無く諸の善根を斷ぜしむ。此惡業に由りて六十千歳の中に於て阿鼻地獄に生じ、餘業未だ盡きずして復四十百千歳の中に於て等活地獄に生じ、復二十百千歳の中に於て黑繩地獄に生じ、復六十百千歳の中に於て燒熱地獄に生ず。彼より歿し已りて、還りて



【旃陀羅】梵音チ  
 キンダール(Chandala)と譯す。印度種姓の名、最下卑の種族にして四姓の下に位す、漁獵、守獄、屠殺等の業をなす。

【顛陀】梵音ドブ  
 ータ(Dhuta)陶汰と譯す。煩惱の塵垢を拂ひ去りて、佛道を求むること修行と同義なり。

人と爲ることを得れども、五百世の中に生盲にして目無し。在所生に正念を忘失し善根を障礙す。形容醜缺にして人見るを喜ばず、常に邊地に生れて貧窮下劣なり。此より歿し已りて後、末の五百歳の中に於て法滅せんと欲する時に、還りて邊地に下劣の家に於て生ず。匱乏飢凍して正念を忘失す。設ひ善を修せんと欲すとも、諸の留難多し。五百歳の後に惡業乃ち滅して、後に於て阿彌陀佛の極樂世界に生ずるを得ん。是時、彼佛當に汝等が爲に阿耨菩提の記を授けたまふべし。時に諸の菩薩、佛の所説を聞いて身を擧げて毛堅ち深く憂悔を生じて、便ち自ら涙を收めて白して言はく、我今日より未來際に至るまで、若し菩薩乘の人に於て違犯有るを見て、其過を擧げ露せば、我等即ち如來を欺誑すと爲さん。我今日より未來際に至るまで、若し在家出家の菩薩乘の人欲樂を以て遊戯歡娛するを見んも、終に其過を伺求せず、常に信敬を生じて教師の想を起さん。我今日より未來際に至るまで、若し不善有りて能く其身を摧伏し下劣の想を生じて旃陀羅及び狗犬の如くせば、則ち如來を欺誑すと爲さん。若し持戒多聞頭陀少欲知足の一切の功德に於て身自ら炫耀せば、則ち如來を欺誑すと爲さん。修する所の善本は自ら矜伐せず、行する所の罪業は慚愧發露せん。若し爾らずんば如來を欺誑すと爲さん。時に佛讀じて言はく、善い哉善い哉、則ち是の如きの決定心を以てせば、一切の業障は皆悉く消滅し、無量の善根も亦當に增長すべし」と。是故に大論の偈に云はく、「白法に愛染するが故に、他人の法を毀誓するは、持戒の行人と雖も、地獄の苦を脱せず」と。已上嚴始 同論の偈に云はく、「馬井の二比丘は、

【六法】式又摩那  
 (學法女)の守るべ  
 き六種の戒法、畜  
 生の命を殺さず、畜  
 四錢を盗まらず、摩  
 觸せず、妄語せず  
 非時食せず、飲酒  
 せず。

懈怠もて惡道に墮す。見佛聞法すと雖も、猶亦自ら勉めざればなり。」上。又若し精進無くんば行成就し難し。故に『華嚴經』の偈に云はく、「鑽燧して火を求むるが如きは、未だ出でざるに而も數息めば、火勢隨うて止滅す、懈怠する者も亦然り。」上。精進大乘を讀誦する功德の無量なるは、『金剛般若論』の偈に云ふが如し。「福は菩提に趣かず、二能く菩提に趣く、實に於けるを了因と名け、餘に於けるを生因と名く。」上。觀佛經の六種の法畢ん以て經の意を釋成す。『般舟經』にも亦十事有り、彼經に言ふが如し。若し菩薩有りて是の三昧を學誦せば十事有り。一には他人の利養を嫉妬せず。二には悉く當に人を愛敬し長老に孝順すべし。三には當に報恩を念すべし。四には妄語せずして非法を離れよ。五には常に乞食して請を受けざれ。六には精進經行せよ。七には晝夜臥出するを得ざれ。八は常に布施を欲して終に惜悔する無かれ。九には深く慧の中に入りて所著する無かれ。十には敬うて善師に事へて佛の如くせよ。と。略。問ふ。『般舟經』も亦四十六法の種有り。『十住婆沙』の第九には百四十餘種の法あり。『念佛三昧經』には種種の法有り。又『華嚴經』の入法界品の偈に云はく、「若し信解し憍慢を離るること有りて發心せば、即ち如來を見るを得ん。若し誑誑不淨の心有らば億劫に尋求すとも値遇すること無けん。」と。『觀佛經』に云はく、「晝夜六時に六法を勤行し、端坐正受して當に少語を樂ふべし。經を讀誦し廣く法教を演ぶるを除いて終に無義の語を宣說せざれ。常に諸佛を念じて心心相續乃至一念の間も佛を見ざる時有ること無し。心專精なるが故に佛日を離れず」と。又『遺日摩尼

【白衣】白衣の衣服、昔印度にて俗人の位官なきものは白衣を著、位官あるものは彩衣を纏へり。僧の黒衣なるに對し、俗人を總て白衣といふ

經に説く、「沙門の牢獄に墮つるは多の事有り。或は人を求めて供養を得んと欲し、或は多く衣鉢を積まんと欲し、或は白衣と與に厚善し、或は常に愛欲を念ひ、或は喜んで知友に交結す」と。文は多法有れ。問ふ、「今何ぞ彼等の法を擧げざるや。」答ふ、「若し廣く之を出さば還りて行者をして退轉の心を生ぜしめん。故に略して要を擧ぐるなり。若し堅く十重四十八輕戒を持たば、理必ず念佛三昧を助成す。亦應に任運に餘行を持得すべし。況んや六法を具へ或は十法を具するをや。何の行か攝せざらん。故に略して述べず。然るに羸強の惑業は人をして覺了せしむ。但無義の語は其過顯ならずして恆に正道を障ふ。善く應に之を治すべし。或は應に『大論』の文に依るべし。一人の失火して四邊に俱に起るが如き、云何が其内に安處して餘の事を語説せん。此中の佛説若し聲聞辟支佛の事を説くすら猶無益の言と爲す。何に況んや餘事をや」と。已。行者常に娑婆の依正に於て火宅の想を生じ、無益の語を絶し、相續して佛を念す。問ふ、「往生論」に念佛の行法を説いて云はく、「三種の菩提門に相違する法を遠離せよ。何等か三種なる。一には智慧の門に依りて自樂を求めざれ。我心もて自身を食著するを遠離するが故に。二には慈悲の門に依りて一切衆生の苦を抜く。衆生の心を安んずる無きことを遠離するが故に。三には方便の門に依りて一切衆生の心を憐愍せよ。自の身心を供養し恭敬するを遠離するが故に。是を三種の菩提門相違する法を遠離すと名く。故に菩薩の如き三種の菩提門相違する法を遠離すれば、三種の隨順せる菩提門の法滿足するを得るが故なり。何等か三なる。一には無染清淨心、身の

爲に諸の樂を求めざるが故に。二には安清淨心、一切衆生の苦を抜くが故に。三には樂清淨心、一切衆生をして大菩提を得しむるを以ての故に。衆生を攝取して彼國土に生ぜしむるを以ての故に。是を三種の隨順せる菩提門の法満足すと名くるなり」と。上。此中に何が故に彼論に依らざる。答ふ、「前の四弘の中に此六法を具足す。文言異なりと雖も其義闕くること無し。問ふ、「佛を念せば自ら罪を滅す、何ぞ必ずしも堅く戒を持たんや。答ふ、「若し一心に念せば誠に責むる所の如し。然るに盡日佛を念じ、常に其責を檢するに淨心なるものは是れ一兩にして其餘は皆濁亂なり。野鹿は繫き難く、家狗は自ら馴る。何に況んや自ら心を恣にせば其惡幾許ぞや。是故に、要す當に精進して淨戒を持つこと猶し明珠を護るが如くすべし。後悔ゆとも何ぞ及ばん。善く之を思念せよ。問ふ、「誠に所言の如し。善業は是れ今世に學する所なれば、欣ふと雖も動もすれば退く、妄心は是れ永劫に習ふ所なれば、厭ふと雖も猶起る。既に爾らば何の方便を以て之を治するや。答ふ、「其治一に非ず。次第禪門に云ふが如し。一には沈憊闇塞の障を治すとは應に應佛を觀念すべし。三十二相の中に隨うて一を取れ。或は先づ眉間の毫相を取りて目を閉ちて觀す。若し心闇鈍にして懸に成ずること成らずんば、當に一の好嚴なる形像に對つて一心に相を取り之を緣じて定に入るべし。若し明了ならずんば眼を開いて更に觀じ復更に目を閉づ。是の如く一相を取ること明了にして、次第に遍く衆相を觀じ心眼をして開明ならしむれば、即ち昏睡沈闇の心を破す。佛を念する功德は則ち罪障を除けばなり。二には惡念思惟の障を



【十八不共】佛の有し給ふ十八種の獨特の法、身無失、無異想、無不定心、無不知已捨、欲無減、精進無減、念無減、慧無減、解脫無減、一切身業隨智慧行、一切口業隨智慧行、一切意業隨智慧行、智慧知過去世無礙、智慧知未來世無礙、智慧知現在世無礙の稱。

治すとは、應に報佛の功德を念すべし。正念の中に佛の十力、四無所畏、十八不共、一切種智の圓に法界を照せども、常寂にして動ぜず。普く色身を現じて一切を利益す。功德無量の不可思議なるを緣すべし。何を以ての故に。此念佛の功德は勝れたる善法を緣する中より心數を生ず。惡念思惟は惡法を緣する中より心數を生ず。善能く惡を破す。故に應に報佛を念すべし。譬へば醜陋少智の人、端正大智の人の中に在れば即ち自ら鄙耻するが如く、惡も亦是の如し。善心の中に在れば、則ち耻愧して自ら息まん。佛の功德を緣せば念念の中に一切の障を滅すればなり。三には境界逼迫の障を治すとは、應に法佛を念すべし。法佛には即ち是れ法性平等不生不滅にして形色有ること無く空寂無爲なり。無爲の中には既に境界無し。何者か是れ逼迫の相ぞ。境界空なるを知るが故に、即ち是れ對治す。若し三十二相を念せば、即ち對治に非ず。何を以ての故に。是人未だ相を緣ぜざる時すら已に境界に惱亂せらる。而して更に相を取らば此に因つて魔に著し、其心を狂亂せん。今空を觀じて相を破すれば、諸の境界を除く。心に在りて佛を念するは功德無量にして、即ち重罪を滅すればなりと。抄。別相の治は是の如し。今三の通治を加へん。一には能く惑の起るを了し、其心を驚覺し、煩惱を呵責すること惡賊を驅るが如く、三業を防護すること油鉢を擎ぐるが如くす。『六波羅蜜經』に云ふが如し。結跏趺坐して正念に觀察し、大悲の心を以て而も屋宅と爲し、智慧を鼓と爲し、覺悟の杖を以て而も之を扣繫し、諸の煩惱に告ぐ。汝等當に知るべし、諸の煩惱の賊は妄想より生ず。我法王の家に善事の起

ること有らば汝が所爲に非ず。汝宜しく速に出づべし。若し時にいでざれば當に汝が命を斷すべし」と。是の如く告げ已れば諸の煩惱の賊尋いで自ら散ず。次に自身に於て善く防護を起して應に放逸なるべからず。又『菩薩處胎經』の偈に云はく、「彼犯罪の人鉢に滿てる油を擎げ持して、若し油の一滴を棄てば罪大僻に交入せん。左右に伎樂を作せども死を懼れて顧視せざるが如く、菩薩の淨觀を修して意を執ること金剛の如し。毀譽及び惱亂すとも心意傾動せず。空を解して本來淨なれば彼此中間無し」と。二には通じて四句を用て一切の煩惱の根源を推求す。謂く、此煩惱は心に由りて生ずと爲んや。縁に由りて生ずと爲んや共して生ずと爲んや離して生ずと爲んや。若し心に由りて生ぜば更に縁を待たず。或は龜毛兎角に於て應に貪瞋を生ずべし。若し縁に由りて生ぜば應に心を用ひざるべし。或は眠人をして煩惱を生ぜしめん。若し共して生ぜば未だ共せずんば各共の時無し。安んぞ有らん。譬へば二の沙の合すと雖も油無きが如し。或は心境俱に合せば那ぞ煩惱を生ぜざる時有らん。若し離として生ぜば、既に心を離れ縁を離れば、那ぞ忽に煩惱を生ぜん。或は虚空は二を離る。常に應に煩惱を生ずべし。種種に觀察するに、既に實の生無く從來する所無く、亦去る所無し。内に非ず、外に亦中間に非ず。都て處る所無ければ皆幻の如くして有り。唯惑心のみに非ず。觀心も亦爾なり。是の如く推求すれば惑心自ら滅せん。故に『心地觀經』の偈に云はく、「是の如く心法は本有に非ず。凡夫は迷を執して無に非ずと謂ふ。若し能く心の體性の空なるを觀ぜば、惑障生ぜずして便ち解脱

せん。「云云。又『中論』の第一の偈に云はく、「諸法は自より生ぜず、亦他より生ぜず。其にあらず、無因にあらず、是故に無生なり」と知る。」と。應に此偈に依りて多くの四句を用ふべし。三には應に念すべし、今我惑心に具足せる八萬四千の摩勞門は、彼彌陀佛に具足せる八萬四千の波羅蜜門と本來空寂にして一體無礙なり。貪欲即ち是れ道なり。悲癡も亦是の如し。氷と水と性は異處にあらざるが如し。故に經に云はく、「煩惱菩提は體二無ければ生死涅槃も異處に非ず」と云云。我今未だ智火の分あらず。故に煩惱の氷を解いて功德の水と成すこと能はず。願くば佛我を哀愍して其所得の法の如く定慧の力もて莊嚴して、此を以て解脱せしめよ」と。是の如く念じ已りて、聲を擧げて佛を念じて而も救護を請へ。「止觀」に云ふが如し。「人の重を引かんに、自力もて前まず、傍の救助を假れば、則ち輕擧を蒙るが如し。行人も亦爾なり。心弱くして障を排ふ能はず。名を稱して護を請ふに惡縁壞ること能はず」と。已若し惑心を覆うて通別の對治を修せんことを欲せしめずんば須らく其意を知るべし。常に心の師と爲りて心を師とせざれ。「問ふ」若し破戒の者は三昧成ぜずんば、云何が『觀佛經』に此觀佛三昧は是れ一切衆生の犯罪の者の藥、破戒の者の護なりと云ふや。「答ふ」破戒已後に前の罪を滅せんが爲に、一心に佛を念すれば、此が爲に藥と名く。若し常に毀犯せば三昧成じ難し。」

【二】 第五に懺悔衆罪とは、設し煩惱に其心を迷亂せられて禁戒を毀る者は、應に日を過さずして懺悔を營修すべし。「大經」の十九に云ふが如し。「若し罪を覆す者は罪則ち增長

【二】 衆罪を懺悔するを明す。

す。發露懺悔せば罪即ち消滅す」と。又『大論』に云はく、「身口意の惡を悔いずして佛を  
見んと欲せば、是處有ること無し」と。已。懺の法一に非ず。隨樂に之を修せ。或は五體  
を地に投じ遍身に汗を流して彌陀佛に歸命す。眉間の白毫相を念じ、發露涕泣して應に此念  
を作すべし。過去の空王佛の眉間の白毫相は彌陀尊禮敬して罪を滅して今佛を得たり」と。  
我今彌陀佛を禮するに亦當に復是の如くすべし。須らく罪根に隨つて佛光を哀請すべし。  
謂く、檀光を放てば慳蔽の罪を滅し、戒光を放てば毀禁の罪を滅し、忍辱の光を放てば瞋  
恚の罪を滅し、精進の光を放てば懈怠の罪を滅し、禪定の光を放てば散亂の罪を滅し、智  
慧の光を放てば愚惑の罪を滅す。是の如く若は一日若は七日に至りて百千劫の煩惱の重  
障を除かん。或は須臾の間も坐禪入定して佛の白毫を念じ、心をして了了として謬亂の想  
無く、分明に正住し注意して息まざらしめば、九十六億那由他等の劫の生死の罪を除却す。  
或は一心に彼佛の神呪を念ずること一遍せば能く四重五逆を滅し、七遍せば能く根本の罪  
を滅す。儀軌に出。或は復『心地觀經』に理の懺悔を明して云はく、「一切諸の罪性は皆  
如なり。顛倒の因緣妄心より起る。是の如き罪相は本來空にして三世の中に所得無し。内  
に非ず、外に非ず、中間に非ず。性相如如にして俱に動せず眞如の妙理は名言を絶す。唯  
聖智のみ有りて能く通達す。有に非ず無に非ず、有無に非ず有無ならざるに非ず。名相を  
離れ法界に周遍して生滅無し。諸佛は本來同一體なり。唯願くば諸佛加護を垂れ、能く一  
切顛倒の心を滅せよ。願くば我早く眞性の源を悟りて速に如來無上の道を證せん」と。



【大圓鏡】大圓鏡智とも云ふ。三世の一切の諸法恆にこの智の上に現はれて、萬徳圓滿して缺くる所なきをいふ。佛果に於て初めて得る智なり。

問ふ、「眞に佛を觀念するに既に能く罪を滅す。何が故に更に理の懺悔を修するや。」答ふ、「誰か言ふ、一一に之を修せとは、但意樂に隨へ。何に況んや業罪の性空にして所有無しと觀するは、即ち是れ眞實の念佛三昧なり。」「華嚴」の偈に云ふが如し、「現在は和合に非ず。未來も亦復然なり。一切の法の無相なるは、是れ即ち佛の眞體なり。」と。「佛藏經」の念佛品に云はく、「所有無きを見るを名けて念佛と爲す、諸法の實相を見るを名けて念佛と爲す。分別有ること無く、取無く捨無し、是れ眞の念佛なり」と。已。諸餘の空無相等の觀、之に準じて皆應に念佛三昧に攝入すべし。問ふ、「是の如き懺悔に何の勝徳有るや。」答ふ、「心地觀經」の偈に云はく、「在家は能く煩惱の囚を招き、出家も亦清淨戒を破る。若し能く法の如く懺悔せば、所有の煩惱悉く皆除かん。至。懺悔は能く三界の獄を出でん、懺悔は能く菩提の華を開かん。懺悔は能く佛の大圓鏡を見ん、懺悔は能く寶所に至らん。」と。問ふ、「此中に何者か最勝なりとするや。」答ふ、「若し一人に約せば、機に順するを勝れたりと爲す。若し汎爾に判ぜば理懺を勝れたりと爲す。故に「如來祕藏經」の下卷に佛迦葉に告げて言はく、「若し少の不善に、若し其れ堅住し堅執し堅著せば一切我説いて之を名けて犯と爲す。迦葉五無間罪も若し堅住し堅執し堅著して見を生せば、我彼を説いて名けて犯と爲すと曰はず。況んや復餘の少の不善の業道をや。迦葉我不善の法を以てして、而も菩提を得ず。亦善法を以て而も菩提を得ず。至。煩惱は因縁より生ずと解知するを菩提を得と名けん。迦葉云何が因縁より生ずる所の煩惱を解知することを爲さん。是れ自性無くして起

【第一義空】十八  
空の一、第一義とは涅槃のこと、涅槃は凡情の有を離れたるが故に亦空と名く。

る。法は是れ無上の法なりと解知す。是の如く解知するを菩提を得と名けん」と。又『決定毘尼經』に云はく、「大乘の中に於て修行を發起するも、日の初分の時に犯す所の戒有るも、日の中分に於て一切智の心を離れず。是の如く菩薩は或は身壞せず。若し日の中分に犯す所の戒有るも、日の後分に於て一切智の心を離れず。是の如く菩薩は或は身壞せず。乃。若し夜の後分に犯す所の戒有るも、日の初分に於て一切智の心を離れず。是の如く菩薩は或は身壞せず。是義を以ての故に、菩薩乘の人は開遮の戒を持す。設ひ犯す所有るも應に失念し妄に憂悔を生じて自ら其身を惱ますべからず。聲聞乘に於て犯す所有る者、便ち聲聞の淨戒を破壞すと爲す」と云云。一切智の心は餘處の説に準せば、是れ第一義空に相應する心なり。或は是れ佛の種智を願求する心なるべし。「問ふ、「若し懺悔を修するに、能く衆罪を滅せば、云何が『大論』の四十六に「戒律の中の戒は復細微なりと雖も、懺悔すれば即ち清淨なり、十善戒を犯せば復懺悔すと雖も、三惡道の罪除かず」と云ひ、又『十輪經』に「十惡の輪罪を造れば一切の諸佛の救はざる所なり」と説くや。」答ふ、「『觀經』には、「十念能く五逆を滅し」、「觀佛經」には、「佛の一相を念じて能く十惡五逆を滅し」、「大經」には、「閻王殺父の罪を懺除せり」、「般若經」には、「讀誦し解説して能く三界の衆生を殺害するの罪を滅して、惡趣に墮せず」、「華嚴經」には、「普賢の願を誦して一念に能く十惡五逆を滅す」と。明かに知る、大乘の實説は罪を滅せざる無きことを。然も此論文は或は是れ轉重輕受して全く受けざるにあらず。之を除かずと名くるならん。或は是れ隨轉理門

【三乘】菩薩乘、聲聞乘。

の説ならん。又感禪師『十輪經』を會して云はく、「如來の密意は罪を畏れしめん」と欲する等」と云云。餘は下の念佛相門を料簡するが如し。此等は皆是れ別時の懺悔なり。然るに行者常に當に三事を修すべし。『大論』に云ふが如し。『菩薩は必ず須らく晝夜六時に懺悔隨喜勸請の三事を修すべし』と。略。五念門の中の禮拜の次に、應に此事を修すべし。『十住婆娑』の懺悔の偈に云はく、「十方の無量の佛の所知は盡きざること無し。我今悉く前に於て諸の黒惡を發露す。三三合して九種の煩惱より起る。今身若し前身、是罪盡く懺悔す。三惡道の中に於て、若し應に受くべき業報は、願くば今身に於て償ひ、惡道に入りて受けざらん」と。三三合して九種とは身口意に各現生後有り、自作し他をして見しむる。勸請の偈を教へて隨喜作す。業三の煩惱より起る者、三界三毒三品の煩惱なり。勸請の偈に云はく、「十方の一切の佛、現在に成佛する者、我に法輪を轉じて諸の衆生を安樂せんことを請す。十方の一切の佛若し壽命を捨てんと欲せば、我今頭面に禮し勸請して久住せしめん」と。隨喜の偈に云はく、「有ゆる布施の福、持戒修禪の行、身口意より生ず。去來今に有ゆる習行三乘の人三乘を具足する者、一切の凡夫の福皆隨つて歡喜せん」と。已。又常行三昧、法華三昧、眞言教等にも皆各文有り。意に隨つて之を用ふべし。若し略を願はば、彌勒菩薩の『本願經』の一偈に依るべし。經に云はく、「佛阿難に語けたまはく、彌勒菩薩本道を求めし時、耳鼻頭目手足身命珍寶城邑妻子及以國土を持して布施し、人に與へて以て佛道を成ぜず。但善根安樂の行を以て無上正眞の道を致すを得たりと。阿難佛に白さく、彌勒菩薩は何の善根を以てか佛道を致すを得る。佛阿難に語けたま

【三】魔事を對治するを明す。

はく、彌勒菩薩晝夜に各三たび衣を正し體を束ね、手を又へ右の膝を地に著け、十方に向ひ偈を説いて言はく、我一切の過を悔い、衆の道徳を勸明し、歸命して諸佛を禮し無上の慧を得しめんと。佛阿難に語けたまはく、彌勒菩薩は是善根を以て無上正眞の道を得たり」と。上。問ふ、「此懺悔觀請等の事を修せば、幾處の福を得るや。」答ふ、「十住論」

の偈に云はく、「若し一時の中に於て福德形有らば恆河沙世界も乃ち自ら容受せず」と。【二】第六に對治魔事とは、問ふ、「種種の魔事能く正道を障ふ。或は病患を發せしめ、或は觀念を失せしめ、或は邪法を得しむ。謂ゆる若は有の見、若は無の見、若は明了、若は昏闇、若は邪定、若は攀緣、若は悲、若は喜、若は苦、若は樂、若は禍、若は福、若は惡、若は善、若は憎人、若は戀著、若は心強、若は心軟、是く如き等の事、若は過若は不及、皆是れ魔事にして悉く正道を障ふ。何を以てか之を對治せん。」答ふ、「治道多しと雖も、今但應に念佛の一の治に依るべし。此中も亦事理有り。一には事の念とは、言行相應して一心に佛を念する時は、諸の惡魔沮壞すること能はざらん。問ふ、「何が故に壞せざるや。」答ふ、「佛の護念の故に、法の威力の故に、沮壞すること能はず。『大般若』に魔事を對治するに、番番の二法を出すが如し。其中に云はく、「一には所言の如く皆悉く能く作す。二には諸佛の爲に常に護念せらる」と。又『般若經』に云はく、「若し閻叉鬼神、人の禪を壞し人の念を奪はんも、設し是菩薩を中らんと欲せば、終に中ること能はず」と云云。餘は下の利益門の如し。二には理の念とは『止觀』の第八に云ふが如し、「魔界の如、佛界の如、一如に



【三空門】三解脱門ともいふ。解脱を得る三種の方法。空解脱門（萬有の皆空なるを觀ずること）無相解脱門（萬有に差別の事がないしと觀ずること）無作解脱門（無願解脱門ともいふ。前の二門を根柢として、その上に欲求の思を離るること）の稱。

【十二入】十二處に同じ。眼、耳、鼻、舌、身、意の六根と、色、聲、香、味、觸、法の六境をいふ。

して二如無く、平等一如なりと知れば魔を以て威とな爲し、佛を以て欣と爲さずして之を實際に安ず。乃。魔界は即ち佛界なり。而して衆生知らずして佛界に迷うて横に魔界を起し、菩提の中に於て而も煩惱を生ず。是故に悲を起して、衆生をして魔界に於て即ち佛界煩惱に於て即ち菩提ならしめんと欲す。是故に慈悲を起すと。已。應に是念を作すべし、魔界佛界及び自他界同じく空無相なり。此諸法の無相なるは、是れ即ち佛の眞體。當に知るべし、魔界は即ち是れ佛身、亦即ち我身なり。理に無きが故なり。而して諸の衆生は妄想の夢未だ覺めず。一實相を解せずして是非の想を生じ、五道に輪廻せり。願くば衆生をして平等の慧に入らしめんと。是の如く深く無縁の大悲を起し、乃至佛の妙色身を觀すと雖も、三空門に入りて應に執著すべからず。熱金丸の色の妙なりと見ると雖も、手に觸るべからざるが如し。況んや餘事に於て著を生じ慢を生ぜんや。是觀を作す時は魔も沮壞せず。故に「大般若經」にも亦其治を説いて云はく、「一には諸法は皆畢竟空なりと觀す。二には一切有情を棄捨せず」と。又「大論」に云はく、「十二入は皆是れ魔網なり、虛狂にして實ならず、此中に於て六種の識を生ずるも、亦是れ魔網にして虚狂なり。何者か是れ實なる。唯不二の法無く眼無く色無く乃至意無く法無し。等しく是を實と名く。衆生をして十二入を離れしむるが故に、常に種種の因縁を以て是不一の法を説く」と。已。問ふ、「何が故に空を觀ずれば魔便を得ざるや。」答ふ、「彼論に云はく、「一切の法の中に皆著せず、著せざるが故に違錯無し。違錯無きが故に、魔便を得る能はず。譬へば人身に瘡無くば、毒屑の中に臥

【四】總じて要行を釋するを明す。

すと雖も、毒も亦入らず。若し小の瘡有るときは則ち死するが如し」と。又「大集經」の月藏分の中に、他化天の魔王、菩提心を發して記を受け發願して云はく、「我等、現在未來の諸佛の弟子の第一義と相應し仕する者を護念して、供給し供養せん。若し我教に順ぜず行者を惱亂せば、即ち彼類をして種種の病を得て神通を退失せしめん」と。取明かに知んぬ、實の魔も便を得ざるは權魔の護念なるのみ。前の二種の治は皆證據有り。故に更に諸師の釋する所を引かず。」

【四】第七に總結行要とは、問ふ、「上の諸門の中に陳ぶる所既に多けれども、未だ何の業か往生の要たることを知らず。」答ふ、「大菩提心と三業を護ると深く信じ至誠に常に念佛せば、願に隨ひ決定して極樂に生ぜん。況んや復餘の諸の妙行を具するをや。」問ふ、「何が故に此等を往生の要と爲すや。」答ふ、「菩提心の義は前に具に釋するが如し。三業の重惡は能く正道を障ふ。故に須らく之を護るべし。往生の業は念佛を本と爲す。其念佛の心は必ず須らく理の如くすべし。故に深信と至誠と常念との三事を具す。常念に三の益有り、迦才の云ふが如し。一には諸惡の覺觀、畢竟じて生ぜずんば亦業障を消するを得ん。二には善根增長せば亦見佛の因縁を種うるを得ん。三には薰習熟利せば命終の時に臨んで正念現前せん」と。業は願に由りて轉ず。故に隨願往生と云ふ。總じて之を言はば三業を護るは是れ止善なり。佛を稱念するは是れ行善なり。菩提心及び願は此二善を扶助す。故に此等の法を往生の要と爲す。其旨經論に出でたり。之を具にする能はず。」

【五】大別して十門に分つ中、六に別時の念佛を明す初めに尋常の別行を説く。

【五】大文第六に別時念佛とは、二行り。初に尋常の別行を明す。次に臨終の行儀を明す。第一に尋常の別行とは日日の行法に於ては常に勇進すること能はず。故に應に時有りて別時の行を修すべし。或は一二三日乃至七日、或は十日乃至九十日、樂ひに隨つて之を修せ。言ふ所の一日乃至七日とは、導和尚の云はく、「般舟三昧經」に佛跋陀和に告げたまはく、是行法を持ちて便ち三昧を得れば、現在の諸佛悉く前に在りて立せん。其れ比丘比丘尼優婆塞優婆夷有りて、法の如く持戒完具し、獨り一處に西方の阿彌陀佛を正念するに、今現在して彼所聞に隨つて當に念すべし。此を去ること十萬億の佛刹なり、其國をば須摩提と名く。一心に之を念すること一日一夜、若は七日七夜せよ。七日を過ぎて已後に之を見ること譬へば夢中の所見の晝夜を知らず、亦内外を知らず、冥き中に在るに由りて蔽礙する所有るが故に、見ざるには有らざるが如し。跋陀和四衆、常に是念を作さん。時に諸佛の境界の中の諸の大山須彌山、其れ幽冥なる處有りて、悉く門闔するを爲すに、蔽礙する所無けん。是四衆天眼を持して徹し視ず、天耳を持して徹し聽かず、神足を持して其佛刹に到らず。此間にして終りて彼間に生ぜず。便ち此座に於て之を見ん。佛の言はく、四衆此間の國土に於て阿彌陀佛を念するに專念す。故に之を見るを得たり。即ち問ふ、何の法を持してか此國に生ずるを得んと。阿彌陀佛報へて言はく、來生せんと欲せば常に我名を念せよ、休息を得る無くれば即ち來生するを得んと。佛の言はく、專念するが故に往生を得。當に佛身に三十二相八十種好有り、巨億の光明徹照す、端正なること比無し。善

薩、僧の中に在りて法を説くに色を壊ること無し。何を以ての故に。色を壊らざるが故に、  
 佛の色身を念ずるに由るが故に、是三昧を得んと念ずべし。已上は念佛三昧の法を明す。此  
 一覺めて佛を見ずば三昧の道場に入らんと欲せば、時に一ら佛教の方法に依れ。先づ須らく  
 夢中は於て之を見る三昧の道場に入らんと欲せば、時に一ら佛教の方法に依れ。先づ須らく  
 道場を料理し尊像を安置し、香湯もて掃灑すべし。若し佛堂無くして淨房有らば亦掃灑を  
 得たり。法の如く一の佛像を取りて西の壁に安置せよ。行者等、月の一日より八日に至り、  
 或は八日より十五日に至り、或は十五日より二十三日に至り、或は二十三日より三十日に  
 至る。月は別なれども四時佳し。行者等自ら家業の輕重を量りて、此時の中に於て淨行  
 の道に入りて、若は一日乃至七日までは盡く淨衣を須ひよ。鞋鞣も亦須らく新淨すべし。  
 七日の中に皆一食長齋を須ひよ。軟餅饜飯時に隨つて醬菜儉素節量せよ。道場中に於て晝  
 夜に心を束へ、相續して阿彌陀佛を專念す。心と聲と相續せよ。唯坐し唯立して七日の内  
 に睡眠するを得ず。亦須らく時に依りて佛を禮し、經を誦すべからず。珠數をも亦須らく  
 捉るべからず。但し合掌して佛を念すと知れ、念念に見佛の想を作せ。佛の言はく、阿彌  
 陀佛の眞金の色身に光明徹照し端正にして比無し。心眼の前に在りと想念せよ。正しく  
 佛を念する時、若し立すれば即ち立して念すること一萬二萬せよ。若し坐せば即ち坐しな  
 がら念すること一萬二萬せよ。道場の内に於て頭を交へて、竊に語るを得ざれ。晝夜或は  
 三時六時に、諸佛、一切賢聖、天曹地府、一切の業道を表白し、一生已來、身口意業もて  
 造る所の衆罪を發露懺悔せよ。事事實に依りて懺悔し、竟りて還りて法に依りて佛を念す。



【五辛】五つの辛味ある蔬菜。韭、葱、葱、蒜、薑なり。

所見の境界は輒く説くを得ず。善なる者は自ら知れ、悪なる者は懺悔せよ。酒肉五辛は極めて願を發して手に提らず口に齧まず。若し此語に違はば即ち身口俱に惡瘡を著さんと願へ。願くば『阿彌陀經』を誦すること十萬遍を滿てん。日別の念佛は一萬遍、誦經は日別に十五遍せんと。或は二十遍三十遍を誦せんも、力の多少に任せて淨土に生れんと誓ひ、佛の攝受を願ふ。又白さく、諸の行者但今生に日夜に相續して彌陀佛を專念し、『彌陀經』を專誦し、淨土の聖衆莊嚴を稱揚禮讚して、生れんと願はんと欲する者は、三昧道場に入らんを除く。日別に彌陀佛を念すること一萬して命を畢るまで相續せば、即ち彌陀の加念を蒙りて罪障を除くを得ん。又佛と聖衆と常に來りて護念したまふを蒙る。既に護念を蒙らば、即ち年を延べ轉じて長命にして安樂を得ん。因縁一一に具に『譬喻經』『惟無三昧經』『淨度三昧經』等に説くが如し。又『觀佛經』に云はく、「若し諸の比丘比丘尼、若は男女人、四の根本罪、十惡等の罪、五逆罪を犯し、及び大乘を謗らん。是の如く諸人若し能く懺悔すること日夜六時に身心息まずして、五體を地に投ぐるること大山の崩るるが如くし、號泣雨涙し、合掌して佛に向うて、佛の眉間の白毫相の光を念すること一日より七日に至れば、前の四種の罪輕微なるを得べし。白毫の毛を觀するに闇にして見えずんば、應に塔の中に入りて像の肩間の白毫を觀じて一日より三日に至るまで合掌啼泣すべし。已上觀念『大般若』の五百六十八に七日の行を明して云はく、「若し善男子善女人等、心に疑惑無く、七日の中に於て澡浴清淨にして新淨の衣を著、華香もて供養して、一心に前に説く所の

如く如來の功德及び大威神を正念せん。爾時、如來慈悲もて護念し、身を現じて見しめ願  
 をして満足せしめん。若し香華等の事を闕少すること有らば、但一心に功德威神を念ぜよ。  
 將に命終せんとする時に、必ず佛を見たてまつることを得ん」と。已。前の所説の功德等  
 と云ふは、如來は大慈大悲もて說法無礙にして、靜慮の一念に能く無邊類の身を現す。天  
 眼天耳他心智にして失念無し。無漏離垢にして一切法自在平等を得る等の功德威神なり。  
 『大集賢護經』に亦七日の行有り、次の利益の中に説くが如し。又迦才の『淨土論』に云はく、  
 「緯禪師經文を檢得して但能く佛を念ずるに、一心にして亂れず。百萬遍已去を得る者は定  
 めて往生するを得ん」と。又緯禪師『小阿彌陀經』の七日の念佛に依り、百萬遍を檢得す。是  
 故に『大集經』『藥師經』『小阿彌陀經』に皆七日の念佛を勸むる者、此意明なり。已上  
 所の十日の行とは、『鼓音聲經』『平等覺經』に出でたり。次の利益門に至りて、當に知る  
 べし。言ふ所の九十日の行とは、『止觀』の第二に云はく、「常行三昧とは先づ方法を明し  
 次に勤修を明す。方法とは身の開遮、口の説嘿、意の止觀なり。此法は『般舟三昧經』に出  
 でたり。識じて佛立と爲す、佛立に三義有り、一には佛の威力、二には三昧力、三には行  
 者の本功德力なり。能く定中に於て、十方に現在せる佛其前に在りて立ちたまへりを見る  
 こと、明眼の人の清夜に星を觀るが如く、十方の佛を見ることが亦是の如く多し。故に佛立  
 三昧と名く。『十住毘婆沙』の偈に云はく、「是三昧の住處に少と中と多との差別有り。是の  
 如く種種の相亦應に須らく論議すべし。住處とは、或は初禪二三四の中間に於て是勢力を

發して能く三昧を生ず。故に住處と名く。初禪は少なり、二禪は中なり、三四は多なり。或は少時住するを少と名く。或は世界の少を見、或は佛の少を見る。故に少と名く。中多亦是の如し。身に常行を開す。此法を行する時は、惡知識及び癡人親屬の郷里を避けて常に獨り處止し、他人に希望して求索する所有るを得ず。常に乞食して別請を受けず、道場を嚴飾して諸の供具香簡甘果を備へよ。其身を灌沐し左右の出入には衣服を改換せよ。唯専ら行旋して九十日を一期と爲し、須らく師の内外の律に善くして能く妨障を閑除するを明むべし。聞く所の三昧の處に於ては世尊を視るが如く、嫌はず悲らず短長を見ず、當に飢肉を割いても師を供養すべし。況んや復餘をや。師に承事すること僕の大家に奉つるが如くせよ。若し師に於て惡を生せば、是三昧を求むること終に得難し。須らく外護して母の子を養ふが如くせん。須らく同じく行けば共に險を渉るが如くすべし。須らく期を要し誓願すべし。我筋骨をして枯朽せしめんも、是三昧を學んで得ずんば終に休息せず。大信を起して能く壞る者無く、大精進を起して能く及ぶ者無く、所入の智は能く達ぶ者無し。常に善師と從事せよ。三月を終竟るまで世間の想欲を念ふこと彈指の頃の如きも得ず。三月終竟るまで臥出すること彈指の頃の如きも得ず。三月終竟るまで行じて休息するを得ざれ。坐食左右を除いて人の爲に經を説けども衣食を望むを得ざれ。『婆婆』の偈に云はく、

「善知識に親近し、精進して懈怠無く、智慧甚だ堅牢に、信心安に動すること無し。」と。口

【善知識】 正法を説きて人をし、佛道に入らしめ解脱を得しむる人をいふ、高德の賢者のこと。

【三菩提】 聲聞菩  
提、緣覺菩提、諸  
佛菩提。

へて休息すること無かれ。九十日心に常に阿彌陀佛を念じて休息すること無かれ。或は唱  
と念と俱に運ぶ、或は先づ念じ後に唱ふ。或は先づ唱へて後に念ず。唱と念と相續きて休  
息する時無かれ。若し彌陀を唱へば即ち是れ十方佛を唱ふる功德に等し。但専ら彌陀を以  
て法門の主と爲す。要を擧げて之を言はば步步聲念、唯阿彌陀佛に在り。意に止觀を  
論ずとは、西方の阿彌陀佛を念するに、此を去ること十萬億の佛刹なり。寶地、寶池、寶  
樹、寶堂に在し、衆の菩薩の中央に坐して經を説きたまふ。三月常に佛を念ぜよ。云何が  
念ぜん。三十二相を念するなり。足下の千輻輪の相より、一一に逆縁じて諸相乃至無見  
頂を念じ、亦應に頂相より順に縁じて乃至千輻輪まですべし、我亦是相に速ばしめよと。  
又念ぜよ、我當に心より佛を得んか、身より佛を得べきか。佛は心を用ても得ず、心身を  
用ても得ず。心を用て佛色を得ず、色を用て佛心を得ず。何を以ての故に。心ならば佛は  
心無し、色ならば佛に色無し。故に色心を用て三菩提を得ず。佛は色已に盡きたまへり、  
乃至識已に盡きたまへり。佛の説く所の盡とは、是れ癡人は知らず、智者は曉了す。身口  
を用て佛を得ず、智慧を用て佛を得ず。何を以ての故に。智慧は素むるに得べからず、自  
ら我を素むるに了に得べからず、亦見る所無し。一切の法は本より所有無し、本を壊し本  
を絶す。其。夢に七寶を見て親屬歡樂すれども、覺め已りて追念するに何の處に在るかを知  
らざるが如し。是の如く佛を念ぜよ。又舍衛に女有り、須門と名く。之を聞いて心喜ぶ。  
夜事に從うて夢みる。覺め已りて之を念するに、彼も來らず我も往かず。而して樂事宛然



【泥洹】涅槃に同じ。前註。

たるが如し。當に是の如く佛を念すべし。人大澤を行くに、飢渴し美食を得るを夢みる。覺め已りて腹空なるが如し。自ら念す、一切所有の法皆夢の如し。當に是の如く佛を念すべし。數念じて休息するを得る莫れ。是念を用ふれば、當に阿彌陀佛の國に生ずべし。是を如想念と名く。人寶を以て瑠璃の上に倚らば、影其中に現するが如し。亦比丘、骨を觀じて、骨より種種の光を起すが如し。此れ持ち來る者も無く、亦是骨有ること無し。是れ意念なるのみ。鏡中の像の外より來らず中より生ぜず、鏡の淨を以ての故に、自ら其形を見るが如く、行人色清淨なれば所有の者清淨なり。佛を見んと欲せば即ち佛を見る。見れば即ち問ふ。問はば即ち報ふ。經を聞いて大いに歡喜す。其自ら念す、佛は何の所より來る。我亦至る所無し。我念する所即ち見る心、佛と作る心、自ら心を見るは佛心を見るなり。是佛心は是れ我心なり、佛を見る心は自ら心を知らず。心は自ら心を見ず、心に想有らば癡と爲す。心に想無きは是れ泥洹なり。是法は示すべき者無し。皆念の所爲なり。設ひ念有りて亦了に所有無くして空なりと念ふのみ。其三。偈に云はく、「心なる者心を知らず、心有るも心を見ず。心想を起すは即ち癡なり。想無きは即ち泥洹なり。諸佛は心より解脱を得たまふ。心なる者垢無くんば清淨」と名く。五道鮮潔にして色を受けず。此を解ること有る者は大道を成ず。是を佛印と名く。食する所無く著する所無く、求むる所無く想ふ所無し。所有盡き所欲盡きて、從つて生ずる所無く滅すべき所無く、壞敗する所無きは道の要なり、道の本なり。是印は二乘も壞する能はず。何に況んや魔をや」云。『婆娑』に新

【色法の二身】色身とは、肉體のこと。法身とは、無色無形の理佛のこと。

發意はついの菩薩ぼさつを明あやす。先まづ佛ぼつの色相しきさうの相體さうたい相業さうごふ相果さうくわう相用さうりゆうを念わんすれば、下の勢せい力りきを得う。次に佛ぼつの四十しじふ不共ふくう法ほふを念ねんすれば、心しんに中ちゆうの勢せい力りきを得う。次に實相じつさうの佛ぼつを念わんすれば、上の勢せい力りきを得えて色法しきほふの二身にしんに著ちやくせず。偈げに云いはく、「色身しきしんにも貪著せんちやくせず、法身ほふしんにも亦著またちやくせざるは、善ぜんく一切いっさい法ほふは永寂やうじやくにして虚空こくうの如ごとしと知しればなり。」勸修くんしゆとは、若もし人智ひとす慧み大海だいかいの如ごとく能よく我わが爲ために師しと作る無なからしめ、此坐こゝまに於おいて神通じんつうを運こばずして悉ことんく諸佛しよぼつを見み、悉ことんく所説しよとつを聞いて、悉ことんく能よく受持じゆぢするを得えんと欲ほつせば、常に三昧さんまいを行ぎやうぜよ。諸しよの功德くどくに於おて、最もつとも第一だいいちと爲なす。此三昧こゝさんまいは是れ諸佛しよぼつの母はは、佛眼ぼつがんは佛ぼつの父ちち、無生むじやうは大悲だいひの母ははなり。一切いっさい諸しよの如來にょらいは是二このに法ほふより生しやうず。大千だいせんの地ぢ及び草木そうぼくを碎くだきて塵ちんと爲なし、一塵いちぢんを一佛刹いちぶつさつと爲なし、爾世界にわかの中に滿みてる寶たからを用もちて布施ふせし、其福こゝろふく甚ただ多おほきも此三昧こゝさんまいを聞いて驚おどろかず畏おそれざるに如ごとかず。況いはんや信しんじて受持じゆぢし讀誦どくじゆし、人ひとの爲ために説たまかんをや。況いはんや定心ぢやうしんに修習しゆじゆすること牛乳ぎふを講かる頃あひだの如ごとくせん。況いはんや能よく是三昧こゝさんまいを成じやうぜんをや。故ゆゑに量りやう無なく邊へん無なけん。「婆娑婆ぼさば」に云いはく、「劫火ごふくわく官くわん賊怨さくゑん毒龍どくりゆう獸衆じゆうしゆ病びやう、是人こゝのひとを侵おそさば、是處こゝに有あること無なし。此人こゝのひと常に天龍八部てんりゆうはつぱう諸佛しよぼつに皆共みなともに護ご念ごんし稱讚しやうさんせらる。皆共みなともに見みんと欲ほつせば共に其所こゝに來きる。若もし此三昧こゝさんまいの上うへの如ごとき四番しよばんの功德くどくを聞いて皆隨喜みなずいきせば、三世さんぜの諸佛しよぼつ菩薩ぼさつも皆隨喜みなずいきせん。復上またうへの四番しよばんの功德くどくに勝まさる。若もし此こゝの如ごときの法ほふを修しゆせずんば無量むりやうの重寶ぢゆうぼうを失うひ、人天にんてん之これが爲ために憂悲うゑひせん。鬘鼻まんびの人の梅檀ばいだんを把せりて嗅かがざるが如ごとし。田家でんけの子この摩尼珠まにじゆを以もつて一頭いっとうの牛うしに博かへんが如ごとし」と云いふ。四番しよばんの功德くどくは信受しんじゆ、三さんには定心ぢやうしん修しゆ、四しよには能成にやうじやう就じゆなり。

【六】臨終の行儀を明す。

【六】第二に臨終の行儀とは、先づ行事を明し、次に觀念を明す。初に行事とは、「四分律」の鈔、瞻病送終の篇に、中國の本傳を引いて云はく、「祇洹の西北の角の日光の没する處に無常院を爲り、若し病者有れば安置して中に在く。凡そ貪染を生ずるは、本房の内の衣蓋衆具を見て多く戀着を生じ、心に厭背無きを以てなり。故に制して別處に至らしむるなり。堂を無常と號く。來る者は極めて多し、還反するは一ニなり。事に即いて専心に法を念ずることを求めんとして、其堂中に一の立像を置く。金薄もて之に塗り、面を西方に向けたり。其像右手を舉げ、左手の中に一の五綵の幡を繫けて脚を地に垂曳す。當に病者安じて、像の後に在りて左手に幡の脚を執らしめ、佛に従つて佛の淨刹に往くの意を作さしむべし。瞻病の者、香を燒き華を散じて病者を莊嚴す。乃至若し尿尿、吐唾有らば、有るに隨つて之を除く。或は説く、佛像を東に向けて、病者を前に在く」と。別に云はく、若しをして面西に向はしむ。香を燒き華を散じて導和尚の云はく、「行者等、若し病むも病まざらんも、命終せんと欲する時、一ら上の念佛三昧の法に依りて身心に正當し、面を廻らして西に向ひ、心亦專注して阿彌陀佛を觀想し、心口相應して聲聲絶ゆること莫れ。決定して、往生の想、華臺の聖衆來りて迎接するの想を作せ。病人若し前の境を見れば則ち看病の人に向つて説け。既に説を聞き已れば即ち説に依りて録記せよと。又病人若し語ること能はざれば、看病のもの必ず須らく數數病人に問ふべし。何れの境界をか見たてまつる。若し罪の相を説かば、傍人即ち爲に佛を念じて助けて同じく懺悔し、必ず罪をして滅せしめ、

【識】根によりて境を認識する主觀の心をいふ。

若し罪の滅するを得ば、華臺の聖衆念に應じて現前せん。前に準じて鈔記せよ。又行者等の眷屬六親、若し來りて看病せば酒肉五辛を食する人有らしむる勿れ。若し有らば必ず病人の邊に向ふを得ざれ。即ち正念を失うて鬼神交亂し、病人狂死して三惡道に墮つ。願くば行者等好く自ら謹慎して佛教を奉持し、同じく見佛の因縁を作さんことを。上。往生の想、迎接の想を作さば、其理然るべし。『大論』に神變の作意を説いて云ふが如し。「地の相を取ることも多きが故に、水を履むこと地の如し。水の相を取ること多きが故に、地に入ることも水の如し。火の相を取ること多きが故に、身より烟火等を出す」と云。明かに知んぬ、所求の事に於て彼相を取る時に、能く其事を助けて而も成就するを得ば、唯に臨終のみに非ず、尋常之に準ぜよ。綽和尚の云はく、「十念相續は難からざるが若きに似たれども、然れども諸の凡夫の心は野馬の如く、識は猿猴よりも劇しく、六塵に馳騁して何ぞ曾て停息せん。各須らく宜しく信心を致して、豫め自ら剋念し、積習をして性を成じ、善根堅固ならしむべし。佛大王に告げたまふが如し。人は善行を積まば死するるとき惡念無し。樹の先より傾き倒れるるとき、必ず曲れるに隨ふが如し。若し刀風一たび至れば百苦身に漣り、若し習先より在らずんば懷念何ぞ辨すべけん。各宜しく同志のもの三五と、預め言葉を結ばんに、命終の時に臨んで逃ひに相開曉し、爲に彌陀の名號を稱し極樂に生ぜんと願じ、聲聲相次で十念を成さしむべし。上。言ふ所の十念は多釋有り」と雖も、然も一心に十遍南無阿彌陀佛と稱念する之を十念と謂ふ。此義經の文に順ず。餘は下の料簡の如し。次に



臨終の觀念とは善友の同行、其志有らん者佛敎に願ぜんが爲、衆生を利せんが爲、善根の爲、結縁の爲に忠を染め、初より病床に來問して、幸に勸進を垂る。但勸誘の趣は應に人の意に在るべし。今日く自身の爲に其詞を結んで云はく、佛子年來の間、此世界の希望を止めて唯西方の業を修す。中に就て木より期する所、是れ臨終の十念なり。今既に病床に臥す、恐れずんばあるべからず。須らく目を閉ぢて合掌して一心に誓期すべし。佛の相好に非ざるよりは餘の色を見る勿れ。佛の法音に非ざるよりは餘の聲を聞く勿れ。佛の正敎に非ざるよりは餘の事を説く勿れ。往生の事に非ざるよりは餘の事を思ふ勿れ。是の如くして乃至命終の後に寶蓮臺の上に坐して、彌陀佛の後に從つて聖衆に圍遶せられ十萬億の國土を過ぐるの間も亦復是の如くして、餘の境界を緣する勿れ。唯極樂世界の七寶池の中に至り、始めて應に目を舉げ合掌して彌陀の尊容を見、甚深の法音を聞き、諸佛の功德の香を聞き、法喜禪悅の味を嘗め、海會の聖衆を頂禮して普賢の行願に悟入すべし。今十事有り、應當に一心に聽き、一心に念すべし。一一の念毎に疑心を生ずる莫れ。一には先づ應に大乘の實智を發し、生死の由來を知るべし。「大圓覺經」の偈に云ふが如し、「一切の諸の衆生、無始の幻無明は皆諸の如來の圓覺の心より建立す。」と。當に知るべし。生死即ち涅槃、煩惱即ち菩提なり、圓融無礙にして無二無別なり。而して一念の妄心に由りて生死界に入りしより來、無明の病に盲られ久しく本覺の道を忘れたり。但諸法は本來より常に自ら寂滅の相なり。幻の定性無きが如く心に隨つて轉變す。是故に佛子應に三

【圓融無礙】理と事又は事と事、圓かに融通して互に障ふること無きをいふ。

【假有】實有の對  
事物が因縁和合に  
よりて假りに存在  
すること。

寶を念じて邪を離して正に歸すべし。然も佛は是れ醫王、法は是れ良藥、僧は是れ瞻病の人、無明の病を除いて正見の眼を開き、本覺の道を示して淨土に引接する、佛法僧に如くは無し。是故に佛子先づ應に大醫王の想を生じて一心に佛を念すべし。南無三世十方一切諸佛。南無本師釋迦牟尼佛。南無藥師琉璃光佛。三念。南無阿彌陀佛。十念。次に應に妙なる良藥の想を生じて一心に法を念すべし。南無三世佛母摩訶般若波羅蜜。南無平等大慧妙法蓮華經。南無八萬十二一切正法と。次に應に隨逐護念の想を生じて、一心に僧を念すべし。南無觀世音菩薩。南無大勢至菩薩。南無普賢菩薩。南無文殊師利菩薩。南無彌勒菩薩。南無地藏菩薩。南無龍樹菩薩。南無三世十方一切の聖衆、南無極樂界一切の三寶。南無三世十方一切の三寶鐘聲を聞かして正念を増せ、上去りて之に準ぜよ。或は

二には法性は平等なりと雖も、亦假有を離れず。彌陀佛の言ふが如く、「諸法の性は一切空無我なりと通達して、専ら淨佛の土を求む、必ず是の如き利を成せん」と。故に往生淨土の爲に、先づ應に此界を厭離すべし。今此娑婆世界は是れ惡業の所感、衆苦の本源なり。生老病死輪轉際無し。三界の獄縛は一として樂しむべき無し。若し此時に於て此を厭離せざれば、當に何の生に於て輪廻を離るべきや。然るに阿彌陀佛不思議の威力有りて若し一心に稱名すれば、念念の中に八十億劫生死の重罪を滅す。是故に今當に一心に彼佛を念じて此苦界を離るべし。應に是念を作すべし、願くば阿彌陀佛決定して我を拔濟したまへ。南無阿彌陀佛其十念以上の信心の勢盡を見て應に次の事を勸むべし。或は加ふるに二菩薩を稱し、下よりて之に準ぜよ。

【八難】 佛を見ず  
 正法を聞くを得ざ  
 るを難といふ。こ  
 れに八難あり、在  
 地獄の難、在畜生  
 の難、在餓鬼の難  
 此三處は苦劇しく  
 して法を聞くこと  
 を得ず。在長壽天  
 の難、在北鬱單越  
 洲の難、以上二處  
 は樂み多く却つて  
 法を聞くことを得  
 ず、盲聾瘖瘂の難、  
 世智辯聰の難、世  
 智ある處に外に交  
 りて法を聞くこと  
 を得ず。生佛前佛  
 後の難なり。

【三際】 前際（過  
 去）中際（現在）後  
 際（未來）

三には應に淨土を欣求すべし。西方極樂は是れ大乘善根の界、苦無く惱無き處なり。一  
 たび蓮胎に託しなば永く生死を離れ、眼には彌陀の聖容を瞻たてまつり、耳には深妙の尊  
 教を聞く。一切の快樂具足せざる無し。若し人臨終の時に彌陀佛を十念せば、決定して彼  
 安樂國に往生す。佛子、適人身を得、亦佛教に値へり。猶し一眼の龜の浮木の孔に値へる  
 がごとし、若し此時に於て往生を得ず、還りて三途八難の中に墮しなば法を聞くすら尙難  
 し。何に況んや往生をや。故に應に一心に彼佛を稱念すべし。應に是念を作すべし、願く  
 ば佛、今日決定して我を引接し極樂に往生せしめよ。南無阿彌陀佛

四には凡そ彼國に往生せんと欲せば須らく其業を求むべし。彼佛の本願に云ふが如し。  
 「設し我佛を得たらんに、十方の衆生、我名號を聞いて念を我國に係けて諸の徳本を殖ゑ、  
 至心に廻向して我國に生ぜん」と欲せんに、果遂せずんば正覺を取らじ」と。佛子、一生の間  
 偏に西方の業を修して所修の業多しと雖も、期する所は唯極樂なり。今須らく重ねて三際  
 の一切の善根を聚集して、盡く極樂に廻向すべし。應に是念を作すべし、願くば我有ゆ  
 る一切の善根力に由りて今日決定して極樂に往生せしめよ。南無阿彌陀佛

五には又本願に云はく、「設し我佛を得たらんに、十方の衆生、菩提心を發して諸の功  
 徳を修し至心に願を發して我國に生ぜん」と欲せんに、壽終の時に臨んで、假令大衆に圍遶せ  
 られて其人の前に現ぜずんば正覺を取らじ」と。佛子、久しく已に菩提心を發し、及び諸の善  
 根もて極樂に廻向せり。今須らく重ねて菩提心を發して彼佛を念すべし。應に此念を作すべ

し、願くば我一切衆生を利益せんが爲に、今日決定して極樂に往生せしめよ。南無阿彌陀佛

六には既に佛子、本來往生の業を具するを知る。今須らく彌陀如來を專念し、業をして

増盛ならしむべし。然るに彼佛の功德は無量無邊にして具に説くべからず。今十方に現在せ

る各恆河沙等の諸佛、恆常に彼佛の功德を稱讚す。是の如く稱讚すること設ひ恆沙劫を経ん

も終に窮盡すべからず。佛子總じて應に一心に彼佛の功德を歸命すべし。應に念すべし、我

今一念の中に盡くもて彌陀如來の一切の萬徳に歸命す。南無阿彌陀佛

七には佛子應に阿彌陀佛の一切の色相を念じて、心をして一境に住せしむべし。謂く、彼

佛の色身は閻浮檀金の如く、威徳巍巍として金山王の如し。無量の相好、其身を莊嚴す。其

中に眉間の白毫は右に旋り婉轉して須彌の如し。七百五俱胝六百萬の光明、熾然赫奕た

ること億千の日月の如し。是れ即ち無漏萬徳の成就する所、大定智慧の流出する所なり。

須臾の間も此相を憶へば、能く九十六億、那由他、恆河沙、微塵數劫の生死の重罪を滅す。是

故に今當に彼相を憶念せば決定して罪業を滅除すべし。應に此念を作すべし。願くば白毫相

の光我諸の罪を滅せしめよ。南無阿彌陀佛

八には彼白毫相の若干の光明、常に十方世界の念佛の衆生を照して攝取して捨てたまは

す。當に知るべし、大悲の光明決定して來り照すことを『華嚴』の偈に云ふが如し。『又光

明を放つを見佛と名く。彼光命終の者を覺悟す。念佛三昧は必ず佛を見、命終の後佛前

に生ず』と。故に今應に是念を作すべし、願くば彌陀佛、清淨の光を放ちて遙に我心を照



し、我心を覺悟し、境界白體當生の三種の愛を轉じて、念佛三昧成就して極樂に往生することを得しめよ。南無阿彌陀佛

九には彌陀如來は唯に光を以て遙に照すのみに非ず。自ら觀音勢至と常に來りて行者を擁護したまふ。何に況んや父母は病める子に於て其心偏に重し。法性の山を動かして生死の海に入らん。當に知るべし、是時に佛大光明を放ちて諸の聖衆と俱に來りて引接し擁護す。惑障相隔て、見る能はずと雖も大悲の願疑ふべからず。決定して此室に來入したまふことを。故に佛子應に此念を作すべし、願くば佛大光明を放ちて決定して來迎し、極樂に往生せしめよ。南無阿彌陀佛

若し病者の氣力漸漸に羸劣なる時、應に云ふべし、佛觀音勢至、無量の聖衆と俱に來りて寶蓮臺を擎けて佛子を引攝したまふと。以上第七八九條事當應に勸誘す。上には正しく終に臨む時に、應に云ふべし、佛子知るや不や。唯今即ち是れ最後の心なり、臨終の一念は百年の業に勝れたり。若し此刹那を過ぎなば、生るる處應に一定なるべし。今正に是れ其時なり、當に一心に佛を念じて、決定して西方の極樂の微妙なる淨土八功德池の中の七寶蓮臺の上に往生すべし。應に是念を作すべし、如來の本誓は一毫も謬ること無し、願くば佛決定して我を引攝したまへ。南無阿彌陀佛、或は漸漸に略を取りて念に應じ、願くば佛必ず引攝したまへ。彌陀佛、是の如く病者の氣色を瞻、其應する所に隨順して、但一事を以て最後の一念と爲す。衆多なることを得ざれ。其詞の進止殊に意を用ふべし。病者をし

【八功德池】  
清冷、甘美、澄淨、潤澤、安和、除患、増益の八徳水を充滿せる池。

【四重禁】殺生、偷盜、邪淫、妄語の四戒のこと。これら戒は性戒にして、もし犯す時はその罪極めて重きが故に此名あり

て攀縁を生ぜしむる勿れ。問ふ、**三**觀佛三昧經に説くが如し、**四**佛阿難に告げたまはく、若し衆生有りて父を殺し母を害し六親を罵辱す。是罪を作れば命終の時、銅狗口を張りて十**八**車を化す、狀金車の如し。寶蓋上に在り、一切の火焰化して玉女と爲り、罪人遙に見て心に歡喜を生ず。我中に往かんと欲す。風刀解くる時に寒急にして聲を失す。寧ろ好き火を得て車の上に在りて坐せば、火を燃して自ら爆けん。是念を作し已りて即便命終す。揮揮の間に已に金車に坐す。玉女を顧瞻せば、皆鐵の斧を提り其身を折り截る」と。又言はく、「復衆生有りて、**四**重禁を犯し虚しく信施を食し、誹謗邪見にして因果を識らず、般若を學することを斷じ、十方の佛を毀して僧祇物を偷み姪佚無道にして、淨戒の諸の比丘尼姉妹親戚を逼略して慚愧を知らず。親しむ所を毀辱して衆の惡事を造る。此人の罪報は命終の時に臨んで風刀身を解くに偃座定らざること杖楚を被るが如し。其心荒越して癡狂の相を發す。己が室宅を見れば、男女大小の一切皆是れ不淨の物なり。屎尿の臭き處に外に盈流す。爾時、罪人即ち是語を作す。云何が此處に好城廓及び好山林の吾をして遊戯せしむること無くして乃ち此の如く不淨なる物の間に處するや。是語を作し已れば、獄卒羅刹、大鐵叉を以て阿鼻地獄及び諸の刀山を擎げ、化して寶樹及び清涼の池と作り。火焰は化して金葉の蓮華と作る。諸の鐵嘴蟲は化して鳧雁と爲る。地獄の痛聲は詠歌の音の如し。罪人聞き已りて、此の如きの好處に吾當に中に遊ぶべしと、念じ已りて、即時に大蓮華に坐す」と。云。寧ぞ知らん、今日の蓮華の來迎は是れ火華に非ざることを。」

答ふ、『感和尚釋して云はく、「四の義を以ての故に火車に非ざるを知る。一には行を以てし、二には相を以てし、三には語を以てし、四には佛を以てす。此四の義、火車に異なり。一に行を以てすとは、『觀佛三昧經』に説く、「罪人罪を造り、河重禁を犯し、乃至所親を毀辱して悔過を生ぜず。善友の教へて佛を念ぜしむるに遭はざるが故に、見る所の華は是れ地獄の相なり。今此下品等の三人は、復生じてより來罪を造ると雖も、終に善知識に遭うて至心に佛を念す。佛を念するを以ての故に、多劫の罪を滅し、勝れたる功德を成す。寶池の中の華の來迎するを感得す。豈前の華に同じからん。二に相とは、彼經に説く、「風刀身を解くに偃臥定まらず、楚撻を被るが如し。其心荒越にして、狂癡の想を發す。己が室宅男女老少を見れば、一切皆是れ不淨の物なり。屎尿の臭き處に外に盈流す」と。今此は佛を念すれば、身心安穩にして惡想都て滅す。唯聖衆を見、異香有るを聞くが故に類せず。三に語とは、彼經の中に説く、「地獄の痛聲は詠歌の音の如し。罪人聞き已りて、此の如き好處に吾當に中に遊ぶべし」と。『觀佛經』の中に言はく、「善男子を讀めて汝佛名を稱するが故に、諸罪消滅す、我來りて汝を迎ふ」と。彼は是れ詠歌の音なり。此は滅罪の語を陳ぶ。二音既に別なり。故に同じからず。四に佛とは、彼經に、「一切の火焰は化して玉女と爲る、罪人遙に見て心歡喜を生じ、我中に往かんと欲すと。金車に坐し已りて玉女を顧瞻すれば皆鐵の斧を捉りて其身を折截す」と。『觀佛經』に言はく、「爾時、彼佛即ち化佛化觀世音化大勢至を遣はして行者の前に至らん」と。此四義を以て準知するに、蓮華の來迎

は『觀佛三昧經』の説に同じからず」と。看病の人、能く此相を了して、數病者の所有の諸事を問うて、前の行儀に依りて種種に教化す。

往生要集 卷中末 終



# 往生要集 卷下本

天台首楞嚴院沙門 源信撰

【一】大別して十門に分つ中、七に念佛の利益を明す

【二】滅罪生善を明す。

【一】大文第七に念佛の利益を明さば大いに分つて七有り。一には滅罪生善、二には冥得護持、三には現身見佛、四には當來の勝利、五には彌陀の別益、六には例を引いて勸信す、七には惡趣の利益なり。其文各多し、今略して要を擧げん。

【二】第一に滅罪生善とは『觀佛經』の第二に云はく、一時の中に於て分つて少分と爲し、少分の中能く須臾の間も佛の白毫を念じ、心をして了了にし謬亂の想無く、分明に正住して注意息まざらしめて白毫を念ぜん者、若は相好を見、若は見るを得ざらんも、是の如き等の人は九十六億那由他、恆河沙微塵數劫の生死の罪を除却せん。設ひ復人有りて但白毫を聞いて心驚疑せず、歡喜し、信受せん。此人も亦八十億劫の生死の罪を却けんこと。又云はく、佛世を去りて後、三昧正受して佛行を想ふ者は、亦千劫の極重惡業を除かんこと。佛行歩の相は上の助またいと。念方法門の如し。又云はく、佛阿難に告げたまはく、汝今日より如來の語を持して遍く弟子に告げよ。佛滅度の後に好き形像を造り、身相をして足らしめ、亦無量の化佛の色像及び通身の色を作り及び佛の跡を畫き、微妙の絲及び頗梨珠を以て白毫の處に安じ、諸の衆生をして是相を見ることを得しめん。但此相を見て心に歡喜を生ぜば、此人は百億那

【四部の弟子】佛の四種の弟子にして比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷のこと。

【八戒齋】不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒、不坐高廣大床戒、不著花鬘瓔珞戒、不習歌舞戲樂戒の稱。

【須陀洹】聲聞四果の一、三界の見

由他恆河沙劫の生死の罪を除却せん」と。優填王、佛の形像を作る。經に云はく、佛の形像を作ると、佛の功徳無量なり。世世に生ずる所には惡道に墮せず、後に皆無量壽佛の國に生ずることを得て、又云はく、「老女佛を見れども、邪見にして信ぜざるすら猶能く八十萬億劫の生死の罪を除却す。況んや復善意もて恭敬し禮拜せんをや」と。

須達が家の老女の因縁は、又云はく、「諸の凡夫及び四部の弟子、方等經を謗り五逆罪を作り、四重禁を犯し僧祇物を偷み、比丘尼を姪し八戒齋を破り、諸の惡事種種の邪見を作らん。是の如き等の人、若し能く至心に一日一夜繫念して前に在るがごとく、佛如來の一相好を観せば諸惡罪障皆悉く盡滅せん」と。又云はく、「若し佛世尊に歸依する者、若し稱名する者行らば、百千劫の煩惱重障を除く。何に況んや正心に念佛定を修せんをや」と。

『寶積經』の第五に云はく、「寶珠有りて種種色と名くるが如きは、大海の中に在りて無量衆多の駛流大海に入ると雖も珠火の力を以て、水をして銷滅して盈溢せざらしむ。是の如く如來應正等覺の菩提を證し已れば、智火の力に由りて能く衆生の煩惱をして銷滅せしむること亦復是の如し。乃至若し復人有りて日目の中に於て、如來の名號功徳を稱說せん。是諸の衆生は能く黑闇を離れて、漸次に當に諸の煩惱を燒くを得べし。是の如く南無佛と稱念せん者語業は空しからず。是の如きの語業を大炬を執りて能く煩惱を燒くと名けんと」と。

『遺日摩尼經』に云はく、「菩薩は復數千巨億萬劫に愛欲の中に在りて罪の爲に覆はると雖も、若し佛經を聞いて一反だも善を念すれば、罪即ち消盡す」と。已上の諸『大悲經』の第二に云はく、「若し三千大千世界の中に滿てる須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢に若

慈を斷じ盡し、初めて聖者の流類に預り入りし位に於て見道十五心の後十六心、即ち修道に入りたる位なり

【期際會】 聲聞四向の、預流果の對、預流果に在る因道にして、界の見惑八十八使を斷ずる間即ち見道十五心の間をいふ

【阿羅漢會】 四果の九品を講盡したる聖者をいふ、欲界の惑に引かれ再び欲界に還りて生を受くることなきが故に不退果といふ

【阿羅漢】 聲聞四果の、三界の見思の煩惱を斷盡し、盡智、無生智を得て無學位に住し世間の供養を受くるに堪へたる聖者をいふ

【迦羅分】 梵音カラ(Chāra)と譯す、物類又は時間の極めて小なり

し善男子善女人有りて、若は一劫若は減一劫に、諸の種種の稱意の一切の樂具を以て恭敬し尊重し謙下し供養せんも、若し復人有りて諸佛の所に於て但一たび合掌し一たび稱名せんも、是の如きの福德もて前の福德に比すれば百分の一に及ばず、百千億分の二に及ばず、迦羅分の一にも及ばず。何を以ての故に。佛如來は諸の福田の中に最も無上と爲すを以てなり。是故に佛に施せば大功徳を成ず」と。略抄。三千界に滿つる辟支佛「普曜經」の偈に云はく、「一切衆生緣覺を成ぜんに、若し億數劫に飲食、衣服床臥具持香、雜香及び名華を供養すること有らんも、若し一心に十指を叉へ、專心に自ら一如來に歸して、口に自ら南無佛と發言すること有らん。是功徳の福を最上と爲す」と。「般舟經」に念佛三昧を説く偈に云はく、「假使一切皆佛と爲り、聖智清淨慧第一にして、皆億劫に於て其數を過ぐるまで、一偈の功徳を講説し、泥洹に至るまで福を誦詠し、無數億劫に悉く歡誦すとも、其功徳を究盡すること能はず。是に於て三昧一偈の事は、一切の佛國の所有の地、四方四隅及び上下の、中に滿つる珍寶を以て布施し、用て佛天中天に供養せんも、若し是三昧を聞く者有らば、其福祐を得ること彼よりも過ぐ、安諦に諷誦し説講せん者は、譬を引くとも功徳喻ふべからず」と。一の佛刹を破りて塵と爲し、一々の塵を取りて亦碎いて一佛刹のつる珍寶を諸佛に供養す。之を。座敷の如し。此一塵を以て一の佛刹と爲し、若干の佛刹の中に滿つて比と爲す。已上生善なり。度諸佛境界經に説く、「若し諸の衆生如來を緣じて諸行を生ずる者は、無數劫の地獄畜生餓鬼閻羅王の生を斷ず。若し衆生有りて一念だも作意して如來を緣せば、所得の功徳限極有ること無く稱量すべからず。百千億那由他の諸

る部分をいふ。一毛髪を拆きて百分となし、その一分を一歌羅分と稱す

【三】冥得護持を明す。

の大菩薩、悉く不可思議解脱定を得て計校すとも、其邊際を知ること能はず」と。『觀佛經』に説く、「佛阿難に告げたまはく、我涅槃の後に諸天人若し我名を稱し、及び南無諸佛と稱せば、獲る所の福德無量無邊なり。況んや復繫念して諸佛を念する者は、而も諸の障礙を滅除せざらんや」と。已上は滅罪生善なり。其餘は上の正修念佛門の如し。

【三】第二に冥得護持とは、『護身呪經』に云はく、「三十六部の神王に萬億恆沙の鬼神有りて眷屬と爲り、三歸を受くる者を護る」と。『般若經』に云はく、「劫盡壞燒の時、是三昧を持するの菩薩は正使是火中に墮せんも、火即ち滅す。譬へば大甕の水の小火を滅するが如し。佛、跋陀利に告げたまはく、我所語に異り有ること無し。是れ菩薩とは是三昧を持つ。若し帝王若し賊、若し火若し水、若し龍若し蛇、若し閻叉鬼神若し猛獸、乃至。若し人の禪を壞り人の念を奪ふ。設ひ是菩薩に中らんと欲すとも終に申ること能はず。佛の言はく、我所語の如く異ること有る無し。其宿命を除いて其餘能く申る者有る無し。偈に曰はく、鬼神乾陀共に擁護し、諸天人民も亦是の如し。并に阿須倫摩曠勒も、此三昧を行ぜば是の如きを得ん。諸天悉く共に其徳を頌し、天人龍神甄陀羅、諸佛嗟歎し願の如くならしめん。諷誦し説經して人の爲にするが故に、國國相代つて民荒れ亂れ、飢饉荐りに臻りて懷苦の窮るも、終に其命を中天せず。能く此經を誦して人を化する者は、勇猛に諸の魔事を降伏して、心に畏るる所無く毛豎たず、其功德行は議すべからず。此三昧を行ぜば是の如きを得ん」と。十住婆娑に此等の文を引き已り。『十二佛名經』の偈に云はく、「若し



## 【四】 現身見佛を

人佛の名を持すれば、衆魔及び波旬、行住坐臥の處に、其便を得る能はず。」と。

【四】 第三に現身見佛とは「文殊般若經」の下卷に云はく、「佛の云はく、若し善男子善女人、一行三昧に入らんと欲せば、應に空閑に處し、諸の亂意を捨て相敬を取らず、心を一佛に繫け専ら名字を稱し、佛の方所に隨つて端身に正向し、能く一佛に於て念念相續すべし。即ち念の中に於て能く過去未來現在の諸佛を見ん」と。導師師釋して云はく、「衆生障り重ければ觀すとも成就し難し。是を以て大聖悲憐して直に名字を專稱せよと勸む」と。「般若舟經」に云はく、「前に聞かざる所の經卷は、是菩薩是三昧を持する威神もて夢中に悉く自ら其經卷を得、各各悉く見て悉く經の聲を聞かん。若し晝日得ざる者は、若は夜夢中に於て悉く佛を見ることを得ん。佛跋陀和に告げたまはく、若は一劫若は一劫を過ぐるまで我説かんとは菩薩、是三昧を持する者、其功德を盡し竟るべからず。何に況んや能く是三昧を求得する者をや」と。又同經の偈に云はく、「阿彌陀國の菩薩、無央數の百千佛を見るが如く、是三昧を得る菩薩も然り、當に無央百千の佛を見るべし。乃至其れ是三昧を誦受すること有らば、已に面り百千の佛を見ると爲す。假使最後の火恐懼にも此三昧を持すれば畏るる所無し。」と。「念佛三昧經」の第九の偈に云はく、「若し盡く一切の佛、現在未來、及び十方を見んと欲し、或は復妙法輪を轉ぜんことを求めば、亦先に此三昧を修習せよ。」と。「十二佛名經」の偈に云はく、「若し人能く至心に、七日佛の名を誦すれば、清淨の眼を得て、能く無量の佛を見ん。」と。

【五】當來の勝利を明す。

【十二部經】佛、說法の體裁に十二、様あり、長行説、孤起説、無問自説、因縁説、譬喩説、本事説、本生説、方廣説、未曾有説、論議説なり。

【五】第四に當來の勝利とは「華嚴」の偈に云はく、「若し如來の少功德を念じ乃至一念

だも心に專仰せば、諸の惡道の怖れ悉く永く除かん。智眼は此に於て能く深く悟す。」

と。智眼は天王。「般若經」の偈に云はく、「其人終に地獄に墮せず、餓鬼道及び畜生を離れ

んと。世の所生に宿命を識る。是三昧を學べば是の如きを得ん。」と。「觀佛經」に云は

く、「若し衆生有りて一たび佛身に上の如きの功德相好光明有るを聞けば、億億千劫惡道に

墮せず、邪見雜穢の處に生ぜず、常に正見を得て勤修して息まざらん。但佛名を聞くすら

是の如きの福を獲、何に況んや觀佛三昧に繫念せんをや」と。已「安樂集」に云はく、「大

集經」に云はく、諸佛世に出づれば四種の法有りて衆生を度す。何等をか四と爲す。一には

口に十二部經を説くは、即ち是れ法施もて衆生を度するなり。二には諸佛如來は無量の光

明相好有り、一切衆生但能く繫心し觀察すれば益を獲ざる無し。即ち是れ身業もて衆生を

度するなり。三には無量の徳用神通道力種種の神變有り。即ち是れ神通道力もて衆生を度

するなり。四には諸佛如來は無量の名號有り。若は總若は別、其れ衆生有りて繫心に稱念

すれば障を除き益を獲ざる莫く、皆佛前に生ぜん。即ち是れ名號もて衆生を度するなり。」

云云。有が云はく、「正法念經」にも此文有り。云。「十二佛名經」の偈に云はく、「若

し人佛名を持して怯弱の心を生ぜず、智慧有りて詔曲無くんば常に諸佛の前に在らん。若し

人佛の名を持せば、寶華の中に生じ、其華は千億葉にして威光の相具足せん。」と。諸文は

永く惡趣を離れて淨。「觀佛經」に云はく、「若し能く至心にして繫念内に在りて端坐正受し

土に往生するなり。」

佛の色身を觀せん。當に知るべし、是人の心は佛心の如く佛と異なること無し。煩惱有り  
 と雖も諸惡の爲に之れ覆蔽せられずして、未來世に於て大法の雨を雨らす」と。『大集念佛三昧  
 經』の第七に云はく、「當に知るべし、是の如きの念佛三昧は即ち一切の諸法を總攝すと爲  
 す。是故に彼聲聞緣覺二乘の境界に非ず。若し人暫くも此法を説くを聞かば、是人は當來  
 に決定して成佛す。疑ひ有ること無し」と。同經の第九に云はく、「但能く耳に此三昧の名を  
 聞かば、假令讀まず誦せず持たず修せず習はず他の爲に轉ぜず他の爲に説かず。亦  
 復廣く分別して釋すること能はざらん。然れども彼諸の善男子善女人、皆當に次第に阿  
 耨菩提を成就すべし」と。同經の偈に云はく、「諸の妙相を圓滿し、衆の妙上の莊嚴を  
 具足せんと欲し、及び清淨の家に轉生せんことを求めば、必ず先に此三昧を受持せよ」  
 と。又有經に言はく、「若し佛の福田に於て能く少分の善を殖うれば、初に勝善趣を獲て後  
 には必ず涅槃を得ん」と。『大般若經』に云はく、「佛を敬憶するに依りて、必ず生死を出で  
 涅槃に至るまで、此を置いて乃至佛を供養せんが爲に、一華を以て虚空に散するも亦是の  
 如し。又此を置いて、若し善男子善女人等より下は一たび南無佛陀大慈悲者と稱するに至  
 るまで、是善男子善女人等は生死の際を窮めんまで善根盡くること無く、天人中に於て恆  
 に富樂を受け、乃至最後に般涅槃を得ん」と。略抄す、大悲經第『寶積經』に云はく、「若し  
 衆生有りて如來の所に於て微善をも起す者は、苦際を盡すまで畢竟じて壞せず」と。又云  
 はく、「若し菩薩有りて、勝意樂を以て能く我所に於て父の想を起さば、彼人は當に如來の

【正遍知海】佛の十號の一、偏は正理を窮め盡して知

數に入りて、我如く異なる無きを得べし」と。『十二佛名經』の偈に云はく、「若し人佛の名を持すれば、世世所生の處に身通もて虚空に遊び、能く無邊の刹に至り、而り諸佛を觀て能く甚深の義を問ひ、乃至。爲に微妙の法を説き、彼菩提の記を授く」と。『法華經』の偈に云はく、「若し人散亂の心もて塔廟の中に入り、一たび南無佛と稱すれば皆已に佛道を成す」と。『大悲經』の第三に佛阿難に告げたまはく、「若し衆生有りて佛の名を聞く者は、我説く、是人は畢定して當に般涅槃に入るを得べし」と。『華嚴經』の法幢菩薩の偈に云はく、「若し諸の衆生有りて未だ菩提心を發さず、一たび佛の名を聞くを得れば、決定して菩提を成ぜん」と。但上の語文は菩提を得るなり。但名號を聞く勝利すら是の如し、況んや暫くも相好功德を觀念し、或は復一華一香を供養せんをや。況んや一生勤修するをや。功德終に虚しからず。則ち知る、佛法に値ひ佛號を聞くは是れ少緣に非ざるを。是故に『華嚴經』の眞實慧菩薩の偈に云はく、「寧ろ地獄の苦を受くとも諸佛の名を聞くを得ん。無量の樂を受くとも而も佛名を聞かずんばあらず」と。已上の四門は總じて諸佛を念ずるの利益を明す。其中觀佛經は釋迦を以て首と爲す、般舟經は多く彌陀を以て首と爲す。念佛經には三世佛に通ず。問ふ、『觀佛經』に云はく、「是人心は佛心の如く佛と異なる無し」と。又『觀經』に云はく、「佛阿難に告げたまはく、諸佛は是れ法界の身に於て一切衆生の心想の中に入る。是故に汝等心に佛を想ふ時は是心即ち是れ三十二相八十隨形好なり。是心佛と作れば是心是れ佛なり。諸佛の正遍知海は心想より生ず」と。已上。此義云何。答ふ、『往生論』の智光の疏に此文を釋して云はく、「衆生の心に佛を想ふ時に當つて佛の



らざることなきが故に正遍知の名あり、而してこれを海水に喩へたり。

身相は皆衆生の心中に顯現す。譬へば水清ければ即ち色像現じて水と像と一ならず、異ならざるが如し。故に佛の相好身は即ち是れ心想なりと言ふ。是心作佛とは心能く佛と作るなり。是心是れ佛とは心の外に佛無きなり。譬へば火は木より出でて木を離るるを得ず。木を離れざるを以ての故に即ち能く燒け、木は火の爲に燒かるるときは木即ち是れ火なるが如し。已。亦餘の釋有り、學者更に勘へよ、私に云はく、『大集經』の口藏分に云はく、「行者是念を作せ、是等の諸佛は從來する所無く去るに至る所無し。唯我心の作なり。三界の中に於て是れ身の因縁は唯是れ心の作なり。我覺觀に隨つて多を欲せば多を見る、小を欲すれば小を見る。諸佛如來は即ち是れ我心なり。何を以ての故に。心に隨つて見るが故に。心即ち我身なり、即ち是れ虚空なり。我覺觀に因りて無量の佛を見る。我覺心を以て佛を見る。佛を知る心は心を見るに非ず。心は心を知るに非ず。我法界は性に牢固無しと觀ず。一切の諸佛は皆覺觀の因縁より而も生ず。是故に法性なり、即ち是れ虚空なり、虚空の性も亦復是れ空なり」と。此の意、『觀經』に同じ。光師の釋も亦違ふこと無し。問ふ、「心佛と作ると知れば何の勝利か有る。」答ふ、「若し此理を觀せば能く三世の一切の佛法を了り、乃至一たび聞けば即ち三途の苦難を解脱するを得ん。『華嚴經』の如來菩薩の偈に云ふが如し。『若し人三世一切の佛を知るを求めんと欲せば、應當に是の如く觀ずべし、心に諸の如來を造る。』」と。『華嚴傳』に曰はく、「文明元年、京師の人、姓は王、其名を失す。既に戒行無く會て善を修せず。患に因りて死を致し、二人に引れて地獄の門前

【六】 彌陀を念ずる利益を明す。

【必苾芻尼】 比丘比丘尼に同じ。

往生要集卷下本

に至り、一偈有るを見る。云はく、是れ地藏菩薩なりと、乃ち王氏をして此一偈を誦せしむ。之に謂て曰はく、此偈を誦得すれば、能く地獄を排はんと。王氏遂に入りて閻羅王を見る。王此人に問ふ、功徳有りやと。答へて云ふ、唯我一の四句の偈を受持すと。具に上の説の如くすれば、王遂に放免す。此偈を誦する時に當りて、聲の所及の處に、苦を受くる人は皆解脱を得たり。王氏三口有りて始めて蘇り、此偈を憶持して、諸の沙門に向つて之を説く。偈文を示驗すれば、方に知んぬ、是れ『華嚴經』の第十二卷夜摩天宮無量諸菩薩雲集說法品に有り。王氏自ら空觀寺の僧、定法師に向うて説き然なりと云ふ」と。略抄。

【六】 第五に彌陀を念ずる利益とは、行者其心をして決定せしめんが爲の故に別して之を明す。滅罪生善、冥得護念、現身見佛、將來勝利。次の如し。『觀經』像想の觀に云はく、「是觀を作す者は、無量億劫生死の罪を除いて現身の中に於て念佛三昧を得ん」と。又云はく、「但佛名二菩薩の名を聞くすら無量劫の生死の罪を除く。何に況んや憶念せんをや」と。又云はく、「但佛像を想ふすら無量の福を得ん。況んや復佛の具足の身想を觀ぜんをや」と。『阿彌陀思惟經』に云はく、「若し轉輪王の千萬歳の中に、四天下に滿つる七寶もて十方の諸佛に布施せんも、苾芻、苾芻尼、優婆塞、優婆夷等の一たび彈指の頃も坐禪して、平等心を以て一切衆生を憐愍し、阿彌陀佛の功徳を念ぜんには如かず」と。生善なり。『稱讚淨土經』に云はく、「或は善男子或は善女人、無量壽の極樂世界清淨佛土の功徳莊嚴に於て、若は已に發願し、若は當に發願すべく、若は今發願せん。必ず是の如くんば十方面に住せる十莖伽沙の諸佛世尊に攝

受せらるることを爲さん。説の如く行する者は、一切定めて阿耨菩提に於て不退轉を得ん。一切定めて無量壽佛の極樂世界に生ぜん」と。『觀經』に云はく、「光明遍く十方世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず」と。又云はく、「無量壽佛の化身無數にして、觀世音大勢至と與に常に此行人の所に來至す」と。『十往生經』に釋尊阿彌陀佛の功德國土の莊嚴等を説き已りて云はく、「清信士清信女、是經を讀誦し、是經を流布し、是經を恭敬し、是經を謗らず、是經を信樂し、此經を供養し、是の如きの人輩は是信敬に緣りて我今日より常に前の二十五の菩薩をして是人を護持せしめん。常に是人をして病無く惱無く、惡鬼惡神も亦中害せず、亦之を惱さず、亦便を得ざらしめん」と。已上乃至睡寤行住所至の處、唐土の諸師の云はく、「二十五の菩薩は阿彌陀佛を念じて往生を願ふ者を擁護す」と。此も亦彼經意に違せざるなり。在菩薩。師子吼菩薩。陀羅尼菩薩。虛空藏菩薩。德藏菩薩。寶藏菩薩。法白藏菩薩。金剛藏菩薩。光明王菩薩。山海慧菩薩。華嚴王菩薩。衆寶王菩薩。月光王菩薩。日照王。雙菩薩。三昧王菩薩。定自在王菩薩。大自在王菩薩。白象王菩薩。大威德王菩薩。無邊身菩薩なり。『雙觀經』に彼佛の本願に云はく、「諸天人、我名字を聞いて五體を地に投じて稽首して禮を作し、歡喜信樂して菩薩の行を修すれば、諸天人敬を致さざる無し。若し爾らずば正覺を取らじ」と。已上は冥得。『大集經』の賢護分に云はく、「善男子善女人、端坐し繫念し、專心に彼阿彌陀如來應供等正覺を想ひ、是の如きは相好なり、是の如きは威儀なり、是の如きは大眾なり、是の如きは說法なりと、聞くが如く繫念し、一心に相續し、次第亂せずして或は一日を經、或は復一夜も是の如くにして、或は七日七夜に至らん。我所聞の如く、

【重障】五逆罪を犯せし人。  
【鈍根の人】智慧徳行の鈍きもの。

具足して念ずるが故に、是人は必ず阿彌陀如来應供等正覺を覩ん。若し晝の時に於て見る  
こと能はずんば、若は夜分に於て或は夢中に阿彌陀佛必ず當に現すべし」と。『觀經』に云  
はく、「眉間の白毫を見る者は、八萬四千の相好も自然に當に見るべし。無量壽佛を見る者  
は、即ち十方無量の諸佛を見る。無量の諸佛を見ることを得るが故に、諸佛現前して授記  
す、是を過く一切色相を觀ずと爲す」と。佛なり。『鼓音聲王經』に云はく、「十日十夜六時  
に專念し、五體を地に投じて、彼佛を禮敬し、正念を堅固にせば、悉く散亂を除かん。若し  
能く念心念念に絶えざらしめば、十日の中に必ず彼阿彌陀佛を見、并に十方世界の如来及  
び所住の處を見るを得ん。唯重障と鈍根の人を除く。今少時に於て觀ること能はざる所な  
り。一切の諸善皆悉く廻向して安樂世界に往生するを得んと願はば、終に垂とするの  
日は、阿彌陀佛諸の大衆と與に其人の前に現し、安愈し稱善せん。是人即時に甚だ慶悅  
を生ず。是因縁を以て其所願の如く即ち往生を得ん」と。『平等覺經』に云はく、「佛の言  
はく、要す當に齋戒し、一心清淨にして晝夜に常に念じ、無量清淨佛の國に生ぜんと欲す  
べし。十日十夜斷絶せずんば、我皆之を慈愍して、悉く無量清淨佛の國に生せしめん」  
と。乃至一日一夜も亦是の如し。或は此文「雙觀經」の偈に云はく、「其佛の本願力は、名を  
聞いて往生せんと欲すれば、皆悉く彼國に到りて自ら不退轉に致る」と。『觀經』に  
「下品上生の人、命終の時に臨んで合掌叉手して南無阿彌陀佛と稱す。佛名を稱するが  
故に、五十億劫の生死の罪を除き、化佛の後に從つて寶池の中に生ぜん」と。「同品の中生



【不退轉】 佛道修行の過程に於て既に得たる功德を既に失して退失すること無きをいふ。

【七】 例を引いて勸信するを明す。

【毘婆尸佛】 過去七佛の第一。七佛は毘婆尸佛。尸棄佛。毘舍浮佛。(過去莊嚴劫の三佛)拘留孫佛。俱那含牟尼佛。迦葉佛。釋迦牟尼佛。(以上現在賢劫中の四

の人は、命終の時に臨んで地獄の猛火一時に俱に至らんに、彌陀佛の十力威德光明神力戒定慧、解脫知見を聞けば、八十億劫生死の罪を除き、地獄の猛火化して清涼の風と爲り、諸の天華を吹き華上に皆化佛菩薩有りて、此人を迎接して即ち往生を得ん」と。「同品の下生の人は命終の時に臨んで苦逼して佛を念ずること能はず、善友の教に隨つて但至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具足して南無無量壽佛と稱せしむ、佛名を稱するが故に、念念の中に於て、八十億劫生死の罪を除いて、一念の頃の如く即ち往生を得ん」と。「雙觀經」に彼佛の本願に云はく、「諸佛世界の衆生の類、我名字を聞いて菩薩の無生法忍、諸の深總持を得ずんば、正覺を取らじ。他方の國土の諸の菩薩衆、我名字を聞かんに即ち不退轉に至ることを得ずんば正覺を取らじ」と。「觀經」に云はく、「若し佛を念ずる者は當に知るべし、此人は是れ人中の芬陀利華なり。觀世音菩薩大勢至菩薩、其勝友と爲りて當に道場に坐し、諸の佛家に生ずべし」と。已上は將來の勝利、餘は當に道場に坐し、諸の佛家に生ずべし」と。上の別時念佛門の如し。

【七】 第六に例を引いて勸信すとは、「觀佛經」の第三に、佛諸の釋子に告げて言はく、「毘婆尸佛の像法の中に一りの長者有りき、名けて月徳と曰ふ。五百の子有り、同じく重病に遇ふ。父子の前に到りて涕淚し、合掌して諸子に語りて言はく、汝等邪見にして正法を信ぜずんば今無常の刀もて汝の身を截切す。何をか所怙と爲さん。佛世尊有り、毘婆尸と名く。汝佛と稱すべしと。諸子聞き已りて、其父を敬ふが故に、南無佛と稱す。父復告げて言はく、汝法を稱すべし、汝僧を稱すべし。未だ三稱に及ばざるに、其子命終す。

佛の稱皆既に入滅し給ひしが故に過去七佛と云ふ。

佛と稱するを以ての故に、四天王所に生ず。天上の壽盡きぬ。前の邪見の業もて大地獄に墮し、獄卒羅刹鐵の杵を以て其眼を刺壞す。是苦を受くる時に、父の長者の教誨せし所の事を憶して念佛するを以ての故に、還りて人中に生ず。尸棄佛出でぬるに、但佛名を聞いて佛形を視ず、乃至迦葉佛の時も亦其名を聞く。六佛の名を聞く因縁を以ての故に我と同じく生ず。是諸の比丘は前世の時に悪心を以ての故に、佛の正法を謗り、但父の爲の故に南無佛と稱せしに、生生に常に諸佛の名を聞くを得たり。乃至今の世には我出でたるに値遇して諸障除けるが故に、阿羅漢を成ず」と。又云はく、「燃燈佛の末法の中に一りの羅漢有り。其に千の弟子有り、羅漢の説を聞いて心に瞋恨を生じ、諍の脩短に隨うて各命終せんと欲す。羅漢教へて南無諸佛と稱せしむ。既に佛を稱し已りて、初利天に生ずるを得たり。乃至未來世に於て當に作佛して南無光照と號するを得べし」と。第七卷に文殊自ら過去の寶威德佛に値遇し禮拜せしを説く。爾時、釋迦文佛讚じて言はく、「善哉善哉、文殊師利。乃ち昔の時に於て一たび佛を禮するが故に、爾許の無數の諸佛に値ふを得たり。何に況んや未來に我諸の弟子勤めて佛を觀ぜん者をや」と。佛阿難に勸したまはく、「汝文殊師利の語を持して遍く大衆及び未來世の衆生に告げよ。若し能く禮拜せん者、若し能く佛を念ぜん者、若し能く佛を觀ぜん者は、當に知るべし、此人は文殊師利と等しくして異なること有る無し。身を他世に捨つれば文殊師利等の諸の大菩薩其和上とならん」と。又云はく、「時に十方の佛來りて跏趺して坐す、東方の善德佛大衆に告げて言はく、我過去の

無量世を念ふに、時に佛出世して寶威德上王と號くる有り。時に比丘有りて九の弟子と與  
 に佛塔に往詣して佛像を禮拜し、一の寶像の嚴顯にして觀すべきを見る。禮し已りて諦か  
 に視て、偈を説いて讚歎す。後の時に命終して、悉く東方の寶威德上王佛の國に生じ、大  
 蓮華中に結跏趺坐し、忽然として化生す。此より已後、恆に佛に值ふを得て、諸佛の所に  
 於て梵行を淨修して念佛三昧を得たり。三昧を得已りて佛に授記せられ、十方面に於て各  
 成佛を得たり。東方の善德佛は則ち我身是なり。東南方の無憂德佛、南方の梅檀德佛、西  
 南方の寶施佛、西方の無量明佛、西北方の華德佛、北方の相德佛、東北方の三乘行佛、  
 上方の廣衆德佛、下方の明德佛、是の如き十佛過去に塔を禮し像を觀じて、一偈もて讚歎  
 せしに由りて、今十方に於て各成佛を得たりと。是語を説き已りて釋迦文佛に問訊し、  
 既に問訊し已りて、大光明を放ちて各本國に還ると。又云はく、「四佛世尊、空より  
 而も下りて、釋迦文佛の床に坐し、讚じて言はく、善哉善哉、乃ち能く未來の時に於  
 て、濁惡の衆生の爲に三世の佛白毫の光相を説き、諸の衆生をして罪咎を滅するを得しむ。  
 所以は何ん。念ふに我昔曾、空王佛の所に出家して道を學せし時、四比丘有り、共に同學  
 と爲り、佛の正法を習へども、煩惱心を覆ひて堅く佛法の寶藏を持する能はず。不善の業多  
 ければ當に惡道に墮すべきに、空中に聲有りて比丘に語りて言はく、空王如來は涅槃に復  
 すれば汝が所犯は救ふ者無しと謂ふと雖も、汝等今塔に入りて像を觀ること、佛の在世と  
 等しく異り有ること無かるべしと。我空の聲に従つて塔に入り、像の眉間の白毫を觀じて

即ち是念を作す。「如來在世の光明色身は此と何ぞ異らん。佛の大人相、願くば我罪を除  
 け」と。是語を作し已りて大山の崩るるが如く五體を地に投じて諸罪を懺悔す。是より已後  
 八十億阿僧祇劫にも惡道に墮せず、生生に常に十方の諸佛を見る。諸佛の所に於て甚深の念  
 佛三昧を受持し、三昧を得已りて諸佛現前して我に記別を授く。東方の妙喜國の阿闍佛は  
 即ち第一の比丘是なり。南方歡喜國の寶相佛は即ち第二の比丘是なり。西方極樂國の無量  
 壽佛は第三の比丘是なり。北方の蓮華莊嚴國の微妙聲佛は第四の比丘是なり。時に四如來  
 各右手を中べて阿難の頂を摩し告げて言はく、「汝佛語を持して廣く未來の諸の衆生  
 の爲に説け」と。三たび此を説き已りて各光明を放ち、本國に還歸すと。又云はく、「財首  
 菩薩、佛に白して言さく、世尊我過去の無量世を念ふに、時に佛世尊有り、亦釋迦牟尼と  
 名く。彼佛の滅後に一りの王子有り、名けて金幢と曰ふ、憍慢邪見にして正法を信ぜず。  
 知識の比丘有り、定自在と名く。王子に告げて言はく、世の佛像の衆寶嚴飾せる有り、暫  
 く塔に入りて佛の形像を観るべしと。時に彼王子、善友の教に隨つて塔に入り像を観る。  
 像の相好を見て比丘に白して言さく、佛像の端嚴なること猶尙し此の如し、況んや佛の眞  
 身をや。比丘告げて言はく、汝今像を見て禮する能はずんば、當に南無佛と稱すべしと。  
 是時、王子合掌し恭敬して南無佛と稱す。宮に還れども繫念して塔中の像を念す。即ち後夜  
 に於て夢に佛像を見る。佛像を見るが故に心大いに歡喜して邪見を捨離し、三寶に歸依す。  
 隨つて壽命終る前に、塔に入りて南無佛と稱せし因緣功德に由りて、九百萬億那由佗の佛



に値うて甚深の念佛三昧を速得す。三昧力の故に諸佛現前して其が爲に授記す。是より已來百萬阿僧祇劫にも惡道に墮せずして、乃至今日甚深の首楞嚴三昧を獲得す。爾時の王子は今我財首是なり」と。又云はく、「佛の言はく、我賢劫の諸の菩薩と與に、曾し過去の梅檀窟佛の所に於て、是諸佛色身の變化の觀佛三昧海を聞けり。是因縁の功德力を以ての故に、九百萬億阿僧祇劫の生死の罪を超越し、此賢劫に於て次第に成佛す。乃至是の如く十方の無量の諸佛は皆此法に由りて三菩提を成ず」と。『迦葉經』に云はく、「昔過去久遠の阿僧祇劫に佛の出世有り、號して光明と曰ふ。入涅槃の後に一の比丘有り、白疊の上に於て佛の年始めて十六、婆羅門種なり、端正なること比無し。一の比丘有り、白疊の上に於て佛の形像を畫き、持して精進に與ふ。精進、像を見て心大いに歡喜し、是の如きの言を作す。如來の形像は妙好なること乃し爾なり。況んや復佛身をや。願くば我未來に亦是の如き妙身を成就するを得んと。言ひ已りて思念す。我若し家に在らば此身得ること叵しと。即ち父母に啓して哀を求めて出家せんと。父母答へて言はく、我今年老いたり、唯汝は一子なり、汝若し出家せば我等當に死すべし。子父母に白さく、若し我を聽さずんば、我今日より飲せず食せず床座に昇らず亦言說せずと。是誓を作し已りて、一日食せずして、乃ち六日に至る。父母知識八萬四千の諸の姪女等、同時に悲泣して大精進を禮し尋で出家を聽す。既に出家を得れば像を持して山に入り、草を取りて座と爲し、畫像の前に在りて結跏趺坐して、一心に此畫像を諦觀す、如來に異ならず。像は覺に非ず知に非ず、一切の諸法

【四無量】四無量心をいふ。慈、悲、喜、捨の四無量心は利他の廣大心なるが故に名く。

【泥黎】奈落到同じ。地獄のこと。

も亦復是の如し。無相離相體性空寂なりと。是觀を作し已りて、日夜を經て五通を成就し、四無量を具足し、無礙辨を得、普光三昧を得て大光明を具せり。淨天眼を以ては東方の阿僧祇の佛を見、淨天耳を以ては佛の所説を聞いて悉く能く聽受し、七月を満足し、智を以て食とすれば一切諸天に散華供養せらる。山より出でて村落に來至して人の爲に説法す。二萬の衆生は菩提心を發し、無量阿僧祇の人は聲聞緣覺の功徳に住す。父母親眷は皆不退無上菩提に住せり。佛迦葉に告げたまはく、昔の大精進は今我身是なり。此れ像を觀するに由りて今成佛を得たり。若し人有りて、能く此の如きの觀を學せば未來必ず當に無上道を成ずべし」と。『譬喻經』の第二に云はく、一昔し比丘有り、其母を度せんと欲するに母已に命過す。便ち道眼を以て天上人中、獮豨薜荔の中に求索するに、了に之を見ず、泥黎を觀れば母中に在りて凄惋し悲哀して廣く方便を求むるを見て、其苦を脱かんと欲す時に邊境に王有り、父を害し國を奪へりと。比丘此王の命の餘ること七日有りて、罪を受くるの地は比丘の母と同じく一處に在るを知り、夜安靖なる時に王の寢殿處に到り、壁を穿ちて半身を現す。王怖れて刀を投じて頭を斫る。頭即ち地に落つ、其處故の如し。之を斫ること數反すれば化せる頭地に滿ち、比丘は動ぜず。王の意に即ち其非常なることを解知して、頭を叩いて過を謝す。比丘の言はく、恐るる莫れ。怖るる莫れ。相度せんと欲するのみ。汝父を害して國を奪ふや不や。對へて曰はく、實に爾り、願くば慈救せられよ。比丘の曰はく、大功徳を作すとも恐くは相及ばざらん。王當に南無佛と稱すること七日し

て絶えずんば便ち罪を免るを得べしと。重ねて之に告げて曰はく、愼んで此法を忘るる莫れと。即便飛び去りぬ。王便ち手を叉し、一心に南無佛と稱説すること晝夜解らず、七日にして命終す。魂神泥黎の門に向つて南無佛と稱す。泥黎中の人、佛の音聲を聞いて皆一時に南無佛と言ふ。泥黎即ち冷めぬ。比丘爲に法を説き、比丘の母、王及び泥黎の中の人皆度脱を得、後大いに精進して須陀洹道を得」と。已上の語文は「優婆塞戒經」に云はく、「善男子我本往し邪見の家に墮し、惑網もて我より我を蓋ふ。爾時に於て名を廣利と曰ひき。妻は名女なり、精進勇猛にして度脱すること無量なり。十善もて化導す。我爾時に於て心に殺獵を生じ酒肉を貪嗜し、懶墮懈怠なれば精進すること能はず。妻時に我に語り、其獵殺を止め、戒めて酒肉を斷じ精進を勤加せば、地獄の苦惱の患を脱して天宮に上生し、與に一處なるを得んと。我爾時に於て殺心止まず、酒肉美味割捨する能はず、精進の心懶墮にして前まず、天宮に意を息すむれども地獄を分受す。我爾時に於て聚落の内に居せども俯伽藍に近いて數槌鐘を聞く。妻我に語りて言はく、事事槌鐘の聲を聞く能はずんば、俯伽藍に近いて數槌鐘を聞く。妻我に語りて言はく、事事槌鐘の聲を聞く能はずんば、三たび彈指し一たび佛を稱し、身を斂めて自ら恭しく橋慢を生ずる莫れ。其夜半の如きも此法を廢する莫れと。我即ち之を用て復捨失すること無く十二年を経たり。其妻命終して初利天に生ず。却りて後三年我も亦壽盡す、斷事に經至りぬれば我を判じて罪に入れ、地獄の門に向はしむ。門に入る時に當り、鐘の三聲を聞いて我即ち住立し、心に歡喜を生じ愛樂して厭はず。法の如く三たび彈指し長聲に佛を唱す。聲皆慈悲なれば梵音朗徹す。

【俯伽藍】佛弟子相集りて道を修むる處。寺院のこと

主事聞きじりて心甚だ愧感す。此眞の菩薩なり。云何が錯りて判すと。即ち遣追し、還りて天上に送往す。既に往き到り已りて五體を地に投じ、我妻を禮敬して白して言はく、「大師幸義有り、大恩如濟拔せられたり、乃ち菩提に至るまで教勅に違はず」と。已上。又震旦東晋より已來、唐朝に至るまで阿彌陀佛を念じて淨土に往生する者、道俗男女合して五十餘人『淨土論』并に『瑞應傳』に出す。我朝に往生の者も亦其數有り。具には慶氏の『日本往生記』に在り。何に況んや朝市に徳を隠し、山林に名を逃るる者は、獨り修し獨り去る誰か知るを得んや。問ふ、下下品の人、五百の釋子は、臨終に同じく念す。昇沈何ぞ別なるや。答ふ、『群疑論』に會して云はく、「五百の釋子は、但父の教に依りて一たび佛を念ずれども、而も菩提心を發し、求めて淨土に生じ、慇懃に慚愧せず。又彼は至心ならず、復唯一念にして十念を具せざるが故なり」と。略抄。

【八】 惡趣の利益を明す。

【八】 第七に惡趣の利益を明さば、『大悲經』の第二に云はく、「若し復人有りて但心に佛を念じ一たび敬信を生ぜば、我説く、是人は當に涅槃の果を得、涅槃の際を盡すべし。阿難、且く人中の念佛の功德を置く。若し畜生有りて、佛世尊に於て能く念を生ぜば、我亦説く其善根の福報は當に涅槃を得べし」と。問ふ、「何等か是なるや。答ふ、『同經』の第三に、『佛阿難に告げたまはく、過去に大商主有り、諸の商人を將ひて大海に入るに、其船卒に摩竭大魚の爲に來りて呑噬せられんと欲す。爾時、商主及び諸の商人心、驚きて毛豎ち、各皆悲泣す。嗚呼奇なる哉、彼閻浮提は是の如く樂ふべく、是の如く希有なり。世間の人身

【摩竭】梵音マカラ(Makara)大身鯨魚と譯す。身は白山の如く、兩日は日の如く、口を



張れば閻谷の如く能く舟を呑む、海底に穴居すと傳ふ

【六畜】馬、牛、羊、犬、豕、鶏のこと。

は是の如く得難し。我今父母と離別し姉妹姉兒親戚朋友と別離して、我更に見ず、亦佛法衆僧を見るを得ざるべしと。極めて大いに悲哭す。爾時、商主偏袒右肩、右の膝を地に著けて船の上に住し、一心に念佛し合掌禮拜して高聲に唱言す、南無諸佛、得大無畏者、大慈悲者、憐愍一切衆生者と是の如く三稱す。時に諸の商人も亦復同時に是の如く三稱す。時に摩竭魚、佛の名號禮拜の音聲を聞いて大愛敬を生じ、聞いて即ち口を閉づ。爾時、商主及び諸の商人、皆悉く安穩にして魚の難を免るを得。時に摩竭魚佛の音聲を聞きしより心に喜樂を生じ、更に餘の衆生を食瞰せず。是に因りて命終して人中に生ずることを得。其佛の所に於て法を聞いて出家し、善知識に近いて阿羅漢を得たり。阿難、汝觀ぜよ。彼魚は畜生道に生ずれども、佛名を聞くを得じりて乃ち涅槃に至る。何に況んや人有りて佛名を聞き、正法を聽聞することを得るをや」と。抄。又「菩薩處胎經」の八齋品に云はく、「龍子金翅鳥の與に而も頌を説いて曰はく、殺は是れ不善の行なり、壽命を滅して中天す、身は朝露の盡の如く、光を見るときは則ち命終す。戒を持ち佛語を奉して、長壽天に生じ、累劫に福德を積まば、畜生道に墮せざるを得。今身龍の身となれども、戒徳清明に行し、六畜の中に墮すと雖も、必ず自ら濟度を望むと。是時、龍子、此頌を説く時に龍子龍女心意開解しては、壽終の後に皆當に阿彌陀佛の國に生ずべし」と。龍子なり。餘趣も佛語を信すれば、淨土に生ずること之に准ぜよ。地獄の利益は前の國王の因縁、并に下の蠶心妙果の如く、諸餘の利益は下の念佛の功能の如し。」

【九】大別して十門に分つ中、八に念佛の證據を明す

【九】 大文第八に念佛の證據とは、上、「一切の善業各利益有りて各往生を得。何が故に唯念佛の一門を勸むるや。」答ふ、「今念佛を勸むるは是れ餘の種種の妙行を遮するに非ず。只是れ男女貴賤、行住坐臥を簡ばず、時處諸縁を論ぜず、之を修するに難からず、乃至臨終に往生を願求するに、其便宜を得ること念佛に如かざるが故に。『木槵經』に云はく、『難陀國の波瑠璃王、使を遣はして佛に白して言さく、唯願くば世尊、特に慈愍を垂れ我に要法を賜へ。我をして日夜に修行を得易くして、未來世の中に衆苦を遠離せしめよ。佛告げて言はく、大王若し煩惱障報障を滅せんと欲せば、當に木槵子一百八を貫き、以て常に自ら隨ふべし。若し行若は坐若は臥、恆に當に至心にして分散の意無く、佛陀達摩僧伽の名を稱して乃ち一の木槵子を過すべし。是の如く、若し十若は二十、若は百若は千、乃至百千萬せよ。若し能く二十萬遍を滿てんに身心亂れず、諸の詭曲無き者は、命を捨つれば第三の炎摩天に生ずるを得て、衣食自然にして常に安樂を受けん。若し復能く一百万遍を滿つる者は、當に百八の結業を除斷するを得て生死の流に背き、涅槃の道に趣きて無上の果を獲べし」と。略抄なり。況んや復諸の聖教の中、多く念佛を以て往生の業と爲す。其文甚だ多し、略して十文を出さん。一には『占察經』の下卷に云はく、「若し人他方の現在の淨國に生ぜんと欲せば、應當に彼世界の佛の名字に隨つて專意に誦念して一心に亂れざるべし。上の如く觀察せば、決定して彼佛の淨國に生ずるを得て、善根增長して速に不退を成す」と。上の如く觀察するとは、地藏菩薩の法身と及び諸佛の法身と、己が自身と平等にして二無し。不生不滅なり、常樂我淨なり、功德圓滿すと觀じて、又己身の無常を

【三輩】淨土に生れんと願ふ行者の中に於て、その修行の差別により上輩、中輩、下輩の三種有るをいふ。

觀ずるに幻の如く。二には『雙觀經』の三輩の業は、淺深有りりと雖も、然も通じて皆一向專念無量壽佛と云ふ。三には四十八願の中に念佛門に於て、別して一願を發して云はく、「乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺を取らじ」と。四には『觀經』に云はく、「極重の惡人は他の方便無し。唯彌陀を稱すれば極樂に生ずるを得ん」と。五に同經に云はく、「若し至心に西方に生ぜんと欲せば、先づ當に一の丈六の像の池水の土に在るを觀すべし」と。六には同經に云はく、「光明遍十方の世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず」と。七には『阿彌陀經』に云はく、「少善根福德の因縁を以て、彼國に生ずることを得べからず。若し善男子善女人有りて、阿彌陀佛を説くを聞いて、名號を執持すること若し一日乃至若し七日一心にして亂れずんば、其人命終の時に臨んで、阿彌陀佛諸の聖衆と與に其前に現在せん。是人終る時、心顛倒せずして即ち往生を得ん」と。八には『般舟經』に云はく、「阿彌陀佛の言はく我國に來生せんと欲せば當に我を念すべし。數數常に當に專念して休息有ること莫るべし。是の如くんば我國に來生するを得ん」と。九には『鼓音聲經』に云はく、「若し四衆有りて能く正しく彼佛の名號を受持すれば、此功德を以て終らんと欲する時に臨んで、阿彌陀佛即ち大眾と此人の所に往き、其をして見るを得しめん。見已りて尋いで生ず」と。十には『往生論』に「彼論の依正功德を觀念するを以て往生の業と爲す」と。此中に『觀經』の下下品、『阿彌陀經』、『鼓音聲經』は但名號を念するを以て往生の業と爲す。何に況んや相好功德を觀念せんをや。問ふ、「餘の行寧ぞ勸信

【修多羅】梵音、  
(Sūtra) 契經、法  
本、直説と譯す。  
總て聖教の稱。

【二〇】大別して十  
門に分つ中、九に  
往生の諸行を明す  
初めに諸經を明す

の交無からんや。答ふ、「其餘の行法は、彼法の種種の功德を明すに因んで、其中に自ら往生の事を説く。直に往生の要を辨じて多く念佛と云ふに如かず。何に況んや佛自ら既に當に我を念すべしと言ふをや。亦また佛の光明、餘の行人を攝取すと云はず。此等の文分明なり、何ぞ重ねて疑を生ぜんや。」問ふ、「諸經に説く所は機に隨つて萬品なり。何ぞ管見を以て一文を執するや。」答ふ、「馬鳴菩薩の『大乘起信論』に云はく、「復次に衆生初めて是法を學ぶに、其心怯弱にして信心を懼畏して成就すべきこと難く、意退せんと欲する者は、當に知るべし、如來に勝方便有りて、信心を攝護す。隨つて專心念佛の因縁を以て願に隨つて他方の佛土に往生するを得ん。修多羅に説くが如し。若し人、西方の阿彌陀佛を專念し、所修の善業を廻向して彼世界に生ぜんと願求せば、即ち往生を得ん」と。已。明かに知んぬ、「契經」に多く念佛を以て生生の要とすることを。若し爾らずんば四依の菩薩即ち理盡に非ず。」

【二〇】大文第九に往生の諸行を明さば、謂く、極樂を求むる者は必ず念佛を専らにせざれば、須らく餘行を明して、各樂欲に任すべし。此に亦二有り、初には別して諸經の文を明し、次に總じて諸業を結す。

第一に諸經を明せば、『四十華嚴經』の普賢願、『三千佛名經』、『無字寶篋經』、『法華經』等の諸大乘經、隨求尊勝、無垢淨光、如意輪、阿嚧力迦、不空羂索、光明阿彌陀、及び龍樹の所感の往生淨土等の呪、此等の顯密諸大乘の中に皆受持讀誦等を以て往生極樂



【淨戒】佛の制定し給ひ戒律のこと。

の業と爲す。『大阿彌陀經』に云はく、「當に齋戒して一心清淨に、晝夜に當に念じて阿彌陀佛國に生ぜんと欲すべし。十日十夜斷絶せずんば、我皆之を慈愍して悉く阿彌陀佛國に往生せしむ。殊使爾なること能はざらんも、自ら思惟し熟く按計して身を度脱せんと欲する者は、當に念を絶つべからず。愛を去けて家事を念ずる勿れ。婦女と床を同じうする莫れ。自ら身心を端正にして愛欲を斷じ、一心に齋戒し清淨に至專し、阿彌陀佛國に生ぜんと念じ、一日一夜斷絶せざる者、壽終れば皆其國に往生し七寶の浴池蓮華の中に在りて化生せん」と。此經は持戒を以て首と爲す。『十往生阿彌陀佛國經』に云はく、「吾今汝が爲に説かん十の往生有り。云何が十の往生なる。一には身を觀すること正念にして常に歡喜を懷き、飲食衣服を以て佛及び僧に施せば、阿彌陀佛國に往生せん。二には正念にして世の妙良藥をもて一の病比丘及び一切衆生に施せば、阿彌陀佛國に往生せん。三には正念にして一生命をも害せずして一切に慈悲すれば阿彌陀佛國に往生せん。四には正念にして師の所に從つて戒を受け、淨慧もて梵行を修し、心に常に喜を懷けば阿彌陀佛國に往生せん。五には正念にして父母に孝順し師長を敬重して傲慢の心を懷かざれば、阿彌陀佛國に往生せん。六には正念にして僧坊に往詣し塔寺を恭敬して法を聞き、一義を解すれば阿彌陀佛國に往生せん。七には正念にして一日一宿の中に八戒齋を受持し、一日一宿の中に受持して一をも破せざれば阿彌陀佛國に往生せん。八には正念にして若し能く齋月齋日の中に房舎に遠離し常に善師に詣れば阿彌陀佛國に往生せん。九には正念にして常に能く淨戒を持つ

て勸めて禪定を修樂し、法を護りて惡口せず。若し能く是の如く行ぜば阿彌陀佛國に往生せん。十には正念にして若し無上道に於て誹謗の心を起さず、精進に淨戒を持ち、復無智の者を教へて是經法を流布し、無量の衆生を教化す、是の如きの諸人等は、皆悉く阿彌陀佛國に往生するを得ん」と。彌勒問經に云はく、「佛の所説の如く阿彌陀佛の功德利益を願ひ、若し能く十念相續し、念佛を斷ぜざる者は即ち往生を得ん。當に云何が念すべき。佛の言はく、凡そ十念有り。何等をか十と爲す。一には諸の衆生に於て常に慈心を生じて其行を毀たざれ。若し其行を毀たば終に往生せず。二には諸の衆生に於て常に悲心を生じ殘害の意を除く。三には護法の心を發して身命を惜まざれ、一切の法に於て誹謗を生ぜざれ。四には忍辱の中に於て決定の心を生ぜよ。五には深心清淨にして利養に染まざれ。六には一切智の心を發して日日に常に念じ、廢忘有ること無かれ。七には諸の衆生に於て尊重の心を起し我慢の心を除き、謙下し言説せよ。八には世の談話に於て味著を生ぜざれ。九には覺意に近いて深く種種の善根の因縁を起し、憤鬧散亂の心を遠離せよ。十には正念に佛を觀じて諸想を除去せよ」と。寶積經の第九十一に、佛亦此十心を以て彌勒の問に答へたまふ。其中の第六心に云はく、「佛の種智を求めて一切の時に於て忘失の心無し」と。其餘の九種は文少異なりと雖も、意前經に同じ。但結文に云はく、「若し人此十種の心中に於て、隨つて一心を成じて彼佛の世界に往生せんと樂欲し、若し生ずるを得ずんば、是處有ること無し」と云云。明けし、必ずしも十を具して往生の業と爲すに非ざる

【十善の業】 不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見なり。

【三歸】 歸依佛、歸依法、歸依僧、歸依とは歸順信賴佛法僧の三寶に歸順するをいふ。

【沙彌戒】 沙彌の持つべき戒、殺生、偷盜、非梵行、妄語、飲酒、塗飾香鬘、歌舞觀聽、眠坐高嚴麗床座、食非時食、受蓄金銀等寶の十過罪を防止する戒。

【具足戒】 比丘の二百五十戒、比丘尼の三百四十八戒をいふ。

を。觀經に云はく、「彼國に生ぜんと欲する者は、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善の業を修す。二には三歸を受持し衆戒を具足して威儀を犯せず。三には菩提心を發して深く因果を信じ、大乘を讀誦して行者を勸進す。此の如きの三事を名けて淨業と爲すと。佛、華提希に告げたまはく、汝今知るや不や。此三種の業は過去未來現在の三世の諸佛淨業の正因なりと。又云はく、上品上生とは、若し衆生有りて彼國に生ぜんと願ふ者は、三種の心を發せば即便往生せん。何等をか三と爲す。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。三心を具する者は必ず彼國に生ぜん。復三種の衆生有りて、當に往生を得べし。何等をか三と爲す。一には慈心にして殺さず、諸の戒行を具す。二には大乘方等經典を讀誦す。三には六念を修行し、廻向發願して彼國に生ぜんと願ふ。此功德を具すること一日乃至七日せば即ち往生を得ん。上品中生とは、必ずしも方等經典を受持せざれども、善く義趣を解して第一義に於て心驚動せず、深く因果を信じて大乘を謗らず。此功德を以て廻向し願求せば、極樂國に生ぜん。上品下生とは、亦因果を信じ大乘を謗らずして但無上の道心を發す。此功德を以て廻向し願求せば極樂に生ぜん。中品上生とは、若し衆生有りて五戒を受持し、八戒齋を持ち、諸戒を修行し、五逆を造らず、諸の過患無く、此善根を以て廻向し願求す。中品中生とは、若し衆生有りて、若し一日一夜八戒齋を受け、若し一日一夜沙彌戒を持し、若し一日一夜具足戒を持して、威儀缺くること無けん。此功德を以て廻向し願求す。中品下

【二】 諸行を明す  
中、總じて諸業を  
結す。

生とは、若し善男子善女人有りて、父母に孝養し世の仁慈を行す。下品上生とは、或は衆生有りて、衆の惡業を作り、方等經典を誹謗せずと雖も、此の如き愚人は多く衆の惡法を造りて慚愧有ること無し。臨終に十二部經の首題の名字を聞き、及び合掌して南無阿彌陀佛と稱す。下品中生とは、或は衆生有りて、五戒八戒及び具足戒を毀犯す。此の如き愚人は命終らんと欲する時、地獄の衆火一時に俱に至らん。善知識の大慈悲を以て、爲に阿彌陀佛の十力威徳を説き、廣く彼佛の光明神力を説き、亦戒定慧解脫知見を讚するに遇ふ。此人聞き已りて八十億劫の生死の罪を除く。下品下生とは、或は衆生有りて不善業を作し、五逆十惡諸の不善を具す。此の如き愚人は惡業を以ての故に、應に惡道に墮すべし。命終に臨まん時、善知識に遇うて佛を念すること能はずと雖も、但至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具して南無無量壽佛と稱す。佛名を稱するが故に、念念の中に於て八十億劫生死の罪を除かん」と。『雙觀經』の三輩の業も、亦此を出でず。『觀經』には、十六の觀を以て往生の因と爲し、『寶積經』には佛前の蓮華に化生するに四の因縁有るを説く。偈に云はく、「華香もて佛及び支提に散じ、他を害せずして并に像を造り、大菩提に於て深く信解すれば、蓮華に處して佛前に生ずるを得ん」と。已上。餘は繁く出さず。

【二】 第二に總じて諸業を結すとは、慧遠法師、淨土の因要を出すに四有り。一には觀を修して往生す、十六觀の如し。二には業を修して往生す、三福の業の如し。三には心を修して往生す、至誠等の三心なり。四には歸向して往生す、淨土の事を聞いて歸向し稱念



【六度】 六波羅密のこと。

し讚歎する等なり。今私に云はく、諸經の行業は總じて之を言はば、梵網の戒品を出でず。別して之を論ずれば六度を出でず。細しく其相を明さば其れ十三有り。一には財法等の施。二には三歸五戒八戒十戒、多少の戒行。三には忍辱。四には精進。五には禪定。六には般若。若。第一義等を信。七には發菩提心、八には六念を修行す。佛僧施戒天を念ずる之を六念と謂ふ十六の思想も亦之を出でず。九には大乘を讀誦す。十には佛法を守護す。十一には父母に孝順し師長に奉事す。十二には橋慢を生ぜず。十三には利養に染まざるなり。『大集月藏分』の偈に云はく、「樹の果繁ければ速に自ら害有るが如し、竹蘆の實を結ぶも亦是の如く、任驪懷すれば自身を喪すが如し。無智にして利を求むるも亦復然なり、若し比丘有りて供養を得て利養を樂求し堅著せば、世に於て更に此惡に如くは無し。故に解脱の道を得ざらしむ。是の如く利養を貪求する者は、既に道を得已りて還りて復失せん。『佛藏經』に迦葉佛記して云はく、「釋迦牟尼佛は多く供養を受くるが故に、法當に疾滅すべし」と云云。如來尙爾なり、何に況んや凡夫をや。大象の意を出でんには、遂に一尾の爲に礙へらる。行人も家を出でんには、遂に名利の爲に縛せらる。則ち知んぬ、出離最後の怨は名利より大なるは莫きなり、但淨名大士の身は家に在れども心は家を出づと。藥王の本事には、摩蹉を避けて雲山に居すと。今世の行人も亦應に是の如くすべし、自ら根性を料りて而も之を進止せよ。若し其心を制する能はずんば、猶し須らく其地を避くべし。麻の中の蓬屠邊の厩好惡何に由るや。見つべし、佛藏經は是非を知るなり。

往生要集卷下本 終

往生要集 卷下末

天台首楞嚴院沙門源信撰

【一】大別して十門に分つ中十に問答料簡を明す。

【二】極樂の依正を明す。

【同居土】凡夫と聖者と併居する三界内にある世界をいふ。

【應身應土】應身とは衆生の機縁に應同して示現する佛身をいふ。故に應身佛の居住せる國土。

【報身報土】報身とは因位の願行に酬報して成就したる萬徳圓滿の佛身をいふ。故に報身佛の居住せる國土

【化土化身】化身

【一】大文第十に問答料簡とは、略して十事有り。一には極樂の依正、二には往生の階位、三には往生の多少、四には尋常の念相、五には臨終の念相、六には靈心の妙果、七には諸行の勝劣、八には信毀の因縁、九には助道の資縁、十には助道の人法なり。

【二】第一に極樂の依正とは、問ふ、『阿彌陀佛の極樂淨土は、是れ何の身何の土なりや。』答ふ、『天台云はく、應身佛、同居土なり』と。遠法師云はく、『是れ應身應土なり』と。綽法師云はく、『是れ報佛報土なり』と。古舊等しく相傳して皆化土化身と云ふ。此を大失と爲す。『大乘同性經』に依るに、云はく、『淨土の中に成佛せる者は悉く是れ報身なり。穢土の中に成佛せる者は悉く是れ化身なり』と。又彼經に云はく、『阿彌陀如來、蓮華開敷星王如來、龍王如來、寶德如來等の諸の如來の清淨佛刹にして、現に得道の者當に得道の者有り。是の如きは一切皆是れ報身の佛なり。何者か如來の化身なる。猶し今日誦歩健如來應恐怖如來等の如し』と。已上安。問ふ、『彼佛成道して已に久如と爲んや。』答ふ、『諸經に多く十劫と云ふ。』大阿彌陀經には十小劫と云ひ、『平等覺經』には十八劫と云ひ、『稱讚淨土經』には十大劫と云ふ。邪正知り難し。但『雙觀經』の瓊輿師の疏に『平等經』

とは佛が機に應じ形を變へて現れたる佛身をいふ。その佛居住の土を化土と云ふ。

を會して云はく、「十八劫とは其小字に其中點を闕くならん。」問ふ、『未來の壽は幾何ぞや。』答ふ、『小經』に云はく、「無量無邊阿僧祇劫なり」と。『觀音授記經』に云はく、「阿彌陀佛の壽命は無量百千億劫にして當に終極有るべし。佛涅槃の後、正法世に住する佛の壽命に等しからん。」善男子、阿彌陀佛の正法滅して後に中夜分を過ぎ、明相出でぬる時、觀世音菩薩菩提樹下於て等正覺を成じ、普光功德山王如來と號す。其佛の國土には聲聞緣覺の名有ること無し。其佛の國土を衆寶普集莊嚴と號す。普光功德如來涅槃し正法滅して後、大勢至菩薩即ち其國に於て成佛し、善住功德寶王如來と號す。國土の光明壽命乃至法住等しくして異り有ること無し。問ふ、『同性經』には報身と云ひ、『授記經』には入滅と云ふ。二經の相違諸師何んが會するや。答ふ、『禪禪師は、『授記經』を會して云はく、「此は是れ報身の隱沒の相を現するなり、滅度に非ざるなり」と。迦才は『同性經』を會して云はく、「淨土の中の成佛を判じて報と爲すは、是れ受用の事身にして實の報身に非ざるなり」と。問ふ、『何者か正と爲すや。』答ふ、『迦才の云はく、「衆生行を起すに既に千殊有れば往生して土を見るも亦萬別有り。若し此解を作さば諸の經論の中に或は判じて報と爲し、或は判じて化と爲すも皆妨難無し。但諸佛の修行は具に報化の二土を感ずるを知る」と。『攝論』に加持は化を感じ正體は報を感ずと爲すが如し。若し報若は化皆衆生を成熟せんと欲するなり。此れ則ち土虚しく設くるにあらず、行空しく修するにあらず。但佛語を信じ經に依りて專念せば即ち往生を得ん。亦須らく報と化とを圖度すべからざるなり。已上。此

釋善し。須らく専ら稱念すべし分別を勞する勿れ。問ふ、「彼佛の相好何を以て同じからざるや。」答ふ、「觀佛經」に諸佛の相好を説く、云はく、「人の相に同ずるが故に三十二と説き、諸天に勝るが故に八十種好と説く、諸の菩薩の爲には八萬四千の諸の妙相好を説く」と。已。彼佛も之に准ぜよ。問ふ、「變觀經」に云はく、「彼佛の道樹は高さ四百萬里」と。寶積經に云はく、「道樹の高さ十六億由旬」と。「十往生經」に云はく、「道樹の高さ四十萬由旬にして樹下に師子の座有り。高さ五百由旬なり」と。「觀經」に云はく、「佛の身量は六十萬億那由他恆河沙由旬なり」と。云云。樹と座と佛身と何ぞ相稱はざるや。」答ふ、「異解不同なり。或は釋す、佛の境界は大小相礙へず。或は釋す、應佛に寄せて樹の量を説き眞佛に寄せて身量を説くと。又多の釋有り。具に述ぶべからず。問ふ、「華嚴經」に云はく、「娑婆世界の一劫は極樂國の一日一夜と爲すと等」と。云云。此に由りて當に知るべし。上品中生の宿を経て華の開くは當に此間の半劫なるべし。乃至下下生の十二劫は當に此間の恆沙塵數劫なるべし。何ぞ極樂と名けんや。答ふ、「設ひ恆劫を経るまで蓮華開かざるも既に微苦無し豈極樂にあらざらんや。」變觀經に云ふが如し、「其胎生の者は處する所の宮殿は或は百由旬、或は五百由旬にして各其中に於て諸の快樂を受くること切利天の如し」と。已。有師の云はく、「胎生は是れ中品下品なり」と。有師の云はく、「九品の攝せざる所なり」と。異解有り」と雖も快樂別ならず。何に況んや彼九品の經る所の日時を判するをや。諸師不同なり。懷感智儼等の諸師の彼國土の日夜劫數なりと許すは誠に責むる



所に當る」と。有師の云はく、「佛此土の日夜を以て之を説きて衆生をして知らしむ」と云云。今謂く、「後の釋失無し且く四の例を以て助成ぜん。一には彼佛の身量若干の由句なるは彼佛の指分を以て疊んで彼由句と爲さざるなり。若し爾らずんば應に須彌山の如き長大の人に一毛端を以て其指節と爲すに似たるべし。故に知んぬ佛の指量を以て佛身の長短を説かざるなり。何ぞ必ずしも淨土の時剋を以て華開の遲速を説かんや」と。二に「尊勝陀羅尼經」に説くが如く、「初利天上の善住天子は空に聲有りて、汝當に七日にして死すべしと告ぐるを聞く。時に天帝釋佛の教勅を承け、彼天子をして七日勤修せしむ。七日を過ぎて後壽命延ぶるを得る」と。意。此は是れ人中の日夜にして説く。若し天上の七日に據らば當に人中に於て七百歳なるべし。應に佛世の八十年の中に其事を決了すべからず。九品の日夜も亦應に之に同じかるべし。三には法護所譯の經に云はく、「胎生の人は五百歳を過ぎて佛を見るを得」と。「平等覺經」に云はく、「蓮華の中に於て化生し城の中に在りて是間の五百歳に於て出づるを得る能はず」と。意。儼興等の師此文を以て此方の五百歳なりと證す。今云はく、「彼胎生の歳數既に此間に依りて説く、九品の時刻は何の別義有りてか彼に同せざるや。四には若し彼界に據りて九品を説かば、上品中生の一宿上品下生の一日夜は即ち當に此界の半劫一劫なるべし。若し爾りと許さば胎生の疑心の者すら尙婆娑の五百歳を経て速に佛を見るを得。上品の信行者、豈半劫一劫を過ぎて、而も遅く蓮華を開かんや。此理有るが故に後の釋失無きなり」と。問ふ、「若し此界の日夜の時剋を以て彼相を説か

【無生法忍】  
智をいふ。

法空

ば彼上上品彼國に生じ已りて應に即ち無生法忍を悟るべからず。然る所以は此界の少時の修行は勝と爲り、彼國の多時の善根は劣と爲る。既に爾らば上品の人は此世界に於て一日より七日に至るまで三福業を具足すれども尙無生法忍を證する能はず。云何が彼に生じて法を聞いて即ち悟せん。故に知る彼國土の長遠の時剋を経て無生忍を悟ることを。然るに彼に約して即悟と名くるは此に望めば即ち億千歳ならん。或は上上の人は必ず是れ方便の後心の行圓滿する者なるべし。若し爾らずんば諸文梓楯せん。答ふ、未だ知らず彼國の多善は劣なり。此界の少善は勝なることを。問ふ、「雙觀經」に説く、「是に於て廣く徳本を植ゑ恩を布き、慧を施し道禁を犯すこと勿く、忍辱精進一心知足慈もて轉た相教化し、善を立て意を正しくして齋戒清淨なること一日一夜せば、無量壽佛の國に在りて、善を爲すと百歳なるに勝る。所以は何ん、彼佛の國土は無爲自然にして、皆衆の善を積みて毛髮の惡も無し、此に於て善を修すること十日十夜せば、他方の諸佛國の中に於て善を爲すと千歳なるに勝る」と等し。是れ其勝劣なり。答ふ、「二界の善根を尅對せば爾るべし。然るに値佛の緣勝れば速悟するに失無し。或は此經は但修行の難易を顯はす、善根の勝劣を顯はすに非ず。譬へば貧賤の一錢を施すは稱美すべしと雖も、而も衆事を辨ぜず、富貴の千金を捨つるは稱すべからずと雖も、而も能く萬事を辨するが如く、二界の修行も亦復是の如し。『金剛般若經』に云ふが如く、「佛世の信解は未だ勝と爲すに足らず、滅後を勝と爲す」と。或は餘義有り委曲する能はず。問ふ、「娑婆の行因に隨つて極樂の階位に別有るが如く

所感の福報も亦別有りや。〔答ふ〕「大都是別無し細分せば差ひ有り。『陀羅尼集經』の第二に云ふが如く、「若し人香華衣食等を以て供養せざる者は、彼淨土に生ずと雖も而も香華衣食等の種種の供養の報を得ず」と。此文彼佛の本願に違ふ。又玄一師、因法師同じく云はく、「實に約して而して論ずれば亦勝劣有り、然るに其狀相似するが故に好醜無しと説く」と。問ふ「極樂世界は此を去ること幾處ぞや。〔答ふ〕經に云はく、「此より西方十萬億の佛土を過ぎて極樂世界有り」と。有經に云はく、「是より西方に此世界を去り、百千俱胝那庾多の佛土を過ぎて佛世界有り、名けて極樂と曰ふ」と。問ふ「二經何が故ぞ同じからざるや。〔答ふ〕論の智光の疏の意に云はく、「俱胝と言ふは此に億と爲す、那庾多とは當に此間の姦數なるべし。世俗に十千を言つて萬と曰ひ、十萬を億と曰ひ、十億を兆と曰ひ、十兆を經と曰ひ十經を姦と曰ふ、姦は猶是れ大數なり、百千俱胝は即ち十萬億なり。億に四位有り、一には十萬、二には百萬、三には千萬、四には萬萬なり。今億と云ふは、即ち是れ萬萬なり。此義を顯はさんが爲に弗由多を擧ぐ。」上。此釋思ふべし。問ふ、「彼佛の所化は唯極樂なりと爲んや。亦餘有りと爲んや。〔答ふ〕大論に云はく、「阿彌陀佛に亦嚴淨不嚴淨の土有ること釋迦牟尼の如し」と。問ふ、「何等か是なるや。〔答ふ〕極樂世界は即ち是れ淨土なり。然るに其穢土は未だ何の處なるかを知らず。但道綽等の諸師「鼓音聲經」に説く所の國土を以て彼穢土と爲す。彼經に云ふが如し、「阿彌陀佛と聲聞と俱なり、其國を號して清泰と曰ふ。聖王の所住にして其城の縱廣十千由旬なり、中に於て刹利の種を充滿す。阿

彌陀如來應正遍知の父を月上轉輪聖王と名け、其母を名けて殊勝妙顏と曰ひ、子を月明と名け、奉事の弟子を無垢稱と名け、智慧の弟子を名けて攬光と曰ひ、神足精勤なるを名けて大化と曰ふ。爾時の魔王を名けて無勝と曰ふ。提婆達多有り、名けて寂靜と曰ふ。阿彌陀佛大比丘六萬人と俱なり」と。  
上「問ふ、一彼佛の所化は唯極樂清泰の二國なりと爲すや。答ふ、教文は縁に隨つて且く一隅を擧ぐれども、其實處を論すれば不可思議なり。『華嚴經』の偈に云ふが如し、「菩薩諸の願海を修行するに、普く衆生の心に欲する所に隨ふ、衆生の心行廣くして無邊なれば、菩薩の國土も十方に遍す」と。又云はく、「如來の出現は十方に遍すれば、一一の塵中に無量の土有り、其中の境界も亦無量にして、悉く無邊無盡の劫に住す」と。「問ふ、「如來の施化の事は孤り起らず、要す機縁に對す。何ぞ十方に遍せんや。答ふ、「廣劫に修行して無量の衆を成熟す、故に彼機縁も亦十方界に遍す。『華嚴』の偈に云ふが如し、「往昔勤修すること多劫海にして能く衆生の深重の障を轉ず。故に能く身を分ちて、十方に遍じ悉く菩提樹王の下に現す」と。」

【二】 往生の階位を明す。

【三】 第二には往生の階位とは、問ふ、「『瑜伽論』に云はく、「三地の菩薩方に淨土に生ず」と。今地前の凡夫聲聞を勸むるは何の意有るや。答ふ、「淨土に差別有り、故に過有ること無し。感師の釋に云ふが如く、「諸經論の文に淨土に生ずることを説くは各一義に據る。淨土に既に躡妙勝劣有れば、得生も亦上下階降有り」と。又道宣律徳の云はく、「三地の菩薩始めて報佛の淨土を見る」と。「問ふ、「設ひ報土に非ざるも惑業の重き者は豈淨土を



【結使】 結は心身を縛縛する義、使は心身を驅役する義にして煩惱の異名。

【八地】 菩薩修行の階位に、十地の第八地不動地。十地とは歡喜地、離垢地、發光地、燦爛地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地なり。

得んや。答ふ、「天台の云はく、「無量壽の國は果報殊勝なり」と雖も、臨終の時に懺悔し、念佛すれば業障便ち轉じて、即ち往生を得、感染を具すと雖も、願力心を持すれば亦居するを得」と。「問ふ、「若し凡夫も亦往生を得と許さば、「彌勒問經」如何が通會せん。經に云はく、「念佛する者凡愚の念に非ず、結使を離へざれば彌陀佛の國に生ずるを得」と。已「答ふ。「西方要決」に釋して云はく、「娑婆の苦を知りて永く染界を離するは、薄淺の凡に非ず、當來に念佛して専ら廣く法界の衆生を度せんと意ふ、斯勝解有るが故に愚に非ず。正念の時に結使眠伏す。故に不離結使念と言ふ」と。鈔。意の云はく、凡夫の行人も此徳を具するなり。「問ふ、「彼國の衆生は皆不退轉ならん。明かに知る是れ凡夫の生ずる處に非ざるを。」答ふ、「言ふ所の不退とは必ずしも是れ聖の徳に非ず。「要決」に云ふが如し、「今不退を明すに其四種有り」。「十住毘婆娑」に云はく、「一には位不退即ち修因萬劫なれども、復惡律儀の行に退墮して生死に流轉せざるなり。二には行不退已に初地を得れば、利他の行不退なり。三には念不退八地已去は無功用にして、意に自在を得るが故なり。四には處不退、文證無しと雖も、理に約して以て成ぜん」何となれば、天中の得果に即ち不退を得るが如く、淨土も亦爾なり。命長くして病無く、勝侶に提携せらる。純正にして邪無く、唯淨にして染無し、恆に瓊尊に事ふ。此五の緣に由りて其處に退無し。略鈔「問ふ、「九品の階位異解不同なり。遠法師の云ふが如きは、上上生は四五六地、上中生は初二三地、上下生は地前の三十心なり」と。力法師の云はく、「上上は行向なり、上中は十解なり、上下は十信なり」と。

基師の云はく、「上上は十廻向、上中は解行、上下は十信なり」と。有が云はく、「上上は十住の初心、上中は十信の後心なり、上下は十信の初位なり」と。有が云はく、「上上は十信及び以前に能く三心を發し、能く三行を修する者なり、上中上下は唯十信以前菩提心を發して、善を修する凡夫を取る。行を起すに淺深有れば、以て三品を分つなり」と。諸師の所判不同なる所以は、無生忍の位の不同なるを以ての故なり。『仁王經』には「無生忍は七八九地に在り」と。諸論には「初地或は忍位に有り」と。『本業瓔珞經』には「十住に有り」と。『華嚴經』も「十信に有り」と。『正蒙經』には「一行三昧を修して相似の無生法忍を得る者と説く。故に諸師各一義に據るなり」と。中品の三生は達の云はく、「中上は是れ前の三果、中中は是れ七方便なり、中下は是れ種解脱分の善人」と。力法師も之に同じ。基の云はく、「中上は四善根中中は三賢中下は方便の前の人」と。有が云はく、「次の如く軟頂忍なり」と。有が云はく、「三生は並に是れ解脱分の善根を種うる人なり。已上六品に亦餘の釋興の記等、下品の三生は別に階位無し。但之れ具縛造惡の人なり」と。問ふ、「往生の人を明せば其位限有り。寧ぞ猶是れ我等が分なりと知らんや。」答ふ、「上品の人階位は設ひ深きも下品の三生豈我等が分に非ずや。況んや彼後の釋は既に十信以前の凡夫を取りて上品の三と爲すをや。又『觀經』は善導禪師の玄義に、「大小乘の方便以前の凡夫を以て九品の位を判じて諸師の判する所の深高なるを許さず」と。又經論は多く文に依りて義を判ず、今の經の所説の上三品の業は何ぞ必ずしも執して深位の行と爲さんや。問ふ、「若し爾らば彼

に生じて應に早く無生法忍を悟るべからざるや。答ふ、「天台に二の無生忍の位有り。若し別教の人は歴劫に修行して無生忍を悟り、若し圓教の人は乃至惡趣の身にも亦頓證の者有れば、穢土尙爾り、何に況んや淨土をや。彼土の諸の事は餘處に例する無し、何の處にか一切の凡夫、未だ其位に至らざるに、終に退墮無き。何の處にか一切の凡夫、悉く五神通を得て妙用無礙なるや。證果の遲速例して亦然るべし。問ふ、「九品生の人の得益の早晚は一向に兩なりや。答ふ、「經の中に且く一類を擧ぐ、故に慧遠和尚の『觀經』の義記に云はく、「九品の人は彼國に生じ已りて、得益の劫數は勝に依りて而も説けども、理亦之に過ぎたる者有り」と。意。今謂く「汎く九品を論ずるに、或は復少分此より速なる者有るべし。問ふ、「雙觀經」の中に「亦彌勒等の如き諸の大菩薩有りて、當に極樂に生ずべし」と。故に知んぬ。經の中の九品の得益は、劣に依りて而も説く、何ぞ勝れるに依ると言はんや。答ふ、「彼國に生じて始めて始めて無生を悟る、前後早晚に約して之を勝れるに依ると謂ふ、更に彼上位の大士を論ぜず。然るに彼大士は九品の中に於て攝と不攝とは、別に應に思擇すべし。問ふ、「凡下の輩も亦往生を得るは、云何が近代に彼國土に於て求むる者、千萬有れども得るものは一二無きや。答ふ、「綽和尚の云はく、「信心深からず若く存若亡の故に、信心一ならず決定せざるが故に、信心相續せず、餘念聞るが故に、此三不相應の者は往生する能はず、若し三心を具して往生せずんば、是處有ること無し」と。導和尚の云はく、「若し能く上の如く念念相續し、畢命を期と爲す者は十は即ち十ながら生じ、百は即

ち百ながら生ず。若し専を捨てて雑業を修せんと欲せば、百の時希に一二を得、千の時希に三五を得ん」と。如上述といふは、禮讚等の五念門至誠等の三心長時等の四修を指す。問ふ、「若し必ず畢命を期と爲さば、如何が感和尙は長時短時多修少修皆往生を得と云ふや。」答ふ、「業類一に非ざるが故に二師俱に過無し。然るに畢命を期と爲して勤修して怠る無く、業をして決定せしむれば是れ張本と爲る。問ふ、「菩薩處胎經」の第二に説く、「西方此閻浮提を去ること十二億那由他に懈慢界有り、國土快樂にして侶伎樂を作し、衣被服飾香華莊嚴す。七寶轉開の床に目を擧げて、東に寶床を視れば、隨つて轉じ、北に視、西に視、南に視るにも亦是の如く前後に轉ず。意を發せる衆生、阿彌陀佛の國に生ぜんと欲する者は、皆深く懈慢國土に著して前進んで、阿彌陀國に生ずる能はざるもの億千萬衆なり。時に一人有りて、能く阿彌陀佛の國に生ず」と。上。此經を以て准ふるに生ずるを得べきこと難きや。答ふ、「群疑論」に善導和尚の前の文を引いて、而も此難を釋して、又自ら助成して云はく、「此經の下の方に言く、何を以ての故に、若懈慢にして執心牢固ならざるに由る。是に知んぬ雑修の者は、執心不牢の人と爲す、故に懈慢國に生ず。若し雜修せずして専ら此業を行ぜば、此れ即ち執心牢固にして定めて極樂國に生ぜん」と。又報の淨土に生ずる者は極めて少し、化の淨土の中に生ずる者は少からず、故に經の別說實に相違せず。上。問ふ、「設ひ三心を具せずと雖も、畢命を期とせずと雖も、彼一たび名を聞くすら尙成佛を得、況んや暫く稱念せる何ぞ唐捐ならんや。」答ふ、「暫く唐捐に似れども終に虛設に非ず。『華嚴』の偈に「聞經の者生を轉ずる



【四】往生の多少を明す。

時の益を説いて云ふが如し。若し人聞くに堪任たるものは、大海及び劫盡の火の中に在りと雖も、必ず此經を聞くを得。」と。大海とは是れ龍界なり。釋に云はく、「餘の業に由るが故に、彼難處に生ずれども前の信に由るが故に、此根器を成す」と。云云。華嚴を信する者既に而も是の如し、信じて佛を念する者は、豈此益無からんや。彼一生に惡業を作りしも、臨終に善友に遇ひ、纔に佛を十念すれば即ち往生を得。是の如き等の類は、多くは是れ前世に浄土を欣求して、彼佛を念する者、宿善内に熟して今開發するのみ。故に「十疑」に云はく、「臨終に善知識に遇うて、十念成熟する者は、並に是れ宿善強きを以て、善知識を得て十念成就す」と。云。感師の意も亦之に同じ。問ふ、「下下品の生も若し宿善に依らば、十念生の本願は即ち名有りて實無きや。」答ふ、「設ひ宿善有るも若し十念無くんば、定めて無間に墮して苦を受くること殆り無からん。明けし、臨終の十念は是れ往生の勝縁なり」と。

【四】第三に往生の多少とは、「雙觀經」に云はく、「佛勸勸に告げたまはく、此世界に於て六十七億の不退の菩薩彼國に往生す。一一の菩薩は已曾無數の諸佛を供養して次で勸勸の如し。諸の小行の菩薩及び少功德を修する者は、稱計すべからず、皆當に往生すべし。他方の佛土も亦復是の如し。其遠照佛の國百八十億の菩薩寶藏佛の國。九十億の菩薩無量意佛の國。二百二十億の菩薩甘露味佛の國。二百五十億の菩薩龍勝佛の國。十四億の菩薩勝力佛の國。萬四千の菩薩師子佛の國。五百の菩薩、離垢光佛の國。八十億の菩薩德首佛の國。六十億の菩薩、妙徳山佛の國。六十億の菩薩人王佛の國。十億の菩薩、無上

【五】尋常の念相を明す。

華佛の國。無數不可稱計の不返の諸菩薩、智慧勇猛にして已曾無量の諸佛を供養し、七日の中に於て即ち能く百千億劫の居士の修する所堅固の法を攝取す。無畏佛の國七百九十億の大菩薩衆、諸の小菩薩及び比丘等稱計すべからず、皆當に往生すべし。但此十四佛の國中の諸菩薩等のみ、當に往生すべきにあらず。十方世界の無量の佛より其往生する者も亦復是の如く甚だ多くして無數なり。我但十方諸佛の名號、及び菩薩比丘の彼國に生ずる者を説かば、晝夜にして一劫なるも尙未だ竟ること能はじ」と。

已上。此諸佛土の中に今娑婆世界に小善を修して、當に往生すべき者有り。我等今幸に釋尊の遺法に遇ふは、億劫の時に、一たび小善往生の流に預るなり。朝に務いで勤修すべし、時を失ふ莫れ。問ふ、若し少善根亦往生を得るは、如何が經に少善根福德の因縁を以て、彼國に生ずるを得べからずと云ふや。答ふ、此に異解有り、繁出する能はず。今私に案するに云はく、大小定りなり。相待して名を得たり。大菩薩に望めば、之を少善に名け、輪廻の業に望めば、之を名けて大と爲す。是故に二經の義違害せざるなり」と。

【五】第四に尋常の念相を明さば此に多種有り、大いに分つて四と爲す。一には定業、謂く、坐禪入定して佛を觀するなり。二には散業、謂く、行住坐臥の散心の念佛なり。三には有相の業、謂く、或は相好を觀じ、或は名號を念じて、偏に穢土を厭ひ専ら淨土を求むるなり。四には無相の業、謂く、佛を稱念し、淨土を欣求すと雖も、而も身土は即ち畢竟空なること幻の如く夢の如し。體に即して而も空なり、空なりと雖も而も有なれば有に非ず、空

【無所得】 心に何等の一物をも存せざること。無執著なること、有所得の對。

に非ずと觀じ、此無二に通達して眞に第一義に入る、是を無相の業と名く。是れ最上の三昧なり。故に『雙觀經』に阿彌陀佛の言はく、「諸法の性は、一切空無我なりと通達して、専ら淨佛の土を求む、必ず是の如きの利を成ぜん」と。又『止觀』の常行三昧の中に、三段の文有り、具には、上の別行の中に引くが如し。「問ふ、『定散念佛共に往生するや。』答ふ、『慳重の心念は往生せざる無し。故に感師、念佛の差別を説いて云はく、『或は深或は淺定に通じ散に通ず、定は即ち凡夫よりして十地に終る。善財童子の功德雲比丘の所に於て、請うて念佛三昧を學ぶが如し。此れ即ち甚淺の法なり。散は即ち一切衆生の若は行、若は坐、一切の時處に皆佛を念するを得て、諸務を妨げず。乃至命終にも亦其行を成ず』と。』問ふ、『有相無相の業俱に往生を得るや。』答ふ、『緯和尙の云はく、『若し始覺の者は未だ相を破る能はざれば、但能く相に依りて專至すれば往生せざる無し、須らく疑ふべからず』と。又感和尙の云はく、『往生既に品類差殊なれば、修因も亦淺深各別有り、但言ふべからず。唯無所得を修して而も往生を得、有所得の心は生ずるを得ず』と。問ふ、『若し兩念じ、僧を念じ、戒を念じ、施を念じ、天を念すべし。是の如く等しく思惟して涅槃の安樂寂滅を觀じ、唯涅槃の畢竟清淨を愛せよ』と。是の如く教ふる者を名けて邪教と爲し、惡知識と名く。是人を名けて我を誹謗して外道を助くと爲す。是の如き惡人は我乃ち一飲の水をも受くるを聽さず』と。又言はく、『寧ろ五逆の重惡を成熟すとも、我見衆生見壽

見命見陰入界見等を成就せざれとするや」と。『略鈔』答ふ、「感師釋して云はく、「有聖教に復言はく、寧ろ我見を起す、須彌山の如くすとも空見を起すは、芥子許りの如くもせざれ」と。是の如き等の諸大乘經に有を訶し空を訶す、大を讚じ小を讚す、並に乃ち機に返すること同じからざればなり。又有經に言はく、「今者阿彌陀如來應正等覺は具に是の如きの三十二相八十隨形好有りて、身色光明は融せる金聚の如し。是の如くなるに乃至彼如來を念ぜず、亦彼如來を得ず、已に是の如くんば次第に空三昧を得」と。又「觀佛三昧經」に云はく、「如來に亦法身十力無畏三昧解脫の諸神通の事有り。此の如き妙處は汝凡夫の所覺の境界に非ざれば、但當に深心に隨喜の想を起すべし。是想を起し已りて當に復繫念して佛の功德を念すべし」と。故に知んぬ初學の輩は彼色身を觀じ、後學の徒は法身を念す。故に是の如く次第して空三昧を得と言ふ。當に須らく善く經意を會して毀讚の心を生ずる勿るべし。妙に知んぬ。大聖の巧に根機に返する者なることを、已上觀佛經の第九の説なり佛を觀じ已りて引く所の十問ふ、「念佛の行は九品の中に於て是れ何の品の攝なりや。」答ふ、「力無畏三昧等の文あり。問ふ、「念佛の行は九品の中に於て是れ何の品の攝なりや。」答ふ、「若し説の如く行ぜば、理上上品に當る。是の如く其勝劣に隨つて應に九品を分つべし。然るに經に説く所の、「九品の行業は是れ一端を示す、理は實に無量なり」と。問ふ、「定散の如きは俱に往生を得ると爲んや、亦現身に俱に佛を見ると爲んや。」答ふ、「經論に多く三昧成就して即ち佛を見るを得と説く。明かに知んぬ散業は見るを得べからず、唯別縁を除くなり。」問ふ、「有相無相の觀俱に佛を見るを得るや。」答ふ、「無相の見佛は理不疑に有り、其



【盧舍那】梵音ツ  
イローチヤナ、  
(Vairocana) 光明  
遍照と譯す。

有相の觀も或は亦佛を見る。故に『觀經』等に色相を觀ぜよと勸む。『問ふ』若し有相の觀も亦佛を見るは云何。『華嚴經』の偈に云はく、凡夫は諸法を見るに但相に隨つて轉ず、法の無相を了せず是を以て佛を見ず。見る有るときは則ち垢と爲す、此れ則ち未だ見ると爲さず、諸見を遠離し是の如くなれば乃ち佛を見る」と。又云はく、「一切の法は自性所有無しと了知す。是の如く法性を解すれば即ち盧舍那を見る。」と。『金剛經』に云はく、「若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば、是人は邪道を行す、如來を見る能はざるや」。『答ふ』、『要訣』に通じて云はく、「大師の説教は義に多門有れば、各時機に稱ひ等くして差異無し、『般若經』は自ら是れ一門なり、彌陀等の經も復一理と爲す。何となれば一切の諸佛は並に三身有り、法佛は無形にして體色聲に非ず。良に二乗及び小菩薩の爲に三身異ならずと説くを聞いて、即ち同じく色聲有りと謂へり。但化身の色相を見て遂に法身も亦爾なりと執す、故に説いて邪と爲す。『彌陀經』等に佛名を念じ相を觀じて、淨土に生ぜんことを求めよと勸むる者は、但凡夫は障り重くして法身幽微にして法體は縁じ難きを以て、且く念佛觀形禮讚を教ふるなり。略。『問ふ』凡夫の行者は修習を勤むと雖も、心純淨ならざれば何ぞ輒く佛を見んや。『答ふ』衆緣合して見るなり、唯自力に非ず、『般舟經』に三の緣有り。上の九十日の行に引く所の止觀の文の如し。『問ふ』幾の因縁を以て彼國に生ずるを得るや。『答ふ』經に依りて之を案するに四の因縁を具す。一には自善根の因力、二には自願求の因力、三には彌陀本願の緣、四には衆聖の助念の緣なり。『釋迦の護助は平等覺經に出づ。山

【六】臨終の念相を明す。

海慧菩薩の護持は十往生經に出づ云云。

【六】第五に臨終の念相を明さば、問ふ、二下品の人ハ臨終に十念して即ち往生を得。言ふ所の十念とは何等の念ぞや。答ふ、三緯和尙の云はく、「但阿彌陀佛の若ハ總相、若ハ別相を憶念して所緣に隨つて觀じ、十念を經るに他の念想の間雜する無し、是を十念と名く」と。又云はく、「十念相續する者は、是れ聖者の一つの數の名なるのみ。但能く念を積み思を凝し他事を緣ぜざれば便ち業道成辨して、亦未だ勞しく之が頭數を記さずと。又云はく、若し久行の人の念は多く應に此に依るべし。若し始行の人の念は數を記すも亦好し。此も亦聖教に依る」と。上。有が云はく、「一心に南無阿彌陀佛と稱念し、此八字を經る頃は一念と名く」と。問ふ、二彌勒所問經の「十念の往生は彼一の念は深廣なり」如何が今十聲の念佛往生を得と云ふや。答ふ、諸師の所釋不同なり。寂法師の云はく、「此專心に佛名を稱する時、自然に是の如きの十を具足すと説く。必ずしも一一に別に、慈等を緣するに非ず。亦彼慈等を數へて十と爲すに非ず。云何が別に緣せずして而も十を具足する。戒を受けんと欲するに三歸を稱する時、別に離殺等の事を緣せずと雖も、而も能く具に離殺等の戒を得るが如し。當に知るべし、此中の道理も亦爾なり。又十念を具足して南無阿彌陀佛と稱すべきは、能く慈等の十念を具足して南無佛と稱すと謂ふことを。若し能く是の如くんば所稱の念に隨つて若ハ一稱若ハ多稱皆往生を得」と。感法師の云はく、「各是れ聖教に互に往生淨土の法門を説いて、皆淨業を成せしむ。何の因か彼を將て是と爲し、

此を斥うて非と言はん。但自ら經を解せずして亦乃ち諸の學者を惑す」と。迦才師の云はく、「此れ之十念は現在の時に作し、觀經の中の十念は臨命終の時に作す」と。上。意は感師に同じきなり。問ふ、「雙觀經」に云はく、「乃至一念して往生を得」と。此十念と云何が乖角するや。答ふ、「感師の云はく、「極惡業の者十を滿つれば得生す、餘の者は乃至一念だも亦生す」と。問ふ「生れてより來諸の惡を作して一善を修せざる者、命終の時に臨んで纔に十聲の念もて、何ぞ能く罪を滅して永く三界を出でて即ち淨土に生ずるや。答ふ、「那先比丘の佛に問ふが如し。經に云はく、「時に彌蘭王なる有り、羅漢、那先比丘に問うて言はく、「人世間に在りて惡を作ること百歳に至り、死に臨む時念佛すれば死して後天に生ず、我是説を信せず」復言はく、「一の生命を殺せば死して即ち泥梨の中に入ると、我亦信せず」と。比丘、王に問ふ、「人小石を持して、水中に置在くが如きは石浮ぶや没むや」王の言はく、「石没むなり」那先の言はく、「今百丈の大石を持して船の上に置在くが如きは没むや不や」王の言はく、「没まざらん」那先の言はく、「船の中の百丈の大石は船に因りて没むを得ず、人本惡有り」と雖も一時念佛すれば泥梨に没せずして、便ち天上に生ず。何ぞ信ぜざらんや。其小石の没むは、人の惡を作して經法を知らざれば、死して後に便ち泥梨に入るが如し、何ぞ信ぜざらんや」王の言はく、「善い哉善い哉」比丘の言はく、「兩人俱に死して一人は第七梵天に生じ、一人は彌寶國に生ずるが如き、此二人は遠近異りと雖も、死するときは則ち一時なれば到るは一雙飛鳥有りて、一は高樹の上に於て止り、一は卑樹

の上に於て止る、兩鳥一時に俱に飛ぶは、其影俱に到るが如きのみ。愚人の如きは悪を作れば殃を得ること大いに、智人の悪を作れば殃を得ること少なるとは燒鐵地に在るに一人は燒を知り、一人は知らずして兩人俱に取るが如し。然るに知らざる者は、手爛ること大なり、知る者は少なく壞す。悪を作るも亦爾り、愚者は自ら悔ゆること能はず、故に殃を得ること大なり、智者は悪を作れば不當なりと知る、故に日に自ら悔を爲す其罪少なり」と。  
 已。十念に衆の罪を滅し、佛の悲願の船に乘じ須臾に往生を得る、其理も亦然るべし。又十疑に釋して云はく、「今三種の道理を以て拔草するに、輕重の定らざるは時節の久近の多少に在らず、云何が三と爲す。一には在心、二には在縁、三には在決定。在心とは造罪の時は自ら虚妄顛倒の心より生ず、念佛の心は善知識に従つて阿彌陀佛の眞實功德の名號を説くを聞く心より生ず。一は虚は一は實なり、豈相比ぶるを得んや。譬へば萬年の暗室に日光暫く至れば而も闇頓ちに除くが如し。豈久しきより來闇有りて背て滅せざらんや。在縁とは造罪の時は虚妄癡闇の心虚妄の境界を緣する顛倒心より生ず。念佛の心は佛の清淨眞實功德の名號を聞いて、無上菩提を緣する心より生ず。一は眞は一は偽なり、豈相比ぶるを得んや。譬へば入有りて毒箭に中られ、箭深く毒磔うして肌を傷り、骨に致るに、一たび滅除藥の鼓聲を聞けば即ち毒の箭除くが如し。豈深毒なるを以て背て出でざらんや。在決定とは造罪の時は有間心有後心を以てなり。念佛の時は無間心無後心を以て遂に即ち命を捨つれば善心猛利なり、是を以て即ち生ず。譬へば十圍の素は千夫も制せざれども、童子劍



を擗るに須臾に兩段するが如し。又千年の積草に大豆ばかりの火を以て之を焚く時は即ち  
 盡くるが如し。又人有りて一生より已來十善の業を修して應に天に生ずるを得べき、臨終の  
 時一念決定の邪見を起せば即ち阿鼻地獄に墮つるが如し。惡業の虛妄すら猛利なるを以て  
 の故に尙能く一生の善業を排つて惡道に墮せしむ。豈況んや臨終の猛利心の念佛、眞實無聞  
 の善業無始の惡業を排ふ能はずして、淨土に生るるを得ずんば、是處有る無し」と。已。  
 又「安樂集」に七喻を以て此義を顯す。一には少火の喻前の如し。二には鼯たる者も他の  
 船に寄載すれば、風帆の勢に因りて一日に千里に至る。三には貧人一の瑞物を獲て而も  
 以て王に貢す、王慶んで重賞すれば斯須の頃に富貴望を盈つ。四には劣夫も若し輪王の  
 行に従へば、便ち虚空に乗じて飛騰自在ならん。五には十圍の索の喻へば前の如し。六に  
 は鶴鳥水に入れば魚蚌斯れ斃れ皆死す、犀角諸の死者に觸るれば還りて活す。七には黃鶻  
 子安を喚んで子安還りて活す。豈墳の下に千齡なるも決して甦へるべき無しと言ふを得べ  
 けんや。一切の萬法に皆自力他力自攝他攝有りて、千開萬閉無量無邊なり。豈有礙の識を  
 以て彼無礙と法を疑ふを得んや。又五不思議の中に佛法は最も不可思議なり。豈三界の繫業  
 を以て重しと爲して、彼少時の念法を疑つて輕しと爲さんや。已上今これに加へて云はく、  
 「一には梅檀樹の出成する時は能く四十山旬の伊蘭林を變じて普く皆香美ならしむ。二  
 には師子の筋を用ひて以て琴絃と爲し、音聲一たび奏すれば一切の餘絃悉く皆斷壞す。  
 三には一斤の石汁は能く千斤の銅を變じて金と爲す。四には金剛は堅固なりと雖も殺羊の

角を以て之を扣くときは、則ち灌然として氷のごとく泮く。已上滅。五には雪山に草有り名けて忍辱と爲す、牛若し食すれば即ち醍醐を得と。六には沙訶藥に於て但見ること有る者は壽無量を得乃至至念する者宿命智を得と。七には孔雀は雷の聲を聞いて即ち有身を得と。八には尸利沙は昴星を見るときは則ち果實を出生す。已上生。九には住水寶を以て其身を瓔珞すれば深水の中に入れても而も没溺せず。十には沙磔は小なりと雖も尙浮ぶこと能はず、盤石は大なりと雖も船に寄れば能く浮ぶ。已上總譬。諸法の力用難思なる、是の如し、念佛の功力之に准じて疑ふ莫れ。『問ふ』臨終の心念其力幾許なれば能く大事を成すや。『答ふ』其力は百年の業に勝る。故に『大論』に云はく、是心は時の頃く少なりと雖も而も心力の猛利なる火の如く毒の如し、少なりと雖も能く大事を成す。是れ死に垂とする時の心は決定して勇健なり。故に百歳の行力に勝る、是後心を名けて大心と爲す。身及び諸根を捨つるの事急なるを以てなり。故に人の陣に入るに身命を惜まざるを名けて勇健と爲すが如く、阿羅漢も是身の著を捨つる故に阿羅漢道を得るが如し。已。此に由りて『安樂集』に云はく、『一切の衆生臨終の時に刀風形を解き死苦來逼す、大怖畏を生じ乃至便ち往生を得』と。『問ふ』深き觀念の力は罪を滅すること然るべし、云何が佛號を稱念して無量の罪を滅せん。若し爾らば指を以て月を指すに、此指應に能く闇を破るべきや。『答ふ』緯和尙釋して云はく、『諸法萬差なれば一概なるべからず、自ら名の法に即する有り、自ら名の法に異なる有り。名の法に即すとは、諸佛菩薩の名號、禁呪の音聲、修多羅の章句等の如きは

【檀越】ダーナパ  
チ(Dānapati)施  
主と譯す。

なり。林呪の辭に日出東方、乍赤乍黃、假令西亥行禁と曰へば患者も亦愈ゆるが如し。又人有りて狗に嚙はるに虎の骨を炙りて、之を慰せば患者即ち愈ゆるが如き。或は時に骨無くんば好く掌を擽いて之を摩し、口中に喚びて虎來虎來と言へば患者亦愈ゆる。或は復人有りて脚轉筋を患ふ、木瓜の杖を炙りて之を慰せば患者即ち愈ゆる。或は木瓜無くんば手を炙りて之を摩し、口に木瓜と喚べば患者亦愈ゆるなり。名法に異るとは指を以て月を指すが如き是なり」と。上。『要決』に云はく、「諸佛の願行此果の名を成すは但能く號を念すれば具に衆の徳を苞ぬ。故に大善を成す」と。已上彼文に淨名成實の文を引け。問ふ、『若し下下品の五逆罪を造くれども佛を十念するに由つて往生を得とは云何。』佛藏經の第三に云はく、「大莊嚴佛の滅後に四の惡比丘有り、第一義無所有畢竟空の法を捨て外道尼捷子の論に貪樂す。是人命終して阿鼻獄に墮し、仰いで臥し伏して臥し左脇に臥し、右脇に臥して各九百萬億歲熱鐵の上に於て燒く、燃堆爛死し已りて更に灰地獄、大灰地獄、活地獄、黑繩地獄に生じ、皆上の歳數の如く苦を受く。黑繩に於て死すれば還りて阿鼻獄に生ず。彼家に出家して親近せしもの、并に諸の檀越凡そ六百萬億の人、此四師に俱に生じ俱に死して大地獄に在りて諸の燒煮を受く。劫盡くれば他方の地獄に轉生し、劫成れば還りて此間の地獄に生ず。久久として地獄を免れて人中に生ずれども、五百世生より而も首じ後に一切明王佛に值うて出家し、十萬億歲勤修し精進すること頭燃を救ふが如くすれども順忍を得ず、況んや道果を得んや。命終して還阿鼻地獄に生ず。後に於て九十九億の佛に值へども順忍

たも得ず。何を以ての故に佛深法を説くに、是人信ぜずして賢聖持戒の比丘を破壊し、遠  
 逆し破毀し其過惡を出す、破法の因縁なれば法として應當に爾るべし。已上略抄なり四の比  
 比丘將去比丘跋じふまんげんくさつねん十萬億歲頭燃を救ふが如きも尙罪を滅せずして還りて地獄に生ず。如何が念  
 離陀比丘なり。佛の一聲十聲もて即ち罪を滅して淨土に往生するを得るや。答ふ、「感師の釋に云はく、  
 「念佛は五縁に由る故に滅罪す。一には發大乘心の縁。二には願生淨土の縁なり、小乘  
 の人は十方の佛有るを信ぜざるが故に。三には阿彌陀佛の本願の縁。四には念佛の功德の  
 縁なり。彼比丘は但四念處の觀を作す故に。五には佛の威力加持の縁なり。是故に滅罪し  
 て淨土に生ずるを得。彼小乘の人は爾らざる故に罪を滅する能はず」と。抄問ふ、「若し爾  
 らば云何が『雙觀經』に十念の往生を説いて、唯除五逆誹謗正法と云ふや。答ふ、「智儼  
 等の諸師の云はく、「若し唯逆を造る者は十念に由るが故に得生し、若し逆罪を造り亦法を  
 謗せる者は往生を得ず」と。有が云はく、「五逆の不定業を造れば往生を得、五逆の定業を造  
 れば往生せずと、是の如く十五家の釋有り」と。感法師は諸師の釋を用ひず自ら云はく、「若  
 し逆を造らざる人は念の多少を論ずるに、一聲十聲に俱に淨土に生ず。若し逆を造る人  
 は必ず須らく十を滿つべし。一を闕けば生ぜず故に除と言ふなり」と。已上今試に加釋せ  
 ば「餘處には遍く往生の種類を顯し、本願には唯定生の人を擧ぐ、故に爾らずんば正覺を  
 取らじと云ふと。餘人の十念は定めて往生を得、逆者の一念は定めて生ずる能はずと。逆の  
 十と餘の一とは、皆是れ不定なるが故に、願には唯餘人の十念を擧げ、餘處には兼て逆の十



と餘の一を取ると。此等の義未だ決せじ、別に應に思擇すべし。問ふ、「逆者の十念は何が故ぞ不定なるや。」答ふ、「宿善の有無に由りて念力別なるが故に。又臨終尋常とは念の時別なるが故なり。問ふ、「五逆は是れ順生業にして報時俱に定まる。云何が滅するを得んや。」答ふ、「感師之を釋して云はく、「九部不了教の中には諸の業果を信ぜざる凡夫の爲に、密意もて説いて定報の業有り」と言ふ。諸の大乗の了義教の中に於て一切の業悉く皆不定なりと説く。『涅槃經』の第十八卷に云ふが如し、「耆婆阿闍世王の爲に懺悔の法もて罪滅するを得と説く」と。又云はく、「臣佛説を聞くに一の善心を修すれば百種の惡を破ること、少しき毒藥の能く衆生を害するが如し。小善も亦雨り、能く大惡を破る」と。又三十一に云はく、「善男子、諸の衆生有りて業縁の中に於て心に輕じて信ぜざる有り、彼を度せんが爲の故に是の如きの説を作す。善男子、一切の作業に輕有り重有り、輕重の二業に復各二有り。一には決定、二には不決定なり」と。又言はく、「或は重業の輕と作るを得べき有り、或は輕業の重と作るを得べき有り。有智の人は智慧の力を以て能く地獄極重の業をして現世に輕受せしむれども、愚癡の人は現世の輕業も地獄に重受す。阿闍世王は罪を懺悔し已れば地獄に入らず、鶖掘摩羅は阿羅漢を得る」と。『瑜伽論』に説くが如し、「未だ解脱を得ざるを説いて決定業と名く、已に解脱を得るを不定業と名く。是の如き等の諸の大乗經論に五逆罪等を説いて、皆不定と名く、悉く消滅するを得」と。轉受輕受の相は具しく所の文に云はく、「智者は轉重輕受す」と。下品生の人は但十念し已りて即ち淨土に生

【七】 麤心妙果を  
明す。

す、何の處にして軽く受くるや。『答ふ』、『雙觀經』に彼土の胎生の者を説いて云はく、『五百歳の中に三寶を見ず、諸の善本を供養し修するを得ず、而も此を以て苦と爲す、餘の樂有りと雖も猶彼處を樂はず』と。上。之に准ずるに應に知るべし、七七日六劫十二劫佛を見ず。法を聞かざる等を以て輕受の苦と爲すのみ。『問ふ』、『臨終に一たび佛名を念するが如きも、能く八十億劫の衆の罪を滅すと爲さば尋常の行者も亦然るべきや。』『答ふ』、『臨終の心力は強くして能く無量の罪を滅す、尋常の稱名は應に彼の如くなるべからず。然るに若し觀念成ずれば亦無量の罪を滅す。若し但稱名せば心の淺深に隨つて其利益を得るに應に差別有るべし、其には前の利益門の如し。』『問ふ』、『何を以て知るを得るや。』『淺心の念佛も亦利益有りとは。』『答ふ』、『首楞嚴三昧經』に云はく、『大藥王有り名けて滅除と曰ふが如きは、若し鬪戰の時に以て鼓に塗れば、諸の箭射を被り刀矛に傷られしも、鼓の聲を聲けば箭出でて毒除くを得。是の如く菩薩首楞嚴三昧に住する時に、名を聞かん者は貪恚癡の箭自然に拔出し、諸の邪見の毒皆悉く除滅して一切の煩惱復動發せず。』已上諸法の眞如實相を觀見して

凡夫法、佛法不二なるを見る。是菩薩既に兩り、何に況んや佛をや、聞名既に兩り。何に況んや念するをや。應に知るべし、淺心の念する利益も亦虚しからざること。』

【七】 第六に『麤心妙果』とは、『問ふ』、『若し菩提の爲に佛に於て善を作し妙果を證得するは理必ず然るべし。若し人天の果の爲に善根を修せば云何。』『答ふ』、『或は染或は淨、佛に於て善を修すれば遠近有りと雖も必ず涅槃に至る。故に『大悲經』の第三に、『佛阿難に告げて

【生死三有】三有とは欲界、色界、無色界のこと、即ち三界の迷の生死

言はく、若し衆生有りて生死三有の愛果に樂著し、佛の福田に於て善根を種うる者は是の如きの言を作さん。此善根を以て願くば我般涅槃する莫れと。阿難是人若し涅槃せんば是處有ること無し。阿難是人涅槃を樂求せずと雖も然も佛の所に於て諸の善根を種うれば我説く是人は必ず涅槃を得ん」と。問ふ、「所作の業は願に隨つて果を感ず、何ぞ世報を樂つて出世の果を得んや。」答ふ、「業果の理必ずしも一同ならず、諸の善業を以て佛道に廻向するは、是れ即ち作業の心に隨つて而も轉ずるなり。雞狗の業を以て天の樂を樂求するは、是れ即ち惡見なれば業をして轉ぜしめず。是故に佛に於て諸の善業を修すれば意樂異りと雖も必ず涅槃に至る。故に彼經に譬を擧げて言はく、「譬へば長者時に依りて種を良田の中に下し、時に隨つて灌溉し常に善く護持す、若し是長者餘の時の中に於て彼田の所に到り、是の如きの言を作さく、拙ひ哉種子汝種と作すこと莫く、生ずること莫く長ずること莫れと。然るに彼種を種うれば必ず應に果を作すべし、果實無きに非ざるが如し」と。略抄。問ふ、「彼何の時に於て般涅槃を得んや。」答ふ、「設ひ久久く生死に輪廻すと雖も、善根亡びざれば必ず涅槃を得。故に彼經に云はく、「佛阿難に告げたまはく、捕魚師は魚を得るが爲の故に大池水に在りて鉤餌を安置し、魚をして吞食せしめ、魚吞み食し已りて池中に在りて雖も久からずして當に出づべし」と。乃至阿難一切衆生諸佛の所に於て敬信を生ずるを得て、諸の善根を種え布施を修行し、乃至心を發して一念の信を得れば、復餘の惡不善業の爲に之れ覆障せられて、地獄畜生餓鬼に墮在すと雖も乃至諸佛世尊佛眼を以て此衆生

を觀見するに、發心勝れるが故に地獄より之を抜いて出さしむ、既に拔出し已りて涅槃の岸に置く」と。問ふ、「此の如く經の意は敬信を以ての故に遂に涅槃を得、若し爾らば但一たび聞くは應に涅槃の因にあらざるべし。既に爾らば云何が華嚴の偈に云はく、「若し諸の衆生有りて未だ菩提心を發さざるも一たび佛名を聞くを得れば決定して菩提を成するや。」」答ふ、「諸法の因縁は不可思議なること、譬へば孔雀の雷の震聲を聞けば即ち有身を得。又尸利沙果の先に形質無きも昴星を見る時は、果則ち出生して長さ五寸に足るが如し。佛の名號に依りて即ち佛因を結ぶも亦復是の如し。此微因より遂に大果を著すこと彼尼拘陀樹の芥子許りの種より、枝葉を生じて遍く五百兩の車を覆ふが如し。淺近の世法すら猶思議し難し。何に況んや出世甚深の因果をや。唯應に信仰すべし疑念すべからず。」問ふ、「染心を以て如來を緣する者も亦益有りや。」答ふ、「寶積經」の第八に「密迹力士寂意菩薩に告げて云はく、耆域醫王諸の藥を合集して以て藥草を取りて童子の形を作る、端正殊好にして世の希有なり。所作安諦にして所有究竟す、殊異無比にして往來周旋す。住立安坐し、臥寢經行するに缺漏する所無く、顯變する所の業有り。或は大豪の國王太子大臣百官貴姓長者有りて、耆域醫王の所に來到し、藥童子を視て與共に歌ひ戯れて、其顔色を相見れば病皆除くを得て、便ち安穩寂靜無欲なるを致す。寂意且く其耆域の醫王の世間に療治するを觀ぜよ。其餘の醫師は及ぶ能はざる所なり。是の如く寂意若し菩薩法身を奉行すれば、陰種諸入を信解し觀察する。假使衆生姪怒癡盛にして、男女大小に欲相慕樂して即ち共



に相媿めども、食欲靡勞、悉く休息を得、法身を奉行す。菩薩すら尙爾り、何に況んや法身を證得するをや」と。問ふ、「如し欲想をもて縁するに此利益有らば、誹謗し惡厭するも亦益有りや。」答ふ、「既に姪怒癡と云ふ、明けし唯欲想のみに非ざるを。又一如來、祕密藏經」の下卷に云はく、「寧ろ如來に於て不善業を起すも外道邪見の者の所に於て施作し供養するに非ざれ。何を以ての故に、若し如來の所に於て不善業を起して當に悔ゆる心有りて、究竟して必ず涅槃に至るを得べし。外道の見に隨へば、當に地獄餓鬼畜生に墮すべし」と。問ふ、「此文は便ち因果の道理に違して亦復衆生の妄心を増す、如何が悪心を以て大涅槃の樂を得んや。」答ふ、「惡心を以ての故に三惡道に墮す、一たび如來を縁するを以ての故に、必ず涅槃に至る、是故に因果の道理に違せず。謂く彼衆生地獄に墮つる時に佛に於て信を生じて追悔の心を生ずれば此に由りて展轉して必ず涅槃に至ると。大悲經。染心をもて如來を縁する利益すら尙是の如し、何に況んや淨心をもて佛の大恩徳を一たび念じ、一たび稱せんをや。之を以て知んぬべし。問ふ、「諸文に説く所の菩提涅槃は三乘の中に於て是れ何れの果なりや。」答ふ、「初は機に隨つて三乘の果を得たりと雖も究竟すれば、必ず無上の佛果に至る。『法華經』に云ふが如し、「十方佛土の中には唯一乘法のみ有り、二も無く亦三も無し、佛の方便の説を除く」と。又『大經』に如來の決定の説の義を明して云はく、「一切衆生に悉く佛性有り、如來は常住にして變易有ること無し」と。又云はく、「一切衆生は定めて阿耨菩提を得るが故に、是故に我一切衆生に悉く佛性有りと説く」と。又云はく、「一切

【八】 諸行の勝劣を明す。

衆生は悉く皆心有り。凡そ心有る者は、定めて當に阿耨菩提を成ずるを得べし」と。問ふ、「何が故に諸文に説く所同じからずして、或は一たび佛を聞けば定めて菩提を成ずと説き、或は應に勤修すること頭燃を救ふが如くすべしと説く。又華嚴の偈に云はく、「人の他寶を數ふるに自ら半錢の分無きが如し。法に於て修行せざれば多聞も亦是の如し。」と。答ふ、「若し速に解脱せんと欲するも勤めずんば分無きが如し。若し永劫の囚を期すれば一たび聞くも亦虚しからず。是故に諸文の理相違せず。」

【八】 第七に諸行の勝劣とは、問ふ、「往生の業の中には念佛を最と爲す、餘業の中に於ても亦最と爲すや。」答ふ、「餘の行法の中にも此れ亦最勝なり、故に『觀佛三昧經』に六種の誓有り、「一には云はく、佛阿難に告げたまはく、誓へば長者將に死なんとす、久しからずして諸の庫藏を以て其子に委付す、其子得已りて隨意に遊戯し、忽ち一時に於て王難有りて無量の衆賊藏物を競取するに値ふ。唯一の金有り、乃ち是れ閻浮檀紫紫金なり、重さ十六兩金銀の長短も亦十六寸なり。此金一兩の價直餘寶の百千萬兩なり。即ち穢物を以て眞金を纏裹して泥團の中に置く、衆賊見已りて是れ金なるを識らず、脚踐して而も去る賊去るの後財主金を得、心大いに歡喜するが如く、念佛三昧も亦復是の如し、當に之を密藏すべし。二には誓へば貧人王の寶印を執りて逃走して樹に上り、六兵之を追ふ。貧人見已りて即ち寶印を呑む。兵衆疾く至り樹をして倒僻せしむ、貧人地に落つれば身體散壞して唯金印のみ在るが如く念佛の心印も壞れざるは亦復是の如し。三には云はく、誓へば長

者將に死なんとす。久しからずして一りの女子に告ぐ、我今寶有り、寶中の上なる者有り。汝此寶を得て密藏して堅く玉をして知らしむる莫らしめよ。女父の勅を受け摩尼珠及び諸の珍寶を持して之を糞穢に藏す。室家の大小皆亦知らず。世の飢饉に値ふに如意珠を持すれば意に隨つて即ち百味の飲食を雨す。是の如く種種意に隨つて寶を得るが如く、念佛三昧の堅心動かざるも亦復是の如し。四には云はく、譬へば大旱に雨を得る能はざるに一の仙人行りて咒を誦すれば神通力の故に天甘雨を降し、地踊泉を出すが如く念佛を得る者は善咒の人の如し。五には云はく、譬へば力士數王法を犯して囹圄に幽閉せらる。逃げ海邊に到り鬻の明珠を解いて持し、船師を雇ひ彼岸に到れば安穩にして懼れ無きが如く、念佛を行する者は、大力士の心王の鎖を免れて彼慧岸に到るが如し。六には云はく、譬へば劫盡きて大地洞燃たるも、唯金剛山のみ摧破すべからず。還りて木際に住するが如し。念佛三昧も亦復是の如し。是定を行する者は過去の佛の實際海の中に住す」と。已上又『般若經』の問事品に念佛三昧を説いて云はく、「常に當に習持すべし。常に當に守りて復餘の法に隨はざるべし。諸の功德の中に最尊第一なり」と。已不退轉の位に至るに難易の二道有り。易行道と云ふは即ち是れ念佛なり。故に『十住婆娑』の第三に云はく、「世間の道に難有り易有り。陸路の歩行は即ち苦しく、水道の乗船は即ち樂しきが如く苦提の道も亦是の如し。或は勤行精進する有り、或は信方便の易行を以て疾く阿惟越致に至る有り。乃至阿彌陀等の佛及び諸の大菩薩の名を稱し一心に念するも亦不退轉を得ん」と。已上文の

中に過去現在の一、百餘の佛、彌勒、金剛藏、淨名、無盡意、跋陀婆羅、文殊、妙音、師子吼、香象、常精進、觀世音、勢至等の、百餘の大菩薩を擧げて其中に廣く彌陀佛を讚じて諸の行の中に於て唯念佛の行は修し易くして上位を證す、知んぬ是れ最勝の行なるを。又『寶積經』の九十二に云はく、「若し菩薩有り多く衆務を營んで七寶の塔を造る」と三千大千世界に遍滿せん。是の如きの菩薩は我をして歡喜を生ぜしむる能はず。亦我を供養し恭敬するに非ず。若し菩薩有りて婆羅蜜相應の法に於て乃至一の四句の偈を受持し讀誦し修行して人の爲に演說せば是人は即ち我を供養すと爲す。何を以ての故に諸佛の菩提は多聞より生ず、衆勢よりして生を得ず。至。若し一の閻浮提に營事の菩薩有らば一の讀誦し修行し演說せる菩薩の所に於に、應當に親近し供養し承事すべし。若し一の閻浮提に承事すべし。是の如きの善業は如來隨喜し如來悅可す。若し智慧を勤修する菩薩に於て承事し供養せば當に無量福德の聚を獲べし。何を以ての故に智慧の業は無上最勝にして一切三界の所行に出過す」と、『大集月藏分』の偈に云はく、「若し人百億の諸佛の所にして多くの歳數に於て常に供養すとも、若し能く七日蘭若に在りて根を攝して定を得るは福は彼よりも多し。至。閑靜無爲は佛の境界なり。彼に於て能く淨菩提を得。若し人彼住禪の者を謗すれば是を諸の如來を毀謗すと名く、若し人塔を破ること多百千、及び百千の寺を焚燒すとも若し住禪の者を毀謗する者有らば其罪は甚だ多きこと彼よりも過ぎたり。若し住



【阿蘭若】梵音ア  
ーラヌヤ(Aranya)  
閑靜處と譯す。比  
丘の住處清閑にし  
て修行に適する處  
をいふ。

【九】信毀の因縁  
を明す。

禪の者に飲食衣服及び湯藥を供養する者有らば是人は無量の罪を消滅して亦三惡道に墮せず。是故に我今普く汝に告ぐ、佛道を成ぜんと欲せば常に禪に在れ。若し阿蘭若に住する能はずんば應當に彼人を供養すべし。上。汎爾の禪定すら尙既に是の如し、況んや念佛三昧は是れ王三昧なるをや。問ふ。若し禪定の業は讀誦解義等に勝ぐるるならば、云何が法華經の分別功德百品に八十萬億那由他劫に修する所の前五波羅蜜の功德を以て、法華經を聞いて一念信解する功德に較量すれば百千萬億分の一分なり。何に況んや廣く他の爲に説かんとや。答ふ。此等の諸行に各淺深有るは、謂く偏と圓との教に差別有るが故なり。若し當教に勝劣を論せば前の如し。若し諸教相對すれば偏教の禪定は圓教の讀誦の事業に及ばず、大集寶積は一教に約して論じ法華の校量は偏圓相望す。是故に諸文の義相違せず。念佛三昧も亦復是の如し。偏教の三昧は當教には勝と爲り圓人の三昧は普く諸行に勝ぐる。又定に一有り。一には慧相應の定、是を最勝と爲す。二には暗禪未だ勝と爲すべからず。念佛三昧は應に是れ初の攝なるべし。

【九】第八に信毀の因縁とは『般舟經』に云はく、「獨り一佛の所に於て功德を作すのみにあらず。若は二若は三若は十に於てせず、悉く百佛の所に於て是三昧を聞き、却りて後世の時にも是三昧を聞く者經卷を書學し誦持して最後に守ること一日一夜せば其福計るべからず。自ら阿惟越致を致す。願する所の者は得たり」と。問ふ、「若し爾らば聞く者は決定して應に信すべし。何が故ぞ聞くと雖も信不信有るや。答ふ、「無量清淨覺經」に

云はく、「善男子善女人の無量清淨佛の名を聞いて歡喜し踊躍して身毛起つと爲し、跋出するが如き者は皆悉く宿世の宿命に已に佛事を作すものなり。其れ人民有りて疑つて信ぜざる者は皆惡道の中より來りて殃惡未だ盡きず。此れ未だ解脱を得ざるものなり」略又「大集經一の第七に云はく、「若し衆生有りて已に無量無邊の佛の所に於て衆の徳本を殖ゑて乃ち是來の十力四無所畏不共の法三十二相を聞くを得ん。乃ち下劣の人は是の如きの正法を聞くを得ること能はず。假使聞くを得るも未だ必ずしも信ずること能はず」と。已當に知るべし、生死の因縁は思議すべからず。薄徳にして聞くを得るものは其縁を知り難し、烏豆聚に一の綠豆有るが如し。但彼聞くに雖も而も信解せざるは是れ即ち薄徳の致す所なるのみ。問ふ、「佛往昔に於て具に諸度を修め尙八萬歳に於て此法を聞く能はず。云何が薄徳にして輒く聽聞するを得ん。設ひ希有なりと許すも猶道理に違するや。」答ふ、「此義知り難し、試に之を案するに云はく、「衆生の善惡に四位の別有り。一には惡用、偏に増す。此位に法を聞くこと無し。法華に云ふが如し、「増上慢の人は二百億劫常に法を聞かず」と。二には善用、偏に増す。此位は常に法を聞いて地住已上の大菩薩等の如し。三には善惡交際、謂く捨凡入聖の時に垂として此位の中に一類の人有りて法を聞くこと甚だ難し、適聞いて即ち悟る。常啼菩薩須達の老女等の如し。或は魔の爲に障られ、或は自惑の爲に障へられて聞見を隔つと雖も久しからずして即ち悟る。四には善惡容預、此位の善惡は同じく是れ生死流轉の法なるが故に多く法を聞き難し。惡増に非ざるが故に一向に聞

【四生】胎生、卵生、濕生、化生

【五智】法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智

く無きに非ず。交際に非ざるが故に聞くと雖も巨益無し。六趣四生蠢蠢の類是なり。故に上人の中にも亦聞き難き有り凡愚の中にも亦聞く者有り。此れ未だ決せず後賢取捨せよ。』問ふ、「不信の者は何の罪報を得るや。」答ふ、「稱揚諸佛功德經」の下巻に云はく、「其れ阿彌陀佛の名號功徳を讚歎し稱揚するを信ぜずして而も謗毀する者有らば、五劫の中に當に地獄に墮し具に衆苦を受くべし」と。問ふ、「若し深信無くして疑念を生ずる者は終に往生せざるや。」答ふ、「若し全く信ぜず彼業を修せず願求せざる者は理として應に生ずべからず。若し佛智を疑ふと雖も而も猶彼土を願じ、彼業を修する者は亦往生を得。」『雙觀經』に云ふが如く、「若し衆生有りて疑惑の心を以て諸の功徳を修し、彼國に生ぜんと願すれども佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了らざれば此諸智に於て疑惑して信ぜざるなり。然れども猶罪福を信じ善本を修習して其國に生ぜんと願ふ。此諸の衆生は彼宮殿に生じて壽五百歲當に佛を見ず經法を聞かず菩薩聲聞聖衆を見ざるべし。是故に彼國土に於て之を胎生と謂ふ」と。上。佛の智慧を疑へば罪は惡道に當る。然るに願に隨つて往生すれば是れ佛の悲願の力なり。『清淨覺經』に此胎生を以て中輩下輩の人と爲す。然れども諸師の所釋は繁出する能はず。問ふ、「佛智等と言ふは其相云何。」答ふ、「儼興師は佛智經の五法を以て今五智に名く、謂く、清淨法界を佛智と名け、大圓鏡等の四を以て次の如く不思議等の四に當るなり。玄一師は佛智は前の如し後の四智を以て成事智等の四に逆對す。餘の異解有れども之を煩はしくすべからず。』

【一〇】 助道の資縁を明す。

【三業】 身口意の三業なり。

【一〇】 第九に助道の資縁とは、問ふ、「凡夫の行人は衣食を須ふるを要す。此れ小縁なりと雖も能く大事を辨ず。裸鉢にして安からずんば道法焉んぞ在らんや。」答ふ、「行者に二行り。謂く在家出家なり。其在家の人は家業自由なれば餐飯衣服何ぞ念佛を妨げん。『木櫛經』の瑠璃王の行の如し。其出家の人も亦三類有り。若し上根の者は草座鹿皮一茶一菓有り。雪山大士の如き是なり。若し中根の者は、常に乞食糞掃衣。若し下根の者は、檀越信施但少しく所得有れば即便足るを知る。具には止觀の第四の如し。況んや復若し佛弟子正道を專修して、食求する所無き者は自然に資縁を具す。『大論』に云ふが如し。譬へば比丘に食求する者は供養を得ず。食求する所無きときは則ち乏短する所無きが如し。心も亦是の如し。若し分別取相するときは則ち實法を得ず」と。又「大集月藏分」の中に欲界の六天日月星宿天龍八部各佛前に於て誓願を發して言はく、「若し佛の聲聞の弟子法に住し法に順じ、三業相應して而も修行する者我等皆共に護持し養育し所須を供給して乏しき所無からしむ。若し復世尊の聲聞の弟子積聚する所無くんば護持し養育せん」と。又云はく、「若し復世尊の聲聞の弟子の積聚に住し乃至三業と法と相應せざる者は亦當に棄捨し復養育せざるべし」と。問ふ、「凡夫は必ずしも三業相應せず若し缺漏する有らば應に依怙無かるべきや。」答ふ、「是の如き問難は是れ則ち懈怠なり。道心無き者の致す所なり。若し誠に警提を求め、誠に淨土を欣ぶ者は寧ろ身命を捨るも草芥戒を破らんや。應に一世の勤勞を以て永劫の妙果を期すべし。況んや復設ひ戒を破ると雖も其分無きに非ず。同じき經に佛の言ふが如



し。若し衆生有りて我爲に出家し鬚髮を剃除して袈裟を被服せば、設ひ持戒せざるも彼等  
 悉く已に涅槃の印の爲に印せらるるなり。苦し復出家して持戒せざる者に非法を以て而  
 も惱亂罵辱毀譽を作し、以て手づから刀杖にて打縛し斫截し若し衣鉢を奪ひ及び種種資生  
 の具を奪ふ者有らば、是人は則ち三世の諸佛の眞實の報身を壞し則ち一切の天人の眼目を  
 挑るなり。是人は諸佛所有の正法三寶の種を隱没せんと欲するが爲の故に。諸の天人を  
 して利益を得ずして地獄に墮せしむるが故に。三惡道増長して盈滿するが爲の故にと云ふ。  
 爾時復一切の天龍乃至一切の迦吒富單那人非人等有りて、皆悉く合掌して是の如きの言  
 を作す。我等佛の一切の聲聞の弟子に於て、乃至若し復禁戒を持せざるも鬚髮を剃除し袈  
 裟の片だも著る者は師長の想を作して護持し養育して諸の所須を與へて乏少する無から  
 しめば、若し餘の天龍乃至迦吒富單那等有りて其惱亂を作し。乃至惡心を以て之を眼視れ  
 ば、我等悉く共に彼天龍富單那等の所有の諸相を缺滅し醜陋ならしめん。彼をして復我  
 等と共に住し共に食するを得ざらしめん。亦復同處にして戲笑するを得ず。是の如く擯罰  
 せんとし。取意。又云はく、爾時、世尊上首の彌勒及び賢劫の中一切の菩薩摩訶薩に告げ  
 て言はく、「諸の善男子我昔菩薩の道を行ぜし時曾て過去の諸佛如來に於て是供養を作し  
 き。此善根を以て我與に三菩提の因と作し。我今諸の衆生を憐愍するが故に、此果報を  
 以て分つて三分と作し一分を留めて自受し。第二分の者は我滅後に於て、禪定解說三昧堅  
 固相應の聲聞に與へて乏しき所無からしむ。第三分は彼破戒なれども經典を讀誦し、聲聞

に相應して正法像法に頭を剃り袈裟を著する者に與へて乏しき所無からしむ。彌勒我今復三業相應の諸の聲聞衆、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を以て汝が手に寄付す。乏少孤獨にして而も終らしむる勿れ。及び正法像法に禁戒を毀破し袈裟を著する者を以て汝が手に寄付し彼等をして諸の資具に於て乏少して而も終らしむる勿れ。亦施陀羅王有りて共に相惱害し、身心に苦を受けしむる勿れ。我今復彼諸の施主を以て汝が手に寄付すと」上。破戒尙爾なり。何に況んや持戒をや。聲聞尙爾り。況んや大心を發して至誠に念佛するをや。問ふ、「若し破戒の人も亦天龍の爲に護念せらるれば云何。」梵網經には「五千の鬼神破戒の比丘の跡を拂ふ」と。涅槃經には「國王群臣及び持戒の比丘應當に破戒の者を苦治し驅遣し呵嘖すべしと云ふや。」答ふ、「若し理の如く苦治せば即ち佛教に順ず。若し理に非ずして惱亂せば還りて聖旨に違す。故に相違せず。」月藏分に佛の言ふが如し。國王群臣は出家なる者の大罪業、大殺生、大偷盜、大悲梵行、大妄語及び餘の不善是の如き等の類を作すを見る。但當に法の如く國土城邑村落を擯出して寺に在るを聽さず。亦復僧の事業利養の分を同するを得ず。悉く共に同せざるべし。鞭打を得ざれ、若し鞭打せば理應せざる所なり。又亦應に口もて罵辱すべからず。一切應に其身に罪を加ふべからず。若し故に法に違して而も謫罪せば是人便ち解脱に於て退落し、必定して阿鼻地獄に歸趣せん。何に況んや佛の爲に出家して具に戒を持する者を鞭打せんをや。抄問ふ、「人間の擯治は差別すること然るべし。非人の行は猶未だ決了せず。」梵網經には一向に跡を拂ひ「月藏經」

には一向に供給す。那ぞ忽に乖角するや。答ふ、「罪福の旨を知るが爲に要す須らく人の行を決すべし。必ずしも非人の所行を決すべからず。若し制若は開、各巨益を生ず。或は復人の意樂不同なるが如く、非人の願樂も亦不同なるのみ。學者應に決すべし。問ふ、「論に囚りて論を生ぜば彼犯戒の出家の人に於て供養し惱亂せば幾の罪福を得るや。答ふ、「十輪經の偈に云はく、「恆河沙佛の解脫幢相の衣を被るに此に於て惡心を起さば定めて無間獄に墮すと。袈裟を名けて解脫『月藏分』に云はく、「若し彼を惱亂せば其罪は萬億佛の身血を出すの罪よりも多し。若し之を供養せば猶無量阿僧祇の大幅德聚を得る」と。意問ふ、「若し爾らば一向に應に之を供養すべし。何ぞ之を治して大罪報を招くべきや。答ふ、「若し其力有りて之を苦治せずんば彼も亦罪過を得ん。是れ佛法の大怨なればなり。故に『涅槃經』の第三に云はく、「持法の比丘戒を破し正法を壞る者有るを見れば即ち應に驅遣し呵嘖し擧處すべし。若し善の比丘の壞法の者を見て置いて呵嘖し驅遣し擧處せずんば當に知るべし、是人は佛法の中の怨なり。若し能く驅遣し呵嘖し擧處せば是れ我弟子にして眞の聲聞なり。乃諸の國王及び四部の衆應當に諸の學人等を勸勵して増上の戒定智慧を得しむべし。若し是三品の法を學せずして懈怠し破戒して正法を毀つ者有らば王者大臣四部の衆應當に苦治すべし。又云はく、「若し比丘有りて禁戒を持すと雖も利養の爲の故に破戒の者と坐起し行來し共に相親附して共事業を同ぜば是を破戒と名く。乃。若し比丘有りて阿蘭若處に在れども諸根利ならず、闇鈍麤魯として少欲乞食し、說戒の日及び自恚の時に於

【一】 助道の入法を明す。

て諸の弟子をして清淨に懺悔せしめよ。弟子に非ざるもの多く禁戒を犯すを見れども、教へて清淨に懺悔せしむる能はずして、而も便ち與共に説戒し自恣せば、是を愚癡の僧と名くと」略抄。明かに知んぬ。若は過ぎ若は及ばず、皆是れ佛勅に違ふ。其間の消息都て意を得るに在り。」

【二】 第十に助道の入法とは略して三有り。一には須く明師の内外の律を善くして能く妨障を閑除するを恭敬承習すべし。故に『大論』に云はく、「又雨は墮つれども山の頂に住らず必ず下處に歸するが如し。若し人橋心をもて自ら高するときは則ち法水入らず。若し善師を恭敬せば功德之に歸す」と。二には須く同行の共に嶮を渉るが如し、乃至臨終まで互に相勸勵すべし。故に『法華』に云はく、「善知識とは是れ大因縁なり」と。又阿難の言はく、「善知識とは是れ半の因縁なり」と。佛の言はく、「爾らず是れ全き因縁なり」と。三には念佛相應の教文に於て常に應に受持し披讀し習學すべし。故に『般若經』の偈に云はく、「此三昧經は眞の佛語なり。説し遠方に是經有り」と聞かば道法を用ふるの故に往いて聽受し一心に諷誦して忘捨せざれ。假令往いて求めば聞くを得ざるも、其功德の福は盡すべからず。能く其德義を稱量するもの無し。何に況んや聞き已りて即ち受持せんをや。四千里より百遠方と爲す。問ふ、「何等の教文か念佛に相應するや。答ふ、「前に引く所の西方の證據の如きは皆是れ其文なり。然るに正しく西方の觀行并に九品の行果を明すは『觀無量壽經』に如かず。『卷華』良彌陀の木願并に極樂の細相を説くは『雙觀無量壽經』に如かず。二卷庚俗諸佛の



相好并に觀相の減罪を明すは「觀佛三昧經」に如かず。十卷或は八卷覺賢の譯 色身法身の相并に三昧の勝利を明すは「般舟三昧經」支婁迦の譯 六卷或は五卷功德の譯 直女暢と共に譯す 修行の方法を明すは上の三經並に「十往生經」卷一 十住毘婆娑論に如かず 龍樹の造羅什の譯 日目の讀誦は「小阿彌陀經」に如かず 羅什の譯 偈を結んで總説するは「無量壽經優婆塞願生偈」に如かず。或は淨土論と名け或は往生論と名け 修行の方法は多く「摩訶止觀」卷及び善導和尚の「觀念法門」并に「六時禮讚」に有り 各一巻 問答料簡は多く天台の「十疑」卷道綽和尚の「安樂集」卷慈恩の「西方要決」 卷懷感和尚の「群疑論」卷に有り 往生人を記すは多く迦旃師の「淨土論」三卷并に「瑞應傳」卷に有り 其餘多しと雖も要するに此に過ぎざるなり。「問ふ、「行人は自ら應に彼諸の文を學すべし。何が故ぞ今勞はしく此文を著すや。」答ふ、「言ひ前に言はずや。予が如き者廣く文を披き難し。故に聊か其要を抄す。」問ふ、「大集經」に云はく、「或は經法を抄寫し文字を洗脫し或は他法を損壞し或は他經を闇藏すれば、此業緣に由りて今盲の報を得」と云ふ。而るに今經論を抄するに或は多文を略し、或は前後を亂す。應に是れ生盲の因なるべし、何爲れぞ自ら害するや。答ふ、「天竺震旦の論師人師經論の文を引くに、多くは略して取意す。故に知んぬ經旨を錯亂せば、是れ盲の因と爲る。文字を省略するは是れ盲の因に非ず。或は又彼十法行の中に於て初に書寫の行に文を脱するは是れ過なり。開解等の爲に略鈔するに過に非ず。況んや今抄する所は多くは正文を引き、或は是れ諸師の所出の文なり。又纂文を出すこと能はざる者に至りては注に或は乃至と云ひ、或は略抄と云ひ、或は取意と

云ふ。是れ即ち學者をして本文を勘へ易からしめんと欲す。問ふ、引く所の正文は誠に信を生ずべし。但、屢私詞を加へて益ぞ人の論謗を招ざらんや。答ふ、正文に非すと雖も而も理を失はず。若し猶謬る有らば、苟も之を執せず、見る者取捨して正理に順せしめよ。若し偏に謗を生ぜんも亦敢て辭せず。華嚴經の偈に云ふが如し。若し菩薩の種種の行を修行するを見て、善不善の心を起す有らんも菩薩皆攝取す。と。當に知るべし、謗を生ずるも亦是れ結縁なり。我若し道を得ば願くば彼を引攝し、彼若し道を得ば願くば我を引攝して乃ち菩提に至るまで互に師弟に爲らんことを。問ふ、論に因りて論を生じ、多日筆を染て身心を劬勞す、其功無きに非ず、何事を期するや。答ふ、此諸の功德に依りて、願くば命終の時に於て、彌陀佛の無邊の功德の身を見たまつるを得ん。我及び餘の信者既に彼佛を見じりて、願くば離垢の眼を得て無上菩提を證せんことを。」

永觀二年申冬十一月天台山延曆寺首楞嚴院に於て此文を撰集す。明年夏四月に其功を畢ふ。一僧有り、夢に毘沙門天、兩りの臥童を將ひて來り告げて云はく、「源信撰する所の往生集、皆是れ經論の文なり。一たび見一たび聞かん、偷、無上菩提を證すべし。須らく一偈を加へ廣く他日に流布せしむべし。」夢に語けて故に偈を作して曰はく、  
 已に聖教及び正理に依り、衆生を勸進して極樂に生ぜしむ  
 乃至展轉して一たび聞かん者、願くば共に速に無上覺を證せん

佛子源信暫く本山を離れて西海道の諸州名嶽、靈窟を頭陀し、遠客著岸の日に適うて闔らざるに會面す是れ宿因なり。然るに猶方語未だ通ぜず歸朝各促す更に手札に對し、述ぶるに心懷を以てす。側に聞く法公の本朝三寶興隆すと。甚だ隨喜す。我國東流の教佛日再び中すること今に當れり、極樂界を刻念し、『法華經』を歸依する者熾盛なり。佛子は是れ極樂を念する其一なり。本習の深きを以ての故に『往生要集』三卷を著して觀念に備ふ。夫れ一天の下一法の中は皆四部の衆なり。何か親何か疏ならん。故に此文を以て敢て歸帆に附す。抑本朝に在りても猶其拙きを慙づ。況んや他郷に於てをや。然而に本一願を發せり。縦ひ誹謗の者有るも縦ひ讚歎の者有るも併に我と共に極樂に往生するの縁を結ばんと。又先師故慈悲大僧正は源謙良「觀音讚」を作り、著作郎慶保胤は「十六相」の讚及び「日本往生傳」を作る。前の進士爲憲は「法華經」の賦を作る。同じく亦贈りて異域の此志有るもの知らしめんと欲す。嗟乎一生苴苴たり、兩岸蒼蒼たり。後會如何、泣血するのみ不宣以狀す。

正月十五日

大宋國某賓族家

返報

大宋國の台州の弟子周の文徳謹んで啓す。仲春漸く暖にして和風霞散す。伏して惟れば法位無動にして尊體有泰なるや。不審不審、悚恐悚恐、唯文徳入朝の初め先に方に向つて禪室を禮拜し、舊冬の内に便信を喜んで委曲を啓上す。則ち大府の貫首豊島の才人書狀一封を附して奉上すること先に畢りぬ。計らくは披覽を経るか、驚嘆の情朝夕休まず。馳憤の際便脚に遇うて重ねて啓達す。唯大師撰擇の『往生要集』三巻を捧持して天台の國清寺に詣り附入し既に畢る。則ち其專當の僧領狀を予に請く。爰に緇素隨喜し貴賤歸依して結縁の男女弟子伍佰餘人、各虔心を發し淨財を投捨し、國清寺に施入して勿ち五十間の廊屋を飾造す。柱壁を彩畫し内外を莊嚴し供養禮拜し瞻仰し慶讚す。佛日重ねて光法燈盛に朗かなり。興隆佛法の洪基往生極樂の因縁は唯斯に在り。方に今文徳忝くも衰弊の時に遇ふとも衣食を取るの難を免る。帝皇の恩澤を仰ぎて未だ詔勅を隔てず。拜日の會觴重ねて塵を積まんと欲すとも何ぞ飢饉の惑を避けんや。伏して乞ふ大師照臨を垂れよ。弟子憤念の至に勝へず。敬んで禮代の狀を表す。不宣謹言。

二月十一日大宋國弟子周の文徳申狀

謹上

天台楞嚴院源信大師禪室

法座前

天台楞嚴院 某申狀





昭和四年七月一日印刷  
昭和四年七月十日發行

昭和  
新纂  
國譯大藏經  
宗典部  
第九卷

不許複製

編纂者

昭和  
新纂  
國譯大藏經編輯部  
代表者 三井 晶史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地  
株式會社 東方書院  
代表者 坂戸 彌一郎

印刷者

東京市神田區表神保町十番地  
同 興 舍  
代表者 井波 康三郎

發行所

東京市下谷區  
上野櫻木町五〇

株式會社

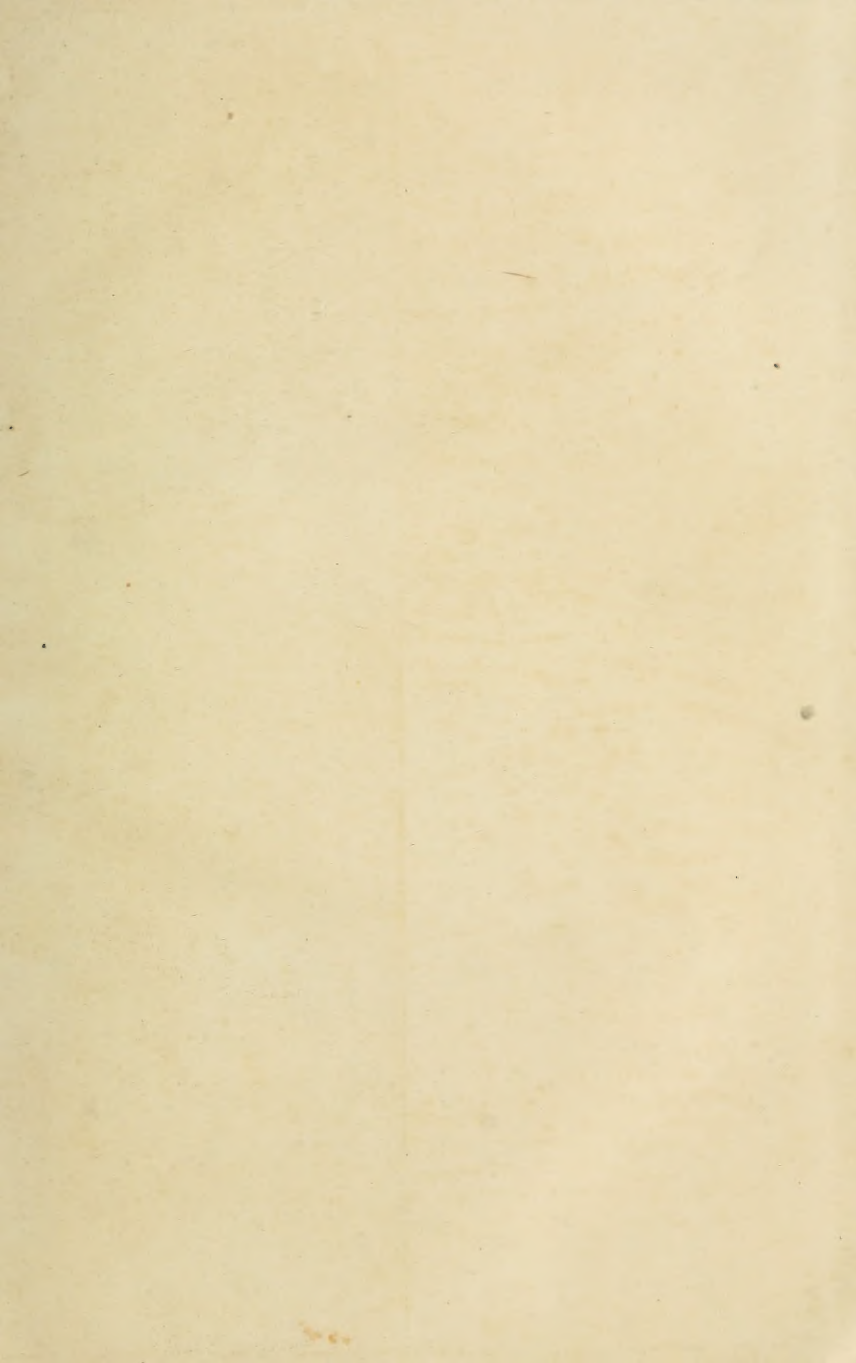
東方書院

電話下谷四二五九  
振替東京六八一



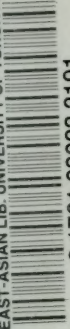








EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3191